

フェバル～青年ホクヤ の軌跡～

N.K=かにかま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、フェバルとなつてしまった青年ホクヤの星々を巡る冒険物語。

※これは二次創作です!!

目次

プロローグ

1. 故郷に別れを | 1

第一章 くデイハルド王国の冒険く

2. ホクヤ、現地人に救われる

7

3. タルカッタ山 | 19

4. アレンの憂鬱 | 28

5. ホクヤ、己の実力を理解する

38

6. 夢のマイホーム!! | 49

7. 建国祭 | 57

8. 激震 | 66

9. ミカの憂鬱 | 73

10. 一つの事件の終わり | 85

11. ホクヤ、宮殿に呼び出される

95

12. ホクヤ・フェルダントは静かに

- 暮らしたい | 106

13. ホクヤ、拉致される | 117

14. 真夜中のハーレー街にて

126

15. ログ街 | 135

16. 百聞は一見に如かず | 146

17. Doughbus Wooba

- r's Camp!! | 155

18.	デイハルド王国での日々	165	28.	ホクヤ、修羅場の中心に立つ	259
19.	最悪の再会	176	29.	砂浜の対決	270
20.	巨大UMA現る	187	30.	バーミリオン女王	282
21.	ホクヤ、故郷を思い出す	198		ビスティープ牢獄にて①	292
22.	ベヘモン国	209	31.	ホクヤ、歴史を動かす	302
23.	内乱	219	32.	ホクヤ、体調を崩す	307
24.	ベヘモン国での激闘	230	33.	シャドルの憂鬱	315
25.	気霧理	240	34.	ホクヤ VS ミカ	324
26.	ホクヤ、己の能力を理解する	250	35.	それぞれの前夜	334
27.	デイハルド王国の王族達	362	36.	デイハルド武道大会	345
			37.	勝ち抜け、一回戦!	351

38.	英雄バルバルド	375
39.	逡巡の間に	385
40.	再会と邂逅と浮上	393
41.	二匹の男は三度激突す	401
42.	雌雄決す	411
	ビステイープ牢獄にて②	420
43.	二回戦が終わって	423
44.	夜祭	433
45.	悪魔	439
46.	ナナの憂鬱	451
47.	夜の帳にて悪魔は嗤う	459
48.	カステイルア王国	468
49.	ホクヤ、決戦の地へ向かう	

第二章	人工生命の星の冒険	583
50.	はじまりとおわりの日	481
51.	その気剣の名は	506
52.	シヤナ	519
53.	『炎の拳!!』	531
54.	アーサー王十三世	544
55.	ローガ・アスキルトの与えたモ	553
56.	燃え上がれ、決勝戦!	563
57.	勝者の名は	575
58.	出会いがあれば別れもある	

6 9.	ガンウーマンズ	695
6 8.	ホクヤとユウ	683
669		
6 7.	ヒュミテ王救出作戦会議	
656		
6 6.	アウサールチオンの集い	
6 5.	ホクヤとルナトープ	646
6 4.	ホクヤ、折れる	635
6 3.	ヒュミテとナトウラ	627
6 2.	ホクヤ、英雄になる	615
6 1.	メノ部族	603
6 0.	ホクヤ、走り回る	596
5 9.	灰色の星	589

7 9.	亀裂	803
789		
7 8.	Next Round!	
7 7.	誘爆	776
7 6.	激戦の特別收容所	764
7 5.	左腕	755
7 4.	その返り血は誰が為に	746
7 3.	左目	738
7 2.	深読み	728
A	HALF BATTLE	720
7 1.	ONE MINUTE AND	
708		
7 0.	ホクヤ、リルナと対峙する	

8 7.	オリナスキバン	884
8 6.	白い軍勢	874
8 5.	激戦区メーヴア	864
8 4.	W o r r i e d	852
844		
8 3.	H o w t o W o r l d	
832		
8 2.	ホクヤ、地下を破壊する	
8 1.	黒い憎悪	823
8 0.	表裏一体	815

プロローグ

1. 故郷に別れを

最近、何だか妙に身体の調子がいい。

ちよつと気合を入れたら動かせない物を動かせたり、気分がいいと身体が軽くなって普段よりも早く走れるような気がする。

それと、妙な夢を見ることも多くなった。

俺、ホクヤ・フェルダントは今日もまた変わらぬ風景を見ながら黄昏ている。

紫色の空、金属の山と砂漠に囲まれた大地、時折空から降ってくる俺たちが「ギフト」と呼んでいる高文明の機械や鉄屑。

昔、大体三十年前くらいか。

五百年に渡って大きな戦争が続いていたこの土地の物資は枯渇寸前であと百年保てば奇跡といわれるほどギリギリの状態である。

そんな時、俺がまだ子供だった頃に降ってきたギフト。

どこからやって来たのかわからない、何で降ってくるのかもわからない。

とりあえずギフトが降ってきてからは物資の問題は解決したのだが、食糧の問題が

残っていた。

もう生き残りもそんなにいるわけではない、食べられるものは既に食べ尽くされてい
る。

保存してある先人達からの贈り物も残りわずか、水も満足に入手できないから風呂も
中々入れない。

俺はさつき降ってきたギフトに座りながらそんなことを考える、それでも空の色は変
わらず紫色だった。

「……このまま何もせず死ぬのかな、俺」

両親は他界、二人いた姉も片方は既に自殺、友人達も生活がギリギリ、俺もかなりギ
リギリなので人のことを言えた柄ではない。

気分転換にオカリナを吹こうとオカうち（オカリナの名前）を取り出したときだった。

——ドクン。

俺は胸に激しい動悸を感じ取った、今までにない激痛だった。

姉の料理を食べたときの痛みとも殴られたときの痛みとも人を初めて殺したときの
痛みともまた違う。

気がつけば激しく汗も掻いていた、まだ出る水分があったとは自分でも驚きだった。

——ドクン。

「ホクヤ、ね？」

「……ア？」

動悸のせいで反応が遅れてしまったが、背後から俺を呼んだであろう声に振り返る。そこには見たこともない女性が立っていた。

三角に尖った大きなツバのある黒い帽子を被り、露出度の高い黒いローブを着た金髪の女性だった。

右手には杖のようなものを所持している。

「ちよつと聞いてる？あなた、ホクヤ・フェルダントで合ってる？」

「あんた、誰だよ？ていうかどっから来たんだよ、この辺の奴じゃないだろ」

「合ってるみたいね。たしかに私はこの星の者ではないわ」

（この星？）

「突然だけど、貴方には死んでもらうわ」

「は？」

俺が思わず間拔けな声を出してしまった次の瞬間、金髪の女の持つ杖の先端から刃が出現し俺の喉元を貫いた。

——ドクン。

そのはずだった。

それは俺も金髪の女性もそう思っていた、しかし刃が俺の喉元を貫くことはなかった。

「まさか、間に合わなかった…？」

金髪の女性は杖を手放し、膝から崩れ落ちてしまう。

カランカラン、と杖が音を立ててギフトの上から地面に静かに落下する。

何が何だかわからんが、助かったのか。

「おい」

「ひゃい!？」

ガシツ、と俺は女性を逃すまいと肩を力強く掴む。

あんたに恨みはないが、聞きたいことが山ほどある!!

「教えてくれ、俺に何が起こってるんだ!？」

「え、えつと…」

何故彼女に俺の身体に起こってることを尋ねたかって？

感だよ、感。

女性は戸惑いながらも早口に自己紹介を始める。

彼女はエーナと言いつェバルという星々を渡り歩く旅人らしい。

「そして、貴方もフェバルになった。いえ、なりかかっているというのが正しいわね」

「俺が、フェバルに？」

「…… 私はフェバルになる人たちを救うためになる前に何とかしている。強引な手段だけどね、さつきみたいだね」

さつきみたいに、とはおそらく人を殺すということだろう。

そんな話をしていると俺の身体が透け始めてきた。

白い光の粒子が天に昇っていくのがわかる。

「貴方はこれから永遠に星々を旅することになる。フェバルは不死身、死ぬことのできない身体になるの、そうなる前に私は、「星占い」でこの運命から救おうとしたのだけどごめんなさい、貴方をもっと早く見つけていれれば」

「エーナさん、気にしないでくれ。俺の人生なんだ。あんたが謝ることなんて何一つない、それに言っちゃなんだけど結構楽しそうだし」

「…… 貴方は優しすぎる、殺そうとしたことを責めなかった」

「あんたなりの理由があつたんだ、悪意があつたわけじゃないんだろ？それに異世界つてのにも興味がある。もうここは死んだ土地だ、いつか旅立つ予定だったんだ」

ああ、何言ってるんだろな俺。

こんなの柄じゃない、エーナさんも何かポカンとしてるし、呆れられたかもしれないな。

シリアスなんて俺には似合わない。

もつと樂觀的に、いこうとしたら大地から体が離れていた。

どうやらエーナさんの言った通りみたいだ、俺はもうここにはいられない。

「エーナさん。もしどこかでお会いしたときは色々教えてください、何分ここ以外は不慣れなもので」

「……ふふふ、変な人。そうね、貴方の知らないこともいっぱいあるものね」

「楽しくやりますよ、それが俺のスタンスですか」

ら、と言おうとしたらゴォ！と勢いよく体は空に飛んでいった。

ちよ、最後まで言わせてよ！

段々と紫色の球体が遠ざかっていく、多分あそこが俺の今までいた星なんだな。

さよなら、故郷。

さよなら、皆。

俺は目尻に涙を浮かべつつも精一杯笑いながら星屑の道に従い暗い中小さな輝きを放つ星々と共に故郷に別れを告げた。

第一章 くデイハルド王国の冒険く

2. ホクヤ、現地人に救われる

白く輝く星屑の道を時間もわからぬまま身を任せ、流される。

あー、退屈だ、どんだけこの宇宙ってのは広いんだよ。

思ったよりすることがなくて暇してる俺の目の前を小さな岩が横切った、怖!?

え、今の何!?!とか思ったら俺の頭上にオレンジ色の球体が現れた。

「やっとうゴールか、待ちくたびれたぜ」

期待に胸を膨らませていると自然と頬が綻んでいた。

かつて自分が住んでいた大地とは違い色も大きさも全然違う。

ここで一体何ができるのだろう、どんな文化があつてどんな人がいてどんな世界なのだろう。

あまりにも突拍子な出来事が連続して続いてしまったせいで今も俺は夢でも見ているのではないか、という感覚だ。

目を覚ましたらまた故郷に、ギフトが降る光景を見続けあいつらと馬鹿やって姉貴の作った殺戮兵器と戦闘する日々に戻るかもしれない。

それでも構わない、と思ってるあたり故郷に未練がまだ残ってるってことかな？
あいつらには別れも何も言えなかったからな、心配してるかな？

「…… やめだやめだ、もう俺は振り返らないぞ！新天地は目の前だ!!」
ヒヤッハー！

早く降りろ、もつと早く、早く!!

一気に大地が近づいているのがわかる、青い海と広大な砂漠が目に入る。

あの塊は人が住んでるのか？

俺はどうやらその中でも一番大きな塊に降りることになるらしい。

人がいて良かった、誰もいなくて何も無い星で過ごせとか言われたら寂しくて死んじやう自信あるよ、死なない(らしい)けどね。

心なしか速度が上がってる気がする、俺の想いが通じたのかな、きつと。

そして思い出す、俺の体制が頭から落下する姿勢になつてることに。

テンションが上がりがりすぎて空飛ぶ人間みたいな態勢を取ってしまったことを。

そう、さっきまでの思考は全て現実逃避にすぎないのだ!!

しかし、それでも落下する速度は止まらない、というか余計に早くなってる気がする。
た、たしかに早くって言ったけど!

ブレーキがないなんて聞いてないぞ!!

あれー、おかしいな、さっきまで遠かった地面がスゲー近くにある!?

なんか目開くのしんどいし、耳元でゴオー!!とか音が凄く近くで聞こえるよー!?

まさか着地前に死ぬことになるなんて、あ、たしかフェバルって死なないんだっとな。
う、何か煙たい!?

え、ちよ、まつ、あれって家!?家なの、しかもあの形状とこの煙つてもしかして、あれはえんと——

※

「上がりです、お疲れ様です!」

「お疲れー、早くラナちゃんのもとに帰ってやれよー!」

「つせーな、恥ずいこと言うなよ」

「いいじゃん、同棲してんだろ?羨ましいなコンチクショー!」

「痛い痛い痛い!背中べしべしすんな、もう帰るから!」

全く、こいつはいつつもこうだ。

オヤジさんもオヤジさんで皆に言う必要のないのにすっかり話広げやがって。

「じゃあな、アレン!夜のこととは応援してるぜ!」

「「ひゅー、ひゅー!」」

「うるせー！黙れー！」

ああ、もう！マジで職場変えてやろうかな、給料はいいんだけど精神的に辛いものがある。

まあ、ラナの元へ早く帰りたいって気持ちは事実なんだけどね。

職場である傭兵ギルド「鬼の双牙（クラッチ・オーガ）」のあるアルドニア広場の階段を下りてハーレー街を抜けて住宅街へと向かう。

自宅からは少し遠いが、十分歩ける距離だし何よりホワイトで給料がいい。

……皆のセクハラやらノリを除けば居心地はいいし、仕事に不満もない。

ラナと同棲を始めて早三年、そろそろ年齢も年齢だし告白してもいいかなー、なんて思ってるのだが俺自身へタレの自覚はあるし勇気もない。

よく付き合ってくださいって言えたな、俺。

ホント、五年前の俺に勲章をあげたいくらいだ。

ハーレー街で簡単に買い物を買わせて家路へと向かう。

この時間帯ラナは風呂に入っていることが多いから家の煙突からは煙が出ることが多いのだが、珍しく今日は出てない。

出かけているのか、それとも風呂に入っていないのかな？

風呂好きの彼女は一日に三度風呂に入る、水の無駄に思えるのだが俺がどうこう言え

る立場ではない。

何度か覗いてしまったことがあるから、まあ、そこはいい。

俺は目の前の光景に衝撃を覚えてしまっている、何というか、奇妙だ。

ラナに告白してオツケーをもらったときよりも、ラナと同棲を始めたときよりも、俺が安定した職に就いていることなど甘つちよろい。

それほどの衝撃。

……何か、煙突に人が刺さってる。

「……って、ボーツとしてる場合じゃない！急いで助けないとー」

タンタン、と隣の家の壁を足場に屋根に一気に駆け上がる。

ピクピク、と微かに痙攣しているということはまだ生きている。

一体どういう経緯でウチの煙突に人が刺さってるかはわからないが、これでラナが風呂に入ったたりしたら窒息する可能性がある。

湯気も逃げ場をなくすため、ラナも危ないかもしれない。

とりあえず俺は声をかけてみることにした。

「おーい、大丈夫か!？」

「う、お、だ、じよぶ」

グツ、とはみ出た右手の親指をサムズアップさせる。

うん、もう少し放っておいても平気そうだが、自分の家に人が刺さってたなんてご近所で変な噂が広まりかねない。

「引つ張るぞー、変に力入れずに抜いといてくれ」

「りよ、お、かい」

ピクピクと不気味に痙攣してる両足をしっかりと掴む。

そこから足に力を集中させて一気に引っこ抜く。

ぐぐぐ、と力いっぱい引つ張るも、煙突とミラクルフィットを果たした男（声色的に）は中々引っこ抜けなかった。

煙突を解体してもいいが、後で修理するのが大変そうだ。

片足を煙突の側面に置いて一気に力を入れる。

なんか「痛いつて！ちよ、タンマ！ギブギブ!!」とか騒いでるが無視する。

なんかこの人思ったよりも頑丈そうだから多少無理をしても大丈夫そうだと直感が悟っていた。

スポ、と気持ちいい音が響くとそこには汗びっしよりのセミロングにした白髪の男がいた。

煙突からは湯気がモクモクと溢れ出す。

どうやらラナは今も風呂に入っているようだ、ということはコイツラナの裸を...

いや、湯気で見えてないはずだ。

そうだ、そういうことにしておこう、そうでもしないとせつかく助けたのに殺してしまいうさだ。

「フフフフ。」

「お、おーい。あの、すみませーん」

男が恐る恐るといった様子で話しかけてきた。

おっと、自分の世界に入ってしまったように危ない危ない。

「助けてくれてありがとうな、俺はホクヤ、ホクヤ・フェルダントだ」

「ホクヤか、いい名前だ。俺はアレン」

俺たちは互いに握手を交わした。

何かホクヤの顔がはにかんでるのは気のせいだろうか？

俺たちはとりあえず屋根から下りてホクヤをウチに招待した。

※

煙突に刺さってしまった俺を助けてくれたのはピョコ、と頭の上に獣耳を生やしたアレンだった。

え、どゆこと？しかもよく見たらふわふわの尻尾も生えてるし！

マジで異世界なんだなあ、ここまで違うものなんだな。

握手したときも肉球らしき物体のプニプニ感に感動してしまった、変に思われてなきやいいけど。

「ていうかそもそも何でウチの煙突に刺さってたんだい？」

「滑って転んだんだ」

「そ、そうか」

とりあえず適当にはぐらかしておいた。

この世界でフェバルという存在がどのくらい知られてるかもわからないし、もしかしたら忌み嫌われる存在かもしれない。

知らない土地だ、慎重にせねば取って食われるのは俺だ。

まあ、普通にしてれば何とかなるだろう。

変なことをしなければ何も問題^ごことは起こらないはずだ。

アレンが鍵を外して木造の扉を開ける、石造りの建物は新鮮に思えた。

「ただいまー」

「あ、おかえりー！もうすぐ着替えるから待ってねー！」

「ゆっくりでいいぞー」

「お、お邪魔します」

どうやらアレンは一人で住んでいるわけではないようだ。

奥から女性の声が聞こえてきた、姉か妹か彼女か母か唯の友人か。

はたまた実は知らない人の家で勝手に忍び込んだとか。

まあ、名前を知ってる時点で後者の線は消える、アレンが普通の人でよかった。

「適当に座ってて、飲み物入れてくるよ」

「ありがとう」

ここで断るのも無粋である、人の好意はしっかりと受けておく。

俺は椅子に腰掛けて部屋の中を見渡す。

どれもこれも珍しいもので故郷になかったものがほとんどである。

思わず物珍しそうにキョロキョロとしているとちようどアレンがコップを二つ持っ

てきた。

「はい、クルナスティーで良かったかな？」

「あ、ああ」

ここで聞き返したら多分「どこから来たの？」とか「ええ!?!知らないの!?!」とか言われそうなのでとりあえず知った風を装っておく。

後でどういふものか調べればいいし、とりあえず香りから。

中々良い、香ばしい植物独特の香りと苦味の混じってそうな香りがする。

一口、美味しい。

「美味しい」

「それはよかった。ラナが育てたクルナスの葉を使ったんだ」

「へえ」

アレンはそう嬉しそうに話す。

頬がわずかに火照ってるのが見える、どうやら同居人ラナなる人物は彼女のようだ。

「お待たせアレン、つてあら？お客さん？」

「おお、ラナ！いいところに」

ここで噂の彼女さん登場、大きな獣耳をピコピコと動かしている。

露出度の高い服を着ており、風呂上がりみたいで全身が紅潮しているのがわかる。

風呂か、この世界にも風呂文化があつてよかった。

「こちらホクヤさん、さつきそこで会ったんだ」

「初めまして。えくと、ラナさんですよね？」

「ええ、ラナです。よろしくお願いします」

ペコ、と頭を下げるラナさん。

良い人だ、女性というところでもあの傍若無人で歩く毒物生産機である姉を思い浮かべてしまう俺は決して悪くない。

俺も軽く会釈をする。

「ラナも飲む？」

「ええ、いただくわ」

いつの間にか用意されてた三つ目のクルナスティー、できた彼氏だ。

ていうか俺邪魔者じゃね？

「アレン、俺お邪魔して良かったのか？」

「ああ、気にしないで、見たところあんたこの国の人じゃないだろ？それに荷物も持っていないところを見ると賊にでもやられたんじゃないか、そんな人を放っておけないよ」

……この国の人ではない、見破られたことにも驚いたがアレンのお人好しさにもポカンとなつてしまう。

このご時世こんな良い人いないぞ！

「まあ、話せば長くなるんだけど……」

「いや、いいよ。ホクヤも色々あったつてことがわかるし、話したくないこととか思い出したくないこともあるだろ？だったら無理に話さなくてもいいよ、俺は直感を信じるタイプなんだ」

アレンさ……！！ん！！

あんたいい人過ぎるだろ！

聖人君子なの、目細くて悪そうな人相してるけどやっぱり人（？）は見た目じゃないんだな!!

ホント感謝、この出会いにマジ感謝!!

「ひとまず宿泊先が決まるまではゆっくりしていきなよ、土地に詳しくなかつたら俺も案内するからさ」

「ホントにありがとな!この恩は必ず返す!」

こうして、俺の新たな土地での生活が始まったのであった。

3. タルカツタ山

とりあえず俺は腰に付けておいたポーチの中身を確認する。

あまりにも突然のことでもいつも持っているものしか持つてこれてないが、ないよりはマシだ。

中身は相棒のオカつち（オカリナの名前）、愛用武器であるスープ君（スパナの名前）とドラちゃん（ドライバーの名前）、視力補強用のメガたん（眼鏡の名前）、故郷の紙幣少々と姉貴が作ってくれた弁当という名の兵器、そしてあいつのくれたバンダナ。

紙幣はもう使えないだろう、さっきのアレンとラナさんの会話を聞く限りこの世界の通貨の単位は d r（ドルド）で故郷の通貨は円（ウェイ）だった。

覚悟はしていたが、一文無しスタートである。

まあ、姉貴の弁当はあとで食べるとして少しでも物資があっただけで助かる。

オカつちとスープ君とドラちゃんとメガたんを連れてこれたのは大きい、寂しさも紛れるし俺にとっては必需品だ。

今はアレンの案内してくれた空き部屋にいるが、いつまでもここに在るわけにもいか

ない。

二人の愛の巢の中に正直居づらい。

というわけでこれからアレンが教えてくれた仕事を募集しているという掲示板がアルドニア広場と呼ばれるところにあるらしいので行ってみようと思つてたのだ。

デイハルド王国、それがこの国の名前らしい。

歴史は古く900年近く栄えている大国家で俺みたいな純粋な人はいないようだ。

皆が皆獣の特徴のある人間かTHE☆獣！つて方々しか街にはいなかった。

アレンも仕事があり、ラナさんも家事があるので一緒には行けなくて申し訳ないと言つてくれたが、そこまでしてもらおうわけにもいかない。

いくら好意や善意を素直に受け取る俺でも受け取りすぎるのはよろしくない。

とりあえず地図に従つて雑貨屋や食料品、武器屋などが並ぶハーレー街を抜け階段を上がつてアルドニア広場に到着する。

広場の中心には「アーサー王一世」と書かれた立派な石像があった。

がやがや、と広場は賑わつており誰も彼もが俺にはない獣耳や尻尾、鱗を持っていた。

これほどまで特徴が顕著になるものだな、と感心していると目的の掲示板に辿り着いた。

掲示板の看板には「ジョブボード!!」とでかでかと書かれていた。

俺の他にも何人か先客がいた。

「何々、「迷子の搜索」「ビステイープ牢獄看守、強い人求むー」「一緒に山を掘らないか？」」「ズーマコロシアム修復お手伝い」「隣国への護衛傭兵求む」って、結構あるな」

他にも気になるものは結構あった。

どうやら気になった仕事は自分で引き？がし、そこに暇そうにして座ってるお兄さんに渡す形式のようだ。

注意しないといけないのは、傭兵のみとかの注釈が書いてある紙だな。

今更なのだが、字が普通に読める。

字体は初めてみるものだらけなのだが、自然と昔から知っていたかのように読めてしまう。

自分で言ってる矛盾してるのはわかってるが、実際にそうなのだ。

言葉もきちんと聞き取れるし、こちらの言葉も向こうに伝わる。

まあ、そんなわからないことを考えても仕方ない。

俺はとりあえず気になった「一緒に山を掘らないか？」の依頼書をビツと破り手に取った。

鉱山で金銀銅を掘り出す体育会系のモノだった、ちなみに時給は800dr。

これが高いか安いかはわからないが今は稼げるだけ稼いでおこう。

ジヨブボードの傍に座る煙管を加えたお兄さんのところに行くともまず年齢を聞かれ、20歳だと答えた後承認印を押してくれた。

もしかして、この星にも労働は何歳からつて決まりがあるのだろうか？

そのところもまた調べたほうがいいかもしれないな。

それから作業場であるタルカッタ山の場所と依頼主であるギムなる人物の名前を教えにくれた。

タルカッタ山はディハルド王国の領土内にある大きな山でここアルドニア広場の東にあるカルデラの鐘のある道の途中にある階段を下ることで行けるらしい。

ちなみにここは広場の西なので反対方向だ。

さつき手に取ってみてわかったのだが、この国の紙は布製のようだ。

よくある木材を加工して作る紙とは違い、若干モコモコしていて気持ちよかった。

でも、性質は紙と同じのようだ。

(にしても、砂漠と海と山に囲まれた国か。改めて考えるとすごい立地だな)

そんなことを考えながら広場の中央を目指し、そこから東へ向かう。

ハーレー街やアルドニア広場には水路も流れており、水に困るような貧相な国でないことは見てわかる。

国の大きさからしてもかなり大規模、余程王の人徳と信頼が厚いんだろうな。

そんなこと思いながら歩くこと数分、俺はタルカツタ山に来ていた。

まあ、西側からも山の存在は見えていたが、近づいてみるとまたデカイ。

とりあえずギムさんを探すべく作業している一人に話しかけてみる。

「すみません、ギムさんいらつしやいますか？」

「ギム、ああ、オヤジさんね！オヤジさんはその穴の中だよ」

と、指さされたのは本当に山を貫いている穴。

一人人がギリギリ入れるサイズだ。

「ここっすか？」

「そうそう、穴に向かって叫べば聞こえるよー」

ハハハ、と豪快に笑いながら作業を再開してるし、早いな。

とりあえず俺は穴に顔を入れて、叫んでみることにした。

いつまでも突っ立ってるわけにもいかなからな。

「すみませーん！ジヨブボードの貼り紙見てきたんですけど、ギムさんいますかー!？」

「おー、いるよ、ちよい待ちー！」

声が返ってきた。

同時に穴の奥から凄まじい速度で何かがちらに向かってきているのがわかった。

俺は咄嗟に穴から体を引いて勢いよく飛び出してきたガテン系のゴーグルをした茶

髪の男性。

男性の全身には茶色い体毛、鼻先は少しとんがっていた。

「よう、新入りだな。オラがギムだ。よろしくな」

「は、初めまして、ホクヤです」

俺はとりあえず持つてきた承認印付きの紙をギムさんに渡す。

ギムさんは紙をクシヤクシヤにしてポケットに詰めると、どこから取り出したのか俺にヘルメットとつるはしを差し出した。

「とりあえずこれがお前さんの分だ。ここでやることは山を掘つて金や銀、銅を掘り出すこと。掘り出した金銀銅は硬貨に変わつて金になる、オラ達はそれを掘り出すのが仕事、つまりオラ達がここで汗水たらして頑張るから金は回つてるんだ」

「おおー」

何かすげーカッコいいこと言ってる気がする！

ギムさんはへへ、と鼻を鳴らして得意げな様子だ。

「とりあえず掘つたらここに持つてこい、あの大穴の奥に行けば行くほどたくさん出てくる！それにまだ手も付けてない場所はたくさんあるからな！」

「はい、行つてきます!!」

「水分補給も忘れるなよー！」

あの穴だな、よーし！

俺はヘルメットを装着してつるはしを持って意気揚々として走った。途中、注意もされた気もしたがこの時の俺の耳には入らなかった。

※

5時間後。

一日に二度鳴り正午と真夜中を告げるカルデラの鐘が鳴ってからしばらく作業は続いた。

そして夕刻時にやっと作業は終わりを告げた。

「そんじゃ、お疲れ様!!また明日もよろしくねー!!」

「「お疲れ様です!!」」

気合の入った解散で皆はギムさんから給料を受け取って帰宅する。

もう、俺の全身バツキバキである。

うわ、すつげー数の豆もできてるし!!

結構楽しかったからしばらく毎日続けてみようかなって思ってみただけど結構しんどいぞ、これは。

ちよっと体を動かすだけでポキポキ鳴るし、何より疲労が半端ないわ。

金稼げるからいいけど、掘って運んで掘って運んでの作業が意外としんどかった。

奥の方に行くほどたしかに人は少なかった、でも運ぶのがめっちゃ大変だったんだよ！

そりや奥の方に行こうって人は少ないわな！

それまでの道も舗装とかほとんどされてない獣道だから足場も悪い、一部ぬかるんでいるところもあった。

足の裏にかかる負担も半端なく、こんなに全身使うことになるなんて想像してなかった。

と、考えていたら俺の順番が回ってきたようだ。

「お疲れさん、どうだったよ初仕事は？」

「すげー大変でした、ギムさ、オヤジさんは毎日してるんですか？」

「まあな！これでも傭兵ギルドのマスターもしてるんだ、体も鍛えられるし一石二鳥よ！」なるほど、つまり作業のほとんどの人が特訓とか言われて付き合わされてるんだな。

これを毎日か、たしかに体鍛えられそうだけど壊れてしまいうさだ。

オヤジさんに直接手渡された給料の中身は4000drだった。

1000dr銀硬貨4枚がしつかりと入っていた。

「また明日も来ていいぜ！お前さんは中々素質がある！」

「ははは、前向きに検討してみます！」

ガクガク震える体を動かしながら俺はアレンとラナさんの家に戻っていった。

ラナさんに頼んでみて風呂に入りたい、超汚れたし何よりここの風呂の湯加減や気持ちよさを直に確認してみたい。

疲れた体にはやっぱり一風呂！

俺は太陽が沈む様子を見ながらハーレー街を抜けて住宅地へと進んで行った。

そして……

「ラナさん、風呂入ってもいいですか？」

「いいわよ」

「ちよ、ラナ!?俺とも一緒に入ってくれたことないの!？」

「え、俺一人だけだけど？」

「え？」

「え」

「ふふふ、アレンは早とちりのド畜生ね」

「(グサッ!)」バタッ

「あ、倒れた」

4. アレンの憂鬱

ホクヤがウチに居候し始めて六日になる。

どうやらオヤジさんの管轄であるタルカッタ山で仕事をしているようだけど家にいる時間はほとんどない。

まあ、あそこの労働時間凄いなあ。

多分デイハルド王国で一番ブラックな職場じゃないかな、仕事の割に給料もそこまでいいわけじゃないし。

そこにまだ始めたばかりとはいえ六日も連続で行くって素直に凄と思う。

帰ってきて、風呂に入って、調理の手伝いをしてもらって（以前ホクヤに全部任せたらとんでもないものができあがったため、それ以降は手伝いだけにしてもらって）一緒に飯食べて寝る。

そんな日々が続いていた。

正直ホクヤがどこからやって来てどのくらい稼いでるのかわからないし、何を考えるのかもよくわからない。

たまに尻尾とかを凝視されてる気もする、彼には尻尾がないのだ。

正直珍しいなあと思ってる、尻尾が短い種族はよく見るが、ない種族はあまり見ない。それに耳の位置と形も変わってる、小さくて皮膚だけで毛が少ないし目の横にあるのだ。

あまり深く詮索をするわけにもいかないし、ラナも楽しそうだから別に問題はないんだけど単純に気になる。

これは俺の勝手な好奇心だ、オヤジさんとも仲がいいみたいだし悪い人じゃないってのはわかる。

それはあの時助けて話した時からわかってる、しかしあまりにも謎が多いのだ。

気の保有量といい左胸と腕にあるマークといい風呂好きなどところといい、まるで違った文化で育った別の世界の人みたいだ。

まあ、そんな非現実的なことはありはしないけど、気になる！

というわけで俺は今ホクヤの部屋の前にいる。

ラナも寝て一人ベッドからわざわざ抜け出てきたのだ、あいつは真夜中を指す英雄の導きのあととも長い間起きてるみたいだな。

扉だと気づかれる可能性が高いから壁に耳を当ててみる。

「……………」

「はあ、今日も疲れたなあオカっち。最近構ってやれなくてごめんな」
オカっち？

どういふことだ、あの部屋に他に誰かいるのか？

それにしても人の気配はホクヤ一人だけだが。

「スーパ君、ドラちゃん、お前らもいつか一緒に活躍できる日があるといいな。山じやつるさんしか使えないからしばらく出番はないのが残念だよ、ホント」

…… えつと、ホクヤさん？

あんた一体何人その部屋に連れ込んでるの、しかもこんな時間に。

知り合いが増えたのはいいことだと思うけど、そういう知り合いは違うと思うんだ。

え、何、あいつ毎晩俺とラナに隠してそんなにいっぱい連れ込んでるの??

ていいうかいつの間に、あの部屋の窓つてたしか人一人入れるかどうかの小さな窓だったよな？

もしかして、あいつロリコンなの？

幼い少女を連れ込んで何かしてるの、壁伝いだけど声ハッキリ聞こえてしまうのが原因なのだろうか、それともあいつ元々の趣味なのだろうか？

壁伝いに聞こえることに関しては関係ないか、ここを建設した人と盗聴してる俺が悪いんだから。

でも、一線越えて犯罪者ってのはやめてほしいな。

初めて会ったときから少しおかしな奴だなとは思ってたけど、うーむ。

「メガたん、何かここに來てから調子いいからお前もしばらく休んでくれよ。出番の時はまた呼ぶからさ」

また一人増えてる!?

どゆことなの、え、今俺が思考の海に行ってる間に一体何があったの!?

混乱してる俺を置いてけぼりに会話は気にせずに進んでいく。

……寝よう、これ以上はダメだ。

ものすごい気になるけど、ここらへんは俺の踏み込んでいい領域じゃない。

俺は静かにラナの元へと戻って行った。

「アレン、どこ行つてたの?」

「ラ、ラナ!? 起きてたのか、いや別に大した用事じゃ」

「トイレ?」

「いや、違——」

「じゃ、正座!」

「え、ちよ」

「正・座」

「は、はい」

※

翌日。

目を覚ました俺は散らかった部屋を片付けていた。

そうだ、昨夜ついつい癖でオカつち達と話し込んでしまった。

いつも一方的なのは仕方ないが、こいつらが言葉とか話せるようになったらどれだけいいことか。

それは故郷にいることから考えていたことであるが、まあ、そんな非現実的なことが起こるわけもない。

とりあえず俺は昨日給料で買ったこの国の服を着込む。

ズボンは尻尾の穴を塞いである、置いてある履物の大半が尻尾穴があったから塞ぐのに昨日はカルデラの鐘が鳴っても起きて、その作業中に話し込んでしまった。

次からは気をつけないとな、ここはアレンとラナさんの住んでるところなんだから。

ズボンは夏の気候に合わせているのか通気性が良く、長ズボンでも快適に過ごせる。

素材がすごい気になる、見た目ジーンズなのに動きやすいし半ズボンを穿いてるよう

な感覚だ。

ノースリーブのシャツと薄着の半袖ジャケットが最近のお気に入りコーディネートだ。

髪型を整え、リビングに向かうと何故かアレンが正座しており、ラナさんが仁王立ちしていた。

え、何この状況?!

「あら、おはようホクヤさん。そこに朝ごはんあるからどうぞ、私はアレンとちよつとお話があるので」

「は、はあ。ご、ごゆっくり?」

「ちよ、ホクヤ! 助けてくれ、ていうか助けてください!! 昨夜あったことを説明してください!!」

「昨夜? 俺ずっと裁縫してたけど」

「どういふことだろう、ていうか飯を食べた後は自室にいたからアレンと会ってないはずだが。」

「そうだった、忘れてた!」

「ア、アレン?? あんた一体何言ってるんだよ」

「アレン? ホクヤさんまで巻き込もうとしちゃいけませんよ」

もう意味がわからなかった、助けを求めていたアレン（恩人）もあんな状態だし飯が冷めてもいけないため俺はとりあえず頂くことにした。

アレンの悲鳴が木霊するが、気にしちやいけない気がする。

うん、美味しい。

俺が飯を食い終わる頃にようやくアレンがやって来た。

何でも昨夜からずっと正座させられていたらしい、よく歩けるな。

「つって、さつきはすまない。ちよつと混乱してた」

「そ、そうか」

「……なあ」

「ん、何？」

「いや、何ていうか、俺もいつまでもヘタレてたらダメだなんて思つて」

「…… どうしたの突然？」

何か今日のアレンはおかしかった、昨夜に一体何があったのだろうか。

でも、確実に何かあったんだろうなあ、と思わされた。

「で、今日もまた行くのか？」

「ああ、今日は銀行に行つてから——」

「早まるな、貢ぐんじゃねえ！」

「誰にだよ!？」

やっぱ今日のアレンおかしい!!

何でそんな必死なの、普段細い目を大きくするぐらい必死なの!？」

ていうかまだ俺口座作ってないからそろそろ金貯まってきたから作りに行くだけなんだけど!？」

とりあえずアレンを落ち着かせてから皿とコップを流し台にまで運ぶ。

ここに居候してから一週間が経とうとしているが、いまいち性格がわからない。

ラナさんが昼食の仕込みをしていたのでちようどいいし、ちよつと聞いてみよう。

「ラナさん、アレンっていつつもあんな感じなんですか?」

「ええ、ホント馬鹿みたいでしょ?」

フフフ、と笑うラナさん。

この人結構軽くえげつないこと言うんだよなあ。

今でも耳と尻尾が楽しそうにぴよこぴよこしてるし。

「じゃあ、俺そろそろ行ってきますね!」

「行つてらっしゃい、頑張ってくださいね〜!」

ラナさんの言葉を受け取り俺は荷物を持って宮殿街にある銀行へと向かった。

アルドニア広場から北へ階段を登れば王の住まう宮殿を囲む宮殿街へと行くことが

できる。

宮殿と隣接する形で作られた宮殿街は高級感溢れる超リッチな所で本来なら俺みたいな庶民とは無縁の所なのだが、王の厚意により宮殿も一部は一般向けに開放されており、誰でも入ることができる。

その代わり警備も厳しいため、あちこちに兵たちがいる。

堅苦しいこと極まりないが、一般人がここまで宮殿に近づけること自体が異例なので仕方ないことだろう。

事前に発行しておいた身分証を持って宮殿街にある銀行へ辿り着き、手続き諸々を済ませてしまう。

そこまで人がいたわけではないので、とんとん拍子で話は進んだ。

身分証のことはオヤジさんに教えてもらった、もちろん銀行のことも教えてくれた。

オヤジさんにも恩返ししないとな、アレンとラナさん並みにここに来てお世話になってる。

まだわからないことはたくさんあるけど、何とか生活できてる。

そして、銀行から帰りにジヨブボードをチェックすると一つデカデカと気になるものがあった。

それは剥がせるようにはなっておらず、広告のようなものだった。

内容は「デイハルド武道大会開催のお知らせ」

開催日は今から一ヶ月後、優勝賞金は50億d r!!

「……テンション上がってきた!」

イヒヒ、やってやろうじゃん。

俺は拳を握りしめて静かに闘志を燃やしながら、タルカッタ山の作業場へと向かった。

5. ホクヤ、己の実力を理解する

俺はとりあえず自主トレを始めた、さすがにいきなり大会に出て優勝!!なんて都合のいいことがあるはずもない。

武器防具の使用禁止のガチンコ勝負、予選から選ばれた10人のみが本戦に出場できるものらしい。

とりあえず朝はラナさんよりも早く起きて住宅街をダツシユ、そして朝食、オヤジさんの元でひたすら山を掘って掘って運んで、ついでに運ぶときにボランティアで他の人も運ぶ、それで寝るまで体はゆっくりと休める。

これを一ヶ月続けるつもりだ、不思議なことにここに来てから疲労の回復と筋肉痛の回復がやけに早い気がする。

それにまだ一週間ちよつとしか経ってないのに筋力がついてる気もする、仕事に慣れただけかもしれないが作業速度も格段に上がってる。

大会まであと二週間、俺は今日も山を掘る!

最近つるさんの出番は少なく、素手で掘ってる人もいたので真似してみたらまず指が

死んだ。

でも、パンチやキックで効率が悪いくけど少しだけ掘り進めれるようになった。

人間って無限の可能性秘めてんだね、まさか殴ってズボツていくとは思わなかったよ、だって山だよ。

最近では山の壁をサンドバッグにしてパンチ力とキック力を、運搬で足腰を鍛えてる。

よく骨折れないなあ、本当に、これもフェバルの不死作用働いてるのかな？

もう俺も人間卒業ってことでもいいのかな？

金も貯まるし筋力も上がる、まさに一石二鳥だ。

鈍っていた体を慣らすのにはちょうどいいが、実戦でしっかり動けるかが不安だがそ

こはまあ、臨機応変ってことでいいや！

「おう、ホクヤ！最近頑張ってるみてえだな。もうここに就いちまえばどうだ？」

「嬉しいツスけど、俺は別にやりたいこともあるんで！気が向いたらお返事させてもらい、ますよー！」

「ガハハハハハ、慎重なのはいいことだ！」

オヤジさんは長い爪で穴を掘りながら豪快に笑う。

ていうかあの人一体いくつ穴掘ってるんだ、この前は隣の穴掘ってたし…

もしかして普段行ってる大穴もあの人が掘ったものだったりして。

「それとホクヤ、もっと作業効率を上げたいなら無駄な力は抜くことだ」

「無駄な、力？」

「そうだ！オラの見た所お前さん肩に力が入りすぎてる。それじゃスピーディに動けない、もっとリラックスして、自然体で呼吸するのと同じ感覚で掘って運ぶんだ！」

なるほど、一理ある。

たしかに最近強くなることばかり考えていて肩に力が入り気味だった。

それに慣れない土地に来たという不安も若干あったのかもしれない。

「ありがとうございます、オヤジさん」

「さん付けはよせやい、オラとオメーの仲だろーが！とつと山を掘ってきやがれ！」

それから俺はひたすら体を動かした、オヤジに言われたことを意識しながら一緒に働いてる傭兵さんのアドバイスと経験談を聞きつつ、自分でもイメージトレーニングを繰り返す。

そして行動に移し、山を掘る！

靴もボロボロになってきたから、そろそろ新しいのを買った方がいいかもしれない。丈夫で動きやすいやつを、思えば故郷からずっと履いていたものだ。

それからさらに時間は流れ、あつという間に大会当日になった。

※

早朝。

まだ街が真つ暗で本来であれば外に出るような時間帯ではないのだが、予選は朝早く行われるらしい。

俺は眠気を押し殺しながら会場であるズーマコロシウムへと向かう。

正直に言おう、すっごい眠たい。

なのに案内されたコロシアムの地下闘技場にはとんでもない数の男たちが集まっており、熱気とやる気に満ちていた、暑苦しいことこの上ない。

あ、そういやこの大会って男しか出場できないっていうルールがあつたんだつた。

受け取ったゼツケンを着る、待ってるだけじゃ暇だから軽く準備運動しておくか。

知り合いがいないってのも辛い、こんな大勢の中から10人しか本戦には出れないのか。

ザツと見渡す限りでは軽く100を超えてるぞ。

これデイハルド王国の外からも来てないか？

——ガヤガヤとなつている最中で奥の方から大きな音が鳴り響く。

「えー、皆さんお待ちせしましたー！これより皆様お待ちかね、年に一度のデイハルド王

国武道大会の予選を開催させてもらうぜ、イエー!!」

ハイテンションな声が地下闘技場を通り響き渡る。

さきほどと打って変わってシーンとなった会場は男の声だけが響いていた。

「シー、皆さんもしかして低血圧気味なのかな? まー、そんなことアカンケーねエー! わざわざ今日と明日の決勝のために参加してくれた3218人の勇者たち! ズーマコロシアムとライバル達があんたらを全力で迎えるぜー!」

な、3218人!?

そんなにいるのか、100人はいくと思つてたけどここまでとは…

どうやらこの大会、思つたよりも大きくて楽しそうな大会みてえだな!

「ハイハイハイ、ボーイズ! 興奮する気持ちはわかるが気は抑えてくれよ!?! 今から予選のルールを説明するからよ、焦るな落ち着け!」

彼の説明をまとめると、予選は一对一の試合形式。

一応本線と同じ形式で行われるが、試合時間が5分であること、場外に体の一部が着いてしまえば負けということが予選ルールだ。

本線と違い、カウントを取ることもないため審判の判断が全てを委ねると言ってもいい。

「おっと、そうだった! 入り口で受け取ったゼッケンの番号がこの予選トーナメントの

番号のあるところで試合してくれ！試合ブロックはAからE、一つのブロックから二人の出場者が出るってこったベイビー！じゃ、また本戦で会おうぜ、アディオス!!」

そう言つて男はどこかへ姿を消してしまった、俺のゼッケン番号は57番。

トーナメント表を確認したところAブロックであることがわかった。

俺はAブロックへ向かう、他の人の試合を眺めているが中々個性的な戦いをする人がいて見てて退屈しなかった。

こういう戦術や動き方があるのか、今度練習してみるか。

「——では、56番と57番の方。どうぞこちらへ」

お、呼ばれた。

俺の相手は何だか柄の悪そうな兄ちゃんだった。

モヒカンに上半身裸つて、もう見慣れた獣耳とふわふわの尻尾が不釣あいな人だった。

でも、結構強そうだ。

「制限時間は5分、ファイ！」

試合のゴングが鳴らされた瞬間に俺は走り出す。

リングはそこまで広くない、右手に力を込めて先手必勝！

ダツ!!と俺は一気に駆ける、反応が遅れた男は慌てて防御の姿勢を取るがもう遅い!!

俺は男の腹部に拳を当てるとゴオツ!!と勢いよく全体重を一気に拳にかける!

「お、らあ!!」

「う、うわ!?!」

そのまま男はリングの外へ!

「はい場外、57番の勝ちです!」

よし!まずは一勝!

先輩に教えてもらった体重移動のコツが役に立った!

一撃一撃がむしやらに攻撃しても意味がない、攻撃が当たった瞬間に全体重を一気に先に乗せる!

これは移動のときにも使える、そのため教えてもらってからというもの作業は超絶楽になったのも今ではない思い出だ。

だが、これはあくまでも予選である。

試合数はまだまだ残ってるし、一勝できたくらいでぬか喜びなんてしてられない。

あの手は既に周囲に知られてしまったため使うのは悪手だ、今度はガチンコの殴り合いになる可能性だってある。

そして、数分後。

俺は再びリングに上がる、予選二回戦の開始である。

相手選手はゴキゴキと首の骨を鳴らしながらやる気満々である、しかも体型的に体重で吹き飛ばすのは不可能に思える。

明らかにあちらの方が体重多い。

「では、はじめ！」

——ならば、と俺はさきほどと同じようにダツ！と相手に向かって突撃する。

あちら側も俺に向かってきた、好都合だ。

ニヤリ、激突の寸前に一步止まり右サイドへステップして左足で足払いをかける。

「うわ!？」

そのまま相手はゴロゴロ転がり場外へと行ってしまった、計画通り！

「場外！勝者57番!!」

よし、次で三回戦！

怖いくらいに順調に進んでいる、俺の実力も十分に通用するということがわかった。た。

故郷で姉貴やババアから逃げ回ったあの日々は無駄じゃなかった、ここに来て山で金銀銅を掘ってきた日々も決して無駄じゃなかった。

「次、57番と60番リングへ！」

おっともう出番か、早いな。

リングに上がった先にいた男は今までの二人とは明らかに格の違う男だと、気配でわかった。

美しくもくすんだ銀色の髪に他者を圧倒する吊り目、若いながらも鍛え抜かれたバランスのいい肉体と立ち振る舞いから彼が凄まじい修羅場を潜り抜けてきた強者であることは明確である。

心していかねば。

「はじめー」

合図と同時に奴は姿を消した、え？

いや、消えたんじゃない！早くて目で追いつけないだけだ！

俺も一歩遅れて前へ飛び出すが、止まれという信号は間に合わなかった。

背後に凄まじい殺気を感じ、勢いよく振り返り回し蹴りを放つ。

当たった、たしかに攻撃は当たったはずなのに攻撃はすり抜けた。

それからしばらくして奴の姿も幻のように消え、足払いをかけられ俺は何もすることができずに場外へと弾き飛ばされた。

「場外！勝者60番！！」

こうして俺の大会は終わった、本戦にすら行けず予選敗退という結果で。そのときリングの上から見下ろす奴の視線が嫌という程頭に焼き付いた。

オヤジの言葉が耳に刺さる、目頭が熱くなるのがわかる。

「悔しいんですよ、今の俺じゃお世話になりっぱなしだ！ここに来てからアレンやラナさん、オヤジに頼りっぱなしだ、自分一人じゃ何もできなくて情けないですよ！」

「……そうか、悔しいか、強くなりたいか」

「なりたくないよ、今よりもずっと、ずっと!!」

「なら、オラのギルドに入れ。傭兵ギルド「鬼の双牙（クラッチ・オーガ）」に、歓迎する」

傭兵ギルド、そこには強い奴はたくさんいる。

傭兵つてからには戦闘技術も身につけられる、今よりも強くなれる！

「男なんだ、強くなりたい？当たり前さ。負けて悔しい？何が悪い、当たり前さ。その逆の位置に立ちたいなら立ち上がりオラの手を取れ、お前が男なら——」

オヤジの言葉を待つことなく手を掴む、願ってもないことだ！

俺は自分のために、生きるために強くなる！

もう悔しい想いをしないために!!

「……聞くまでもなかったな、歓迎するぞ、息子よ！」

6. 夢のマイホーム!!

オヤジに連れられ、俺はアルドニア広場北東部の端にある傭兵ギルド「鬼の双牙」の本部にやってきていた。

どうやら大会に出場した人も何人かいるみたいで予選で負けた人たちが多く酒を飲みながら騒いでいた。

それでいいのか傭兵たちよ。

「な、まだ悔しい思いましたお前の方が何十倍も強くなれる余地はある」

「……何か、恥ずかしくなってきた」

俺は思わず両手で顔を覆う、いや、ホント自分の行動思い返してみたら超恥ずかしいわ。

ホント、俺一体何してたんذار、何であんなこと言ってしまったんذار。

多分耳まで真っ赤だ、はあ、もう後悔しても遅い気もする。

「おい、アレン。新加入するやつがいるからよろしく」

「ちよ、いきなり戻ってきてそりやないですよオヤジさん！ただでさえ他の申請書やら

始末書やらの処理に追われてるってのに!」

「ガンバ、オラはお前のそういうところを買ってるんだぜ」

「だっ た ら、 少 し は マ ス ター ら し く 仕 事 し
ろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

なんかオヤジと誰かが騒いでる、この声どっかで聞いた気がするんだよな。

ていうか居候先の家主と同じ声のような、他人の空似か？

「じゃ、オラは山行つてくるからよろしくね!」

「ギムー!!今日という今日は逃がさんぞー!」

「テメエら、オヤジ狩りだ!協力しろー!!」

「待てコラー!」

数人の傭兵がオヤジを追いかける、ていうかあんたらさつきまで酒飲んでなかった!?
何であんな速度で走れちゃうわけ!?

え、傭兵ギルドつてもしかしてめっちゃ柄の悪い人たちの集まりだったりするの、何
それコワ!

オヤジの逃げていった方向を呆然と眺め、ひとまず俺はさつきオヤジが行ってた場所
に行ってみる。

いつまでもここに居るわけにはいかないからな。

「すんませーん、さつきオヤジと一緒に、ってアレン!？」

「あれ、ホクヤ?!?どうしたの!？」

ビックリだよ!え、アレンの職場ってここだったの!？」

いやー、世界って狭いんだな。

「もしかして、ホクヤここに入るの?」

「まあ、そうなるかな。オヤジに連れられてっというか、流れというか」

「はあ、ホントあの人はここ放って山に向かうから仕事が溜まりに溜まるんだよね」

アレンが何かすごい暗い、というか何で笑ってんの?

結構怖いんだけど、細目のせいか余計に怖いんですけど!？」

「ホント、父がすみませんねアレンさん」

俺とアレンの二人が向かい合っていると一人の可愛らしいウエイトレスさんがこちらに近づいてきた。

手首、足首、首元にモコモコと白い毛を生やしておりツインテールにしている髪の上にはくるんと貝みたいなのが生えていた。

何ていうか、ちよつと見てみたけどこのウエイトレスさんの制服の露出度高いなオ
イ。

「気にしないでミカちゃん。もう慣れてるし悪いのは仕事放棄してるあの人だから」

「あんなのが父親とか、ホント嫌になるわー」

「……父親？」

なんか巨乳のウエイトレスさんから聞き逃してはならない単語を二回ほど聞いた気がするぞ。

え、でもあの人の愛称オヤジだから別におかしいところは何もないか。

「そうか、ホクヤさつき来たばかりだから初対面だったな。この人はミカちゃん「鬼の双牙」の看板娘兼酒場のウエイトレス長、あの人の実の娘さんだよ」

「マジ?!」

「残念ながらマジなのよね、これが」

やれやれ、とお手上げ状態といった様子でミカは小さくため息を吐く。

全然似てないぞ、一体どういう仕事したらあの山男からこんな娘さんが産まれるんだよ仕事しろよDNA!!

あ、オヤジが直接産んだわけじゃないよな、それでもあの人一体どんな美人さんと結婚したんだよ!?

「まあ、いいや。それでホクヤの加入申請だったよな」

忘れてた!

そうだよ、俺ここに加入するために来たんだったよ!

アレンは慣れた手つきで羽ペンと一枚の布紙を取り出してこちらに差し出した。

「ここに名前と年齢、あとはこっちで事務的に処理できるからやつとくよ」

「助かる」

俺はとりあえず書く、えーと、ホクヤ・フェルダントで20歳で、と。

（歳下だったのか）

（歳下なのね）

なんか二人に信じられないものを見たかのような目で見られてるんだが、書き終えたが何か落ち着かない。

「はい、これでオツケー！ホクヤもこれで「鬼の双牙」の一員だよ。これからもよろしくね」

「ああ、ここでもよろしくなアレン！」

俺とアレンは初めて会った時のようにガシッと握手を交わした。

「それでホクヤよ、もう一つオメエにプレゼントがあるぜ」

「うお!？」

背後からオヤジさんが、どこから来たんだこの人!？」

「何ひよっこり帰ってきてんだ、この駄目父！」

「痛っ!？」

ミカの回し蹴りがオヤジの顔面に直撃する、身長も一回りミカの方が高いので位置的にもちよほど良さそうだった。

倒れたオヤジは何事もなかったかのように立ち上がる、頑丈だな。

「オメエ今どこに住んでるんだ？」

「アレンのところで居候させてもらってるけど」

「フッフ、オメエは今日から傭兵。今までと違って定職に就いた、オメエにはマイホームをプレゼントだー！」

「夢のマイホームキターー！」

いやっほー！

※

というわけで二日後、我が家ができました。

アレンとラナさんに今までのお礼を済ませ荷物を持って住宅街の北を目指す。

「ここか」

たどり着いた新たな我が家は一人で住むには少し大きいのでは？というサイズだったが、アレンの家と同じくらいなので何も問題はない。

そして左端に付けられた煙突、つまり我が家には風呂がある！

オヤジにリクエストしておいてよかった！

この星に風呂という文化が存在していてよかった、ありがとうオヤジ、ありがとうデイハルド王国、そしてありがとう風呂という天才的生活文明を生み出した偉人よ！

デイハルド王国の風呂は少し旧式である、人一人入るスペースのある縦長の筒状の棒に水を入れて薪木に火をつけて水をお湯に変える式だ。

なので風呂のある家には必然的に煙突が取り付けられるのだ。

いやー、ここに来た時俺が煙突に刺さったのもある意味運命だったのかもな！

こうしちゃいらねえ！

今すぐにも沸かして心地よさを確かめねば、薪木はハーレー街の雑貨屋で一週間分のセットが460drで売っていた、もちろん購入だ！

火をつけるには人為的に気と呼ばれるエネルギーでつけれるらしいが、そこんところわからなかったので事前に購入しておいた火つけセットで発火させる。

原理は簡単、無駄に暑い太陽から熱エネルギーを取り込む黒紙に熱を取り込んでそれを破く！

この黒紙は布でできておらず、破りやすいし燃えにくい。

一体どのような素材かはわからないがこの際どうでもいい！

火をつけて湯を沸かすこと30分、中々いい湯加減だ。

服を脱いでいざ、入浴!

うむ、これは中々、木造建築の壁から漂う木独特の仄かな香りと石でできた特別製の床の感覚がまたいい。

色合い的にも湯加減的にも最高だ、煙突に向かって立ち昇る湯気もまた風情がある。こうして俺は傭兵となりマイホームを手に入れたのであった。

7. 建国祭

俺が「鬼の双牙」に加入してから二ヶ月の時が流れた。

いやー、色んなことがあつたなあ。

オヤジに連れまわされてタルカツタ山を徹夜で掘ったこともあつたし、先輩方に飲み誘われて何度も酔い潰れたし、護衛の仕事に行つてその依頼主とトラブつたり、一週間関所の仕事をして退屈と戦つたり、ジョーという傭兵に憧れる少年と仲良くなつたり、ミカとは馬が合わずに色んなことで喧嘩したり、ラナさんと風呂トークで盛り上がったたり、UMAとかいう言語を話さない巨大生物の討伐に行つたりと、ホント色んなことがあつたよ。

お陰で強くもなつた、先輩達の使つてる気もぼんやりと使えるようになってきた。

オヤジとアレンが言うには俺の中にある気の内包量がかなり高いらしく、普通であればこんなにもあるはずがない量らしい。

まあ、多分この星基準なんだろうけど。

そうだと思いたい、違ふとするなら俺がフェバルであるということだけなのだが、さ

すがにそれは違うだろう。

不死の肉体の上にそんなサーピスマまで付けてくれるなんてとても思えないし。

まあ、先輩達の使ってるやつを見よう見まねで気合入れてみたら薄い水色のようものが体から溢れ出てきただけなんだけどね、偶然だよ偶然。

だって実際まだ体の周りに出して纏わせることしかできないし、実戦じゃ全然使えないんだよ。

そういうわけで俺たち傭兵ギルドの皆は明日から開催される建国祭の警備の打ち合わせをしている。

建国祭、年に一度行われるその名の通りデイハルド王国建国をお祝いという名目で馬鹿騒ぎしよーぜ！というやつがなんと五日間も行われる。

その間俺たちはローグ街、王国の南東にあるならず者や社会不適合者が暮らしている、いわゆるスラム街だ。

そこからも建国祭にやってきた奴らが暴れ回らないかを見張り、他にも事件や落し物、迷子のことなんかも王国の国家警備隊と供に行うのが恒例行事らしい。

そして現在「鬼の双牙」の中心に立って詳細を説明しているのが国家警備隊長のゲルターさんだ。

オヤジよりも若く、鎧の下の鍛えぬかれた肉体は本物だった。

威圧感もあり、気の量からしても只者ではないことがわかる。

頬にまで届く生え際の深い茶色の混じった黒髪に顎に生えた無精髭、そして頭の上でピョコと立った耳と長くも短い長さの尻尾。

もうさすがに見慣れたが、ギャップがありすぎると吹きかける時がたまにある。気をつけなければ。

「——で、あるからして皆様にはハーレー街の入り口付近、アルドニア広場とズーマコロシアム間の通路、ハーレー街の宿エリアを担当していただきたい。大丈夫でしょうか、ギム殿」

「問題ない。しっかりコキ使ってやってくれ」

ヒ、ヒトゴトだと思いやがって！

実際オヤジは他にもやることがある（本人が言ってるだけで信憑性はない）らしく、警備の仕事には参加しないつもりらしい。

「そういえばギム殿、ドーバス殿が見当たらないですが当日は来るのでしょうか？」

「さあな、あいつも気まぐれだからな。オラでもドーバスの奴の考えてることはよくわかんねえ」

「そうですか」

ゲルターさんはむむむと頭を唸らせる、そりやそうだろうな。

ドーバス、まだ一度も会ったことはないが「鬼の双牙」一の傭兵であり昨年度と今年度のデイハルド武道大会で優勝した実質、デイハルド一の男。

だが、性格に難があるらしく放浪癖があり自宅も国内ではなく、デイハルド王国の外にあるらしい。

そんな自由が利くのも彼がそれなりの功績を残しているからこそである。

しかし、ドーバスさんがいなくともここには俺含む腕利きの傭兵がわんさかいる。

「わかりました。ではこれが人数配分と担当区域の簡易地図です。明日から五日間よろしく願います」

「おう、毎年のことだがよろしく頼むよ」

二人が握手を交わしてしばらくしてカルデラの鐘が真夜中を告げる。

鐘の音を合図に握手は終わり、ゲルターさんは宮殿へと戻っていった。

「じゃ、編成はオラがやるけどいいよな。ま、もう決めてるんだけどね」

こうして各々にシフト時間と場所の記された紙を渡されて本日は解散となった。

今日はしつかり寝て明日に備えよう、一応報酬も出るんだし。

その日俺は懐かしい夢を見た。

故郷で姉二人から逃げてる夢だ、いやあ、スゴイ怖かった。

※

建国祭一日目。

俺のシフトは二日目と四日目と五日目だったので今日は非番である。

なので祭りを楽しむことにした、アレンとラナさんに一緒に回ろうと誘われたので現在一緒に行動している。

「へいへいへーい！ウチのビリド買っていかないか!?おいしーよ、安いよー!」

「豪華景品の射的やってかねーが!?豪華景品やぞ、豪華景品!!」

「ブルーアースの伝説と母神様を敬う心はありますか?創造神様を供に敬いませんか?」

「リアージュはどうですか、お土産にリアージュはどうですか!?お手頃価格の200d

r!一つ200drだよー!」

..... 何だろう、スゴいな。

これが祭りのノリとかいうやつなのか、街全体が活気に満ちてる感じだ。

「この五日間はデイハルド王国にとっては神聖な日だからな。ホクヤってブルーアース伝説読んだことある?」

「いや、ない」

「一度読んでみなよ、この国だけじゃなくて世界の創生に関わる話なんだ。噂によれば

実際の史実に基づいてる話らしいし」

「ブルーアース伝説に出てくる母神様という神様も実際にこの地に降り立ったっていう伝説も残ってるくらいなもの。本当にいいお話よ」

へえー、そこまで有名な話なのか。

今度雑貨屋で探してみよう、そんなに有名な本なら置いてあっても不思議じゃないからな。

アレンの話によると実際にこの国が成り立ったのは今から五日後、つまり建国祭最終日らしい。

それと現王、アーサー王十二世含む五人の英雄が52年前の戦争で勝利した日も含まれており、その日は勝利の日として近年定められ建国祭三日目を指すらしい。

「デイハルド王国建国祭は本当に彼らにとって歴史的にも文化的にも栄誉ある五日間のようだ。」

俺は出店で売ってた片手サイズのピリド (120dr) をポリポリと齧る、美味しい。

「そろそろ広場の中央に行こう、アーサー王の演説が始まる！」

「ん、まだ時間あんじやないの？」

「早くしないと場所取られるんだよ、ほら行こう！ホクヤ、ラナー！」

「あ、おいアレン！」

ホント、子供みたいな奴だなあ、五つほど年上らしいけど。

そんなアレンの様子を見てラナさんはくすくすと笑みを浮かべている。

何というか、あれ、母性的な笑みとかそんな笑みじゃない！

「フフフフ、ホントあのクソガキにはいつつも手を煩わされませう。行きましようホクヤさん」

「お、おう」

ホント、この人怖い。

姉貴と似た雰囲気というか、何かを感じてしまう。

単純に年上の女性だからなのかな？

とりあえず、逸れるのも避けたいので人混みに消えてしまったアレンを追いかける。

アレンの気はこの先で感じるから間違っではないはずだ、あの人興奮すると気を放出するんだよな。

なのでまだ探知に慣れてない俺でも探知できてしまうのだ。

本当にスゴイ人だな、たしか演説までにはまだ二時間ちよつとあつたはずだぞ、正午を告げるカルデラの鐘が鳴ってからだつたはず。

これだけでも王の人徳と人氣がうかがえるな、まさに民衆の長だ。

アレンを見つけるとラナさんが顔面を掴んでアイアンクローを、というか若干気纏つ

てないですか？

指が顔にめり込んでるのは気のせいですか、アレン死にますよ。

俺には止めることができない、何となくだがこの人にだけは逆らっちゃいけない気がする！

——ゴオン、ゴオン！

正午を告げる鐘が鳴り響く、今日はいつに増しても大きな音の気がする。

「控えろ控えろ！アーサー王十二世がおいでになるぞ！」

デイハルド宮殿の方向が騒がしくなる、人混みも多くなり国家警備隊の方々が人波を掻き分ける。

大変だな、国の防衛以外にもあんな仕事するんだあの人たち。

道理で俺たち傭兵に手伝いを要請するわけだ、人手が圧倒的に足りない。

「ホクヤ、あれがアーサー王様だ！」

アレンが顔から血を流しながら子供のようにはしゃぐ、彼の指す方向を見てみるが視力のせいでよく見えない。

メガたんを装着して目を凝らす。

「……ッ！」

俺は思わず気圧されてしまった、アーサー王と呼ばれる人物の圧倒的な迫力、威圧感

と覇気に。

今までの戦士たちとは違う、さすがは五人の英雄の一人に数えられるだけある。

汗が止まらなかった、傷ついた片目と立派なたてがみ、白くなり始めた威厳ある顎髭、そして歴戦の傷跡。

まさに王、圧倒的で人徳があつて実力もある。

アーサー王は広場の中央、アーサー王一世の銅像の前に立ち敬礼をした後、こちらを向き声を張り上げる。

「遙か昔の今日、デイハルド王国は我が先祖により建国された！我々がここで暮らしていけるありがたさを忘れてはならない、先祖に感謝を！デイハルド王国民としての誇りを！建国祭を存分に楽しむのだ！」

王の叫び声と同調するように人々も雄叫びを上げる。

これがアーサー王、これが王の器！

俺にとって雲の上の存在、ピリピリと伝わる威圧感を俺は忘れることはできないだろう。

この日のことを、建国祭の感謝を、俺はしっかりと胸に抱いた。

8. 激震

建国祭二日目。

本日は俺の仕事日だ、まあ昨日のうちに楽しめるだけ楽しんだしいいか。

今回俺たちの担当してるエリアはハーレー街の宿エリア、二人の先輩達と建物の屋根の上で三方向を監視してる。

特にここは他国からのお客さんもいるので念入りにやる必要があるとか、それならもっと人手が多くても？と思うのだが、あまり多すぎても意味がないらしい。

下の方は国家警備隊の皆様がやってくださってるから大丈夫として、俺たちが下でウロウロしてたら客の邪魔になるし、人混みで出勤が遅れるかもしれないという理由で屋根の上だ。

「こちら異常なし、パイル先輩どうぞ」

「同じく、あるとすればリア充多し、爆発希望。マクベス氏どうぞ」

「真面目にやれよ、異常なしだ」

俺の冗談に乗ってくれる辺りこの二人はいい先輩だ。

何故かパイル先輩は血涙を流してるけど、目は大丈夫だろうか？

マクス先輩、あんた真面目に言って言ってるけど煙管吸ってんじゃん、超ゆったりしてるじゃん。

まあ、実際何事もないからいいのだが暇なのだ。

これがあと三時間続くのかと思うとダラけたくもなる。

普段ジョブボードのところで座って、待機に強そうなマクス先輩ですらこのザマである。

パイル先輩なんか何か食い始めたし。

「パイル先輩、何食ってんですか？」

「ソフティーク、一ついる？」

「ありがたく」

パリ、と一口食べる。

この塩つ辛さが癖になるな、サイズもそこまで大きくないし食べやすい。

焼き加減もちょうどよく、いい焦げ目が素敵な模様を出している。

まあ、腹に入れば皆一緒だが食はまず見た目からつてね。

「なあ、ホクヤ。お前つてたしかデイハルド出身じゃないんだよな？」

「まあ、そうっすね。何か気がついたらここにいたって感じっすね」

「なんじゃ、そりゃ」

「パイル先輩もあるでしょ、ギルドで騒いでて目が覚めたら何故か家にいるって展開。そんな感じですよ」

「……………あるな、酒飲みすぎたときとか普通にあるわ」

「そんな感じですよ」

「お前ら、よくそれで会話が成り立つな」

マクベス先輩が呆れてる気がする、そんな横でパイル先輩は「酒飲みたーい、彼女欲しー」とか嘆いてるし。

一応俺たち今現在進行形で勤務中ですよ、パイル先輩。

——そんな感じでパイル先輩の持ってきたソフテューユを三人で食べながら過ごすこと一時間、事件は起きた。

ドオオオオン！とアルドニア広場とハーレー街を繋ぐ階段が大爆発を起こしたのだ。

「なっ、街が！」

「クソ、遠いに行くぞ！怪我人を助けてパニックだけは避けるぞ！」

もうそれは遅い、怪我人を助けるだけならまだしも、既に広場とハーレー街はパニック状態だ。

俺たちは怪我人をさらに増やさないために屋根から屋根を飛んで現場へ急ぐ。

これは明らかに人為的、しかもきつきの反応を見ると気が大爆発を起こしたものの、クソ、未然に防げなかったのが悔しい！

「パイル先輩、マクベス先輩、三手に別れましょう！固まって行っても一部分しか防げない、それぞれ別の場所に行って拡散を防ぎましょう！」

「そうだな、じゃあ俺は広場に行く、パイルは階段、ホクヤはハーレー街に向かつてくれ！」

「おう！」

「了解！」

俺たちはこうして三手に別れた。

俺はルートを変えてハーレー街に向かう、宿エリアよりも低地にあるハーレー街はただ行きやすい。

ハーレー街は既にパニックになっており、先輩達と国家警備隊が中心になって騒ぎを食い止めようとしている。

そんな中、見知った先輩の元へ俺は急ぐ。

「ビト先輩！」

「ホクヤ君か、これは一体何が起こったんだ!?!」

「わかりません、ハーレー街とアルドニア広場を繋ぐ階段で気による大爆発が発生した

「ことくらいしか!」

「君はたしか宿エリアだったな、たしかにあの場所からは確認が難しいか。とにかくこの騒動を食い止めるのを手伝ってくれ! 僕らだけじゃ限界だ!」

「もちろんっすよ!」

この場合はビト先輩に任せて俺はハーレー街内を走り回ってパニックを抑えようとするが、俺の声は民衆の声に押しつぶされてしまい消えてしまう。

クソ、数が多すぎて声が届かない!

拡声器の代わりになるものでもあればいいけど、今そんな都合のいいものは持ち合わせていない。

もう喉を潰す勢いで叫ぶしかないな、俺の体に薄い水色のオーラが覆う。

こんな時に気の力を使っても仕方ないのはわかってる、けど、気の力は使い方次第でマクベス先輩が言ってた。

——「か八か!」

「みなさん! 落ち着いてください!」

ゴオオ、と音の波がハーレー街に広がった。

一瞬だが、皆が一度に動きを止めてこちらを意識した気がする。

いける!

まだ気の力の使い方は未熟でわからないことも多いけど、これは使える！

俺はあちこちに声を掛け続け、怪我人を保護しビト先輩と国家警備隊の皆さんの協力もあつて一通りパニックは治った。

だが、皆の不安がなくなつたわけではない。

「お疲れ様ホクヤ君、君のお陰で何とか被害は最小限に済ませられた」

「ありがとうございます、ですが」

「うん、そうなんだよね」

ビト先輩が神妙な顔つきを浮かべる。

俺も同じような顔をしていると思う、不安がる人々に聞こえないようにビト先輩は小さく呟く。

「——犯人は、まだ捕まってない」

そう、たしかにパニックは落ち着いた。

しかし、パニックを引き起こした張本人の姿どころか気配すらも感知できていないのだ。

まだ国内にいるはず、俺たちはそのことを決して悟られてはいけない。

さらなるパニックを引き起こす火種となつてしまうからだ。

特に今は建国祭の真っ最中、普段より人は多いしデイハルド王国の外からも人はやつ

て来ている。

——
!!

「ビト先輩、俺少し歩きまわってきます。ここでじっとしてても何もできないので」

「わかった、でもくれぐれも無茶はしちやダメだよ」

「わかってますよ。散歩に行くのに何の心配もいらないでしょ」

そう、散歩に行くだけだ。

ちよつとそこまで、嫌な予感は気のせいだ。

さつき一瞬間こえた助けを求める叫び声は、その声がミカの声に聞こえたことがとても気のせいだとは思えない。

(無事でいろよ、ミカ！)

9. ミカの憂鬱

私は今建国祭であるにも関わらずギルドのシェフに頼まれて買い出しに出てきている。

なのでいつも着ているウエイトレスの制服ではなく私服だ、ていうかあの制服のデザインは本気でなんとかしたい。

マスターである駄目父のデザインなのだが、露出度が高い上にパツツンパツツンだ。スカートも短いし、何とというか、もう着慣れてしまったから私はいいいのだが新人の子が中々着てくれずに毎回苦労する。

アレンさんはいつも親身になって相談に乗ってくれるけど、ラナさんが怖いのよね、後々。

あんなに優しい恋人さんがいてアレンさんが正直羨ましい気もする、ちよつと怖いけど。

建国祭中、ギルドの酒場は一般開放（いつもだけど）されてるから食材も減るわ減るわで忙しいのよねー、これが。

あいつが警備の仕事じゃなかったらとっ捕まえてパシリにでもしてやったのに。

あいつ、ホクヤ・フェルダントと私は仲が悪い。

駄目父が連れてきてアレンさんの知り合い、出会った当初はそうでもなかったのだがあれは彼がギルドに加入して十日後くらいのお出来事。

——いつものようにウエイトレス業をこなしてる私、そしてパイルさんに捕まつて酒に付き合わされているあいつ。

まあ、そこまではない、至つて普通の光景だし私には無関係だし。

私が空いている机の掃除をしているときだった、席を立ったあいつが手伝おうかと頬をほんのり赤らめてやって来た、酔ってるな。

「いや、いいよ。私の仕事だし」

「そうか、邪魔して悪かったな」

とか言つてまたパイルさんに捕まっていた、うん、ここまでも何の問題はない。

私は自分の仕事をしていただけだし、あいつも気を遣つてくれたのか強引に仕事を奪つたりもしなかったし。

よくよく見てみると不思議な奴だ、真つ白なのに透き通るように綺麗な白髪、服によつては見えない時もあるが左胸と左腕に直接何か模様のようなものが描かれている。

身長もそこそこ高いし、たまに見たことのない楽器を演奏しているところを見る。

それで聞いてみたのだ、その楽器は何かと。

「こいつか？こいつはオカッチ、俺の相棒だ。綺麗な音出すんだよ、コイツ」と嬉しそうに語るのだ。

オカッチという楽器を口に咥えて穴を指で押さえるようにして音を出すようだ。ちよつと興味が湧いてきた。

「わ、私にも貸してもらっていい？」

「おう、いいぞー」

そう言ってあいつは何故か先ほどまで咥えていた部分を布で拭いてからオカッチを手渡してくれた。

見ればみるほど不思議な楽器だった。

「吹き方わかるか？」

「えつと、ここを咥えて穴を指で押さえるんだよな」

「そうそう、で息を吹きか——」
バキッ。

ん、こんな音出たかな？

「ぬあああああああああああああああああ!!!?」

「ど、どうした!?!」

「ちよ、おま、何してくれてんじや!」

「は、はあ!? 私は言われた通りにやっただけだ!」

「齒を立てる奴がいるか! いいから返せ!」

「何故だ!? 私が何をしたと言うのだ!?!」

「いいから、今の音はかなりヤバイんだよ!」

最初はあいつの言ってる意味がわからなかった。

でも、後々思えばもしかしたら破損してしまったのかも。

そう思い始めた頃は謝ろうとしたのだが、どうしても顔を合わすたびに口喧嘩になつてしまい今に至る。

明らかにあの時のあれは私の落ち度だ、謝らないといけないとわかつてるのにどうしても悪口しか言えない。

駄目父に相談しても、ニヤニヤと笑みを浮かべるだけだった。

ムカつくから何回か殴った。

(ホント、私ってバカだよね)

あいつがあのおカツチという楽器をどれだけ大切にしていたかはわかる。

なのに、私はそれをぞんざいに扱ってしまったのだ。

それ以降二つ年下のあいつとの仲はどんどん悪くなってしまった。

もう後悔しても遅いのもかもしれない、あの頃みたいに楽しく話せないのもかもしれない。

早く戻ろう、とハーレー街の人混みをかき分けてギルドのあるアルドニア広場へ行こうと階段に向かっていると、突如、階段が大爆発を起こした。

え、ちよ、何!?

私は最初タチの悪い冗談か何らかの演出かと思った。

でも、違う！階段にいた人たちは血を流して動かぬ状態で飛んできたのだ。

思わず吐き気がしたが、ここから動かねば自分も同じ目にあう！

でも、人波の勢いに吞まれて上手く身動きが取れない、行きたい方向に進めない！

私がそうこうしてる間にあいつの声が響いた。

「みなさん！落ち着いてください！」

その言葉は民衆に届き、先ほどと比べて少しだけ落ち着きが戻ってきた。

やるじゃない、あの道が使えないのなら宿エリアを通る必要がある。

私は何とか人波を掻き分け、宿エリアに移動することに成功する。

——しかし、人で賑わってるはずがほとんどいなかった。

この時の私は知らなかったが、どうやら人は皆アルドニア広場とハーレー街と住宅地に避難してたらしい。

マクベスさんが宿エリアは危険だと報告したから。

私は一刻も早くギルドへ戻ろうと走った、必死に！

だから気づかなかった、背後にいる大きな影がこちらに迫ってきているということに。

ズガアアン！と私は何者かにより壁に追いやられた。

ぐ、手も抑えられてる！しかも力が半端ないほど強い！

「へへ、中々いい女だ。こんなオマケも拾えるなんて、俺はついてるなあ！」

はあ、はあ、い、痛い！

私は後ろが確認できない姿勢になつてる、手は後ろに組まされて動かせない。

顔も壁に押さえつけられてる、しかも何か向こうの鼻息荒い。

「ちよつとくらいヤツても文句ねえよな！こんな上玉放つておくほうが勿体ねえ！」

むに、と胸を鷲掴みにされる。

あ、ちよ、どこ触つて!?

力が、入らない、い。コイツ、間違はなくローグ街の、奴！

うう、もう駄目かもね、駄目父は今日も鐘の仕事あるつて言つてたし、あいつは、ハー

レー街。

もう助からない、でも、近くに誰かいるなら誰でもいい！

助けてよ!!

声に出なかった、もうここまでかとも思いかけたその時だった。

「——ミカああああああああああ!!!」

あいつの、今一番聞きたくて謝りたい奴の声が聞こえた。

※

俺が宿エリアにまで来るとミカが強姦されていた、あのクソ野郎!

俺は一気に加速してクズ野郎の顔面に全力の蹴りを叩き込んだ!

「お、が!?!」

クズ野郎は吹き飛び、解放されたミカはぺたりとその場に崩れ落ちた。

汗と涙が凄い、余程のことがあったのか。

俺はもうあいつを生かしておく気はなかった。

「立て、もうお前は許さねえ」

「……ケツ」

クズ野郎は足に気を込めるとそれを爆発させる、一気に加速して尖った鼻先で俺を狙う。

なるほど、こいつが今回の主犯か。

ビキビキビキ、腕に自然と気が込められる。

薄い水色のオーラが電撃のように俺の右腕に纏わりつく。

ガツ、とツノと拳が激突する。

ぐ、地味に力強いな！加速した分威力が上がってやがる！

「へー！」

奴のツノが気で集中される、そうだ、こいつの気は爆発的に放出されるんだった！

「やべー！」

俺はバックステップで一気の後退し、ミカを庇うようにして奴の隙を窺う。

クソ、あんな好き勝手気を放出しやがって！

奴は一気に接近してくると、パンチとキックによるラッシュで迫ってくる！

思ったより強いな、こいつ！

俺よりも気の扱いに慣れてるし、戦闘慣れもしている。

俺一人じゃ分が悪いかもな、せめてここにもう一人くらい誰かいてくれたら！

とにかくここは狭い、もっと広い場所に移動しないと！

「ミカ、立てるか!?!」

「え、う、うん」

ミカはそう言ってるが、体が反応してない！

仕方ない、俺はミカをおぶってダッシュユする。

「逃がすかあ！」

奴も追ってくる、ここまでは計算通り！

この後、この先に待たせてくれるはずのマクベス先輩かパイル先輩、国家警備隊の誰かに賭けるしかない！

ていうか頼む、いてくれ！

「……ホクヤ」

「何だよ!？」

こんな時なのに、ミカは俺に何か言いたそうな声で話しかけてくる。

後ろから奴がとんでもない速度で迫ってくる。

クソ、思ったより持たないかもな！

「ごめんね」

——!!

「……気にすんな」

俺は体の中の何かが爆発した気がした。

何かはわからない、とりあえず計画は変更だ。

ミカを安全な場所に送り届け、俺は奴と対峙する。

「ホクヤ？」

「心配すんな、すぐに戻る！」

グツ、と拳に力を込める。

拳からは普段の気の色と異なる薄い赤紫色のオーラが溢れ出していた。何だかわからないけど、今ならあのクソ野郎をぶっ潰せる気がする。

「もう逃げるのは終わりか!？」

奴はツノに気を溜めてこちらに向かってくる。

先ほどよりも早く、重い一撃。

肌で俺はそれを感じ取る、でも、そんなのどうってことはない。

「そうだ、俺がお前をぶっ潰す」

「あまり、調子に乗るんじゃねえぞ若造がああああ!!!」

ポフン!と奴は足に込めた気をブーストにして更に加速する。

一気に距離がゼロに近く、ビキビキビキ、と筋肉に力が巡るのがわかる。

いつもの気とは明らかに違う、こんなに力は漲らない。

奴の一撃は常に一直線、俺は直撃の瞬間にわずかに体を反らす。

が、腹をかすってしまい痛みが全身を駆け巡る。

すげえ、痛い、痛いはずなのに!

——止まらない!!

「お、おとおお!!!」

俺の拳は奴の左目を突く、真正正銘全力の拳!

最初の蹴りとは明らかに違う一撃!

ズドオオオオオオン!!と拳を最後まで振り、奴の体は建物の壁にめり込む。

ズキズキと右腕に激痛が走る。

「はあ、はあ、はあ!」

ポタポタ、と腹からは血が流れていた。

さつき掠った時に切ってしまったようだ、全然気がつかなかつたな。

ミカは、無事そうだな、よかった。

「まだだああ!!」

俺が膝をついていると奴は起き上がった、マジかよ!

もうあいつをぶつ飛ばす余力残ってないぞ。

「クハハハハ、もう計画なんてどうでもいい!この宿エリアをぶつ飛ばしてやる!」

まさか、あの野郎!

階段をぶつ飛ばした大爆発をするつもりか!

クソ、動け、俺の体!!

立ち上がれ、それで早く、早く前に！

「ホクヤ!？」

「う、おおおおお!!!!」

ビキビキビキ、と先ほどの赤紫色のオーラが今度は全身から放出し始めた。
意識は朦朧、でも体は動く！

俺は全速力で奴を止めるために駆け出す、体が悲鳴をあげるが関係ない！

——そして、奴に全力の蹴りを溝内に放つ！

「ガッ、あ」

奴は呻き声を上げながら集中させていた気を静かに散らす。

フラつきながらも倒れたのかはわからない、頼むから倒れてくれよ！

俺の意識はここで途絶えた。

10. 一つの事件の終わり

さつき凄まじい二つの気激突していた、一つはホクヤの、もう一つはさつき起こった爆発の発生源。

場所は宿エリア、どうやらあいつ一人先走ったようだ。

『三手に別れましょう！固まって行っても一部分にしか防げない、それぞれ別の場所に行つて拡散を防ぎましょう！』

クソ、別行動を取つたとはいえあいつに情報が届いてなかったことを思うと辛いものだ。

魅力的かつ合理的な案だったから俺も二人に指示をしたが、こんなことになるとは。

お陰でパニックも収まったのは事実、後で労つてやらねば。

宿エリアに到着した、そこには倒れるホクヤと一回り大きい男、それにミカちゃん!? 何故彼女がここに!?

「ミカちゃん!」

「え、マクベスさん!」

「どうして君がここに、ホクヤは大丈夫なのか!？」

「そ、それが」

まさか、俺は唾えていた煙管が地面に落下することにも気づかずホクヤに駆け寄る。意識はない、腹部の出血は激しいが命に別状はなさそうだ。

よかった、この程度で済んで。

「マクベスさん、ホクヤは、ホクヤは大丈夫ですよ？助かりますよね!？」

「大丈夫だ、見た目ほど傷は深くない。応急手当だけでもしておいた方がいい」

俺はホクヤの腹部の傷に手を当てる、ポワァ、と俺の中の気がホクヤの傷をゆつくりと塞ぐ。

ま、直接戦闘よりも俺はこっちの方が得意なんだよね。

気を送り込んで細胞を活性化させ肉体を再生させる、あまり難しいことはわからない。かっただけ俺の力は人の為になれる。

「ミカちゃん、辛いかもしれないけど誰か来るまでここで俺と一緒にいてね。他にも残党がいるかもしれない」

「は、はい」

ホクヤの手当を終え、倒れている男を簡単に拘束する。

こいつはローグ街の者か、どこかで見たことがある。

ああ、思い出した、たしかブラックリストに入ってたな。

ギラ・サイファー、そこそこの実力者だったはずだ。

よくホクヤが倒せたものだ、とりあえずこいつの身柄は国家警備隊に任せよう。
ことにしよう。

「マクベス！ホクヤは無事か!？」

「パイル、いいところに。これをゲルターさんのところに運んでつてくれないかい？」

「うお、まさかホクヤの奴がやったのか!？」

「そうみたいだ、とりあえず目がさめる前に早く!」

「おう、承った」

奴の身柄は拘束した、ミカちゃんも保護、ホクヤも無事だった。

とりあえずは移動だな、ギルドに戻れば落ち着けるだろう。

「ミカちゃん、とりあえずギルドに戻ろう。オヤジさんも心配してるはずだ」

俺はホクヤを背負い、ミカちゃんの手を取ってギルドを目指した。

全く、今日はせつかくの祭りなのにそれぞれどころじやなくなってしまうたな。

明日はどうなることやら。

※

その頃、デイハルド宮殿。

「バルダーよ」

「いかがなさいましたか、陛下」

「感じたか？ さっきの力の反応を、懐かしき力の流れを」

「と、言いますと？」

アーサー王十二世はうむ、と髭に手を当てて静かに頷いた。

先ほどからうずうずと、落ち着きのない子供のように興奮している姿はいつもの厳格な王の姿ではなかった。

長年付き人として供にいるバルダーもいたずらっぽいな笑みを浮かべている。

「フェバルだ。我が友と気の量は負けず劣らずに強力な力の流れを感じた！ この宮殿に招き入れる準備をせねばならん！」

ニヤリ、と大きな牙を見せてアーサー王十二世は静かに立ち上がる。

体の内に秘める気が溢れ出ており、よほど気持ち昂っているということがわかる。

バルダーは静かに退室し王の望むまま準備を進め始めるのだった。

※

一方、デイハルド王国の外。

国のある巨大な外壁のすぐ側にある一軒家、そこにデイハルド王国最強の男、ドーバス・ウーバーの家があった。

ドーバスはいつもの日課である特訓をしている時であった、国内から面白い気を感じ取ったのは。

「強者の匂いがあるねえ、久々に戻るのも悪くないかもなあー！」

ゴキゴキ、と拳を鳴らしながら口元を大きく歪めた。

彼の行動理由は至って単純、強さを求めて強者を求む。

その結果がデイハルド武道大会二連覇と傭兵ギルド鬼の双牙最強の称号である。

誰も彼を止めることはできない、最強の男が二ヶ月ぶりに動き始める。

※

目を覚ましたら知らない天井、ではなくギルドの医務室の天井だった。

……ん？なんで俺こんなところで寝てるんだらう？

ていうか俺、あの後どうなったんだっけ？

あの、後？何かあったっけな、たしかミカが襲われててそいつと喧嘩しててそこから
の記憶が曖昧だ。

何でだろう、暴れたのは覚えてるんだけど断片的にしか思い出せない。

そうだ！ミカは!?宿エリアは無事か、祭はどうなったんだ——ッ!?

思わず上半身だけ起き上がってしまった、何か全身痛い!?

腹の傷は、塞がってる。

クソ、全然わかんねー、あの後マジで一体何があったんだ?

——ガシャン!

何か割れた音が、入り口の方からだ。

「……ホクヤ!」

「ミカ、良かった無事だったんだな!」

よかった、本当によかった。

何事もなく普通にウエイトレスの制服を着てるミカの姿を見て安心した。

……って、あれ?

何で泣いてるの、え、これ俺が泣かしたみたいな雰囲気!?

本当にどうしたのミカさーん!?

「お、おい!一体どうし——」

「よかった、ひぐ、本当によかった!目が覚めなかったらどうしよう、かと、えぐ」

「ミカ……」

その場で崩れ落ちてしまった、つたく、こういうの苦手なんだよ。

俺は立ち上がって駆け寄りたいが、いかんせん体の状態がわからんから立ち上がっていいものかわからない。

立ち上がって悪化するとなつたらシャレにならない。

——それがどうしたってんだよ、悪化しようがしまいようが今目の前のことが最重要事項。

女の子が泣いてるのを黙ってみてるなんて俺はできない。

俺はゆつくりと床に足を下ろ——

グギツ☆

「あ……！」

やはり無茶はするものではなかった、足を挫いてしまった。

そのまま俺は派手にベッドから転げ落ちて床に倒れこむ、ヤベエ、足の痛み云々とかそんなんじやなくてスゲー恥ずかしい、でも超痛い。

あ、やべ起き上がれない。

「ちよ、ホクヤ大丈夫!？」

「ミ、ミカ?！」

何故かミカがわたわたと涙を拭きながら慌ててこちらに駆け寄ってくる。

いや、俺のドジなんだしそこまでガチに心配されたら俺がどうすればいいのか……

「お、ホクヤ起きたのか!」

「オ、オヤジ!」

「駄目父!」

「つーかお前ら何してんだ?」

「うわー、めんどくせー人に見つかったな。」

とりあえず俺はミカに体を起こしてもらってベッドに戻れそうにないので壁を背にして座っている。

オヤジの後からアレン、マクベス先輩、ビット先輩、パイル先輩がやって来てタダでさえ狭い医務室が物凄い窮屈になった。

その後、ある程度騒いだからビット先輩とアレンは退出し、オヤジが扉を静かに閉める。あの後、俺が気を失ってからの話をするらしい。

「どうやら俺が意識を失っていたのは数時間程度で今は建国祭二日目の夜らしい。」

「まずあの男、ギラ・サイファーの身柄は無事確保。被害も宿エリアには出てないがいくらか損害賠償を求める請求書が来てる」

「うぐ」

「そして、俺がギラを運んだ!」

パイル先輩、そこドヤ顔するところじゃないっす。

にしても結構暴れたもんなあ、壁とか色々ぶっ壊れただろうし。

「ちなみに損害賠償は全部お前宛だ」

「やっぱりか」

「だが、今回ばかりは娘を守ってくれたわけだし被害も最小限に済ませれたからギルドから支払ってやるよ。そしてギラ・サイファーをビステイーブ牢獄にぶち込むことができたわけだしな」

オヤジ、ホントあんたって人は！

「まあ、何だ。まず娘を助けてくれてありがとうな！あと、オラは絶対に交際は認めな——」

「何言ってるんだ、この駄目父!!」

おいおい、ミカさんオヤジ顔面床にめり込んだぞ。

顔を赤くしてるけど、何だろ、熱でもあるのかな??

それにしても今の一撃は健康体じゃないと無理なような気がする。

「俺が引き継ごう、アーサー王のご意向で建国祭は明日もそのまま実施されることになった」

「マジかよ」

「あの人もなんだかんだでイベント好きだからな、さつきゲルターさんが言いに来た。

そこでお前は どうせ明日一日休みなんだし ゆっくり休め、完治したわけじゃないんだ」

「仕事はやっぱ四日目からするんですね、マクベス先輩」

「本来なら休んでももらいたいが、人手不足でな」

まあ、そこは仕方ないだろう。

明日も働けと言われてたら死んでた自信はある。

「まあ、ともかく無事でよかったよホクヤ。もうあまり心配かけてくれるなよ？ミカちゃんなんてあのあと凄い泣——」

ゴスツ！

オヤジの横にマクベス先輩が頭を床に突っ込ませた、ていうかミカさんマジやり過ぎ。
「わ。」

パイル先輩怯えちゃってるよ。

「このバカ共は放つときましよう。パイルさん、ホクヤをベッドに戻してあげて」

「は、はい！」

おいおいおい、それでいいのかパイル先輩！

「……ありがとうね」

ミカが部屋から出るときに何か言ってた気がする、でもパイル先輩が何かミカと何があつたの!?!とか裏切り者めー!とか一人叫んでいたせいで何も聞こえなかった。

11. ホクヤ、宮殿に呼び出される

建国祭三日目。

昨夜なら朝までをギルドのベッドで過ごし、今は何とか歩けるまでに回復したので家に戻ったところである。

どうやら我が家への被害は少く、どこも破損してるところはなかった、よかった。

ちなみに何故か帰るときミカが顔を真っ赤にしてスゲエ睨んできた、何故だ、一体何に怒っていたんだ!?

そんなわけで俺は今自宅に帰ってきて風呂を沸かしている、早く入りたい。

昨日の怪我が完治したわけではないが、傷は全部塞がったため染みることもないから心置きなく入浴できる!

マクベス先輩が言うには気には自己再生能力を高めるタイプもあるらしい。

そこで気をなんとか体の周囲に放出ができるようになった俺の回復力が向上したとか何とか、他にも何やら聞いたことない専門用語がたくさん羅列していた気がするが半分以上聞けてない!

だってわかんないし、無理に理解しようとする必要もない！

でも本当に氣つて応用が利くし汎用性高いし知らないこととかわかんないことが本当に多い。

昨日の奴なんか爆発みたいに使ってたし、あんな使い方もできるんだなあ、実際。

もしかしたら俺にもできるかもしれないな、建国祭が終わつたら色々試してみよう。

お、お湯が沸いたな！

いやっほーい！風呂だ風呂だー！

服を脱ぎ捨てて右足からゆつくりと入っていく。

ぐあー、この感じが癖になる！

酒持つてこればよかつたなあ、一杯欲しくなってくるぜ！

やっぱりほぼ丸一日入らないだけでここまで汚れるもんなんだなあ、水も高いけど必要なことだから出費は仕方ないし。

この国が砂漠地帯にあるため、水の物価は正直いうと高い。

建国祭の店で売ってる子供の小遣いでも買うことのできる食べ物よりも五倍近くはするんじゃないのかな？

まあ、でも傭兵してたら稼ぎはそこそこだから今は安定してる。

この星にやってきて三ヶ月ちよつと経つけどだいぶここでの生活も慣れてきた。

しかし、一体俺はいつまでここにいるんだろう、エーナさんの話によると不死の肉体で星々を旅するんだからいつかここから旅立たなきゃならない。

そんな日が本当に来るなんてとても思えない、実感も湧かない。

——やめだ、やめやめ！

先のこととかわかんねーことをうだうだ考えたつて仕方ねえ！

重要なのは今だ、今オヤジの元で先輩達と傭兵をしている！

それが楽しい、充実してる、それでいいんだ。

過ぎたことやこれからのことを考えると身動きが取れなくなっちゃう、そう、今はこの風呂の気持ち良さを身にならみ込ませることが最重要事項なんだ！

はあー、気持ちいい……

もう少しこの感覚を楽しんでいたい、長風呂も健康にやよくない。

適度に済ませるか。

「……酒切らしてたか」

そういえば建国祭前に彼女に振られたとか言うパイル先輩が我が家に突撃してきて自棄酒じゃー！とか言つてウチの酒を朝まで飲んだんだっけ？

俺も一緒に飲んだからあれなんだけど、あの子の二日酔いは酷かったな。

「っしやーね、買いに行くか。」

建国祭真つ只中だというのに昨日の事件のせいで人の数はかなり減っていた。

まあ、それでも来てる人達はよっぽどの祭り好きなんだろうな。

ていうかこんな渦中に祭りを続行するっていう王も王なんだけどな。

ギルドに行けばそこその酒買えるか、いやダメだ！

今ギルドに行ったらパイル先輩に絡まれてミカにイチャモン付けられてオヤジに
じられる（気がする、多分）！

それに療養だつて帰ったのにウロついてたら何してんだつてマクベス先輩とアレ
ンに説教されそうだ。

もうほとんど治つたのに、念に念を押しすぎなんだよ。

——ま、その前にさつきからついてきてる奴の話も聞かないといけないんだけど
ね。

「俺になんか用？」

「ええ、私自身はあなたにこれっぽちの興味もございませんが。あなたはホクヤ・フェ
ルダントで間違いありませんね？」

「だつたら？」

「この様子だと誰かの差し金か。」

ていうかハッキリとモノを言う女性だことで、ちよつと傷ついたぞ。

「我らが王、アーサー王十二世がデイハルド宮殿であなたをお待ちです。ご同行願います」

……え、俺なんか悪いことしたっけ??

「なぜ身構えてるのですか?」

「い、いや、免罪で捕まるのはごめんだぜ」

「王はあなたを客人として呼びなのですが、もしあなたがそれを望むのであればビスティープ牢獄の署長とお話しして入獄も可能ですが」

「え、何で可能なの!?!」

「私の気分です」

「気分で国一番の牢獄に入れられてたまるか! とりあえず俺は客として呼ばれてるってことでいいんだよな!?!」

「はい」

なんか疲れた、ていうか何であの人が俺を?!

本当に身に覚えがない上に接点もない、こちらが一方的に知っているだけで向こうが知る機会はなかったはずだ。

デイハルド宮殿、今まで何度か宮殿街にまでなら来たことはあったが宮殿に入るのは

初めてだ。

ていうか地下なの、なんかさつきから階段ずつと下りてる気がする。

「……その割には階段一つ一つ短いな」

「初代アーサー王が極度の高所恐怖症であったがための設計です。宮殿が地下構造になつてるのもその為です」

女性がわざとらしく舌打ちをする、それでいいのか初代アーサー王。

ていうか怖がりすぎだろ、さつきから区切り多いし、階段も十段もないぞ。

それなのに下層部に続いているとか舐めてるとしか言うしかない。

あの建国祭一日目で見たアーサー王の印象しかなかったので、イメージが変わってしまつた。

「この先の大扉の先で王がお待ちです。私の案内はここまでとなりますので、くれぐれも無礼のないように」

と、言つて女性は足早に去つていった。

「ただ俺から離れたかつたんだよ、とりあえずこんな大きい扉でもノックはしないとな。」

コンコン、つと。

「誰だ？」

「ホクヤ・フェルダントです、何か呼ばれたらしいので来ました」

「おお、ようやく来たか！入るがいい！」

あれ、この中にいるのつてアーサー王だよね？

あの建国祭一日目で気迫凄かったあのアーサー王だよね？

まあ、開けてみればわかるか。

ドアノブを思いつきり引いて扉を開く、その奥に堂々と座るアーサー王十二世。

あの時見た人物そのものが凄い間近にいた。

「お前さんがホクヤか、そんなところでじっとしとらんどこっち来い」

「は、はあ」

たしかに気迫は本物だ、あのとときと全く変わりない。

でも、何だろう、何かが違う気がするのは気のせいだろうか？

とりあえず用意された椅子に座りアーサー王と向かい合う。

よく見てみるとこの人相当デカイな、それに年を取っている。

それでいてまだ凄まじい量の気が漲っているのがわかる。

俺は思わず固唾を飲んでしまう。

「どうも、初めまして」

「うむ、そういえば初対面であったな」

そういえばって、あんた。

「やはり我の目に間違いはなかった。あの男そっくりだ」

あの男？

アーサー王が勝手に一人領いて納得してしまっているが、俺は全然話についていけない。

「なあ、星々を渡り歩く旅人フェバルよ」

……は？

え、今この人なんて言った？

「な、なんでそのことを……」

「見ればわかる。主がこの星の者でないことなどな、それにこの星を訪れたフェバルは主だけではない」

マジか、ここに俺以外のフェバルが来たことあるんだ！

想像もしてなかった、まさかアーサー王からフェバルの言葉を聞くことになるなんて。

「あの男、名をシルフ・アーライズと名乗っておった。我の友にしてかつて戦争を共にした仲だ」

シルフ、聞いたこともない名前だ。

だけど、この人はフェバルについて何かを知っている。

俺が知らない何かを知っている、そんな気がする。

「アーサー王十二世さん、質問があるのですが」

「むう、何だか堅っ苦しいな。私のことはレオナルドと呼べ、本名だ！」

「レ、レオナルドさん。質問があるのですがよろしいですか？」

「許可する！」

「で、では、フェバルのことについてどの程度ご存知なのですか？俺はフェバルになって日が浅く、まだわからないことがたくさんあるんです」

「……そうか、すまぬがあまり多くのことは知らぬ」

だよなあ、俺も周囲に自分が異星人です！とか言っただけ情報ぶちまけてるわけじゃないし。

知らない土地で過ごすこと自体がプレッシャーというか、落ち着かないのも事実だ。

そのジルフさんにもそんな余裕なかったんだろうな。

「——だが、フェバルは何か特異な能力が宿るとジルフから聞いたことはある」

「特異な、能力？」

「奴は【気の奥義】と言っておった。詳しくは語らなかったが、気に関するあらゆる理を覆すようなことを言っておったな」

何それ!? 凄いかわかんないけど、凄いか?

でも、気ならフェバルでない人でも扱えてるから、他にない何かがあるんだろうな。それに能力なんてそうそう他人に教えるものではないし、まあ仕方ない。

ん、待てよ?

「じゃあ、俺の能力って何だ?」

唯一会ったフェバルであるエーナさんの言ってた【星占い】があの人能力だとすれば、俺は一体何なんだ?

まだ全然わからない、もしかしてないとか?

そんなはずはないよな、でも思い当たる節が全然ない。

「主の能力は主自身が見つけるべきだ、主がわからぬことが我にわかるわけもないからな」

そうなんだけど、何だ?

この、モヤモヤというか落ち着かない感覚は?

「我はフェバルではない、だから何も助言することはできぬが焦る必要はなからう」

「レオナルドさん」

「自分をしっかりと見つめなおして、自分と向き合えば然るべき形が見えてくるだろう。

我が言えることはこれしかないがな」

自分と、しっかりと向き合う。

そうだ、別に焦る必要はないんだ。

見つけられなくとも何も不自由があるわけじゃない、生きていけないわけでも死ぬわけでもない。

「ありがとうございます、レオナルドさん。参考になりました」

「そうか」

レオナルドさんも笑みを浮かべる、そこからは二人で他愛もない話を続けた。

建国祭初日のアーサー王十二世としてではなく、レオナルドさんという一人の男と俺は距離を縮めることができた、そんな気がした。

12. ホクヤ・フェルダントは静かに暮らしたい

話し込むこと数時間、ここが地下にあるせいでカルデラの鐘の音も届かず外の時間はわからず部屋に入ってきたバルダーという紳士風の大臣が入ってきたことによつて今は夕暮れ時であることが判明した。

いやー、レオナルドさん絡みやすいからめっちゃ話しやすく助かった。

途中から奥さんの惚気話とか側室は二十人いるとかそれでも正妻以外とは一線を越えてはいないとかの話になり俺はほとんど聞き手になっていた。

「むう、まだ話し足りないが今日のところはこの辺にしておこうか。ホクヤよ、また暇があれば宮殿へ来るといい」

「ははは、そんなに気軽に来れたら苦労しませんよ」

「それもそうか、我は王であつたな」

ガハハハハ、と豪快に笑うレオナルドさんは本当に楽しそうだった。

よつほど異星の話を聞くことができご機嫌なのか、かつての友と同じフェバルと会えたことに歓喜しているのかもしれないな。

それにしてももうそんな時間なのか、お言葉に甘えてお暇させてもらおう。

「帰りの案内にはシヤナを遣わせる、シヤナはおるか!?」

「(ト)(ト)」

この人どこから来た!?

俺とレオナルドさんに向かって美しい銀色の髪をした女性が近づいてくる。

…… 何故だろう、どつかで会ったような目つきに雰囲気だぞ、気のせいだと思いたいが多分気のせいだな。

でもなんでだろう、すごい敵意が湧いてくる。

「ホクヤを外まで案内してやってくれ、このディハルド宮殿の内部は複雑だから迷ってはいかん」

「かしこまりました」

シヤナと呼ばれた女性は耳と尻尾を微動だにさせずに返事をする。

ていうか一瞬スゲー睨まれた気もする、喧嘩売られてるのかね?

「ではなホクヤ。また近いうちに会おう!」

レオナルドさんに見送られて王の間を跡にした。

近いうちに、か。

まあ、もう一回一人でこんなバカでかい宮殿に王族でも関係者でもない一般庶民の俺

が来る勇気があればいいんだけどね。

やっぱり階段の量が尋常じゃないな、この宮殿は。

ホント、いつか誰か転びでもしたら大怪——ッ！

ガキイイイイイイイイイイン!!

「危ねッ！」

「チッ」

おいおいおいおいシヤナさんよ！

いきなりサバイバルナイフ片手に襲うとか血気盛んすぎ！

つたく、反射的にドラちゃんで防いだけど反応できなかつたら死んでたぞ！

ていうかここ階段、態勢が割とマジで危険！

両腕に気を込め、シヤナをサバイバルナイフごと勢いよく押し返す。

ていうかいきなり何なのこの人!?

「ッ、いきなり何しやがる!？」

「愚問だな。アタシは貴様を決して認めはしない」

はあ？

「貴様ごときが、あのギラを倒したなど俄かに信じられん。余程の偶然が重なったのだろくな」

ギラ？

ああ、あのクソ野郎か。

昨日のことなのに名前を覚えてないとか、まああんな奴の名前を覚えるんで脳細胞の無駄使いなんで忘れることにしよう。

「俺だつて信じられないよ」

「だが、倒したのだろう？」

「まあ、なあ」

「何だ、その曖昧な返事はアー！」

ツ、こいつは!?

もう一本ダガーを取り出しやがった、本気で殺す気か!?

サバイバルナイフにダガー、しかも一振りが速い!

頼むぜ、ドラちゃん! スーパー君!

クソ、せめて階段から移動できたから、足場が不安定すぎて攻撃を受けるだけで精一杯だ!

しかもこの女、ご丁寧に防ぎにくい箇所ばかり狙いやがって!

しかも動きと気の移動に無駄がない、一撃一撃は軽いのに当たる瞬間に気を込めることで威力を高めてやがる!

俺も似たようなことはできるけど、ここまで滑らかにするにはまだ練習が足りない。

——あ、足踏み外した！

ヤベ!?

「やあー！」

蹴るなああああああああ!!!

落ちる、まだ下が近いからいいけどそれでも衝撃は馬鹿にならないぞ！

仰向けになった俺にシヤナは馬乗りになって動きを封じてくる。

クソ、まさか宮殿で殺される羽目になるとは!?

「……どうした？もう終わりか」

「あのなあ、俺はあんたとやりあう気はなかったんだ！ていうかそろそろ帰りたいんだけど」

そうだ、そもそもお前がいきなりサバイバルナイフで切りかかって来なけりやこんなことにはならなかったんだよ！

「あんた、俺に何か恨みでもあんのか？」

「ツ、別に」

あるな、絶対になんかあるな。

生憎俺はお前とは今日で初対面だから身に覚えはないけど。

「貴様にやる気がないなら仕方ない、今日は引き下がらせてもらう」

そうやってシヤナはサバイバルナイフとダガーを仕舞いゆつくりと立ち上がった。

ん、今日は？

「明日から貴様の本気が見られるまで何度でも挑ませてもらうぞ、ホクヤ・フェルダント」

うわー、これ絶対めんどくさくなるパターンだわ。

※

建国祭四日目。

今日は真面目にお仕事するよ、俺。

階段の修理はまだ続いているが建国祭は元気にやるらしい。

あのレオナルドさんならやりかねないね、ていうか会ってみてよくわかったわ。

今日はマクベス先輩とペアでアルドニア広場とズーマコロシアム間の通路を担当します、あとは国家警備隊の皆さんも一緒に。

そんな感じで暇なわけだが、俺はマクベス先輩に愚痴ってる。

「——それで昨日いきなり命狙われたんですよね、マジビックリしましたよ」

「そいつは災難だったな」

マクベス先輩は面倒臭そうに煙管を吸いながらだるそうにしている。

まあ、異常はないからいいやんだろう、昨日と比べて人は増えたがそれでも初日二日目ほどの活気はない。

「それで、誰に命狙われたって?」

「シヤナつて女ですよ、銀髪の。俺がギ、ラ?を倒した倒してないとか言ってきて」

「ああ、それで」

「何故かマクベス先輩は納得したような表情を浮かべた、何でこの人一人で納得してるの?」

俺めっちゃ言いがかりつけられて殺されかけたつてのに。

マクベス先輩は周囲をキョロキョロと見渡してから小声で話しかけてきた。

「いや、俺も詳しく知らんのだがそのシヤナにはシヤドルつていう国家警備隊切り込み隊長の兄がいるんだ」

「兄が」

「そいつが、何年前かにギラを仕留め損ねて大怪我を負ったことがあるんだ。そのせいだと思うよ、言いがかりには違いないけど」

なるほどね、その兄であるシヤドルとかいう人物よりも俺が弱いと判断されてるわけか。

それでその弱い俺が兄が捕らえ損ねたあのクソ野郎を倒してしまつて気に入らないというわけだ。

つまり、あれだ。

俺完全に舐められてるな、うん。

「マクベス先輩、煙管まだありますか？」

「吸いたいなら雑貨屋で売ってるよ」

どうやら俺は相当黒い雰囲気を出してたらしい、あのマクベス先輩がめっちゃ引いてる。

仕事を始めて一時間経った頃だろうか、何かギルドの方向が騒がしい気がする。

黄色い歓声が飛び交つてお祭りの中であるにも関わらずお祭り状態だ。

「どうしたんですかね？」

「さあ？」

俺もマクベス先輩もよくわからずに仕事をしていると、見知った少年が走っておりこちらに気がついてやってきた。

「ホクヤ兄！」

「おお、ジョーじゃねえか」

そう、傭兵に憧れる小さな有精卵である。

毎日のようにギルドに顔を出してはギルドの皆と話をし酒を飲んでる中に混じってジューズを飲むという実に愛らしい弟分だ。

俺はジョーに拳を出して、コツンと互いにぶつけ合う。

いつしか二人でよくやるようになった挨拶みたいなもんだ。

「ホクヤ兄は仕事?」

「まあな、そろそろ休憩だけでもうしばらくはここにいますぞ」

「そうなんだ」

「ていうかあの騒ぎは一体何なんだ? 知つての通り俺仕事だから全然わかんなくてさ」

「ドーバスだよ! チャンピオンドーバスがギルドに戻ってきたんだよ!!」

ドーバス!

なるほど、そりやお祭り騒ぎになるわけだ。

あのディハルド武道大会を二連覇というまさに敵なし最強の男がこんな身近にやって来たのだから。

だが、あの黄色い歓声の量はおかしい気がする。

男女ともものようにも聞こえてくるし、何か可愛い! とか美しい! とかも聞こえてくるし。

「で、そのドーバスを追いかけて宮殿からマラナ王妃様がギルドの壁を破壊して入って来たんだよ！あの王族の人が来たんだよ！」

「何しとんじやー!?!」

もう昨日から王族とその関係者方に驚かされっぱなしだよ！

なんでお前はそんなに目をキラキラさせてんの、ジョー!?!

ていうかあまりにもお転婆すぎないか、王妃様！

「マラナ王妃様は武道大会がお好きな方でな、王妃自身が運営会長をやっておられて二連覇したドーバスさんをえらく気に入っていて、あんな風に求婚してるわけだ」

「……まさかドーバスさんが国内に住んでない理由って」

「ああ、多分理由の一つだ」

ドーバスさんって意外に苦勞人だったんだなあ。

「ちなみにマラナ王妃自身も武道をやっておられて、相当な実力者だと聞いたことがある」

「スゲー!」

マクベス先輩は頭を抱えながら説明してる傍らジョーは目をキラキラさせながら憧れの眼差しをギルドの方向に向けている、うん、野次馬が増えるわけだな。

有名人が二人も同じところにいたらそりや黄色い歓声上がるわ。

「……しばらくギルドに戻らない方がよさそうですね」
「……そうだな」

騒動が落ち着くまで俺たちは仕事をすることにした。
ちなみに給料も微妙に上がった、やったぜ。

13. ホクヤ、拉致される

野次馬が退き、ある程度落ち着いたギルドに俺とマクベス先輩は戻ることにした。

ジョーは何か気がついたらしいなくなつてた、ホントあいつは自由で羨ましい。

まず俺たちが目にしたのは入り口の左横に開けた大きな大きな穴だつた。

しかも、これは蹴り破つた跡なのかな、それとも殴り飛ばした跡なのかはわからないが多分王妃様のやつたのだろう。

こんな姫様攫おうとする魔王とかいるなら見てみたい、勇者とか必要なさそうだ。

「おう、ホクヤにマクベス！戻つたか、ドーバスさんまだいるぜ！」

俺たちを迎えたのはパイル先輩、既に出来上がつておりノリが完全にそれそのものだつた。

あれか、あのやたらデカくて存在感のあるあの人がドーバスさん。

長い髪に顎髭、ていうかマジでデカイな、ニメートルはあるぞ。

もちろん獣の耳と短いようで長い尻尾も生えていた。

今はオヤジと二人で飲んでるようだ。

「ったくいつも悪いなオヤジ。マラナ様がまた迷惑かけちまってよ、ていうかあの女の嗅覚はいつも思うがおかしいぜ」

「気にすんなドーバス。そのお陰で宮殿の奴らはオラ達に下手な手出しはできない、多少無茶しても許してくれんよ。毎回壁に穴が空くのは敵わんがな」

え、まさかあれって結構頻繁にあることなの？

ていうかドーバスさん、あんたそれ樽だよ樽！

樽を器にしてそのまま飲むとかどんだけだよ！

「あ、おかえりホクヤにマクベスさん！何か飲む？」

「あー、じゃあ酒。マクベス先輩とパイル先輩もどうですか？」

「なら俺も少しもらおうか」

「俺はもう飲んでるけどなー！」

「りよーかい、適当に座って待ってて」

ミカに言葉に適當な席に座り、一人飲んでるパイル先輩は一人で勝手に楽しくやっており、俺とマクベス先輩は再び巨大な穴の空いた壁に目を移す。

うむ、あれってホントに人間業なのかな？

「——で、お前は何しに急に戻ってきたんだドーバス。お前ほどの奴が武道大会以外の日にここに来るなんて余程のことがあったんじゃないのか？」

「——大したことじゃないですよ、昨日興味深い気をここから感じる事ができたんでね。そいつを探しに来たんですよ」

この位置だとオヤジとドーバスさんの会話が聞こえてくる。

なるほどね、昨日は俺途中で寝ちやつてたからよくわかんねーんだよね。

俺が起きてる間はそんなことなかったから、そいつが現れたのは俺が意識を失う前になるわけだ。

あ、ミカが飲み物持つてきてくれた、いつもありがとう。

そう言うミカは嬉しそうに体をくねくねさせる、どうした？

「心当たりないかなあ、オヤジ。あんな特徴ある気を出す奴には一度会ってみたいものでね」

「心当たりと言われてもなあ、昨日は建国祭真つ最中、しかも人は多いわ、ログ街からゴロツキが暴れるわけでそれどころじゃないっての」

「だよなあ、特定なんてできるわけないよな。誰か探知に優れた奴いないの？」

「あなの、ドーバス。お前が感じた気をどうやって他者が同じように感じるんだ？名前とかはわからないのか？」

「あ、名前なら知ってるぜ」

うむ、やはりこの酒は美味いな。

何というか、癖が強すぎず弱すぎずにキンキンに冷えててアルコールが喉にしつかりと通ってくる。

「そうそう、思い出したよ！偶然それを感知した奴と会えて名前だけ聞いたんだよ、たしかホクヤとかつて奴だ！」

ふんふん、ホクヤねホクヤ。

……ん？ホクヤ？！

「ホクヤならウチのギルドにいるぞ、ちようどそこに座ってる白髪の」

「おお、あいつか！」

ちよつと待てー!?

「お、おいホクヤ？」

「マクベス先輩、俺なんかしました、ホント俺なんかしましたかあ!？」

「え、あ、いや、何もしてないと思うが」

いやだっておかしいだろ!!

今代のアーサー王レオナルドさんに俺が予選落ちしたデイハルド武道大会のチャンピオンドーバスが俺に用事あるとか、どゆことなのよ!?

いや、ホントにちよつと待ってほしいんだよ、心の準備というか何というかね、ホントにタンマ！

「お前がホクヤか、たしかにここまで来れば僅かにあの時の気を感じるな」

これは詰んだな、目の前にドーバスさんが仁王立ちしていた。

レオナルドさんとはまた違った圧迫感、気迫、そして戦闘用に鍛え抜かれた肉体はまさに本物。

チャンピオンの称号に相応しい男であった。

「お、俺に何か用ですか？」

「いや、用ってほど用じゃないんだけどさ。あの時の気をもう一回感じたいだけだ」

「あの時、の？」

「ん？もしかして自覚ないのか、あれだけ異質な力を持つてる奴なんてそうそういるもんじゃねえつてのに」

「どういうことだ、俺にはドーバスさんが何を言っているのか全然理解することができなかつた。」

「そういうばもう一つ不思議なことがあった、何故レオナルドさんは俺がフェバルであること、そして俺を見つけ出すことができたのだろう？」

もしかして、昨日我武者羅になってわからなかつたが何かをしたのか？

それがもしかして俺のフェバルとしての能力であり、ドーバスさんの言う異質な気の正体。

「そうか、ならこうしないか！俺からの提案だ！」

「て、提案？」

「おう！ホクヤ、俺がお前のその力を引き出してやるよ！」

…… え、それってつまり、え？

「お前を俺の弟子にしてやる！お前は強くなれるし、俺はあの時の気を目の前で見てみたい、利害は一致してるだろ？」

言っちゃったよ、え、チャンピオンが師匠に!?

いや、そりゃ強い人に教えてもらえるならそれでいいけどさ、酒場が何か騒然としてるんですけど!?

色々と急展開すぎてついていけない、ドーバスさんはニヤリと笑みを浮かべる、あ、嫌な予感がする。

「そうと決まりやさっさと行くぞー！オヤジ、コイツ借りるぜ！」

「おっけー！」

「軽いな、オイいああああああああああああああああああああああああああああ!!?」

そういうことで俺はドーバスさんに連れられてギルドを後にした。

数分後、国を出てドーバスさんの自宅にまで拉致された俺は初めて出る国外に驚きを

隠せなかった。

「おし、とりあえずお前のことはホクヤと呼ばせてもらう！ホクヤは俺のこと師匠って呼んでくれよ！」

「は、はあ」

一旦状況を整理したいのだが、どうもそんな雰囲気ではない。

「それで一つ聞きたい、皆の前だから言いにくかったとかそんなことはなくホクヤは本当にあの気について心当たりはないんだな？」

ドーバスさんが尋ねてくるが、これは果たして言っていいたのだろうか？

レオナルドさんも知っているからジルフって人も話したんだしいと思うけど、まあ、この人なら大丈夫かな。

「できたら誰にも言わないでほしいです、俺自身も不確定なことが多すぎるので」

「任せろ、口は堅い！」

ホントかよ。

「実は、俺異星人なんです。ここの星とは違うところから来て、フェバルって言葉に聞き覚えは？」

「ない」

「とりあえずそのフェバルになった者は星々を渡り歩く代わりに不死の肉体と強力な能

力が与えられるみたいで。その強力な能力による作用なのかもしれないです」

「……なるほど、わからん！」

ええー!?

そりやないつすよ、ドーバスさん!

俺もどこまでが本当かわからないから頑張つて思い出しながらわかりやすく説明したつもりなのに!

「ま、とりあえずあれだ。ホクヤはまだその能力による力を引き出せずにいるわけだ」

「まあ、そうですね」

「そうか、俺にはどうしようもないか!なら仕方ないな、だが一度弟子にしてやったからには戦い方はしつかりと教えてやる!」

「ドーバスさん」

「師匠って呼べって言ったろ!とにかくあまり難しいことは教えられないが次のデイハルド武道大会でいい線いけるようにまではしてやる!」

な、マジっすか!?

たしかに気の扱いに関してはこの人の方が上手い、そして何より大会二連覇の実績もある。

色々と勢いとかで動く人みたいだけど悪い人ではなさそうだ。

それに、あの大会では絶対にぶちのめしたい奴もいる。

今は手段を選んでられない、それにドーバスさんから教えてくれると言ってくれてるのだ。

これ以上のチャンスや幸福はない。

「お願いします師匠！来年こそは本戦に出たいです！あいつを倒すためにも！」

「……いい心意気だ！気に入った、ピシバシ鍛えてやるから覚悟しろ！」

「はい、お願いします!!」

というわけで俺はこの国最強の男に弟子入りすることとなった。

強くなれるかは自分次第、そして己を見つめ直してフェバルとしての能力を見つげるための一歩。

テンション、上がってきたぜ！

14. 真夜中のハーレー街にて

建国祭は無事に終わり、現在俺たち「鬼の双牙」のメンバーは全員で打ち上げを行っている。

師匠も参加し、便乗しメンバーではないがジョー、ゲルターさん、ラナさん、マラナ王妃、さらには俺のことを狙ってシヤナが外野から混じってきた。

マラナ王妃の話によるとレオナルドさんも来ようとしたらしいが、大臣であるバルダーさんに騒ぎになる可能性が高くなるから止められたとか、ナイス判断です。

マラナ王妃だけでも大騒動になり兼ねないのはこの際置いておこう。

またギルドに穴が空いてしまったが、そんなことなど気にせずにはしやぎまくった。

ゲルターさんはマラナ王妃の護衛（という名目の監視）と何とジョーの父親らしいから子守とでやって来ていた。

五日目の警備には師匠も参加して関所という国の入り口を鉄壁の壁が守っており、強さは半端なかった。

師匠といえ、あの日はもう遅いからと言って何もせず終わり翌日も仕事があった

ため、明日から稽古をつけてもらえらることとなった。

そのことでギルドの皆から色々と言われたり絡まれたりと面倒なことが続いた。

シヤナはあれから暇があれば一日一回は襲撃してくる、仕事時間に来ないあたりは律儀でありありがたい。

バルダーさんの話だとシヤナは王に仕える暗躍部隊の隊員で暗殺などに秀でてるとか、怖いよ、俺そんなのに狙われてんのかよ。

まあ、今の彼女は酒飲まして潰したからしばらくは襲ってこないだろう。

なんか腹踊りしてるし、見てられん。

打ち上げは真夜中を告げるカルデラの鐘が鳴るのを目処にして続いたが、二次会とか行って八割形皆さん飲んでらっしゃる、俺はもちろんそろそろ限界というか風呂に入りたいので帰る。

楽しいと言えば楽しいのだが、そこまで酒を飲めるわけではない。

酒豪ではないのだ、ちよつとお付き合い程度に飲めるレベルである。

あまり飲みすぎると次の日がしんどいし、朝起きられない。

夜風が気持ちいい、砂漠地帯にあるデイハルド王国は夜になると涼しくくらいに冷える。

この国の服は本当に都合がいい、環境に適していて熱を逃がしたり吸ったりが昼夜で

きちんと対応してる。

世界は本当に広いなあ、これからもっと色々な星々を旅することになる。その先では一体何が待っているのだろうな、っと。

——まったく、わざわざこんな日にやって来なくてもいいのによ。

ていうかさつき酔い潰したはずなのにもう復活したのかよ。

ここ二、三日で敵意や殺意に敏感になっちゃった俺自身が恐ろしいよ。

これはシヤナに感謝すべきなのか、それとも恨み言の一つや二つくれてやるべきなのか、な!?

「ッー」

上空から受けた襲撃、俺は即座に右腕を振るって反応するが、避けられる。

この避け方、シヤナじゃない?

ていうか飛んでる、あれは羽か?

羽を生やした小さな襲撃者は二つの眼光を光らせてこっちへ再び向かってきた、そんな単調な動き避けられんわけがない。

「——ッ、ッッ！」

う、頭が、割れ!?

クソ、つたれがあ!!

「い、っ!？」

頭を割るような音は収まる、こいつが出してやがったのか。

まさに超音波だ、こんな攻撃をしてくるやつがいるとはな。

俺は思いつき叩きつけた羽を生やしフードを目深く被った襲撃者のフードを剥がす。

「う、くっ!？」

「女!？」

しかも小さいぞ、色々と。

それに何だ、本来白目であるはずの部分が闇夜のように黒く黒い眼球のあるはずの場所が光沢と光彩を放っている。

「こん、のオー！」

「とりあえず黙れ！」

もうあんな音出されたらたまったもんじやない!

口を塞いで少女の腕を後ろに組ませて身動きを取れないように関節技をかける。

背中に生えた羽がバサバサと動いてるが大して痛くもないからいいだろう。

俺はとりあえずこいつを手近な路地裏に連れ込んで事情を聞くことにした。

「つたく、お前は一体何なんだ? 子供はもう寝る時間だぞ」

「こ、子供じゃないし」

「じゃ、チビ」

「チビって言うな!」

「ったく、めんどくせー。」

「さっきの音出されても、あ、そうだ。」

「耳を気で覆っておけば防げるかもな、ちよつと試しに後でやってみよう。」

「じゃ、何て呼べばいいんだよめんどくせえなあ」

「な」

「ん?」

「な、ナナって呼んで、いいよ」

「……何だろ、すげーめんどくさそうなことになりそうだ。」

「だって何でそんなにキラキラした目でこっち見てるわけ、さつきと明らかに態度豹変させやがって。」

「胡散臭すぎる、無理に事情を聞くよりも放置しておいた方がいい気がしてきた。」

「あ、あの待って!」

「何でだよ!というかココロココロ態度変えやがって、俺は騙されないからな!」

「そ、それはもういいじゃん!とりあえず私の話聞いてよ!」

手をはーなーせ!

もうホントに何なんだよ、こつちとらさつきと帰って風呂に入りたいつてだけなのに何で真夜中に見ず知らずの少女に絡まれなきやいけないんだつての!

「お、お願い! 私の家まで来て、それでボスと一回会つて!」

「家? ボス??」

「そ、私の家はローグ街!」

「ローグ街:」

聞いたことある、ならず者や社会不適合者の住むデイハルド王国の闇。

この少女がその出身、で今も住んでる、こりや完全にヤバイ奴ですな。

関わらない方がよさそうだ。

「お願い! ローグ街一の大浴場のある住処に案内するから!」

「よし、行こう! 今すぐ行こう、君の名前は?」

「な、ナナです!」

「俺はホクヤ、よろしくね!」

俺つてチヨロい!

だつて入つてみたいじゃん、ここに来て大浴場なんて行ったことないし!

うむ、実に楽しみだ!

※

本来なら私は王国に行くはずじゃなかったのに、ボスがどうしてもって言うから仕方なく偵察に行った。

ま、目的は他にもあるんだけどそつちは終わらしたからついでよついで。

そこで事情を聞くに丁度いい、一人で夜道を歩く男に襲ったんだけど、これが強くて！

相手は酔ってる、完璧な奇襲！のはずだったのにあつさり防がれて捕まって！

くつ、殺せ！と言いたかったがよくよくその男の顔を見て体が火照っていくのがわかった。

——超私好み！

ヤバイ、まさかここまでイケメンだったなんて!!

ヤバイヤバイ、髪乱れてないよね、目はパッチリ開いてるよね、服変なとこないよね、胸は、初めから大してなかったんだ。

ていうか壁に押さえつけられてこんなことしか考えれないとかちよつとヤバイ？

男は帰ろうとする、え、帰さないわよ！

こんなイケメン逃がす手あるものですか！

とりあえず適当にボスと会ってとか口実使って家に招待しなきゃ、あとは自慢の風呂とか他にも自慢のこゝをって風呂で食いついたー!?

ヤバイ、イケメンは風呂を好むのか!

とにかくさつきから心臓がバクバク鳴ってるのが止まらない、聞こえたらどうしよう、羽まで動きおかしなことになってるし!

超恥ずかしいよう!

とにかく掴みは完璧、名前はホクヤ様!名前までイケメンなんて神様ってのは存在したのね!

私は生まれて初めて神様という存在に感謝したかもしれない!

もうとにかくどうでもいい!この人とならゴールインしちゃってもいいや!

表情に出ないかな、目泳いでないかな、ローグ街に戻るまで耐えきれるかわかんないけど、ナナは大人の階段を登るために頑張ります!!

長いようで短い道のり、ローグ街に何とか到着して一直線でボスのいるところまで向かった

そして扉を開いて、葉巻を吸ってるボスの前にまで連れてきた、一応そういう口実だったからね!

そして私の華麗なる偵察報告!!

「ボス！イケメン一人連れてまいりました!!」
・・・
あれ、もしかしてなんかやっちゃった？

15. ローグ街

ナナに連れられてローグ街にまで来たが、何かスゲーさつきから四方八方から睨まれてる気がする。

スラム街、というのはどうも本当らしくいかがわしそうな店とか血の跡とかが壁に普通に付着しちやつてる。

同じデイハルド王国内とは思えない光景だった。

今は真夜中の時間帯だつていうのに人の往来も多いし、人を殴るような音も時折聞こえてくる。

ここは故郷に少しだけ似ているな、生きるのに必死な奴らがどんな手でも使つて生き延びようとする集団の中にある見え隠れした欲望。

生存競争が激しく、強くないと生きのこられない世界。

まさにそんな世界、ちよつとハーレー街から移動した所にこんな別次元の世界があつたとはな。

こんな何の疑問もなくこの環境下で暮らすナナは恐らくここで生まれてそれが当た

り前だと思つて生きてきたんだらうな。

もし、俺が最初に落ちた場所がここだったらまた別の可能性があつたのかもしれないな。

まあ、師匠やレオナルドさんを敵にするなんて恐ろしいことできたもんじゃないけど、今だから言えることだ。

ローグ街を歩くこと数分、他の建物と比べて一際大きな建物の前に到着するとナナがノックもせずに扉を思いっきり開ける。

俺は入らずにその場で待つが、よく聞こえなかつたけどナナが右手を額の近くにピシッ！と構えて何か大声で叫んでいた。

遅れて俺も一礼して家に入る。

「……ボ、ボス？」

「とりあえず落ち着けナナ。お前の言つてる意味が理解できん、そいつが連れてきたつて奴でいいのか？」

なるほど、話は少しだけ通つてるみたいでよかった。

目の前に座るボスと呼ばれる男は葉巻を吸いながら困った表情を浮かべている。

コイツは一体何を言つたんだらう、すごい気になる。

「そ、そうです。何か問題でも、あり、ますかね？」

「うん、とりあえずお前の頭の中が問題だ」

「それで、私はどうすれば……」

「…… 二階に行つてろ。コイツに謝罪を詫げる」

あ、見た目よりもまともそうな人でよかった。

サングラスかけてるし傷だらけだから絶対にヤバイ人だと思つてたんだけど、比較的まともそうだ。

ナナはトタトタと二階へ上がっていった、いや、せめて俺に何か言つてから行けよ。ていうかこの調子じゃまだまだローグ街一の風呂にありつけそうにないな。

「あー、なんだ。とりあえずウチの馬鹿がなんかすまん」

「あ、いえいえ。えっと」

「そうだな、自己紹介は大切だな。俺はカイヤ・キリバスだ。ここではボスとか呼ばれるが、ガキどもの面倒見てやってるだけだから気にするな」

「どうも、ご丁寧に。自分はホクヤ・フェルダントと言います」

「…… おう」

カイヤさんが葉巻をグリグリと壁に押し付けて消化する。

ていうかその壁の黒い模様と思つてたものは全部それかい！

「そうビクビクすんなや、別に捕つて食おうつてわけじゃないんだ。だが、大人しくは帰

ささないけどな」

「……ん？」

「気が変わった、というかお前さんの名前を聞いて帰すわけにはいかなかったと言った方が正しいか」

立ち上がるカイヤさん、すごい嫌な予感しかしないけどここは怯んじやいけない！

風呂のために!!

「まずはそうだな、ギラの奴が世話になったな。お前さんだろ、あいつをぶちのめしたの？」

「……間違いではないっすね」

なんだろう、俺あのクソ野郎を倒してから色んな人達に目つけられすぎじゃね？

ていうかそうだ、あいつローグ街から来たんだったな。

そりや仲間の敵となるわけで俺がここを歩くだけで睨まれるのは当然ってわけだな。

「別に仇を討とうなんて思っちゃいないさ、あの馬鹿が勝手に先走っただけのことだからな。むしろ強い奴は嫌いじゃねえ」

どういうことだ、なら何で俺は呼び止められてるんだ？

どうして目の前のカイヤさんは殺気と気を全開にしてこちらに向けて敵意まで飛ばしてるんだろう？

凄まじい気だ、師匠ほどじゃないけど俺が小細工なしで勝てる領域じゃない。

「ただな、ナナのアホがペラペラ計画喋っちまった可能性があるからな！口封じさせてもらうぜ、ちよい強引にな!!」

はあ!?

計画つて何、たしかに俺が聞いた可能性があるかないかの二択で問われるとない場合はいいが、もしあつた場合は向こうにとつて最悪のケースだ。

不安要素は取り除く、そんなところであろう。

何の計画かは知らないが、俺が知らないとしラを切つてどうにかなる状況ではなさそうだ。

——ゴオオオ!

ツ、今何かが俺の左を通過した、間違はなくカイヤさん!

背後からの奇襲か、いや、この気の動き方は上!

「どりやあああああああああああああ!!」

——なんて、重い蹴りだ!

脚に気と落下速がプラスされてて信じられないくらいに踵落としになってやがる! 両腕で防御してなかったら確実に一本で防いだ腕は使い物にならなくなつていた。

しかも、攻撃は止まらない!

俺も防戦一方じゃダメだ、気の流れを意識して拳に気に乗せてカイヤさんの攻撃を迎え撃つ。

ダメだ、地力も気の量もからして負けてる！

押し返される！

「がつ、うう」

「どした。その程度でホントにギラの奴倒したのか？」

クソ、同じことをもう一回言われるハメになるとはな！

まだまだ負けてねえよ、言いがかりつけられた因縁だけど負ける気はさらさらねえ！

——オオ！

俺の体を赤紫色のオーラが纏い始める。

これは、気とは違うけど不思議と力が漲ってくる！

「何だ何だ、その気持ち悪い気は!?」

俺が聞きてえよ、でも今はコイツに賭けるしかねえんだよ！

不思議な感覚だ、全身からドンドン力が溢れてきやがる！

まるで俺の気にさらに相乗して、二乗するような感じで俺だけの力じゃないみたいな

感覚！

しかも、何故か負ける気がしない！

俺とカイヤさんの拳が激突する、ビキビキビキ、と衝突音から周囲に気の衝撃波が走る。

無我夢中、今の俺はまさにそんな状態だろう。

それなのに不思議なほどに頭の中は冷静に興奮してる。

矛盾してるように思えるが、実際そんな不思議な感覚なのだからこれ以外に説明しようがない。

とりあえずここは狭い、それを利用すればカイヤさんを倒せる。

とにかくカイヤさんから距離を取る、さつきぶつかった時の衝撃で腕が痺れてしまった。

この不思議な気がなかったら恐らく骨から粉々になっていただろう。

カイヤさんは急接近する、狭いが故に接近もたやすく距離も短い。

俺はなるべく壁を背にしないようにカイヤさんの拳や蹴りを躲しながら隙を狙い攻撃する。

だが、俺の攻撃もまだ重さが足りないのか吹き飛ばせはするのだがダメージを受けているようには思えなかった。

「ケツ、ちつとはやるようだな。そんじゃあ、もう少しだけギア上げていくか!!」

ズオオオ!!と先ほどの三倍はあるだろう、増幅したカイヤさんの気が爆発した。

冗談だろ、まだ本気じゃなかったのかよ。

カイヤさんの気はもうオーラ状ではなく、稲妻のようにバチバチと濃縮されたものが周囲で弾けていた。

実力が違いすぎる、これがローグ街を締めるボスの実力！

気の量も地力も、経験も全てが俺を上回っている。

つたく、この世界には化け物しかないのかよ。

それからのことはよく覚えていない、俺はただただひたすらカイヤさんのサンドバッグになり攻撃を避けきれずに受けたことしか。

ただ、意識が飛ぶ前に、ドクン、と心臓が一度だけ大きく、それでいてとても力強く脈打った気がした。

※

おかしい、たしかに俺はあいつを殺す勢いで攻撃したはずだ。

今までよりも、より気を練り込ませたまさに真正正銘全力の一撃を。

こいつに負ける要素はない、まだ五割しか出してない俺の速度を追えないくらいだ、力もまだまだ発展途上で全然軽い一撃ばかり。

それなのに、なんで俺の全力の一撃が片手で受け止められるんだ？

しかも背後から頭を正確に狙った、完璧な不意打ちだ。

奴の不気味な気は一体何なんだ、あの赤紫色をしたオーラは一体何なんだ？

そうだ、あれが奴の体から出始めたときから何かがおかしかったんだ。

あの拳のぶつかり合い、あれは確実に奴の腕を破壊できたはずだった。

それなのにできなかつた、骨すらも砕けずに終わった拳句こつちにまで軽く反動がきた。

わけがわからねえ、しかも掴まれた腕はピクリとも動かない。

こいつのどこにそんな力があるってんだ？

奴はそのまま俺を背負い投げの要領で投げ飛ばそうとする、させるかよ！

逆に投げ飛ばしてやるよ、こつちとらまだ片手に両足が残ってるんだ！

投げ返すことができた、信じられないくらいあつさりど。

「はっ」

俺は思わず自分でもわかる間抜けな声を出してしまった。

コイツ、意識を失ってやがる！

どういうことだ、まさか意識のない状態で俺の一撃を受け止めて投げようとしたつて
のか？

冗談じゃねえぞ、一体こいつは何なんだ!?

わからねえ、だが知りたい。

こいつの謎の力、そしてこいつを計画に加えれば成功率は格段に上がる。

こいつは帰せない。

それでいて殺しちやいけけない、敵に回れば別だが。

こいつはまだまだ生かす余地がある、たしかホクヤだったか。

聞いたこともない名前だな、少なくとも俺が生きてる間は聞いたことがねえ。

ある程度ドーバスをはじめとした実力者はマークしたはずなんだがな。

まさにイレギュラー、しかもナナが懐いてる、好条件じゃねえか。

待てよ、ならあえて帰すのもありかもしれねえ。

ホクヤの人間関係がどうなってるかは知らねえが、まともな生活送ってるはずだ。

少なくともこいつ程度の実力者なら王国には腐る程いる。

とりあえずこいつが起きるまでここに泊めておくか、起きてから色々聞き出せばいいんだ。

——チクシヨウ、まだ掴まれた部分が痛みやがる。

俺もまだまだ鍛錬が足りないな、ちよつと鍛え直すか。

ここで敵がいなくなつてからというもの、まともに体を鍛えたことなんてなかったかな。

もう十年は真面目に鍛錬してないかもな。

今回は俺の負けだ、だが次やるときは覚えてろよ、ホクヤ。

ったく、意識ない奴に何言ってるんだかな、俺もどうかしちまったのかねえ。

16. 百聞は一見に如かず

……あれ、俺いつ寝たっけ？

ていうかここどこだ、家でもないしギルドでもない。

初めて来るところ、だよな？

そもそも来る、つて表現が正しいのかもさえわからない状態だ、ガチャツと扉が開き二人の顔見知りが入ってきた。

「ホクヤ様！」

「…… ナナ」

「呆れたぜ、もう目を覚ましやがったのか」

「カイヤさん!?!」

そうだ、たしか昨夜この人と思いつきりやりあつたんだった。

それで意識を失つて、道理で体が怠くて動かしにくいわけた。

ん、昨夜で合ってるよな？あれ、何か感覚とかが全然わかんねえ。

俺は一体どれだけの間気を失っていたんだ？ここに俺はどのくらいの間いたんだ？

「そう身構えんな、もうお前と戦う気なんてねえよ」

あれから俺はどうなったんだ、まさかここはまだローグ街で俺は人質としてここに捕らえられてるのか!?

それとも違う目的が、なんて考えてたらナナが思いっきり抱きついてきた。

「よかつたツスよホクヤ様、ボスのアホウが手加減もなしにこんなにするからもう、心配で心配で」

「誰がアホウだ、こら、クソチビ! ってなわけだ、ホクヤ。どーやら俺の勘違いだったみたいだけ、なんか悪いな」

「あ、いえ、俺はいいのでとりあえずナナの頭から手離してやってください。変な音しますし」

「チツ」

いや、気を抑えるだけじゃ意味ないと思いますよ、ていうかあんたさつきまで気使ってたのかよ!?

「あうあう」と頭を押さえながら涙目でナナはふらふらと安定しない足取りで部屋をウロウロしている。

「とにかくだ、侘びと言っちゃなんだが、風呂入ってくかい? あの馬鹿が言うには元々それが理由なんだとか」

「マジっすか!?!」

そうだった、俺たしかナナにローグ街一の風呂に入らせてもらえるという約束で来たんだって、しかも大浴場！

これは期待できる、疲れ切った体にはちょうどいい。

そういえば、傷が治ってる。

あれからどれだけ時間が経ったかわからないけど、かなりボロボロにされたのにもうほとんど痛くないし目だった傷もない。

もしかしたら傷は初めからなかった、いや、そんなはずねえし。

まあいいや、とりあえず風呂に入れるんだ！

「ウチの地下に偶然あったんだ！天然の大浴場さー！」

「ぐぬぬぬぬ、私も行きたい、行きたいけどこのホクヤ様の汗と涙と血と成分の混じった布団から離れられない!!というか離れたくないツス!!」

「一緒に入るつもりだったのかよ?」

いくら小さいといえど、混浴はさすがにマズイだろ。

何故か涎を垂らして幸せそうなナナを放置して部屋を出る。

ていうかここナナの部屋だったんだ。

俺はカイヤさんに案内される形で家の中を歩く。

しばらくするとそこそこ広い脱衣所に到着し、二人で服を脱ぐ。

「おめー、中々イカすモン体に描いてるな。イイね！」

「あ、これ俺の一族の印みたいなもんです」

そうだ、いつだったか忘れたがこの世界に刺青の文化がないらしく俺の左胸から二の腕の刺青に対してはこういう反応が多い。

まあ、故郷じゃ成人したら家族のシンボル、いわゆる家紋を体に刻みつけて家族を支え代表するという文化があつたからな。

大抵の人は何らかの刺青を挿れている。

重い鉄の扉を開いた先には大量の湯気、そして目の前に広がるのはこの国に来て一番デカイサイズの風呂!!

まさに大浴場!!

「お、おお!!」

「スゲーだろ！俺が整備する前まではここまで綺麗じゃなかったが、今じゃ金取れるレベルになっちまったわけだ！今回は特別に無料だ、存分に浸かれホクヤ！」

「ありがとうございます!!」

ヒヤッホー！テンション無駄に上がってキタア!!

しかし、マナーは守らないといけないので走りたい気持ちを抑える。

体を軽く流して足からゆっくりと全身を浸ける。

ああ、こりや快感だわ、めっちゃ気持ちいい。

やっぱ天然モノは比べものにならないにイイ、ただひたすらにイイ!

壁を見てみると外へ通じる小さな空気口のようなものがいくつか設置されていた、おそらくあれが湯気を外に出し湿度をいい感じに保つてるんだろう。

そのあとにカイヤさんも浸かる、さすがに風呂ではサングラスをしていないようで、真つ赤になった鋭い眼光が露わになる。

全身も傷だらけで引き締まった筋肉が凄まじい威圧感を与えているようにも思える。頭に可愛らしい獣耳、背骨から生えてる尻尾のせいであまり威厳があるように思えないが、それはあくまでも俺の故郷のはなしだ。

カイヤさんは右腕を抑えながら端に背を預ける、よく見ると抑えた右腕は腫れている。た。

昨日まではあんなのなかったのに。

「時にホクヤよ、ちと提案があるんだ。もし住居がなかったらここに住まないか?」

カイヤさんが真面目な表情で告げる、そのまま俺の返事を聞かずに続けて言葉を投げかける。

「まあ、無理にとは言わねえけどな。ナナの奴があんなに嬉しそうにしてるのを見てると、ついな。あいつ小さい頃に両親にここに捨てられたんだよ」

「え」

「両親の行方はわからねえ、時期は何年か前の建国祭の時だったからその時に来た国外の奴かもしれない。どちらにしろ俺が拾っちまったからには責任持つ必要がある」

知らなかった、いや当たり前か。

俺とナナが知り合ってからまだ時間は全然経ってない。

俺はあいつのことを何も知らないしあいつも俺のことを何も知らない。

「俺も二十年くらい昔はハーレー街に住んでたんだが、親と喧嘩してな。それでここに来て自分より年下のガキどもを放っておけなくなってここに住んでる。あの人の恩恵もあつたし、強くもなれた」

「あの人？」

「ローガさん、俺の恩人だ。ま、今はここにはいないけどな」

この人にも色々あつたんだな、しかもこのローグ街は来てみるとさつきから印象が変わりっぱなしだ。

スラム街っていうから悪人が自然と集まってるのかと思えば、身寄りのない子供や訳ありの人たちばかり。

綺麗な国ほど闇が深いという誰かの言葉を思い出した、どうやらデイハルド王国も何か深い闇がありそうだ。

「嬉しい申し出ですが、俺はもうハーレー街に家があるんで。友人や師匠達もいます、あの関係を絶つわけにはいきません」

「……そうか」

カイヤさんは一瞬だけだが、視線を動かした。

心底残念そうな、そんな感じだ。

「ま、無理は言わん。来なくなったらいつでも来い、風呂も開放してやるし、ナナの奴も喜ぶ。俺もお前を気に入った、いつか酒でも飲もうや」

そう言葉を残してカイヤさんは大浴場から先に出て行った。

俺も後に続くようにして風呂を後にした、もう少し入っていたい気持ちもあったのだが、気分が変わった。

もう少しここを知りたい、実際にローグ街を歩いて人と話してみたい。

アレンから聞いた話と食い違いがある、そこに大きな溝を感じてしまうのだ。

決して埋まることのない大きな大きな溝を、長い歴史の溝があるような気がしてならない。

俺が脱衣所を出るとナナが笑顔で待っていた。

「ホクヤ様！」

「ナナ」

「でゆふふ、風呂上がり風のホクヤ様だ。中に入りたかったけど、私我慢しましたよ、決してボスが怖かったとかおやつ抜きを避けたかったとかそんなんじゃないツスよ、でゆふふ」

俺は嬉しそうに抱きついてくるナナに何て声をかければいいのかわからなかった。なのでとりあえず頭を撫でる、なんか小動物に見えてきた。

「はわあ〜」

「なあナナ。またさ、今度ここを案内してもらっていいか？」

「へ？」

そう、さつきまで忘れてたのだが師匠と特訓をするという約束を思い出した。

なので俺はとりあえずギルドに行かないといけない、どのくらい寝てたがわからないが早く行くことに越したことはないし。

「は、はい!!」

ナナは元気に返事をする。

こんな明るい子が、ねえ、俄かに信じがたいかあまり詮索するのもよくないからな。今はこれでいい、今はギルドの皆と楽しく過ごして俺の思うがままに生きればいい。そう思わされたのだった。

あと、俺はどうやら昨夜から昼まで寝てたらしく戻ったらちよつと心配された。

ミカに至ってはおろおろの度合いが越えてしまっており、テンパってた。

シヤナはどうやら朝から俺の家に張り付いてたらしく（ストーリーカーかよ！）何故家にいないかと問われまくれ、師匠はやっと来たかどめっちや嬉しそうだった。

これからはきちんと時間の配分に気をつけよう。

俺は師匠に連れられて国外の師匠の家に向かった、いよいよあの最強の男による師事（という名の地獄？）が始まる！

17. Doughbus Woobar's Camp

!!

いよいよ師匠との修行が始まったわけだが、あの人が規格外すぎて色々についていけない！

あの人ホントに人間なんだよな!? ってくらいの化け物っぷりだ。

修行内容自体はいたってシンプルだ、師匠の出した課題を大会までにこなすこと。

課題はいくつかあり、全部が今の俺では無理難題、いや、これホントにクリアできるの? って内容しかない。

一応期限は次の大会までに、クリアした課題からステップアップして更に難易度を上げることによって俺の得意不得意分野を見極めるらしい。

たしかに合理的で理にかなってはいるが、修行開始から五日目経った今でもクリアできるところか進歩した実感すら感じられない！

ちなみに与えられた課題は十ある。

課題その一、パンチによる遠距離攻撃。

これに関しては内容からツツコミたくなった。

「あの、師匠。確認いいですか?」

「おう、いいぞ!」

「……パンチって近距離攻撃ですよ、なのに何で十メートル先の的を狙うんですか!?!」

「?何言ってるんだ、パンチって飛ばして撃つものだろう?」

「飛ぶかあ!」

いや、マジこの人何言ってるの!?

とりあえず師匠にお手本を見せてもらうことにしよう。

イマイチ趣旨が理解できない上に実際に見てみないと何も始まらない。

というわけで、師匠は十メートル先の的めがけて右ストレートを放つ。

すると、何ということでしょう。

師匠の拳からブオオオ!!と風圧のような音が鳴ったと思えば、的は中心から亀裂が走り、粉々に砕け散りついでに支えにしてた岩までもが粉々になってしまった。

しかも、この人は気なしでやってのけたよ、おかしいだろ!?

「な?」

な?じゃねーよ!

たしかにできるようになったら便利そうだけど、普通に使いそうだけど！

「ちなみに俺はもつと離れた所からでもできるぞ！」

そんなことは聞きたくないな！

課題その二、デイハルド王国外周マラソン。

まあ、まだマトモだと思つた俺が間違いだった。

まさか海までコースに入つてたとは、まさかタルカツタ山を全速力で登る羽目になるとは！

そう、これはデイハルド王国に沿つたコースをただひたすら走つてタイムを計るというモノだ。

山に海とコースにおかしなモノもあるが現実には非情だ、これをやってのけると言うのだ。

ちなみに初回タイムは三時間ちよつと、師匠は十五分。

おかしいよな、明らかにおかしいよな！

多分これが一番時間のかかる課題だな、体力も使う。

最終目的は師匠と並走しながらゴールすること、無茶苦茶だった。

課題その三、師匠のサンドバッグ。

もちろん師匠は手加減してくれて気を使わないってハンデはあるが、その威力は馬鹿

にならなかつた。

気がなくとも威力はカイヤさんのパンチを普通に越えていた。

俺はそれを気を纏わせてただひたすら防ぐというものだ。

「ダメだ！そんな気じゃ一時間もたないぞ！」

「そ、そんな気？」

「そうだ！もつと練り上げる感じで、こう全身を覆う鎧を思い浮かべるんだ！」

もう一つわかつたことがある、師匠は感覚派だ。

たしかに気はイメージとか感覚に左右されるみたいだが、師事する側がこれじゃわかりにくい。

「お前の器ならもつと多くの気を使えるはずだ！放出した分体の中の器に余裕ができて、そこでさらに多くの気を練るんだ！それでいて外に出した気は練り固める感じで濃密にだ！どンドン殴るぞー！」

「ちよ、タンマああああああ！！」

「タンマなし！」

俺はこの課題で何回気絶したかわからなかつた。

課題その四、師匠の家の家事。

……
つてちよつと待てーい！

「これは必要ないですよね!? 明らかに必要ないメニューですよね!」

「必要だ! 何故なら俺の家にあるモノは全て特注品で十キロ以上はある代物だ! お前の体は家事スキルと共に鍛えられる!」

「なん、だど!?!」

課題その五、気纏法基礎。

これは課題というよりも割とまとめた修行だ。

気纏法、気による近接格闘による戦闘方法だ。

どうやら俺は気を形にしたり複雑な操作が苦手らしく、これがいいという師匠の判断だ。

掌から放出した気を剣状に変形させる気剣術というのもあるらしいが、俺は形にすることができなかった。

どうしてもぐにやぐにやの鈍になってしまう。

師匠も気剣術はそこまで得意ではないらしいので丁度良かった。

「ま、誰にでも得意不得意はある。ちなみに大会では気剣術は武器にカウントされないぞー!」

「マジっすか」

となると使ってくるやつがいるかもしれないな。

とりあえず俺は気纏法に集中しよう。

やり方は至ってシンプル、体から溢れ出る気を集中させ攻撃や防御、必要に応じて気を移動させるというものだ。

俺もそこまで気による力の移動は必要だと思っていたため良かった。

実戦あるのみなのだが、師匠はどうやら俺とは大会で戦いたため相手にしてくれない。

代わりにやって来たのが……

「甘い！その程度で妾とやろうなど失笑！」

「ちよつとは手加減してくださいよ、マラナ王妃」

「問答無用！弱者に興味はない、故に妾はドーバス様と結ばれる運命にある！」

「いや、それはおかしい」

そう、まさかのマラナ第四王妃様だ。

いつの日かこの場所までバレてしまったらしく、本日も宮殿を抜け出して来てしまった、国外に。

練習相手になってくれるのは有り難いのだが、超強い。

この人ホントに王妃なの？ってぐらいだ。

まだ本気は見たことないが、全然勝てる気がしない。

しかし、この課題のクリア条件がマラナ王妃に勝つことなので負けっぱなしではいら

れない！

「もう一回お願いします！」

「良からう！弱い男に興味はないが根性のあつて熱血感溢れる男は好きじゃ！故に妾はドーバス様と結ばれるべきなのじゃ！」

「だからなんでそうなるんだよ」

この人が来てる間は師匠はツツコミに回つてしまふ、あの師匠をここまで困惑させるとか。

色んな意味で強いよ、マラナ王妃！

課題その六、気配察知。

まずは目隠しをする、そしてちよつと離れた位置にあるUMAの巣に投げ込まれる。

そこでUMAと戯れる、うむ、かなりキツイよ！

ホントに目が見えないから、しかもUMAつて気が必要最低限しか出てないから動きが読みづらい。

師匠がいうには気だけでなく、空気の微妙な変化や聴覚、嗅覚、感覚で感じる訓練らしい。

ていうか数が半端ないので、四方八方から攻撃が飛んでくるのよ！

最終目的は目隠しした状態で一度も攻撃を受けずに奴らを潰す、シビアだ。

課題その七、買い出し。

いや、だからちよくちよくおかしいから!!

修行と称してこき使うのはホントやめていただきたい!

しかも食糧が大半でそれ以外全部酒かよ、無駄に重いし。

課題その八、筋トレ。

一番無難でシンプルなトレーニングだったが、数が尋常じゃない。

腹筋五千、スクワット五千、腕立て五千、反復横跳び五千、とその他のメニューも何

故か五千になってる。

ちなみに師匠はこれを毎日五万近くやってるらしい、ヤバイ。

課題その九、謎の気の引き出し。

これがある意味では一番苦勞している、カイヤさんと戦った時も少し出た気がするの

だがあれ以来中々出ない。

というか今まで自分の意思で出したことがないから困っている。

「気合が足りないんじゃないのか?」

「そんなものですかね?」

「そんなものなんじゃね?」

とまあ、こんな感じなので変化がない時は別のメニューを行っている。

できないことを何時間しても時間の無駄である。

時間は有限、できることをどんどんしていかなないと強くなてなれない。

ちなみに別メニューとは何トンあるかわからないくらいの大岩を体に括り付けて五メートル走をするというものだ。

結構辛い。

課題その十、ひたすら気を放出する。

つまりは気の底上げだ、ひたすら気を放出してギリギリ限界まで絞り出すことで気の器が大きくなるらしい。

本当かどうかはわからないが師匠はこれをして今の自分を手に入れたとか何とか語っていた。

しかし、これがまたかなり辛くしばらく疲労困憊して動けなくなることが多い。

このメニューには自分自身の限界を知り戦闘で扱う気の配分を己の身に染み込ませるというのにも兼ね備えられている。

昔は酒でよくやったのを覚えてる、それと同じようなものであろう。

そんな感じでこれを基本一日でやっている。

一日このメニューを行うことでかなり上達するとのことだ。

間違っていないが、オーバーワークだと感じたりたまにこき使われてるのでは？と

いう感覚が拭えない。

「大丈夫だ！問題ない!!」

…… とりあえず今は師匠を信じることにしよう。

筋肉痛とか疲労は凄いが、風呂に入って寝たらほとんど治っている。

師匠曰くこれも気による作用らしい。

とりあえずこんな感じで俺の修行の日々はしばらく続く。

もちろん傭兵業とタルカツタ山に金銀銅を掘りにも行つてる。

シャナも襲ってくるし、何故か最近ナナが夜になるとウチにやって来る。

ていうかお前何で俺の家知ってるんだよ！

「愛つて素晴らしいツスよねー」

うん、怖い。

俺は女つて生き物に対して小さな恐怖心を抱いてしまっていた。

姉貴の影響かもな、普段から追い回されてトンデモ兵器を食わされたし。

あの日々が少しだけだが懐かしいな、と思える日が来るなんてな。

俺は風呂の中で煙突を見上げてそんなことを考えていた。

…… 湯気の昇る先、煙突の外から見覚えのある人影が見えたのは気のせいだと思

たいものだ。

18. デイハルド王国での日々

修行が始まって一ヶ月、未だに俺のパンチは飛ばない。

気を使えばいいのでは？と思つてやってみたがあまり結果は変わらず、空気で散つてしまった。

だが、少しだけが地面に効果が現れ始めた。

なんと、パンチを打つたときに数センチだけだが、車が通つた跡が残るようになったのだ！

大きな進歩である、外周マラソンはコースを覚えてしまえば後はひたすら走るだけなので最初に比べたらまだ楽になってきた、ちなみに現在の自己ベストは二時間五十分だ。

少しずつだが成果が出てる、師匠のパンチは相変わらず威力がおかしい。

何か日に日に強くなつてる気もする、気絶する回数はあまり変わらない。

家事も慣れてきた。最初料理を出したときはいらないと食べるのを拒否されたが最近では食べてくれてる、あまり美味しそうな顔はしないが。

最初は辛かったモノも段々と持てるようになってきた、だつて箒が三十キロつてどういふことだよホント、まだ重いけどまだマシだ。

マラナ王妃にはまだ勝てない、勝てる気がしない、勝てないといえばUMAの巢の奴らもまだ全然倒せない。

避けるだけが精一杯である、買い出しは大体覚えた。

ていうか大抵買うもの一緒だからメモはもう必要なくなった、何の修行かは未だに理解できない。

筋トレは何とか毎日続けられてる、やはり基礎が一番だ。

謎の気は一週間に一回の頻度で出せるようになってたが、これでは意味がない。

出せるときに出せるようにならないと、大岩五十メートル走はまだ完走できてない。

気の放出は最近無駄に思えてきた、何か全然増えてる気しないし、ホントにこれが増えるか疑い始めている。

騙されてる、なんてことはないよな？

師匠にはこの俺の進歩に対して「遅い!!」と一喝されてしまった。

中々無茶を言う人である、あの人が規格外すぎるだけなのかもしれないが。

というわけで俺は最近ある悩みを抱えている。

「んう、ホクヤしやま〜」

「…… またか」

そう、二週間前くらいからローグ街に住んでるはずのナナが何故かウチに住み着き出したのだ。

いや、住むのは別にいいんだけど毎晩毎晩襲ってくるのは本気でやめてほしい。

結構怖いんだよ、牙を剥き出しにして飛んでくるとかさ。

とかいうかカイヤさん心配してなきやいいけど、許可とかちやんと取ってるのかな？

「起きろナナ、ていうか起きなくてもいいからせめて俺から離れてくれ。起きれない」

「んん、あと、あと五分」

「長いわー！」

とまあ、新たな同居人を加えてこんな毎日が日常となってきた今日この頃である。

二人分の朝食作って食って着替えて乱入してくるナナの相手をしてギルドに向かう。

今日はたしかオヤジと山を掘る約束してるからタルカツタ山に直行だな、そこから途中で抜け出して師匠の家に行こう。

最近ギルドの仕事と山掘が修行のウォーミングアップになってるんだよなあ、体壊さないか不安だ。

—— つと、今日も来たな！

「……！」

「おっと、と」

ゴオオ、と屋根の上から勢いよくサバイバルナイフ片手に飛び降りてくるシヤナの攻撃を片手で受け止める。

もちろん気を纏わせてだ、師匠のパンチに比べたら軽いが刃物は危ないからな。

「——やあ！」

「——っ！」

シヤナはそのままサバイバルナイフを振りかざし、もう片手にダガーを構えて確実に首を狙ってくる。

俺はそれを冷静に対処する、落ち着くんだ、まだ目隠しがないぶん動きはわかりやすい。

それにシヤナは俺の命を狙ってる、生半可な部位は狙わずに急所ばかりを狙う癖が幾度の襲撃に学ばされた、学びたくなかったけど！

体勢が悪く腕の防御が間に合わない、迫り来るダガーを気を纏わせた左脚で迎え撃つ。

「ッ、そう簡単にはやられないぜ」

「面白い、それでこそ殺しがいがある！」

「っーか、いい加減やめてくれない？命狙われる理由ないんだけど？」

「ほざけ」

「！」

シヤナは実に楽しそうに、めっちゃ悪い笑顔を浮かべてた。

ホントに怖いって、夢に出そうなんだけど、血の気が盛んすぎるよこの女。

ま、俺も似たような笑みを浮かべてるっほいから人のことは言えないんだけど、今日の喧嘩はそろそろおひらきにさせてもらうぜ。

俺は姿勢を低くしてシヤナのサバイバルナイフとダガーによる二刀の攻撃を避ける。

そして両腕を掴んでそのまま投げ、押し倒す。

拳をシヤナの眼前にまで持ってきて。

「まだ、やるか？」

「…… また明日殺しに行くさ」

ふう、やっと終わった。

最近やつとまともな勝負になってきたんだよな、最初の頃は俺が防戦一方だったし。

いつの間にか距離も近くなって今では少しだけ会話も交わしてる、関係は依然として最悪だが。

あとは、もう一つやることがある。

「ようよう、兄ちゃん強いねー！ひゅーひゅー！」

「嬢ちゃんも惜しかったなあ、頑張りな！」

「ホクヤー！ウチの野菜安くしとくから買っていけよ、ていうか買えコラー！」

「お前から朝からあつついんだよー！羨ましくシヨーめがー！」

そう、いつの間にか集まってきたギャラリー達の整理だ。

ていうか何でナチュラルに混じってるんですか、パイル先輩。

「あ、う、い、いつの間に」

「そうだな、お前がダガーを取り出したあたりじゃないか？ていうか離れるよ、近いわ
！」

「だ、だって人が、見てる」

コイツ、普段とのギャップ激しすぎないか？

まさかの恥ずかしがり屋だったなんてな、顔真っ赤だぞ。

「…… どうでもいいけど泣くな」

「な、泣いてないし！」

もうどうしろってんだよ、これ。

とりあえず絡んできたパイル先輩をぶっ飛ばしたいが、仮にも先輩。

ウザい先輩、めんどいが先輩、クソウザい先輩、殴り飛ばしたいが先輩なんだよ、

この人！

「お前酷くね!? ていうか何で俺の扱いこんなに酷くなってんのさ!」

「いや、だってパイル先輩だし」

「だってってなんだよー!」

うわ、余計面倒くさくなった!

※

「おうホクヤにパイル! 遅かったな、お前ら喧嘩でもしてたのか?」

「いや、こいつがあまりにもしつこかったのでつい」

「そ、そうか」

つついパイル先輩のことをこいつ呼ばわりしてしまったが、俺は全然悪くない!

この人がしつこく俺とシヤナの関係を面白おかしく聞いてくるのが悪い!

あまりにもしつこかったので殴ってしまった俺に非はあらず!!

タルカツタ山に着いた頃には俺の体に傷があり、同じくパイル先輩にも俺が殴りまくった跡があつた。

俺とパイル先輩は睨み合つたままタルカツタ山に入山し、途中で別れて掘る。

絶対に先輩より掘り進めてやる、大量に収穫してやる!!

うおおお、テンション上がってキタア!!

ちなみに俺はもう既につるさんの出番はない、もう素手で十分に掘り進められる。

硬い岩もたまにあるが、気を纏わせた拳ならば簡単には碎ける。

そんなこんだで二時間掘り進め、金銀銅を収穫し、オヤジのところへと戻る。

パイル先輩は既に戻っており、俺よりも量が僅かに多かつた。

「な、なんだと」

「フッフ、ぬははのはあ!!これが先輩の威厳つてやつだ!後輩がイチヤイチヤしてた罪は重いぜ!」

クソ、舐めてた、まさかパイル先輩が仕事できたなんて!

いっつもナンパに失敗して自棄酒してダラダラしてマクベス先輩に説教されてる、あのパイル先輩が俺よりも収穫量が多いなんて..

ドヤ顔がめつちやうざい、だからこそ認めたくない、認めんぞー!

「ぜ、絶対に認めねえ!認めてなるものか!!」

「そこは諦めて認めろ」

悔しい、俺は着替えて関所を飛び出し師匠の家に向かう。

師匠の家に着くとマラナ王妃は既にいらっしやった。

「師匠!マラナ王妃!本日もよろしくお願ひします!!」

「お、今日は一段と気合入ってるなホクヤ!」

「その心意気良し、嫌いではない！妾が相手をしてやろう、かかって来い！」
「つしやあ!!」

うし、やってやる!!

俺が駆け出すと同時にマラナ王妃は構える。

——ビキビキビキ。

拳をしつかり握って、どんな動きが来ても対応できるように気をしつかりと循環させる！

「……これは」

師匠が何やら驚いてるが気にしねえ、今は何故だかわからねえが全身から力が漲ってきてそれどころじゃないんだよオ!

全力の一撃をマラナ王妃に撃つ、王妃といえど手加減してしまえば修行にならない。本人もいつも全力で来いと言ってくれたからいつでも全力でやってる。

しかし、いつものごとくマラナ王妃は俺の一撃を片手で受け止める。

「……少しはマシになったの」

「がっ!?!」

それを軽くないなし、左の蹴りが顔面に飛んできた。

クソ、ホントにこの人王族なのかよ!?

だが、俺はまだ諦めねえぞ、すぐさま体勢を立て直すがマラナ王妃の手刀が迫る。

——速い、俺が体勢を立て直す前に既に次の攻撃のモーションに入ったのか！

と、なると、これしかねえ！

右脚を槍のように放ち、手刀と打ちあう。

気と気がぶつかり合い、火花を散らす、グ、強い！

「まだまだよ、ノオ！」

「うぎッ……！」

なんちゆう、動きを、この王妃様は！

手刀で俺の右脚を押し潰してそれからそれを軸にして一回転したと思えば俺に向かつて左の踵落としをするなんて！

人間の、動きじゃねえ！

「今宵も妾の勝ちじゃの」

「チクシヨ！明日こそは、明日こそは絶対勝つーっ！」

「ホホホホ、その意気じゃ若者よ！精一杯修行に励め！」

さらば！と言ってマラナ王妃は空中を飛び、いや、空中を蹴るように跳びはねながら王宮へ戻って行ってしまった。

あの人、ホント王妃やめればいいのに。

「……ホクヤ」

「はい、師匠」

師匠が何やら神妙な表情をしている。

果たして何かあったのか、もしかして何かやらかしたか!?

「マラナ様のパンツ、何色だった?」

「知るかー!」

19. 最悪の再会

本日は何故か仕事がないため午前中は暇になったので雑貨屋に行くことにした。

ギルドの皆も騒ぎまくって酒飲みまくってる、それでいいのか傭兵よ。

金も貯まってきたし、気になる物も増えてきたからこの機会にと師匠の家に行く前
と思いいハーレー街にある行きつけの店に到着する。

えっと、紙の書物のコーナーは、っと、ここで、あつたあつた。

母神物語くブルーアース伝説くだ。以前アレンから話は聞いていたものの買えずに
いたからこの機会に買って読んでみよう。

アレンから半分くらいネタバレされてるが、実際に読んでみるとまた違った観点から
見ることができるかもしれない。

まあ、個人的に興味もあるからな。この国の成り立つ以前のこの出来事とか、この
星の起源に関わるとか関わらないとかの内容みたいだし。

それと、煙管と他には、風呂用の水と食糧と酒、と。

そういえば今日はまだシヤナが来てないけど、荷物を運んでる時に襲撃とかなるのだ

けは勘弁願いたい。

ま、あいつ変なところで律儀だから襲撃するタイミングは見ているみたいだけど。

それはそれで常に監視されている気がして落ち着かないんだけどね。

何事もなく買い物を終え、家に戻る道中もシャナの襲撃も何もなかったので無事に戻ることができた。

「あ、ホクヤ様おかえりなさいませー！」

「ビシッ！と右手を額に当ててかしくまるナナ、そうだったこいつまだいたんだった。

「ただいま、今起きたのか？」

「実は朝が苦手で」

「なら無理せずに寝とけよ、多分俺しばらく戻らないからさ」

これから師匠のところに行かないといけないし、そろそろお帰り願いたいのでカイヤさんのところへも行きたい。

いや、いるのはいいんだけど何でこっちにいるかとかの理由を知りたい。

ナナは何も言おうとしないから、あの人のところに直談判しにくしかないというわけだ。

その本人は既に寝てしまったようでしばらく起きることはないだろう、ていうか早いな。

俺は買った食糧品や水や雑貨を整理してから家を出る、あ、そういえばあれ買い忘れてたな。

もう一回雑貨屋に寄ってから師匠のところに行くか。

まあ、後でもいいんだが気分の問題だしな、疲れた後に行くのもめんどくさいというかだるいというか。

「——おい！」

「ん？」

誰か、というかシヤナに呼び止められた。

珍しいな、俺に一声かけてから何かアクションを起こすなんて。

「そう身構えるな、今日はオフだ」

「オフって、ん？隣の方は——!?」

こいつは!?何で、何でこいつがシヤナと一緒に!?

そう、オフと言って普段とは違うラフな服装に武器を装備している様子も見られないシヤナの隣に立っていた人物は俺が忘れようにも忘れることのできない人物だった。

一瞬見えなかったが、シヤナの方に向きをしっかりと向き直すことでやつと目に入れることができた。

あの、忘れもしない忌々しい男の顔を。

「あ？何だオマエ」

「待ってくれ兄ちゃん、こいつは敵だが敵じゃない」

「いや、言ってる意味わかんねーよ」

まさか、この人がシヤナの兄だったのか。

他人を見下したような冷たい視線、美しくもくすんだ銀色の髪を荒々しくカットしたような、それでいてどこか整っている。

そう、俺がデイハルド武道大会の予選で負けた60番の男がそこにはいた。

「……なあ、シヤナ。なんか俺すげー睨まれてないか？」
「？気のせいだろう」

今戦って勝てるのか、いや、まだ俺の実力はまだまだだ。

こんなところで勝てるような相手では決してない、というかあいつは俺のことを覚えてないのか？

それはそれでちよつと悔しいぞ。

「おい、お前大丈夫か？」

「いつも通りだけど？俺はいつも通りだぞ、シヤナ」

「そ、そうか」

落ち着け俺、こんなところで争ってもシヤナまでいるんだ。

俺が負けるのは目に見えている、気を抑えろ抑えろ、笑顔で、笑顔で!

「ド、ドーム。ホクヤ・フェルダントデス」

「お、おう、シャナの知り合いみたいだな。はじめまして、兄のシャドル・ポスケスだ」

「は、じ、め、ま、し、て!!」

「痛い痛い痛い!?!ちよ、テメ、何か力強くしてないか!?!」

おっと、いけないいけない。

握手を求められて返したらついつい力を入れてしまった。

彼、シャドルには悪気はないんだろうけどそれでも力を抑えることができなかつたよ。

今思えば当然だな、俺もあそこで予選で当たった奴の顔を覚えてるかとか聞かれると余程の試合かインパクトある顔をしてない限りノーと答えるだろう。

それと同じ感覚なんだろう、同じ、感覚!

「な、なあ、いつもシャナが世話になつてゐるみたいだしそこで昼飯でもしていかねえか?」

「食事、か」

「オイお前さつきから態度が露骨過ぎんだろオ! いい加減にしねえとぶつ潰すぞ!」

「人の獲物を取らないでほしい」

「テメエら一体どういう関係なんだよオ!？」

命を狙って狙われる関係ですが何か？

そういうわけでシャドルの厚意に甘えることにして彼ら兄妹の行きつけの店で奢ってもらえることとなった。

人間としてはできてるんだなこの人、何か無性にイライラしてくるのは何故だろうか？

「そういえば、お前今日は仕事はないのか？」

「生憎と俺も午前はオフだよ」

「ほう、ならば今のうちにその首頂戴しておいた方が良かったか」

「そう言うのやめろよ、どうせ今日はやる気なくせによ」

そう、彼女もオフなのだ。

やる気もないのに喧嘩売られても買う気にもなれない、ていうか萎える。

「つたく、テメエらホントどういう関係だよ。理解できねえ」

「まあ気にするな。アタシはこいつの首さえ手に入ればそれでいい」

「……おいホクヤだったか、一体何をしでかしたんだ？」

「身に覚えがない」

まあ、お陰で奇襲対策付いたり、背後からの攻撃に瞬時対応できるようにはなったこ

とに關しては文句はないが。

「そうこうしていると店員さんが注文を訪ねてきたので適当に応えておく、これ結構美味そうだな。」

「これもついでに頼もう、そして美味しくいただこう。」

「それで、お兄さんはたしか警備隊の人なんでだよな?」

「……もう喧嘩腰なのはツツコまねえが、よく知ってるな。一応前線には出てるし、敵地視察にも行くことが多い。ていうかお兄さんって呼ぶな」

「ホント、まさかスピードだけが取り柄のお兄ちゃんが去年と今年の武道大会で2位を取るなんて誰も思わないよね」

「2位だと!」

「胸ぐら掴むな! 喧嘩売ってるのか、コラア!」

「そうか、この人が2位か、準優勝か!!」

「なら俺が勝てなくても仕方なかったわけだな、予選の相手が悪かったから俺は本戦に行けなかったことでもいいんだな!」

「つたく、思い返せばさつきから! シャナの知り合いだからって穩便に済ませようと思ってたのによオ、もうこの場でぶち殺してやるオか!」

「上等だ! やってやるよ!」

相手にとって不足なし、勝てる見込みはないが勝つことが目的ではないのだ！
パキパキ、と腕を鳴らしながら同じテールブルでにらみ合う。

バチバチバチバチ、と互いの瞳から火花が飛び合い、一触即発の状況が生まれる。
相手の方が気の総量も上、戦闘経験も負けている。

———けど、やる気と気合じや負ける気がしねエ！

ゴオオオ!!と俺が拳をふるうとシャドルもアクションを起こした。

※

「……それでその有り様ですか」

「まあ、うん」

その後、店にいたゲルターさんからお叱りを受けて喧嘩両成敗という形で決着はついた。
た。

ていうかゲルターさん強すぎだろ、なんでシャドルのことをあんな赤子の手をひねる
ように扱えるんだ？

俺も手も足も出せなかつたし、シヤナに至つてはいつの間にか消えてたし。

とりあえず無駄に疲れた。

「ちよつと寝るわ、一時間経ったら起こしてくれ」

「そんなこと言わずに一緒に寝ましようよ〜！」

「お前さつきまで寝てただろ」

「やだなく、意味深の方ツスよ☆」

「却下だ!!」

一線を越えてはならない！決して越えてはならない一線は越えないぞ!!

五つも年下なんだ、手出したら俺完全に犯罪者だから！

とりあえず落ち着こう、それで寝るとは言ったが気になる。

母神物語、少し読んでみることにしよう。

むかしむかし、それは、1,000ねんいじょうむかしのおはなし。

あるひ、このせかいにぼしんさまがまいおりました。

みどりおおくしぜんのおおかつたこのほしでしたが、いきものはいませんでした。

ぼしんさまはふびんにおもいふしぎなちからであおいほしからすうしゆるいのいきものをつれてきました。

そして、ぼしんさまのふしぎなちからでいきものたちはしんかをしてことばをしゃべるようになりました。

あるひのことです、ぼしんさまはすがたをけしました。それでもぼしんさまのかごは

きえることはありませんでした。

のこされたいきものたちはしんかをくりかえしかえしかえしかえしをふやしてだいちをしいしました。

にそくほこうができるようになったいきものたちはたたかいをくりかえし、むらをつくり、こつかをつくりました。

ぼしんさまのぞんだせかいになったのかはわかりません。

ですが、われわれはぼしんさまのかえりをまちいつしかほんとうのこきようであるあおきほし、ぶるーあーすにかえられるひをいまでもまちつづけているのです。

著者、記載なし。

一部史実あり（全てが真実とは限らない）

……こいつは、中々すごいな。

絵本とか童話だとかレベルじゃない、曖昧な部分も多いが色々気になる部分の方が多い。

特にタイトルにあるブルーアース。

これはこの星以外の星という捉え方でいいのか？

そうでなくてもすごいロマンを感じられる！

まだわからないことが多いけど、俺も行けたらいつか行ってみたいな、母なる大地ブルーアースに。

読み終わって気がつく、いつの間にかナナが布団に入り込んできていた。

仕方ないな、起こすわけにもいかないから静かに師匠のところに行こう。

なんだかんだでこいつとの同棲生活が楽しくなってきたている自分があるな。

まるで妹みたいだな存在だな、でも一線は越えないぞ、絶対に！

20. 巨大UMA現る

ギルドに向かう道中、マクベス先輩が慌てた様子で走っているのが目に入った、どうしたんだろうか？

とりあえず事情を聞いてみよう。

「マクベス先輩！」

「！ホクヤ、ちようどよかった！応援を探してたんだ！」

「応援？」

「ああ、実は……」

マクベス先輩の話の話を要約するとこんな感じになる。

何故か朝からハイテンションだったオヤジが普段よりも二時間早くタルカツタ山に掘りに行く、ちよつとした冒険心があったのかしらんがあまり手を出していなかった部分に手を出して掘り進めてみる、そしたら案の定金銀銅がザックザク！

朝から付き合わされている先輩方と一緒にテンション上げて掘り進める、調子に乗ってウハウハした状態がしばらく続く、巨大なUMAの巣に入ってしまった刺激してしまい怒らせる。

UMAは予想を遥かに凌ぐ強さでオヤジは今先輩達を逃して一人で戦っている、そこで戦闘がそこまで得意でないマクス先輩は誰かを探しにアルドニア広場を走り回っていた、と。

「ていうかマクス先輩も作業に参加してたんですね」

「それは違う、無理矢理連れられたんだ」

「す、すみません」

ホントすみません、だから凄んで睨むのやめてください!!

結構怖いんですし、迫力あるんですから!!

「パイル先輩はいないんですか?」

「今日あいつは国外に遠征に行ってる」

チツ、こんな肝心な時に使えない先輩ったら、ホント存在意義なんてありやしねえ。

ビット先輩は基本昼からギルドに来る人らしいので（それまでは寝てるらしい）応援は望めない。

ていうか俺の知ってる先輩方碌でもない人達ばかりじゃねえか!

「俺は怪我人の治療に専念しないといけないから頼まれてくれるか? ミカちゃんも動揺してて仕事が手につかないみたいなんだ」

「わかりましたよ。ちよいとオヤジの救援に行ってきます、ミカとギルドの為にね!」

「頼んだ」

マクベス先輩が手を出したのでハイタッチをする、すみませんマクベス先輩。

あんたは碌でもない先輩じゃなかったですわ。

とにかくだ、タルカツタ山の新しい穴に向かって進めばいいんだな。

走ること数分、辿り着いて見てみるとアホでもわかるくらいの新しい大穴が開かれていた。

さては昨日そこそこ強い酒でも飲んだな、そうでないとおの酒豪のオヤジが酒に影響されるなんて中々ないからな。

ていうか何でほぼ数時間でこんなに掘り進めれるのあの人つくくらい穴深い上に入り組んでるんだけど。

これ、ホントに辿り着くのかな？

※

…… やつちまつたな。

まさか、ここまで強いUMAがこの近辺をウロついてやがったとは。

オラの判断ミス、というか失態のせいで息子達を危険に晒しちまうし、最悪だな。

オラはもう何年も戦闘はしてない。してるとしてもせいぜい追いかけることか模擬

戦とかの軽い運動程度のやつだ。

あの日から、あいつの攻撃をモロに喰らってからという日以来上手く気を循環させることができないんだよね。

それからは山を掘る日々に明け暮れて、妻は死んでしまおうし、娘は放っておいてしまった。

でも、ミカの生活を支えるためにはギルドだけの収入だけじゃ足りなかったんだ。だからオラは先代の意思を継いでこの山を掘り進めてる。

金銀銅を掘って金にしてミカの生活を支える、オラの使う金は酒を楽しく飲むだけで十分だ。

ミカがそれで幸せになってくれるってならな、親離れ上等だ。最近幸せそうになっているミカを見てるとそう思えてくるぜ。

それで娘が立派に育って一人前になってくれるならな。だが、コイツはちとヤバイかもな。

数年分のブランクにあの巨体、今まで見た中でも一番の大型だ。

八メートル近くある巨大な体躯のUMAはギラリと牙を光らせこつちに突進してきやがった、クソ、この一撃が重い重い！

オラの山を掘ることを可能にした鋼の爪でも受け流すのは少々難があるぜ！

しかも、奴はさつきから同じ行動しかしていない。

それでも、オラはその一挙一動についていくのに精一杯だった。現役時代だったならこんな奴！

あいつらは無事に逃げたみたいだな、へへ、よかったよかった。

怪我人がいたかもしれない、すまんがマクベスに任せるしかねえな。

あーあ、もつとあいつらの恋路をネタにいじりたかったなあ、それだけがオラの楽しみだったのによ。

もう、足が動かないのにUMAの牙が目の前に迫ってんだよ。

へへ、思えば悪くない人生だったな。

死に際はあまりカッコのつくもんじゃねえが、まあいいだろう。

『お父さん！今日は私の誕生日だよ！』

まあ、いいだろう。

『まったく、しっかりとしてよね駄目父。マスターなんでしょ？』

まあ、いい、んじゃないのか。

『強く、なりたいです！』

……心残り、というかやり残したことあったな。

そうだよ、オラがあいつを連れてきたんだろ？

ここに來たら強くなれるって、ならよ、きつちり責任持たねえとなあ！

「ッ！」

「すまんなUMA、オラまだ死ねないわ！負けてられないんだわア!!」

動かない足？そんなのは甘えだ、気合が足りないだけだ！

死に際？馬鹿野郎が、残された者の気持ちも少しは考えろよな自分！

幸い攻撃手段の爪は動く、不安定な気だけど後少しはコントロールできる。

まだ、まだオラの人生こんな野郎に奪われるわけにやいかねえんだよ！

「———お、おぉ!!」

「ギユララララ!!」

足がこれ以上動くなと悲鳴を上げるが、関係ない、ここで動かなきゃ死ぬんだ。

それに比べて両足なんて安いものさ。

奴は牙を立ててさっきまでオラのいたところに向かって突進してくる、地面を抉り取るとかどんな顎してんだよ、つたく。

———逃げてばっかじゃ格好がつかねえ、せめて一矢報いてやる！

爪先に気を最大限にまで集中させ、距離を縮めて、薙ぎはらう！

オラの爪は鋼鉄の如し、山を掘り進めてきた爪だ。

生物程度の皮膚に傷をつけるなんて容易いんだよ！

「ギユラ!？」

UMAの悲鳴にも似た鳴き声が空間に響き渡る、元気なもんだぜ。

チクショウ、逃げるための気を残すことを考えてなかった。

一撃で仕留められると慢心してたのも間違いか、オラも年をとった。

奴はまだまだ元気じゃないかよ、だからよ、さつきから近づいてる気。

悔しいがお前に全部任せるとするよ。

——なあ、ホクヤ!

※

オヤジの消えかけてる気の上に到着すると既に気を失っていた。

やりきった顔してるけど、こんなところで死にはさせない。

——治療、マクス先輩直伝の気による治療をオヤジに簡単に施す。

マクス先輩ほどの回復力はないが、応急処置程度には十分だろう。

「ギユラララ!!」

あれが、オヤジを満身創痍に追いやったUMAか、マジでデカイな。

師匠に毎回投げ込まれてるUMAよりも二倍近くのサイズだ。

迫り来るUMAの攻撃を避けてオヤジを安全な場所にまで避難させる。

目隠ししてなきやお前の攻撃なんて楽に避けられる。

大雑把な一撃なんて今の俺には当たらねえよ。

さて、コイツには俺の実験台第一号になってもらおう。

少し試したいこともいくつかある。

修行じゃ試せないことだってあるんだ、オヤジも連れ帰らなきやいけない、その分の余力は残しておかないとな。

巨大UMAは鋭い牙を立ててこちらに向かって突進してきた、その姿はまるで大蛇だ。

手足も申し訳程度に短く生えてるがほとんど使えないような長さだ。

じゃ、早速試させてもらいますか！

——気声波！

気を纏わせた両手を口元に当てて音とともに気を拡散させる。

建国祭の時の声屈けるという目的で使ったコイツを改良し、戦闘に使う用の気に応用させたものだ。

気というのはどうやら体を纏わせてる間は形を保ってるが、一定の距離から離れてしまふと消えてしまふ。

ならば、消える前に音の速度で放出できるのではと考えた。

それがこれだ、実は結構生物が嫌がる音を出すことに気がついたのだ。気が気がぶつかり、音波もぶつかることで奇跡が起きたというわけだ。

「ピ、ギユリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!?」

効果は抜群、スッゲー気持ち悪いくらい悶え苦しんでる。

その隙を狙い、UMAに向かって急接近する。

駆け出す瞬間、瞬間に気を爆発的に発生させることで常に気を放出させるよりも節約できることに外周マラソンで気がついたのだ。

長距離走ると体力の配分と共に気の配分も重要になってくる。

まだ完璧にはできないが、俺なりに一步一步丁寧に気を短時間で放出させる。

—— 気爆!!

「ギユリアア!」

「ツ、痛?!」

こいつは建国祭の時に仕留めたあのクソ野郎の使ってた爆発攻撃!

見様見真似だ、どうやら上手くいったようだが、こつちにまで反動がくるとは思わなかった。

まあ、たしかに手元で気を爆発的に放つんだから衝撃が返ってこない方がおかしいか。

今は小規模の爆発だったので手が痺れる程度で済んだが、奴は一体どうやってあんな大爆発を起こしたんだろう？

疑問に残ることは多いが、今は目の前のUMAを仕留めないとな。

怯みから回復したUMAが四つの目を赤く光らせてこちらに向かつて突進してくる。

——遅い、師匠やマラナ王妃の動きに比べて随分と遅く感じられた。

しかも攻撃が一直線上だから読みやすい。

ひよい、と難なく攻撃を躲して奴の頭部に全力の蹴りで蹴り上げる！

「ギュララララ!!」

「まだまだあー！」

ジャンプ、そこから蹴り上げた頭部を両手で掴み地面に向けて叩きつける！

UMAは顔面から刺さり、ピクリとも動かなくなってしまった。

「——さて、オヤジを連れて帰るか」

まだこいつが死んだとはとても思えないが、そこまでする必要もないだろう。

次喧嘩売られた時はまた買うだけだ。

「おう、随分派手にやったじゃねえかよ」

「……起きてたのかよ、オヤジ」

この人の回復力には呆れる、俺が応急処置したとはいえ意識を取り戻すとはな。

「へへ、嬉しいぜ。息子が強くなっていく様を眺めるのはな」

「俺はまだまだっスよ、この程度で満足してちや師匠には一生届かない」

「言うねえ」

「とりあえず戻りますよ、ミカも心配してるみたいですし」

「そうか、なら早く戻ってやらないとな。ていうかまだ歩けそうにない、肩貸してくれ」

「はいはい」

ホント、この人には敵わないなあ。

あのUMAが全快状態だったら、俺一人じゃこんなに余裕で終わらせることができなかっただろう。

この人が善戦したからこそその勝利なのだ。

いつか、あのレベルの奴を一人で倒せるようにならなきゃいけない。

そうでもしなきゃあの人たちには勝てないだろう。

これからも修行に励まなければならぬ、もつと、強くなるために。

ちなみにギルドに戻ったらミカのお説教が待ってました、何故か俺まで正座させられることになった。

解せぬ。

21. ホクヤ、故郷を思い出す

巨大UMAとの決戦から一週間、オヤジは一日も経たない間に復活しマクベス先輩に呆れられ、ミカと追いかけてこするという日常に戻っていた。

師匠の修行内容も段々ともない方向にエスカレートしてきた。

マラソンでは海で泳ぐことを禁止させられてしまい、水上ダツシユを強要されている。いや、おかしくね?と思つたのは最初だけで最近ではコツを掴んでしまい少しずつできらようになってきてる自分が怖い。

マラナ王妃とも何とか渡り合えるレベルにまでなってきたが、未だに一本を取ることができない、マジでおかしいくらいに強すぎるよこの王妃様。

パンチも日に日に飛距離が伸びてる気がする。まだ的には届かないけど、一メートル近く飛ぶようになった。

気声波の要領で気を纏わせて殴れば容易にできそうだけど、音速パンチとか不可能だから地道に頑張ろうと思う。

師匠ならできそうで怖い。

シヤナもいつも通り襲撃してくる、気のせいかもしれないがあいつも日を増すごとに強くなってる気がしてならない。

結構本気で相手してるのに今までのようにハッキリとした勝敗結果よりも引き分けが増えてきている。

ナナも未だに我が家に居ついている、ホントに彼女をこのままにしてもいいのだろうか？

カイヤさん心配してないんだらうか、あの人多分こつちに来ることもないだらうかなあ、仕方ない。

久々に行くか、ローグ街に。

「どうかしました、ホクヤ様？」

「ああ。前にナナがローグ街を案内してくれるって話なんだが、これから行かないか？」

「デートですね！もちろん行きます!!」

うん、思った以上にアツサリと了承してくれたな。

もつと渋ったりするものかと思つたが、特に気にするようなことでもなかったのかな？

というわけで俺とナナは久々にローグ街にやって来たわけだ。

とりあえずカイヤさんに会いたい、ローグ街ツアーはそこからでも十分なのでそうい

う方向性でお願いしたらアツサリオツケーが出た。

まあ、一人でカイヤさんに会いに行っても良かったのだが、まだ一人でローグ街を歩く勇氣がない。色んな意味で怖くて、怖気づいてるわけじゃねえぞ。

そういうわけで久々にカイヤさんと出会って諸々の事情を聞いてみた。

「あ、悪い悪い。すっかり忘れてた」

「オイ！」

本気かこの人!?

「いやすまんすまん、久々にあいつと連日で酒飲むって約束して二、三日家空けるからつてナナには伝えたはずなんだが、お前には上手く伝わってなかったんだな。そうかそうか、お前の家にいたのか」

「ちよ、あんた仮にも親代りだろ！適当か！」

「酒と昔話が弾んだだけだ、三年ぶりに会うんだからよくあることだろ！あと、ウチに門限なんざ堅つ苦しい制度は設けてねえ！」

「知るかー！」

「なんならもうそつちで何日か預かってくれよ、ついでだ」

「いや、どうしてそうなるの!?!」

なんで俺の周りにはこうまともな人が一人もいないんだ!?

ナナはナナでもっと俺の家にいれること喜んでるし！

「済んだ話だ、仕方ねえ！詫びに風呂開放してやるからそれで許せや！」

「ありがとうございます！何日でもウチで預かせていただきます！」

「やったー！」

俺のここ数日の杞憂はカイヤさんの一言で解決した。

…… そういうわけで、久々の大浴場に俺のテンションは超上がってます。

「あー、気持ちいい」

相変わらずここは湯加減といい広さといい文句なしだ。

足を伸ばして体を広げられるほどの大きな風呂つてのは未だにここしか知らないからな。

しかも今回は一人だ、こんなデカイところを独り占めできるなんて贅沢以外の何物でもない。

「ええ湯や〜」

「そうっスね〜」

「だ〜」

ホントにいい湯だ、この気持ちを共感できる奴がいるとは思わなかったけど。

以前入った時はカイヤさんとその話で盛り上がったけど、他に風呂の良さを語れる人

がいるなんてなあ。

ラナさんもいるけど、彼女はまた観点が違うみたいだからなあ。

「…… オイ、何してんだナナ？」

「何って、お風呂に入ってるだけですけど？」

ハハハ、まさか混浴することになるなんて思いもしなかったなあ。

たしかここは混浴じゃなかったんだけどなあ、おかしいなあ。

「ま、たまにはいいじゃないっすか。ホクヤ様の家じゃ一人が限界なんですから」

「そういう問題じゃねえが、もういいや」

何か面倒になってきた、とりあえず風呂が気持ちいい。

今はこの感情に勝るものはないが、せめて離れておくれナナよ。

貧相だが胸が微妙に当たってるんだよ、貧相だけど。

「ホクヤ様ってあまり欲情とかしない人っすか？」

「うーん、その表現はやめような。色々と危険だから」

まあ、俺も男だからそういう気持ちがないわけではないが、ナナに対してはそういう

感情を持ってないな。

妹みたいなものだし、恋人というよりも。

恋人、か。

「ホクヤ様？」

「いや、ちよつと昔を思い出しただけだ」

そういえば、エーナさんと出会ってフェバルになつて故郷を離れて随分と時間が経つたな。

今頃あいつらはどうしてるだろうな、あんな希望も未来もないような世界に居続ける理由もないが、いざ離れてみると恋しいものだ。

今や故郷と俺を繋ぐのはスーパ君にオカっち、ドラちゃん、メガたん、ここでは使えない故郷の金、それとあいつがくれたバンダナ。

もうあいつらとは会えないだろうな、俺がフェバルとしていつか戻ろうと思わない限りあそこへは戻れない、いや、もう二度と戻れないのかもな。

「ホクヤ、様？泣いて…」

「気にするな。何でもねえよ、何でもないから」

そうか、結構未練とかあつたんだな。

あそこに行った頃はどこかに行きたい、死んでしまいたいと思つてたのに。

戻れないことが悲しく思えてくるなんてな。

「大丈夫ですよ、今は私がいまから」

「ナナ」

「辛いことがあつたら言つてください。私はホクヤ様のことをあまり知らない、それでもかっこいいと思えるから、好きだから一緒にいたいと思えるんです。私も辛いことがあつたら躊躇いなくホクヤ様に助けを求めますから、ホクヤ様も辛くなつたらどうか私を頼つてください」

「…… うん」

「ホクヤ様ほど強くはありませんが、夜のご奉仕の技術なら磨いておりますので☆」
「俺の感動を返せこのヤロー！」

大浴場を出た後はカイヤさんにお礼を言つてからナナと一緒にローグ街を歩いた。

※

むう、今日はいないのか。

というか最近奴め、留守にすることが多くないか？

毎日奴ことホクヤの命を狙つて仕事のない日と時間をわざわざ選んで来てるというのに失礼な奴だ。

あいつとお兄ちゃんが出会つてからお兄ちゃんも様子が変わったというか、訓練の間も増やしてみたいだし。

アタシも特に仕事があるときは少ないし、昨日は隣の国まで走つてたから今日は一日

暇だ。

なのでホクヤの家に一日張つてるといふのに、中々帰つてこない。

昼飯時に離れた時に出かけた可能性がある、か。

次からは昼飯は持参して待機するようにしよう。

思えばあいつとの付き合いも長いな、出会ったときは容易に殺せたはずの雑魚だったのに今やアタシと互角にやりあえるレベルだ。

しかも最近ではあいつは武器を使わず素手でアタシと戦っている。

興味深いものだ、この短期間でどうしてあんなにも強くなれるのか。

傭兵と聞いているから仕事に行った時に最前線で活躍しているのか、それとも特殊な訓練をアタシやお兄ちゃん以上に積んでいるのか。

——ピクッ。

む、この気はあいつが帰ってきたのか、待ちわびたぞ。

しかし妙だな。気が一つではなく二つ感じられる。

誰かと一緒なのか、少し身を隠して様子を見よう。

「お前まで師匠のところについてこなくて良かったじゃないか、お陰で余計な説明しなきゃいけなかったし」

「いいじゃないツスか、どっちにしる帰る場所は一緒なんですからー！」

「まあ、そうなんだがな」

「今日は私が一番風呂もらつてもよろしいツスか？それとも昼みたいと一緒にします？」

「一番風呂は譲れないからジャンケンだ！」

「あー、後者はスルーなんですわね。さすがホクヤ様」

…… なんなんだあのクソガキは？

何故あいつとあんなに仲睦まじい関係なんだ、ていうか一緒に住んでるのか？

しかも風呂、混浴だと!?

けしからん、なんなんだ一体、何故あいつを見てるとムカムカするんだ！

ていうか距離近すぎだろ、離れる、もつと離れる!!

ていうか、なんでアタシはさつきからこんなに必死なんだ。

人の関係をどうこうできる立場じゃないというのに、あいつの命と首さえあればいいのに！

どうしてこんなもどかしいんだ!?

わけがわからん、これではアタシが馬鹿みたいではないか！

ターゲットを明日から追加せねばな、あのクソガキの命を狙う必要性もありそうだ。

「…… 何してんだ？」

「はっ!?!」

アタシの後ろに何故お前が!?

気配は完全に消していたはずだぞ!

「お前らしくないな。それともナナが一緒だから待っててくれたのか?」

「……それがあのクソガキの名前か?」

「クソガキって、まあ、そうだよ。実はちよつとある人から頼まれ——」

「コロス」

「ちよつと待てエ!」

止めてくれるな、今アタシはお前よりも奴の首が欲しいのだ。

フフフフ、お前が邪魔をするならそれで構わない。二人まとめて首を持って帰ってやろう。

「なんなんだよお前!今日は俺とやりにきたんじやないのかよ!」

「そのつもりだったが、気が変わった。お前の命はクソガキの後だ」

「戦闘のせの字も知らない奴と何をするってんだよ!」

ほう、そうなのか。

奴は戦闘ができない、つまりこいつよりも簡単に命を刈り取れる。

好都合ではないか。

「止まれシャナ!」

「無論、止まるつもりはない！アタシは日常を取り戻す！」

「わけがわからん！」

そう言っつていつも通りあいつが立ちふがる、それでいい！

お前はアタシとやり合えばいいんだ、クソガキと一緒にいるよりも合理的な時間だろ
！

…… 不思議だ、さっきまでの胸のつかえが取れた気がする。

あいつとの殺し合いを心のどこかで楽しく感じている。

奴はただのターゲット、それ以上でもそれ以下でもないはずなのに。

あいつといるときに心安らぐのは何故だろう？

アタシはこの感情の正体がわからないままサバイバルナイフとダガーを構えた。

22. ベヘモン国

「おう、ホクヤ！ちつと邪魔するぜ！」

「お、お邪魔します」

「ちよつと待て、少し待て。この流れは何かおかしい」

いや、ホントにちよつと待ってくれ。

何で寝ぼけ眼のナナと朝飯食って駄弁ってるこんな時間にオヤジとシヤナが一緒にウチに来たんだ？

ていうかどういいう組み合わせだよ、一体。何があって二人が一緒になってるかすら全然理解できない。

シヤナは普段の様子とは違う人見知りモードだし、嫌な予感しかしない。

絶対に何か巻き込まれるとしか思えない。

だって、オヤジは大体一ヶ月前にタルカツタ山で巨大UMAの巣を掘り当ててしまい死にかけてたし、シヤナに至っては俺の命を兄共々しつこく狙ってきやがる物騒な奴だ。

トラブルメーカーである二人が出会ってしまい、ウチに来る時点で何も無いことなんてあるわけがない。

「おう、うまそうだな。とりあえずオラももらうぞ」

「いや、もらうぞつてあんたな。別にいいけど」

「ア、アタシはここにいてもいいのだろうか？」

「とりあえずその武器を仕舞え、それで空いてる椅子でいいから座れ！」

仕方ない、この二人にも用意するしかないか。

「というかシヤナよ、たしかに空いてるところに適当に座れといったが、何故ナナの真横を陣取ったし。」

ほらそんな睨むんじゃねえよ、ナナ怯えちゃつてるじゃんかよ。

オヤジは飯にありつのが早いよ。俺が動くまでもなかつたよ、この人。

まあ、多めに作っておいてよかった。最近食欲と空腹が凄いから多めに作っちゃうんだよね。

「ほいじや、本題な」

「やっとか」

何故だろう、オヤジが何かちよつと顔青くしてる気がする。

「あ、ああ。実はアーサー王から直々に依頼が来てな」

レオナルドさんがオヤジに依頼？

いや、これはデイハルド王家がギルドに依頼したという解釈でいいのかな。

あの二人なら直接的な関係もありそうだけど。

とりあえずは話が進まないからツツコミは入れないでおこう。

「デイハルド王国の属国にあたるカステイルアって小国、といつても属国じゃ一番デカイんだけどな」

「そのカステイルアの隣国にあたるベヘモンで内乱が起こったんだ」

「内乱」

うわー、思ってた以上にめんどくさそうな案件だな。

たしかにこれは実力だけが取り柄で暇してる俺たち傭兵に頼むにはうってつけの仕事ってわけだ。

レオナルドさんすっかり国王してるね。

「ホントなら、ギムさんの護衛にはお兄ちゃんが行く予定だったんだけど」

「シヤドルに何かあったのか？」

もうあの時ゲルターさんに止められたときの謹慎は既に解けてるはずだけど。もしかして延長になったとか、そうだとしたらいい気味だ。ザマア。

「……その、なんというか、ね」

「言いにくいなら別にいいよ」

なるほど、それで兄が使えなくなった代わりに妹のシヤナがオヤジの護衛につくことになって一緒にいるわけだ。

まあ、そういうことか。何故ウチに来たのか何となく察しはついた、シヤナはたしかに強いが護衛というには少し向いてない。

どちらかというと言夜に忍びそのまま一撃必殺決めちゃうタイプだからな。

乱戦は不得意なのだろう、そこで護衛人数を少しでも増やすためにこつちに來たつてとこか。

「それでオヤジ、出発はいつですか？」

「察しがいいな。飯食ったら出発だ、パイルとマクベスも連れて行く」

「そういえばホクヤ様。ドーバスさんの修行はよろしいのですか？」

「あ、そうだった！」

師匠のメニューは最低毎日一回行う必要がある。

護衛中にするわけにもいかないし、何日かかるかわからないから今回は無理か？

「安心しろ、もう事前に話してある」

「早いな」

「言ったらオツケーもらえたで。だから安心してオラを守れ！」

やれやれ、何でこの人が堂々と威張ってるんだか。
仕方ない、な。

「じゃあ、俺は飯食ったんで準備しますわ。悪いなナナ、しばらく家空ける」
「いつてらっしゃいませ！私としてはついていきたいくらい寂しいですが、今回はホクヤ様のために自重させていただきます!!」

「うん、ありがたい。俺が留守の間頼むぞ」

「……これって夫婦のやり取りと捉えてもよろしいですか？」
「何でそうなるんだよ」

ハア、何か朝から疲れたな。

ていうかオヤジ、ニヤニヤするのやめてくれませんか？あと、全部食べないなら最初から食える量取ってくださいよ。

そしてシヤナ、貧乏揺りが激しくなってるぞ。床抜くんじやないぞ。
何事もなく終われば、そんなわけにはいかないか。

※

二時間後。

準備を終えて俺たちはとてつもなく暑い砂漠のど真ん中を歩きながらベヘモンへと

向かっている。

どうやらこの世界には乗り物という概念がないらしく、基本的に移動手段は徒歩と
なっているようだ。

先頭をシヤナ、その後ろにオヤジを囲うように右翼がパイル先輩、左翼には俺、最後
尾にマクベス先輩というフォーメーションだ。

所々にUMAが掘ったような大穴があり、いつ飛び出してこちらを襲ってくるのかと
警戒しながら先を急ぐ。

「オヤジ、今回の目的は内乱を食い止めることでもいいのか？」

「いんや、そっちはついでなんだ。ベヘモンの王からアーサー王への献上品があるらし
い。それを受け取るのが最優先だ」

「献上品？」

「詳しいことはオラも知らん。だが、オラ達が行く時に都合よく敵さんが現れるとも限
らない、だからそっちのことはホントについてなんだわ」

なるほど、たしかにそうだ。

そもそも国の内乱なんて毎度毎度血を流して争ってるわけでもない。

隠密にやることが多い、もしかしたら暗殺などを中心として堂々と表舞台でやってい
ると思えない。

一言に内乱といっても様々なことを考えることができる。

「だが、一泊はする手筈だ」

「そうなんですか？」

「ああ、俺は怪我人の治療をメインに動くことになるだろう。こつちの受けた依頼も同時並行ができるから俺は今回同行したんだ」

煙管を吸いながらマクベス先輩は空を見上げる。たしかに国がそんな状況なんだつたら怪我人も多いか。

「パイル先輩は？」

「俺はオヤジに頼まれて護衛と案内だ！ベヘモンには何回か行ったこともあるからな
!!」

「え？パイル先輩が道案内？」

「喧嘩売ってんのかテメエ！」

だって、ねえ。あのパイル先輩が人に道を案内するだなんて。

てつきりシャナの役割だと思ってたからな。

とりあえず各々の役割が何となく見えてきた。俺自身ベヘモンに行ったことがないから何とも言いようがないが、とりあえず今は目の前に現れた三メートルクラスのUM Aを倒すことが先決だな。

大地に四肢をしつかりと張り、唸り声を上げてこちらを睨みつけている。

——道を開けてもらうぜ、化け物！

「ツラア！」

「てい！」

俺のパンチとパイル先輩のキックがUMAの額に直撃する。

俺のパンチはUMAとの間に1.5メートル離れたところから師匠直伝の飛来パンチ！

パイル先輩は素早く移動し、そもそも前衛だったから俺よりもいい位置なのは当たり前か。そのまま跳び上がり一回転して蹴りをぶつけた。

UMAは怯み、一瞬隙が生じる。

その隙を狙って、まず俺がUMAの懐に潜り込んで蹴り上げる。

軽く浮いたUMAをパイル先輩がタツクルで遠くへと吹き飛ばす。

よく飛ぶなあ、五メートルくらい飛んだか？

「じゃ、先急ぎますか」

「だな」

「では、このまま向かおう」

このペースで歩き、俺たちがベヘモンに辿り着いたのはこの地点から四時間後の出来

事であった。

もうすっかり日は沈み、星の周囲を軌道線上を移動する小惑星（俺がこの世界に来る時ぶつかりかけたあの塊）がよく見える。

デihalド王国ではあれのことをルートストーンと呼ぶらしい。

ベヘモン国、52年前の戦争でアーサー王十二世率いる部隊に敗北し、属国となったカステイルア国の傘下にあたる小国の中の小国。

一目見ただけでは内乱が起こっているような国には見えないが、本当にここであつているのだろうか。

「お待ちしておりました」

城門を潜るとその先には一人の男が笑顔を浮かべながら壁にもたれていた。

「お前さんがベヘモンの主か？」

「とんでもない。僕はしがない考古学者ですよ、アツシユと申します。三年ほど前からゲリアノート王の側近もしております。以後お見知りおきを」

「アーサー王の代理で来た、ギムだ」

「王の遣いのシャナです」

俺たちはどうやら蚊帳の外、当たり前か。

あくまでも俺とパイル先輩の仕事は護衛である。

「ここからはオヤジとシヤナの仕事、中に入ればマクベス先輩にも仕事があるのか。」

「遠路はるばるお疲れ様です。お部屋を用意しておりますので、どうぞこちらへ」

「王は不在なのか？」

「いえ、おりますがもう時間も時間ですのでお休みになっておられます。お会いするのでしたら後日でお願いしたい」

「承知した」

俺たちはアツシユさんの案内に従って今晚一泊する宿へと向かった。

23. 内乱

翌日。

俺はどこからともなく聞こえた怒号で目を覚ました。そうか、今日は自宅じゃなくて遠出してたんだったな。

昨夜は内乱の気配なんて全然なかったけど、今聞こえた怒号と破壊音は確実に何か起こった音だ。

どうやら内乱が活発になってきているという話は本当みたいだな。

さて、とりあえず俺は起きたけどオヤジ達は起きてるのか？アツシユさん曰くここは王宮に近く安全といえは安全みたいだが、逆に危険でもある。

とりあえず服を着よう、着替えを済ませていつでも動けるようにする。まずはそこからだ。

「おい！起きてるか…！」

スパーン！と俺が着替えてる途中にシャナがノックもせず扉を開け放った。顔真っ赤じゃねえか、おい。

「……おいシヤナ、せめてノックくらいしてくれ」

「し、失礼した!」

全く、タイミング最悪だろ。こういうのをラッキースケベって言うんだったかな?

……何か扉の向こうからガンガンと何かを打ちつける音が響いてるんだけど、あいつ何してるんだろ?

とりあえずシヤナは起きたようだ。部屋はそれぞれ一人ずつ別のところで寝泊まりしたから確認が取りにくいな。気でも起きてるか寝てるかまではわからないし。

「シヤナ、他には誰が起きてるかわかるか?」

「し、知らん!」

何か怒られた、理不尽すぎやしないか?

着替えを終え、扉を軽く叩いてシヤナに扉から離れるように合図する。

「準備は済んだの?」

「……何でデコから血流してんの?」

「邪念を払ってた」

訳がわからん。廊下から外を見てみるとあちらこちらで気のぶつかり合いによる爆発が発生していた。

この辺りまで届いてはなかったが、少しずつ、少しずつとこちらに向かってくる

ようにも思う。

「シヤナ、お前はオヤジ達を起こしてくれ。俺はちよつと、殴り込みに行つてくる」
「いや、あそこに行くとか馬鹿でしょ」

「うるせえ、馬鹿でいいよ。ああいうのは力づくでもしなきゃ止まらないんだよ」

そう、ここも俺の故郷みたいにするわけにはいかない。あの戦争だつてほんの些細なきっかけが原因だつたんだ。

思い返してみればくだらないと思えるほどの、馬鹿馬鹿しい理由。

ここでの内乱の理由はわからない。だけど、止めれるものは止めてやる。

何をしてでも、絶対に！

「じゃ頼んだぜシヤナ！」

「つたく、これだから単細胞は！」

階段から行つてたら時間がかかる、もうこつからでいいから行こう！

窓を開いて飛び降りる、屋根から屋根を飛び氣のぶつかり合いの激しいところにまで一気に移動する。

こんなの、デイハルド王国外周マラソンに比べたら大した距離じゃない！

———そこか！

見れば五人くらいの男女が殴り合いをしていた。もちろん、気を纏わせた全力の状態

で。

しかも、相手を全力で殺そうと本気の殺意を持って武器まで使ってやがる！
もう既に倒れてる人もいる、犠牲になった人達もいる。

これ以上はさせねえ、俺がこいつら倒しても結果は同じかもしれないねえが。少なくとも波は止まるはずだ！

「——らあ！」

「ガツ!？」

「サラダ!？」

「テメエ、何者だ!？」

さて、何と名乗ろうか。

できる限り怪我をすることなく倒したかったため、一人一撃で沈めたが見つかってしまった。

まあ、元から隠れるつもりなんてなかったんだけどね。こうでもしないとこいつらは止まらない、こいつらの向ける殺意がそれを物語っている。

しかも君たちさつきまで殴り合ってたのに何で両陣に睨まれて敵意剥き出しにされなきゃいけないのかなあ？

俺はただ単純に平和的解決をだなあ！

「聞いてんのか、コラア!? テメエは何者だ!?!」

「——ホクヤ。通りすがりの旅人だ」

悩んだ結果そう名乗ることにした。イライラして鈍器で殴ろうとしてきた短気ちやんの顔面にパンチをプレゼントしてね。

二人目、あとは、両陣合わせて大体そうだな、十人ちよつとかな?

「ムレアジナ!」

「よくもムーを!」

今度は一気に二人か。ていうかホントはこれ以上怪我人増やしたくないんだけど、向かってくるなら仕方ないな。

こいつら聞く耳なんて持つてなさそうだし、叩き潰す!

ゴオオオオ!! と俺は気を爆発的に高めることで周囲に衝撃波を打つ。気絶させるまではないけど、大人数とやり合うときには丁度いい。

——背後から奇襲。大きく硬い鋼の棒状のモノで俺の顔面を横殴りにしようとしてくる。

とりあえず少しスライドするように動いて、気を纏わせた肘で受け止める。

「おいテメエ、何が目的だ!?! 何故俺たちを、仲間たちを攻撃する!?!」

それはお前らが攻撃してくるから、何て俺から攻撃しといて言えるわけもない。今度

は背後から三人！

クソ、この状況での不意打ちはちよいとしんどいな。さっさと答えて動かないと！

「——止めるためだ。この戦いをな」

めつちや咄嗟に答えてしまった、しかもわりかし適当に。

そのまま鉄棒を払いのけて背後から来る三人には回し蹴りでまとめて吹っ飛ばす！あれじゃ気絶はさせられねえな、中途半端に意識残しちゃった。

残りは、八人か。もう俺にはどつちがどつちか判別できねえな。もう俺蚊帳の外になりかけてるし。だってこいつら勝手にやり合ってる。

いや、このドサクサで潰そうとしてるのか。まあ、この距離ならパンチも届くからやらせはしないけどな！

「がっ!？」

「お、お前!？」

「言つとくが、俺にはどつちが正しくて間違ってるかなんてわからねえ。だけど、お前らが無駄に戦って血を流すつてんなら俺は無理矢理でもしてお前らを止める!」

「ふざけるな!事情も知らないくせに何勝手なことを!」

「事情は知らないし勝手だが、お前らの勝手な都合で関係ない奴らまで怪我してんだ!」

「ツ!」

「——それでもお前は、胸張って戦いを続けることが正しいと言えるのか？」

対話するのはさっきの鉄棒野郎。どうやらあいつは片陣のリーダー的存在らしいな。あいつ陣営の奴らと思える連中は攻撃の手を止めた。

——それでも、向かってくる馬鹿な五人はぶっ潰すけどな！

まずは一人目、バック転の要領で顔面に蹴りを入れる。二人目、腹部を思いつきり殴る。三人目、頭を全力で蹴り飛ばす。四人目、背中を拳で叩きつける。五人目、右ストレートで顔面を——ッ！

「……そう簡単にはやられんぞ」

——受け止められた。

コイツがあっち陣営の仕切り屋か。中々に強い、今までやってきた奴らとは違って圧倒的に。

今までの奴らとはレベルが違うな。少し面白くなりそうだ。

「俺はダグルダ。倒れた仲間たちの為にもここでお前を潰す！」

※

「え、マクベスさんはもう既にいらない!？」

「ああ、どうやら朝早くから本来の依頼先に向かったみたいなんだ」

まさかもう既にアタシよりも早く起きてる人がいたとは。ギムさんとパイルさんにあの馬鹿が先走ったことを伝えるとパイルさんが大笑いしはじめた。何が面白いんだろうか？

「まあ行つちまつたんなら仕方ねえ、オラ達は王の所へ行こう。さつさと目的だけでも済ませる」

「ま、それが妥当ですね」

「内乱の方はホクヤ、マクベスは個人で受けた依頼、パイルとシャナはオラについて来てくれ」

「うつつ」

「はい」

この辺りはまだ内乱の勢いがなく、特に何事もなく王宮にまでたどり着くと昨夜と同じようにアタシ達を待っていたかのようにアツシユと名乗る男が立っていた。

「お待ちしてました。そろそろ来る頃だろうと思つてましたよ」

「そいつはご苦労なこつた。ずっと待つてたのかい？」

「とんでもない、僕だつてそんな暇じゃないですから。こちらへ、ゲリアノート王の元へご案内致します」

アツシユが先導してギムさんが続き、アタシとパイルさんがその後が続く。

「デイハルド王国の宮殿とは異なり、上り階段が多く、地下を中心とした作りにはなっていないようだった。」

「そこまで大きくはなかったが、王の住まう宮殿だけあって荘厳で美しく、金がかけてられていることがよくわかる。余程の権力者でないとここまでのことはできないだろう。」

「人は一人もいないんだな」

「ええ。皆内乱の鎮静に向かつておりますので。一国民の起こした暴動とはいえ中々収まらないもので」

「——あれ？何だろう、何か違和感を感じる。」

「もうすぐ王の待つ王座に近づいていくのに、何なんだろう？何か、何かがおかしい気がしてならない。」

「アタシの思い過ごしだといんだけどこの宮殿に入って歩いてから気になることが多すぎる。」

「アツシユが王座の間の扉を開いてアタシ達を入れる。」

「そこには首を斬られた王が玉座に座っていた。」

「なっ!?!」

「チィ!」

扉が閉められた！やられた、まさかあの男が！

パイルさんは無理矢理にでも扉をこじ開けようと力づくで引いたり押ししたりしてるけど、開く気配はない！

「落ち着け！今オラ達がどうにかするのは扉じゃねえ。玉座にいるあの女だ」

ギムさんに言われて玉座に目を移すと、そこにはゲリアノート王と思われる男の頭をポンポンと投げてはキャッチを繰り返してる女が玉座の肘掛に優雅に座っていた。

アタシが抱いていた違和感、それは内乱が起こつているというのに関わらずあつさりこの国への入国と王宮への進入があつさりと、上手くいきすぎたこと。

そして、内乱が起きてるのに王が無事だと断定できるあの男の存在。王の側近と自称しながら王と共に行動をしていないアツシユそのもの。

アタシが思考の海に入っているとパイルさんが玉座にいる女に声をかけていた。

「こつから出たいんだが、どうすればいい？」

「私に殺されればいいと思うよ？この愚かな王のように」

「ハハ、中々熱烈なアプローチだな。悪くない」

この人は、こんな状況なのに何を言ってるんだか。

「——だが、残念ながらあんたは俺の好みじゃない」

「そう、それは残念」

「パ、パイルさん」

「シヤナ。あんたはオヤジと一緒に何とかここから脱出してくれ。マクベスの野郎が心配だ」

「そうだ、マクベスさんも一人！しかもあの人はあの馬鹿やパイルさんと違って戦闘が得意ではない。」

「わかりました、気をつけてください」

「おうよ！」

「ビキビキビキ、とパイルさんから気が放出される。呼応するようにあの女からも気が放出される。」

「ギムさん！」

「ああ、オラに任せろ！」

——瞬間、玉座の間の中央で二人が激突した。

24. ベヘモン国での激闘

俺の蹴りとあの女の薙刀がぶつかる、なるほどな。ただの女と思つて舐めてたらこつちがやられる、な。

あいつも相当な気の使い手か。こういうアプローチも嫌いじゃねえよ、彼女にしてもいいくらいだ。

だけど、どうもやり方が好みじゃないんだよな。見た目もタイプじゃないし。まあ、贅沢は言えるだけ言わせてもらうか、言うだけならタダだ。

脱出の方もオヤジがいれば大丈夫だろ、あの人の爪ならばこの床ぶち抜くくらい簡単にやってのけそうさだ。

そうなると、俺は目の前のこの女を止めおくことが俺の役割。

マクベスの方にも敵が行つてる可能性がある。あいつなら心配いらぬ、と思いたいが雑魚いからな。まあ、シヤナちゃんが行けば状況は少し変わるだろう。

「あんた、やるな。俺の蹴りを止めれる奴なんて中々いないよ」

「その程度の蹴りをか？ デイハルド王国はその程度のレベルなのか？」

「言うねえ」

皮肉に挑発で返す、か。

口喧嘩での勝負なら確実に負けてたろうけど、試合や殺し合いでは負けるつもりはな
いな。

俺の戦闘スタイルは脚に気を纏わせて蹴り主体、腕は支えにして滅多に使うことはな
い。

再び女が薙刀を振るう、俺はそいつを避けることなく片足で防ぐ。どうってことな
い、たしかに気は相当だが筋力が足りてない。

気で威力は増加させることはできる。だが、人間の筋力そのものは筋トレでもしな
いと強化はされない。俺とあの女の差はそこにある。

そのまま薙刀を蹴り弾く。女はそれでも薙刀の先に気を込めてブンブン振り回すが、
俺はただひたすらそいつを受け止める。

「貴様、何故受けるだけで攻撃に出ない？」

女は不愉快そうに下唇を噛みながらこちらを睨む、まあ、そうしわ寄せるなよ。可愛
い顔が台無しだぞ。

「そうカッカすんじゃないやねえよ。俺はあんたを倒す気なんてないだけだ」

「ふざけるな！」

ブオン！と勢いよく振るわれた薙刀は一瞬だけだがリーチが伸びた気がした。その証拠に刃の届いてない壁に切り傷が入ってる、怖い怖い。

多分ホクヤのパンチと同じような原理だろうな。素手よりも武器の方が容易くできるってことか、このことはあいつには黙っておこう。嫌がらせだ。

「戦え！戦う気がないのなら、私の前に立ち塞がるな！」

「ッ！」

女が勢いよく放った突きが俺の眼前に、刃が迫る！

こいつはヤバイ！避けられない！

※

「それでこれはどういった歓迎だ？」

「そのまんまの意味だよ。テメエはここで死んでもらう」

さて、どうしたものかな。俺は怪我人の治療に来たはずなのに殺気立った連中と案内してくれたガラと頭の悪そうな男から敵意と殺気を向けられている。はあ、とりあえず煙管でも吸っておこう。

「ここに怪我人は腐る程いる。だが、全員俺たちに逆らった反乱分子のゴミ共だ！ゴミを治す必要はねえぜ、デイハルドのクス野郎オ！」

「なるほど、お前が内乱を起こした犯人の一人ってわけか」

「そうだと云つたらどうなるんだ？ 戦闘もできないクズ野郎が！ お前が補助専だつてことは知つてんだよオ！」

ふむ、既にバレているということは俺たちの素性は一通り調べたということか。なるほど、それでこれだけの人数で俺を囲つてると。

「それで、その補助専を倒すだけがためにこれだけの人数を集めたのか？」

「あん？」

「あれだろ、お前はそんな補助専の俺よりも弱いってことをわざわざ教えてくれているんだろ？ そうじゃなかったらわざわざこんな人数を揃える必要なんかないだろ？」

「…… ブツ殺されたいみたいだな」

「—— さっさとやれよ、雑魚」

煽るだけ煽つたのはいいけど、さて、これからどう出るかな。

奴は青筋をこれでもかと言わんばかりに全身から剥き出しているし、正直勝てるかと言われたら微妙だ。まあ、ちゃんと煽つたからには相手するし、俺が意味もなく煽つたと思つてるこの馬鹿の負けはもう確定してる。

—— さて、そろそろやって来てくれるよね。さつきから気配も近づいてきてるし。

「—— 挽肉にしてやるよオ、クズがア！」

案の定奴はブチ切れた。さて、俺の役目はここまでだ。

向かってくる奴に向かつて俺も歩き始める。目指すは建物、中に怪我人と治療を依頼した人が待っている。

迫り来る拳、だが、俺に当たることはない。グッドタイミング、シャナ。

「が!？」

「——全く、無茶すぎです。アタシが間に合わなかったらどうしてたんだか」

全て計算通り。さて、非常に申し訳ないが後はシャナに任せて俺は俺の仕事を全うしよう。俺は俺のできることをこなす、でも、できないことは押し付ける嫌らしく汚い人間なんだ。

俺は静かに建物に入り、扉をゆっくりと閉めた。

※

「さて、と」

ふう、意外と時間かかったな。思ってたよりもこのダグルダつて野郎が強かったんだ。たしかに他の奴らとレベルは違ったが、師匠とマラナ王妃に鍛えられた俺はとうに人間をやめてしまったらしい。

こいつの動きが止まって見えた。多分師匠と出会えてなかったら俺ここで死んでた

な、うん。

「——で、お前らはまだやるの?」

俺はさつきから突っ立てる鉄棒野郎とその取り巻き達に尋ねる、そう警戒してんじやないよ。

俺だつて極力荒っぽいことはしたくないんだからさあ。なるべく平和的にピースフルな解決が望ましいと思つてる人間だし。平和主義者だし。

鉄棒野郎はアイデンティティである鉄棒をカランカラン、と地面に落として両手を上げる。戦意はないということでもいいのだろうか?

「やめておきますよ、あなたには敵いそうにない」

「それが賢明な判断だ」

「ちよつ、こんな奴に負けを認めるのかよバツツ! サラドとムー、タザニア、ランバーがやられたんだぞ!」

こんな奴とか言うんじやねえよ。

「落ち着けラグナ。なあ、あんた。えつと」

「ホクヤだ」

「ホクヤ、少し話をしないか? こいつらがまだ気絶してる間に」

なるほど、たしかにこいつらが起きたら俺は襲われる。特に最初に気絶させた奴の

敵ー！とか言って俺に向かってきた女なんて特に厄介そうだ。

「わかった。俺も聞きたいことがあるんだ、情報を共有しよう」

「わかりました。僕はバツツ、こいつはラグナです」

「よろしくな」

「よろしくしたくねーよ！」

どうやらラグナの心はまだ開けないようだ。まあ、こんな内乱の起こってるようなところで見えず知らずの奴に心開けとか無理な話か。

その分バツツはリーダーをやってるだけあって、その辺の割り切りと適応力はさすがというべきか。

「敵さんも目が覚めたら面倒だ、少し移動しないか？」

「わかりました、じゃあこいつら運ぶの手伝ってもらってもいいですか？」

「わかった」

そんな感じで俺たちは移動を始めた。彼らのアジトとしている場所が近くにあるということなのでそこに案内してもらったことになった。

ラグナは最後の最後まで反対していたが俺はそこをノリと勢いで何とかした。

「——じゃあ、まずは俺からいいか？」

「はい、どうぞ」

今ここには俺とバツツしかない。ラグナは倒れた（というか俺が倒した）仲間達の看病をしている。

まあ、腹割って話すなら二人だけの方が都合はいいからいいけど。

「この国の内乱だが、キツカケとかわかるか？」

「はい、この国は——」

バツツが言うにはこの国の王であるゲリアノート王は人望はあつたのだが、どこか小心的で頼りない王だったらしい。そこでまず王を交代させようと過激派が生まれた。そして王の保守派も同時に生まれた。バツツ達が保守派でダグルダ達が過激派、及び排斥派だったらしい。

「排斥派の代表はアツシュ・エクスクラメツション。最近王を殺したことでわかつたことなんです」

「待て、アツシュってあの王の側近の？」

「はい、三年前から排斥派の代表だったらしいのですが誰一人気がつくことなく！四日前、王が殺されて初めて気がついたんです！」

何てことだ、となるとオヤジ達も危ないじゃないか！

あの男がまさか全ての主犯だったなんて、俄かに信じ難いがるほど。道理で入国があつさりできたわけだ。

「今は王宮の兵士達までもを味方につけて、実質この国の実権は四日前から奴の物です！」

まさか、マクベス先輩に依頼を持ちかけたり、王の遣いとしてオヤジとシヤナを招いたのも全て奴の？

だが、何の得があるんだ？そこがまだわからない。全貌は見えてきたが、どこか釈然としない。まだ、まだ何か足りない。

「そして、ダグルダは言っていました。僕達王の保守派を殺した暁には力が献上されると」「力？」

「おそらく地位が与えられるのでしよう、この国が生まれ変わったときに」

そうか、これはアツシユによる下克上のようなもの。もう内乱の域を出てしまっているのか。

マズイな、オヤジ達は無事かな？敵の勢力がわからないから心配だ。アツシユもどこににいるのかわからない。だが、何とかするしかない。

片足突っ込んでしまったんだ、俺が見届けなきゃいけない。

——俺が顔を上げた瞬間だった。

バツ達しか知らないはずのアジトの入り口に一つの人影があった。

それは昨夜見たあの男そのもので、今ぶっ飛ばすべき人物！

「見くつけ☆」

「アツシユ！」

「ちようど良かったぜ、アツシユさん」

やるしかねえ、な。要はこいつをぶっ飛ばして全部終わらせればいいんだよな？

——テンション、上がってきたぜ！

25. 気霧理

少し時を遡り、四日前のベヘモン国の深夜。王宮の王座の間にて眠れぬゲリアノートは側近であるアツシユを呼び出していた。単に話し相手が欲しかっただけである。

「——こんな夜更けに呼び出すなんて、どうしたんだよゲリイ」

「アツシユ。俺は、本当に民の上に立てるような人間なのだろうか？」

ゲリアノートは部下との関係はなるべく埋めたいと、対等であるべきという 関係を望んでいる。その中でも三年前から彼の側近を務めているアツシユは最も親しい存在としてゐる。

ときに友人として、またときには国を動かす協力者として。

「不安なんだよ。俺がすっかりしないなら国は不安定だ」

「それがわかってんなら、もう少し誠意とか見せたらいいんじゃないですか？僕は貴方が適任だと思いますよ」

「息子にも同じことを言われたよ」

ゲリアノートは一つ溜息を吐く。

「そうですか。ならば、ゲリイ、僕から一つ提案があるんだ」
「……アツシユ？」

アツシユがゲリアノートに向けて掌をかざすと、キラキラと光る粒子が無数にゲリアノートを囲み煙のようなモヤが発生し始める。

「——ために一遍死んでみるか、クス野郎」

次の瞬間、ゲリアノートの首は宙を舞った。薙刀を持った女が薙刀を一振りすることによって。

「ひゅう☆」

「で、これどうするの兄さん？」

「そうだなア、とりあえずお前に任せるよ。僕は他にやることがあるからな」

コキコキ、とアツシユはもうゲリアノートのことなど興味などない様子で王座の間の出口へと歩き始める。

「——アスカ、オッズ。わかってると思うが、僕のために死んでくれ」

※

今、俺の目の前には昨夜とは明らかに雰囲気の違いアツシユさんが片手に血濡れた棍棒を引きずっていた。

「気も全開でやる気満々みたいだ、こつちとしても好都合だけだな！」

「ようよう、会いたかったぜ。特にバツツ様よオ」

「お前、どうしてここが!？」

「——そんなわつかりやすい気を出してたら誰でも気づくつてーの。道中親切に教えてくれたのもいた気がするし」

「その血!お前、まさか、外にいた仲間たちを……!」

「ん?どうだったかなア、とりあえず殴れるモノは殴つてここまで来たからさ、覚えてません!」

——中々クレイジーな野郎だったつてことか、昨夜のあれは全部演技!

王が既に死んでいるという事実もたしかめはしてないが、こんなイカれた奴が側近なら納得できる!

俺は無意識に駆け出していた。拳に気を込めてアツシユを狙う!こんなヒョロヒョロした奴に負けて堪るかよ!

「カハハ!いいな、お前!」

拳はアツシユに直撃とはいかず、片手に握りしめていた棍棒を下段から上段に勢いよく上げることにより防がれる。なるほど、実力までをも隠していたというわけか。

ん?何だ、これ?

煙、砂塵？いや、どれともとも言えないな。だけど、不思議にも気が感じられる。よく見てみるとアツシユの棍棒にもそれはまわりついている。

「——— 気霧理」

「ツ!？」

マズイ！こいつに近づいたらヤバイ、何がヤバイかはよくわからねえけどとりあえずヤバイ！

「いい反応だ。性質に気がついたか？」

「…… 何だよ、その気持ち悪い気は」

「スツゲエだろ？僕が編み出した僕だけの力さ、馬鹿や屑には真似できねえ高密度な気を粒子化させて煙状にした」

自慢し始めやがった。だが、俺がそれを黙って聞くとでも？

答えはノーだ。理論とかそういうのは理解したくねえし聞きたくもねえ。

「おいおい、ちつとはおしやべりしようや」

「却下だ、めんどくせえから」

「そう言うなよ。僕がわざわざ自分の能力を他人、しかも敵に話してんだぜ？親切すぎて崇めたくなるだろ？」

逆にウザすぎて殴り飛ばしたい！俺の拳をさっきの気持ち悪い気を纏わせた棍棒で

容易く受け止めるあいつの顔面を何千回も殴り飛ばしたい！

舌なめずりするとか、マジキモいんですけど。

それでも奴の口が塞がることはない。

「まあ、聞け。こいつは普通の気よりもさらに細かく細分化して範囲も広いから僕の周囲三メートルくらいなら本来の気と違って消えることはない」

サアアアア、と砂のようにアツシユの腕から放たれる気が蠢く。俺がパンチやらキックやらして、アツシユが棍棒で防いで、たまに攻撃してくる間も口が止まることはなかった。

気がつけば俺とアツシユの二人を囲うように砂のような気が大気中を漂っていた。

「——さらに、こいつは他人の気にもでも纏わりつき塵のように大気を漂う。こいつに僕は気霧理（ケムリ）と名付けた。中々のセンスだろ？」

「ネーミングセンスの欠片も感じられないな」

「振動伝達。全てに僕の気が籠っている、お前に主導権はない」

ビビビビツ、と大気が震え始めた。いや、大気に漂う気が震え始めたと表現するほうが正しいか。

しかも、何かパチパチとか火花も立て始めたぞ。アツシユも中にいるというのに、あいつ毎俺を巻き込むつもりなのか!?

いや、奴は言った。『お前に主導権はない』と。どうやらこの中に俺が入ったこと自体が間違っていたみたいだな。奴は助かるが俺は助からない。

しかも、バツツの気までも取り込んでるから範囲はかなり広いものになってしまってる。

「シーユーグッドバイ！」

アツシユが軽く気を開放した瞬間、大気に漂うアツシユの気霧理は大爆発を引き起こし、バツツのアジトを粉々に粉碎した。

クソ、意識が飛びそうだな！バツツ達は無事なのか、それを確かめる術すらもないなんて！師匠との修行の日々がなければ今ので俺の意識は完全に失われていた。久しぶりだな、ここまで滾る戦いは！

「へえ、意識あるんだ」

「つたり前だ！」

——ドクン。

まただ、またこの感覚。今なら、あれを引き出せるような気がする。

「——こつから先の主導権は俺のものだ！」

全身から漲る力、昂った感情と共に俺の気の色が水色から薄い赤紫色に変化し始めた。

「——おいおいおい何だそりや!? 何なんだその気はよオ!?」

アツシユもまた、楽しそうに表情を歪めた。なるほど、どうやら俺たちは似た者同士らしいな。

俺も今までにないくらいテンション上がってきてるからな!

※

クソ! まさかあのアツシユがここまで強かったなんて!

お父さんと一緒にいたときはそんな素振り見せなかつたのに、だからこそ僕も気がつくのが遅れてしまったのかもしれないけどな。

とりあえずアジトの爆発に巻き込まれる前にラグナの元へ急ぎ、皆を連れて遠くへ移動する。ホクヤさんもあんなに強かつたのか、僕らじゃ敵わないわけだ。

「ヤベエな、あそこに行ったら確実に死んでた」

「ラグナ、皆を頼む。僕はあの二人のところへ戻る」

「ハア!?!」

当たり前前だ。僕がホクヤさんを巻き込んだにも等しい。余所者であるホクヤさんが僕たちの国のために戦ってくれてるんだ。当事者が誰もいなくて一体どうするんだ?

この国の行く末を、僕は元王族として見守る義務もある。ラグナの制止の声は聞くと

もりはない。お父さんの無念を晴らすためにも、たとえあの場に行つて何もできなくともここでジツとしているよりかはずつとマシだ。

「それじゃラグナ、皆によろしくな」

「おい待て！まさか死ぬつもりじゃねえよな、オイ！バツツ王子！」

——僕はもう止まらない、いや止まらない。足が言うことを聞きそうにないんだ。今なら山を背負つてこの一步一步を確実に踏める自信だつてある。

僕は、止まらない。絶対に。

※

「もういいか？俺も疲れたんだけど」

「黙れ！貴様が、貴様ごときがア！」

女が怒りに任せた拳を向けてくる、それを俺が軽くあしらうという一連の行動がさつきからループしてる。

薙刀？何か知らんけど俺の頭で使い物にならなくなった。

まさかあんなに脆いもの使つてとは思わなかつたね、それとも俺の蹴りを受けすぎで限界きた感じかな？

そういうわけでさつきから戦いにならない戦いが繰り広げられているわけだが、俺は

女に手を出すときは互いの合意を得てからと決めてるんでね。向こうの合意はあったが、俺はオーケーするつもりはない。

女とやっても何か虚しさしか感じないし、やる気が出ない。何より強姦してるみたいで気がひけるんだよね、昔っから。

そもそもだ。

「——私は、兄さんのために死ぬ！死ぬることが幸福なのに、どうして私を殺してくれないの!？」

この女の考え方も気に入らないが、こいつのいう兄さんとやらはもつと気に入らねえ。

「しつかり、私を殺してよオ！」

「——ふざけんな！」

俺は、初めてこの女に対して攻撃をする。

「ふざけるんじゃないやねえ！そんなに死にたきや勝手に死ぬ、俺を巻き込むな！あと、テメエの兄さんとやらの名前を教えろ！俺が一発ぶん殴ってやる！」

だあ、ホントイライラする！こいつが死のうが死ななからうが俺は知らんが、こいつにこんな考えを植え付けたこいつの兄は本気でむかつく！

「兄さん、アッシュ兄さんの言うことは絶対なの！私はそれを道標に、その通りに生きて

きたの！」

「……そうか」

かかと落とし。この女の意識を奪うには十分な威力を後頭部から叩き込んだ。

アツシユ、知った奴だ。あいつが、そんな奴だったとな。だが、今はあいつがどんな野郎だとかはどうでもいい。

オヤジの作った穴から脱出して見つけ出して、一発ぶん殴る。

それで終いだ。

26. ホクヤ、己の能力を理解する

——これで全員、つと。人数がおおかつたから結構時間かかっちゃったな。

ギムさんがまさか王座の床に穴を開けるなんて奇行に出るなんてあのときは思いましなかつた。それと床があんなにも脆いだなんて誰が思うだろうか。アタシだつたら絶対に思わない、迷わず壁か扉を意地でも破壊する方を選択する。

出てマクベスさんの方が心配になつて急いで走つてきたらたくさんの敵に囲まれてるし、ギムさん置いてきぢやつたし、問題はないと思いたいけど。

まあ、リーダー格っぽい奴はそうそうに動きを止めれたから後は楽だつた。

この男とマトモにやり合つてたらもつと時間はロスしていただろう。

不意打ちが成功して良かった、今はゆっくり時間をかけている場合じゃない。

「テメ、武器に何か妙なモンを……！」

「即効性の痺れ草よ。アタシのダガーに仕込んでおいた」

まあ、貴重なものだから滅多に使いはしないけどね。あの馬鹿とやり合うときも使つたことあるけど、何でか効き目がないんだよな。妙なところで変な耐性あるんだから、

ホントわけわからない。

「クク、だが、俺を止めたところであの人は止まらない。俺たちはあくまで、も使い捨ての兵隊。あの人のために死ぬ兵さ」

「……あなた達の目的は何？」

「——力。あの人が、力を手に入ればそれでいい」

なんて奴らなの、人のために自分の命を何とも思わないなんて！

「あの人が、N・E・Oの力を手に入れる時、世界は変わるのさ」

「えぬ、いーおー？」

一体何なの？話が全然見えてこない、あの人っていうのらおそらくアツシユ。彼が力を手に入れることで世界は変わる、それでいてこいつらはその踏み台であると自称している。

なら、内乱の主犯格もアツシユであるということ。あの時の彼の行動からアタシ達を初めから敵視していたということ。だったら尚更何でアタシ達をこの国に招いたのかわからない。

全然意図が見えてこない、アツシユは一体何をしようとしてるの？

「こりゃ、また派手にやったな」

「ギムさん」

アタシが悩んでると、ギムさんが走ってやって来た。

「今までどこに？」

「ちよいと野暮用でな。それで、マクベスはこの中か？」

「はい、先ほど入って」

「——ならオラも入る。シヤナ、お前はしばらく外頼むわ」

はあ、やっぱりそうなるのね。まあ仕方ないけど。

「この依頼者に話を聞く義務があるからな、それがギルドマスターとしてオラの責任だ」

依頼者、そうかマクベスさんは元々別の依頼でここに来たんだった。ということとは、アタシ達はともかくマクベスさんがここに来ることはこいつらにとっても予想外だったこと、それでもわからない。

考えない方が良さそうね、またあの馬鹿が中心地にいるみたいだし。あいつの戦いが終わったらゆっくり聞くことにしよう。

※

——体が軽い、一つ一つ攻撃を撃つ感覚が心地いい！

この薄く赤紫色のオーラ、俺のフェバルとしての能力。詳しくは全然わからないけ

ど、最近になって何となく出し方と出るタイミングがわかってきた。

アツシユが気霧理を纏わせた棍棒を大振りに振りかざす。俺はそれを正面から受け止める。

どうやらこのオーラに奴の侵食は影響を受けないみたいだ。さつきよりも気霧理の範囲が狭い。

「カハハ、カハ、カハハハハハ!!何なんだよ、何だよその能力!面白いじゃねえか!」
気霧理は刃に形を変えて俺の周囲を纏い始めるが、俺が気合を入れてオーラを放出するとバキバキと音を立てて大氣中に散っていく。どうやらこの本質は気とは変わらないらしいな。

そのまま突っ込む!近づいて攻撃しても奴の周囲を漂う気霧理が圧縮し壁となるが、俺のパンチとは互角。

しかも、今は何でかしらないけど負ける気がしねえ!突き破って顔面を殴れる自信がある!

「ガ、ツハ!?!」

「お、うおおおおお!!」

止めようにも一度スイツチが入ってしまったからには止められない!俺はもう既にこのリズムを崩すことはできねえ!それはどうやらあいつも一緒みたいだ。不気味な

ほど狂おしいほど楽しそうに顔を歪めると、棍棒を振り回し始める。

「そうだ、もっとやろう！こんなに昂った戦いは久しぶりなんだ！」

今の俺の顔は自分では確認することはできないが、嬉しそうに笑っていることに違いない！

「だってそうだろ？自分の能力をここまで発揮できるのは初めてなんだ！マジでさっきからテンション上がりっぱなしなんだよ！止められねえ！」

「何なんだあ、ホント！戦いのテンションが上がれば上がるほどに力を高めやがって！興奮しながら強くなるとか、どんだけ羨まなんだよ！」

ズゴン！と奴の棍棒が俺の後頭部を直撃する。

——ああ、そういうことか。

あの時、爆発のクソ野郎とやり合ったときも、カイヤさんと戦ったときも、師匠と修行してるときも、そして、今も！

このオーラが出現するときには決まって気持ちが高揚したり、興奮状態が最高潮に達したときに出現する。

そういうときに限って力が溢れてくるんだ、不思議に思ってたんだ。

人間としては当たり前なことなのに俺はそれが極端になっていた。そうか、これが俺のフェエルとしての能力！

後頭部への一撃？そんなの気合があれば痛みなんてどうってことねえよ！

ビキビキビキ、と腕に力を集中させて全力の右ストレートをアツシュに放つ！ボキボキボキ！とアツシュの身体から骨が砕ける音が響きわたる。

「て、メエー！」

「教えてやるよ、俺の能力を。お前が教えてくれて俺が教えないなんて不公平だからな」とてもチートとは思えないが、考え方によつてはこれ以上戦闘向きな力もない。

気持ちの昂りによつて身体能力が上がリ、痛みすらも騙せる。さらにはフェバルの肉体なんだ、死ぬことはない。興奮状態のときのみ人間としての限界を超え、異常なほどまでの力を発揮する。それが俺本来の力とは思えないが俺の力を何倍までも引き上げてるとしてゐるのならどこか納得できる。

そう、これが俺の能力——

「——『テンション』とでも名付けるか。それが俺の能力だ！」

能力名が正しいかなんてわからない、けど俺の能力なんだ。俺が名付けても問題はな
いはずだ。

「……くそつたれ、ネーミングセンス、はあ、はあ。テメエの方がよっぽどねえ、じゃねえか」

——そう言いながらアツシュは壁にもたれながら立ち上がる。

「限界なんて、とうにきてるよ。だが、そんな限界、僕が決めてた妥協点！今から、貴様を潰すために、もう妥協しねえ！」

「ブワツ！」とアツシユの全身から気霧理が広がる。さつきよりも広範囲に、まさか、こいつ本当に自分の限界を超えやがったのか!? 三メートルの限界を越えた気霧理の拡散範囲は今は十メートル近く広がっている！

「人間、思い込みで案外何とかなるもん、だぜ」

ズズズズズ、と全ての気霧理が振動を始める。マズイ、さつきのは室内だったから被害は家一つで済んだが、この範囲であれば街一つ消し飛ばす！

しかも、侵食作用までも働くからオヤジ達やバツツ達が近くにいとしたりそいつらの気はまだ侵食して範囲はさらに広がっちゃう！

——アツシユ自身までが気霧理になろうと、まさか、あいつ自分ごと!?

「カハハ、これだけポロポロになっちゃまえばもう望みはねえ。先生のために喜んで僕は消える、N・E・O。は諦めさせてもらう。貴様を消せるのならそれでいい！」

「何を!？」

「知ってるか？僕はゆっくり体内の気で骨と肉をグチャグチャにして僕自身が気となるんだ。器を消せば気は行き所を失う、さつきとは比べ物にはならねえ大爆発だ、防いでみる！」

させるか！この範囲の気霧理は消せない、ならばその前にあいつを止める！

——俺は離れたアツシユに向けてパンチを、撃つ。

「な…」

「——師匠直伝、飛ぶパンチ」

【「テンシヨン」の影響で飛距離は伸びた。威力をそのままにして飛んだ拳はアツシユに直撃し、気霧理の振動は止まった。

「…で、デタラメな、野郎、だ」

ブワ、とアツシユの肉体がボロボロと腐食しはじめた。どうやらあいつ自身の侵食はもう止まらなかつたようだ。大氣中を漂う気霧理も少しずつだが、消滅しはじめ出した。アツシユの意識が薄れていつてる証拠だろう。

「——だが、最後に笑うのは、僕達だ」

奴が気となり大氣へ呑まれる、肉体が気の侵食に耐え切れなかつたのか。最後の最後までアツシユの野郎は不気味に笑つたままだつた、な。

倒した、のか。

何だか気持ちのいい勝利とはいえないな。

「ホクヤさん！」

でも勝利は勝利だ。

近くにいたのか、バツツ。とにかくこれで内乱は終わった。主犯も死んだんだ。残るは後始末だけだな。

俺が余韻に浸っているとパイル先輩が飛んできた、ていうか何であんたそんなに殺気立ってるの？

俺が既にアツシユを倒したことを伝えるとめっちゃ凹んだ、どうすりやいいんだよこの人。

〔テンション〕か。

これからはこいつを自由自在に操れるように修行しないとな。
新たな決意を胸に、俺はオヤジ達と合流した。

27. デイハルド王国の王族達

アツシユの死。俺がアツシユを倒してバツツ達と合流してその情報は瞬く間に内乱真っ只中のベヘモン国を駆け巡った。そこから今までアツシユに付いていた者たちは士気を失い、バツツ率いる俺たちが優勢になり内乱は終わりを告げた。

「ええ!?!バツツって王子だったの!?!」

「は、はい。すみません、黙ってて」

「そうだ! 頭が高いぞ! 貴様のような野蛮な奴が対等でいられる相手じゃねえんだよ、バアカ!」

「お前は何様だよ?」

未だにラグナ君と和解するには時間がかかりそうだ。あのときドサクサでぶっ飛ばしたサラダとムレアジナ、タザニア、ランバーとの和解も難しそうで未だにガン睨みされてる。

バツツの仲裁がなければ今頃全員と大喧嘩に発展しそうな勢いだ。はあ、若いのって怖い怖い。

パイル先輩には何故か殴られるし、散々といふかなんといふか、な。

ゲリアノート王は埋葬され、葬式が行われた。そして、アツシユの一派の幹部クラスだった二人はディハルド王国のビスティープ牢獄に幽閉されることが決定した。

なんか、一人女の方がパイル先輩にベタベタしてた。一体何があったし。

多くの犠牲が出て終わった今回の内乱だったが、俺にとつてはとても大きな収穫があった。俺自身のフェバルとしての能力に気がつくことができた。この点に関しては敵ながらアツシユに感謝しないとな。

「テンション」まだわからないところが多い能力だが、後で試しに気合を入れて試してみたらあの時の感覚で出せた。やはり大切なのは気合なのか。

これで基本のコントロールもできるようになった。あとは応用してさらに幅を広げないとな。ま、それはディハルド王国に戻ってやればいいことだ。

俺たちは一先ずこの国に滞在し、内乱の被害で出た建物の修復、怪我人の治療、その他の後始末などをバツツの指示のもとお手伝いした。

まさかバツツが王族だったなんてな、次に王位につくのはどうやらあいつみたいだ。こうしてバツツはベヘモン国の新国王となったのだった。

オヤジとマクベス先輩は怪我人の依頼要請を出した人物と話をしていた。

おそらく報酬やら何やらの話だろう、そんなに楽しくなれるような話題でないことは

たしかだ。

そんなこんなの日々が三日続き、俺たちはデイハルド王国に戻ることになった。

「じゃあな、バッツ。いや、バッツ陛下」

「やめてくださいよ、そういうの。僕と貴方は対等、そうでしょ？ホクヤ」

「…… お前がそう言うなら」

俺とバッツは握手を交わす。

ガツシリとした手だった。内乱のときとは比べものにならないほどたくましく大きな、圧迫するような不思議な感覚。だけど、悪い気はしなかった。

「———またいつでも来てください」

「おう」

※

そして、デイハルド王国に戻ってきた。オヤジ達はギルドへ、俺はシャナと共に王宮へ向かいレオナルドさんに報告へ行くこととなった。

本来ならギルドマスターであるオヤジの仕事なんだけど、あの人は、まあ、面倒になって逃げた。

何つー人だよ、まったく。どうせギルドに戻ることなくタルカタ山に向かうことは

目に見える。また後でミカに愚痴られるんだろうなあ、先が思いやられるぜ。

そんなわけで俺たちは現在レオナルドさんとおしゃべりしてる。なんか、もうフランクでめっちゃフレンドリーに。

「——そうか、ご苦労。ホクヤ、しばし我と話をしないか？」

「そうしたいのは山々なんですけどね。俺も予定というものがあつてですネ、いくつか聞きたいことはありますけど」

「ほう、何だ？」

「これはまだシヤナにもオヤジにも話してない。この機会だ、シヤナはいるけどまあいいだろう。彼女も今回のことに関わったわけだし、知っておいて損はないはずだ。」

「アツシユという男の名前は？」

「今回の主犯の名か？」

「ええ、そいつが少し気になることをね」

そう。奴はたしかに主犯だった、だけどあいつの言い草だとまだ裏に誰かがいて糸を引いている。あいつは駒だった可能性が高い。

『N. E. O.』について、何か知ってることはないですか？」

「えぬ、いー、おー？」

ピクツとシヤナの尻尾と耳が僅かに動いた気がした。これの意味がわからなかった。

何かの名前なのか、何を示すものなのか。聞いたこともないような単語でとても俺ではわかるものではない。レオナルドさんも悩んでいる。

「すまん、聞き覚えがない」

「そうですか」

「アタシも少し気になってたんです」

「ここでお前が発言するのか、というかやつぱりシヤナもあつちで誰かに言われたのか。それだけ奴らにとっては重要な何かなのか？」

「アタシが倒した奴は、そのN. E. O. が手に入れば世界を変える力が手に入るとか何とか」

「世界を？」

「ますますわからない。」

「なるほどな、我にはピンともこないがそれを譲渡する奴がいるということだな？」

「おそらく、奴が先生と言っていた人物だと思います。心当たりなどありませんか？」
「ない！」

「即答かよ！クソ、結局迷宮入か。バツツに聞いても全然心当たりはないって言ってるし、調べようにも糸口がなさすぎる。連れ帰ったあの二人と面会できたとしても、話すなんてとても思えないし。」

「——ホクヤ、主はあまり気にするな。主は主ができることをやればいい、この一件は我が預かる」

「レオナルドさん」

「主は強くなれ。仮にN. E. O. なるものに世界を変える力があるのならそれを止める力も必要だ。フェバルである主ならそれができるはずだ」

たしかに、レオナルドさんの言っていることは尤もだが「テンション」の能力でどこまでやれる？

本当にそんな世界を変えるような力と相對することができるのか？

「自信を持ってホクヤ！フェバルの能力は世界の理を覆すほどの機能が備わっていると聞く。主が能力を覚醒させることができれば可能はずだ、前に進め！修行に励むのだ！」

レオナルドさん。そうだな、うん、うじうじ悩むなんて俺の性に合わない。

とにかく今は強くなろう、師匠がいる間はもつと強くなれる。あの人に近づかないと意味がないんだ。

シヤナと一緒に王座の間を後にする。未だにこの王宮は広すぎて構造が覚えられない、だからシヤナに道案内してもらわないと帰れない。

「悪いなシヤナ」

「気にするな、そもそも今回はお兄ちゃんが行くはずだったのだ。お前まで行く必要は本来なかった」

「そこに関しても気にするな、俺なりに最高の収穫があったんだ」

「そういえば、王と何やら話していたがフェバルとは一体何なのだ？」

「あー、そういうシャナには話してなかったか」

まあ、隠す必要はないんだけど話す機会がないところというのは言う機会ないんだよな。せつかくだし話しておくか、俺が異星人だって知ったこいつの反応も気になる。

「実はな——」

「シャナちゃん！」

俺が話を切り出そうとしたら誰かの大声に遮られた。ていうか誰？

そこそこお高そうな衣装に金髪、見た感じ優男だけど残念そうな雰囲気を感じられるのは何だろうか？

「ミヨルド王子」

「え、王子!？」

あの人王子なの!？あんな残念そうな、成金みたいな人が王子なのか。つまりレオナルドさんの息子、どこか面影があるといえはあるけど何か三下貴族にしか思えないのは俺だけだろうか？

「久しぶりだね寂しかったよ、どうだい今夜」

「お断りします」

「ストレート!？」

うむ、やはり残念な人だったか。ていうかこの人のリアクション面白すぎ、どんだけ体仰け反らしてんだよ!

「おい貴様! 笑うなー!」

「す、すみません、クク。えっと、何とか王子」

「ミヨルドだ、無礼者!!」

うお!? 胸ぐら掴まないでください、王子! 何か涙目で睨んできてるけど全然怖くない。やはり色々残念な人という俺の目に間違いはなかったみたいだ。

「ミヨルド王子。第三王子たるもの常に冷静かつ颯爽にしなければいけません。いきなり襲うなど王族としての礼儀がなってませんよ?」

「ぐぬぬぬぬ..」

「いや、お前いつつも俺を殺すつもりで襲って——」

「?.....何のこと?」

この女! まさか自分にブーメランが来るとは思ってなかったのか、開き直りやがった。微妙に間があつたけど!

「——ていうかお前誰だ!」

「今さら!」

やはり色々と残念な王子様だ。シヤナも何やら冷ややかな視線を向けてる、おい、一応相手王族だろ? そんな目向けていいのかよ?

「お、帰ったかシヤナ..」

「あ」

「お兄ちゃん、腹痛はもういいの?」

うわー、このタイミングでお前も来るのかよお兄さん。めっちゃめんどくなくてきたな。

ていうか、あなたの腹痛が原因で今回俺とシヤナが行く羽目になったのかよ! たしかにそりやあの時言うの躊躇うわな!

「テ、メエら! まとめて殺す! シヤナに何してやがる!」

おいおいそれでいいのかよ、警備隊員! 俺はともかく、もう一人王族だぞ!
そんな殺気ビンビンに漏れ出して、王子様めっちゃビビってんじやん!

「ちよ、誤解だ義兄さん!」

「アンタに義兄さんと呼ばれる筋合いはねエ!!」

さすがのシヤドルも本気で手出しはしないはずだ、あいつも一応モラルはある! 理性

はある！はずだ！

今だつてほら、殺気出してガン睨みして肩を掴んで腕を振りかざしてるだけつておいおいおい待って待って待って待って待って！

「ちよつと待て！」

「テメエは後でぶつ殺す！順番は守れ！」

「あんたが殴ろうとしてるの王族だから！あんたが警備する対象の人だからー！」

「この人マジで見境ない！まさか、普段からこんな殺伐としてるわけじゃないよな!？」

「こんなローグ街よりも殺し合いが日常茶飯事で行われてるようなところじゃないよな、この王宮！」

「お、ホクヤではないか！戻ったのか！」

「マラナ王妃！」

「ん、何をしておる？戦か、妾も混ぜろ！覚悟せいミヨルド！」

「何で我?!」

うわあ！救世主かと思つてたのに余計に面倒なことになつた！マラナ王妃の隣に立っているおとなしそうな、服装からして多分王妃様だろうけどポカンとしちやつてるし。

「シヤナ、これつともしかして日常なの？」

「そうだが？」

マジかよ。

「お兄様もお姉様も強くて羨ましい限りです。私めも強くなれば、あそこに混れますのに、皆様とお戯れできますのに」

「リリア王妃、お考え直してください」

シヤナがリリア王妃を連れて行ってしまった。ヤバイ、この状況下で残されるとか俺どうしたらいいわけ？

とりあえずシヤナについていこう。じやなきやここから出られない、し!?

「ちよ、何!？」

「次はテメエだ！死ぬゴラア！」

行けなかった！シヤドルのせいであの混乱の中に巻き込まれてしまった！

ていうかマラナ王妃、王子踏んでますよ！

ちなみにこの事態が落ち着くまでに二時間後に通るかかったゲルターさんによる鉄拳制裁で落ち着いた。

28. ホクヤ、修羅場の中心に立つ

「[テンション]」

ポツリ、その一言でスイッチが入る。

——ドクン、あの時の感覚が身体中を駆け巡りゴオオオオ!!と気とは少し異なる薄
い赤紫色のオーラとなり体外に放出される。

「おおー！たしかにあの時感じたのと同じだ。ついに自分のモノにしたのか！」

「ええ、コツは掴みました」

師匠は驚きそれでいてどこか嬉しそうな様子、そりやそうだ。

俺もまさかここまで簡単に制御できるようなことになるなんて思いもしなかったんだ。ま
るで自分で感情を操作するかのよう爆発させることで発動してるのだから。

まるで昔から普通に使っていたかのような感覚。そう、自転車に乗る時と同じで一回
コツさえ掴んでしまえば忘れることのない。それと同じノリだ。

「———そうか、ならもう俺が教えることはないな！」

「は？」

え、ちよ、どゆこと？まだ俺師匠の課題何一つまともにクリアできてないんですけど、え？

師匠はめっちゃ笑いながら名残惜しそうな表情だ。

「修行始める前に言つたら、お前の能力を引き出すついでに稽古付けてやるつて。お前は能力を引き出した、それでいて十分に強くなつたら？これ以上俺が稽古してやるまでもないくらいに」

「いやいや、俺なんてまだまだですよ」

「次の武道大会まで半年切ってるんだ。後はお前なりに体、能力、技を鍛えてそこで闘おうぜ！なるべく闘う前から敵の手の内は知りたくないんだ」

なるほど、たしかに師匠は俺と稽古する前にそう言っていた。なら、突然だが仕方ないな。

逆に言えば師匠なしで残りの期間強くなってみせろという師匠のメッセージなのだろう（注：本人はそこまで考えてない）

「わかりました。俺も師匠と闘える日を楽しみにしています！ご指導ありがとうございます！しましたー」

「気にするな！デイハルド武道大会のリングで会おうぜ！」

俺と師匠は沈む夕日を背に拳をコツン、と軽くぶつけた。

思い返せば本当に色んなことがあった。目を瞑ると地獄の日々が蘇る、うむ、頑張らねば。

※

「街に生まれよう、ホクヤ様！デートしましょう!!」

それから三日が経過し、ナナが突然そんなことを言い出した。あまりに突然だ、うん、ちよつと待ってくれ。

「珍しいな。お前が朝から出かけようなんて言うのは」

「えへへ、そうですか?」

ナナは生物本能的に夜行性と自称してたのに朝からこんなに元気なのも珍しい。太陽が苦手で外どころか窓を開けることすら嫌うコイツが。一体どういう心境の変化があったのだろうか?

まあ、コイツがいきなり何かを言い出すのは今に始まったことではないが理由を知りたくないわけではない、むしろ知りたい。

「いいけど、どうしたんだよ急に?」

「いえ、ホクヤ様が何日も家を留守にしていたので成分が足りないというかその補充というか」

何この娘、怖い。

「——というのは建前で、明後日にはローグ街に帰るので最後にホクヤ様と街を歩きたいなと」

「え、帰るの?」

そりやまた唐突な話だな。ていうか初耳なんだが、急に決まったことなのかな? カイヤさんのことだからもつと前もつて言つてると思いたい。

「ちなみにいつ頃から帰る予定だったんだ?」

「一週間前です」

やっぱりか! しかもサラツと普通に言うなし!

まあ、別に今日は特に予定ないから別にいいか。修行の時間も欲しいけど何とかなるだろう。

「じゃ、行くか」

「はい!」

クソ、笑顔が眩しい! その笑顔はマジ反則だわ!

最近血生々しい生活してたから輝きが強すぎると俺の目が潰れちまう!

というわけで朝食食つて二人でハーレー街を歩くことになった。

「フフ、どうですか? この服!」

「うん、似合ってるよ」

「いやっほーいー!」

ああ、なんか微笑ましいな。肌の露出の多めの赤いキャミソールとホットパンツ。短めの白い靴下と少し高めの靴を履き、嬉しそうにはしゃぐナナは妹のように思う。

姉しかいなかった俺だからこういうときどんな言葉をかけてどう反応すればいいかわからないけど、素直に微笑ましく思う。姉貴達から見た俺もこんな感じだったのだろうか？

「行きましょう、ハーレー街で一日デート!今日はホクヤ様を一日独占デーです!」

「はいよ、独占されちまうよ」

太陽をなるべく避けたいのかナナは俺の隣に立ったりと背中に隠れたりと移動が忙しそうだった。

一緒に買い物したり知らない道を歩いてみたりフィザーという冷たいお菓子をおやつ代わりに買ってあげたり子供のようににはしゃぐナナを追いかけたりしてたらあつという間に昼飯の時間になった。

「そろそろ何か食べるか」

「そうツスね!どこ行きます?」

「そうだな」

実は俺あまり行ったことないんだよね。大抵ギルドか家で済ませてるし、この前ポスケス兄妹と行った店は出禁くらってるし。もう少しあちこち散策すべきだな、仕事もいけどこういうことも大切だ。いつ活かせるかわからねえからな。

「ナナは何か食べたいのあるか？」

「私はなんでもいいツスよ、ホクヤ様が食べたいもので」

「んなこと言われてもなあ」

バキツ。

ん？なんか後ろから石が砕けたような音が聞こえた気がする。まあ、いいか。

——スルーしようと思ったのに肩を掴まれた、逃げられない。ヤバイ。

「き・さ・ま・はあ!!!」

「シヤナ、痛い。頭に気全開のアイアンクローはシヤレにならないから」

コイツは何でこんなに怒ってるんだろう？いつも襲撃してくるときは気を完全に絶って静かに俺の首か胸か頭を狙ってくるというのに。らしくないと言えぱらしくない。

「貴様は、何をしてるのだ？」

「ちよつと待て、一旦落ち着け！」

「落ち着けるかあ！」

「ちよ、誰だか知りませんが、私のホクヤ様に乱暴はダメツスよ！」

「私の、だど？」

ちよつとシヤナさん？何でそんな怖い顔してるの？体もフラフラと顔も青い、貧血かな？

たしかに今日は日差しも強くてちよつと暑いけど、シヤナがこんなになるなんてらしくないな。

「フ、フフフフ」

「ちよつと、シヤナさん？何で俺の片腕握りしめてくるの？骨が鳴っちゃいけない音出してるんですけど!?!ちよつと待って!?!」

どういうことだ、シヤナとは実力拮抗してたはずなのに！気でガードしてるはずなのに何でこんなにダメ〜ジがダイレクトに伝わってきてるの!?!

「ちよ、あんたいきなりやってきてホクヤ様を奪おうなんてやめてほしいツス！今日は私とデートしてるんですから！」

「黙れ、クソガキ！アタシが最初にコイツを狙っていたのだ！貴様こそ横取りするな！」
ちよ、ナナ！お前までなんちゆう力で腕を!?!痛い痛い痛いから！割とガチでシヤ

レにならないくらい両腕の感覚がああ!!

「生意気なお姉さんツスね。ちよつとお話しませんか？」

「そいつは奇遇だ。アタシもお前に言いたいことが腐るほどある」

「……何、この気のぶつかり合い？ ていうかナナ、お前こんなに気量あつたんだ。何故か俺の左にはシャナ、右にはナナという形でサンドイッチされてしまい今にも腕がもげそうだ。」

「ていうかこいつらどこに行こうとしてんの？ ん？ 「鬼の双牙」？ お願いやめて、よくわかんないけどギルドだけはやめてほしい！」

「飯食える目的は果たせるけど、嫌な予感しかしないんだよ！」

「ほら、入った瞬間ミカが運んでた酒瓶を落としてこつちにすごい怒りの形相でこつち来たし！」

「ていうか足踏まれた！ 蹄痛い！」

「——随分いいご身分ね、ホクヤ」

「ちよ、痛い！ ぐりぐりしないで！」

「ヤバイ！ 何か今日死にそう！ フェバルだから死ぬことはないはずだけど、今日が命日になりそう！ 師匠と一戦もせず死に死ぬとか嫌だ！」

「……何なんすか、今日はホクヤ様独占デーなのにどうして邪魔な奴らがこんなに沸いてくるんですかね？」

「……全く、今日ほど不愉快な日は中々にない。貴様らは一度アタシの力を思い知ら

せる必要があるようだな」

「…… はあ、久々にゆつくり話せると思つたのにどうしてこうなるかな。ホンツト最悪」

「…… あ、あのー」

「少し黙つてろ！」

「は、はいい！」

「こ、怖い！あのナナまでもが俺に牙を剥いてくるとか一体どうしたの!?

ていうか待て！お前ら俺を置いてどこに行くつもりだ！

「おいナナ、昼飯はここでいいのか？シヤナ、今日は後にしてくれ！ミカ、なんか酒くれ！」

とりあえずこの事態をこのまま続けてはマズイ。一刻も早く事態を收拾せねば！

「…… そうツスね。ここで昼飯をいただきましょう」

「…… 貴様が言うなら仕方ないな。今日は休戦としよう」

「…… いつものでいい？値段二倍で出したげる」

少しは緩和、されたのかな？俺はとりあえずシヤナとナナを座らせて落ち着かせる。

ミカは厨房に酒を取りに行つてくれた。

「お前ら一旦落ち着け。喧嘩はよくない、仲良くしてこう」

「仲、良く？」

「……めっちゃ嫌そうだな」

相性最悪だな、こいつらを次から会わせたらダメだな。碌でもないことになりかねない。

「とりあえずシヤナ。すまないが今日のところは引き下がってくれ、ナナとの約束があるんだよ。コイツ明後日にはここを離れて帰っちまうから」

「……そ、そうなのか。すまなかった」

「気にすることはないツスよ。これから注意すべきだといういい教訓ができたツスから」

あ、ちよつと雰囲気回復した。よかったのかな？ちよつと酒を持ってミカが戻ってきた。

「お待たせ、いつものよ」

「ありがとう。少し落ち着いたか？」

「う、うん。ちよつと動揺してたから気が立ちやっただ、ごめんね、足踏んで」

「気にすんなよ。鍛えてるから何ともなかったよ」

めっちゃ痛かった、なんて口が裂けても言えない。

「お、おう」

「なんか食い物も頼むよ。昼飯まだでさ」

「わかったわ。そっちのお二人さんは決まったの？」

「えっと、じゃあ私はブルタリアンをお願いするツス」

「UMA肉の煮物を」

「かしこまりました、と」

ふう、なんとか場は収まったな。よかったよかった。

ナナとシャナも何か話してるし、打ち解けたっぽいな。料理持ってきたミカも少し会話を混じってたりもした。

そんな感じで昼飯を食べ終わり、俺とナナは二人でハーレー街を夜まで歩いたのだつた。

※

おいしかった。あの二人は行ってしまったか。

しかし、どうしてあの時アタシはあんなに気が立ってしまったのだろうか？ ナナとは初対面ではないが、ミカとは初対面だ。

彼女たちを見ているとどうにもイライラが収まらなかった。

「食器持っていきますね」

「ありがとう。それと、さつきは睨んですまなかった」

「いいよ、気にしないで。私も何か喧嘩腰だったし」

そう、話してみればこんなに普通なのに、どうしてあの時は殺意を持ち敵意をぶつけてしまったのだろうか？

考えてもわからない、思えばあの男に対して抱くこの感情が殺意やら恨みやらそんな禍々しいものかすらもよくわからない。

「はあ、ホントホクヤって罪な奴よね」

「そうだな。今すぐにでも殺してやりたいくらいだ」

「本当にね」

む、まさかミカもあいつの命を？そうか、あいつの命を狙う同業者に獲物を取られる嫉妬心がアタシをイライラさせたのか。いや、これは嫉妬なの、か？

わからない、あいつはただのターゲット。それだけなのに、どうして、こんなにも。

——もつと、もつと触れ合いたいと願ってしまうのだろうか？

わからない。どうすればこの気持ちの答えに辿り着くことができるのだ？

熱だろうか、どうにもさつきから風邪っぽい。今日は帰って寝るとするか。

明日には、明日には治っていつも通りあいつの命を狙えばいい。

そう、それが日常だ。アタシはそれでいいんだ、それでいつも通りなんだ。

29. 砂浜の対決

デイハルド王国には海がある。アルドニア広場とハーレー街（宿エリア）を繋ぐ階段の中腹にもう一つ階段があつてそこを下ることで砂浜にまで行ける仕組みになつてゐる。

基本的に入入り自由なのだが、ある時期を境に海に生息してゐるUMAが産卵期と発情期に入り数が増えるため一時的に立ち入り禁止になる場合もあるのだ。

そして海が開放される日がちょうどナナがローグ街へ戻る今日だったので行こうとなつて俺はナナと一緒にやつてきた。そこで待つていたのはオヤジとシヤドル。どうやら二人もミカとシヤナに連れられてきたようだった。

「……何が悲しくてテメエと海で会わなきやなんねえんだ」

「こつちのセリフだ」

もちろん俺とシヤドルは馴れ合えるわけもなくバチバチと海パン一丁で睨み合つてゐる。潮と波の音をBGMに一触即発、酷い絵面である。

「まあ待て。せつかく来たんだし楽しんでいこうぜ。オラも久々に楽しみだ」

「けどよお」

「水着姿をあがめるんだぞ！おら、もつと喜ベクソガキどもー！」

ヒヤッホーウ！と一人盛り上がるオヤジ、それでいいのか。そういえばこういうイベントにはパイル先輩とか食いつきそうだけどなあ、仕事かな？

「オヤジ、そういやパイル先輩は？」

「あいつはまたビステイープ牢獄に呼ばれてんのさ、ご愁傷様つてやつだ」

「ああ、うん。そうか」

ベヘモンから戻って以来、パイル先輩はビステイープ牢獄に行くことが増えた。あの内乱で捕らえたアスカというアツシユの妹を名乗る女に気に入られてしまった様子で会わないと禁断症状のようなものが現れて暴れて色んな意味で手に負えないとかで呼ばれてるらしい。詳しくは知らないけど、パイル先輩は一体何をしたんだろう？

本人も喜ぶと思いきや、めっさ嫌がつてるし最近やつれてる気もする。

「ま、あいつが来ても喧しいだけだしな！」

「そうっすね！」

最近あの人の扱いが雑だとかそんなことは思っではいけない！とりあえず俺たち男三人は女子組の着替えを待っている。他にも知ってる人来てないかなあ、辺りを見渡すもそれらしき人影はいないなあ。

そういえば最近視力が回復してきたんだよね。メガたんの助力なしでも遠く見える

し。これは気の影響なのか「テンション」の影響なのかはわからないけど、少し嬉しいと同時にメガたんとはお別れの時期が迫っていると考えると考えるとちよつと悲しい気持ちもある。

時間が経つにつれて人が少しずつ増えてきた。やっぱりどこの世界でも海で泳ぐのはロマンなのか。怪しげな奴もいるから注意しないと、あからさまな変態も目に入ってしまう。

「——ホークーヤー様！」

後ろから衝撃、ていうかナナだな。この突進にも慣れた。

「遅かったな」

「日焼け止めを塗るのに時間がかかっちゃったんツスよ」

てへへ、と照れくさそうに背中に生える黒い羽根をパタパタと動かす。たしかに砂漠地帯なだけあって日差しは強い。肌の弱い人にはしんどそうな日差しだ。

「それより、どうツスか？」

「……昨日も似たやり取りした気がするが、似合ってるよ」

「っしやあ!と昨日よりも嬉しそうにガッツポーズまでしてるし。水着と私服褒められるのではそんなに違うものなのか、わからん。無駄に大人っぽい紫をベースにした黒レース付きのビキニタイプにしゃがって、身長低くてぺったん娘のくせに。」

そんな大人びてる様子もまた何故か愛らしい、どうしても子供を愛でるような目で見てしまう。

シヤナとミカもやって来た。シヤナは暗めの青カラーのスク水、もしかしてスク水って全世界共通なのか？ミカは水着の前のでっかい巨乳が目に入る。でかすぎじゃね？黄緑色のパレオに白い雲のような模様のは入った大胆なのか控えめなのか微妙なラインだが、胸はデカイ。それは確実だ。

「遅いッスよ！二人とも！」

「すまない。あまり海には来ないものでな」

「ナナちゃんが早すぎるんでしょう。ホント、何でホクヤがいるのよ」

「悪いかよ」

ていうかこいつら結構仲良くなったんだな。昨日初めて会った時なんか一触即発状態で仲を取り持つのに大変だったのに。しかし、こう見ると胸のサイズってわかりやすいもんだなあ。

「ミカの勝ちだな」

「……バケモンかよ、あんたの娘」

おい、そこ二人。

「ていうかさ、ミカっちホントでかいよね羨ましい！おりゃ！」

「ちよ、どこ触って、んう!? やめ、ナナちゃん!」

ナナはミカの豊満な胸を鷲掴みにして揉み始める、眼福だがやめろ。オヤジなんて興奮して鼻血出してぶっ倒れちまったぞ。時と場所を考えてもらいたいものだ。

「ホクヤ、女はデカさが正義じゃねえよな? テメエならわかるよな?」

「…… お前まで何を言ってるんだ?」

「お兄ちゃんのアホ」

シヤナにジト目を向けられたシヤドルは膝から崩れ落ちた、そんなにシヨックかこのシスコン。

「あら、ホクヤさん」

「ラナさん! 久しぶりですね!」

「ええ、ホントに」

相変わらずのほほんとしてるな、ラナさんは。ていうかこの人も地味にデカイな。ラナさんがいるってことはアレンも一緒なのかな?

「アレンもここに?」

「はい、でも、さつきからこっち向いてくれなくて」

「…… え?」

この人の口ぶりからすると、近くにアレンがいるかのような言い方だが、姿は見当た

らない。もしかして俺が見えてないだけなのか？

「——そうなんですよ、あのヘタレはあそこです」

「遠っ!?!」

指差した方は海のご真ん中、たしかに泳いでる！距離取りすぎだし、よく一緒に住んでるな。

そして相変わらず告白はまだできてないらしい、あのヘタレめ。

そんなこんだで人数もいるし、皆でビーチフラッグやったり、ビーチバレーやったり、ビーチバトルやったり、女性陣がキャハハウフフしてる様を俺たち男性陣が遠目から眺めたりと割と楽しい時間を過ごした。

ちようど俺たちがさっき粉砕させてしまったボールを新しく調達し二度目のビーチバレーをやるうとしたときに、あの人は、いや、あの人たちが現れた。

「中々愉快なことをしておるな、ホクヤ！我等も混ぜろ！」

——そう、レオナルドさん御一行。多分王族の皆さんだろうな。

「アーサー王!?!」

「それに、ミヨルド第三王子にセレン第四王子、シド第五王子、フリード第六王子、イサド第七王子、ビルナス第八王子、ハシユド第九王子、アルミナ第一王妃、イビルタ第三王妃、マラナ第四王妃、リリア第五王妃、アリハルナ第六王妃、フリエルザ第七王妃、サ

ステイーナ第八王妃!」

「多いわ!何人いるんだ!」

「それに、バーミリオン王女様まで!」

まさかの王族の皆さん大集合だった!ミヨルド王子とマラナ王妃、リリア王妃とは会ったことあつたけど他全然知らない!めっちゃ小っちゃい子供までいるし!

「……ホクヤごめん、我父上止めれなかった」

「お、おう」

ミヨルド王子が泣き泣きやつてきて謝罪した。実はあの日以降ミヨルド王子とは割と顔を合わせる事が多く仲良くさせてもらつてる。肝心のレオナルドさんは禪一丁で仁王立ちしてるし、元気だなーあの人。たしか八十近くって言つてなかつたっけ?

レオナルドさんとマラナ王妃はともかく、他の方々は無理矢理付き合わされた感が半端ないんだが。

「レオさん、何でわつちまで?」

「そう言うなバーミリオン!家族サービスとかいうやつだ!」

「……今夜もお相手してくださいます?」

「か、考えておく」

やはり妻には敵わない、か。あそこまで狼狽えるレオナルドさんは初めて見た。てい

うか夜に何があるんだ？

「——というわけでホクヤよ！我等とビーチバレーとやらで勝負せよ！」

というわけで、断るわけにもいかずに流れでやることになってしまった。

人数が多いため、各チーム厳選メンバー四人の四対四の一本勝負をすることになった。

審判は師匠である。

「ていうか師匠いつの間に!？」

「マラナ様と呼ばれてな！こんな面白いこと放っておくわけにもいかないしな！」

まあ、納得といえば納得か。この人なら。

「さすがドーバス様！妾は頑張ります！」

「やっぱこうなるんだな。ま、いい話もあったからいいけど」

「その意気だぞ、ミヨルド！そう、我等が勝てばいいことよ！」

「その通りでありんす。こちらもこれ以上ない布陣、負ける気はありまへん」

王族チームはレオナルドさん、ミヨルド王子、イビルタ王妃、マラナ王妃の編成のようだ。未知数なのがイビルタ王妃、お会いしたこともお話ししたこともないため情報が少ない。自信はあるみたいだけど、実力はどうか不明だ。ミヨルド王子はそこそこ実力はあるらしいが、どこまでのものかはわからない。マラナ王妃は絶対に警戒しない

とヤバイ！レオナルドさんも威圧感だけならこの場でなら師匠に匹敵するし、王族ってどうしてこんなに血気盛んな人たちばっかなの？

「師匠の見てる前で負けるわけにはいかないな」

「言つとくが、今回だけだからな。ミヨルドさんにシヤナを渡さないためだから」

「それどういう意味、お兄ちゃん？」

「娘の前で恥ずかしい真似はできんな！」

対するこちらは俺、シヤドル、シヤナ、オヤジだ。どうやらシヤドルとミヨルド王子の間に何かあるようだが聞いてしまえばダメな気がする、ていうか何となく想像はつく。

個人的には師匠が審判やるって時点で嫌な予感しかしないが、普通にやれば大丈夫なはずだ。うん、これはビーチバレーだ。

気がつけば海に来ていた人たちはギャラリイとして俺たちを囲うようにして見物していた。まあ、王族がこんなにいるなんて中々見れないだろうしな。

「——じゃあ、そろそろ試合開始だ！」

師匠が笑みを浮かべボールを天に投げる。ボールが落下を始めて十秒が経過したら試合開始だ。

俺は今のうちに「テンション」の発動の準備をしておく。気持ちを昂らせ、興奮状態

に。いつでも最大火力を放出できるように！

——あと、五秒。

「ホクヤ様頑張ってくださいーい！」

「やったれホクヤーー！」

「駄目父もたまにはいいところ見せな！」

——ドクン。

歓声が聞こえる、エールが聞こえる。どうやらこっちの方が感情的に昂ぶる何かがあるようだ。人の声って不思議だな。

——残り三秒。

「頑張ってください、お兄様お姉様！」

「頑張りや、子供達！」

「みんな頑張つてね〜」

——ゼロ。

「試合開始イ！」

師匠の掛け声と自己計測を合図に、感情を爆発させ薄い赤紫色のオーラを放出しながら俺はボールに向かって全力で跳躍した。

30. バーミリオン王女

俺が跳び上がると同時にレオナルドさんが黄金にも似た色の気を纏ってボールに向かう。凄い、凄まじい気に圧倒されそうになる！けど、ここで怖気づいてしまえば前には進めない！

——むしろ、テンション上がってきた！

「お、おとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおお!!」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

俺とレオナルドさんの腕が振り上げられ、ボールに向かつて振り下ろされる。パワーの強い方が勝つ、気の総量というよりも地力の勝負になるだろう。ボールと一緒に叩きつける！

バチバチと迸る薄い赤紫色のオーラと轟々と厚みのあるそれでいて滑らかな黄金の気がボールに向けられ、衝突する！

——ボールは跡形もなく弾け飛び、俺とレオナルドさんの拳と拳が激突する！

激突した地点から衝撃波を生み、中心を覆うような球状の何かが見えた気がした。ビ

キビキビキビキ、と拳と拳の激突。つ、強いな！さすがは歴戦の戦士だ！師匠にも匹敵するんじゃないか、この力!?

——これ以上まともに対峙するのは危険か、一度離れて体勢を整えよう！

拳を引いて激突の衝撃で生まれた風に乗って一気に後退する。足場の悪い砂浜になんとか着地して激突したせいで若干煙が出てて痛む右手を抑える。ちよつと赤くなつてる。

面白い、これでこそやりがあるつてもんだ。今の俺がどこまでやれるか試すいい機会でもある。レオナルドさんもいい笑顔だ、同時に次で仕留めるといふ野獣の眼光も向けてきてる。

——来る！

さつきよりも強い一撃が、これからが本番つてことか！やってやろうじゃねえかあ!!!
無謀上等、次で確実に——

「「このアホー！」」

——仕留めようとしたら、拳骨された！何でや!?

「何すんだお前ら!?!」

「うるせー！お前はアホなのか!?!馬鹿だろ、これはビーチバレーだぞ!!何でアーサー王とのガチンコバトルに種目変えてんだ！」

「あ」

——そうだ、これビーチバレーだったんだ。シャドルの言葉で思い出したけど、俺たちビーチバレーしてたんだったな。一撃でボールが弾けたから忘れちゃつてたよ。根性のないボールめ。

向こうでもレオナルドさんはたくさんのお息子娘に抑えられていた。やはり俺たちが勝手に熱くなつてしまつてたようだ。

「ホクヤ様〜！カッコよかつたですよー！」

「いいぞ！もつとやれ!!」

ナナと師匠はどうやら違うみたいだけど、特にナナはいつも通りとして師匠は色々和本気だからな。

一人めつちや楽しそうに大笑いしてるし。

ちなみに俺とレオナルドさんが生み出した衝撃波のせいで砂浜が軽く凹んでしまつたため、海は一時的に閉鎖されることになったとき。めでたしめでたし。

※

ナナがログ街に戻つて一週間が経つたある日、俺はまたしても王宮に行くことになった。あの砂浜の件だろうか、依頼先で護衛対象があまりにもムカつくから嫌がらせ

してたのがバレたのか、ローグ街にたまに出入りしてるのがバレたのかわからないが、今回俺を呼び出したのはバーミリオン王女様だ。レオナルドさんの妻である王子達や王妃達の母親。

まだあまり話したことがないから性格とかはわからないけど、厳しそうな人だなという印象はある。特にあの他を圧倒するような真つ赤な瞳、あの瞳は不思議と魅力を感じてしまう。

シヤナとミヨルド王子の案内でバーミリオン王女の部屋の前まで来たはいいが、緊張する。

「じゃ、ホクヤ。我らはそろそろ行くぞ」

「うん、ありがとう」

ミヨルド王子はホントフランクだな、同じ年とわかってからはこんな感じだ。シヤナは一礼だけして投げナイフを投げてくる。

「シヤナちゃん、こ、これから我と食事でも」

「せつかくですが仕事がありますので、アタシと違って日々暇してる兄でも誘ってやってください」

「え、遠慮しときます」

そんな会話を聞きながら俺は目の前の扉をコンコンコン、とノックする。

すると、半開きになり中からいつしかのメガネをかけた女性が出てくる。

「あ、あんたは!」

「お久しぶりですねホクヤ様。改めまして私パーミリオン王女の側近と暗部部隊隊長をしております、ヤエと申します」

そう、このヤエさん俺を最初に王宮に連れてきてきて案内してくれた張本人だ。あまりにも久々だったので驚いてしまった。とりあえず握手を求められたので交わしておこう、礼儀である。

「パーミリオン様は中でお待ちです。私は席を外しますのでお二人でごゆっくり」

「は、はあ」

否応なく強引に中に入れられてしまった。ヤエさん、前もそうだったけど強引なんだよなあ。

部屋の中はレオナルドさんのいる王の間とは違い、思いつきり私室って感じだ。全部が全部高級そうな品ばかりだけど。パーミリオン王女は其中でベッドの上に半裸の状態で待っていた。

「……………いや、ちよつと待て!」

「何で脱いでるんですか!」

「男はこつちの方が興奮するだろ? わつちの若い頃の癖でもあるから気にせんとい

な」

いや、意味がわからん！この人は見てきた王族の中じやまともだと思つてたのに！身長低くて赤い目なのは変わらないけど、女性として大事な何かを失つちやつてる気がする！

「まあ、とりあえずわつちの隣で寝るかえ？」

「寝ません！」

「アクティブすぎる！あのナナでもここまで積極的じゃないぞ!？」

「まあ、ええわ。適当に座んなさい」

「……………はい」

何か話す前に疲れちゃつたな、とりあえず近くにあつた椅子に腰掛けさせてもらった。

「今日はわざわざすまんの、わつちの呼び出しに応えてもらうて」

「気にしてませんよ、レオナルドさんなんか愚痴るために俺呼び出したことあるんですから」

「……………随分レオ君と仲がよろしいことで」

「お気に障りました？」

「いや、嬉しきことなんじやが、嫉妬してしまつたんや」

めっちゃお気に障ってるじゃん。

「——最近レオ君はお前さんの話を楽しそうにしてくるからの、ジルフと同じ異星の者と会えたと言つてな」

「……………」

「そこで、わっちも少し昔話を聞いて欲しくなつての。いわゆる愚痴というやつになるの」

やつぱか。まあ、何となくわかつてたからいいけど。半裸なのはいただけないが。

「それと、昨日のお前さんの实力を見込んで頼みたいこともできたしの」

「頼み？」

「まあ、順を追つて話すさかい、ちよい待ちちな」

まず聞かされたのがパーミリオン王女がレオナルドさんと結婚する前の話。身寄りのない彼女はローグ街の生まれで身体を売つては生活費を稼いでたらしい。そこで現れたのが若き日のレオナルドさん、一目惚れして身分を偽つて結婚までしたそうだ。ていうかすごいな、そんな簡単に身分つて偽れたっけ？

「そこからわつちらの夜は楽しかった、幸せじゃった。子供もたくさん生まれてこの日常が永遠に続けばいいと思えた」

そう話すパーミリオン王女は本当に楽しそうだった。当時のローグ街は今よりも犯

罪が蔓延していた危険地域だったらしい。身寄りのない捨て子がいたことに変わりはないが、今はカイヤさんがいるから治安は良くなってるのかな。

「——ローガ・アスキルト。奴に息子と娘、さらには義父を殺されるまではな」
「……え？」

話は一転した、いや、空気が一転した。バーミリオン王女の声に重々しい、殺意が芽生えた。

「アーサー王十二世就任以来の史上最悪の犯罪者。今はビステイブ牢獄の地下深くに幽閉しとるらしいが、わっちは奴を許すことはできない」

バーミリオン王女の体が微かに震えている、思わず固唾を呑んでしまった。

「ヘンリーとリステイーネ、ガイアス義父様を殺した男、さらにはヘンリーが死んでサガトは心を殺してしまった、今も部屋に閉じこもったまま何年も姿を見せてくれん」

ローガ、史上最悪の犯罪者としてここにやってきて日の浅い俺でも名前なら聞いたことはある。

「ただ、まさかそこまでの奴だったとは。王族を殺害するなど並みの奴じゃできないことじゃない。」

「十年、奴は十年もビステイブ牢獄にいるが恐ろしいんじゃない。奴がこのままおとなしくしとるとはとても思えんんじゃない。わっちの思い過ぎかもしれない、それでも恐ろしく

て敵わん！」

「パーミリオン王女」

「——だから、もし奴が再び悪事を働くようなことがあつたらお前さんが遠慮なく奴を殺してくれ！子供達の仇を取ってくれんか!？」

……これが頼みごと、か。

「それで、あんたの子供達が喜ぶつてならね」

「な」

「俺もさ、姉貴が二人いたんだ、仲間もいた。それで故郷はとんでもない戦争をして、終わつても火種は消えなかつた。俺は人を殺したくない。何も満たされなかつた、目の前で仲間を殺されてそいつを衝動で殺したけど何もなかつた。虚しさしかなかったんだよ」

あの時の感覚は今も覚えてる。生きるのに必死で、それでも生きるためには殺さなきゃならなかつた故郷での日々。

アツシユのときもそうだ、自滅に近い形だったが結果的にあれは俺が殺したようなもんだ。

「だからさ、あんたの頼みを聞くわけにはいかない」

「……お前さん、立派よの」

「そんなことないですよ」

…… やっぱ柄じゃないな。こういう雰囲気は苦手だ。俺には似合わない、もつと前向きになろう。

「バーミリオン王女、もし辛かったら言ってください。レオナルドさんも頼ってやってください、あの人結構寂しがり屋なんで」

「ふふ、そうだな。わっちもそれは承知してる。そうそう、あれは——」

バーミリオン王女は笑顔になってくれた、そうこれでいい。皆が笑顔で、楽しく過ごせる世界。

デihalルド王国は俺の故郷よりは平和なんだ、絶対にこの平和は崩させやしない。

——だから俺は油断してたのかもしれない。二日後、あんな身を震わすような大事件が起こるなんてこの時の俺は思いもしなかったんだ。

ビスティーブ牢獄にて①

「ふふふふ、パ、パイル様あ！あのときの、あのときの後頭部への蹴りを、今一度、どうか、どうか私にいいいいいい！！」

「…… 帰りたい」

「…… 気持ちにはわからんでもないが、なんとかかしてくれ。我々では手に負えん」
「署長の頼みといえ、限度がありますぜ」

「…… ったく、本当にどうしてこうなったんだか。まさかこの女、アスカが変な扉を開かなければこんなことにはならなかったのに！お陰で仕事もできないしナンパもできない！」

「…… ブライオ署長の頼みだから来てるも、そろそろ俺のメンタルも限界だ。今頃ホクヤ達は水着のエンジェル達と楽しくイチチャラブしてるんだろなあ、クソツタレ。」

「…… 今すぐ殴り飛ばしたいけど、そうしたら喜びそうな人種だから厄介だ。しかもこのビスティーブ牢獄の決まりで囚人には手を出しちやいけないことになってるし。」

「…… ちよっと聞きたいこともあるから情報聞き出すか、そのことも兼ねて来てるわけだ」

し。

「ちよつと聞きたいことあるんだけどいいか？」

「はい！ドロップキックですか？アイアンクローですか？」

「違う！」

ダメだ、ここで諦めたらダメだ！

「お前の兄、アツシユのバックにいるやつは誰なんだ？」

そう、あの一件。実は誰かが糸を引いていたのでは？という仮説が浮上している。

N・E・Oなるものを提供する者が存在する。しかし、アツシユ亡き今こいつに聞くしかない。もう一人は頑固で口なんて一切開かないし。

「兄様は、そのことを私にあまり詳しく話しませんでした。私は兄様の指示に従っただけです」

「なんだと？」

まさかコイツですら知らないなんて、こうなってしまうは闇の中、迷宮入か。

「——ただ、兄様は時折誰かと話していました。ベヘモンの部下ではない、どこか、他国の者と思われる間者と」

「お前ら、ベヘモンに行く前はどこにいたんだ？」

「それが、よく覚えてなくて」

記憶が曖昧になってるのか、それともそれ相応のことがあったのか。よくわからんが、とりあえずアツシユが思った以上のクソ野郎だつてことはわかった。

「もしかしたらあの後頭部への一撃で記憶が飛んだのかも、ああ！ 忘れられない！ お、お慈悲を！ もう一度あの蹴りを！」

「しつこいー！」

そんなこんだで半日、やつとのことで落ち着いたこの女から解放された。あくまでも、今日はだけど。

「署長、このことは」

「うん。近いうちにアーサー王に話しておくよ、シヤレオン」

「ハハハ」

うお!? こいつどつから現れやがったんだ？ 気配がなかった、見えもしなかった。

「驚いた？ コイツは気配だけじゃなくて姿をも消せるんだ」

「さっきの話はあなたの隣で聞かせてもらったよ」

それはいいがシヤレオンとやら、肩を組むな！ 馴れ馴れしい！

「つれないねえ」

俺は早く帰りたいんだよ。ゆつくりしたいんだよ、わかってくれ。

「先程の会話をアーサー王にお伝えすればいいんですよね？」

「そうだ、できれば早めに頼む」

「了解しました」

そう言うのとシヤレオンは目の前からスウウウウ、と姿を消した。肌の色といい長い舌といい、少し不気味な奴だな。でも、ブライオ署長が信頼を置いてる人物なんだろう。それなら心配する必要もないな。

「パイル」

「何ですか？」

「最近ローグ街が騒がしい気がするんだ。何かよくないことが起こらなければいいけど」

「そうですかね？いつも通りだと思っただけですけど」

「…… 思い過ぎならそれはそれでいいんだけどね」

「署長は昔から心配性なんだよ、もう少し前向きに生きてもいいと思うぜ」

ブライオ署長との付き合いは長い。「鬼の双牙」に所属していた頃からの付き合いで共に仕事もよくしたものだ。でも、まさかこんな真面目な堅物がビステイーブ牢獄の署長様になるなんて当時思いもしなかったけど。

「とにかくオヤジさんにも注意を促しといてくれ。もうすぐ武道大会も始まる、そのあとは建国祭だって、この前の建国祭でも——」

「アー、はいはい！わかったから、わかったわかってる！その為に俺たち傭兵がいるんでしようが！修行も続けますよ、強くなくちや急な襲撃にも対応できないですからね！」

そうだ。俺がやることは、デイハルド王国を、皆の家を、帰る場所を守ることだ。そのためには、ホクヤに遅れを取らないように強くないとな。

ビスティーブ牢獄の心地よい地下から聞こえる獣のような唸り声をBGMに出口へと向かった。

31. ホクヤ、歴史を動かす

ある日、タルカツタ山の麓。

いつものようにオラが山を掘って金銀銅、ついでに色々と掘り出してる途中に事件は起こった。

いつしかの巨大UMAよりも大きな存在を前に、オラたちはどうすることもできなかった。逃げる、ただ本能がそう告げており逃げる以外の選択肢が遮られたんだ。

「これどーするんですか、オヤジ!？」

「とてもじゃねえが、俺らの手に負えねえぞ！」

「仕方ねえか、誰かホクヤを呼んでこい！あいつなら何とかしてくれる、むしろ事情話したら来てくれる！絶対に！」

「どっから湧いてんだその自信!？」

クソ、とにかく早く来てくれホクヤ！

今はお前だけが頼りなんだ、この事態の收拾をつけれるのはオラ達じゃ無理だ！お前の力が必要なんだ！

※

天気のいい炎天下の昼下がりに、久々に予定のない今日はこっそり改築した自宅の庭で「テンション」の性質を研究していた。いくら強くてもその性質を見極められないと正しいこなしをしているとは言えないからな。

思えば発覚してから色んな意味で怒涛の日々だったから、ゆつくりと向き合うこともできてなかったし。

この二日で「テンション」についていくつか改めてわかったことがある。

まず、発動時に出現するオーラは氣に近い性質はあるが、根本的に違うということ。空気中に分解されることもない。だが、形を形成させることはやはりできなかつた。氣と混ぜ合わせることでできたので、これを応用すればできるかもしれない。

そして、身体能力の異常ともいえる強化。倍になるというよりも二乗しているという方が近い氣がする。

これは戦闘中に何度も実感してるからわかつてたが、改めて思うとんでもないなと思う。さらには感覚の一部が鈍くなるということ、これにより痛覚が鈍くなり発動時は痛みをほとんど感じない。体を騙しているようなものだから解除したときの反動が凄まじい。だが、気合で傷がふさがるとかもあつた。この辺はまだ研究が必要となる。

地力を鍛えれば鍛えるほど通常時に二乗、三乗、四乗と上昇の原理はわからないけど、多分気合だ。うん、それか感情の昂り方によっても変わるのかもしれない。

つーか、暑いな。武道大会が近づいてきたからかな？そう考えると俺がデイハルド王国にやって来てもう一年経とうとしてるのかあ。

早いものだよなあ、ていうか色んなことありすぎて一年以上経つてるようにも思えるな。とりあえず水飲もう、これは死ぬわ。そっからの風呂がまた気持ちいいんだよな、これが！

作ったばっかの庭も小っちゃい穴ほこクレーターでボコボコにしちゃったし、ご近所さんから苦情とか来ないよな？

「ホクヤ君！」

——さっそく来たか。

ん、違う。あれはビット先輩だ。

「どうしたんですか？そんな慌てて」

「急いでタルカツタ山に来てくれ、オヤジさんが！」

——何？オヤジにまた何かあったのか!?

「わかりました、急ぎます！ビット先輩は先に戻ってオヤジの援護を！」

「わ、わかった！」

とりあえず上着を着よう、さすがに上半身裸で街中を走り回るわけにはいかない。何があつたかは知らないけど、あのビト先輩が俺の家にまで来るなんてよつぼどの非常事態なのだろう、気を引き締めていかないと!

【「テンション」を発動し、一気に加速する。タルカツタ山の方角からは白い煙が、あれか! 一体何があつたかは知らんが、上等だ!

.....
ちよつと待て、これは!?

「マズイ!」

「ホ、ホクヤ! 来てくれたか!」

「オヤジ、あれは」

「掘ってたら出てきたんだ、オラじゃどうしようも——」

「——あたり一帯を封鎖しろ! 今すぐ!」

「.....
え?」

なんてことだ、まだ時間は浅いはず! 間に合うか?

「いいから急いでここに一帯を封鎖! ビト先輩達は砂を取り除いてなるべく綺麗な石をここに! オヤジは工具一式ここに持ってきて! 今すぐ!」

「は、はい!!」

間に合え! 俺はさつき着たばつかの服を脱ぎ捨てて飛び込む、暖かい。よし、まだ温

「さて、せっかくの温泉だが定期的に整備しないと。そこから通うにしても少し距離があるから、ここに家を持ってきて住むべきか？ いや、でもそれだとありがたみがなくなるからやっぱ家はあの場所のままにしてここに一軒作って」

「ホ、ホクヤさん？」

「オヤジ！ 温泉経営しよう、何人かスタッフが欲しい！ とりあえず男女それぞれ五人ずつで！」

「一旦落ち着け！ 話が飛びすぎて何が何だかついていけねえ！」

というわけで、「鬼の双牙」の全面協力の下、俺が店長を務めることとなった「フェルダント温泉」の小屋が完成し、女将さんとしてラナさんを迎えて俺たちの経営が始まった。

金？ 仕事とか王族からの迷惑金とかで銀行に山ほどあるよ。

スタッフの募集はこれからやるとして、俺たちの最初の仕事は道具の設計作成だった。アレンをも巻き込み、色々と思案し、とりあえず基本の掃除用具は完成した。そこから男女の湯の仕切り、さらにはもう一つポツンと中途半端に湧き出るところがあったのでそこを混浴用に設けることにした。

「それで、女湯の方はラナさんにお任せしていいですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。中々いい湯だったから皆さんで楽しまないと損ですからねえ」

「ホントですよ！できれば入浴料は無料にしたいのですが、今後のことと給料のこともあるのでいくらくらいがよろしいと思いますか？」

「そうですねえ、天然で湧き出てるから水を買う必要もないですし、300drでいかがですか？」

「では、とりあえずその方針にして覗きをした輩と迷惑かけた輩には出禁と5000万drほど払ってもらいますか」

「そうですね！まだまだ搾り取りたいですけど、干からびちゃいますから妥協点ということ」

そんな感じで経営話は進んでいった。ちなみに一番風呂は俺とラナさんだ。感想は普通に気持ちよかった、独占したい気持ちもあったが、それではダメだ。これは皆で共有しないといけない。あくまで俺が整備するという名目で店としてやってるのだから勘違いはしないでほしい。天然とはいえ定期的に掃除は必要だし、色々やることはある。

雄大なタルカツタ山をバックに眺めながら温泉に入れるとかマジ幸せだ。

一週間後、経営は思ったより上手くいきスタツフも目的である人数揃った。

女将であるラナさんの人気も出てきて大繁盛である。

ちなみに源泉自体はオヤジが掘り出したので分け前の二割を「鬼の双牙」にきちんと

払ってる。

こうして俺はディハルド王国に新しい観光名所を作ってしまった。

32. ホクヤ、体調を崩す

この三日間、俺は少し調子に乗りすぎていたらしい。「フェルダント温泉」は好評が好評を呼び多くの人たちが訪れるスポットとなりつつある。特に夜間営業の時間帯の客足は凄い。お陰で俺もラナさんも忙しいことこの上なかった。その合間に俺は「テンション」の研究、それと修行、さらには傭兵業、もつと言うならタルカツタ山の採掘作業までやっていた。それも全て体を騙す「テンション」を使つて疲れを一時的に忘れ去り支障はなかった、そう、ここまでは全てが良かった。

現在、俺は今まで経験したことないくらい凄まじい高熱と体に気怠さを感じていた。

俺が思うにあれだ、盛り上がりすぎて後日しんどくなるあれ、多分「テンション」の能力はその名の通り強力だが、反動も半端ないみたいだ。

まあ、これも騙したり気合いで全快したりもできるんだろうけど、後が怖いからやめておく。武道大会も近いし少しでも自分の能力のことは知っておきたい。まあ、この咳もくしゃみもない高熱も能力の一部(?)なんだろうけど、辛い。ただただ頭痛と怠さがあつて思うように体を動かさせないとか拷問すぎる。これじゃ、しばらく風呂にも入れ

ん、それが一番辛い。

どうするかな、気も上手く練れないし感知することもできない。一日休めば引くか、こんな時元同居人だったナナがいてくれたら助かったんだけどなあ。

「——入るぞ」

「頼む、今日は休ませてくれ」

——死神がやってきた。ていうかどうやって家に入ったんだ？

もうあまり深く考えたくはない、辛いしめんどくさい。死神ことシヤナはさすがに俺の様子を察してくれたようだ。バツの悪そうな表情を浮かべている。

「日頃の体調管理がしっかり出来てない証拠なんじゃないか？」

「か、返す言葉ありません」

「はあ、まったく」

ん？気のせいかな？

なんか今日のシヤナはいつものシヤナとどこか違う気がする。どこか家庭的で普通の女の子っぽいぞ、あの殺伐とした理由もなく日々音もなく背後から俺の命を狙い最近になって痺れ草を潰したナイフを普通に使ってきたり、どさくさに紛れて毒物を食べさせたり、股間を本気で狙ってきたりする死神シヤナがだ。

「……何か失礼なこと考えているんじゃないか？」

「いや、なんでその、エプロン装備してるの？俺ついに食われるの？」
「貴様はアタシを何だと思ってるんだ？」

ジト目で睨まれるけど仕方ないじゃん。だって日頃からあんな容赦なく命狙ってくるような物騒な女が他人の家に急に来てエプロンするとか、どう考えても普通じゃないだろ。

「台所は一階か？食欲があるなら簡単なもので良ければ作るぞ」

「あの、シヤナさん、ですよね？」

「貴様は何を言ってるんだ？」

ヤバイ、会話が成り立たない。一体全体どうしてこうなってしまったのかわからない。耳と尻尾がピコピコしてる、モフりたい。けどこの国じゃ耳と尻尾に異性が触るとセクハラ扱いされるんだよなあ、一回ラナさんにやってこつ酷く怒られたっけな。アレンも怒りながら「……俺ですらまだ触ったことないのに」とかボヤいてたことはよく覚えてる、さっさとくつつけよなホントに。

それはともかく、聞きたいことはしっかり聞こう。お互いに知らない仲というわけではないからな。

「いや、俺がこんなに弱ってるんだぞ？いつものお前なら情け容赦なく斬りつけてくるだろ」

「……失礼な、アタシとて情のある人間だぞ。さすがに高熱に悩まされてる貴様の命を頂戴するほど落ちぶれてはいない」

いや、何でそこで顔を逸らすの？ 信憑性が一気になくなったぞ、信用していいのかわからなくなってきたぞ!?

だが、生憎身動きが取れない。高熱って恐ろしいな。

「……一応食欲はある。ていうか、何も食べてないから、むしろ何か食べたい」

「ーそ、そうか！ ならアタシが作ってやる！」

「あ、ありがとう」

めつちや気合い入ってる。ていうか、食糧の貯蓄なんかあったっけな？ あまり覚えてないけど水はあった気がする。それにしても手料理か、姉貴のことを思い出してしまつて背筋が急に寒くなった。まあ、あれより酷いのはさすがにないだろう、うん。そう思いたい。俺の思い過ぎだ、手料理って聞くとうしろでもアレを思い浮かべてしまうあたり、相当毒されてるのかな。

待つこと五分、バンダナとエプロン、さらには両手に鍋つかみを装備したシヤナが持ってきたのはブリュレというこの国の病人食であり、食べやすいように液状と個体のちようど間くらいの形状と柔らかさ、そして温かさと食欲を誘う独特な甘い匂いが特徴的な小麦色の食物のはずなのだが、赤と黒と紫が渦巻いてグツグツと火山のように過度

に温め過ぎているように見えるのは気のせいだろう。甘い匂いはたしかにするが、何故か苦い匂いがするのでも多分気のせいだ、熱のせいで感覚が麻痺しているせいだろう。

「で、できたぞ」

「ありがとう、もらうよ」

「あ……」

シヤナが何か言っていた気がしたが、気にしない。スプーンで掬って口の中に放り込む。中々うまい。なるほど、あえて苦味を加えることで喉に通りやすくしたのだろう。隠し味に何を使ったのか少し気になるが、レシピを聞くのは無粋だ。

「おいしいよ」

「え?! ほ、本当か!？」

「……嘘つく意味ないし、ていうか量足りないからおかわりも頼みたいんだけど——」

「もちろんいいぞ! 少し待っててくれ!」

…… どうしたんだろう? めっちゃ嬉しそうにしてる。あんなに嬉しそうな笑顔を見かけるシヤナは初めて見た気がする、ていうか笑顔すら普段は中々見せない。改めて思うとあいつも一人の女の子なんだな、中々可愛い一面があることで。

それにしてもこのブリュレ、本当に美味しいな。見た目も中々斬新だし面白い。料理

というのはいやほや奥深い。

シヤナがおかわりを持ってきてそれを俺が平らげて俺は睡魔に襲われて一旦寝ることにした。

腹も一杯になったし、明日起きれば熱は引いている。そんな気がしたのだ。

※

眠った、か。簡単に食器と台所の片付けを済ませてアタシはニヤけた口元を元に戻すのに必死だった。あいつと話している時気味悪がられなかつたか心配だが、アタシの作った料理が初めて褒められた上におかわりまで要求された！

お兄ちゃんも完食してくれるけど、おかわりはいいつて言うし、ミヨルド王子に至ってはアタシが作ると聞いた途端に逃げ出してしまふ。まったく、いくらなんでも失礼極まりないのではないか？

エプロンとバンダナを取って帰宅の準備を進める。煙突から無理して入ってきたが、コイツが風邪を引いてるなど予想外だった。念のために色々準備をしてきて成功だったようだな。

……何故アタシはこいつを助けたいと思うのだろうか？こいつはアタシのターゲット、他にもミカやナナも同じくこいつの命を狙っている。早い者勝ちのはずなのに、た

しかに今ここで寝首を狙ってもいいのだが、できない。

いつも暗殺をするときには容易にできるのだが、情が移ってしまったのか？

わからない、この気持ちは一体何なのだ？

そもそも、だ。なんでアタシは下手とわかつている料理をこいつのために？

わからない、この気持ちは何なのかわからない。21年とちよつと生きてきただけの

短い人生ではわからないのだろうか？

今度お兄ちゃんに聞いてみようかな。

しかし、改めて見るとこいつは本当に不思議な奴だ。尻尾もなければ耳も肌と同じ色、それでいて身体には見たことのない模様が刻まれている。目つきも鋭いし見たことのない力を使う。

それに、一緒にいると心が落ち着く。今もこいつの寝顔を見ながら側で座っていても落ち着く。本当に不思議な奴だ。アタシがこいつの命を狙って日々打ち合える、それがもう日常になって受け入れて心地がいいと思ってしまうている。アーサー王のために尽くしてきたアタシが随分丸くなったものだ、自分でもそう思う。

そのせいだろうか、いや、多分関係ないだろうな。何だかくすぐつたい。というか尻尾に違和感を感じる。

恐る恐る振り返ると寝ぼけたあいつがアタシの尻尾を鷲掴みにしていた、それだけで

も恥ずかしいというのに奴は自分の頬にすりすりとアタシの尻尾を!!

「ぐ、ぬう、やつ!」

振り解こうと思わず変な声が出てしまう、コイツ本当に意識がないのだろうか!?

あ、だめ!これ以上は…!

※

……シヤナが俺と口をきかなくなってしまった、しかもこれが一ヶ月も続いてしまっている。最近に至っては姿すら見かけない。

あの日の翌日、熱は引いていた。

シヤナもいなくなっており、寝床には毛が散っていた。うむ、何も覚えてない。

それからシヤナにいつも通り命を狙われたのだが、いつも以上に気合が入っており、頭、首、心臓、股間と割とシヤレにならない部分と急所を的確に狙ってきた。まあ、そこまではいつも通りだった。俺が攻撃を当てようとすると顔を赤くして逃げてしまうのだ。それが二日続いて、しまいにはやって来なくなつた。一体どうしたのだろうか?うか?

デイハルド武道大会まであと二ヶ月、今は新しいことにあまり挑戦せずに行けることの強化に努めている。

気力の強化、テンションの調整、地力向上の筋トレと地道なトレーニングを重ねている。アツシユの気霧理をやるうとしたこともあったが、うまくできなかった。あいつがどれだけの努力を重ねて完成させたものかを実感させられた。

シヤナがやって来ないため、模擬戦の相手がおらず最近身体に訛りが感じ始めた矢先だった。

——シヤナの実兄、シヤドルが殺気を剥き出しにして俺に喧嘩を吹っかけてきたのは。

33. シャドルの憂鬱

最近シャナの様子がおかしい。

何がおかしいかはわからないが、直感でそう思わされる。苦手なコルピスを毎日のように飲んでるし、部屋に籠ってることも多いし、クソミヨルドと話してることも多い、解せぬ。

兄である俺には相談できないことなのか。ここ一週間避けられてる気もする。考えられる節はいくつかあるが推測だけで行動するのも危険だ。

一ヶ月前、そう妹の様子がおかしくなったのは一ヶ月前城に戻ってきたときのことだった。たしか、あの日は雑魚ホクヤの家に行くとか言ってた気がするな。となると、原因はやはりあいつか？

—— 待て、冷静になるんだシャドル。憶測だけで行動するのは危険だとさつき考えたばつかじゃねえか。あの雑魚野郎ならいつ殺しても構わねえが、アーサー王が何を言うかわからねえからな。ここであいつをぶつ殺して俺たちがアーサー王の信頼を失うことがあつちやならねえ。

アーサー王は俺たち兄妹の命の恩人だ。シャナがまだ物心つく前、俺がクソガキだった頃、ローグ街に捨てられて行き場を失った俺たちを拾ってくれたのがあの人だ。お陰で強くもなれた。シャナまで部隊に所属することになったのは非常に不本意だったんだがな。

話が逸れた、俺は事情を聞くためにシャナの部屋の前にまで来てる。この前勝手に入って殺されかけたので今回はちゃんとノックする。全く、そんなにこの兄が信用ならないのかあいつは。

「はい?」

「俺だ、入るぞ」

「…… お兄ちゃん」

やはりおかしい。ナイフが飛んでくるわけでもなく、飛び掛かってくることもなくその場に座ってるだけだ。しかも下着、絶対にオカシイ!

「お前、最近元気ないけどどうしたんだよ?」

「別に、いつも通りだし」

ま、そうくるだろうな。普段から物静かで冷静な振る舞いなんだ、俺以外が見るといってもあまり変わらないだろう。

だが、あまり兄を舐めるなよ妹よ。

「——自分に素直になれよ、好きなんだから？ホクヤのことがよ」

「は!？」

「見てりやわかるよ。じゃなきや毎日毎日会いに行ったりしないだろう？」

「そ、それは！アタシは、あいつを殺すため！情が移ったとかそんなんじゃないから！」
「動揺しすぎだろ」

うぐ、とシヤナは口籠る。ま、こいつ自身に好きとかそういう感情に気がついてるかは知らんがな。ミヨルド王子の想いにも気づいてないみたいだし。それはそれで都合だけど。

俺はシヤナの隣に座る、こういうときは優しく寄り添って聞いてやるのが一番だ。何より血を分けた兄妹なんだ、心配しないなんておかしい。

「嫌なことあったなら好きだけ吐きだせ。もしものことがあれば俺がああ馬鹿をこの手でぶち殺してやるからよ」

「そ、それは困る！あいつはアタシのターゲットだから、殺すのはアタシ。お兄ちゃんとはいえ譲れない」

なんでだろう、目が本気だ。殺意しか宿ってない。これは自分の感情に全然気づいてないな、多分。

「それで？あの日ホクヤのところに行って何があつたんだよ、いい加減話してくれてもいい

いだらう？」

「……」

「結構本気で心配してんだぜ。なんか避けられてる気もするから余計に聞くに聞けなかつたけどよ」

「避けてはない、タイミングが悪いだけ」

そ、そうか。だが、この調子なら話してくれそうだ。シヤナがホクヤに惚れてると気がついたのはいつだったかな。なんやかんやであいつとも長い付き合いだ。少し生意気でうぜえやつだけど、悪いやつじゃないんだよなア。もしホクヤがシヤナに惚れたとかなら容赦なくぶち殺してたけど、逆は別だ。シヤナの選んだ道なんだからしつかりと応援してやるのが兄貴ってやつだ。辛いけどしつかりと受け止めねえとな。

「…… わかった、話せば長くなるけど話す」

「ありがとうな」

「いい、アタシこそごめん。あいつに尻尾を抱き枕にされたことなんて思い出すだけでも恥ずかしいから言いたくなくて」

——あの野郎ぶち殺す！

※

シヤドルに連れられて俺はハーレー街の空き地にやって来ている。理由は思い当たらないが、殺気をガンガン放つてるところからメチャクチャ怒っているということは伝わってくる。

「——ホクヤ、俺は前々からテメエを気に入らねエクソ野郎だと思つてた。シヤナのためだったが、もう俺はお前をぶち殺すことにした」

「……シヤドル」

気に入らないと思つてたのはこつちも同じだ。だけど、それでもぶつかり合う理由がない。あいつがあそこまで怒っている理由が検討もつかない。

「確認させてくれ、俺たちがぶつかり合う理由は何だ？」

「ぶつかり合う？ 勘違いすんな、お前に手出しなんかさせる前に終わらせてやるよオ」

「……和解の道はないのか？」

「ないな。俺にシヤナの純情を傷つけたクソ野郎の弁解をお座りしながら大人しく聞けと？」

「……このシスコンめ。たしかに最近あいつの姿を見てないが、何かあつたのか？ いや、俺が何かしたのか？」

「可能性があるとするとするなら俺が熱出して倒れたあの日、熱で意識とか朦朧としてたから覚えてないけど一番可能性がある。だけど、そんな言い訳が通用する様子はなさそう

だ。

「——くたばれや、ホクヤ」

一言、その一言でシャドルから爆発的に気が放出された。向こうは覚えてないだろうが、シャドルとこうやって正面からぶつかり合うのは二度目。あの時の俺とは違う、こつちにやる気はないけど、あつちが俺を殺す気ならばやるしかないか。やらないとやられる、殴られるだけの木偶の坊になるのはごめんだ。

——俺は拳を握りしめた、その動作とほぼ同時に俺の体は宙に舞っていた。

「な、に……ッ!」

直後、首に凄まじい痛みが走る。咄嗟に「テンション」を発動させてダメージを誤魔化した。シャドルの姿を確認することができない。

あの一瞬で俺に二撃も加えてきたのだ、集中しなければ姿を確認するどころか攻撃を当てることさえも叶わない!

集中しろ、まずは着地してそこからシャドルの姿を捉え——!

「遅い!」

「がっ!」

は、やい! 師匠よりもマラナ王妃よりも、シャナ、よりも! とんでもない速度だ! 体制を整える暇すらも与えてくれないのか、気の探知にも全然引つかからないし! とにか

く、シヤドルの動きを止めないと!

——気声波! 近隣の苦情とか喉の痛みとか気にしてる場合じゃねえ! とにかく、今はシヤドルの動きを止めることに全力を注がないと!

「ぎっ……アあ!？」

「——隙あり!」

「ぬあっ!？」

やつと攻撃が当たった。「テンシヨン」と気によつて強化された一撃だったはずなのに、シヤドルは勢いよく後方へ吹っ飛んだだけでダメージらしいダメージがあるようには見えなかった。骨くらいなら簡単に砕くことのできる破壊力はあるはずなのだが、さすがはディハルド王国武道大会準優勝つてところか。実力は本物らしいな!

「テンシヨン、ちよつと上がってきた!」

「クソ野郎が!」

ビュ、と一陣の風が吹いたと思えば俺の目の前に右腕によるクローと呼ばれる掌底打ちを構えるシヤドルがいた。シヤドルがいたはずの場所には何もなかった。

まさにさっきの場所に残像を残したような速度で迫ってきたのだ。咄嗟に攻撃を受け止める。

「テメエだけは、俺が、絶対に!」

シャドルが凶器のように重く鋭い蹴りを放ってくる。受け止められない！ 諸に腹に食らつちまつた！

「がっ!?!」

「シャナの想いを踏みにじりやがって！ 絶対に許さねエ！」

「想、いだと？」

「そうだア！ あいつが一番敏感で感じやすい尻尾を抱き枕にした挙句頬ずりをしただど!? どんだけ羨ましいんだ、チクシヨー！」

俺にどうしろってんだ!? クソ、シャドルの攻撃が早すぎて、受け止めるのに精一杯で言い返すことができねえ！

シャドルの拳が顔面に思いつき刺さる、めっちゃくちや痛い！

「——あいつは、シャナはお前のことが好きなんだよ！ ずっと前から！ いい加減答えを出しやがれ！」

「……は？」

「こんの、ヘタレ野郎がア！ 気づかぬえのか!? あいつが毎日毎日お前のところに行ってるのは好きだからだよ、好きなやつじやなきやこんなことしねエだろオが！ お前が高熱で倒れた日もわざわざ看病するわけねえだろオが！」

……
シャナが？

目の前のシヤドルは息を切らしながらも瞳は鋭く真剣な表情だ。あれは本気だ、冗談とか嘘とかそんな類ではない。

「クソ！何で俺がお前らの仲介しなきゃならねえんだ!!? テメエはクソむかつくクソ野郎だろオがよオ!! 悔しいぜ、チキショー!」

「シヤドル……」

「大会だ！次の大会にまで答えは出しておけ!! それで、お前が首縦に振つたら大会で俺に勝つまで交際は俺が認めねエ！首横に振つたんならしつかりケジメはつけるや!」

…… そうだったのか、シヤナが。だけど、俺はあいつの想いに答えてもいいのか？俺はフェバル、異星人でももしかしたらいつまでもここにいられないかもしれない。エーナさんの話が本当なら星々を渡り歩かなきゃならない。俺は、いつまでここにいられるんだ？

「…… 大会までの二ヶ月、しつかり考えとけやヘタレ。そんな辛気臭エ面する奴とはやる気でねエヨ、じゃあな」

そう言つてシヤドルは一度も振り返ることなく去つて行つてしまった。

…… 考えもしなかつたな、いつまでもここにいられる。俺の行きたいときに出発できる。そう思つてたのに、何故かは知らないけどシヤナの想いに気づいてから、俺はいつまでもここにいられるのだろうか？そんな疑問を抱くようになってしまった。

——俺は、どうしたらいいんだ？

34. ホクヤ VS ミカ

シヤドル襲撃から翌日、俺はミカと一緒に（半ば強引）に買い出しにやって来ている（荷物持ちとして連れ回されている）

ことの始まりを語り始めたらキリがない、というより尺が足りなくなるので割愛させてもらう。俺も俺でまだ目の前の状況が掴めずにいるのだ、つまり混乱していると思っ
てほしい。

「ヘーイ！こちらガルバッドの詰め合わせ売り切れねー！また来年よろしく、コンチクシヨー！」

「お前ら！肉ばつかじゃなくて野菜も買ってけ！収穫したばかりのクルナスの実とバルブツチだよ、今なら大特価の500dr!!」

「水も大量に手に入ったぜー！なんと今なら一年分を1,000drだ！」

『その水買ったー！』

「まいど、つてお前ら！押すな押すな！店が押し潰される！」

「——さあ！私たちも行くよホクヤ！」

「お、おう」

目をキラキラと光らせたミカに手を引かれて俺たちもあの人混みの中（という名の戦場）に突入する。微妙に気を感じられるところから周囲の本気度が伺える。

どうやら今日は年に一度行われる大販売祭という色んな物資が格安で大量販売を行う日らしい。あの祭り好きなレオナルドさんが主催ならば驚きはしないけど、あの人ホントに祭り好きだよな！ディハルド王国の祭りの回数この一年ちよつとだけでもそこそこあるぞ。豊かな国だからできることなんだろうけど、それについていける国民達もまた恐ろしい。平和なハーレー街が今日だけで戦場と化してるよ！

とりあえず「テンション」を上げてなんとかしたいが、どうにも上がらない。昨日のこともあるし、本来ならば大会に向けて特訓しようと思っていたところにミカに連れ出されたのだから、悪いけどそう簡単にやる気なんて——

「ホクヤ店長！風呂に合う最高の酒が売ってる店を見つけました！」

「——つしゃあ！絶対に確保しろ！そしてデカした!!」

偶然その場に居合わせた同士（フェルダント温泉スタツフのバベル君）によつてやる気が上がる！俺つて結構単純だよな！

バベル君の的確かつ素晴らしい号令でラナさんと数人が温泉経営を任せ、それ以外のメンバー全員が一瞬にして集結した。

ミカと一緒に買うものを買いながら他にも石鹸やタオルのようなもの、鏡などちよちよく今後の経営に使えるようなブツは買い占めてやったぜ、ニヤリ。

「——お疲れ様、ごめんね付き合わせちゃって」

「気にすんな、それなりに楽しかったよ」

「はは、結構買ってたものね」

二時間後、一通り必要なものを買ひ互いに両手一杯の物資になったところで店側も商品が減りだし目当ての物もなくなつたので隅つこの方へ避難して休憩している。上着を脱ぎ薄着になつたミカのシャツには汗がびっしりとなつていた。普段ウエトレスの制服しか見ることがないせいにか、私服がとても新鮮なものに見えた。俺は最初から割と薄着だったので脱ぐ必要はない。脱いでしまえば鍛えた肉体を大衆に晒すこととなる。誰も得なんてしやしない。

「それで、大会の方は大丈夫そう?」

「どうだろうな。この前は予選で終わつちまつたからレベルが想像できない、全員が師匠レベルなら勝てる見込みはない」

「ドーバスさんは桁外れだから参考にしちやダメだよ」

「だよなあ、でもあまり慢心するのも良くないからコンディションは整えておきたいかな」

今年のデイハルド武道大会、昨年とは違い色んな想いがある。予選を勝ち抜くことはもちろん、師匠及び大会二連覇の化け物ドーバスさんとも戦う約束があるし、シャドルを無視することもできない。二度、二度も圧倒的な実力を見せられたまま引き下がるわけにもいかないのもあるが、シャナのこともある。昨日のあいつの言葉が頭の中に反芻する。

『大会だ！次の大会にまで答えは出しておけ!!』
『それで、お前が首縦に振ったら大会で俺に勝つまで交際はこの俺が認めねえ！首横に振ったんならそんな時にしつかりケジメはつけろや！』

『——あいつは、シャナはお前のことが好きなんだよ！ずっと前から！いい加減答えを出しやがれ!』

…… 何やつてるんだろうな、俺。こんなの柄じゃねえ、悩むなんて俺らしくねえだろ。いつもみたいに笑え、笑うんだよ俺。辛い時こそ笑う、そうだよな姉貴。

「…… ホクヤ、辛いことがあつたんなら聞くよ?」

「ミカ……」

さすがに悟られてしまったか、だけど、そういうわけにもいかない。もう、俺の都合で誰かを巻き込むことなんてあつたらいけない。

「——なんもねーよ、俺は大丈夫だ」

「……男ってそうやって誤魔化すよね、肝心なことぼかしてさ」

「……」

「パ、駄目父ものよ。あの日だつて元気なフリしてたけど本当は辛かったはずよ。私もね、ホクヤが私を守ってくれて意識が戻らないと知つてとても悲しかった。もう、目が覚めないんじゃないかとも思つた」

「……ミカ」

「だから、さ、私もホクヤの役に立ちたい。何か抱え込んでるなら話してよ、私はシャナみたいに強くないしナナちゃんみたいに明るくないけど、ホクヤの力になりたい。私なりに、好きになつた男の人のために何かしたいの」

「……ん？」

「え、あつ!？」

あれ、聞き間違いかな？何か最後の方でとんでもない爆弾が投下されたような。ミカの顔からは爆弾が爆発したようにボンツと煙が上がり真っ赤に茹で上がってしまった。いた。

……どうやら聞き間違いじゃなかったみたいだな。

「気づかなかつたな」

「ち、違うの！これは、その!!」

「——ミカ」

話そう。隠していたわけじゃないけど、俺のことを。いつかはバレることだったんだ。師匠にもレオタナルドさんにも話したから問題はない、元々いつかは信頼できる、ここにやって来て世話になった恩人たちには話す予定だったんだ。問題はねえ。

「実は——」

ミカは俺の話を聞いて驚いたり、戸惑ったりと様々な表情を見せてくれた。

最後にはごくりと固唾を呑んで信じられないといった表情を浮かべる、当然といえば当然か。いきなりこんな話をされたら誰だってそうなるに決まってる。

「フェバル、星々を歩く存在……」

「そう。俺はこの国、もっというならこの世界の人間じゃない」

「……」

「——いつかはわからないけど、俺はいつからここから離れる運命、なんだと思う。だから、ミカの想いにもナナの想いにもシャナの想いにも答えることはできない。だから——」

「らしくないね、そんなの関係ないでしょ?」

「ミカ、話を——」

「だったらさ、そのタイムリミットがやってくるまでの間をしっかりと謳歌すればいい

じゃない！そんな運命ノリと勢いで覆してやるみたいなこと、嘘でも言つてよ！あの時私を守つてくれたときみたいな強気で前向きな姿勢で理不尽を打ち倒してよ!!」

ミカは荷物を置いて勢いよく立ち上がる。俺は、言い返せない、否いかえす言葉が出てこない。

「私は、例え貴方がいつかここから離れるんだとしても、それまでにいっぱい愛したいし楽しい思い出を作りたい！せつかく出会えたんだよ、後で後悔するくらいなら絶対にそつちがいいに決まつてる…!」

ミカは両目に涙を溜めながら次の言葉を必死に紡ごうと、本当に必死になっている。

「——改めて言うけど、私ミカはホクヤのことが大好き！愛してる！もう二度とは言わないわよ！こんな恥ずかしいこと！」

「……ミカ」

ならば、ここで答えを出さねば男ではない。決まつてる、俺は——

「ありがとう、でもごめん。やつぱり俺は中途半端な答えは出したくない」

「……理由、聞かせてもらえない？」

「俺は、ここに来てたくさんの出会いをした。ミカともシヤナともナナとも、他の皆とも。たしかに全員にイエスと言えば簡単だけど、それじゃダメだ。だから、言い方を変えさせてもらう」

そう、これはもしもの可能性。本当に微かな可能性、まだ俺がフェバルという生物を理解していないが故の解答。

「もし、俺がもう一度ここを訪れることがあるとするなら、その時にはミカの想いに答える。もし、それまでに想いが途絶えてなければね」

「……それ、他の子達にも言うつもりでしょ?」

「ぬぐ!?!」

「いいよ、私はそれでも。ホクヤにも事情があるもんね、私の事情ばかりに構ってばっかりいられないものね」

あー、スツキリした!と伸びをするミカの姿はとても眩しかった。世の中の女性が全てミカのような女性がいたら昼ドラばりの展開なんて起こったりしないんだろうなあ。

「——大会、優勝しなさいよ。ギルドのアイドルを振ったんならそのくらいのことばしてね」

「振ったわけじゃねえし、しかもアイドルとか自分で言うなよ」

「いいのよ、言うだけタダなんだから」

俺もなんだかスツキリした。気分がとても晴れやかになった気がする。俺の出した答えが正しいかわからない、だけど、今俺が言えることはそれだけ。フェバルとして強大な能力を持ってしまったが故の代償、というわけだ。今なら、あの時俺を殺そ

うとしたエーナさんの気持ち達が当時よりもよくわかる。

「——そろそろ帰りますか！荷物もギルドに置きに行きたいし！」

「——そうだな！俺も温泉入りたいし！」

今日もデイハルド王国の空は快晴、雲一つない綺麗なオレンジ色の空が清々しいほど眩しかった。

※

温泉に入った後、俺は王宮へと向かった。理由は二つ、シャナに会いにとマラナ王妃との模擬戦だ。大会まで日は少ない、ならば新しい戦術を模索するよりも今できることの向上に努力する他ない。シャドルとは出会いたくないがために心の中で祈りながら王宮内を歩く、いつの間にか俺顔パスになつてることにも驚きだけど。多分レオナルドさんがやったんだろうな、いつも寂しがってたし。相変わらず無駄に多い地下へ続く階段をひたすらに降りて降りて降りる。

広い廊下に出たところでミヨルド王子と遭遇する羽目になつてしまった、チクシヨー。

「おー、ホクヤ！」

「なんだ、ミヨルド王子かよ。何か用ツスか？」

「なんで我と顔合わすだけで溜息つかれなきやならないの？最近我嫌われてない？」
「気のせいです」

まあ、若干めんどくさいなー、とは思ったことは何回もある。でもシャドルじゃないだけまだ何倍もマシだ。昨日の今日で顔合わせるとか気まずいとかそんなんじゃないかと単純に嫌だ。今あいつの顔見て睨まない自信ない、殺意を飛ばさない自信がない！と
りあえず用件だけでも済ませてしまおう。

「王子、シャナを見てないですか？」

「シャナちゃん？部屋にいるんじゃないかな、我も行くこうとしてたんだけど」

なんでだよ、という野暮なツツコミはしない。丁度いいしミヨルド王子にも話しておくか。後々説明してすんのも面倒だしな。

「じゃ、案内よろしくしてもいいですか？」

「構わないぞ。シャナちゃんに何か用なのか？」

「……まあ、ね」

——根掘り葉掘り説明するのも面倒なので適当に誤魔化す。未だにこの王宮内の地理を覚えられないからミヨルド王子とここで出会えてよかった。じゃなきや今頃迷子だ。

数分後、雑談やら軽い殴り合いやらをしている内に無事にシャナの部屋の前にまで到

着した。扉を三回ノックするとシヤナは姿を見せてくれた。本当に久々に彼女の姿を見た気がする。

「あ、あんた」

「よ、よう」

「や、今日も来たよシヤナちゃん」

お前は毎日来てんのかよ、というツツコミはせずに俺はシヤナのことをしつかりと見据える。彼女も俺から目を離さずにいた。

「ま、まあ入りなよ。アタシも聞きたいことあるから」

「悪いな」

——俺はミヨルド王子の後に続き、シヤナの部屋にお邪魔することになった。

35. それぞれの前夜

明日はデイハルド武道大会。

俺は夜空を照らす月と、夜空を駆けるルートストーンを見ながらオカつち（オカリナ）を吹く。久々の演奏だが、腕は衰えていなかった。

なんて、思ってたけど思いの外指が動かなくなっていた。やっぱり続けていないところうなってしまうか。わかっていたことだけど、ここ最近修行に修業の日々だったからなあ、どうしても時間が取れなかったんだよな。

一ヶ月、この一ヶ月でやれることは精一杯やった。シヤナとナナ（それぞれ何故かミヨルドとカイヤさんが同席してたけど）に俺の想いと答えを伝えた、毎日のようにマラナ王妃のところに通いポコポコに叩きのめされた。

「テンシヨン」と気をそれぞれ使い分けて臨機応変の戦略を作ることもできた。これはマラナ王妃が提案したことで、もし仮にこれからどちらかしか使うことのできない状況になったときの対策とかいって気だけを使う日と「テンシヨン」だけを使う日の二種類、それぞれ交互に行った。

シャドルとも師匠とも一度も会うことはなかった。そうそう、シャナは話をして以来きちんと俺の命を狙いに来ている。シャナの動きも日々機敏になっている気がする、誰かに師事してもらってるのだろうか。

——とにかく長かった、この一年。

最初は生活費目当てで出場したが、呆気なく予選敗退。そこからオヤジからギルドに誘われ師匠とマラナ王妃に出会いレオナルドさんに出会いシャナから命を狙われるようになった。ナナと会ってローグ街でカイヤさん、そこからシャドル、ベヘモンに行つたときはバツツ王子（今は王）とその取り巻き達。

一年前よりも遥かに強くなった。自分でもわかるくらいには、フェバルとしての能力も確認しある程度は使いこなせるようにもなった。

だけど、俺の力が本当にシャドルや師匠に果たして通用するのか？師匠は規格外、シャドルには二度も負けている。だから、これ以上負けるわけにはいかない。届かなくても伸ばしてやる、今あるこの力で！

そうだ、風呂入ろう！

※

同時刻、王宮ではシャドルが一人ワインを飲みながら黄昏ていた。根を詰めるのはよ

くないが、大会前日であるにも関わらず根を詰めており今も上半身裸でいる場所はトレーニングルームである。これが今まで通り、例年ならばここまで根を詰めることはなかっただろう。しかし、今回はホクヤとシヤナの二人のことにケジメを付けなければならぬ。

——ちようど一ヶ月前、王宮にやってきたホクヤとシヤナ（とミヨルド）の会話を偶然聞いてしまった。というよりも部屋の前で盗み聞きしてた。

内容は端々しか聞き取れなかったが、まさかホクヤがあつたフェバルだったことに驚きを隠せなかった。まだ俺とシヤナが幼かった頃酔つたアーサー王から耳にタコができるくらい聞かされた武勇伝に必ずといっていいほど登場する異星からやってきた存在フェバル。名をジルフ、この国に住む者ならガキでも知っている五人の英雄の一人だ。

——俺は嬉しかった。アーサー王から聞いてた疑うしかない絵空事存在が驚くほど身近におり、本気でぶつかり合えるかもしれないということに。前回やったときは俺の一方的な私情による喧嘩だったが、次は試合、正式な場での勝負。

これ以上はオーバーワークかもしれない、明日のコンデイションに支障が出るかもしれない。だが、何もせずにごめんならごめんである。シヤドルはワインのグラスを握りつぶしてもうひと頑張りするのだった。

ちなみに握りつぶしたワイングラスはシャナのお気に入りのもので後日めちやくちや怒られた。

※

デイハルド王国外にある小さな小屋でドーバス・ウーバーは夜酒を飲んでた。途中までマラナ王妃がいたのだが、王族様がこんな時間までいては色々と問題になりそうなので強制送還させた。明日は待ちに待った大会、ここまで胸躍るのは初めて優勝した二年前以来かもしれない。彼の師が隠居し、それから自立する生活費を得るために大会に出て優勝。未だにあの人には勝てるかわからないがそれでも、今は自分の弟子と本気で戦えるかもしれないことに興奮を隠せずにいた。

——フェバル、突如現れた謎の存在。自分でも説明できないほどでこれいかにと思ったが、まあそんなところはどうでもいい。ホクヤの「テンション」と呼ばれる能力には興味がある。フェバルという存在が全員あのような能力を持ちホクヤ以上の存在がいるならば是非とも一戦交えてみたい。

溢れ出る気を抑えられず、一つ大きなクレーターを生み出してしまった。しかも結構大きな音が鳴ってしまった、後々文句を言われるかもしれない。

そんなことはどうでもいい、チャンピオンとして挑戦者は大いに歓迎する。大会三連

覇とかには興味ない、ただ強い奴と戦いたいだけ、それがドーバスの望みであり彼が強くあり続ける理由。

——そう簡単に負けるわけにもいかない。愛弟子だからって容赦はしないぞ、ホクヤ！

※

デイハルド王国のある惑星、アルドニモー周囲をグルグルと軌道線上に乗る小惑星、通称ルートストーン。

大きさはそれほど大きくないが、村一つすっぽり入るくらいのサイズだ。

——そんな小惑星に一人、異質な存在が佇んでいた。

容姿はどちらかというと少年の部類、真つ黒な髪に全てを見下すかのような冷え切りながらも猛禽類よりも鋭い無機質な瞳。少年以外に何も存在しないそこで、少年は静かに立ち上がる。

気が変わった、座るのが飽きたとかそんな雰囲気だった。本当に何気ない動作ではあるが、ここにおいては異質。

——異質な少年は言葉を紡ぐ。

「見に来るまでもないと思ったが、これは少し興味深いものが混じってるな」

異質な少年の視線の先はアルドニモー、もつと正確に言うならばホクヤ・フェルダント。異質な少年は小さく不気味な笑みを浮かべる。

「——僕とは相性が悪そうだ。地力と魔法があれば瞬殺可能だろうが、あれはこちらからの【干渉】は難しそうだ、問題はないがな」

異質な少年の一人語りは続く。

「見届けてやろうじゃないか。どうせ目的地に行くついでに寄った縁だ、僕の仕掛けがどこまで上手くいくのか、あの男が壊れていく様を」

クツクツクツ、と笑いを堪えながら異質な少年は掌をアルドニモーに向ける。

そして、そのまま拳を握り締めて冷え切った無機質な瞳から更に闇を深めて、声のトーンを若干低くして一言。

「——僕が手を出す必要はない。あの星は自ら壊れていく、あいつの儚き夢、野望はここで絶える」

36. デイハルド武道大会

デイハルド王国に朝日が昇る。

そんな早い時間帯にも関わらず国中が活気に満ち溢れており、特にズーマコロシウムへと向かう者たちの数が凄まじかった。

そう、今日は年に一度のデイハルド武道大会。先ほど予選が終わり、観客席が開放され、人々は年に一度の祭りに心震わせていた。

数分後、観客席は満席。他国からの王族や貴族、旅人や腕利きの武道家達が集まり全員がコロシウムに両目を向けていた。瞬きの許されない一瞬一瞬の動きが繊細な対戦が始まる前でも熱気は十分だった。

ルール上として男しか参加が許されなかったため、女性は基本観客席かセコンドに付いている。試合が始まる前から観客は口々に今年の優勝者は誰なのか、そもそもルーキーやダークホースは現れるのかと期待に胸を膨らませていた。

——ドウルルルルルルル、という効果音をわざわざ口から出して場を盛り上げる男がコロシアムの中心に立つと観客は静まり返る。男はバツ、バツ、ドーン！という効

果音が出てきそうな騒がしい動きをした後に拡声器なしでも響き渡る自慢の声を張り上げる。

「エヴリヴァアデイセイ、ヘー——————
 イイイイイイイイイ!!」

「「ヘー——————イ!!」」

——瞬間、気が爆発し煙の演出が設けられた。騒がしい男は騒ぎ続ける。

「今年もやつてきたゼイ！ディハルト武道オ大会イ！実況司会進行はおなじみ、俺様ことガレオス様が務めさせてもらうぜイイイイイエエアアアアアア!!」

「「うおおおお!!」」

「「きやああああ!!ガレオス様ああああああ!!」」

ガレオスの言葉を導火線に歓声が響き渡り、太陽にも負けないくらいの暑さがズームコロシアムを包む。

ガレオスはコロシアム上を駆け回りながらさらにボルテージを上げる。

「ハイハイ！熱い声援サンキューな!!元気そうで良かったぜ！熱中症には気イ付けろよ！というわけで、今年も大会を俺様と皆も盛り上げてくれる仲間達をサクツと紹介するぜ！今回も解説には王族にして大会運営委員長様、第四王妃マラナ様だ！」

「よろしゅうな」

「マラナ様ーーーーー!!」

ファンクラブが歓声を上げる。観客の三割ほどを占めているというところがまた恐ろしい。

「お次はゲストだ!本日午前の部にはマラナ様と同じく王族の王妃様!第三王妃イビルタ様だあああああ!!!」

「せいぜい楽しませておくんなし」

「イビルタ様あああああ!!!踏んでくださいいいいい!!!」

「後で、の」

わあああああああああ!!!とコロシウムが震えるほどに揺れる。

大気も震え、まさに今年で一番暑い日と言えるだろう。

また、イビルタのファンクラブも観客の二割を占めていた。アブノーマルな者たちが多いようだが、そこは気にしないイビルタである。

「元気なのはイイコトダ!じゃ、そろそろ俺様達は席に戻りましょう!そつから選手紹介だ!」

三人が席に戻りながらルール説明をガレオスが続ける。

今年の選抜出場選手は八名。昨年までは十名だったが、シード枠がなくなったようだ。10カウントによるKO、運営ストッパがあるまで試合は基本続行。試合時間は最

高一時間、それ以上は行わない。決勝は時間無制限。観客を巻き込む、外部からの攻撃、対戦相手を殺す、武器の使用は即失格。気による武器は特例扱い。

「——以上だ！お前らも盛り上がる、応援は自由だが、選手に迷惑かける行為はダメだぜー！」

「さつさと選手紹介に移らんか！妾はもう我慢できんぞー！」

「あんたどうせドーバスさん以外眼中にねーの知ってんだぞ?!ま、それもそうだ！時間もないことだし、今年の予選を勝ち抜いた八人の勇者を紹介させてもらうぜ、ハイカモーン！」

「さつさとせい！此方を退屈させんなし！」

「ちよ、イビルタ様あ、勝手に台本に『優勝者は此方との婚約を約束する』とか書き加えてんじゃねえよ！んなことしなくても相手は見つかるから！」

「此方の相手は現在進行形募集しとるのでな！」

「聞けよ!」

イビルタの言葉にファンクラブがざわめく。反対側からもう我慢できないという様子でマラナがガレオスに掴みかかる。

「さつさと次に進め！ガレオス!!」

「もうやだ！この王族二人傍若無人すぎるぜ！お前らも笑ってんじゃねーよ、今日は漫

オシヨー見に来たんじゃねえだろ？コイツらを見に来たんだろ!!」

やつとのことで選手紹介に移る体勢になった。イビルタはむすつとしながらマラナはわくわくと子供のように目を輝かせながら両手を上下に揺らす。

「———そいじゃいつてみよう！まずは一人目！次世代を背負うのはこの俺、予選を勝ち抜いた実力は本物だがこの大会に出たのは命が惜しいのか!?!はたまた馬鹿なのか!?!我が国の第三王子、ミヨルド・アーサー!!」

「私の扱い酷すぎだろ！」

ミヨルド王子。地味に出場決定、観客は盛り上がるが笑いしか飛ばない。

「———二人目！ここでルーキーの登場だ！隣国ベヘモンからの使者！その実力はこれ以下に!?!今大会の台風の目となるのか、ラグナ・バルトニオン！」

「目指せ優勝！打倒クソ野郎!!」

ラグナ。バツツ王の側近にしてホクヤに一瞬で叩きのめされた経験あり。

「———三人目！女を求めて三千里、しかし結果は毎度惨敗！最近入った後輩に嫉妬する怒りの炎はどこに向けられるのか!?!リア充撲滅部隊不名誉会長、パイル・ペンドラゴ！」

「彼女募集中——！」

パイル先輩。動機は色々酷いが、気合は入ってるようだ。

「——四人目！昨年の雪辱を晴らせるか？その速度はまさに神風の如く！しかしやはり敵わなかった！今年は応援しちゃうぜ、前大会準優勝者！シャドル・ポスケス!!」

「…… あいつ後でクロス」

シャドル。いつものようにイラつきながらガレオスを睨みつける。

「——五人目！ビステイーブ牢獄鉄壁の壁！この男がいる限り脱獄なんて夢のまた夢！捕まりや一生日の目が見れない牢獄署長様!! ブライオ・ルンドウルフ!!」

「ルール違反者は俺が許さねエ！」

ブライオ署長。鍛え抜かれた肉体と気量は本物である。

「——六人目！どこからともなく颯爽と現れたと思えば色んなことをしでかしてくれたなこのヤロー！今や皆一度は行ったであろう、フェルダント温泉、俺様も行ったよ！最高だったよ!! フェルダント温泉店長、ホクヤ・フェルダント!!」

「この一年、長かった！」

ホクヤ。今年は予選を勝ち抜きこの場に立つことができた。

「——七人目！昨年でも大活躍した流浪の旅人！もういつそのことディハルドに住んじまえよオ！割とファンも多いらしい色男、ダビッド・イーター!!」

「今年もよろしく、ディハルド王国！」

ダビッド。キラ、と演出をかましながら観客席に指を向ける、何をしたいのかわから

ない。

「——そして八人目!!わざわざこの男をトリにした理由はわかってるな!? 今大会を二度も制覇し今や敵なしの、まさにチャンピオン! この調子で三連覇やつちゃうのか!?! ドーバス・ウーバー!!!」

「うおおおお!!」

「キヤー! ドーバス様——!」

「マラナ様うっせー!」

ドーバス。溢れ出る気と十分な気合からして本日はコンディションを整えてきたに違いない。

「——以上の八人に争ってもらうぜ! 改めておさらいすると今大会はトーナメント式だ、午前の部で一回戦を全部終わらせて午後の部に準決勝を終わらせて、明日二日目には決勝戦だ!! お前ら、しっかり二日目まで体力温存させておけよオオオオ!!!」

ウィーアー! とガレオスが叫ぶと同時に観客席も爆発するかのように声が響き渡った。この国の人たちの体力は改めて思うとおかしいと思う、うん。

「じゃ、開戦前にアーサー王からの挨拶だ! よろしく頼みますぜ!」

「うむ」

いつの間にかガレオスの隣に現れていたアーサー王ことレオナルドが頷きながら咳

払いを一つ。そして、簡潔に済ませる。

「皆、日頃の成果を発揮するといい！以上!!」

「はい！ありがとうございます!!」

この中でレオナルドをよく知る人物たちの考えがシンクロした。

——ああ、早く始めたいんだな。

「——じゃ、早速いつてみようか!?今年の組み合わせはこうだ!!」

一回戦。

一試合目、ホクヤ・フェルダントVSミヨルド・アーサー。

二試合目、ブライオ・ルンドウルフVSシャドル・ポスケス。

三試合目、ドーバス・ウーバーVSパイル・ペンドラゴ。

四試合目、ダビッド・イーターVSラグナ・バルトニオン。

「以上だぜ!!十分後には一試合目のホクヤとミヨルドの対戦カードでバトつてもらおうからそれまで控え室で準備を整えといってくれ!見に来てくれた皆様もお花を摘んだりドリンクを買いに行くなら今の内だぜ!」

——こうして、大会の幕は開いたのだった。

※

「初戦からドーバスさんとか嘘だろ!? 死んじゃうって!!」

「なんで俺に当たるんですか、パイル先輩」

「諦めろ、あの男は真正正銘の化け物だからな」

「シャドル君!?!ちつとは慰めの言葉くらいかけてくれてもいいんじゃないの!?!」

そういうわけで、俺とシャドルとパイル先輩は一緒に歩きながら控え室に向かっていた。改めて予選と本戦の熱気の違いを痛感しながら、決意を固めたあいつのくれたバナダナをキュツと締め直す。とはいっても、戻っても早速試合だからこれといってするところが無いのも事実なんだよな。

この調子でパイル先輩弄っておけば暇を持て余せるかなー、なんて思ってたら誰かに声をかけられた。

「ん?」

「久しぶりだなホクヤ! お前を倒すために俺はわざわざ来たんだ!」

「……ッ」

「…… やつべえ、誰だっけな。いや、ベヘモンから来たラグナ、だったか? 思い出せそうなんだがイマイチ思い出せないな。えっと、あれだよな、たしかバツツと一緒にいた! あいつ!!」

「あのラグナか!? あのバツツのことをはやしたてた取り巻きの一人の!?!」

「どういふ覚え方してんだよ！」

「ああ、ラグナつてお前か」

「……誰だよ」

「パイル先輩もそこまでではないが覚えていたようだ。ん？ということとはバツツもこの国に来てるのか？」

「もしかしてバツツもここに？」

「当たり前だろ、ま、俺はお前をぎやふんと言わせればいいんだけどな」

「……決勝まで当たることはないみたいだけど、師匠、ドーバスさんがいるし戦うことは無理そうだな」

「ハッ、チャンピオンだがなんだが知らんがまとめてぶっ潰してやるよー」

……見事な死亡フラグ建築乙、シャドルも若干引いてるし。パイル先輩も気の毒そうな表情を浮かべている。一人笑ってるのはラグナだけだ。しかし、バツツも来てるのか、久々に会うのもありかもな。

「ピンポンパンポーン！これより第一試合を開戦するぜ！両選手はコロシウム中央に今すぐさっさと来てくれ！」

おっと、お呼び出しだ。行かないとな。

「俺と当たるまで負けんじやねえぞ」

「——つたりめーだ」

シヤドルと会釈を済ませてフィールドへ向かう。既にフィールドでは対戦相手であるミヨルド王子が待ち構えていた。

「——友といえど、手加減などしたら我は貴様を生涯恨むからな」

「——そんなつもり、毛頭ねえよ」

決戦の火蓋は切られた。

デイハルド武道大会、最初の試合が始まる。

37. 勝ち抜け、一回戦!

「急いで駄目父! 試合始まつちやうよ! 初戦からホクヤが戦うのに!」

「わかつたから、わかつたから手エ引つ張るな!! オラだつて腹下すことはあるんだ、しつこいんだよ、あのウン——」

「あ、始まつちやう! 急いで!」

ズーマコロシアムの観客席に何とか辿り着いたギムとミカは満席になり湧き上がる会場に目を向ける。そこにはホクヤとミヨルドが既に激突していた。実況担当のガレオスの声はデイハルド王国中に響き渡るため、声だけの観戦も可能なのだがやはり試合は生で見てこそである。

——それに、片想いの相手のかつこいい姿くらいこの目でしつかり観ておきたかつた。

「席に座るのは諦めた方がよさそうだな、すげー人混みだ」

「だね」

なるべく見える場所に、基本自由席なのでどこにいても文句は言われないためなるべく

く見える位置を探し移動を始める。もちろん、試合はしつかりと観戦しながら。

そんな二人に見覚えのある人物が声をかけてきた。

「や」

「シヤナちゃん！」

「おお、シヤナ！」

「やつぱり来てたね、こっちの席空いてるけどどう？」

「いいの!？」

「もちろん、友達が困ってるんだからね」

シヤナは自分の左隣の空いてる一席にミカを案内した。ギムの席はもちろんのこと
ない。

「すみません、席確保できなくて」

「いいよ、オラはオラで知り合い探すからさ！お二人は楽しみな！」

「そうだよ、シヤナちゃん！駄目父は最悪立ってても問題ないから！」

「……. ならいい」

※

——試合開始から大体8分くらいが経過したと思う。時間の流れなんていちいち

気にしていられないからな。

気纏法により全身を迸る水色の気でコーティングし、ミヨルド王子の黄金色に輝く気によつて形成された剣。気剣術による攻撃を捌く。

俺が習得を諦めた気剣術、それは見事な完成度だった。気ならではの変幻自在のリーチ、気の特徴からあまり長くすると大気中に露散してしまうのだが、それでも十分な長さを出すことは可能だ。俺の近接格闘メインの戦闘と比べたら遥かに有利であることは目に見える。

『ミヨルド王子が攻める！攻めるウー！華麗な気剣術は王族ならではの剣捌き！やはり王族は違つた、ミヨルド王子でもやはり王族の血は引いていた!!正直俺様侮つてたぜ!!』
『当たり前前だ！あれでも妾の弟だぞ!』

『ヒューー!』

——しかし、まさかミヨルド王子がここまでやるとはな。初めて実力をこの目で見たが、想像以上の手練れだ。予選を通過したのも領ける。

「はッ!」

ブオン!!と気剣が振るわれる。通常の剣と違い、気であるため動きは読みやすいのだがどこからどうやってくるかが推測しにくい。槍のように放たれたと思えば真っ直ぐに目元までやってくる。伸縮自在なのが中々に辛い、リーチ勝負では圧倒的に分が悪

い。一気に接近して勝負をつけたいが、まだ、まだ焦ってはいけない。試合時間はまだあるのだ。動きを読んで、一瞬の隙を狙うしかない。

「——やるねえ、ミヨルド王子！テンション上がってきたぞ！」

「当たり前だ、我はアーサー王十二世の息子！この国の未来を担う、英雄にならねばならぬのだ、民を導くには強くなければならない！」

一振り、二振り、ひたすら俺はそいつを躲しながら徐々に距離を縮める。脚に気を集中させ、跳躍力を跳ね上げつつ両腕にも気を巡らせる。たしか師匠が言うには気劍つてのは濃密な気を掌から放出し剣状にする技術。掌から常に気を供給してるから大気に露散することなく形状を保てる。

『ミヨルド王子の気剣術になす術なし！意外に強かった我らがデイハルド王国第三王子!!どうするホクヤ!!!負けるな、ホクヤ!!』

『ま、妾の弟だからの。これくらいは当然』

実況と解説がひたすらにうぜえ！

けど、距離は縮まってきた！避けられない気剣は師匠直伝のある程度放出させれるようになった跳ぶパンチ、ギリギリになったら掌で受けて気爆を発動させて衝撃を和らげて受け流しつつじりじりと離れたり近づいたりを繰り返してる。

気爆のコツもこの数日でわかり、掌からなら反動なしでできるようになった。これは

その場に留めた気をそのまま爆発させるのではなく、放出し射出させる。前に押し出すイメージが大切、いつかは全身で使えるようになっていたいものだ。

「——っしやらー！」

準備は整った。【テンション】を発動させてミョルド王子との距離を一気に縮める。気剣が振るわれる前に今までの倍近い速度を出したためミョルド王子も対応が遅れる。

「いっ!?!」

「——うらあッ!!」

そのまま顔面パンチ！心地いい音が鳴った。

——ま、それでもやっば今の一撃で倒れるわけではない。ミョルド王子は低い体勢を保ったまま、利き手でありさつきから気剣を握っていた右手ではなく、左手を振るい気剣を発動させる。

——バチイイイイ、「テンション」と気を纏った俺の右腕と気剣がぶつかる。

『おお!!?!!ホクヤが気剣を片手で受け止めたぞー!?!こいつはすげー!俺様には無理だ!!』

「——まだまだア！」

気剣に気が注がれる。大きさが一段階大きくなり、重みもさらに増す。だけど、俺も負けられねえ!

気剣だつて気なんだ、博打だつたけど受け止められた。少しでも気を抜いたら確実に

斬られる、だから気の上から「テンション」を重ねて一時的に気量の限界量を超える！
そう、俺はこの数日で気がついた。「テンション」の能力は己の身体能力を倍以上に跳ね上げる、ならば気だつてある意味身体能力(?)の一つなんだ、俺の一部なんだ。フェバルの能力は理を超える、レオナルドさんの言ってる意味がなんとなくだけどわかつてきたぜ、こいつはヤバイ！

ガリガリガリガリガリガリ!!と右によつて形成されたリングに俺の両足が沈み込み、ミヨルド王子が気剣を動かすと俺も一緒に押される。壁ギリギリの所までいったところでピタリと止まった。

危なかった、壁に激突して思わぬダメージを受けてしまうとこだった。

「やはり強いなホクヤ！それでこそ我の恋敵！」

ミヨルド王子は気剣を構えて突っ込んできた。ヤケになったのか、それとも策があるのか!?

———だけど、体は十分温まった。「テンション」による薄い赤紫色のオーラが全身を巡る。力が漲つてくるのがわかる。

「———とりやああああ!!」

ミヨルド王子が俺の攻撃圏内に入った瞬間、振り下ろされる気剣を避けてミヨルド王子の溝内目掛けて右拳による全力パンチを撃ち込んだ。

「——あ?」

「お、おとおお!!」

俺はそのままミヨルド王子をぶっ飛ばす!!王族だとかそんなのこのコロシウムにおいては無礼講である!

日々絡まれるストレスを思わずぶつけてしまった。

——ミヨルド王子はなんとも情けない格好で気を失っていた。

『そこまで!!一回戦第一試合勝者、ホクヤ・フェルダントオオ!!』

再び歓声が爆発するように湧き上がった。俺は無意識に笑顔を浮かべ、右手を天に掲げていたのだった。

※

「あいつ強いな!それよりも何だ、めちやくちや熱い試合だったよな!」

「王族に対して容赦なくパンチ打ち込めるところが気に入ったよ!」

「ちよ、ちよつとカッコいいかも」

「マイハニー!?!俺ちゃんのお付き合いは終わりなの!?!」

「さすがです、あのときよりもさらに強くなってる」

「……ちよつとラグナの奴ヤバイんじゃない?」

観客席が盛り上がる。主に勝者ホクヤのことで試合を観戦してた観客たちは口々に思つたことを口にする中、一人どこか違う評価を持つた小柄な老人が一人いた。

老人は小声で小さく呟いたとか何とか、それは歓声によつて掻き消されてしまつたせいで誰もわからない。

「――奴も星の旅人、か」

時は止まることなく流れ続ける。老人の言葉を巻き込んで、誰にも拾われることなく。

※

試合が終わり、スタジアムから静かに選手控えにまで戻る。

控えとスタジアムを繋ぐ廊下で待つていたのは案の定、シャドル。そしてラグナだつた。

「――次はお前が勝てよ、シャドル」

「――当たり前だ。首洗つて待つてな」

交わした言葉はそれだけ。一瞬の目配せだけ、それ以上の言葉は不要。

ハイタッチも気合の注入も何も必要ない。二回戦でシャドルと戦う、俺はあの一瞬間そのことしか考えてなかつた。

「ケツ、思ったより腕上げたみたいだな!」

「そいつはどうも、お前とも戦えること期待していいんだよな?」

「当たり前だ! 首洗って待つてな!」

——なんでもだろう、シャドルと同じセリフのはずなのに説得力というより、こいつとは今回戦えない気がするの。ん、そういえばパイル先輩見かけないな。試合前まではいたんだけど、また成功するはずがないのに性懲りも無く女の子ナンパしに行ったのか?

そんなことを考えてる間に一回戦二試合目が始まろうとしていた。

※

『オーケー! オーケー、オーディエンス! 選手の準備も俺様の喉の調子も整った、いつだっていけるぜ! 本日第二試合イ、シャドル・ポスケス対ブライオ・ルンドウルフ!! 両者とも準備早すぎイ!!!』

コロシアムの中央で睨み合う両者、特にブライオはシャドルに対して忌々しい視線を送っていた。

「なるほど、貴様が昨年準優勝した若造か」

「あん?」

「俺とぶつかることなく決勝に行き、二回戦でドーバスに敗れた俺とは違うようだな。なんちゃってナンバーツ様」

びくり、と明らかかな挑発にシャドルは僅かに反応する。このデイハルド武道大会は優勝と準優勝だけが評価される。大会は総当たり戦ではなくトーナメント方式、つまり組み合わせ次第では運良く準優勝、なんてこともあり得るのだ。

「オイオイ僻みか？ピステイープ牢獄署長様がよ、俺に怖気させるつもりならそいつは諦めた方がいいぜ。何故か負ける気が一切しないんだわ」

「ほう、そいつは楽しみだ」

——挑発と挑発のぶつかり合い。そう、たとえ昨年の大会でシャドルがブライオとぶつかることなく終わっても準優勝という結果は変わらない。

「——俺、アンタより圧倒的に強エからよ」

人差し指と中指を立てて首元近くで横にスライドさせる。この作法はデイハルド王国において最も効果的な挑発、圧倒的強者が地に這う弱者に対して行う挑発行為。天地の差があることを示している決して穏やかではないサイン。ブライオは何も言わなかった、もはや言葉を交わすことすらも無駄だと感じたのだろう。

『ほんじゃ、第二試合スタアアアアトオツツ!!』

——試合開始の合図とともに、ブライオは全身に荒々しい気を纏わせてシャドルに

向かって突進する。

猪猛突進、頭から生えた二本角が鋭さを増しシャドルを狙う。

回避すべくシャドルはコロシアムの石盤を蹴る、跳躍したシャドルはブライオの体の上を飛ぶ。

「——甘ん」

ギギギギギイ、と急停車し無理な方向転換を行って巨体を浮かせシャドルに向かつて腕を振るう。渾身のエルボーはシャドルに当たることなく空振る。

シャドルがさらに空中でもう一段階跳躍したからである。

「空中で……!」

「——甘いのはオマエだ」

五指に気を流し込み、溢れ出た気が爪状となり刃を生む。気爪拳（きそうけん）それがシャドルの扱う戦闘手段。斬撃にも打撃にも対応できる近接格闘向けの万能な気の形態の一つである。

勢い良く着地したブライオに向けてシャドルは右掌を振るう。

ブライオの頭突きとシャドルの掌底打ちが激突する。

パワーは互角、衝撃は相殺され二人は再び向かい合う。

『いいねいいねいいね! あっついよ!! さっきの試合からテンションアゲアゲだよ! もう

俺様大興奮だよ、これまだ一回戦なんだぜ!？」

『妾はドーバス様の出ない試合など興味ないわ』

『マラナ、そんなこと言うでない。此方は楽しいぞ』

『瞬きも許されない、目を離すなんて厳禁だぜお前らー! シヤドルとブライオも! もつと燃え上がる試合を見せてくれいいいい!!』

※

選手席、前大会チャンピオンのドーバスは試合の行く末を静かに見守る。

二人とも前大会で叩きのめした人物、だからといって肩入れすることもなく娯楽感覚で試合を眺める。

シヤドルの圧倒的な速度、ブライオの全身を使った大きな攻撃。

——それ以上にドーバスの期待を寄せているのが愛弟子であるホクヤ。無事一回戦を勝ち抜き、駒を進めている。決勝で戦うことにワクワクしながら、この数日の戦闘スタイルの変化に笑みが止まらなかった。

——そんなドーバスに近づく小さな影一つ。小さな影は背後からドーバスに声をかける、振り返ったドーバスはただひたすらに驚き目を大きく見開く。

「あ、あんたは……!？」

「よ、久しぶり」

38. 英雄バルバルド

その頃、ナナ・ヴァンプは駄々を捏ねながらカイヤと共に背中から生える羽をいつも以上にパタパタと揺らしながらハーレー街を歩いていた。

「ボスー！ここまで来たんなら行きましよーよ、武道大会！せっかくホクヤ様出てるんですから!!」

「アホか！たしかにあいつの試合は少し見てみたい気もするが、今はそれどころじゃねえだろ！この機を逃すとチャンス来ないかもしれないねえんだぞ！」

「ぶー！ぶー！」

「つたく、文句言うくらいならついてくるなつての！」

現在、デイハルド武道大会で盛り上がってるデイハルド王国は警備も薄れ、実力者はズーマコロシアムに集結している。ローグ街から誰かが来ても気付かないレベルにまでは、だからこそカイヤはわざわざ来たくもない国内へと侵入しているのだ。己の目的を果たすために。

他国からも多くの人々はやってきているが、誰もカイヤとナナがスラムあつかいと

なっているローグ街出身だということは誰も知りはない。

（——この機会だけは逃さない、あの人のためにもここで諦めて止まるわけにはいかない）

普段よりも人が多いようで少ない、そんな微妙な今日のデイハルド王国ハーレー街で二人の悪童が何をもたらすのか、この時はまだ誰も知る由はなかった。ズーマコロシアムから一際大きな歓声が爆発した。

「キニナルー！ホクヤ様ー!!」

——この馬鹿をコロシアムに放り込んで一人でも目的地に行きたいが、不安も残る。とりあえず連れて行くことにした。

※

バルバルド・クエーサー。

53年前の大戦時に活躍した五人の英雄の一人にしてアーサー王十二世とシルフ・アーライズの盟友として知られている。今はデイハルド王国には住まずして未開の地を求めて旅立ち、ひっそりと身を潜めていた。あと、ドーバスの師匠でもある。

「バ、バルドさん……！」

「久しぶりだなドーバス、二十年ぶりくらいか？」

小柄な老人、バルバルドは小さく笑みを浮かべる。ドーバスは懐かしき、驚き、戸惑いよりもまず最初に現れた感情がある。それは怒りである。

「——バルドさんッ！ここ選手以外は立ち入り禁止なんですよ!?何してんですか!!」

「まあ、そう固いこと言うなよ。ローガの奴は元気なのか?」

「人の話を聞いてくださいッ!どうやってここまで入ってきたんですか!」

「ん、ちよろつと見張りのやつを張つ倒しての——」

「頼みますから、やめていただけませんかね!」

ドーバスが頭を抱える。現在対戦しているシャドルとブライオの勝敗も気になるのだが、今はこの小さな師匠を何とかするのが先である。この人を放置しては何をしでかすかわかったものではない、色んな意味で危険なのだ。

「おう、わかったわかった。だが、一つ確認させてくれ、第一試合で勝ったあの男はお前の弟子か?」

「そうっすけど」

「ふむ、やはりか」

「あいつがどうかしましたか?」

「——いんや、少し気になっての」

バルバルドが先と打って変わり真面目な表情を浮かべる。ドーバスとしても色々と

聞きたいが、とりあえずここを出てもらおうことが先決である。

「確認ってそれだけですか？」

「うむ、ちよつと会つてくる」

———そう言葉を残し、隠居したと思えないほどのドーバスすらも度肝を抜く超人的速度でその場を去つてしまう。

ドーバスが呆気にと取られてる間にもうバルバルドの姿は見えなくなつてしまつていた。

「バルバルド

さあああん
!!!?」

チャンピオンドーバスの滅多なことがない限り聞くことのできない悲鳴がズームマコロシアムに響き渡つた。

ドーバスは第三試合である、第二試合が終わり次第行かねばならないのでここを離れるわけにはいかない。

故に、バルバルドは放置ということになった。ホクヤに謝罪の気持ちを送りながら。

※

——一回戦第二試合開始から二十三分が経過していた。

シャドルが宙を蹴りながら跳躍、ブライオの死角から気爪拳としなる鞭のごとく蹴りで攻める。ブライオの反応速度も見事だが、スピードに関してはシャドルの方が一步も二歩も上手であった。シャドルは痛む脚に表情を苦くしながら、四肢を地につけてすぐさま立ち上がり、ブライオを睨みつける。

(——脚が、もうこれ以上は歩けなくなりそうだ)

シャドルの空中闊歩は脚に気を溜めて勢いよく大気を蹴りつけることによつて実現している。海中で勢いよく推進するような要領であるのだが、あまりやりすぎると脚が攣ってしまう。

既にシャドルの脚は限界が近づいていた。

「——どうした、もう来ないのか？」

「ハッ、アンタが来いよ！さつきから受けてばかりで自分から攻撃しようとしねエ臆病者がア！」

「上等」

シャドルはこの試合を通してブライオのことをいくつか学んだ。パワーやスピードよりもタフネスが飛び抜けているということ。でなければいくらシャドルの一撃が弱くてもあれだけの連撃をモロに喰らっていれば体力的にもキツイものがある。そして、

挑発に乗りやすい。

ブライオは頭に生える二本の角を前に、両腕は大きく広げてエルボーの体制を取っていた。

「なるほど、横に逃げてもダメな感じのヤツか」

「——例え上に逃げたとしても、角の餌食よ！」

たしかに先ほどの急ブレーキでそれは実証された。止まらない速度ではないのだ、しかも本人に負担がかからないレベルで。だからこそである、こんな状況であるがためにシャドルはいつもより冷静でいられた。

——シャナのために、ホクヤをぶつ潰すために、まだ負けるわけにはいかない！

ブライオとの距離が縮まる。

『まさに猪猛突進！これはシャドルヤバイんじゃないのか!?』

『否、それはないな』

『イビルタ王妃、それどゆこと!?』

『此方にはわかるのだ、彼奴はもうこの試合勝つ気にいる』

——でなければ、どうしてあのような表情を浮かべよう。

ブライオの角が迫る、シャドルは体制を瞬時に低くして四肢を支えにする。

四足歩行、四肢に気を込めてブライオの腹下にまで一気に潜り込む。

「……」

「ゴオオオオ!!と落下速度に身を任せてブライオは急降下を始める。シヤドルはその様子を静かに見ながら、僅かな違和感を感じていた。

「……あれ?」

「つたく、締まらねエな」

シヤドルは溜息を吐いて、最後の力を振り絞り十歩先まで大股で移動する。壁にもたれかかって脚の回復に専念していた。

「俺が動くことを計算して、落下場所はしっかり決めやがれ」

ブライオはそのまま隕石のように頭から落下したのであった。もちろんシヤドルに当たるとはならず、コロシアムの石盤に。

『呆気ねえ!何だよ、今まで熱かったボルテージが一気に冷めちまったぞ!とにかく、勝者シヤドル・ポスケスウウウ!!』

ガレオスが宣言すると会場は歓声で覆われた。敗者のブライオは意識を失っており、勝者のシヤドルは脚の痺れの回復を静かに待っていた。そして、誰かに聞こえるかもわからないほどの声量で呟く。

「——待たせたな、ホクヤ」

本来ならば勝利宣言と共に指差して宣戦布告してやるつもりだったのに、何とも格好

のつかない勝利で終わってしまったが歓声は鳴り止まなかった。

※

数分後、第三試合の準備はすぐに整い両選手も既に入場を済ませていた。

『さあさあ一回戦も後半戦！お待ちかねの第三試合、ドーバス・ウーバー対パイル・ペン
ドラゴ！』

『ドーバス様あ！』

『マラナ王妃うるせえ！』

ドーバスの登場に会場は再び歓声の渦で湧き上がる。覚悟を決めたのか、パイルの表情はいつにましても真面目で硬く、圧倒的存在を目の前にしても臆することなく睨みを利かせていた。

——そして、第三試合は終わる。

試合開始の宣言と同時に駆け出したパイルの攻撃に対してカウンターを放ったドーバス自慢の飛ぶ右ストレートが直撃したのだ。

——凄まじい風が発生し、コロシアムの壁にパイルが綺麗に埋め込まれていた。たった一振り、一分も経つことなく第三試合はまさに一瞬で決着がつき、ドーバスが大
会二連覇、チャンピオンとしての実力をズーマコロシウムに知らしめた瞬間でもあつ

た。

——会場は再び歓声で包まれる。

39. 逡巡の間に

——絶句。

いや、正確には言葉が出ないだけかもしれない。あまりにも圧倒的な力を目の当たりにしてしまったからそれも仕方ない、あれが師匠の実力。

デイハルド武道大会二連覇を成し遂げたチャンピオンダーバスの力の一端というわけか。パイル先輩だって決して弱いわけじゃない、むしろ俺と互角かそれ以上かそれ以下。どちらにせよ俺と実力はそう変わらないはずだ、ここまで力の差があるなんて思いもしなかった。

右のストリートを撃った。その一撃、しかも飛ぶパンチだったから直接触れずに、威力だつて落ちてゐるはずなのに。あれに直撃したらどうなるかなんてわからない方が馬鹿だ、それだけ師匠の実力は馬鹿げてる。

俺の隣で観戦してたラグナなんて顔を真っ青にさせちやつてるし、本人の前でないとはいえさつき思いつきり宣戦布告してたからなあ、ドンマイ。

「な、なんだよアレ!?意味わかんねーぞ、お、俺のパンチの方が強いじゃねーか!」

…… 無理して強がなくてもいいのに、気持ちにはわからなくもないけどな。

—— 負けたくない、テンション上がってきた。

実力差は圧倒的だが、あの人を全力で叩きのめしたい。勝ちたい、逃げ出したいとか勝てないかもしれないという感情よりも勝利への欲望が打ち勝っていたみたいだ。やってやろうじゃねえか、面白え！

『じゃあ、本日最後の一回戦だ！午前の部最終第四試合イ！ダビッド・イーター対ラグナ・バルトニオン！早く来い、俺様もう待ちきれないぜ！』

「おい、呼ばれてんぞ」

「…… ホクヤあ、俺わざと負けてもいいかな？」

なんちゆうへタレだこの野郎。もう怖じ気付いてやがるぜ、そんなんでよくあんな大口叩いたもんだ。

「はあ、それでも俺は困らないけどバツツにそんな格好悪い醜態晒すつもりか？」

ピク、と俯いてたラグナが僅かに動いた気がした。

「俺と戦うんだろ、だつたらせめて勝てそうな試合くらい勝ってこい！俺は負け犬には興味ねえ！」

「—— 上等じゃねえか、コリアア！やってやるぜ!!」

うおおおおお!!と雄叫びを上げながら馬鹿はコロシム中央にまで全力疾走し

て行ってしまった。

『お、いいネ！ラグナは既に気合十分じゃねえか!!まだドーバス退場してないってのに、だが俺様嫌いじゃないよ!!頑張れよオ!!』

『その俗物ウー！ドーバス様の景観を損ねるじやろうが、どかんかい!』

『マラナ王妃イイイ!?ちよつとオ!?何言ってるの、アンタ何口走ってるのオ!?』

…… なんとというか、スゲー単純な奴だな。まさかあれだけで焚きつくなんて思いもしなかったぞ。

ま、ベヘモン国ではあいつの力を見ることなく終わったからここで見るのもアリだな。未だにギヤーギヤー騒ぐマラナ王妃を遠目に見ながら苦笑いを浮かべてしまう。さすが王族、どこでも自由だな。バツツ達の国はそうならないことを願おう。

「お、そろそろか」

「そうじゃな」

—— 第四試合が始まる！

※

その頃、ズーマコロシム医務室ではマクベスが溜息を吐きながらせと働いていた。大会で負傷した選手を治療する、本来ならばもう少し人手を増やしたいところだが

「マクベス自身が一人でやると聞かなかつたのだ。

一番重症のパイルはしばらく目を覚ましそうにない、午後の二回戦を控えてるシャドルの治療を済ませ（治療後どこかへ行つてしまった）ミヨルドとブライオの治療に専念する。

まあ、パイルもそのうち目覚めるだろうし、何やかんやで頑丈な奴だからな。

「——ホクヤめ！死ぬかと思つた、我死ぬかと思つたぞ！」

「手抜くなつて言つてたのアンタでしょ」

……こんな状況下に何人も配置したら無事で済まないのは目に見えてる。今も乱闘起こしかねない危険な状態、しかも二人ともそこそこの役職だからこんな光景を見るのは自分だけで十分、それがマクベスの考えであつた。

片やこの国の第三王子。

「つくそ！次こそは我が、我が必ず勝利する！」

片やビスティーブ牢獄署長。

「あの若僧には借りができちまつたからな。早く犯罪ごと起こしてくれないかな、牢にぶち込んでやりたいね」

——マクベスは小さく溜息をついた。

※

「——ッ！あんた誰だ?!」

「今更かいな」

——試合開始から二十分が経過した。そこで俺はさつきから話し相手になつてくられてた爺さんの名前を聞いてなかつたことに気がつく。てか、ここ選手控え室だから選手以外は入れないはずなんじゃ、爺さんはやれやれと溜息を吐く。

「——まったく、期待外れもいいところだ。あいつの弟子でフェバルならばもう少し実力はあると思うたが」

「は?」

この爺さん!ヤバイ!!

なんで、なんで俺がフェバルだつてこた知つて、ていうかフェバルの存在を知つている、のか?

「あんた、一体: : ツ!」

「わしか? わしはバルバルドじゃ、お主はホクヤだつたか」

爺さん、もといバルバルド爺さんのさつきと雰囲気若干変わった気がする。この感じ、師匠? いや、レオナルドさん、なのか?

レオナルドさんのような時間を重ねて積み上げてきた実力と師匠の圧倒的な覇気が

混ざり合ったような、それでいて恐ろしい。

「——そう殺気立ちなさんな、お主とやりあう気はないわい。この老いぼれ、若僧とやりあつたところで勝てやせんからな」

——そりや、こつちのセリフだ。

この爺さんには勝てない、本能でそう悟ってしまった。

「ふむ、なるほどのう。悪くはないがどこか粗があるの、必要な時だけ気を出すようにしとるようじゃが、繊細さに欠ける。やはりドーバスは師事するには不向きだったか」

師匠のことを呼び捨て？

「そこをフェバルの能力で補つとるのか、ふん」

爺さんは退屈そうに踵を返し、気がつけばもう隣にはいなかった。あの人は一体、でも、近いうちにまた出会う。

根拠はないけど、そんな気がする、いや違うな。出会わなきゃいけないんだ、あの人は俺の知らないことを知っている風だ。

——上には上がいる、か。

師匠を見てから麻痺してた、師匠より上に立つ実力者がいるなんて考えることもなくなっていた。

俺が試合に目を戻すとガッツポーズをしたラグナが雄叫びを上げているところだっ

た。歓声が爆発する、試合が終わったんだ。
こうして、午前の部は終わりを告げたのだった。

※

ホクヤの元から立ち去ったバルバルドは静かに呟く。

「——求めよ、さずれば叶う。か」

それはデイハルド王国、いやアルドニモーに伝わる母神時代の言葉である。その真意は理解できたものはいないが前向きに、師匠が弟子を門出に出すときに送る言葉として使われてきた。

「——見つけた！バルドさん!!勝手にウロウロせんといってください!」

「おお、ドーバス!腕は衰えておらんようだな」

「つたり前ですよ!というか、あんたまさかホクヤと?」

「——ああ、お前の弟子らしい相応の実力者、となるのはこれから次第つてとこかの」
かつて、共に戦ったジルフ・アーライズと同じフェバル。弱いわけがない、まさか自分の弟子がそいつを支持することになるなんてな、運命とはわからないものである。

「そんなことより、レオナルドはどこかの?」

「アーサー王?さあ、開会宣言以来見てないんですけど」

「そうか、ま、この辺ウロウロしとけば見つかるじやろ」

「選手控え室から出て行ってくれ！」

弟子は師匠に苦勞させられるものである。その意思も脈々と受け継がれていることに本人達は気付くことなく世代という名の波は荒々しく、次の世代へと飛沫を運び続けていることだろう。

——そう、脈々と。

40. 再会と邂逅と浮上

午前の部が終わり、午後の部が始まるまで休憩を挟む。俺も腹減ったから適当に飯でも済ませて軽くウォーミングアップして過ごすか。

とりあえず医務室に向かってミヨルド王子達の様子を見に行く、距離あるけどここまです騒がしかったら大丈夫そうだな。うん、見に行く必要はなさそうだ。踵を返して来た道に戻る。

廊下を歩いてると何か騒がしいやつ、ラグナに絡まれた。

「おうホクヤ！試合見てたか、やっぱ俺は強かったんだよ、この調子なら次の試合もいけちゃうんじゃないかね？」

「…… お前のメンタルはどうなってるんだよ」

こいつの前向き具合はどうなってるんだ、一回解剖して分析してみたいくらいだ。そんなアホなやり取りをラグナとしながらズームマコロシアムの外を目指す。選手控えの中にならずといると息が詰まりそうなんだよね。あ、ラグナといえば……

「そーいや、バツ達も来てるんだよね？」

「バツツ陛下な！いつまでも友達気分でいるんじゃないやねえよ、あの人とお前じゃ格が違うんだよ」

なんかムカつく言い方してくれるんじゃないかよ。

「で、どうしたんだ、もしかして会いに行こうとか考えてないよな？」

「いや、普通に考えてる」

こいつに案内してもらおうかと思っただけ、その必要性はなさそうだと判断した。ちようど出口にあたる場所でバツツが待っていたからである。

「ホクヤさん、お久しぶりです」

「ああ、久しぶりバツツ陛下」

俺たちは互いに小さな笑みを浮かべてそれぞれの手を差し出して握手をする。数ヶ月前と比べて随分様になっているようだ。人を束ねる風格というかカリスマ性を感じる。

「ラグナも試合お疲れ」

「つたりめーツスよ。俺が負けるわけないでしょ！」

「ホクヤさんも以前来られた時と比べて随分強くなられたみたいだ」

「ま、少しでも目標に近づきたいためでもあるからな。他の取り巻き達はどうしたんだ、べへモンで留守番か？」

「いえ、全員来てますよ。僕らがいなくても国は十分回りますから」

なるほど、中々の自信だ。あの一件以来努力を重ねてきたことがわかる。いや、あの一件以来ではないのかもしれないが頭角を現したのがあの一件以来といったほうがいいのかもしれないな。どちらにせよあの日のバツツ王子ではない、ご立派なバツツ陛下下つてところか。

「それよりもホクヤさん、アーサー王がどこにおられるかご存知ないですか？」

「レオナルドさん？　そういえば開会の時以来見てないな、どっかで試合を見てると思うけど」

あの人も自由人だからな、今頃その辺の店巡ってる可能性もあるんだよな。気で追跡しようにもこれだけ人が多いと難しいし。

「そうか、見てもらいたいものがあつたんだがそれなら仕方ないか」

「まあ、大会開催中はその辺にひよっこり顔を出すだろうよ。それより飯くわねえか？　奢るよ」

「そうですか、すみませんね」

「気にすんなって」

「ケツ、テメエの施しなんぞ必要ねえよ」

「そうか、ならラグナはいいな。バツツ、サラダにムレアジナ、タザニア、ランバーも呼

んでくれ。ぶつ倒したお詫びとかそんなんじゃないけどあいつらにも奢るよ」

「本当ですか!?!すみません」

「気にすんな」

「——ま、待って！誰が行かないつたよ!!仕方ねえからゴチになるよ!なるから!!置いていくんじやねえええええええええええええええええええええええ!!」

※

ドーバスからの逃走に成功したバルバルドはハーレー街の片隅にある小さなバーにやってくる。ここはある意味で思い出の場所であり待ち合わせ場所でもある。準備中という看板が斜めにかけている。これは準備中ということではなく、予約客のみしか入ることができない仕組みとなっている。

——カランカランカラン、とバルバルドが扉を開くと甲高い金属音がバーの中に響く。そこで待っていた男、現ディハルド王国国王のレオナルド・アーサーがゆつくりと振り返る。手に持ったグラスを見るに先に飲み始めてる様子だった。

「遅かったなバルド、そんでもって久しぶりだな」

「本当にな、レオナルド。同じことを一ヶ月前くらいにも同じこと言ってたよな? 儂からしたらお前との再会なんぞ記憶に新しいぞ」

「そうだったな、そうか、あれは一ヶ月前だったか」

どこか空虚な笑みを浮かべるレオナルドはグラスの中におかわりを要求する。どこか穏やかな表情を浮かべてトクトクと注がれる酒を見る。

「——ッ、お前まさか!？」

「その話は今はいいだろ、シヤナの言伝は届いたか？」

「……しつかり届いたよ、でなきや儂はここにはいない」

「そうだな、我としたことが」

バーのマスターはグラスを拭きながら二人から背を向ける。客の会話を盗み聞くわけにはいかない、客から金を取るが情報は取らないのがこのマスターの主義であった。

「それで、N・E・O.なるものとカスティルアの接点は見えそうか？」

「儂もお前に頼まれて数週間住んだ程度だが、有力な情報は得られんかったよ。そもそもN・E・O.なるものの存在を確認することもできなかつたが、本当に実在するのか？」

バルバルドがレオナルドの隣に静かに座る。高身長のリオナルドと低身長のリバルドが並ぶ。互いの視線は合うことはないが、それでも長い付き合いであることは背中が語っていた。

「ある、奴がやつとの思いで引き出した貴重な情報だ。カステイルア国王は奴だ、我らに報復せんとはとても思えない」

「だが、それは53年も前のことだろ」

「そうなんだが、そうなのだが、どうもここ最近胸騒ぎがしてならんだ。ホクヤ達がベヘモンに行つたあの日から」

「ホクヤ、あのフェバルの若僧か。ジルフと同じ星を紡ぐ旅人」

「会つたのか？」

「まあな、弟子の顔を見るついでよ」

バルバルドは静かに差し出された酒を飲む干す。グラスはあつという間に空になり酒気を帯びた溜息を一つ吐く。

「……これも、巡り合わせなのかもしれない」

「どうだかな。だが、今は年に一度の武道大会だ。しんみりせずに楽しくいこうじゃないか」

「……そうだな」

※

バルバルドを見失つたドーバスはマラナ王妃に捕まり、隣に座らされている。食事も

済ませ人々の声で湧くズーマコロシアムの陰で身を休めていた。普段傍若無人なマラナ王妃は眠りについており、まさに眠り姫だった。こんな穏やかな表情を浮かべられるのかとドーバスは感傷に浸りながら頬を優しく撫でる。

小さな足音がこちらに近づいてくることに気がつき、ピクリと耳を動かす。そこにいたのはシヤドルだった。

「久しぶりだな、シヤドル」

「そうかア？ホクヤといるときあつたからそうは思わねえが」

「会いはしたさ、会話をするのが久しぶりだと言ったんだ。特にこうして面と向かつて話すのは昨年の決勝以来じゃねえか？」

「ハッ、違くないな」

チャンピオンとあと一步でチャンピオンになれなかった者。静かな空間にピリピリとした緊張が走る。互いにマラナ王妃のことを気にかけている（というか起きられると面倒）ため殺気までは飛ばさない。言葉に出さずとも二人の考えが一致した奇跡の瞬間だった。

「今年は昨年みてエにはいかねえぞ、今度こそテメエを正面から叩きのめしてやる」

「やってみろ！お前がこの一年でどれだけ強くなったか楽しみだ」

挑戦者とチャンピオン。

ここでもまた前へ進むために二回戦負けるわけにはいかない理由を持つ男の闘志の静かな火種がメラメラと燃え上がり始めていた。

※

動き出す者、動きを待つ者、動きに気がつかぬまま目の前の出来事に目を奪われている者。

様々な思惑、思想がデイハルド王国を交錯する。

「……待つてろよ、アーサー王。テメエを喰い千切るのはこの俺、だア」

——そして、水面下の動きに気がつく者は誰もいない。

カルデラの鐘が国中に鳴り響き、デイハルド武道大会午後の部二回戦が始まろうとしていた。

41. 二匹の男は二度激突す

——ポスケス、俺たちはこれからこの名前を使って生きていこう！

——ぼ、ぼすけす？自由??

——そうだ、シヤナ！ポスケス、母神の残した言葉の一つだ、俺たちは自由に生きるんだ！

——ぼすけす、あたしの名前はシヤナ・ポスケス？

——それで俺がシヤドル・ポスケス、俺がお前を自由になれるようにしてやる！それだけじゃねえ、不自由な奴を自由に生きられる世界に俺が変えてやる！

——じゃあ、あたしがお兄ちゃんを自由にしてあげる！約束！

——お、おう、そこまで言うなら頼むわ。

——うん！

※

『はい！お待たせえええ！俺様も待ちくたびれたぜ、これからダイハルド武道大会午後

の部を始めようとゲスト紹介に移りたいが、オイオイオイ！ホクヤもシャドルも既にリングに立ってるじゃねえか、やる気満々じゃん！』

『若いとはええのう』

『そういうわけで、午後の部のゲストはアーサー王と共に国を守った五人の英雄に数えられる一人、バルバルドさんに来てもらったんだけど、イビルタ王妃？あんた午前の部だけだろ、もうここにいないくていいんだぜ？』

『黙れ、此方がどこにおろうと勝手やろ』

『もうやだ、この王族達！』

——ついに、この時が来た。

シャドル、あいつと決着を着けるこの瞬間が。コロシアムの中央では奴が既に待ち構えている。上等じゃねえか、その余裕ぶってる面歪ませてやるよ。

もう、こっちは十分なくらいにテンション上がってんだよ！

——バチ、バチバチ。

歓声が響いている。風はほとんど吹いてない、灼熱の太陽が照ってるこの中心点がここまで心地よく感じるなんてな。

あいつには既に二回負けてるんだ、もう負けられない。次はない、ここで勝たねば師匠とも戦うことができないんだ。全てが水の泡になってしまふ。

「——やつとテメエを潰せる。手加減できそうにねエが、精々死なねエこつたな」

「そつちこそ、ビビつて逃げるんじゃねえぞ」

「ハッ、言うじゃん」

体が、自然に構えを取る。「テンション」が全身から漲る。力の漏洩が抑えられない、もうどこから向かつてきても反撃に移れる自信さえある。

試合開始の合図を無視してでもこちらから攻めたい、あいつの速度は異常だ。それ以上の速度で対抗するのがいいんだろうが今の俺じゃ気と「テンション」を駆使しても追いつくのがやつとかもしれない。

——だから、少しでも不意を突いて揺さぶりをかけるしかねえ！

『両者とも気合十分みてえだな！じゃあ、そろそろいくぜエ！試合ス——』

ダッ！

俺は気がつけば既に駆け出していた。

俺の拳がシャドルを狙う、シャドルは重心と左足だけを動かし、軽く躲す。何の苦勞もなく、あつさりど、そのままシャドルは右足で蹴りを、避けれない！

「がっ!？」

「——遅エ」

このやり取り、二秒ちよつと。まさに一瞬の攻防だった。

『ト、つて最後まで言わせろや！』

『若いのう』

二回戦、第一試合の幕が上がった。

※

吹き飛ばされたホクヤは体勢を整え直す、微力ながら発動していた【テンション】によつて痛みだけならば感じることはない。だが、それも一時的に体を騙すようなものがある。ダメージ自体は蓄積する。

「ッー！」

「———シャッター！」

シャドルは止まらない、カウンターの右蹴りを放つてから大した時間も経たないうちに駆け出し両腕に気を纏わせる。

———気爪拳、シャドルが得意としている気の使用方法。両腕に爪状の気を纏わせてまずは挨拶代わりに右腕を大きく振るう。ホクヤも負けじと右ストレートを放ち迎えて撃つ。

打撃と斬撃、どちらが強いのかは明確だが気の上に【テンション】をさらに相乗させたホクヤの拳はそんな相性ものともしなかつた。

動きが止まったところをホクヤが左のストレートを、それをいなしてはシャドルが大きく上段からの左の攻撃を。

交互に行われていると思われた攻防だが、もはや今となつてはとんでもない速度でラツシユの応酬のため観客の目ではとても追いつくことができなくなっている。

『こいつあすげえ！あのシャドルと速度で互角に渡り合つてやがる！』

『いや、若干シャドルの方が速度は上じゃな。あのホクヤでもシャドルの速度には到達できんかったか』

『種族の差、か。どうやらシャドルという男は速度に長けた種族のようじゃの』

『シャドルー！その調子であるぞ、此方のシャドルが負けるなどありえない!!』

『イビルタ王妃、うるせえ!!』

「こ、んのお!」

軌道を変えた右ストレート、左腕で動きを完全に止めてからの攻撃だった、完全に不意を突いた一撃だったが、殴った先にシャドルはいなかった。

手応えはなく、最初からそこに何もなかったかのような感覚に襲われる。

——この感覚を、ホクヤは知っている!

「——らあ!」

「ちい!」

死角からの一撃、ホクヤは見事にその一撃を躲したのだった。シャドルは自慢の跳躍力で宙を蹴り、空中を飛び回る。

「次は、外さねエ！」

タン、タン、タン！三度空中を跳ねホクヤの死角から死角へ、さらに死角へと三段構えの移動をする。最終的には四肢を大地に預け両腕を加えたことによりさらに速度を上げてホクヤに強烈な右足の蹴りを放つ。

気爪拳よりも威力の高い空中を蹴ることのできる脚力、まさに凶器の一撃に気を纏わせて鬼に金棒。

——しかし、その一撃は当たることはなかった。

「……上か」

跳躍力ならホクヤも負けてない。気と「テンション」を纏わせた状態でのジャンプはとんでもない飛距離を叩き出した。

「ハッ、だがテメエは俺と違って自由に動けねえ！狙い撃ちにしてやるよオ！」

タン、タン、タン！と再度空中を蹴りゆっくりと落下してるホクヤの位置に向かって一段一段的確に跳躍する。

両腕に気を纏わせて、気爪拳の状態を維持したままホクヤの背後に移動する。

ここでシャドルは気がついた。

(なんだ、コイツ落下してねエ?)

そう、ホクヤは重力に従わずにその場で静止していた。そのことに気がついたのはシャドルがホクヤの背後にギリギリまで迫ったその瞬間である。

次の瞬間、ホクヤは「テンション」を纏わせてシャドルの背後に移動した。

「なっ!?!」

「——油断、禁物だぞ」

ホクヤの蹴りがシャドルの脇腹に直撃する。完全に不意を突いた一撃、残像を作り出す暇もなくモロに一発まんまとくらってしまった。

「ギー」

すぐさま体勢を立て直してホクヤを睨み返す、まさかとは思いがシャドルの予感は的中した。

ホクヤは自分よりも低い位置にいるシャドルの場所までの確に移動してきた。

「てめ、やっぱり!」

「そうだよ!まさか、俺もできるなんて思ってたけどな!」

——笑顔。ホクヤは子供のように無邪気な楽しそうな笑顔を浮かべながらシャドルに右ストレートを放つ。

両足でガードするが、シャドルは弾き飛ばされてしまいリング中央に背中から急行落

下してしまう。もちろん、衝撃は吸収できるわけがない。

そう、ホクヤは人類の夢とも言える偉業を成し遂げた。

【テンション】の能力があつたからこそ、シャドルの空中闊歩を見たからこそ実現できた産物。

「——人間、テンション上がりや空だつて飛べるんだ!!」

「飛べるかア!!」

シャドルの努力が完全に否定された瞬間であつた。

※

「うわー、ついには空まで飛んじやったかホクヤの奴」

「……もう、一々驚いてる暇なんてなさそうだね」

「ウハハハハハ、いいぞ！ホクヤア!!」

観客席に座っているミカ、シャナはもう呆れ半分諦め半分でギムは一人笑い声を上げながら盛り上がっていた。

※

俺が空を飛べると気がついたのは大会が始まる一週間前、シャドルのあの空中を跳ね

回る移動技に対抗するため自分もできないかと試していたら、気がついたら空を飛んでいた。

その時は本当にテンション上がった、めっちゃ嬉しかった。思わずデイハルド王国のあちこちを飛び回っちゃったもん。すげー楽しかった！

星を一周とかしようかと思っただけ、サイズがわからない上に帰ってこれなかったら嫌だったからやめた。

だけど、空飛べるようになってから色々とできることが増えた。戦略の幅も広がった。これは大きな一歩だと思った。でも、「テンション」が発動してる時にしか飛べないってのがネックだ。「テンション」だって常時発動させてられるわけじゃないし、気分の問題なのだ。

「——ぎっけんよ、クソヤロー！」

空中で停滞しているとシャドルが殺気剥き出しにして迫ってきた、そのまま蹴りを防ぐ。空中を蹴らないと空中に停滞できないシャドルと「テンション」を発動してる内から空中に停滞できる俺とでは体力の消費が大きく違う。

「お、ち、ろオー！」

シャドルは俺よりも一段上に駆け上がり、踵落としを放つ。俺は後方に吹き飛ばされるも体勢を整え直して再び空中にいるシャドルの元へ飛ぶ。

そこから右ストレートを放つ、シャドルは尻尾で受け止める。

『おお！まさかの空中戦!!互いに空を飛べるなんて、俺様びつくり!それでもって羨ましいイ!!』

そこから空中でラツシユが続いたが、シャドルの体力が限界を迎え、地上に着地した。脚を抑えてることから既に限界は近いのか。

いや、そんなことない。

あいつの目はまだ死んでない。

「——まだ、だ、こっつからが本番だ」

さつきよりも力強い眼差しで、さつきよりも確かな力強さを持った、先程まで違う対等な者に向ける視線。

俺はこの時は知らなかったが、この時シャドルは俺を初めて対等な敵であると認識したようだった。

今までの見下した視線、態度、全てを捨て去り倒すべき敵だと。シャナのためでなく、シャドルの道を遮る敵であると。

「俺は、お前を倒して先に進むぞ、ホクヤ!」

42. 雌雄決す

「お兄ちゃん…」

観客席にて、ギムとミカ親子に席を外すと一言言つてから、シャナは場所を移して二回戦第一試合を見守る。

対戦カードはホクヤとシャドル。シャナにとつての片想いの相手と実の兄である。普段の仲の悪さからいつかは全力でぶつかるときはやってくると思つたがこのような形で激突するのはシャナにとつても想定外のことであり、負ければ終わるというトーナメント形式であるためどちらを応援すべきかなんてことは考えてない。

勝者こそが強者、いくら大切な人同士の激突であつてもその事実は変わらない。自分も男だつたらあの場に立つことができた、と再度リングに目を向ける途中に見知つた人影を捉える。

偶然なことにあちらもこちらに気がついたようでこちらにゆつくりと近づいてきた。

「シャナさん、お久しぶりです」

「やめてください。あたしのような者に、シャナとお呼びください陛下」

「そう言われましても、貴女と僕の仲じやないですか」

「……改めてお久しぶりです、バツツ陛下」

数ヶ月ぶりの再会、シヤナがシヤドルの代理でベヘモン国へ行つたときに知り合つたバツツがデイハルド王国に来ていた。出場選手にラグナという見覚えのある男がいたため可能性はあつたが、今このとき確信へと変わった。

他にも懐かしい顔はいた。

「あ、シヤナちゃん久しぶり！」

「久しぶりね、ムレアジナ」

「もう、言いくいからムーでいいって！」

一人キヤツキヤツと騒ぐムレアジナはシヤナの手を握るなりブンブンと上下に振るう。肩が何度か外れかけた、危ない。

「——ホクヤさんなら大丈夫ですよ」

「……はい」

彼女のことを察したのだろうか、バツツが優しく安心させるように微笑みかける。

「そうだ、アーサー王がどちらにいるかご存知ないですか？」

「アーサー王ですか。多分特等席で観てると思いますけど、ご案内しましょうか？」

「本当ですか、お願いします！」

もう試合を観る気がなかったシヤナにとっては願っても無いことだった。これ以上観てたら本当にどちらかに感情移入してしまい勝敗に納得できなくなってしまう。

勝つのはどちらか一人。

シヤナが知るのは結果だけで良かった。

※

———な、んだ、これは？

『おおーシヤドルが立った！立ったぜ、すげー根性だ!!』

シヤドルが身に異変を感じたのはホクヤが宙を舞い、劣勢の状態になってしまい立ち上がった時である。

もう立つことができなと思うていた両脚の痛みは引いており、それどころか胸の内から力が湧き上がってくるような感覚。ビキビキビキ、と気が火花を立て始める。

四肢をリングに預け、倒すべき相手であるホクヤを睨みつける。

———今は、負ける気がしねエ！

四肢をふんだんに使ったシヤドルの跳躍は今までで一番の速度を誇り、一本の矢の如くホクヤに向けて放たれた。

「お、おおおおおおおらあ!!」

「ツッ！」

気爪に変化させた両手を振るう、躲されはしたもののホクヤの鼻に傷が残った。赤い血が静かに流れている。

この感覚が何なのかはわからない、わかることはただ力の湧き上がる快感と負ける気のしない絶対的な自信。

——今なら、もつと、もつと速く跳べる気がする！

ホクヤもシャドルもこの時、気がついておくべきだったのかもしれない。

シャドルは自身の身の異変を。

ホクヤは得てから一年も経たない己の能力を過剰な程に使いこなせていることに。

だが、時は止まらない。

——試合はただ、静かに続行される。

※

ダン、ダン、ダン、とシャドルの奴がさつきよりもキレのある動きで空中を跳躍してくる。ていうか、どうなってるんだよ本当に!?

さつきよりも何倍も速いし、爪の鋭さも増してる……！

「ガア！」

「ぐっ、くそー！」

いくらこちらが空を飛んでいるとはいえ、ただでさえ速い野郎が更に速度上げてきてんだから捉えようがない！

【テンション】は上がってきてるけど、そう簡単に引き出せるもんじゃない。たしかに、ある程度気分的に上昇してれば引き出せるけど、逆に気分が晴れないと力を引き出せないのが欠点だ。

さっきの瞬間の迷いで【テンション】の出力が緩くなっちゃった、一旦降りて体勢を立て直して地上戦に持ち込みたいけど、あの速度が地上でも健在するってなら分が悪すぎる！

さっきからラツシユを受けるのに精一杯だし、斬撃の攻撃はかなり辛い。受け止めれたらいいけど速すぎる！

師匠よりも、マラナ王妃よりも一撃一撃が速いし研ぎ澄まされてる！どうなってるだ、急にスイッチが入ったみたいに！

『強い強い強いぞ!!火事場の馬鹿力つてかア!!超スピードでシャドル、ホクヤを圧倒してるぜ!超絶燃えるシチュエーション、俺様大好き!!』

『ふむ、実力を隠しておったのか?それとも……』

『その調子だシャドルー!此方にその雄姿を見せてくれー!』

『イビルタ王妃うるせえ!』

——不幸中の幸い、それはあいつの蹴りが飛んでこないこと。多分移動に両脚を使つてるから攻撃にまで回せないんだろう。

速度では「テンション」を上げない限り勝てない、今の状態だとこれが限界。なら、その速い一撃を逆手に取らせてもらう!

『ホクヤ更に上昇! シヤドルも当たり前のように追いかけてるけど、どういう原理だ!? 俺様もうわっかんねー!』

よし、追いかけてきてるな!

そのまま、そのまま攻撃してこい!

素早くても攻撃を繰り出すまでのモーシヨン、癖が必ず出る。右の爪!

——ここだ!

「——おらー!」

「なっ」

『つ、つ、掴んだあ!? ホクヤ、あのシヤドルの腕を掴んだぞ! あんな素早いのをどうやって!』

『なるほどのう。速度が速いのなら攻撃の当たる場所を予測して事前に構えておけばこそできる芸当。奴は何もただ攻撃を受けてるだけでなく、相手の動きを観察しておつた

あいつ、片足を犠牲にしやがった！それでももう片方の脚で俺に蹴りを！

決着を着けるつもりか！全てを己の右脚に賭けて！！

——だが、俺の勝ちだ！

この拳があるから、お前が俺に辿り着く前に撃つことのできるこの拳一本あるから！

「——師匠直伝！」

——跳ぶ右ストレートオオ！！

俺の気と「テンション」が乗った真正正銘、今の俺が撃てる全力全開の一撃をモロに受けたシャドルはそのまま背中からリングに落下する。拳の衝撃とシャドルの速度によつてリングにシャドルを中心にビキビキバキバキバキバキと豪快な音を立てながら亀裂が走る。

「がっ、はあ!？」

「ハア、ハア、ハア！」

——シャドルが動く気配はない。

俺も、もう「テンション」で騙していた痛みが全身を走り立っているのが精一杯だ。

——倒した。

『あ、しよ、勝者！ホクヤ、フェルダントオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

二回戦、第一試合の幕は俺の勝利と大歓声によつて閉じられた。

あ、もうダメ、立ってられない。

ビスティーブ牢獄にて②

共に一回戦敗退という結果に終わってしまったブライオとパイルは治療が終わり、ビスティーブ牢獄へと戻ってきていた。

ブライオとしても署長の立場として長い間施設を放置しておくのもよくない。パイルはいつも通り、アスカから情報を引き出すため、ついでに彼女の精神を安定させるために不本意ながら通う羽目になっている。

事実、彼女が不安定になり同室の囚人が何人か既に犠牲になってしまっている。

「いつもすまん、パイル」

「気にしないでください署長さん、俺とアンタの仲でしょうよ」

「フ、そう言ってくれて助かるよ」

二人が署長室に向かうとそこには緑と青の中間色の肌の男、シャレオンが優雅に署長席に腰掛けていた。

「あ、しよつちよさんお帰り」

「今戻った。俺のいない間何もなかったか？」

「ええ、何も。一回戦敗退お疲れ様でした」

「……フン」

シヤレオンはすれちがい様にブライオの肩を軽く叩き、スウウウ、と姿を消してしまふ。どうやら彼は景色と同化するというよくわからない能力を持っているようだ。

——獄内で一箇所、最近になり一際騒がしくなった一室は今日も騒がしかった。

「コオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ、ウツ!!」

ギラ・サイファーを收容している檻である。建国祭の時にホクヤに敗北し、周囲に甚大な被害を巻き起こした男である。

「あの野郎、まだかよオ!俺はいつまでここで繋がれてりやいいんだよ、我慢ならねエ!」

ガシャン!ガシャン!ガシャン!と一際嚴重に拘束されている身体を暴れさせながら、鋼鉄の鎖を引きちぎろうと悪鬼のごとく形相を浮かべている。

ギラの咆哮にも近い叫び声は獄内に響き渡り、今にも鎖が破壊されてしまうのではないかという勢いである。

だが、デイハルド王国一の牢獄の堅牢さは伊達ではない。そんな簡単に鎖を引きちぎれるわけもなく、金属音がただ鳴り響くだけで終わってしまう。

ギラの活動が活発になったのはほんの数日前、何の前触れもなしにこのようにして鎖を引きちぎろうとと暴れ出すことが多くなってきた。

最近になってその頻度は増している。

「奴もそうだが、最近獄内の奴らの活気が溢れてないか？」

「いわれてみればな。悲鳴じゃなくて怒号が響き渡るとか誰得なんだって話だ」

「悲鳴も誰も得しないでしょうが」

そんな話をしながら二人は署長室からアスカの元へと向かう。唯一外に繋がる窓がある署長室の窓から溢れんばかりの歓声が響き渡ってきた。ズームコロシアムの方向からだ。

「試合が終わったみたいだな、どうせドーバスの勝ちだろうな」

「となると、明日の決勝はホクヤの奴とドーバスさんか」

「ま、負け犬の俺たちには関係のない話だ」

自嘲気味な笑みを浮かべるブライオに対して、パイルは自分の弟分（だと勝手に思い込んでる）が決勝に行けたことに心の中で祝福する。

——明日か、何ごとも起きなければいいが。

この時、口には出さなかったがブライオの杞憂がどんな形で現実に反映されることになるか、誰も知る由はなかった。

43. 二回戦が終わって

知らない天井、じゃなくてめちやくちや見慣れたギルドの天井だ。

あれ、何か前にも似たようなことがあった気がするぞ。でも、今回は倒れたことはきちんと覚えてる。前後の記憶もある、多分「テンション」を長時間使って気が抜けて強制解除みたいになったから今まで騙してた疲労とかダメージが一気にきたんだろうな。

まあ、状況は何となくつかめたけど、時間も結構経ってるんだろうな。もしかして師匠とラグナの試合終わっちゃったとかそんな感じなのかな？

「あ、ホクヤ起きた？」

——ガチャ、と扉を開けて部屋に入ってきたのはミカだった。いつものウエイトレスの格好の上にエプロンをしている。

「おう、今起きた。ていうか大会はどうなったんだ？」

「大会は終わったよ、ドーバスさんの圧勝で。傷はマクベスさんが治してくれて、もうすぐ夜だよ」

「夜、か」

どっこいせ、とりあえず体を起こす。て、ミカ？何で顔を逸らすの？

「ちよ、ホクヤ、上着て！」

「…… あー」

下は履いてたけど上は何も着てなかったか、自分の状況を把握するの忘れてたな。ていうか服どこだろ、今の今まで寝てたから全然わからん。

「早くしてよ！」

「もういいだろ、今更」

「今更!？」

なんか面倒になってきた。そういやシャドルはどうなったんだろうな？

あの時考えなしに全力ぶつ放したけど大丈夫なんだろうか。

「ミカ、シャドルは？」

「シャ、シャドルさんは簡単な治療を済ませてどこかに行っちゃったよ！」

うん、心配する必要なさそうだな。

そういえば、試合の途中からシャドルの力。あれは一体なんだったんだ？

何か俺の「テンション」と似ている雰囲気だったけど、あいつはフェバルじゃない。はずだ。

知識が少ないから一概には言えないのが痛いな。そもそも同じ能力が宿ることなん

てあるのだろうか？他のフェバルはエーナさんしか会ったことない、話にはジルフさんも聞いているけど宇宙ってのは広いからもしかしたらあり得ることなのかもしれないな。…… やめよう、考えても答えなんて見つからない。現状じゃあな。今は目の前のことに集中しよう。この星にいられる間にできること、そもそもいつまでいられるかわからないからな。

滞在できる期間がわかるつつう便利アイテムがあれば別だけど。

ていうかミカよ、まだいたのか。

「お前いつまでそうしてるんだよ？」

「うるさい」

「ホクヤさん！」

「ここで新たな来客、まさかの王妃様。

「リリア王妃、お久しぶりです」

「はい、そうですね！まさに因縁の再会ですね！」

「違うと思います」

容姿端麗で国民の人気の高い王妃様、しかしどこか世間知らずでズレてるところがある人なんだよなあ。

ホント、ドヤ顔で何てことおっしゃってらっしゃることか。

ミカはリリア王妃の傍に寄る、相変わらず俺と目を合わせてくれないけど。この二人、意外に仲がいいのか？

「リリア王妃はどうしてここへ？」

「はい、父上の代わりに来ました！」

「レオナルドさんの？」

「何やら大事な仕事があると言って…。」

あのレオナルドさんが、仕事を優先させてる、だと!?

「友の見舞いにも行きたいが今回ばかりは外せないのだ、と本当に申し訳そうにしておりました。何か大災害の前触れのようにも思います」

「それは言い過ぎ」

でも、たしかにあの人なら仕事なんて二の次にしてこつちに来ると思ったんだけど、よっぽどのことなのか？

まあ、あまり思い詰めてくだらないオチの可能性だってあるからな。

それにレオナルドさんだからな、問題はないはずだ。

「それと、父上とマスターさんが今晚こちらのギルドの方でホクヤさんの決勝戦の前夜祭を行うとおっしゃってました！」

「前夜祭!？」

「ええ！めでたいこととこのことですので今夜は騒ぎましょう！」
「騒ぐの!？」

普通そこは優勝おめでとう！とか準優勝ドンマイ！とかではないのか!?
それとも、ただ単にレオナルドさんとオヤジが騒ぎたいだけなのか？

うん、こつちの方が可能性高いな。何かの理由を口実に騒ぐつもりだったんだな、それで俺に白羽の矢が来たってわけだ。

「ミカ、もしかして」

「やるよ、あの駄目父はりきっちゃってさ」

やれやれ、っってお手上げ状態じゃねーかよ。だからエプロンしてるのか、調理を手伝わされてたんだな。

「ミカさん、姉上達は厨房に入ってますんよね？」

「え、マラナ王妃とイビルタ王妃なら普通に料理してましたけど」

「止めなきや！早くしないと!!」

「ちよ、俺も行くの!？」

「ホクヤさんでないと、マラナ姉上を止められませんか！」

「ホクヤ！まずは!!服!!!」

「脱兎の如く！急ぎますよ!!」

「ちよ、ちよつと待てエエエ!!」

俺は意外にも握力の強かったリリア王妃に引つ張られる形となった。リリア王妃の危惧はホクトの姉貴みたく歩く生物殲滅毒物生成器みたくではなく、マラナ王妃が包丁を手にすれば万物を斬り裂き、イビルタ王妃が材料を手にすれば変なスイッチ（意味深）が入ってしまい厨房そのものが破壊しかねないからであった。

俺が行った頃には既にその片鱗が姿を露わにしており、上半身裸体のまま行つてしまった俺を見たイビルタ王妃はさらに変な方向へと暴走し始めたというのはまた別の話であり、事態が落ち着いたのは一時間後のことであつた。

※

その頃、王宮のレオナルドの元には一人の客人が訪れていた。シャナとシャドルが側に控え、大臣であるバルダーがレオナルドの側に立つ。

客人の名はバツツ、ベヘモン小国を納める現国王である。取り巻きを数人連れてレオナルドと対面していた。

「お久しぶりです、アーサー王」

「久しぶりだな、バツツ。ゲリイのことは本当に残念だったが、否すまない。この場でする話ではなかつたな」

「とんでもない、私は父を尊敬しています。父もあなたに世話になっていたみたいですし」

「そうか」

レオナルドはバツの悪そうな表情を浮かべる。事情を知るシヤナも表情を少し曇らせる。

「——早速ですが、こちらををご覧ください」

バツツの取り出したのは三枚の石盤。そこには文字が記されていた。

「これは？」

「我が国の宮殿の父の部屋を掃除していたときに見つけたものです。正確には父の部屋の奥にある隠し扉の先にありました」

「失礼」

大臣バルダーが一步前に出て石盤を手取る。モノクルが光り、バルダーの目が徐々に細くなる。

「これは、古代スア文字」

現在デイハルド王国で一般的に使われているルスア文字が普及する前、デイハルド王国が建国される以前の千年近く前にほんの一部で使われていたとされる文字の一つである。

「読めるか、バルダーよ」

「…… 申し訳ありません、何せ古代スア文字の資料はおろか、使われていた地域も少ないものですから。解読できる者がいるかどうか」

「そうか」

「バルダーさん、あなたは古代スア文字の存在はご存知で？」

質問を投げかけたのはバツツ。彼はバルダーの言葉に若干の違和感を感じた。

「ええ、存在自体は一部知られてますが、あまりに不規則な文体故に解読できる者どころかその研究者も生涯をかけても解読できなかつたものなのです。私も一度挑戦しましたが、十年かけても一文を解読することは叶いませんでした」

バルダーは申し訳なさそうにレオナルドに一礼し、石盤を元の場所に戻して下がる。

「わかった、バツツよ。この石盤を我に預けてくれないか？」

「それは構いません。元々お渡しする予定でしたので」

「それはありがたい、この文字を読める者に我は少し心当たりがあるのでな。少し当たってみる」

レオナルドのその一言でその場はひとまずお開きとなった。

「シャドル、シャナ」

「はい」

「明日決勝が終わってからホクヤを宮殿に呼んでほしい。あやつならこの石盤を読めるかもやしれん」

「ホクヤを？」

シャドルは嫌そうな顔をする。王の前であるに関わらず隠せてなかった。

「わかりました」

代わりにシャナが返事をする。シャドルとシャナはそのまま一礼して部屋を出る。

「お兄ちゃん、せめて表情だけでも隠してよ」

「無理」

ケツ、と吐き捨てて歩く速度を早めてシャナを置いてけぼりにする。

シャドルはあの時、自分の身に何が起こったのかわからずにいた。不思議と湧き上がる力、自分が何人もいるかのような不思議な感覚だった。

——あの力をもう一度引き出せたら、これまでできなかったこと、技のバリエーション、戦略の幅が一気に広がる。

ドーバスを倒すことだってできるかもしれない。努力しても届くことが叶わなかったあの領域に踏み込めるかもしれない。

——もう、シャナのためにも、俺が俺であるためにも負けはしねえ。

一年、次の大会までに打倒ホクヤと打倒ドーバスを掲げる。自然と傷と痛みは癒えて

いる。少しでも無理をしなければあの二人には永遠に追いつけないかもしれない。シヤドルは一人訓練室の扉を開けてこれまで以上に鍛錬に励むのだった。

44. 夜祭

アーサー王十二世、ことレオナルドはまもなく開催されるホクヤの決勝進出おめでとう宴会に向かうべく準備を進めてはおらず、本日二度目の来客のため再び王座の間の玉座に腰掛けていた。彼にしては珍しく不機嫌な様子である。

「……アーサー王、今間が悪いんなら日を改めますけど」
「構わん、気にするな」

そりや無理だわ、と来客であるブライオが苦笑いを浮かべる。デイハルド王国の国王様があんな不機嫌な様子で目の前に座っているのに気にするなという方が不可能である。ブライオとてビスティーブ牢獄署長というそこそこいい役職に就いているが、国王というのはいり別格になってくる。

「それで何の用だ？ できるだけ手短に済ませてくれるとこちらとしても助かる」

「あ、アーサー王！」

「は、はあ」

大臣であるバルダーは諫めてくれてはいるが、あまり長話はよろしくなさそうな雰囲気

「気だ。下手したら逆鱗に触れてしまうかもしれない。」

「実は、最近牢獄内が不安定でして、奴の動きも活発になってきていることも気になってるんですよ」

「奴？」

「ええ、史上最悪の男である奴です」

「……ッ！」

名前は出さないが、レオナルド含むその場にいた誰もが察した。

五人の英雄に数えられる一人の息子であり、先代アーサー王と第一王子ヘンリーと第二王妃リステイーネを、王族を三人も殺害したことで史上最悪の男として危険な思想を併せ持つとして絶対に世に解放してはならない男。

「……ゲルター達をビステイーブ牢獄の警備に付けよう、奴だけは絶対に逃してはならぬぞッ！」

「承知しております。俺たちも精一杯監視を怠ることはなく、続けていくつもりです」

ブライオの報告が終わる。レオナルドの額からは大量の冷や汗が流れている。空を見上げる、ルートストーンは軌道を描いている。

いつもと変わりなく小さな星々の輝きも美しい。

——風が少し強い、砂嵐が起こりそうな日だった。

※

皆が騒ぎ始めてからもう数分が経ったかな、俺は主役だけど逃げ出して屋根の上で一人空を見上げながら酒を飲んで黄昏ていた。

宴は嫌いじゃないけど、一人でいる時間も好きだ。というか、まさか師匠が乱入してくるなんてな。対戦相手の前夜祭に来るなんて相変わらず非常識というか、ハチャメチャな人だ。

主役である俺がいなくなったことにも気づかずに騒いでる様子から、やはりただ騒ぎたかっただけなんだろうな。そこで理由として俺が使われたってわけか、気に入らないけど、まあいいか。

決勝、か。一年前初めて大会に出た動機は単純に金が欲しかっただけ、アレン達に恩返ししたかっただけだったんだけど、一年も経てば人つてのは変わるものだなあ。

思えば、もう一年も経つんだな。この街に来て、色んな人と会って、色んなことがあって、告白までされて。

フェバル、故郷から追い出される形になったけど、俺は後悔はしてない。あんな未来のない場所にいつまでもいても、仕方がない。それにしても、今日は妙に風が強いな。

「た、——ク、レエ!!」

ん？誰だ、あれ？

何か叫んでるけど、風の音でよく聞こえないからとりあえず近づいてみよう。

——この人！血塗れ、じゃないか！

「どうしたんだ!? あんた、おい、何があつた!?」

「ハア、た、助けてくれ！ 奴が、奴が檻を破つ——!」

——なんだ、この嫌な予感は何？

「署長とアーサー王にも伝えてくれ！ た、大変なことをしちまつた！ シヤレオンが！ あいつは——!」

「え？」

言葉は続かなかつた、まさか、殺されたのか？

何も見えないのに、誰もいないのに明らかに体が何かで貫かれてる！

「こいつは、余計なことをベラベラとよ。王族連中やドーバスが嗅ぎつけたらどうしてくれんだ」

誰、だ？ どこから話してるんだ!?

「——まあ、いい。もうすぐディハルド王国は終わるんだ、あの人の手によつてな」
何かのほくそ笑んだ声を聞いた、その刹那の間の出来事。

ビスティーブ牢獄からとてつもない気が流れているのがわかつた。しかも、強いと

思っていた風までもがビステイブ牢獄から流れてる気によって発生した風だと、今ハッキリとわかった。

——まさか、いつしかバーミリオン王女の言っていた……!!?

『アーサー王十二世就任以来の史上最悪の犯罪者。今はビステイブ牢獄の地下深くに幽閉されとるらしいが、わっちは奴を許すことはできない』

『ヘンリーとリステイーネ、ガイアス義父様を殺した男、しかもヘンリーが死んでサガトは心を殺してしもうた。今も部屋に閉じこもったまま何年も顔を見せてくれん』

『十年、奴は十年もビステイブ牢獄におるが、恐ろしいんじや。奴が、このままおとなしくしとるなんてとても思えん！わっちの思い過ぎかもしれない、それでも、子供達のことを考えると恐ろしくて敵わん！』

あれが、十年近くビステイブ牢獄に幽閉されていた、史上最悪の犯罪者。

王族を三人も殺害した、まさに悪の権化。

ビステイブ牢獄に亀裂が走る、遠目でもわかるくらいの勢いで建物が崩落していく。

『——ローガ・アスキルト。奴に息子と娘、さらには義父を殺された』

『——つはツハア！久々のシャバの空気だ！』

あいつが、ローガ・アスキルト！

「さて、と、アーサー王の一族もろとも、この国潰すか」
 パキ、と怠そうに体を動かす、それだけでも俺にとって、奴の一挙一動が何かよくな
 いことの前触れに思えて仕方がなかった。

※

デイハルド王国、外壁付近。

「うわ、なんだ、お前ら!？」

「ローグ街のゴミ共が！誰の許可を得てここから先へ——ツガ!？」

「ごちやごちやうるせえよ、ゴミに潰されたゴミクズがア」

——ローグ街からカイヤ・キリバス率いるならず者達が武装した状態でデイハルド
 王国へと足を踏み入れた。

とても観光や知人に会いに行くといった雰囲気ではない。その中にはナナもいた。

「——悪いなホクヤ、俺はローガさんには返しても返しきれない大恩があるんだ」

あの時、ホクヤを仲間に入れなかったカイヤは本当に、心底残念そうに悔いたと同
 時に、ホクヤという強者と再び拳を交わらせることに歓喜していた。

「行くぞテメエら！ローガさんのためにその命捧げるオ！」

——夜はまだ、始まったばかりである。

45. 悪魔

ローガは嗤っていた、体の調子を整えながら全身から憎悪にも似た殺気を無造作に振りまきながら、元から大きな奴の体が一回り大きく見えた。

一瞬、俺は奴と目が合った気がした、体が思うように動かさなかった。師匠とも、レオナルドさんとも違った意味での圧倒的強者の気迫。

「カア、ハア…」

奴の呼吸、瞳孔の移動、関節の調子を確かめる仕草、逆立つ全身の毛、その全てから禍々しく忌々しいモノが発せられているように感じる。

ダメだ、何故かはわからないけど奴はこれまでに会ってきた奴らとは違うってことを肌で感じ取ることができた。

奴は、解放しちゃいけない存在だったんだ！

「何事だ!？」

「ざっきすごい音がしたぞー！」

皆、気づいてたのか。正直あれだけ騒いでたら気がつかないと思っていたんだけど。

「ホクヤ、こいつはどういうことだ？」

「俺も正直まだよくわかんねえっす。いきなりのことすぎて、ホント、何が何だか」

「お、おい！人が倒れてるぞ！」

「誰かマクベスさん呼んでこい、それかこの人を連れて行け！」

ギルドの中にいた人が一斉に出てきたものだから、パニックに近い状態になっちまっただ。ちよつとマズイ、ここにはまださつきいた透明人間(?)が潜んでるかもしれねえつてのによ、集団でいられちゃ何人か犠牲になっちまうかもしれねえ。

氣を目に集中させたら奴の姿が見えるかもしれねえ。もし、あの透明になること自体が氣でできることなら氣を発していても不思議じゃないからな。

——いた！

「——ちよ、うお！人並み!?なんだこの人波い!!?」

……逆に俺一人だけの方が危なかったかもな。それに鬼の双牙の皆も実力者なんだから大丈夫だろ。ここに来たのはいつも前線に立つてるような人達ばかりかみたいだし、そこんところオヤジの采配はさすがだ。

「……ッ」

「し、師匠?」

「そうだ、この人もここにいたんだ。だけど、様子がおかしい?」

「——余裕ぶってんじゃねえぞ」

二人が激突した。二人の体格はほぼ同じ、俺の倍以上ある体と気が、まだ俺が「テンション」の力を借りなければ、いや、借りても並ぶことができるかも怪しいレベルだ。

「アーサー王の一族の前に、テメエを殺してやるよオ！」

「させるかア!!」

ローガの蹴りが師匠に向かって撃たれるが、躲した師匠はそのまま拳を握りしめてローガを殴り飛ばす。

被害が広がらないようにここから離れて戦うつもりなんだ！

「オヤジ！マラナ王妃とイビルダ王妃とリリア王妃は!?!」

「まだ中のはずだ！早くアーサー王にも知らせねえと!?!」

師匠とローガの気の量はおそらく同等。しかし、ローガには何年も牢獄に幽閉されていたというブランクがある。あの化け物の師匠が負けるなんてとても思えない。今は天下無敵のチャンピオンを信じるしかない。

「——見つけたぞオ！あの時のクソ野郎オ！」

ドゴオオオオオオオオオオオオ!!!とハーレー街が大爆発を起こす。ビステイープ牢獄の方面、ということとは、あんなことできる野郎なんて俺は一人しか知らねえ！

「あん時の借りイ、ここで返してやるぜ、ゴラアア!!」

「ギラ！めんどーな野郎が出てきたな！」

「俺があいつをもつかいぶつ飛ばす！オヤジはレオナルドさんにこのことを、あとは頼みます！」

「仕方ねえ、ここは任せる！」

気分はイマイチだけど、「テンション」上げていかないな。

相変わらず、角を光らせて一直線にしか走らない野郎だぜ。そのパターンしかねえのかって！

「死ねエエエエエエエエエエ!!」

「お前に、構ってる時間はねえ！」

「奴の攻撃は相変わらず単純だ、凄い速度だけど今となつては遅いんだよ！ノロマ！」「ぎっ!?!」

方向転換してくるのか？反応が遅いよ、そんなんじや一生俺に追いつけねえよ馬鹿。

両手を地面につけて、腰を勢いよく捻り、右の横蹴りで気が溜まりに溜まつてる角に向けて「テンション」と気を重ね勢いも加えた重撃をくらえ！

「おらあー！」

「ば、ガバア!?!」

その一撃で、奴の角の一部に亀裂が走り砕けた。ザマア。

角に溜まった気が逃げ場を無くしてそのまま爆発が起ころ、いくらお前の体や角が頑丈でも今の俺の一撃をくらった後じゃ無事じゃいらねえだろ？

「で、テ、テメエ！」

しかし、こいつが出てきたってことはビスティープ牢獄に他にも入獄してる奴らも自由になつてる可能性があるんだよな。しかも、コイツよりも実力も罪も重い野郎共が。

——正直、俺一人じゃ、しんどいかもな。

※

「戻れギム！妾はドーバス様と共に彼奴を、お祖父様と兄上と姉上の仇を取る！」

「そうはいかねえ！いくらあんたが強くても、奴の目的はあんたらだ！」

「だが！——」

それでは、一体何のために強くなったのか!?ドーバスに指示を受けたのも、デイハルド武道大会を開き強者を育ててきたのも、全ては家族を殺したローガに対する復讐をするため！

兄も姉も弱いから殺された、なら強くなればいいと思つてたのに！マラナは下唇を噛み、拳を誰よりも強く、深く握り締める。

「パイル、ビト！お三方を王宮へ無事に送り届けるぞ！」

「応—」

「もちろん—」

「すまない、此方と妹が世話になる」

「わ、私が弱いばかりに」

「妾を置いて行け—」

暴れるマラナをパイルが抑える。普段ならば不可能なことだが、気が動転しているせいで余計なところに力が入ってしまっているためパイルでも容易く抑えることができた。

しばらく走り王宮へ続く階段を登ってる途中でパイルがマラナをビトに託す。

「パイル?」

「——ビステイーブ牢獄から大量の囚人共が王宮に押し寄せてきてる」

当然といえば当然のことである。誰も彼もとは言わないが、多くの囚人がアーサー王家の政策に賛同できない者たちや社会不適合者たち。恨みは十二分にある。

ここまでやってきて追いつかれるのも時間の問題である。

「ここは俺が食い止める、オヤジ、ビト、後は頼んだ! できれば応援も呼んできてほしい—」

「最後の台詞がなけりや格好良かったものの、承知しましたよ!」

パイルとビトがハイタッチを交わす。すれ違いが終わると、パイルは一気に駆け出す。自身の武器である脚を構えて五十を越える囚人達の前に立ち塞がる。

「……こつから先は通さんぞ」

「二人だけで格好つけてんじやねえぞ！俺の責任なんだ、俺も加勢するぞ!!」

ズガガガガガガ！と二本の角と大きな腕を拵げて囚人達をブライオが薙ぎ払う。ピステイープ牢獄署長が参戦した。パイルは口の端を吊り上げながら向かってくる囚人達を蹴り捌いていく。二人は背中を合わせる。

「つたく、名誉挽回してモテモテになりたかったのに」

「んなこと言ってる状況じゃないだろ」

「とにかく、ここは死守しますよ。王宮に繋がる唯一の階段ツスから」

「当たり前だ」

先程の囚人達が立ち上がる、やはり一筋縄ではいかないようだ。

数も増えてくる、持久戦は不利である。速攻で勝負を決めたいところ、加勢も待つてれるかわからない状況でパイルの耳に一人の少女の声が聞こえた気がした。

「……パイル様」

——それと同時に、城の方から何かが衝突したような激突音と砂煙が巻き上がる。パイルとブライオは思わず振り返ってしまう。

その行為が勝負の分け目となった。

※

ハア、ハア、クソ！どんだけ数があるんだよ！味方がいるとはいえ、こいつら数が多すぎる！

しかも、ローグ街の連中までやって来ちゃったしよ！お陰であの野郎に止め刺せなかった。

「……次は、あんたかよカイヤさん」

「——そうだな」

しかも、あの野郎以上に面倒な人に絡まれちゃったし。

「本当に残念だ、あのとキローグ街に来てくれてりやこうして敵対することもなかったのによ」

「……そういえば、あんたも」

『ローガさん、俺の恩人だ。ま、今にはいないけどな』

なんで忘れていたんだろうな。いや、繋がらなかつただけなのかもしれない。どちらにしろ、俺はこの事態を未然に防げたかもしれない。

「あの人の解放には長い年月を要したよ。うっかりお前に話してしまった後にはヒヤリ

としたけどな」

「ナナが突然ローグ街に戻ったのも、この日のためってわけですよね」

「ああ、俺が戻って来いと伝えた。あいつも計画には必要だったんだ」

「……俺たちは、こうなる運命だったんでしょか」

「どうだろうな、ただ、俺はお前ともう一度こうやって拳を交えられることに喜びもあるぜ。あの頃のお前はまだ、未完成だったんだろ？」

「——奇遇ですね、俺もこんな状況ですけど、テンション上がってますよ！」
バチリ、と静かに音を立てる。

「ガチでやろうぜ、喧嘩は派手にやらねえと面白みがねえ」

ゴキリ、と大きな音が響く。

俺は自分では見えないけど、笑ってる気がする。だって、カイヤさんだって笑ってるんだ。

お互いに、真剣なのに、ここでぶつかる理由も特にないの。

ここでぶつかっても事態がいい方向に転ぶなんて思えない、むしろ悪化するかもしれないってのによ。

——何故か一步も、引く気が起きねえ！

「——お、お、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

46. ナナの憂鬱

「カイヤの野郎……ッ！人の獲物横取りしやがってエ！離せゴラア!!ぶつ殺すぞ！」

「落ち着け、ギラ！」

「まずはその怪我何とかしろ！」

「知るかア!!」

ビスティープ牢獄から脱獄した多くの囚人、カイヤさんが引き連れて来たローグ街から援軍。ハーレー街はもはや戦場だ、街の奴らやデイハルド武道大会を観に来たギャラリー共もいる。

何としても俺たち傭兵ギルド鬼の双牙が全身全霊でコイツらをぶつ潰さなきゃいけない！

なのに、そんな状況だつてのによオ！

「ケツ、その程度か小僧オ！」

「まだまだ！準備運動に決まってるじゃねえか！」

「そうこなくつちや、なア！」

——カイヤさんとの喧嘩が楽しくて仕方ない!

「テンション」の能力のお陰で身体能力はドーピングされてる。それでも互角、前喧嘩したときは手も足も出ないまま終わったのに!

バチバチバチ、と俺の身体を纏う気と「テンション」が混ざり合う。まだまだ身体の奥底から力が溢れてくるのがわかる!

拳と拳がぶつかる、相殺。脚と脚が交差する、相殺。額と額をぶつけ合う、相殺。速度も威力も互角、だけど俺はまだまだ上にいける! 「テンション」があればまだまだ強くなれる!

「——テンション、上がってきたア!」

——こんなに楽しいことはない!

※

私、ナナは物心ついた頃にはローグ街にいた。周りとは違う目の色、背中にある羽根のせいで親に捨てられた、と勝手に思ってるツス。

最初はローグ街でも除け者にされてたツスけど、ボスことカイヤ兄は手を差し伸べてくれた。見た目怖い人ツスけど、中々普通の人で驚いたりした。

昔話を聞かせてくれたり、仲間に紹介してくれたら、叱ってくれたり、本当の家族み

たいにボスは私を扱ってくれた。そんなボスに従い恩返しをするのが私の筋でありケジメ。

作戦のためにハーレー街の偵察に向かったらそこで酔っ払いのカモを見つけたと思つたら私好みの超絶イケメン、言わずともわかる通りホクヤ様ツス。

最初は気絶させて色々聞き出すつもりが惚れた弱みつてやつツスカね、ボスの下にまで案内して紹介しちまったツス。それから何か喧嘩したいみたいツスけど、心が痛かったツス。

私のせいで大事な人達が、危うくどちらも、もしくは片方失いかけた。

ホクヤ様が目を覚まさないと成って本当に悲しかった、悔しかった、自分を責めた。

…… 結局目覚ましてくれて良かったんですけど。

それからホクヤ様と暮らす日々は幸せだったツス、こんな日々が永遠に続けばいいなんて、思つたりもしたツス。

そんな折、ついに例の計画が最終段階に突入したと呼び出しがあつたから渋々ローグ街へ戻ることになった。

—— そう、ボスの恩人でもあり史上最悪の犯罪者として名高いローガ・アスキルトの脱獄計画。

シャレオンの野郎が時々戻ってきてたツスけど、ここ最近増えたことで何となく察し

てたツス。未だにあいつとは仲良くできる気がしないツスわ、まじむり。

そして、あえて警備の強いデイハルド武道大会の最中に作戦は決行されたツス。いくら警備が強くても出場選手達は疲弊している、警備は大したことないというのがボスの判断ツス。

まあ、ついでにビスティーブ牢獄にいるボスの知り合いとかも開放して混乱させる予定らしいツスけど、これ以上のことは話してくれないですよね。

まだ、何か裏がある気がするんツスけど、どうにも釈然としねえツス。

——そして、私の目の前でまた大切な二人が殴り合っている。いや、前よりも本気でしかも互いに互いを殺す気で。

ああ、なんで、それなのに、なんでホクヤ様もボスもそんなに楽しそうなんですか？男って生き物は本当にわけわかねえツス、ホクヤ様が敵として向かってくるだけでも胸が張り裂けそうなのに私がこんな心配してるのに、楽しそうにしてるなんて。

ホクヤ様はいつまでここにいられるかわからない、そのことを聞いた時頭が真っ白になったツス。

『俺は、いつかこの世界から旅立たないといけない。だから、今はナナの想いには応えられない』

ふえばるといふ定められた運命、私とホクヤ様は一緒になることができない。叶うこ

とのない儂い小さな恋。

『——でも、さ。もし俺が何かの運命でここにもう一回戻ってくるものがあつてまだ俺のことを好きでいてくれたら、俺は十人の想いに応える』

——ああ、なんて、優しくて残酷な人。

そんな雲を掴むような可能性しかないなんて、それにあの時のホクヤ様の顔を見ればいくら馬鹿な私でもわかる。

もう、ホクヤ様がここから離れてしまつたら二度と会えない。

そう思うと、本当に悲しい。もつと一緒に過ごしていたい。だから私はこの作戦に反対した。

でも、ボスを変える気はなかった。あの人の執念と執着、今まで見たことないような狂気が見えた気がしたツス。

(……嫌ッ)

——私は駆け出した。

ホクヤ様とカイヤ兄がまたぶつかりそうな瞬間に、その合間に乱入するかのようになら。考えなんてなかった、先のことなんてどうだってよかった、身体が勝手に動いてしまったのだ。

——もう、これ以上大切な人が傷つくのを見たくない。

「ホクヤ様ア、カイヤ兄イ！」

「——ナナ!？」

「バカ、どけ！」

左右から、大切な人の拳が迫ってくる。ああ、なんて馬鹿なことをしてしまったのだらう。

——ありがとうッス、ホクヤ様、カイ

※

「ええ？」

——俺とカイヤさんの間に入ってきたナナが突如、背中から血を流して倒れた。

それぞれの拳は空を空振り、標的を見失って大気を殴った。カイヤさんも目を大きく見開いて倒れたナナを凝視している。

「ナ、ナナ」

——ドクン。

「カツ、ヘツ…?」

——ドクン。

「——ナナ！」

声を上げたのは俺だったか、もしくはカイヤさんだったかわからない。

何が起こったかわからなかった。俺は一心不乱にナナにパンチが当たらないように直前だったにしろ逸らそうと必死に腕の力を抜いた。

あんなところに攻撃なんて届くわけがない。

『ホクヤ様——この服どうツスか、襲つても、いいんですよ?』

目頭が熱くなる、身体の奥からナニカが湧き上がってくる。

「——つたく、危なかったなクソガキ。感謝しろよな」

虚空から声が聞こえる。俺は、コイツを知っている。

「シヤレオン、まさかお前が……?」

「そうだよ、カイヤ。男と男の喧嘩を邪魔するようなクソガキにや十分な仕打ちだろ? ま、急所は外しちまったみたいだがな」

「急所、だと? お前、最初からナナを!」

「チツ、口が滑つちまったか。まあ、どちらにせよ敵であるそいつを崇めて情を流すようなガキだぜ? いつかは切り捨てるつもりだったんだろ?」

スウウウウウ、と何もなところから人の形が象られていく。

———そうか、コイツがやったのか。

「———ま、計画に支障が出ることに変わりはないからなあ」

47. 夜の帳にて悪魔は嗤う

吹き飛ばされたシヤレオンは自らの鼻の骨が折れていることに気がつくには逡巡の間も必要なかった。

ホクヤの髪が逆立ち、毛根から放射状を描くように薄い赤紫色が白髪を染め上げ、全身から溢れんばかりの気が放出されている。シヤレオンの顔を殴った右の拳には真つ赤な血液がべつとりと付着していた。

(あの野郎： ツ！報告以上にデタラメじゃねえか、カイヤめエ、裏切ったのか!?)

シヤレオンは鼻を抑えながらフラフラと立ち上がる。半年前、定期的な報告会にて聞いていたホクヤ・フェルダントという男の危険度はそこまで高くなかった。ドーバス・ウーバーよりもレオナルド・アーサーよりも圧倒的に低かった、はずだった。

半年、この半年という期間がホクヤ・フェルダントを成長させたというのだろうか。そう、半年前の時点であればシヤレオンは余裕をもって勝てる程度の半端者のはずだ。油断して一撃をもらおう、ましてやここまでダメージを負うはずがなかったのだ。

「——チツ、生きてたか」

「ぐっ……!？」

ホクヤの眼光がシャレオンを捉える。明らかな敵意と憎悪を宿した瞳から稲妻のよ
うな気のような何かが迸っており、理性があるのかないのかシャレオンでは判断がつか
なかつた。

——勝負は一瞬、シャレオンは自身の身体を透明にして、左手から小規模の気によ
る刃を作り出す。ナナを刺した時にも使ったものだ、人体を貫くくらいなんてことのは
いくらい鋭利なモノとなっている。

(いくらコイツが速く動けて攻撃が重くとも、危険度が上がろうが、俺の姿が見えなきや
意味がねエ！)

「——同じ手が二度通用するとても？」

ゴギイ、と肋骨の折れる音が響いた。

「……えっ？」

「お前、もう死ねよ。クズ野郎」

次の一撃、ホクヤの気と「テンション」が混じった禍々しいともいえるオーラを纏わ
せた左腕はシャレオンの頭を掴み、凄まじい勢いで石で舗装された大地に叩きつけられ
る。

骨が折れる、血が流れるなんて生温い結果に終わることはなかつた。

シヤレオンは悲鳴を上げ泣き言、遺言を言う暇もなく、頭から首元までが肉塊となり飛び散る。ホクヤの左手は石の大地を貫き、ビキビキビキビキと周囲に亀裂を走らせる。

「……………ッ」

「……………ホ、ホクヤ、シヤレオン」

遅れてカイヤがナナを抱えてホクヤに近づこうとするが、ホクヤから放たれる圧倒的な怒気と殺気に恐れをなし金縛りにあったような感覚に襲われる。

傷がそこまで深くなかったこととカイヤの応急処置によつてナナの一命は何とか取り留められた。

そのことを伝えることすらできない。ホクヤの視線の先にはたじろぎつつも敵意を向けるローグ街の同胞達がいた。

「シヤレオンさんがやられた!」

「あ、あの野郎!!」

「かかれ!あの化け物をぶつ殺すんだ!!」

「——俺の獲物だア、テメエらどけエ!」

「よせ!やめろオ!」

カイヤが叫ぶが、ギラを中心としたローグ街の戦士達は止まらない。

「——屑共め」

ホクヤが自分でも驚くほど冷静に、冷淡な、それでいて怒りに燃えた拳を握らせて一言吐き捨てた。

結果は言うまでもあるまい。

※

——時を遡ること約六分前。

ぶつかり合うドーバスとローガの影響により、家屋の壁は吹き飛び、大地は裂け、拳と脚と尾と気が飛び交う。

「——カハツ、オイオイドーバスウ！真面目にやってんのか、あアン!? オメエこの程度の雑魚だったか!」

「お前こそ、何年も体動かしてねえから動きが鈍いぞ!? ウォーミングアップで終わっちゃうぜ!」

「オメエが死んで、それで終いだア!」

啜うローガと焦るドーバス。

ローガにしてみればこの喧嘩、自分が勝てれば時間なんて気にしなくてもいい。周囲への被害も気にせず今までの鬱憤を晴らすためにただひたすら暴れ、目の前のドーバス

を倒すことだけ考えていればそれでいい。そう、いくらカイヤだろうとドーバス相手では分が悪すぎる。だからこそ、ここでドーバスが食いついてきたことはローガにとつては運が良かったと言つていい。

対するドーバスはそういうわけにはいかない。街に被害が出れば勿論、そこにいる民間人や旅行者に被害が出てしまう、不用意に関係のない人を巻き込んでしまう。それは時間が長引き、戦闘が激しくなると比例して被害は大きくなる。だが、ローガを止められるのはあの場にいた中では自分だけである。あの中で一番可能性のあつた愛弟子であるホクヤはまだ試合の疲れも残つてる上に「テンション」がどこまで通用するかかわらない。

「——コイツは、俺がぶつ殺す！」

「——だからこそ、俺がさつきと終わらせる！」

ゴチン！と至近距離にまで近づいた互いの額が激突する。生身のはずなのにまるで鉄と鉄がぶつかり合ったように火花が飛び散る。

ドーバスの拳が飛び、ローガの拳も飛ぶ。

「ハアツ、ハツ！」

流動するような気を右腕に纏わせたローガの突きがドーバスの腹部に直撃する。

「——ッ、ハツ！」

まるで何層にも重なったかのような気を纏わせたドーバスのエルボーがローガの頬にぶつかる。

一撃一撃が重く、早い。一瞬の隙が命取りになる急所を狙い合う喧嘩は同じ実力者同士でなければ決して起こり得ることはない。そう、徐々にローガがドーバスの動きに追いついてきている。ウォーミングアップ、その言葉通りに動きにキレが増してきているのだ。長い間ビスティープ牢獄に幽閉されていたローガだが、培った実力と経験値は本物のようで徐々に感覚を取り戻していつている。そう、かつての全盛期だった頃のローガ・アスキルトが今まさに甦ろうとしていた。

「——ハアッ！」

ローガは右脚を鎌鼬のように振るう。ドーバスのいる方向ではなく、多くの人々のいるであろうハーレー街の住宅エリアに向けて。

「な……ッ!?!」

「カハッ、カハハハハハハハハハハハハハハハハッハア、ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハア！」

ドーバスが気を取られている間にローガは無差別に拳を飛ばし、槍のように放たれる蹴りを撃ち続ける。ドーバスは両拳を握り、ローガの一撃一撃を正確に撃ち落そうとするがそれでも数が多い。ドーバス自身、あまり量を撃ちすぎるとどこかに被害が被って

しまいかもしれない。

(あの、野郎！)

「——カハツ、隙ありイ！」

拳を撃ち終わった後の体勢、僅かに生まれた無防備な状態をローガは見逃しはしなかつた。両腕に流動させた濃密な気を纏わせてドーバスの腹部にぶつける。撃たれた一撃はドーバスの全身を伝うようにして一打、二打、三打、四打と気が波打つようにしてドーバスの身体を空中に一瞬だけ投げ出した。

筋肉に直撃することにより生まれた怯み、ローガが見逃すはずもなく槍のように鋭く鎌のように鋭利な蹴りをドーバスの首目掛けて振るう。

「——オオオオオバス！」

「うい！」

——あと少し、というところでローガの腹部に何か球状の物体がぶつかった。突然の不意打ちにローガは膝をついてしまう。その間にドーバスは痺れから回復していた。

「ハア、ハア、た、助かりました。バルドさん」

「気にするな、通りすがりじゃ。にしても、まさかローガお前がビスティープ牢獄に幽閉されとつたとはな」

「バ、バルド……ッ？」

「フン、無駄に乱発しおつてからに。老人を勞われ、防ぐのに骨が折れたわ」

この場に似合わぬ小さな体躯の老人、しかしドーバスとローガの二人の師匠に当たる人物、バルバルドが颯爽と参戦した。

「カハツ、相変わらず効くなア、あんたの体当たり」

「まさかお前にまた説教することになるとは思わなんだよ、この馬鹿弟子が」

「そう言うなよ先生エ。久しぶりだったのに、出合頭体当たりなんてつれないねエ」

「……今のお前と再会を懐かしむ酒を飲むつもりはない」

本来なら介入するつもりはなかった、しかし現状が現状である。早期解決させることを優先させたバルバルドは自らの体を丸めて飛んできたというわけである。

「ドーバスに先生、か。さすがに分が悪イな」

そう言いつつも、ローガの表情は変わらず嗤っている。まるでまだ勝機が残されてるかのような、とても追い込まれた状態の人間の表情とは思えない。

——オオ、とローガから禍々しく弱者を気圧すかのような殺気にも似た覇気が放たれる。

「ドーバス！」

「はい！」

危険を察知したバルバルドはドーバスと共に攻撃をしかける。バルバルドの体当た

りとドーバスのパンチがローガに直撃、したかは定かではない。

否、直撃したはずである。なのに、確かな手応えが感じられなかったのだ。

「カハッ」

ローガは嗚い声を残し、後方へ勢いよく跳躍した。ダメージを殺すバックステップにしては勢いがありすぎる。たしかにドーバスもバルバルドも吹き飛ばす勢いで攻撃をしかけたが、あそこまでの威力は出していない。

わざと攻撃に当たったフリをして、自然に後方に飛んだ。そうとしか考えられない。バルバルドは一瞬遅れてローガの向かった先に何かあるのかを思い出した。

「しまった、奴め……ッ！」

「まさか、最初からこれを狙っていたのか!？」

「——追うぞ！レオナルド達が危ない!!」

ローガの吹き飛んだ先、そこにはデイハルド王国の王族達の住まう王宮があった。

48. カスティルア王国

王宮内に響くまでの振動。シャドルとシヤナは勿論のこと、アーサー王十二世であるレオナルドにその息子である第三王子ミヨルド、ゲルター達はこの異変にいち早く気がつき反応した者達だと言えるだろう。

「何事だ!？」

「お兄ちゃん、なんかあまりいい予感がしない」

「つたりめえだ、とりあえず俺とシヤナで様子見てくるんでゲルターさんはアーサー王達頼みますわ!」

「待て、シャドル、シヤナちゃん! 我也行くぞ!」

「ミヨルド王子! 落ち着いてください、バツツ陛下達もこちらへ!」

バルターに騒ぐ王族達を諫めるのを任せて、シャドルとシヤナ兄妹は震動源と思われる地上を目指す。

このデイハルド王国宮殿はいつしかのアーサー王の高所恐怖症により身長が高い建物ではなく、地下に向かって建造された建物となっている。外の様子も伺いにくいし何

かと警備上の問題で異変を察知しにくいのが難点である。

だが、そんな王宮内にも響き渡るほどの振動が起こったのだ。とても只事とは思えない。

シャドルとシャナが地上に出た時、目の前で起こっていることに驚きを隠すことができなかつた。まるで悪魔の如く全身の毛を逆立てている史上最悪の犯罪者、ローガ・アスキルトの存在。

ローガの強靱な左腕に囚われてるのはリリア王妃。倒れるギムにビトにイビルタ、ローガに立ち向かうマラナ王妃の姿だったからである。

「ハア、ハア、ハア……ッ！」

「意外とやるじゃん、王妃様ア。俺の顔に傷をつけるなんてよ、思いもしなかつたぜ」

「…… リリアを、妹を、放せエ!!」

「ハッ、やだね！」

気剣術。アーサー王十二世が友人であるシルフ・アーライズから師事を受けて以来、王族の中でしかその扱いを習うことはない秘技。

マラナは両手に放射する気を剣状に変化させる。さらに、助走をつけ跳躍し、両足からも気剣を作り出す。

——気剣四刀流。

ドーバスから気の扱いの師事を受け、父であるレオナルドから気剣術を習い自己流にアレンジを加えたマラナの強みともいえる力。

四肢を器用に動かし、四つの気剣をローガに向けて振るう。

ローガは、それを避けることなく弾いた。空いた片手を振るう、それだけの動作でマラナの気剣は空気中に露散することになった。

「……ッ!?!」

「アーサー王の一族は、根絶やしだアアア!」

この時、マラナは思った。

あの時自分がドーバスと一緒に行っては足手まといになっていた、かえってドーバスの邪魔になってしまったのではないかと。

自惚れていた、復讐に囚われて相手の力量が図れていなかったのだ。これ以上の侮辱と後悔はない。あの時、ギムがいなければ結果はもつと悪い方向に転がってしまっていたかもしれない、今よりももつと最悪な展開に。

まさか、それでもここまで実力に差があるなんて思わなかった。

もう、避けられない!

「マラナ様!」

「マラナ王妃!」

——マラナの首を狙ったローガの濃密に練られた流動する気を纏わせた一撃はシャドルとシヤナによって防がれることになった。

「チイ……ッ！」

「シャドル、シヤナ！」

「悪いなマラナ様ア、あんたがこんなにポロポロになる必要なんざねエつてのによ!!」

「遅れて申し訳ありませんマラナ王妃、でもあたし達が来たからもう大丈夫です！」

シヤナのUMAの牙や爪を加工し、鋼鉄並の強度を誇る二本の短剣とシャドルの宙をも蹴り舞うことのできる強靱な筋肉質の脚がローガの攻撃を逸らす。

それでも、シヤナとシャドルにも衝撃が跳ね返ってくる。それだけローガの一撃が強力なものかを物語っている。

だが、そんなことは二人にとってはどうでもよかった。

「マラナ王妃、リリア王妃もあいつもあたし達に任せてイビルタ王妃達を連れて逃げてください！」

「だが、妾は——！」

「今動けるのはアンタだけだ！ここでマラナ様が皆を、特に王族のイビルタ様は殺されるかもしれないエ!!大丈夫だ、絶対にリリア様は俺たちが助ける!!」

「シャ、ドルう……ッ、マラナ、此方は、此方は」

「——行つてください。あたし達は王族の、アーサー王一族の剣であり盾なのです」
「そうだア、俺たち兄妹がポスケスの名を授かったときから、なア!!」

ダンツ、とシャドルが助走をつけローガに気爪を振るう。リリアはローガの左腕で氣を失っている様子だった。極力狙わないようにしたいが、ローガのフットワークならば難しいこととなる、特にリリアを盾にされたりしたらそれこそ攻撃の自由が奪われたも同然である。

ローガはシャドルの攻撃を上空へと跳び、躲した。そして、そのままシャドルから逃げるようにしてデイハルド王国にあるカルデラの鐘のある屋根の上に王者のように立つ。

「——あん?」

「——カハツ、バアカ!!誰がテメエみたいな雑魚と同じ土俵に立つかよオ!」

「雑魚、だと?」

「お兄ちゃん!真に受けないで!」

ピキイ、とシャドルは額に青筋を浮かべながらもこちらに興味が無いとばかりに一切視線を向けないローガを睨みつける。

「——シャドル!あの野郎、ローガはどこだ!?!」

「ドーバスさん、とバルドさん!?!」

「おお、シヤナちゃん！いつぞやぶりだな、あ痛たた腰が…。」

「それよりも、奴は!?」

「カルデラの鐘の上で馬鹿みたいな遠吠え上げてんよ！リリア王妃も一緒だ、チクシヨウー！」

「待て、シヤドル！」

今にも飛び出して行きそうなシヤドルをドーバスが引き止める。

「離せ！あの野郎、俺のこと雑魚だど!?後悔させてやるよオ！」

「お前が行ったところでどうにかなる相手じゃない、俺が行く！」

「ざっけんなよ、コラア！」

「ちよ、今はそんなこと言い合ってる場合ではないでしょ！」

そうこうしてる間にローガは不気味に噛い、あちこちで混乱が起こりパニックで騒々しくなったデイハルド王国全体を通り抜ける風のように、どこか透き通った声を響かせた。ローガの声がデイハルド王国を支配したような感覚に陥った。

その、一言はあまりにも大きく小さく短い言葉だった。

「——この女を返して欲しけりや、来いアーサー王！カステイルア王国に!!」

※

止まらない、止められない。

ローガの作戦の第一段階を終えた合図の遠吠えを耳にしたカイヤはここでローガに着いていくことは容易いのだが、ここでホクヤを放っておくわけにもいかない。この場まで一緒についてきたローグ街の同胞達は全滅、キツカケを作ったシャレオンも殺されてしまった。

だが、ナナは無事だ。

そのことをホクヤに伝え、届けることができるならこの場も切り抜けられるかもしれない。次の獲物を探すようにキョロキョロと辺りを見渡すホクヤに近づいて無事で見られるのか、さつきまで殴り合ってたホクヤとは明らかに違うことは明白である。

覚悟を決め、本気の本気、殺す勢いで相手をせねばこちらが碎けてしまう。

「ッ、ハア、ハア……」

「！ナナ!?」

ナナの小さな、本当に小さな咳き込む声にホクヤが反応した。

——瞬間、ホクヤの身を纏っていた薄い赤紫色の気がなくなり、逆立っていた髪も元に戻りそこにはいつもの綺麗な白髪のホクヤがいた。

「傷口が、カイヤさん！ナナは無事だったんですね!」

「あ、ああ。念のため応急処置も済ませてある」

「ギルドの先輩に気の治療の凄腕スペシャリストがいるんです、一旦その人に診てもらいましょー！」

ホクヤがナナを連れてギルド「鬼の双牙」の中へ入っていく、カイヤを置き去りにして。

「……」

カイヤはホクヤが完全に去ったのを見て、ホクヤのやった惨状に改めて目を向ける。あのホクヤが、いや、カイヤはホクヤのことをそこまで詳しく知っているわけではないため、あのとつけるのは烏滸がましいだろう。

だが、カイヤの知るホクヤがここまで躊躇いもなく人を殺すものなんだとちよつとした恐怖心に武者震いしていた。

他の皆は無事だろうか、ローガさんは無事に戻ることができたのだろうか。考えることやるべきことはたくさんある。作戦は続行だが、被害が大きすぎるため一旦撤退した方が正しい選択になるだろう。

だが、ナナを置いていてもいいのか？ホクヤは信頼できる人物だが、この乱戦においては倒すべき相手である。対人関係の構図を大きく変える、重要なのは敵が味方か。ならば――

「おらー！」

「ぐげ!？」

カイヤの思考は途絶えた。何故なら背後から迫っていたらしいシャドル達（やったのはシャドル一人だけだが）によって意識を奪われたからである。

※

状況は悪かった。リリア王妃は攫われ、他にも怪我人死人が多い。俺もマクベス先輩の手伝いで負傷者の手当てに当たっているが、数が多い。

オヤジも、ビト先輩も、マラナ王妃にイビルタ王妃まで。命あつたことは救いだが、俺は、俺は何もできなかった。カイヤさんとの喧嘩を楽しんで後先のこと目先のこと考えずに自分の欲を優先させてしまった。

そのカイヤさんは捕虜として現在監禁してる。監禁といえば、ビスティーブ牢獄から脱獄した連中の多くはブライオさんとパイル先輩達が再起不能にしたらしい。あの二人もそこそこ満身創痍だったな。

「——俺は今すぐにでも行くぞ!あの野郎はぶん殴らなきゃ気が済まねエ!!」

「お兄ちゃんの言ってることもわかるけど、ローガは強い。あたし達が行って本当に勝てるかどうか」

「おい、まさかシャナお前も来るつもりか?」

「当然よ、お兄ちゃん一人に行かせて何をしでかすかわからないし」

「鬼の双牙」の大広間中央の一番大きなテーブルでは今後の活動という名の作戦会議が行われていた。

王宮にいたレオナルドさん達ははじめとする王族達にバルターさん、バツツ一行もこちらに移動してきている。たしかに王宮も安全ではあるが、再襲撃に備えたフェイクのようなものである。

「俺も行くぞ、ローガの奴は俺が止めなきやいけない」

「なあ、師匠一つ聞いていいですか？」

ここで俺も言葉を出す。ここで聞くことじゃないかもしれない、だけど何故かはわからないが聞いておいた方がいい気がしたのだ。

「あんたと、あのローガとの関係って本当に兄弟弟子ってだけなのか？」

「…… そうだ、俺たち二人はバルバルドさんの元で師事を受けていただけの兄弟弟子の関係でしかない」

師匠の一言で周囲がざわつくが、俺はもう一回聞いているのでそこまで驚きはなかった。

ただ、なんだろうな。やっぱりここでは聞くべきではなかったな。

「そう、つすか」

とりあえず会話に区切りをつけて、話を戻す。

カスティルア王国。

かつてはデイハルド王国と対をなす大国だったらしいが、件の戦争でアーサー王十二世含む五人の英雄達のいたデイハルド王国に敗北し、現在はデイハルド王国の傘下国で一番大きな規模を誇っており、分国にバツツ達のベヘモン国が存在している。

ローガが何故そこで待っていると云ったのかはわからねえけど、何か理由があるはずだ。

「——場所はここから北東、思いっきり走れば一日も経たずに到着するよ」

「って、お前やっぱついてくる気かよ!？」

「だって、道あたししかわかんないでしょ？お兄ちゃんわかんのか？」

「ぐぬぬ、けどよオ」

あの二人はもう行く気でいやがる。まったく、気が早いというか何というか。けど、こいつは一刻を争うからな。

「じゃあ、行く面子は三人か？」

「いや、俺も行く」

ここで行かねばどうする？リリア王妃も攫われてんだ、俺は何もできなかつたんだ。師匠の足手まといになるかもしれない、けどバーミリオン王女との約束もある。

『——もし、奴が再び悪事を働くようなことがあつたらお前さんが遠慮なく奴を殺してくれ！家族達の仇を取ってくれんか!?』

別に、仇を取るとかそんなんじゃない。

俺は、リリア王妃を、友達を助けに行く！それだけだ!!

「——ハッ、名乗り上げんのが遅エんだよ」

「——パーティは四人つてのが決まり文句だからな!!」

「——アンタなら、来ると思ってたよ。でも、あたしについてこれなきや置いてくからね」

「……ッ、おう！」

俺と師匠、シヤナにシヤドル。

全員決意も決まり、目的も一致した俺たちは拳をガツンと突きあわせた。

カルデラの鐘も俺たちの四人一組の結成に鼓舞するような後押しするような勢いで大きく鳴り出した。

——リリア王妃を救出し、ローガ・アスキルトを、討つ！

※

「あれ？アーサー王は？」

「え？」

俺が装備を整え、というよりも今回はスーパ君とドラちゃんの力も借りないといけなさそうなので使えるようにしていた時のことだった。

誰が言い出したのかはわからない。そういえば、レオナルドさんの姿が全然見当たらないな。席を外してるわけでもあるまいし……

「まさか!？」

バルターさんは何かに気がついたかのようにバミリオン王女に視線を動かす。彼女はどこか悔しそうに、それでいて誤魔化すような表情を浮かべていた。これは、怪しい。だって汗までダラダラ流してるんだもん。

「……レオ君なら、もう向かっちゃったよ。カスティルア王国に」

——俺たちは準備をさっさと済ませてデイハルド王国を出発した。

49. ホクヤ、決戦の地へ向かう

デイハルド王国を出発して、走り続けること10分弱。

シヤナを先頭にシヤドル、俺と師匠が並んで走るという陣形だ。道を知ってるシヤナが先頭という以外特に意味のない陣形だ。

とにかく、先走ってしまったレオナルドさんに一刻も早く追いつかねばならない。

「匂いはまだ残ってやがるな」

「これならあたしが先導する必要もなかった」

「そう言うなって」

…… そんな匂いはしない、シヤドルだからこそ、いやこの星の人間だからこそ捉えられたのかもしれない。改めて俺がこの世界では異物なのだと思わされる。

「俺はわからんけどな!!」

—— 訂正、どうやら個人差があるようだ。この人なら案外気合いでなんとかかなりそ
うな気もするけど。

砂の大地だから足跡が残っているものと思っていたが、今日はあいにくの強風だ。風

に砂が舞ってわからなくなっちゃまってやがる。

シヤナについていけばいつか辿り着くんだらうけど、目標がハッキリしないとペース配分が難しい。実際問題、あとのくらいでカステイルア王国に着くのか俺には一切検討つかない。

俺一人なら空飛んでいけたんだらうとか思ったけど、まだ練習不足だ。

「——ローガの野郎の匂いは、イマイチわからねエな。牢獄の臭いと加齢臭に血の匂いが混じってやがる」

まあ、何年も収容されてたらそうなるだらうな。俺からしたら獣臭がすごいという感想しか出てこない。

「皆、構えて。向こうから歓迎が来たみたい」

「歓迎?」

シヤナがサバイバルナイフとダガーを構える。その表情はどこか嬉しそうにも見える、何故だ。

気、そう大量の気がこっちに向かってくることに俺も一瞬遅れて気がついた。夜ということと風が吹いて砂が空気中を漂い砂のペールのせいでも視界が悪い。

先頭にいたシヤナはいち早くそのことに気がついたのか、流星だ。

「あれは?」

「カステイルア王国からのお出迎えてってことでいいのか？」

「間違いない。あれはカステイルア王国に仕えてる兵士の格好、数はかなり多いね。正確な数はわからない」

「——なら、どいてろ！時間の無駄だから俺がやる！」

師匠が拳をパキパキと鳴らしながらシヤナを退け先頭に立つ。深く腰を下ろして右腕を大きく引く。

俺は、師匠が構えを取るのを初めて見たかもしれない。修行中は基本的にノーモーションでパンチを飛ばしていた。それも俺よりも正確に飛距離もあり破壊力のある一撃を。

そんな人が、まともに構えてしつかりとしたパンチを撃つとどうなるんだ？

答えは単純明快であった。

「——だあ、ラツシヤアツツ!!!」

——砂のベールを吹き飛ばし、いや辺りの砂をも巻き込み槍のような砂嵐がカステイルア王国の兵士達を襲った。

「な、なんだ!？」

「敵襲！敵襲！」

「バカな、距離は取っているはず!？」

「ひ、被害数は!?!」

「二千以上です!!」

この時の兵士達の数は五千ちよつとであり師匠は今の攻撃で二千超を再起不能にしたとかなんとかか。いやあ、相変わらず暴れてらっしゃる。ていうか、砂漠抉れてないですか?」

「俺たちも行くぞオ!どつちにしろこの先に用があるんだア!」

「おう!」

「血が騒ぐ!」

この血気盛んな兄妹め!

俺も右手にドラちゃん、左手にスーパ君を構えながらカステイルア王国の大軍に向かつて駆ける。これが試合ならば武器は必要ない。だが、今回は違つて殺し合いだ。

サバイバルとなる、たしかに「テンション」ならば底上げして戦えるが味方を巻き込むわけにいかない。

ならば、一撃一撃に確実かつ小規模で済む殺傷力が求められる。ドラちゃんです、スーパ君で殴る。気と「テンション」を必要最低限に纏わせて一人一人の意識を確実に奪い、再起不能の状態にする。まだ、やっぱり殺すつてなると抵抗がある。

昔つからそうなんだよな、いつつホクエ姉に怒られてな。そこがいいと言われたこ

ともあつたけど。

そんな俺の葛藤を知らないシヤナとシヤドルは容赦なく一人一人を倒していく、そう彼らが普通なのだ。油断すればこつちが殺されてしまう。向こうだって生きるのに必死なんだ。師匠も到着した、敵がさつきよりもより早くバツタバタと倒れていく。生死は不明だ。

「クソ、こいつら化け物か?!」

「怯むな! もうさつき五千減ってるんだ、これ以上の失態は許されないぞ!」

四対五千（既に二千五百が倒れる）の乱戦は続く。こいつら一人一人の実力はそこまで強くないため何とか立ち回れる。

八方から攻めてくるが、それでも冷静になれば対処は可能なレベルだからこそ少人数でも戦えている。それでも、時に数の暴力に押される時もあるが何とかなってしまうている。

師匠がいる時点で負けはないみたいなものだけだな、だって力むだけで人を吹っ飛ばしてるんだぜあの人。

シヤナとシヤドルも妙に生き生きしてやがる。

もうそろそろ三千を超えたあたりな気がする。体力はまだ大丈夫、このペースで押せばいける!

あまり時間もかけてられないからな、レオナルドさんに早く追いつかなきゃいけない！

「——チツ、おいホクヤア！」

「なんだ!？」

「ここは俺が引き受ける！お前らは先に進め！」

シヤドルがカステイルア王国の兵士達の腹部に蹴りを打ちながら叫ぶ。

その言葉に動揺したのはシヤナだ。

「お兄ちゃん、ダメだよ！いくらなんでもこの大軍を一人で相手にするなんて!!」

「うるせえ!!誰かがやらなきゃいけないんだ、アーサー王は絶対無茶やらかす、それを止める役も必要だ!!俺はやりたくねえ！」

「シヤドル、お前！」

「勘違いすんなよドーバス！あの野郎は俺がぶちのめす、ウォーミングアップを済ませたら、なア！」

シヤナとドーバスの声に応えながら敵を倒していく。そう、こんなところで体力を奪われるわけにもいかない。

ローガを相手に人数は必要だが、万全の状態でなければ本末転倒である。

「——早く行けエー！リリア王妃をあんま不安にさせんじゃねエー！」

——俺はシャドルの隣にまで移動していた。もちろん、敵を倒しながら。

「——死ぬなよ、戦友」

「——あいつを残して死ぬかよ、ライバル」

その言葉を聞ければ十分だ。

「逃すな！」

「いや、敵は滅つた方がよくね？」

「バツキヤロー！あいつらを本国に入れたらそれこそ処刑モノだぞ!?」

「こつから先は、シャドル様がお相手だゴラアアアアアアアア!!」

シャドルが俺たちのために作ってくれた道。無駄にはしない!

「行こう、シヤナ!師匠!」

「おう!あいつの覚悟は無駄にはしない!」

「お兄ちゃん」

「シヤナ、案内を頼む!」

「……わかった、お兄ちゃんはいつも無駄してるからあれくらいどうにでもなりそう。

ホント、男つてやつは」

いつも無駄してたのかよ。

とにかく急ごう!軍隊がいたってことはカスティルア王国も近いつてことになる。

※

一方、カステイルア王国では国民が全員武装し国周辺に人の壁を作るといふ異常事態が現実となっていた。

そもそもカステイルア王国という大規模集団の存在意義は国王であるギヤスタ・ミドルグの復讐の為に長い年月、身を潜めて牙を研いでいたというものだ。国民一人一人が戦闘員でデイハルド王国、否正確には53年前の戦争で活躍したアーサー王十二世への復讐。

かつてデイハルド王国とカステイルア王国は巨大な二大国家として栄えていた。だが、53年前の大戦時に敗北したカステイルア王国はデイハルド王国の属国となり、当時国王であったギヤスタの父は処刑された。

53年、募りに募った憎悪がついに形となりギヤスタは動き出した。

世界の歴史を研究し、助手であったアツシュと共にアレを見つけ出してから復讐計画は一気に進んだと言っても過言ではない。

デイハルド王国へ送り込んだシャレオンの活躍もあり、内情を知ること容易いことであつた。そこからローガ・アスキルトを解放し、味方につけることで全ての準備は整つたと言つてもいい。

「——おい、ギヤスタ」

「…… ローガか、早かったね」

「ケツ！相変わらずデケエし邪魔だし、不細工な野郎だぜ」

「君は一々一言多いんだよ」

「フン」

ローガはギヤスタの言葉を無視して右腕に持っていた、リリアを地面に置く。ローガよりも一回り大きな体を持つギヤスタは意識を失った人形のような美しさを感じさせるリリアに目を向ける。

「デメエに言われた通り持ってきたぞ。まったく、今すぐにもぶっ殺してやりてエつてのによオ」

「君はそこがよくない。私はこの娘がああ憎きアーサー王の娘だとしても美しければいいんだ。美しいものはよく映える」

「ハツ、言つてろ。んなことより、あれはもらえるんだろな？」

「もちろんだ、貴重な一つだ。大切に使いたまえ」

ギヤスタが胸元から小包を取り出してローガに投げる。何の迷いもなくローガは小包を受け取る。

「未だに信じ難いぜ。こんなモンの存在がよ、N・E・O. だったか？」

「既に何度か実験はしてある。見つかった三つは既にね。内一つは今君に、あと二つはUMAと奴隷に。量産はできなかったが、今頃奴隷はデイハルド王国に向かつてるんじゃないか？」

「カハツ、相変わらず趣味が悪いことだ」

ローガは受け取った小包、もといN・E・O. をズボンのポケットに仕舞い込む。そして、窓の外に敵意を向ける。

「どうした？」

「カハツ、どうやら客が来たみたいだぜイギヤスタ」

——ローガの見据えた先には金色の気を纏わせた男がいた。

その姿、まさに獅子。王たる器、老いてなお輝くその闘志と瞳に数多もの死線を潜り抜けた歴戦の戦士の迫力がピリピリと伝わってきた。

ローガは嗤う、ギヤスタも冷や汗をかきながらも薄ら笑みを浮かべていた。

「アーサー王：！」

——怒れる獅子は跳び、王座の間へと一直線で駆けてきた。

ローガとレオナルドの距離がゼロになった。

「——リリアを返してもらおうか」

「——カハツ、やってみろオ！」

二人は互いの額が激突するまでの逡巡の間でそれぞれ一言、短く言葉を発したのだつた。

それからは一切の言葉は必要としなかった。

——この場において必要とされたのは、目の前の相手を討つための拳のみであつた。

50. はじまりとおわりの日

レオナルド・アーサー。

ジルフ・アーライズ。

バルバルド・クエーサー。

ベルズ・アスキルト。

ユーライイ・セントメルト。

53年前に勃発した大戦で活躍、及び中心となった五人の英雄と呼ばれる男達がい
た。

「数もデイハルド王国が圧倒的に不利であつたがために勝つことはできないとされて
いた。そんな数で勝つていた敵国であるカステイルア王国の軍勢の六割を退き、当時敵
国が誇る凶悪とされていた幹部を全滅させたことでも有名である。五人の実力は語ら
ずとも察していただきたい。

表立って英雄視される彼らの他にも、各々の手腕で戦争を勝利に導いた小さな英雄達
もまたデイハルド王国には多く存在していた。

大戦の結果、五人の英雄の一人であるユーライが戦死するという被害以外にディハルド王国軍の一割が負傷しただけで済んだ。後の王女となるバーミリオンの指揮が功を成したのである。

カステイルア王国の王はベルズに捕らえられ、そのまま処刑された。

——はじまりとおわりの日。

当時幼かったカステイルア王国国王実の息子であるギャスタ・ミドルグは後にこの日のことをそう記憶に刻み込み、憎悪が宿り育ち始める日となったのである。

※

レオナルドは右腕に黄金色の気剣を握り、身体をを前に傾け足に大きく力を掛ける。フェバルであるシルフ・アーライズ直伝の気剣術。ミヨルドやマラナの気剣とは違い、濃密で洗礼された見るものを魅了するほど美しく、何年も握っていたという経験を物語る歴戦の戦士の一振りそのものであった。

老体とは思えぬほどの滑らかな動きだ。対するローガは迎え撃たんとばかりに両腕に濃密な気を流動させる。

気剣が振るわれる、ローガはそれを片手で弾く。追撃とばかりに流動する気を纏わせ回し蹴りを放つが、レオナルドは瞬時に反応し防ぐ。老体とは思えぬ反応速度だ。

一線を退いたとはいえ、やはり歴戦の戦士である。レオナルドは気剣を上段に構えて振り下ろすが、ローガの両腕に纏わせた禍々しく、僅かな光を宿した気はレオナルドの気剣を真剣白刃取りの要領で受け止める。

ビキビキ、と気剣が揺らぎローガの気もレオナルドの気剣から放たれる気によって相殺されつつある。

「——チツ」

「ツ——」

禍々しい気が爆散する。ローガが自分自身でホクヤの言うところの気爆を発生させる。隙のできたレオナルドの懐にローガの蹴りが直撃する。

纏わせた流動する気が衝撃波を引き起こす。

だが、ローガの予想とは裏腹にレオナルドは吹き飛ばされることなく、大地にしつかりと足を踏みしめることでその場に留まる。

レオナルドの黄金色に輝く右ストレートがローガの溝内を突く。

「——ぐっ!?!」

「リリアはどこだ?今の俺は貴様とゆつくり話をするほど穏やかではないぞ」

「カ、ハハッ、これがアーサー王、かッ」

一歩後退、まさかここで長年牢獄で過ごしていたが為のブランクが来るとは思わな

かった。運動神経は正常に働いている、だが、体が全盛期の頃に比べるとうまく動かない。

全身の毛を逆だたせ、ローガを睨む獅子の眼光からはとてもではないが、そう簡単に死角に迫るのは困難な所業となるだろう。

「リリアだけではない。父上、ヘンリー、リステイーネ、サガト、イビルタ、マラナ。俺の大切な家族達を次から次へと、今すぐにも貴様をこの手で捻り潰してやりたいところだ」

「カハハツ、ならアやってみろよ」

ローガが嗤う。

「やりたいところ、だア？違うだろ、やれねエんだろ！辛いねエ、年を取るつてのはよオ！」

「——ツ!?!」

「悔しいか!?!なア、なア、今どんな気持ちだ!?!目の前にテメエの大事なモンの仇がいて、その仇がテメエの旧友の息子つてのはよオオ!?!カハハハハハハツ、ハツハア!!なアなア、テメエの今の気持ちを教えてくださいよオ！」

「だ、ま、れエエエエエ!!」

——バチバチバチバチ、と激しく弾ける気剣はまるでレオナルドの感情を表現して

いるようだった。

ローガは嗤いながら両腕に流動する濃密な気、濁流気と呼ばれるローガの得意とする気術を纏わせる。

纏わせた部分に自分のイメージしやすい気の流れを作ることと轟々とうねる小さな川のようなモノを作り出す。そうすることで普通に放出するよりも濃密な気を作り出せる、流れが止まるとそこに気が溜まり衝撃波が生まれる。

単純だがコントロールは容易ではない。実際、ドーバスはできなかった。

というか、ローガ以外に使っている者がいるのか定かではない。そもそも存在そのものがマイナーなのだ。

駆けてくるレオナルドに濁流気を纏わせた拳を乱舞し飛ばす。飛ばした先では小さな衝撃波が発生する。普段のレオナルドならば一撃一撃を正確に斬り落とすことができたであろう。だが、激昂したレオナルドはそんな冷静な対処を行うはずがない。

——気剣を上段から斜めに一振り、ローガを巻き込むほどの大きさの一撃を放つた。

「ガッ!？」

「——そのまま、逝け!」

王座の間が形を崩す、先に部屋を出たりリアを連れたギヤスタに直撃しなかったもの

のその姿が露わになる。

ローガが後退するとちやうどギヤスタの側に寄る形となった。

「ローガ!?!これは何事だ!?!何故、お前が——」

「うるせエ、俺に話しかけんな」

ローガの見据える先にはレオナルド。ズキズキと痛む切り傷を抑えながら憎きアーサー王の一族を睨みつける。

「リリア?——リリア!!!」

ギヤスタの抱えるリリアに気がついたレオナルドは全速力で駆けてくる。

「ひ、き、来た!?!」

「おい、その女置いてどっか行け!あいつも、女も俺が殺す」

「な、ふざけるな!!話が違うだろ、お前の脱獄を協力する代わりにリリアだけは連れて私に所有権、を——」

ズブ、と。

「——うるせえよ、カス。別にテメエじゃなくてもあいつらを殺せるんなら誰だつてよかつたよ」

ローガの右腕がギヤスタの身体を貫いた。

目の前で起こったことに驚いたレオナルドは思わず足を止める。

「あ、ひい、あへ…?」

「ハッ、そんなにその女が大切か。カスのくせに余計なことしやがって」

轟、と右腕に濁流気を纏わせる。それだけでギヤスタの腹部が肉塊と化した。リリアには傷一つついてない。

(帰リたかった、我々の故郷に、ブルーアースに、リリア、と一緒に)

ギヤスタは涙を流しながら静かに目を閉じた。

ぐちゃり、という音を立てたのは肉塊を踏みつけたローガの足からなのか最後の最後までリリアを守ったギヤスタの顔が歪んだのかはわからない。

わかることはただ一つ。ローガが濁流気を纏わせ、リリアをも肉塊にせんとしようとしていること。

「

—

—

や

め

ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

硬直から解放されたレオナルドが再び駆け出す。

——次の瞬間、びちゃり、と誰かの血飛沫が壁に飛びついた。

※

「な、なんだコイツは!?!」

もうすぐカステイルア王国、もうあと一步で辿り着くつてところだつてのに今までに見たことのないサイズのUMAが俺たちの前を塞ぐ。

八つの脚に家一つ丸々飲み込めそうな大きな口、頭部と胴の境目がわかりにくい、首あるのか？

頭頂部には四つの紅い眼球が光沢を放つてる。つーか、その前に何だよこのサイズは!? デカイよ、デカすぎ!

時折出す呻き声がスツゲエ不気味に聞こえる。

シャドルと離れてから多くのカステイルア王国の兵達が倒れた場所、多分レオナルドさんが暴れた後を通つてもうカステイルア王国は目と鼻の先だつてのに、こんなデカイ奴が待ち構えてるなんて思いもしなかった。

「なんて大ききさー!」

「——時間がねえ、さっさと終わらせるぞー!」

師匠が両腕を引き一気に前に押し出す、まさかの跳ぶパンチ同時撃ちである。二つの飛来した拳による攻撃はUMAの肉体を軽く凹ませるだけに終わる。マズイ、師匠の攻撃で大したダメージが見られない!

「……つ、次は本気でやるか!」

「無理に強がらなくていいですから!!」

「二人とも、危ない！」

シヤナの呼びかけで何とかUMAの捕食動作にも見える攻撃を回避する、危ない危ない。

ていうか、恐ろしい速さだな。UMAはそのまま砂の中に潜って行く。

気は感じる。動きならわかる、落ち着け。たしかに早かったけどシヤドルの速さに比べたらまだ遅い。まだ、目視でも反応できるレベルだ。

「——つーか、律儀に待ってる必要なんてないよ、なあ!!」

「ちよ……!!」

師匠おおおおおおおおおおおおおおお!!?

それやるなら事前に言ってくださいよ!何の前触れもなく地面に全力パンチはダメですよ、俺とシヤナもいるんですよ!!?

師匠の一撃で底の深い蟻地獄のようなクレーターができてしまった、攻撃は当たったみたいだけど、まだ動けるみたいだ。

——来る!

「二人共、ここに来るぞ!」

呼びかけなくても問題なかったかもしれない、でも集団での戦闘においては味方同士の声かけは大切だ。

砂中から頭にかけて体の半分だけを出したUMA、遅かったら今の衝撃に巻き込まれてしまっていたのかもしれないな、恐ろしい。

咄嗟に「テンション」を使って空を飛んだけど、二人も何とか避けられたみたいだな。勿論、標的になるのは奴の目線にいる俺だ。

落ち着け、師匠との修行でよくUMAの巣に投げ込まれた時のことを思い出せ！今はスープ君にドラちゃんもいる！奴の死角に移動し、スープ君に気と「テンション」を纏わせて全力で振るって、殴るッ！

フルスイングの力技、それでもUMAの身体を纏う鱗に傷をつけただけの結果に終わった。おかしい、こんなに強くて硬いUMAは聞いたこともないし今まで遭遇したこともない。

——… ス… テエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！
「うっせ… ツー！」

そつちが、その気なら！

こつちも気声で対抗してやる！元々UMAが苦手とする周波数になってるみたいだから少しでも効果はあつてほしい！

—— エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！

UMAの雄叫びと共に飛んできた腕なのか脚なのかハッキリしないモノに叩きつけ

られる。クソツ、あんまし意味なさそうだな！

師匠がこつちに近づきながらパンチを奴に撃ち続けている、シヤナは普通に走ってきた。

「大丈夫!？」

「なんとか、な。けど、これじゃ近づけない！」

UMAは長い体軀を駆使して器用に俺たちを先へ進ませまいとしてきている。急がなきゃマズイつてのに、このままじゃ、時間だけが過ぎて行っちゃまう！

——こうなったら！

「ホクヤー！」

「師匠、ここは俺が何とかするのでシヤナと一緒にカスティルア王国に向かってくださいー！」

そう、もうこれしか手はない。

師匠の弟弟子であるローガとの決着、それは師匠が望んでいることだ。それに、俺が行って足掻いたところでローガに勝てる見込みは少ない。

師匠の足元にも及ばない俺が師匠と同格の奴と戦えるわけない、手も足も出ないかもしれない。

「——ホクヤ、シヤナ。こいつの相手は俺がする。そんでもって、お前らを投げる！」

「は!?!」

「ちよ、あたしも!?!」

返事も待たずに師匠は右手に俺、左手にシヤナを抱えていつものごとく跳ぶパンチの要領で構えを取る。

「師匠!俺が行つてもローガに勝てる見込みないですよ!?!」

「いや、お前ならやれる!むしろお前しか無理だ!お前は俺とシヤナを投げれるか?否、それこそ無理だ!」

「説明になってないですよ!?!あんだ、弟弟子と決着つけなくていいのかよ!?!」

「それは私情だ!今はお前達に全てを託す!お前は俺の弟子だ、やれる!ローガをぶつ飛ばして来い!」

俺が何か言う前に、師匠は俺とシヤナを投げてしまった。てか、早!?!

自分で飛んできるときよりも圧倒的に早い!そうだ、俺空飛べたんだ!「テンション」を使つて空中で静止するイメージを作る。それから隣を飛んでるシヤナに向かつて移動し体を確保する。

「ちよ、何してんの!?!」

「うるせえ!あの師匠の馬鹿力のせいで自分の意思で止まれないんだよ!このまま突っ込むぞ!」

「師匠が師匠なら弟子も弟子かよー」

俺はシヤナを抱えたままカスティルア王国内のとりあえず一番デカイ建物の壁を蹴り壊し、突入する。受け身の態勢を取って着地による衝撃を和らげた、何とかなつてよかった。

「ちよ、ホクヤ。そ、そろそろ離れてよ」

「(ぎ、ぎ)めん!!」

抱きかかえていたシヤナから離れる。それにしても、ここはどこになるのだろうか？

俺たちが着地したのは誰もいない無人の部屋。机に椅子に石板を入れる棚があり、机の上にある石板には文字が刻まれていた。

何々、私は見誤ったのかもしれない。奴を、奴らを倒すために創り上げたが、まさかこんなことになるとは。

…… 何のこつちや？

「それは古代スア文字よ。どうせ読めないんだしほつときな、時間もないしね」

…… いや、読めたんだけど普通に。

言ったら面倒そうなことになりそうだから黙っておくけど。

レオナルドさんの気は近くに感じるけど、この建物内にいるのか？

とにかく、この部屋を出ないとな。

「……行くか」

「ええ」

この時、実は俺がとんでもないものを読んでいたことに気がつくのはまだ先の話である。

5 1. その気剣の名は

『——誰だ、貴様?』

『シルフ。シルフ・アーライズ』

まだ、アーサー王を名乗る前の若かりし頃のレオナルド・アーサーと旅人を自称するフェバル、シルフ・アーライズは名もない大地で出会いを果たした。

シルフの言う気力許容量やらこの世界にいれる時間やらの意味はわからなかったが、成り行きは大きく省略させてもらうが殴り合いの末に意気投合し、デイハルド王国へ招くこととなった。

『気で、そんなことができるのか!?!』

『ああ。まあ、特別そういうことが得意なだけなんだけどな』

『——我にも、できるだろうか?』

『うーん、どうだろうな。確実にできる保証はないけど、レオナルドの努力次第じゃないか?この世界の許容量なら問題なさそうだけど』

数ヶ月後、苦労の末にレオナルドは気剣術を自分のモノにすることに成功する。シル

フはかつて、娘のように可愛がっていたある弟子の姿を思い浮かべながら笑みを浮かべていた。

『——できた、できたぞ!』

子供みたくにはしゃぐ姿はどこか愛嬌があった。獣の耳と尾が余計に可愛げを引き立てているのかもしれない。

『センクレ、ええい! 言いにくいわア! 気剣術でいい!』

『ええー!』

——そこから、レオナルドとジルフはあらゆる方法で気の可能性を広げた。

この世界の気力許容量が高かったからこそできたことだ。それぞれの世界、つまり星には気力と魔力の許容量なるものが存在する。この星、アルドニモーは稀に見る気力許容量の高い世界であった。代わりに、魔力許容量がほとんど存在しなかった。どこかで伝承や神話の類を信仰しているところから魔法なるものを間接的に許容しているのかもしれない、というのがこの星を訪れたジルフの見解だった。

——喧嘩して、飯を食って、切磋琢磨して、レオナルドが無理矢理ナンパに連れ出したり、酒を飲んだり、笑いあったりと。

さらには戦争で活躍し、五人の英雄として後世に名を残すことにもなってしまった。

そして、数日後。別れは突然やってきた。ジルフの身体が淡い光に包まれていたの

だ、気によるものではない。

『——ジルフ、お前ッ』

『——ああ、どうやら旅立たねばならんようだ』

顔は見せない。だが、レオナルドの本能的に泣いているのだと悟った。

彼が涙を見せるのはユーライが戦死してしまったときと、今回の二度だけだった。

『レオナルド、友として頼みがある』

『なんだ？』

『もし、もしこれから先、俺と同じ境遇の人間。フェバルがここに来た時は俺と同じように迎えてやってくれないか？彼らは孤独だ、永遠に宇宙を彷徨い続ける旅人。終わりがあるのかわからない永遠の旅をしている』

『……ジルフ』

『お前ならやれる、アーサー王十二世。俺は、友として誇らしいよ』

『ジルフ！』

思わず叫んでしまう。ここで伝えねば、ここで話さねばもう二度と会えない。一生後悔するとレオナルドは思ったからだ。

『我は、お前と会えて良かった！また来い！いつでも歓迎する！』

『……レオナルド』

ジルフが振り返り、レオナルドと拳をコツンと突き合わせる。目元に涙の跡があるのがわかった。

『バーミリオンちゃんを、幸せにしるよ』

『当たり前だ』

——これが最後のやり取りとなった。

ジルフがアルドニモーに滞在した期間は五年と半年。

この短いようで長い期間は、デイハルド王国とレオナルド・アーサーを大きく変えた。

※

目を覚ましたリリアが見た光景は自分に迫ってくる濃密な気の一撃だった。

——だが、それは直撃することなくリリアの眼前で停止した。

「え、あ、へ…？」

ローガの一撃を、間一髪のところレオナルドは受け止めたのだ。濁流気を纏わせた腕を身体で受け止めるといふ形で。

レオナルドの胸部、両腕から血が飛び散る。ドクドクドクと流れる血を浴びながらも濁流気の流動は止まることなく動き続けている。あの距離から全力で跳躍して間に合ったのは奇跡だ、リリアには傷一つ付いていない。

「……マジかよ、アーサー王ッ！」

「まだまだ、我は余裕だ、若造が！リリアには手出しさせんぞ！」

「クハッ」

ハツタリ、強がり、満身創痍。

レオナルドは今の一撃を止めるだけでも精一杯、むしろ全身を使つてやつとのことで止めることができたと言つても過言ではない。

ローガはそのまま体勢を低くしてもう片方の腕も使つてレオナルドを投げ飛ばす。なす術もなく空中に投げ出されたレオナルドにローガの濁流気による右ストレートが迫る。先ほどの無茶で思うように身体が動かない。

——こうなれば、一か八か！

友の言葉を思い出し、友がくれた技術で、その名を叫ぶ。

「セックレイズ!!!」

——我武者羅に振り、かつて呼びにくいと呼ぶことのなくなった叫んだその技はローガの脇腹を斬りつける。

あの状態からの上段から下段への全力の振り下ろし、的は僅かに外したが、それでも傷は残った。

「ガッ、く、カハハ！」

同時にローガの一撃は正面からレオナルドの身体を撃ち付けた。完全なカウンターだと思われたレオナルドのセンクレイズの一撃の範囲外から放った。

一転、二転と衝撃波が発生し、レオナルドの巨大な体躯は石造りの床に叩きつけられた。

「父上ええええええええ!!」

リリアの悲鳴が響き渡る、レオナルドの返事はない。

「——じゃあな、アーサー王」

だが、ローガは止まることなく落下しながら濁流気を両脚に纏わせながらレオナルドに向けて急降下する。ここでレオナルドの息の根を止めてしまえば彼の邪魔をできるのは、数が限られてくる。ドーバスか、師匠であるバルバルドか。ローガには情も躊躇いもなかった。

こうなってしまうばリリアの涙と悲鳴は虚しいものである。

——そう、思っていた。

少なくとも部屋の壁が破壊され、何か人影が飛んでくるまでは。

「——お、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「なっ!?!」

————全身に薄い赤紫色のオーラと元来の水色の気を纏わせたホクヤの蹴りがロー

ガの腹部に直撃する。

「な、にイ!？」

体重差など、関係ないとばかりにホクヤの蹴りはローガの肉体を勢いよく吹き飛ばす。

鉢巻のように巻いた額のバンダナを強く締めなおし、ゆっくりと着地する。

「レオナルドさん、リリア王妃、無事か!？」

「ホ、ホクヤさん!」

※

リリア王妃の悲鳴が聞こえた。

そこから俺は無我夢中に走った、シャナを置いてけぼりにして部屋に突っ込み、そのままローガらしき見たクソ野郎を蹴り飛ばす!

リリア王妃は血は被つてるけど、無事そうだ。目立った外傷もなさそうだ。

——レオナルドさんは虫の息か、まだ生きていてくれて良かったけど危険な状態だ。

「レオナルドさん」

レオナルドさんの身体に手をかざし、マクベス先輩直伝の応急処置を施す。あいつも

吹き飛ばしたけど、多分あれくらいじゃ倒れない。急がないと。

「ガアアアアアアアアアアアア!!」

——ほら、めっちゃピンピンしてる。

あとはシヤナに任せよう、とりあえず俺はレオナルドさんの元を離れて被害を広げないようになしなと。

「おい、クソガキ。テメエは何者だ、あアン?」

「俺はホクヤ」

改めて相対すると、凄まじい迫力だ。

師匠と同格ってだけあって、感じられる気の量も半端ない。それ以上に殺気がヤバいけど。

だけど、ここで退くわけにはいかねえ。ここで退けば、レオナルドさんにリリア王妃、シヤナにも危険が及ぶ。

大丈夫、大丈夫だ。うるさいくらいにバクバクと鳴っている心臓を黙らしたい。ポジティブシンキングだ、ネガティブになればできることもできなくなっちゃう。

「そうか、死ぬ」

その一言がキツカケとなった、ていうか速ッ!

しかも、なんだあの気!?濃密に練られてて、嫌な予感しかない!

とてつもない速度の拳を間一髪の避け、俺も気と「テンション」を纏わせた腕を思いつきり振るう。

そう、あいつの傷口に向かって思いつきり！

「ガツ!？」

「お、オオオオ！」

卑怯なんて言ってられない！今は勝つことだけに集中して、全力を出す！

ビキビキビキビキ、と気が逆る。正直、奴の動きにキレがないのも救いだ。デイハルド王国で師匠と、ここでレオナルドさんとぶつかり合っただけでダメージがないなんてあり得ない。

蓄積されたダメージを思いつきり利用するしか、格下の俺が勝つことなんてできやしない！

「調子に、乗るんじゃないぞ！クソガキ！」

ラッシュが迫ってくる。全部、あのヤバそうな気が纏わせてある。一部パンチが飛んでるところから、距離を取ることも飛んでくる。一撃一撃がとてつもなく、速く重い。

反撃の隙はない、上に逃げてもいいが飛ぶ暇も与えてくれやしない。

——ドクン、ドクン。

もつと、もつと力が欲しい。あいつに一泡吹かせるくらいの圧倒的な速さと、力が

!

攻撃は全て受け流し、避けれないと感じた攻撃は気爆で衝撃を抑え、数少ない隙をついて全力の一撃を叩き込む。

ローガは強い。今の俺じや追いつくだけで精一杯、奴が負傷してるのにも関わらず勝てるかなんてわからない。

とんでもない実力者だ、だからこそ「テンション」が上がるつてもんだ!

「笑うったあ、余裕だなア、おいイ!」

——余裕なんか、あるわけねえだろ!!

※

その頃、リリア王妃の元にはシャナが到着していた。レオナルドもシャナによつて安全な場所に回収されている。

ホクヤがさり気なくローガを別の場所に誘導してくれたお陰でできたことである。

「シャナ、さん。ホクヤさんは、勝てるでしょうか?」

「……わかりません。でも、今は、あいつに賭けるしかないんです」

※

「ガアー！」

「ツつ、てー！」

俺の拳が、ローガの拳が激突を繰り返す。いける！

【テンション】があれば、ダメージも疲れも騙せるからまだ戦い続けられる！一方のローガは消耗を続けている。奴の攻撃速度と癖も何となくだが掴めてきた。ある意味時間との戦いでもある。

「お、りゃあー！」

——ドクン、ドクン。

俺の一撃が、果たして効いているのかはわからない。無駄だとわかっても、一発一発、いや、何十発もぶち込まないことに勝てない。何もしいよりかは、攻撃を続ける方がいい！

じゃなきや、師匠に、バーミリオン王女に示しがつかない！ここまで繋いでくれた皆に示しがつかない！

ローガが腕や脚に纏わせる気からは衝撃波が発生する。それでなくても、あんな濃密な気を纏わせてるんだから衝撃を和らげるクッション代わりにもなってるはずだ、恐ろしい。

脚に纏わせ、連続で衝撃波を発生させながら宙を蹴るようにして向かってくる。しか

も、速い！

ローガの拳が俺の頬に刺さる、デケエし痛い。後から迫ってくる衝撃も重たい！「ションション」がなければ今頃俺は死んでいたかもしれない。

フェバルである俺が死ぬことはないけど、それでも死ぬのは嫌だ。今までの自分が否定されるようで、これまで生きて積み重ねてきた全てが崩されるような気がするからだ。

ここで体勢を崩せば起き上がるに時間がかかる、踏ん張れホクヤ！そして、全力で殴り返せ！！

「カハ、気にくわねえ野郎だと思ってたが、やるじゃねえか」

頬を優しく撫でながらローガが、嗤った。殺気が増した気がした、関係ない！もつと、踏み込んで攻撃を！

「その動き、ドーバスの奴にでも教わったのか？見ていて虫酸が走るぜ！」

ローガの蹴りが俺の拳を弾く、速く対応できなかつた。

「———そうだな、お前で最初に試してやる」

「試す？」

「カハ！」

ローガはポケットに手を突っ込み何かを取り出す。それは小さな、親指と人差し指に

摘まれたそれは赤と白の斑文様で彩られた小粒の物体だった。

「——N. E. O.」

——ローガは嗤いながら、それを口の中に投入した。

「……あ、あれ？」

その瞬間だった。俺の身体から力が抜け、ガクン、と膝をつくとき激しい頭痛に襲われた。

——な、なんだこれ、立ってられない。

52. シヤナ

頭が、痛い。全身がだるい、この症状は知ってる。

一回だけあった「テンション」を使い過ぎたオーバーヒート状態から発生する熱現象。武道大会からカイヤさん達の襲撃、今日一日だけで乱用しすぎたか、クソ、今になって発病するなんて、立つのもしんどいぞ。

まだ、まだローガが目の前にいるのに！シヤナ達が、背中にいるってのに！こんな所でぶっ倒れるわけにはいかないってのに、しんどい。

「——オ、オオオ」

にしても、ローガの野郎何しやがったんだ？あの粒みたいなのを口に入れてから気が増え続けている、それどころかデカくなってるかい？

「お、ゴアアアア!!!」

「ツ!?!」

危ね！いきなり殴ってくるなっての！

ていうか、腕まで増えてる!?嘘だろ、何が起こってんだ一体!?!

こっちは頭痛が酷くてしんどいってのに。気もうまく練れないし「テンション」は論外、上りもしない。上げたら上げたで全身が焼かれるような感覚になっちゃう。

「ホクヤー！」

「シャナ、ツ」

「お、チカラダ、モット、モットオ！」

——ローガを中心に、気が暴発した。

シャナに回収されてなきや危なかつた。彼女に抱えられて一旦上階に避難する。そこにはリリア王妃とレオナルドさんもいた。

俺も壁にもたれかかって、体を休める。冗談抜きでしんどい。

「ツ、すごい熱!」

「大丈夫、だ。それより、あいつは？」

「わからない。でも、口に入れたものをローガは自分でN・E・O. と言っていた」

えぬ、いー、おー。どこかで聞いた名前だ、どこで聞いた？

「まさか、あんな代物だったなんてね」

「ハア、ハア、クソ！気もどんどん増えてやがるじゃねえか、よ！バケモノめ」

「ホクヤさん、無理に立ち上がろうとしないでください！」

でもな、リリア王妃。ここで俺が行かなきゃ、ここが見つかるとも時間の問題だ。そ

の前に、ケリを着けるしかない。少しでも無理をしないと！

「——ホクヤ、あんたは休んでて。あたしがあいつの相手をする」

「——ツ!?何言ってるんだ、無茶言ってるじゃねえ！」

「あんたよりはマシ。体力のあるあたしの方がいいだろ？少なくとも、今のあんたよりは動ける」

そうだけど、何もお前が行くことないだろシヤナ。お前にもしものことがあつたら、シヤドルに会わず顔がねえだろ！

「やめ、ろ、シヤナ」

「あんたねえ、あたしのこと信用してないわけ？それとも女は戦場に立つななんて時代遅れなこと言わないよね？」

「言わねえよ、けどな」

「——好きな人のために戦える、好きな人の代わりに戦える。好きな人の役に立てる、好きな人を護れる。戦士として、一人の女として、これ以上の幸せはない」

笑顔。普段中々笑うことのないシヤナが精一杯の笑顔を浮かべていた。やめろ、行くな、行かせちゃだめだ、考えろ。あいつを止める方法を！

「足、震えてぞ」

「強者の前にした武者震い」

「怖く、ねえのかよ?」

「怖いよ。でも、ホクヤを失うよりは全然平気」

「シヤナ、さん」

「リリア王妃。あたしは貴女方王族の剣であり盾でもあるんです。お兄ちゃんもそれは同じ、ポスケスの名に誓って、王家に仇なす者を始末してきます」

「やめろ、シヤ——」

手を伸ばした、でも、届かない。

覚悟を決めたシヤナの背中はとても大きかった。伸ばした手もシヤナが拒絶したのか、見えない壁に阻まれてしまったみたいだった。

そんな壁、いつもなら壊してしまうのに、なのに、俺は——

※

N. E. O.

ギヤスタ率いる考古学チーム、アツシユとシヤレオンと共にある場所を調査した折に見つけた秘宝でもあり、この世界の根幹にも関わる代物。

古代スア語をある程度読めたギヤスタがこの世界の真実に辿り着いたのはごく自然なことだったのかもしれない。

見つけた三粒のN・E・Oの危険性、かつて母神が何をしようとしていたのかも研究の末辿り着いたのも偶然ではなかったのかもしれない。

擬似量産に失敗し、効用を試そうとまずはUMAに投与した結果、急速な進化を遂げ、今までに見えないサイズとなった。アッシュの協力でデイハルド王国付近に捨てたが、その先のことは知らない。

次に、奴隷としていた人間に試してみた。すると、UMAとも言えない異形の八本脚のバケモノへと姿を変えた。意識も僅かに残っており、呻き声として助けが発せられていたがギヤスタには関係ない。時間が経つことにより強靱に戦闘に向けた身体へと変化していった。

最後の実験対象が、ローガ・アスキルト。弱者に試したら暴走にも近い形になってしまった、ならば強者に投与するとどうなるのか？

実験を見届けることはできなかったが、見事なバケモノが完成することとなる。かつて母神が目指した世界に必要な存在。

奴らに対抗するための存在に――

下に降りて気配を消し、物陰からシャナが見たものはさつきまでのローガ・アスキルトではなかった。

体は三倍近く肥大化しており、腕は四本、全身の毛は真っ黒に変色しており、一本一

本に殺気が練りこまれているのではないかというほど濃密な気が全身から垂れ流しになっている。

腕や脚もより強靱に、意識もハッキリしているようで真つ赤に光る瞳は正常に動いている。

——勝てない。

明らかに存在そのものが変わった。デイハルド王国で相對していた頃の、さつきまでホクヤが必死で相手にするのがやつとだったローガ・アスキルトよりもさらに超越した存在と変態を遂げていた。

本能的に勝てないと思ったのが間違いだったのか、先ほどまでの決意が消え去る。涙と汗になって色んなものが流れ落ちる。

(あれは、相手にしちやダメ。皆を連れて、逃げないと！)

そうと決まれば即行動だ。あれだけ決意込めて飛び出して戻る恥ずかしさなど一切ない。一刻も早く、見つかる前にこの場から離れたかった。

シャナが動いた、視線を動かし上に行こうと、それでいて静かに動いたはずだったのに。

ローガ・アスキルトは目の前に現れた。あの距離から移動したのか、そもそもいつ見つけたのかわからない。

怖い、でも、逃げないと殺される。四本の腕がシヤナに迫る。シヤナが勢いよく後退したのは反射的だった。もう自分の感覚下で体を動かせるかもわからない。

ギロリ、と鋭い双眸がシヤナを捉える。

——カハツ、とローガが嗤った。

四本の腕に濁流気を纏わせて、気の絶対量が上がってるせいで全体的に濃密さも比例して上昇している。

数もかつての二倍、だが速度は僅かに落ちているようだ。そうでなければ、シヤナが回避できたことに説明がつかない。

こいつを撒きながら、皆を連れて脱出する。シヤナは自ら愛用するダガーとサバイバルナイフを握り締める。

今、目的がこちらに向いていてよかった。シヤナは後退しながら迫り来るローガの攻撃を避け続ける。速度は落ちてる、しかし、手数とリーチがそれを補っていた。結果、シヤナは一撃攻撃をモロに喰らってしまった。

一転、二転、三転と衝撃によるダメージがシヤナの全身を走る。

「っ」

呼吸が、できない。息を吐くことに精一杯で吸うことにまで行動を移せない。ゴロゴロと受身だけはしっかりと取る。小休止をして呼吸を整えたいが、生憎そのような暇はな

い。痺れ作用のある草をすり潰した粉末を塗りつけたUMAの歯で作った投げナイフをローガに投げつける。

痛む身体に鞭を打ってローガの視界から抜けようとするが、彼の動体視力からは逃げられなかった。投げナイフも効き目はなさそう。呼吸が乱れながら逃げるシャナ、追いかけるローガの追いかけっこは20秒も保たなかった。

何故なら、上から飛び降りてきたホクヤがローガの脳天を殴りつけたからである。

「ホクヤ!?!」

「つたく、無茶ばつかしやがって!」

それはどつちが、とシャナが叫ぼうとしたが声にならなかった。名前を呼ぶだけで精一杯だったからだ。

ホクヤは辛そうに頭を抑えながらこちらに駆け寄ってくる。

ローガも大したダメージはなさそう。

「バカ、なんで、なんで!?!」

「バカはお互い様だ! あんなバケモノ、一人で挑もうなんてよ!」

「あんたも、その熱で動いてんじゃないよ!」

ローガの攻撃を躲す、ホクヤも反撃をしようとはしない。

「シャナ! さっきの続きだけだ! ゴハッ、俺も同じだ!」

反撃はしない、だけどバカはバケモノを無視してバカに向かって叫ぶ。

「俺だって、お前に死んでほしくない！お前に側においてほしい、お前だけが犠牲になろうなんて思うんじゃない、ゴホッ、ねえよ、シヤナツツツ!!」

ドカアアアアアアン!!と下から突然床が破壊されたと思えばローガは殴り飛ばされていた。

「待たせたな、ホクヤア!!」

「貞操は無事かシヤナ!?!」

ドーバスとシヤドルだ。二人とも傷だらけである。シヤドルに至ってはドーバスの肩に担がれている。

「師匠!」

「お兄ちゃん!」

「ドオ、ドオーバスウ!!」

殴り飛ばされたローガの復活は早かった。四本の腕がドーバスを襲う。

パンチを飛ばしながら勢いよく距離を詰める、ドーバスはその場を動かない。シヤドルを投げ飛ばし、そこから初めて構えを取った。

「なんだ、ローガ。見ないうちにケツタイな姿になりやがって、よォー!」

一手、二手、三手、四手を流れるように捌き回避しドーバスはローガの懐に自慢の右

ストレートを叩き込む。

身体の大きくなったローガの死角は一気に増えた、そのことにいち早く気がついたドーバスの動きは滑らかに、的確な位置へと流れ込むように動く。

「ゴア!？」

「的がデケエと狙いやすい! シャドル、そろそろ脚は治ったか!？」

いつもの筋肉痛で立ってないシャドルはドーバスに担がれてここまで来た。さつき投げ飛ばされ、今はシャナに支えてもらってる。

「———テメエみたいなチートと一緒にすんじゃねえよ! 治るわけねえだろ!! 無理したからめっちゃ痛いわ!!」

「だな、俺も全身痛むぜ! あんな巨大生物投げ飛ばすんじゃなかったな!」

豪快に笑い軽口を叩きながら、ドーバスはローガの攻撃を受け、反撃を続ける。流れるような、それでいて力強い一撃を的確に叩き込む。こんな状況なのにとても楽しそうに、本心から戦いを楽しむようにディハルド王国最強の男の戦闘は実に見事であった。

対するローガはどこか冷静さに欠いており、焦ったような落ち着きがなさそうに見える。
た。

「ホクヤア!! お前も何へばってんだ!?! 根性出せ、根性オー!」

「そうだア! テメエシャナ傷だらけじゃねえかア!! 責任取ってあの野郎ブツ飛ばせやゴ

ラア!!」

「ちよ、ドーバスさんにお兄ちゃん! あいつは今それどころじゃ——」

「関係ない」

「だな」

ドーバスとシャドルの言葉に続いたのは、ホクヤだった。

「——ありがとう師匠、シャドル。目が覚めたぜ!」

拳をギュッと握り締める。

そのままゆつくりと、徐々に速度を上げながらローガに向かう。

「師匠、ちよつとそいつの腕抑えといってください」

「ウハハハハ、師匠を扱き使うとは偉くなったなオイ! わかった、オイローガ! 俺の弟子の踏み台になって、くれやア!!」

「ギツ、テメエエエエエ!!」

——ホクヤの拳に熱が籠る。

気と【テンション】がバチバチと火花を散らす。

ローガのパンチが飛ぶ、ドーバスはそれを全て撃ち墜とし四本の腕の軌道を力づくで変える。

「フザケルナ、ドオーバスウ!! オレが、オレがアーサー王の一族と、キサマヲ殺すまでエ、

オレは、オレはア」

——ホクヤとローガの距離がゼロになる。一瞬だけ、視線が交わる。

「——ナツ、ニイ」

「お、りやああああああああああ!!!」

ホクヤの拳が空を切る。

ローガの脳天でホクヤの拳が勢いよく炎上した。

53. 『炎の拳!!』

「オ、オオオ……ッ!？」

ジジジジジ、とまだ熱のこもる右拳がローガの頭頂部を焼き続ける。

今のホクヤに撃てる正真正銘全力の一撃。N. E. O. を摂取する前の傷は塞がっておらずダメージも蓄積され続けている。しかし、タフネスさは上がっているため一撃で倒すのは難しい、普通の攻撃ならば。

——気と「テンション」を混ぜ合わせ、炎による追加攻撃、さらには人体の急所の一つである頭を狙ったのだ。

いくらローガといえど生物、そこだけを変えようのない事実。

ローガの頭はそのままホクヤの拳の重みを支えきれずに石造りの床に激突すると同時に体制を大きく崩すことになった。

「——師匠!」

「おう!」

「何故俺の名を呼ばねエ?!？」

「お兄ちゃん立ってるのもやつとでしよ、強がらない。あたし達はアーサー王とリリア

その行く道に立ちふさがるホクヤとドーバス。しかも、この二人は師弟関係にある。アーサー王一族の前にこいつらを潰す必要がある。

「師匠、聞くのも何ですけどあいつと一騎打ちしなくていいんですか？」

「野暮なことを言うな愛弟子よ、あいつは俺の知る弟弟子のローガ・アスキルトじゃねえ！俺は戦士としか一对一で勝負する気はねえ!!」

「うっす」

——そこから、ホクヤとドーバスが駆け出すのはほとんど同時のタイミングだった。ドーバスが先にローガの懐に潜り込み、右腕を振るう。ローガも黙って受けるわけもなく、動きは鈍ってはいるが四本の腕を動かして迎撃する。

しかし、ドーバスはローガの攻撃を物ともせずには右拳を打ち付ける。

「——ツハ」

「まだ、デイハルド王国で戦ってた方が強かったぞ。まだ、その身体に慣れてないのか？」

「ダア、マ、レエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

当たり前のことだった。今の今まで二本の腕で生きてきたのに倍が増えてしまつては感覚も慣らすのに相当時間がかかってしまう。ここまで動かせたのが凄いほどである。

ドーバスの連撃は続く、対するローガも濁流気を巧みに扱いながらトリツキーな動きを見せるホクヤの攻撃も防ぐ。

(クソ、思った以上に「テンション」が上がらねえ。やつばさっきの攻撃で無理しすぎたか……)

悪態を吐きながらも、退く様子は見せない。ズキズキと全身が痛むがある程度は「テンション」で騙せる。

再び、ローガの体制が大きく崩れドーバスがその一瞬の隙を突いて全力のパンチを打ち付ける。

普段、強力すぎて抑えていたドーバスの拳は大気を震わせローガを空の彼方へと吹き飛ばすには十分すぎる威力であった。

石造りになっているカステイルア王国王宮の屋根を突き破り、ローガと一緒にパンチも飛ばしたため、威力のせいで速度がしばらく落ちることはないだろう。

「——やつば、バケモノになっても弟子であることには変わらない、か。この手で殺せないなんてな」

膝を崩し呆然とするホクヤのことなど知らず、ドーバスは溜息を吐いた。
大きく空いた壁の外では太陽が昇ろうとしていた。

※

その頃、ルートストーンと呼ばれるアルドニモーの周囲をグルグルと回る小惑星からホクヤのことを観察していた黒髪の少年はニヤリと笑みを浮かべた。

黒髪の少年の名をウィル、世界の破壊者とも呼ばれているフェバルの一人である。

「——まさか、エボルド粒子の成分がフェバルにも僅かながら影響を与えようとはな。いや、ホクヤが単純にフェバルとなった日が浅かったからこそその結果かもしれない。僕やレンクス、他のフェバルだったならどうなる、か」

あまり僕には関係ないけどな、とつまらなさそうに呟く。

N・E・O. と呼ばれる薬、又の名を進化急速性薬物という即効性の薬に含まれる成分がエボルド粒子だ。

本来であれば別星系の成分なのだが、何故ここにあるのか、そんなことはどうでもいい。

「この調子ならば奴、母神と勝手に崇められてる雑魚の目論見もどうせ失敗に終わるだろうな。万が一に備える必要性もない、僕が手を下すまでもない」

ウィルの一人語りは続く。たった一人しかいないこの場所で、まだ話し足りないとかりに。

ネタバレをするなら、かつて、何もなかったこの星に手を施したのは母神と呼ばれる

フエバルだ。

名をクシヤル・ラーヴアリット、能力「世界の扉」を所持している。フエバルでありながら、フエバルを恨み敵対心を抱いているクシヤルが行おうとしたことはシンプルである。

——フエバルを倒す存在を作る。

それも星一つを使うという巨大なスケールで行われ続けている。フエバルでもないのに異世界を渡り歩き大暴れを繰り返す女の出身である地球を目に付け、何もなかったアルドニモー全域にエポルド粒子をばら撒いてから地球の生息していた動物達を「世界の扉」を使いアルドニモーにまで連れてきて、急速的進化を促した。

「世界の扉」の力さえあれば、どれだけ離れていようが星と星を繋ぐことは容易いことである。

だが、ウィルにとってはそんなもの滑稽でしかなかった。

この星、アルドニモーはもう長く保たない。デイハルド王国周辺のN・E・O・はたしかにギヤスタの見つけた三つだ。

——しかし、他の大陸含めアルドニモーには十億を越えるN・E・O・が現在も点在し、ある場所から現在も送られ続けている。

この星の存在が知ればダイラー星系の連中はもちろん、フエバルハンターも黙って

はいないだろう。

そんなことよりも、ウィルの興味はホクヤ・フェルダントになっていた。

「[テンション]か、あのオーラはどうやら僕の「干渉」を跳ね除ける作用もあるようだ。くくく、今すぐにでも始末してやりたいが僕にも僕の都合がある」

この場で始末できないのは本当に残念だ。近い将来、力を身につけて必ず厄介な敵として立ち塞がる。

わかつてはいる、わかつてはいるがあえて泳がせる。そして、壊れていく様を見るのも悪くはない。

そして、何より——

「僕も地球に行かねば、この星の奴らがブルーアースだとか言つて崇めている地球へ」

奴らに先を越されては厄介だ。ウィルは自らの首を何の躊躇もなく刎ね飛ばした。その場からウィルは姿を消した。

死に戻りによる星の移動である。一時的な死を迎えたフェバルはその世界では死ぬが、星脈によつて次の世界で蘇生を果たす。

——近いうちに【神の器】を持つフェバルと【守護】を持つフェバルがこの宇宙に誕生することは、その時のホクヤはもちろん誰も知る由はなかった。

※

うわあ、すつごい吹っ飛んだなあ。宇宙にまでいきそうな威力だったけど、角度的にそれはないだろう。ていうかあれを食らってもローガはまだ生きてそうというのが恐ろしい。遠くに飛びすぎて俺の気の探知範囲外になっちまったけど、多分生きてる。だって、めっちゃ頑丈な奴だしな。

「師匠」

「ひとまずは終わりだな！早くデイハルドに戻ってお前と決勝戦も済ませたいからな、アーサー王達連れて早く帰るぞ！」

そうだ！忘れてた、まだ決勝戦やってなかったんだった！

襲撃があまりにも衝撃強すぎてすっかり忘れてた、ていうか今デイハルド王国でそんなことしてる暇あるのか？復興もしないとマズインじゃ、まあ、そこは帰ってから考えればいいのか。

今はレオナルドさん達の所へ行こう。場所がさつきと同じなら上階にある一室のはずだ。

俺はもう「テンション」を出す気にもなれず空を飛ぶことなく跳躍で行く。師匠も難なくついてくる。少し行ったところに横になったレオナルドさんにシャドル、不安そうな顔をしたりリア王妃、深刻な表情を浮かべるシャナがいた。どうやら場所はさつきよ

りも少し奥に移動したみたいだ。

「シヤナ」

「！ホクヤ、終わったの？」

「ああ、師匠が空の彼方に吹っ飛ばしたよ」

そう、とシヤナは未だ深刻そうな表情でリリア王妃の顔色も優れない。シャドルが悔しそうな顔をしているのはいつも通りとして、レオナルドさんの意識は戻っているもどこか心ここにあらずという目をしている。

「ホ、クヤ。我はもうここまでのようだ」

「あ？」

何言ってるんだ、この人？

「身体に力が入らん。眠気も、する。我をここに置いていくがいい、国に戻ったら伝えて欲しい。次期アーサー王は」

「やだ」

「ミヨル、え？」

レオナルドさんはポカンと呆ける。他の連中も俺のことを何言ってるんだこの馬鹿と
いった目で見るのはやめていただきたい。

いや、そうじゃなくてだな！

「ふざけんよ、目の前で死にそうになつてる友人を何で見捨てなきやいけねんだよ！ ！というか、何であんたはもう諦めてるんだよ!? 待つてる人たちがいるんだぞ!!」

「いや、だが」

「いやもだがも聞きたくねえ！ 残される者の気持ちを考えて!!」

馬鹿なことを言っているレオナルドさんの身体に手を当て、気による治療を始める。本当ならマクベス先輩に頼りたいところだけど、今は俺しかない。シャドルはこんな状態だし、シヤナはある意味脳筋、師匠は論外、リリア王妃はそもそも気の扱いに長けていない。

もう、大切な人を失うなんてことはごめんだ！

『ホクヤ、ごめんね。俺、姉ちゃんはあるがいて幸せだったよ』

——重なつてしまう、ホクエ姉とレオナルドさんが。あの時も、ナナが目の前でやられた時もそうだった。

もう大切な人を失うなんてうんざりだ！ だから、俺が強く、もう守られるなんてことのないように、自分の身くらい自分で守れるくらい強くなつて、それでいて大切な奴を守らる！

「あんたが死ぬことは俺が許さねえ！ たとえあんたがそれを望んでも、俺が許可しねえから絶対に助ける！」

「わが、ままな奴め」

「我儘上等！末っ子は我儘っ子なんだよ!!」

バチバチ、いつの間にか「テンション」まで発動していたみたいだ。さつき使えるだけ使ったと思ったのにまだまだいけるみたいだな。

「テンション」を使った瞬間、レオナルドさんの傷が塞がる速度が急速に上がった。よし、これならいける！

「ホクヤ、お前……！」

「世話の焼ける人だよ、本当に。この調子だとバーミليون王女にも苦労かけてるんじゃないんですか？」

「……そ、そんなことないし」

「せめてこつちを向いて言ってください」

やれやれ、本当に助かって良かった。俺にできる治療はここまでだな、あとはマクベス先輩に任せよう。

「じゃ、帰ろうか」

「そうだな。すまねえな、シヤナ、まだ歩けそうにないわ」

「もうこの際だから置いてけ置いてけ」

「——ンだと、ゴラアドーバスウ!？」

「まあ、まあお二人とも落ち着いて」

「我はもう立てる、ありがとうホクヤ。改めて感謝する」

「いえいえ、気にしないでください」

この調子だと一日じゃ足りないな。走ってきたときは数時間だったけど、今の面子的に走れそうにない。体力的にも、疲れが半端ない。「テンション」で騙してた分の反動も少しずつだが、全身を痛めつけ始めている。

「そうだ、ホクヤ。戻ったら見て欲しい石板があるのだが……」

「石板？」

そういえば、ここにもあったな。何かよくわかんないことが書かれた石板。

まだ残ってるかな？ 改めて思うと少し気になるところもある。

…… 師匠がローガをぶっ飛ばした時にフロアがぶっ壊れてなければありがたいけど。

「レオナルドさん、ここにもいくつか石板があったんですよ。結構上の階なんですけど」

「む、そうなのか」

「ええ、よくわかんないこと書いてたし、それどころじゃなかったものでじつくりは読めてないですけど」

「え、あんたまさか古代スア文字読めたの？」

驚いたのは前を歩くシヤナだった。

そうか、そういうえば一緒にいたから知ってるんだったな。

「ああ、なんかよくわからんけど」

「…… いまいち釈然としない」

「そんなこと言われても」

「なら、その石板もできることなら回収したいが、また後日改めて来るとするか」

「そうですね、とりあえず戻って休みましょう」

もう、本当にクタクタだ。ゆっくりでもいい、休憩を挟みながらでもいいからデイハルド王国に戻ろう。

風呂にも入りたいし、何より腹も減ってきた、し、何だか、眠たい。

俺の意識はここで途絶えることになった、その後のことはよくわからない。

まあ、何はともあれローガ・アスキルトは倒したんだ。

—— そう、戦いは、終わったんだ。

54. アーサー王十三世

俺たちがデイハルド王国に戻ったのは、あれから半日後のことらしい。

意識を失った俺、脚に負担をかけて一人で立つことも難しいシャドル、運動能力の低いリリア王妃、特に何も無いシャナの四人を師匠とレオナルドさんがそれぞれ分担して背負い、全力ダツシュした結果らしい。

——で、俺が意識を戻したのはその一時間後でナナに泣きながら抱きつかれたり、ツンデレ気質なミカに頬一発叩かれた後で抱きつかれたり、オヤジに酒を勧められたり、パイル先輩とマクベス先輩に劳いの言葉をかけてもらったり、ミヨルド王子にサインを求められた。謎である。他にもあちこちで一悶着あったみたいだけど、俺は自分のことで精一杯だったんだ。特にシャナが「もう、心配かけさせないで、バカ」とか言うて皆がいる前で上目遣いの涙目で唇を合わせようとしてきて色々と焦った（思い出したらお互いに恥ずかしくなるレベル）

そうそう、ミヨルド王子といえども王子じゃない。レオナルドさんに「あ、お前今日からアーサー王十三世ね」と王位を譲渡され、アーサー王となってしまった。もう、呼

び捨てでミヨルドでいいや。

カイヤさんはナナや他のローグ街の連中の罪をまとめて背負うと言つてビステイブ牢獄へ自首した「あの人が、いないんならもう戦う理由もないからな」とのこと。ミヨルドはこれを機にローグ街を閉鎖するという大胆な行為に出た。だが、ミヨルドよ、あの地下温泉は使わせてもらうからな！

もちろん、ギラを始めとした粗暴な者たちを国内に置くのはある意味危険である（主にギラだけが）

もちろん、本人も話を聞いて暴れたが俺が三度目の取り押さえをした。カイヤさんもギラを擁護することなく、仲良くビステイブ牢獄へと入獄することになった。

そして、あれから二日が経ち俺はナナと一緒に王宮に来ている。

ナナも一応ローグ街の一人として、野放しにするのは危険ということで俺が監視役に任命されてしまった。というか、本人が望んだ。

「——認めた種族を方舟に乗せて連れてきた。計画は順調である、やはりあそこの生物たちは将来性を秘めている。つて、全然わからねえ」

「ホクヤ様でもわかんないツスカ？」

「いんや、何故か文字は読めるんだが意味がさっぱりわからん。方舟つてなんなんだ??」

「いやはや、まさか本当に読めるとは、フェバルというのは本当なのですな」

「バルターさん、あんたフェバルを知ってるの？」

そう、この場にいるのは俺とナナの二人ではなく、バルターさんという初老の大臣様がいらっしゃる。

レオナルドさんに頼まれていた石盤の解読である。王宮にあったのは三つ、バツツ達がつけてきたものらしい。ということは元々これはベヘモンのものか。文字が潰れていたり、石盤そのものが砕けていたりと一文読めるのがやつとのものが多い。

むしろ、これだけ綺麗に残っていたのは奇跡みたいなものだ。相当古いもののようにだし。

この石盤を持ってきたのもバルターさんだ。レオナルドさんは二日後行われる決勝戦の準備をしていて、この場にはいない。

「ええ、先代アーサー王と共にジルフ様にはお世話になりました。彼が言うにはフェバルには自動でその地の言語を翻訳する能力が備わってるとか」

「何それ初耳!？」

「先代アーサー王とそのようなことをお話ししていたことを偶然お聞きしたので」

おい、どういふことだレオナルドさん。俺、そんなこと聞いてないぞ。

あの人のことだから忘れてたとかそういうのあり得るから普通に困る。

「私も詳しくは存じ上げませんが、フェバルとは数奇な運命の元で旅を続けてらっしゃ

るのですね」

「まあ、そうですね」

「ホクヤ様、どうか自身が人であることをお忘れないうように。強すぎる力は時に人を狂わせます」

「——そう、ですね」

人であることを、か。たしかにローガは強すぎる力に歪まされた一人なのかもな。

もしかしたら、この母神っていう奴もどこか狂っていたのかもしれないな。

「それにしても、方舟ですか」

「知ってるんですか？」

「ええ、王家に伝わる文書にそのようなものがあつたことを記憶しています。約束の舟、認められた者達の舟とも呼ばれていたとか」

「……　　ますますわかんねえ」

「……　　同じくツス、頭使うの苦手ツス」

これが母神の記したものの可能性はあるんだけど、本当にわからん。

「一旦休みましょう、急ぐ作業でもありませんし、ホクヤ様は決勝戦も控えていらつしやいます。クルナスティーでよろしいでしょうか？」

「あ、お願いしまーす」

ん、ナナはもしかしてクルナスティーが苦手なのか？

だけど、もう遅い。無言は肯定と捉えられ、バルターさんは行ってしまったのだから。

※

アルドニア広場のアーサー王一世の像がある場所で、アーサー王十三世に任命されたミヨルドは足を震わせていた。

「……無理しなくてもいいんですよ、わざわざ早める必要もないでしょ」

「いや、我は我は今日やると決めたのだ、後に引き延ばして裏目にすることは目に見えてるからな！」

「知らんがな」

適当に相槌を打つシャドル。脚は歩行できるレベルにまで回復しており、本日はシャナと一緒にミヨルドの護衛という形で来ている。だが、正直必要なかも疑問に思われる。ミヨルド自身もディハルド武道大会の予選を勝ち抜いて本選メンバーに選ばれる曲がりなりにも実力者であるからだ。

戴冠式はレオナルドによって適当に終わらされたので、せめて宣言だけはしつかりしたかった。本来ならば決勝戦の時間をもらって演説という形でやる予定だったのだが、思いの外緊張屋なミヨルドは早く終わらせるべく今日という日を選んだ。

ちなみに皆さんミヨルドのことを興味津々と言った様子で直視である。

「見ろ、新しいアーサー王だ！」

「武道大会にも出ていらした強者だぞ！一回戦で負けてたけど！」

「よ、よく見れば格好よくも、ある、かな？」

「やはりまだお若い！」

「護衛の方も連れて、何かするのかな？」

「わざわざわたと復興が続いているハーレー街の近くなだけあって多くの人達の好奇の視線がミヨルドに集中する、当の本人はダラダラと、とんでもない量の汗を全身から流している。水不足が解消できるかもしれない。」

「……すごい汗ですよ、アーサー王」

「ヒヤ、ヒヤ、シヤナちゃんそういうこと言うなし！これは、そう、暑さ！暑いんだよ、今日は一段と暑いなあ、はっはー！」

ヤバイ、片想いの相手の前でめっちゃ狼狽えてしまった。しかも盛大に嘔んでしまった。これで好感度下がるなんてことはないと思いたいが、イメージは確実に悪化した。いや、そもそも下がる好感度あったかな？

そう考えたら余計に凹む。ここで格好いいところ見せたいがためにシヤドルが付いてくるのも承知でこの兄妹に護衛を頼んだと言うのに。

「どうしたんだろう?」

「何かやってらっしやるな、新手の儀式か?」

「いや、もしかしたら王族に伝わる秘伝のDA☆N☆CEとか!」

「そんなのあるの?」

……よくわからないが、妙な噂を流される前にさっさと終わらした方が早い気がしてきた。意を決したミヨルドは表情をキリツと変化させる。

シヤドルとシヤナは思わず身構えてしまう。そう、ミヨルドも一応は王族である。それだけで、あのレオナルドの実の息子、あの威厳と覇気も受け継がれているのかもしれない。

二人はミヨルドの言葉を待った、ミヨルドは静かに口を開く。

「——頼む、演説中二人とも私の隣に立って手を繋いでてくれ、こんな大勢の前で話すのは恥ずかしい」

——これが最初の命令だった。

「皆の者、よく集まってくれた。我はこの度よりアーサー王の名を継ぎアーサー王十三世として王位を授かったミヨルドである! まだ、若輩者ゆえ、このように部下、否、友に支えてもらわねば何も出来ぬ身! 父は凄かった、我は尊敬している! 父のように偉大で、強く、この国を引っ張っていける存在に我はなりたい! だが、今の我では力不足だ。

そこで皆の力を借りたい！我ら王族も諸君が困っていた時はすぐに駆けつける、互いに支えあつていこうではないか！互いに助け合つていこうではないか！我は今も緊張で倒れそうだが、しかし、こうして二人の友に支えられてここにいる！これが私の目指すデイハルド王国！まずは皆の力を貸して欲しい、一刻も早くハーレー街の復興を済まし元通りにして欲しい！否、してください！！」

わずかな沈黙があつた、シャドルとシヤナも色々と言いたいことがあつた。

陰から我が子の様子を心配そうに見ているバーミリオン王女、弟よりもシャドルを見に来たイビルタ王妃の姿もあつた。

いつの間にか人で溢れかえっているアルドニア広場からミヨルドは、早く立ち去りた
い一心だつた。

——次の瞬間、拍手が、歓声が、爆発する。

「おっしや任せろオ！」

「他ならぬアーサー王の頼みだ！行くぞテメエら！」

「見直しました、ミヨルド王子、じゃなくてアーサー王！」

「ウホッ、いい男！」

「任せとけ、ヘタレ王子！」

「何かやらかす前にしつかり俺たちを頼れよお！」

——デイハルド王国に活気が戻った。

ミヨルドは目尻に涙を浮かべ笑顔を見せた。シャドルとシャナも苦笑いしながらミヨルドからそつと手を離す。

余談だが、三ヶ月は必要だと思われたハーレー街の復興はわずか半日で終了した。

55. ローガ・アスキルトの与えたモノ

かつての面影のなくなったローグ街、新アーサー王の方針でこれからはフェルダント通りという名前で通すつもりらしい。

汚水、汚物の処理、暗い雰囲気を一気に取っばらい、バリゲートも処分し見た目からの改善を始めている。復興は主に元ローグ街の住人達の半分が行い、指示は王家の護衛隊長であるゲルターが指示を出している。ちなみに元ローグ街の住人のもう半分はギラを三度も抑え込んだホクヤに惚れ込み、彼に忠誠を誓ったとかなんとかは別の話である。

かつてのローグ街の面影が消え行く様子を傍目から見ているのがドーバス・ウーバーとバルバルド・クエーサーである。

元々ドーバスはローグ街の出身だ。親はわからない、気がついたらローグ街で暮らしていた。そこでバルバルドに拾われた。犬猿の仲であったローガもその後拾われ、共に弟子入りを果たすことになる。

「———ここも、なくなっちまうんだな」

「だな。どうした、珍しく感傷にでも浸ってるのか？」

「まあ、一応ここで暮らしていたわけですから」

故郷とはそういうものだ。いつ戻ってきてもかつての姿であってほしい、自分の懐かしい記憶のままであってほしいと願うものだ。記憶と少しでも違えばまるで知らない土地に来たかのような不思議な感じがしてしまう。

ここでローガと出会い、バルバルドと出会った。懐かしく感じたが、不思議と寂しさはなくどこか清々しい気分だった。知っている形が消えゆくというのに、ここに自分の知るローグ街はもうないというのに。

「——形あるものはいずれ消えるものだ。大切なのは、己が心に残るほどのものがあるかだ」

「バルドさん」

「思い出っというのはそういうもんだ。形など二の次に過ぎん」

バルバルドはどこか憂いを帯びた表情を浮かべ、少し雲がある空を見上げた。

「ローガの奴を殺せなかつたことは悔やむことはない、あんなのでも一応は長い時間を過ごした奴だ。多少の情は仕方あるまい」

「……ですが、奴が再びここに来たら」

「そんなときはもう一回止めりゃいい。その頃にホクヤはもういられないだろうが、お

前がいれば大丈夫だ。それに、若い者たちもおる」

空の彼方に吹き飛ばされたローガは生きている、確認したわけではないがドーバスもバルバルドも確信を持つて言える。何故ならそんなことをしたくらいで死ぬほど柔な鍛え方はしていないからである。

「——あの馬鹿はベルズのことを神格化しすぎた。まともに対処できなかった儂が言えたことじゃないけどな」

昔からそうだった。ローガ・アスキルトは父であるベルズ・アスキルトのことを慕い、依存しすぎていた。

レオナルドの娘に強姦しようとしたところを見かけたレオナルドによって殺されてしまった。だからこそアーサー王一族を倒せば父を越えられると、憎しみとはまた違った動機で今回の件に発展してしまった。

ベルズの破天荒かつ粗暴な行動はジルフも手を焼いていたが、友として接することはできていた。運命は巡り合わせではない、ホクヤがドーバスの弟子になったことも然り。

「そういえば、二日後には決勝戦もあるわけだがもう傷は大丈夫か？」

「ええ、元々大したものではなかったの」

「そかそか、楽しみだな。ホクヤとお前の試合、いや死合になる可能性があるのか？」

「ウハハハハ、いくら何でも限度は弁えるつもりですよ」

ドーバスが自分の言ったことを守るかどうかは二日後の試合で嫌でも判明することになるだろう。

バルバルドは溜息を吐きながら再び空を見上げた。

※

「ぶえつくしよい、ういー」

「大丈夫ツスか？」

「ああ、気にすんな」

俺とナナは王宮を出て一旦フェルダント温泉に寄ることにした。カステイルアにあつた石板はいつの間にかこちらに運び込まれていたんだけど、そのほとんどが読めない状態だった。

俺が初めに読んだのは運良く破損も文字潰れもないものだったようだ。その解読含め選別作業がやっと終わり、夕暮れなので家に戻って修理してもいいと思つただけど、一風呂浸かりに行つても問題ないはずだ。そう、あのどさくさに紛れて我が家は半壊状態！マジびつくりしたよ！今は生活できるレベルにまで直つたけど、それまでフェルダント温泉と鬼の双角で泊まり込みだったよ！

俺が作った関係者以外立ち入り禁止のいわば業務関連と関係者以外は入ることを許していない裏口から俺とナナは入る。正面から行けば客として見られて金を取られてしまう。

「あ、ホクヤの旦那！お疲れ様ツス！」

「兄貴！掃除終わりましたぜ、お次は何しましょう!？」

「ホ、ホクヤさん！もうすぐ店閉めますけど、何か、不備でも!？」

…… うん、人数増えたの忘れてた。

先の騒動で何故か俺を慕ってきたローグ街の愉快な皆さん、俺の元に來ただけで総勢二十四人従業員としてここで働いている。それに伴って、建物も少し大きくなったのは内緒だ、経費は迷惑費として王族からもらったのがあるから困りはしなかった。

「店長、お疲れ様です」

「ラナさん、無理しなくていいから普段通りでお願いします」

「ふふ、おかえりなさいホクヤさん」

女将のラナさんもまだいてくれたみたいだ。彼氏のアレンの姿はないけど、まあ当然か。あいつは詳しいことは聞いてないけどローグ街の連中が苦手らしいからな、というか毛嫌いしてる。

ラナさんによるとアレンの反応が普通らしいけど、俺はここに來て日が浅いから

なあ。本国とローグ街との確執はよくわからん、一部しか見てないし。

ていうかなナよ、頬膨らましすなし、機嫌悪くなってるの目に見えるけど裾を引っ張るな、伸びる伸びる。

「後は俺がやつとくんで、ラナさん先に戻ってもらっていいですよ。アレンも心配してるでしょうし」

「では、お言葉に甘えてお先に失礼してあの馬鹿の相手をしてきますね」

「あ、うん、ほどほどにしてやってください」

さて、あとは他の奴らをどうするかだな。元ローグ街の連中ともうまくやつてるみただ、雰囲気がとても良い。

「はい、一旦全員集合ー」

まあ、今日のやることは終わったつぼいし解散でいいだろ。本音を言っちゃうと早くお風呂に入りたいのです。

普段は夜もやつてるけど、今日は早めに店を閉めると事前に言ってる。

理由？言うまでもない、俺の完璧に私情である。

「今日はここまでだ、風呂に入りたいやつは入って、帰るやつは帰ってよし！お疲れさんー」

「お疲れ様でしたー！」

「バベルさん、この後飲みに行きませんか？」

「お、いいね！」

「ウチらも女子会やるか！」

「いいツスね！」

うむ、仲良きことはいいいことである。

全体的に女性が少ないのは少し問題であるが、店はそれで運営できてるから問題ないな。

さて、ではお楽しみの風呂といきますかね！

「ホ、ホクヤ様!!!何もここで素っ裸にならなくても!!!」

おっと、失敬。

※

ズーマコロシム自体の損傷は大したことなかった。決勝戦は問題なく行えるが、問題はその決勝戦でコロシムが保つかどうかというところである。

片やデイハルド武道大会無敗の二年連続でチャンピオンと称されるドーバス・ウーバーとその弟子でありチート級能力を持つフェバルのホクヤ・フェルダント。

激戦になることはもちろん、周囲の被害が心配される一戦となるだろう。今となって

は先代アーサー王のレオナルド・アーサーは頭を抱えていた。

「先代、何もそこまで…」

「いや、そっちもそうなのだが、我もジルフと喧嘩した時のことを思い出して周りに迷惑かけていたのだなあと、な」

なんて今更な、と話を聞いていたヤエは溜息を吐く。ジルフなる人物像をヤエは知らないが、53年前の戦争で活躍した五人の英雄の一人だ。しかも一人で敵軍に突っ込み何千、何万もの大軍を斬つたと言われてる人物、そんな男とレオナルドが喧嘩すればどうなるか、あまり想像したくなかった。

先先代とバーミリオン王女の苦勞が目に見えるようだった。

「それで、ヤエよ。N. E. O. の出処はわかったか？」

「ええ。しかし、ギヤスタ王が発見した遺跡は既に倒壊しており調査が不可能でした。ですので、手掛かりはもう…」

「そうか、バルドにも頼んであるがあれは世に放つてはならん代物であるとわかった。ギヤスタの持っていたのが全てとは限らないしな」

ローガ・アスキルトの暴走。

詳しい効能はわからないが、摂取した者の身体能力、気力、そして肉体を変質させるほどの危険性があると実際に目にしたシャナから報告は受けていた。ホクヤによると

あの石板にはN. E. O. のことは記されていないなかったらしい。最後の手掛かりは彼女が握っているかもしれない。本当に淡い期待だが、賭けるしかない。

「ヤエ、明日パイルをここに呼んでくれ」

「わかりました。先代、あまり無理はなさらないでください」

「無理などしていいない。王位をミヨルドに譲って我は自由に動ける、可能な範囲が広がっただけだ」

「ですが、あなたは」

笑うレオナルドにヤエは思わず言葉を紡ぐのを躊躇う。

「あなたの体は、もうボロボロなんです。これ以上の無茶はおやめください」

「…… わかっとるわい」

デイハルド王国へ戻った日、レオナルドはマクベスによって治療を受けた。

その時は完治したのだが、体に負担がかかり過ぎておりその部分は治せないとのこと。マクベスの診断によるとレオナルドは5年も生きることができれば十分なほどに体がボロボロになっているようだ。

もう高齢なのにも関わらず、無理に無理を重ねた結果である。元々弱り始めていた体に鞭を打ったのはレオナルド自身だ。本人は後悔していなかった。

「我が決めて、動いた結果だ。この老いぼれの命で先の未来へ繋げられたならば結構なこ

とだ、後悔はしてない」

「先代……」

「ホクヤに、我が友に救われた命でもある。無駄にはせん、引き続き調査を頼んだぞ」

諦めかけていた命に、ホクヤが激励を与えた結果が5年の余命。

それが果たして長いのか短いのかは、誰にもわからない。

56. 燃え上がれ、決勝戦！

——熱気に包まれるズーマコロシウムではもう一つの太陽ができたと言っても過言ではないくらい暑い暑さと熱さだった。それもそのはず、だって今日は延期に延期を重ねたデイハルド武道大会決勝戦なのだから！

「レディイイス、アアンド、ジェントルウウウ——」

「前置きが長い！さっさと始めよ！」

「ウウウ、つてこれくらい最後まで言わせてくださいよ！マラナ王妃、痛い痛い、首絞まってる!？」

「やれやれじゃ」

会場からも早く始めろと野次が飛び始める。司会のガレオスは涙目になりながらマラナの攻撃を受けているため中々始めることができない。

その横で解説役及びストッパーに呼ばれたバルバルドは溜息を吐くだけである。仕事してない。

「つてて、もうお前らせつかちすぎ！実は俺様も楽しみだから早いとこ選手入場といこうか！説明はめんどーだから省くぜ！カモン、ホクヤ・フェルダント&ドーバス・ウー

「バー!!」

「グダグダじゃな」

静かに、それでいて激しい気を放ちながら二人はそれぞれ反対側から入場する。試合前の睨み合いだけでも気圧される者もいてもおかしくない気がぶつかり合っている。

二人がリングに現れたことにより会場のボルテージは一気に上昇する。

「いよいよ、か」

「ミヨルドよ、この試合しつかり目に焼き付けておけ。恐らくだが、そう長くは続かん」

ミヨルドとレオナルドは静かに、行く末を見守る。

「いつけー! ホクヤのアホオ、負けたら俺が許さねーぞ!」

「元気だなラグナ。でも、ホクヤさんには個人的に頑張つてほしいですね」

「私は別にどつちでもいいや」

「マクベスさんがいないからって機嫌損ねてんじゃねえよ、ムー」

「な、だ、誰が!?!」

決勝戦を観戦するために滞在期間を延ばしたバツツ陛下御一行は恩人であるホクヤに声援を。

「ホクヤさん」

「大丈夫だらナ。あいつはやるときはやる男だ」

「少なくともアレンよりはね」

「うぐ!？」

その近くではアレンとラナのカップルが二人で仲良く試合を観戦していた。近くにバベルを筆頭としたフェルダント温泉の面々も見受けられる。

「ホクヤ、勝つよね？」

「つたりめえだ、負けたりしたら俺が許さん」

「お兄ちゃんだって前回負けたのに？」

「だから、だよ」

「ま、オラにとつてはどっちが勝っても金が入るからいいんだけどなー!」

「ホクヤ様ー! ファイトですー!」

心配するミカに一喝するシャドル、シャナに古傷を抉られて顔を逸らさない! ギムはギルド経営のことしか考えてなかった。

ナナは、いつも通りである。

——中央で睨み合う当の二人は、笑っていた。

「この時をどれだけ待ち望んだことか。師匠、いや、ドーバスさん、あんたと本気でぶつかる日を!」

「ウハハハハハ、俺もだホクヤ! お前との修行中どれだけ戦いたかったことか、まだかま

「だかと待ち望んでいたことか!」

修行中、二人はあえて手の内を見せないため全力の試合を行っていない。

師匠であるドーバスの意向でもあった。長いようで短い時間を経て、今激突しようとしていた。

合図さえあれば今すぐにも目の前の敵を殴る覚悟はできている。そう、全ては勝つために!

「じゃあ、早いところ試合を始めてもらおうか!!皆様お待たせ、勝利と賞金を手にするのは果たしてどちらか!?」デイハルド武道大会決勝戦、ホクヤ・フェルダントVSドーバス・ウーバー、ファイツツツツツツ!!!」

ガレオスの言葉がゴングとなった。

互いの気がその場で爆発した。

※

ドーバスはゴングと同時に右腕を砲台のように構え、パンチを飛ばす。

広範囲かつ威力の高い一撃がホクヤを襲うが、間一髪で躲す。予想していたと思われる動きだ、両脚には既に気と「テンション」が纏わせており、動く準備はできていた。

躲しただけで終わらず、拳を構えたホクヤはドーバスに向かって駆ける。地力ではま

だホクヤはドーバスに勝つことができない。そこを補うのが「テンション」というフェバルの能力。気持ちを昂ぶらせることでホクヤ自身の力を何乗にも引き上げることができる。

カアアアア、とホクヤの右腕が光と熱を帯びる。一瞬にしてドーバスの懐に潜り込んだホクヤはその右腕を振るう。

——紅蓮気爆拳！

ギラ・サイファアーから見様見真似で覚えた気爆と「テンション」による副作用、オーバーヒート状態の熱を逆に利用した一撃である。気爆の要領で熱を体外に押し出すことで炎とともに気の爆発を引き起こす。

ローガ・アスキルト戦以降、彼はこの力を引き出すために短い時間を使ってあの時ほどの威力はないにしても引き出すことに成功した。

もちろん、これでドーバスを倒せるだなんて思っていない。

「挨拶代わり、っスよ！」

「——ウハ、ウハハハハハ!!」

ホクヤの予想を上回り、ドーバスによって攻撃を相殺された。しかも、片手で。

精一杯の挑発を口にするが、焦りは隠せなかった。勢いよく右腕を引つ込め、体勢を低くする。ドーバスはそのまま殴りかかってくる。一撃一撃が兵器染みた威力を持つ

拳は簡単にコロシアムのリングを粉碎する。

足払いは失敗し、逆に尻尾で弾かれてしまう。そのまま拳を構えて飛ばしてこようとしたのでこちらも氣と「テンション」で引き上げ、拳を飛ばして相殺する。そう、氣と「テンション」を使って始めて相殺できるレベル、つまりドーバスと同じ土俵に立つことができるということだ。

また、拳が飛んでくる！爆風をいともせず、がっちり握られた拳を再度構えたドーバス。対するホクヤは爆風を利用し後方へ飛びそのまま「テンション」を使って空へ上昇する。

——ポボン！と爆音が鳴るほどのパンチを二度撃ったドーバスの拳が粉塵を吹き飛ばし、ホクヤに向かって飛ぶ。

「ッ!?!」

反応できたのは奇跡に近かった。粉塵で視界の悪い中、飛行し一発は回避できたが二発目は左胸に直撃してしまう。

パンチそのものが飛んできたわけではないが、それでも軽く岩をも砕く威力のある攻撃だ。「テンション」で何とか騙しているとはいえ、その衝撃まで相殺できない。頭が揺れる。

その場にいつまでも停滞してるわけにもいかない。粉塵が晴れ始め、お互いの姿が露

わになる。ドーバスが軽く駆ける、それでも速度、跳躍の高さともにホクヤにとつては十分すぎる脅威であった。

まともに相対しては勝つことはできない、ホクヤは地面に右腕を当てて気爆を放ち、再度粉塵を発生させる。

気による探知を前では意味のないものかもしれないが、人間つてのはどこか五感に頼る傾向にある。第六感に近い気はほぼ無意識だ。そこを付け狙うしかない。

何とかしてドーバスの背後に潜り込む。そこから蹴りを放つ、ドーバスの背中にヒツトするが大したダメージはなさそうだ。

蹴りの衝撃でこちらに気がついたドーバスは振り返り、拳を放つ。避ける？移動する！避けただけではパンチが飛来してくる！直線上から移動するのが正解だ。

それでも余波による衝撃は凄まじく、思わず目を塞いでしまう。

ドーバスが迫ってくる、せめてもの抵抗で喉を振るわせ気声波を打つ。歓声に負けてしまうかもという杞憂はなくなり、一瞬ドーバスが怯む。

その一瞬の隙について、ホクヤは左腕のストレートをドーバスのボディに撃つ。ここではじめてドーバスの体をホクヤの力で動かすことに成功する。

吹き飛ばされたドーバスは尻尾を器用に扱い、すぐに戻ってくる。

——右のストレート、本来なら躲すべきなんだろうけど、あえて撃ち返す！

「ッ!?!」

「だ、らあ!!」

ドーバスは嬉しそうに笑う。

ホクヤも辛いながらにつられて笑う。気と「テンション」を織り交ぜたホクヤの拳と馬鹿みたいな量の気とこれまた馬鹿みたいに鍛えたドーバスの拳はコロシアムに衝撃の余波を走らせ、激突点を中心としてリングに亀裂が走る。

——もう、一発!

ここで撃たねば、次いつ当てられるかわからない!ホクヤは左腕に「テンション」を集中させ、無理矢理オーバーヒート状態に持ち込む。

本来ならば避けるべき危険な行為だ、自らの身を焼き焦がしかねない。だが、ホクヤは今しかない、今やらねば次はないと判断をした。

そして——

「もう、一発!!」

「!」

——紅蓮、気爆拳!!!

※

「い、一体何が起こってるんだ…。」

「おいおい司会者よ、お前さんがその調子でどうするんじや?。」

「い、いやいやいや、だつて意味わかんねえよ!だつて、まだ二分ちよつとしか経つてねえのに、何なんだよこの闘いはよ!。」

あまりにもレベルの高い、否、ドーバスとここまでやり合う相手の出現にガレオスは実況を忘れて魅入ってしまった。

マラナはマラナでうつつとりしている。

「まさか、あのホクヤがドーバス様とここまで張り合うようになるなんてのう。戦い方はどこか泥臭いが、嫌いではない。」

「え、何?これ、俺様がおかしいの?。」

「まあ、あの馬鹿も馬鹿で楽しんでるみたいじゃ。実況なんて邪魔でしかないからちやうどいい、か。」

「ついに俺様の存在を否定された!。」

——嬉しいだろ、ドーバス。自分の弟子とこのリングでぶつかれるのはよう。

バルバルドはリングの中央で激突する二人を息子と孫を見守る気持ちで戦況を分析していた。

まずはドーバス。

戦闘スタイルは至ってシンプル、簡単な肉弾戦に加えて、飛ぶ拳によって行われる遠距離攻撃。パンチが主体なシンプルなスタイル、シンプルが故に強い、鍛え抜いた肉体がそれを可能にしている。

ドーバスは環境にも血統にも恵まれなかったが、種族と師に恵まれた。

さらに本人が純粹に力を求める欲がチャンピオンという結果に結びつき、強者として育つたのかもしれない。

対して、ホクヤ。

時間をかければもつと伸びる、ドーバスと比べて経験も鍛錬も不足している。それを補っているのがフェバルのチート能力。あれがなければもう試合はドーバスの勝利で終わっている。

だが、バルバルドから見てもあの短期間でよくここまで形になったものだと言わなければならない。将来が点でもある。ドーバスの指導がいいわけない、それでもあそこまで辿り着いた。将来が楽しみだ。

「——フッフ、どうするドーバス？お前の弟子は一癖も二癖もあるようだぞ」

※

——炎が、燃え上がる。やっぱ二回もやると脱力感半端ねえな、熱も【テンション】

の一部だ。

それを外に押し出すことは力を追い出しているのと同じになる。テンション上がると強くなるのが「テンション」だけど、フェバルの能力も万能じゃないらしいな。

だけど、今回は確実に捉えた。師匠の溝内に思いつき叩き込んでやった！左腕だからあまり力入らなかったのが残念だが、右腕は受け止めるのに精一杯だったからな。けど左腕もヤバイかもな。師匠の一撃もらってから動かしにくくなってきてる。

「ぐっ、う、ウハハハハハ！」

——まだ笑う元気あんのかよ!?

とにかく距離を取ったほうがいい、ここじゃ完全にあの人の射程圏内だ。

「さすが、ホクヤだ！いいぞ、もつと殴り合おう！ここまでワクワクする戦いは久々だ!!」

悔しいな、めつちや余裕じゃん。俺もう結構辛いツスよ。

でも、さっきの一撃はやっぱり効いたみたいだ。炎熱による追撃もあつたのはデカイ、ただ殴って蹴るだけの勝負じゃ分が悪すぎるからな。

ちくしよう、こんな状況だつてのによ、俺の全力の攻撃二回も受け止められてんのよ、何だろうな？

「——俺もですよ、ドーバスさん。テンション、超上がってきましたよ!!」

——今までにない感じの気持ちの昂り、全身から頼んでもないのに「テンション」が溢れてくる。

ただ、言えることはこの時俺は笑っていただろうということだ。

何だろうな、今すっごい気持ちがいい気がする!

「——行くぜ」

「——来い!」

57. 勝者の名は

——ホクヤの髪が逆立ち、毛根から中心として放射線状に色素の抜けた白い髪が薄い赤紫色のグラデーションが彩られる。バチバチと迸る白い閃光をも身に纏い始めた。

「あれは!？」

その変化に反応したのはナナと今はホクヤを慕ってフェルダント温泉で働く元ロクグ街の面々。

そう、シヤレオンを殺したときに見せた変化と酷似していたのだ。違うのは殺意が感じられないのと逆立ち具合、理性があり感情もある。つまり、いつもと変わらぬ様子だということだ。

ナナは目を覚ましたほんの一瞬しか確認できてないが、彼女がホクヤの変化を見間違えるはずがない。ていうか見間違えるなんてとんでもない。

ホクヤの勝利を信じているナナはさらにホクヤが勝利に近づいたことを確信した。

※

時間にしては一分弱、お互いに殴って殴り返してが続いた。

距離を取る必要性？ 防御に回る余裕？ そんなことをしてる暇があるなら攻撃する、息をする暇も勿体無い。

「ウハ、ウハハハハハハハ!! いいねえ、いいねホクヤ!! さいっこうに面白い!!」

次は左のパンチ、いや違う!?

—— 右から蹴りが飛んできた。しかも、威力がバカにならないレベル!?

たしかにキックはパンチよりも威力が倍近く高い。脚は腕と違い歩行に使うため自然とその筋肉は鍛えられているというのと全身を支える役割も果たしているため、立つだけでも必要最低限の筋肉が要求される。

—— だけど、まさか一瞬でも意識が吹っ飛びかける威力だとは思えないだろう、入ったのが胸部で助かった。これが頭とかだったらどうなっていたことだろうか。踏ん張りも効かず、リングギリギリの端にまで吹き飛ばされてしまう。

【テンション】は今の状態なら嫌でも垂れ流しになってるし、体のうちから溢れ出てくる。吹き飛ばされた体を空中で静止させる。そのまま上昇する。

空中ならば自在に移動できる俺が優位に立てると思ったからだ。

—— そう、思っていたのに師匠は俺の高さまでたった一回の跳躍で辿り着いた。

嘘、だろ。

一回のジャンプで20メートルの高さに辿り着くか、普通!?

俺はすかさず、飛ぶパンチを撃ち師匠を迎え撃つ。氣と「テンション」でやっと飛ばせるようになった俺のパンチはリングにクレーターを作ってしまったが、師匠は自分のパンチで周囲だけを相殺して、そのまま速度を殺さず、いや、少しだけ落ちたけど辿り着けるレベルの速度で迫ってきた。結果的に到達してきやがったよ!

怯んでる暇はない、右の下端からキックを師匠のボディ目掛けて蹴りつける。左腕で受け止められ、空中なのに体を器用に動かして尻尾でリングに叩きつけられた。

クソ、集中が一瞬切れて飛行維持ができなくなった! 頭はダメだ!

そのまま師匠もゆっくりと下降してくる。どうやら、そろそろ熱も溜まってきてるみたいだ。だけど、この短時間でもう三発目。これを使えばもう「テンション」はしばらく使うことができないかもしれない。溢れ出てくるエネルギーが全身に熱に変わって感覚だ、何となくだけどわかる。

それに今まで騙してきた分のダメージもズキズキと痛み始めてるところから「テンション」の効力が薄れてきているのがわかる。左腕は、もう動かせそうにない。

——この一撃を決めなければ、負ける。

「ウハハハハ、楽しいな! ホクヤ!」

「そう、ツスね。俺は割としんどいですけど」

「ああ、俺もだ！こんなに長い時間タイムマン張れたのも久々だからな！」

——とか言ってるけど、まだ五分ちよつとしか経ってないツスよ。ガレオスさんの
実況と観客の声がやつと鮮明に聞こえるようになってきた。

ていうか、あんた絶対まだ余裕あるだろ！

「俺たちの勝負で周りは考えたくない、けど観客がいると別だ！そろそろ決着をつけな
いか!？」

「そうしたい、ですけどあんたらしくくないな」

「そう言うな、俺も割と限界近いんだよ、歳だなこりゃ」

まだまだ現役な癖に、けどたしかに脚はガクガク震えてるし立っているだけでも辛そ
うに、見えないけど見える。

強がつてる、今の師匠はまさにそんな感じだ。

「——次の一撃、お互いに全てを賭けようじゃないか」

雰囲気が一瞬変わった。

本気の本気、今までも本気だったけど、次は本気の全力ってことか。

今までの俺のことを舐めて実力を抑えていたとも思えない、こういうとき相手の得意な
土俵に立つのは危険だ。

だけど、ここはあえていくしかない。

「——テンション、上がってきましたよ！上等だア!!」

——ジジジジジ、と右腕に熱が集中する。同時に全身に今まで蓄積してたダメージが一気に駆け抜ける。

ここで、倒れたら全部終わる！根性で耐える!!

師匠が先に動いた。師匠の巨体が俺を覆うようになる。一転して、右の蹴り！躲す。リングに亀裂が走る、さらに左の蹴り！これも、躲す！

最後に右ストレート、今までのパンチとまるで違う！重圧、気迫、勝利に賭ける想いの全てが乗った戦士の拳はここまで洗練されるものなのか！

それを、俺は！

「なっ!!」

「ッ、てえ……ッ!?!」

——辛うじて動く左腕で受け止める。落下速も味方した師匠の拳は重すぎる、俺の左腕だけじゃ足りないくらいに！だけど、こいつは右で撃たないと勝てないんだよ！

「——お、おおおおお、りやああああああ!!」

——骨の折れる音が響く、気にするな！

——誰かの悲鳴が聞こえる、関係ない！

——体のどこかが悲鳴を上げている、今すぐ黙れ！

を打ち破ったのは、ホクヤだ！ホクヤ・フェルダン
トオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

「お、オオオ!!!」

——俺は、気がつけば右腕を天に掲げていた！

勝った、あの師匠を、ドーバスさんを倒した!!

歓声が、爆発した。俺は、ここに立っているぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「——失礼、ホクヤさっさと医務室に來い！そのポロポロの体どうかしろ」

「ア、ハイ」

マクベス先輩によって師匠と一緒に医務室へ強制搬送されるまで、その喜びを噛み締めていた。

58. 出会いがあれば別れもある

決勝戦が終わり、表彰式と賞金授与が行われた。新チャンピオンこと俺にデイハルド王国はしばらく盛り上がってたけど、割と早くほとぼりは冷めた。

賞金である50億drは全額お世話になったアレンとラナさんに支払った。アレンは受け取るの拒んだけど、ラナさんの説得に渋々といった感じだった。

元々俺が大会に出るキツカケだったわけだし、問題はないだろう。

後日、去年通り建国祭が行われた。新アーサー王ミヨルドの演説はめちやくちや面白かったけど、笑ってしまつては失礼である。

ジョーとも会う機会が増えて、稽古をつけてほしいと頼まれた。将来は鬼の双牙に入りたいたいのが、それ聞いたら多分父親泣くぞ？

これといった事件もなく、日々は過ぎ去つていった。あ、そうそうバツツ陛下のところのムレアジナとマクベス先輩が結婚することになって挙式が大々的に行われた。なんか俺たちカステイルア王国に行つてる間に色々あったとか、パイル先輩泣いてたけど。

ミヨルドもシャナに対するアタックが強くなって二人して追いかけてこしながらうちによく来るようになったし、イビルタ王妃から逃げるシャドルとマラナ王妃から逃げる師匠もよくうちに来るようになった。

うちは避難所じゃないんだよ？

フェルダント温泉も好調だ、拡張に拡張を繰り返して今ではお泊りまでできてしまう。女将であるラナさんの手腕みたいだけど、恐ろしい。

——そんな感じで一年。

何の変哲もない日々を暮らしていた。そして、次のデイハルド武道大会があと数日に迫った頃に、別れの日がやってきた。

※

夜、一人でオカつちと共に黄昏ていたときのことだ。空に俺の体が引つ張られる感覚、最初に故郷を離れた時と似た感覚がこの世界と別れを告げるのだと感じた。

突然のことだったけど、俺は冷静だった。いつか来るとわかっていたから、体が徐々にキラキラと淡い光で輝き始める。

「ホクヤ？」

「シャナ、か」

振り返らなくてもわかった。この声は、足音はシャナだ。

「それ……」

「ああ、もう旅立たないといけないうみだ」

「そんな、突然」

振り返らない。俺は絶対にここで振り返っちゃダメだ。

「俺だつてもう少しここで風に当たつていたいよ、だけどそれは許されないうみだ」

「皆を、呼んでくる！」

「待つてくれシャナ！」

なんで引き止めたんだ、わからない。

「お前だけでも、いてくれないか？一人は寂しい」

適当な理由を並べても、それでも旅立つということは変わらないというのに。

一緒にいれば辛いだけなのに！

「あんた、本当にそれでいいの？」

「……シャナ？」

「いつもみたいにさ、抗わないの!?あの時みたいに、あんたらしく抗つてよ!常識なんかぶち壊す勢いでさ、不可能を可能にするくらいの勢いで、何で今日のアんたはそんな大人しく従おうとしてるんだ!」

わからない、シヤナの言葉が深く突き刺さる。

「あのとき、あんたからいつか旅立たないかって聞かされてたけど、あたしは納得してないよ！あんたが好きだ、せめてこの答えだけでも聞かせてよ！それだけじゃない、ミカやナナにも、中途半端にして逃げてるんじゃないよ!!」

違う、違うんだシヤナ！

「頼む、もうこれ以上何も言わないでくれ！現実を受け止められなくなる！」

「だったら、抗つてよ！」

「ホクヤアアアアア!!お前、勝ち逃げするつもりか!？」

し、師匠!？」

「つたく、お前が羨ましいぞコラー！世界つてのはもっと強いやついるんだろ!？俺も連れて行ってほしいぜ！」

あんたならついてきそうで怖いよ。

「ホクヤ！せめてこっちに顔見せろ！弟子の門出は派手に祝いたい！」

「ホクヤア！シヤナを泣かせてんじやねえぞ、旅立つ前にぶつ殺すぞ！」

「ホクヤ様ー！ナナはあなた以外を愛するつもりはありませんよー！」

「フェルダント温泉の経営は俺たちに任せとけ！ていうか、行くな、ん？引き止めていいんだよな？」

「アレン、貴方は本当に」

「ホクヤー！ 楽しかったよ！ また来なよ、新メニュー開発しとくから！ 駄目父が！」

「オラがかよ!? ったく、行ってこい息子よ！ お前なら大丈夫だ！」

「ホクヤ兄！ 俺強くなるからな！ ドーバスさん倒せるくらい強くなるからな!!」

「ジルフに会ったらよろしくなー！」

…… ったく、お前ら引き止めてんのかそうじゃないのかハッキリしろよ。

「ホクヤよ」

ミヨルド……

「我はいつでもここで待っている。友のために、いや、このデイハルド王国国王として国民の場所を守り国民のためになるのは当然のこと。いつでも戻ってくるといい」

肩に手を置かれた、クソ。ミヨルドのくせにいいこと言いやがって。

「ホクヤよ、別れは涙ではなく笑顔でいこうじゃないか。せつかくのイケメンが台無しだぞ」

「う、うるぜえ……」

泣いてねえし、泣いてねえし！

体がどんどん光に包まれていく、多分もうそろそろ離されるんだろうな。

最後、か。

別れは笑顔で、そうだな。

「ありがとうな！デイハルド王国!!また来る！」

俺は振り返った。そこには皆がいた。三年、ここで過ごした三年はとても大きなものだ。

人が、皆知ってる顔がいる。光に包まれてて良かった、泣き顔を見られずに済んで良かった。

言いたいことはある、でも、それはまた再会したときに取っておこう。

ここで言ってしまうば、本当に二度と会えない気がするから。

なら、これだけは伝えておかなきゃな！

「——行つてきます!!」

いつてらつしやいを聞く前に、俺はデイハルド王国を飛び立たされた。

久しぶりだな、この道も。故郷を離れて二度目、また次の星までお世話になるわけか。

——またな、デイハルド王国。

次の世界はどんなところだろうな、全然予想がつかないけど、旅立ちはわくわくする。いつまでも別れを引きずるわけにはいかない。旅に別れはつきものだ、気持ちを切り替える、前向きに生きるんだ！

行こう、次の世界へ！

第二章　く人工生命の星の冒険く

59・灰色の星

うん、今日も星脈は綺麗に輝いてる。だけど寂しいんだよなあ、一人漂ってるつても中々にこれが。

デイハルド王国を出発してから、凍りついた世界でいきなり俺は死を経験した。いやあ、まさかいきなりあんなところに降りることになるなんてね、運がなかったとしか言いようがない。あっさり死んじゃったよ。あの時はじめてフェバルは死なないの意味を理解した、不死って意味じゃなくて死んでもこの星脈を通って次の世界に強制連行されるって意味だったんだな、うん。

暇だし、振り返ってみるか。

俺が死に戻りを初体験して強制連行された次の世界は「エクリサリテル」っていう医学が馬鹿みたいに発展した世界だった。医学だけでなく、近隣限定だが星々を行き渡る術もある程度確立してしまっていた、フェバル涙目である。そうそう、この星ではフェバルは珍しくないから堂々と暮らせた。そこで魔法の存在を知ったりもした、魔力を媒

介するらしいけど俺にはよくわからなかった。

お世話になった自称マッドな闇医者ドクタークレイジー、本名ヤクヅケさんには医術のことを教えてもらったり、衣食住のこともお世話になった。

半年後、俺は医師免許をノリと勢いで正式に取りドクターホクヤの診療所で生活をしてきた。俺にしかできない気合い療法で一時期話題になってしまった、他人に論文発表されたくらいだ。

そして、ここにきて大体二年で俺は旅立ち、お世話になったドクタークレイジーにお礼と別れを言って世界を去った。餞別としてドクタークレイジーから旅の荷物を詰めこむ肩掛け鞆をもらった。デイハルド王国にドラちゃんのスーパ君を回収する暇なく置き去りにしてしまったから、素直にありがたいものだった。

それから次に到着したのは人類と食人植物が生存競争をしている「ジャンプリア」と呼ばれる世界で俺を食そうと襲い来る食人植物との喧嘩の日々だった、喧嘩と言っているのかわからんけど。そこで出会ったのが人類側の生き残りである少数部族で族長のカタシスとその娘でエロ担当とか不名誉な担当をしているダリアと仲良くなった。

一緒に行動することでダリアがエロ担当な意味を理解した、だってコイツわざとじゃないんだろうけど毎度食われかけになって粘液塗れになるわ蔓に捕まるわと救出が大変なんだ、眼福だけど！しかも食人植物のレベルも高い、何故かこの部族達魔法使っ

てるし、この世界は魔法文明があるようだ。

だから俺は苦勞した、魔法耐性があつて気耐性のない奴がいたのは助かつたが、奴らの中で氣を抑え込むよくわからん成分を持った液を分泌する奴がいてそいつには苦勞した！【テンション】でぶつ飛ばして液は回収したけど！

そんな感じで過ごしているとまさかのエーナさんと再会した。故郷で別れて以来だし、旅立つてから他のフェバルと出会えてよかつた。エーナさんは魔法メインの戦闘を得意としていたためとても頼もしかつたが、魔法耐性の高い奴とぶつかりどこか調子に乗っていたエーナさんがダリアと仲良く粘液塗れになつたりしたときは色々焦つた。

そこからエーナさんのボロが目立つようになったのは本人の名誉のため黙つておこうと思う。

ここで過ごしたのも大体二年ちよつと、エーナさんは氣がつけばもう次の世界に行つてしまつたようだつた。

カタシスさん達に別れを告げて、今に至る。

——いやあ、本当に色んなことがあつたなあ。不満があるとすれば、「ジャンプリア」に風呂の文化がなかつたことだな、実に残念である。

【テンション】の幅も可能性も広がつたし、魔法の存在も知れたし、何故か医術まで身についた。

メガたんとかオカっちは故郷からの付き合いだ、これからも頼むぜ。デイハルド王国、いや、あの星の名前はアルドニモーって言うんだったな、後から知ることになったんだけど。あそこにいる頃と俺は変わったのか変わってないのかわからん。

まあ、少し困ることと言えばどのタイミングで星脈に呼ばれて旅立つかがわからないことだ。こればかりはランダムらしいけど、知れる方法があるなら知りたいものである。

そんなことを考えてるうちに次の世界が見えてきた、なんだか全体的に灰色というか、澱んだ感じの色だな。

環境が悪そうな雰囲気だ、人はいるみたいだけど風呂はなさそうだな、残念。

この落下するようなフワツとした独特の浮遊感まだ慣れないなあ。さて、どんな景色が待ってることやら。

——めっちゃ発展した街のど真ん中でした。見た感じの雰囲気は「エクリサリテール」の首都のイキラレルに似てる、いや、それよりも発展してるかもしれない。空飛ぶ車とか見たことないし。人も多いなあ、ん？何か違和感を感じる。

人の視線もそうだけど、なんだ、気を感じない？熱反応は感じられるのに、一体どういうことだ？

とりあえずこんだけ人いるんだし、ちよつと話しかけてみよう。突然の俺の出現に

「はっー！」

問答無用かよ!?

うお、危ない危ない！気がいつもより出にくいな、許容性が低いのか!?

エーナさんから許容性の話を聞いてなきや、今ので死んでたかもな。

それぞれの世界にある許容性、それは本当に星によつて異なるから力を全開でぶつ放せたり、ほとんど出せなかつたりする差がうまれるらしい。

でも、俺には【テンション】がある。気づいたんだけど、この【テンション】を使えば多少世界の許容性の制限負荷を無視することができるみたいだ。まあ、発動中というか気分的に盛り上がつてないと効果は薄いけどね。

周囲のギャラリーの皆さんに当たらないように気をつけながら銃弾を躲しつ、デイクランと呼ばれる男Aの溝を撃つ。

——なんだ、硬い？

「こ、の！触れるな、汚らしい！」

「おっ、とー！」

明らかに生身を殴つた時の感覚じゃない、防具でも着けてんのか？

試しにもう一回殴つてみよう、今度はちよつと強めで。

「——ダラァー！」

「ぐわ!」

な、そんなことがあり得るのか!?

軽く肉体を削ぐ勢いで肩に向けてパンチをしたんだが、削げたのは肉じゃない!

金属製のボディと無数のケーブル、こいつら精巧な機械人間か!

だから気が感じられないわけだ、となるとスタミナも無限に近いと思われる。ヤバいな、これだけの人数相手してたら埒が明かない。

「撃て撃て! リルナ隊長が来るまで持ち堪えろ!!」

「そういうえば、リルナさんは?」

「ああ、黒髪のヒュミテと一戦して一度戻られて今はエネルギー補給中だ!」

なんか、わからんが隊長格の奴は来れないみたいだ。機械人間の強いバージョンってあんまり想像したくないな、「エクリサリテル」でも全自動でしかも意思まである機械人数作る技術はなかったのに、この星は相当文明レベル高いみたいだな!

とりあえず、そうだな。

面倒なことになる前にさっさと逃げよう。

60. ホクヤ、走り回る

整備された道、空飛ぶ車、全自動でしかも意思のあるように思われる機械があるだけでも文明の高さは明らかだ。

あそこまで人間に近い機械を何体も作り上げてる時点で製造者は相当な科学者と思われる。

電光掲示板らしきものには「これより先、第八街区」とあった。どうやらしつかりとした指導者も存在するみたいだ。となると、やはりさっきのヒュミテ、という単語は差別用語の可能性がある。さっき電光掲示板にサラツと流れた指名手配犯である黒髪の少年らしき人物もヒュミテ扱いされてた。ヒュミテなら何を指しているのか？あ、それとこの世界の通貨単位はガルのようだ。

ヒュミテと呼ばれる者の特徴、それはまだわからない、だが俺もヒュミテに分類されるみたいだ。他のヒュミテを直接見ないと何ともいえないだろう。

——さて、とりあえず追われながらここまで分析したはいいがどこまで逃げればいいんだ、これ？

「ヒュミテを許すなあ！」

「お前から逃すんじゃないぞ！撃て撃て撃て！」

「待てコラー！観念して死に晒せえ！」

「歴史の罪人、ヒュミテに死を！ヒュミテ殺すべし！」

……なんで、街の皆さんまで一緒になって追いかけてくるのかなく？

あれ全部ぶっ壊してやりたいところだけど、正直面倒だ。どこまで壊せば停止するかわからないし、派手なことやらかしていいことがあるとはとても思えない。

もう、目立ってもいいから「テンション」使つて飛んで逃げるか！

「飛んだー!？」

「撃ち落せ！」

おっと、と！よし「テンション」は上がってきた、何故かわからんがこういう逃亡劇つてテンション上がるよね？

失礼お兄さん、その素敵な車踏み台にさせてもらいますわ。

空を飛んでる車を、時に近くにある手頃な建物を踏み台に、前に進む。

燃費は悪いけど、馬鹿正直に地面を走るよりは速度は上がる。

お、なんかでつかい壁が見えてきたな。上昇するか！

思った通り、壁の外に街は広がってない！これなら逃げられる。結構な高さだが、空

を飛べる俺からすれば邪魔という脅威以外は特に何も無い。

多分だけど、あいつらは外に出られないはずだ。そんなことができるならわざわざこんな外と中を隔てるような壁を作る必要がない。

それでは皆さん、いい運動ありがとうございました！もう二回目は御免だけだな！

※

一方、ホクヤを追いかけ回した中央区に存在するデークランの本部。

その中の精鋭部隊、デイーレバツツ達の部屋の一つの窓際で第八街区の様子を観察する銀髪の男の姿があった。

男の名はプラトー、デイーレバツツ副隊長であり右腕がスナイパーライフルとなつている狙撃手である。

目を細めて見つめる先にはデークラン達を先頭にデイスナトウラ市民達の集団の先にいる白髪の男ホクヤ。

隊長であるリルナが現在エネルギー補充をしているため、何かあれば彼が赴くことになつている。

その何か、ヒュミテが侵入して大騒ぎが起るといふことが起こってしまったわけである。プラトリーの注目しているのはホクヤ、正確に彼の左腕に刻まれた刺青である。

「あの、紋は——」

何か言いかけたときだった、ディーレバツツの上層部に当たる百機議会と呼ばれる者達から直接の通信が入る。

普段は隊長のリルナを介して連絡が行われるのだが、直接くるとは珍しい。大方の予想はつくがプラトローは溜息を吐く。やはり一方的なメツセージだけを伝えて切つてしまった。

プラトローは右腕のライフルの調子を確認して立ち上がる。

「トラニティはいるか？」

「はいはい、ここにいますよ、と」

トラニティ、と呼ばれたピンク髪的女性はひよこ、と顔を出す。

シャツにホットパンツという大変ラフな服装をしている。

「ていうか、リルナっちがエネルギー補充してるから視わ、んん！もしもの外的被害から守るために見張つてたつてた私を呼び出すほどの用事つか？」

「……あ、ああ」

何か危ない単語を聞きかけた気がしたがあえて聞き流す。そう、彼女は仲間、こんな身近に危機が迫ってるなんてリルナは夢にも思つてない、はずである。

「今から少し外に行つてくる。合図をしたら俺の位置情報を特定して迎えに来てくれな

「いか?」

「…… めんどーだけどいいっすよ、ザックレイはいる?」

「ああ、今日は特に予定はなかったはずだ。では、行つてくる」

「じゃあ、それまで私は無防備なリルナっちを——」

どうしよう、上からの指令を無視してでも止めなければならぬ存在が目の前にいる。プラトールが珍しく私情で仕事を放棄したくなつた瞬間であつた。

※

——さて、明らかに荒廃した大地に着地する。街は綺麗だつたのに対して、酷い有様だ。

とりあえず人里を探すとするか、ここ以外で熱反応が集まるところを目指せば人はいる、はず。

そうそう、「エクリサリテル」で気がついたんだが「テンション」の応用で他者の熱反応を感知できるみたいだ。どうも「テンション」の能力は熱に関することでできることが多いようだ、まあ、感情の昂りに関係することも多いけどまだわからないことの多い能力である。患者の体温を測つてるうちにできるようになつてしまつた、気の探知と同じような感覚である。

まさか、こんなところで役に立つなんて思いもしなかった。ドクタークレイジーには感謝しないとな、あの人の「熱を測るに体温計なんて必要ない、感じるが大切だ!!」とかいう暴論がなければ成り立たなかった技術だ。気を宿さない機械人間の世界があるなんて、一体誰が予想できようか。

とりあえず飛ぼう、世界を一周する勢いで飛んでたらそのうち感知に引つかかるだろう。

そういえばこの世界に食糧はあるだろうか？機械人間ばかりのこの世界で食文化は不要となつてそうで恐ろしい。やめてくれよ、俺そんな方法で充電とかしても何もできないぞ。そうなると冗談抜きでマズイな、飛ぶのは控えた方がいいか。

飛ぶのには「テンション」を使う必要がある、これも「エクリサリテル」で気づいたことなんだけど、俺が「テンション」を使うと体にあるカロリーと呼ばれる成分を消費するらしい。カロリーは食することで補充される。

下手すればまた死を経験することになりそうだ。

人がいるのかがそもそも問題だ。今はとりあえず飛んでるけど、先が何だか思いやられるな。

戻つて情報を集めようにも、あんな状況じゃどうしようもない。「ジャンプリア」でカタシスさん達と出会う前のサバイバル生活をまたすることになってしまいかもしれな

い。あの時は本当に、食人植物が四方八方から睡眠時間も与えてくれずに襲ってくるもんだったから大変だったな。

ていうかいい加減誰かと話をしたいな、寂しくなってきた。オカつちを吹きたい気分だけど、こんなまだよくわからない世界で一人演奏をするほど肝は座ってない。

そうだな、もう少し飛んでそれでも人が見つからなかったら諦めてサバイバル生活をすることにしよう。

61. メノ部族

——空を飛ぶこと、そうだな、大体二時間半くらいかな？もちろんちまちまと数えたわけじゃない、凡そである。

時計も持ち合わせてないし、この世界の時間が俺の知ってる通りに流れてるとも限らない。

やっとのことで熱感知に十、二十ちよつとの反応が引つかかった。同時に気も感じることができる、良かった。純粋な生き物はきちんといえるみたいだ。

近くで着地してここからは歩くことにしよう。飛びながら進んでそのまま着地した方が格好いいんだろうけど、さすがに見知らぬ土地でそんなことをする胆力はない。遠目から見たところ小さな村みたいだ。

とにかく話が聞ければそれだけでもありがたい、さつきみたいに追いかけて回されないことを願おう。まあ、もしそうなくても規模が小さいからタカが知れてる。気で感じられる範疇ではそこまでの実力者はいない。

出迎えてくれたのは一人の男だった、警戒してるのが目に見える。

「そこで止まってもらおうか」

まあ、そうなるわな。無視しても良さそうだが、面倒になることは確實。

そうなれば話も聞くことなく終わってしまうかもしれない。せつかく見つけた話し合いが通じそうな人なんだ、軽く武装してらっしゃるけど。

とりあえず言う通りしておくのが得策だろう。

「君は、何者だ？ヒュミテのようだが」

「ああ、らしいな」

この世界に来て初めて会話らしい会話ができた。お互いに警戒はしてるし、言葉の端々にわずかな棘は含まれてるけど、言葉を交わせるという事実が大切だ。

「らしい、とは？」

「そうだな、まずはそこから話すべきか。例えばだ、あんたは俺がこの星の外から来たと行ったら信じるか？」

「…… 私がそれを信じない、と言ったら？」

「このやり取りは終わることはないだろうな」

実際そうである。

まさか、そこを食い付かれると思いきりしなかったからな。エクリサリテルじゃ当たり前のようにフェバルと公言してたからなあ。ジャンプリアでもそこまで困ることなかったし。

「…… わかった、信じよう。そもそもヒュミテであることから我々の同胞だ、争う理由がない」

「あんたもヒュミテだったのか」

それにしては気を感じない。いや、微弱に感じられるが、何かに阻害されてるような感じだ。ジャンプリアの気の放出を抑える特殊な粘液を吐き出すような奴の効力とはまた違った感じのやつに感じられる。

「改めて、私はウイリアムという。ルナトープの隊長を務めていて、今はディースナトウラへ向かうためここで一時停泊させてもらってる」

「俺はホクヤだ、ある事情で旅をしてる旅人つてことで」

なるほど、それは警戒されるわけだ。ルナトープ、それがどのくらい規模の部隊かはわからないがその隊長を務めるウイリアム。しかもここは一時停泊させてもらってる村、ということになる。

関係のない者たちを巻き込んでしまえば隊長として顔が立たないし、メンバー達にも隊長としての威厳がなくなる。まあ、俺もあまり頭を使うのは苦手だからウイリアムがこういう人物で助かった。

「さて、ホクヤ君。君は何者、という質問の答えは旅人でいいのかな？」

「おう、それであんたが納得できるならそれでいい」

「わかった。立ち話もなんだ、一旦休めるところへ移動しよう」

「それは助かるが、俺を村に入れていいのか？」

「ここの代表には私から話を通しておく。それに我々ルナトープのいる前で悪事を働くほど君はバカじゃないはずだ」

「……随分自信があるみたいだな」

「人並みには、ね」

ニヤリと笑みを浮かべるウイリアム。

なるほど、こいつは手強そう。俺は前を歩くウイリアムについて行くことにした。

村の入り口から一番近いこじんまりとした建物の中に案内され俺も向かう。

「……隊長、そいつは？」

「彼はホクヤ、旅人だ」

「それで納得しろと？」

こいつは手厳しい。中にいたのは全員がウイリアムと同じように気を感じるので妨害している手段を持つ者達。

その数は、ウイリアムもいれて七人か。しかも雰囲気から察するにそこそこの実力者揃い、ウイリアムの自信の程がなんとなくわかった。

「この大事な時期に、ヒュミテと言えど簡単に外部の者を中にいれるなんて、何考えてる

んだ!？」

「落ち着けネルソン、大丈夫だ、彼に敵意はない」

「しかしだな——」

ウイリアムの話によると、ルナトープのメンバー全員がヒュミテ。

と、なるこの世界では気のある生命体、つまり人間のことをヒュミテであるということだ。こう考えると合点がいく、俺はたしかにその分類で考えるとヒュミテに分類される。

機械人間ではないし、ましてや誰かに造られた存在ではない。ある意味では作られた存在だが、それは生物として当たり前のことである。

ウイリアムが隊員と言い争いを始めてしまったため、置いてけぼりになってしまった。何だか寂しいな。

あ、赤髪の女の子が笑顔で手を振ってくれた。一応礼儀として振り返っておこう。

「——アステイ、あんな素性もよくわからんような奴とコンタクトを取る必要はない」
「そういうラストラ姉はスレイス構えちやつてるじゃん、ばっちし奇襲仕掛ける気満々じゃん!」

「人聞きの悪いことを言うな、正面から斬りこむだけだ」

怖いわ!？」

何、めっちゃ血気盛んな黒髪の女がこっち睨んでる!?

「もう、ラスラはもつと落ち着きなさいな」

「だがな、マイナ」

「——そんなんだからいつまで経っても浮いた話の一つもないし、彼氏だって出来な
いんだよ!!」

「よしアステイ、言いたいことはそれだけか?」

何なんだろうな、身内だけで盛り上がってしまったって完全に俺蚊帳の外じゃん。あつちの二人の男は未だに睨んでるし、警戒なんて解く意味ありませんって感じだな。

「……チツ、男か」

おい、オレンジ髪のチャラ男。お前が睨んでるのはそれが原因か。

改めて、俺は本当にここに来て良かったのか?

何かピリピリしてるし、余所者の俺が来たら駄目だったんじゃないの?

ウィリアムの好意を無下にはしたくないけど、早いところ必要最低限の情報を集めて
出発した方がよさそうだ。

ッ!

「危ない!」

「え?」

クソ、間に合うか、いや、間に合わせる！

俺は無我夢中で金髪の姉ちゃんに向かい、庇うような体制を、というか半ば押し倒すような形を取ったけど許してもらいたい。

先ほどまで、金髪の姉ちゃんのにいた場所にどこからともなくとんでもない熱量の熱光線が飛んできたんだから。

「なっ…!?!」

「大丈夫、マイナ姉!?!」

「え、ええ」

——方向は、あっちか！

「ウイリアム!—一塊でいるとまた狙われるかもしれない!—この村の人達にも注意を呼びかけてくれ!—」

「君は、どうするつもりだ!?!」

どうするつもり?—決まってるだろ、そんなもの。

「——この熱光線飛ばしてきた奴を、ぶっ飛ばしに!—」

※

惜しい、プラトーは舌打ちを一つ。

最初からターゲットであるホクヤ・フェルダントを狙っても良かった。だが、あえて位置的にも狙いやすいマイナを狙った。

プラトーの目は透視機能が搭載されている。建物の中にいようが正確に狙いを外さずにターゲットを撃ち抜こうなんてことは造作もない。

音もなく気配も消し距離を取った攻撃、完璧な奇襲だったはずなのにあの男には無意味だった。

こちらの場所に向かって今、走ってきた様子が見え、スコープ越しに確認することができる。

距離は二、三キロメートル。こちらに到達する前に仕留める、プラトーの武器は何も熱光線だけではない。ついでにあのヒュミテの村のヒュミテを全滅させるのも一興だろう。

位置が割れてしまっただけでは狙撃手として致命的である。少し移動して攪乱させながら撃ち殺す。

——プラトーは一切の迷いも躊躇もなく、次の一撃を放った。

※

また、あれが飛んできた。今回は俺の頭目掛けて正確に。

だけど、反応できるならこつちのものだ。そのまま横に逸れて村に到達するのだけは避けなければならない。

ならば、どうするか。

右腕に「テンション」を纏わせてオーバーヒート状態を引き起こす。

アルドニモーにいた頃の俺ならばこいつを外に押し出してそれで終わりだったが、それでは次の熱を生み出すのに時間が掛かる。

運のいいことにエクリサリテルではありとあらゆる医療技術、治療方法を学ぶことができた。気による治療も例外ではない。お陰で俺は気の細かな操作に少しだけだが自信を持てるようになった。

熱光線の軌道上に右腕を移動させる、そして熱を全て出すのではなく少しだけ気爆で軽く押し出す。熱と熱をぶつけければ相殺される、それにこちらは気による推進力とエネルギーを混ぜ合わせたものだ。多分、敵は気を感じることができないから機械人間だ。

なら、気を扱うことはできない。完全に熱光線だけの力が飛んできてるのだ。必然とこちらが上になる、ということだ。熱光線は貫けば進むが、貫くことができればその場で留まる。

だが、俺はその相殺を繰り返し砲口から未だに放出が続いてる熱光線の軌道を上にずらす。バチイイイン！という何かが弾けた音とともに熱光線は空を貫いた。

ここまでのやり取りは一分も必要としない。つまり、次弾はどんどん飛んでくる。

散弾、閃光弾、軌道をずらした砲撃などバリエーションは様々だったが、一つ一つをその場で撃ち落とすか撃ち上げる。片腕では防げない攻撃は四肢を使い分けて防ぐ。相手は多分一人。飛んでくる方向とタイムラグに一定のパターンがある。複数人で射撃を行えばこうも読みやすい軌道にはならないはずだ。少なくとも不意はつける、それを行わない、いや行えないところを見ると単騎での遠距離攻撃。

俺はそいつを後ろにだけいかないように注意しながら確実に前に進む。

「テンション」によって動体視力を何乗にも重ねてるんだ、もうそろそろ敵の元に辿り着いてもいい頃なのだがかなり離れた位置から狙っていたようだ。相当の実力者、間違いなく狙撃の実力は高い。

だが、近づいてしまえばこつちのものだ。接近戦はこちらの方が分がある。でなきやわざわざ身を潜めて、しかもこんな離れた距離から狙撃なんてしないはずだ。

——見つけた。

狙撃手は銀髪の男だった。右腕にスナイパーライフルを装着しているというよりも、右腕がスナイパーライフルといった方が正しい表現かもしれない。

狙撃手は熱光線を撃ってくるが、右腕に籠めた熱を放出して軌道を逸らす。

——俺はそのまま狙撃手の顔面を殴り飛ばす！

「が、はっ!？」

「観念しろ」

そのまま狙撃手を押さえつける。さっきの一撃で頭を吹き飛ばしても良かったのだが、聞きたいことがあった。

だから少し加減をしたが、それでもこいつにとつては相当のダメージだったようだ。

「ぐ、やはり、その紋様はメノ部族の者か。なるほど、奴らが優先的に始末したがるはずだ」

——、こいつ、なんて言った？

「お前…… ツー！」

「どうやら凶星のようだな」

「なんで、なんでお前が!？」

あり得ない! なんでこの世界の奴がその名前を知ってるんだ!？」

「隙を、見せた、な!」

しまった!？」

クソ、動揺した隙に奴の左腕で思いつき殴られた。普段なら避けれるのに、何てことだ!

聞きたいことが増えちゃったし、奴は自由になってしまった!

「——このままでは俺に勝ち目はない。今回は退かせてもらう」

「行かせるとでも?」

「プラトール!早く!」

第三者の声、いつの間にも!

奴の背後にはピンク髪の女が立っていた、気は感じることはできない。

けど、熱反応はあったはずだ、事前の感知ができなかった?まるで、そこに突然現れたみたいな感じだぞ。

「また会おう、メノ部族の男」

「待て——」

俺がパンチを飛ばそうとしたときには既にも奴はその場から姿を消していた。

あの女の能力なのか、瞬間移動なんて現実にあつたのか。

にしても、奴は何故あのかを知ってるんだ、いや、一体どこまで知ってるんだ?

——この世界、ちよつと本気で調べてみないと。

62. ホクヤ、英雄になる

さっきの狙撃手、ピンク髪の女が言うにはプラトーンって名前の機械人間を撃退して、さっきの村の熱反応を頼りに移動を始めた。奴にはもう一度聞きたいことができたし、あと何発かぶん殴ってやりたい。何故俺を狙ったのか、尾行はいつからしてたのかを聞こうと思ってたのに聞くことが増えてしまった。

しばらく歩き、ウイリアムと血気盛んな黒髪の女がこっちまで来た。二人とも息を切らしている。

「ホクヤ君、無事か!？」

「ああ、問題はない」

「まったく、君はなんという無茶をするんだ!」

お、おう。説教ですか、長いのは勘弁ですよ。アルドニモーでミカに何時間も正座させられたときは怖かったなあ、うん。思い出すだけで背筋がゾクゾクする。

とても心外なことにウイリアムが呆れ顔で溜息を吐いている横で、黒髪の女が何かを構えてる。俺の目が正常であるならそれはビームサーベルと呼ばれる、かつて故郷の悪

友達と実際にあるのかないのかの議論を三時間ほど交わしたところのある近未来兵器の
はず。

「説教はそろそろいいだろ、隊長。早く私はこいつと手合わせがしたい」

「…… 全く、ラスラはどうしてそんなにも短絡的なんだ」

「だって仕方ないじゃないか！マイナを助けてくれた礼もせねばならん！」

「それは礼になつてないよ」

「どうやらラスラって女はとにかく理由を付けて試合をしたいらしいな、バトルジャン
キーってやつか。」

「——とにかく一度戻ろう。すまないホクヤ君、戻ってラスラと一戦してやつても
らつてもいいだろうか？この戦闘バカは一度でも戦わないと気が済まないらしい」

「いいけど、あんたも苦労してるんだな」

うん、ルナトープのメンバーはたしかに実力者揃いみたいだけど、同時に曲者揃いで
もあるみたいだ。さつきから血気盛んなラスラは嬉々とした表情だし、本物だコイツ。
終始俺の命を狙つてたシヤナ並みにタチが悪い。

とにかく、今は情報を集めてプラトールって奴ともう一回会つて知つてることを聞か
なきゃならない。何であいつからメノ部族って単語が出てきたか気になる、この世界じゃ
無縁、いや、もう俺がフェバルとして旅立った時点で聞くことはないと言言できる名前

を。

ウイリアム、ラスラに連れられてまたヒュミテ達の暮らす村に戻ってきた。すると、今度は歓迎ムードだった。ルナトープのメンバー達もいる。

「おかえり、隊長、副隊長！皆待ってるぜ！」

「ロレンツ、これは一体？」

「ああ、実はな——」

「村長さんがここを守ってくれて、マイナのことを救ってくれた礼にとアステイ達が張り切ってしまったな、その英雄さんに礼をしたいらしい」

そう言つてルナトープのメンバーの一人である青髪の青年は俺のことを指差す。あれ、もしかして英雄さんって俺のこと？

ていうか、ラスラの奴副隊長だったのかよ。

「ちよ、デビットオ!?俺が説明しようとしたよね、俺普通に喋ってたよね!?何で俺の役割取っちゃうの!?!」

「うるさい」

オレンジ髪の男と青髪の青年が言い争いになつてるし、なんかタイプが違う感じだから揉めることも多いんだろうな。

「ヤッホー！ホクヤ君！」

「やつほー、君はルナトープの誰だ？」

「私はアステイ！マイナ姉のこと助けてくれてありがとうね！握手握手」

おお、勢いが凄いなコイツ。とりあえず握手握手。ちよつと小柄な奴なのに元気だけは一番って感じた。

アステイの後ろにいる俺が咄嗟に押し倒、いや、救けた金髪の姉ちゃん、多分あの人
がマイナに当たたる人物。

「ど、ども」

「どうも〜」

うん、天使のような笑顔だ。癒し系といった感じだろうか。同じルナトープの女でも
三者三様でここまで変わるものだな。

「ていうか、アステイよ。いくらなんでも英雄は言い過ぎじゃね？」

「あー、それは村長さんが張り切っちゃって——」

「どうも！村長のラビルドです！改めて英雄さんのお名前は!？」

「あー、ホクヤ・フェルダントと申します」

「ホクヤさん！ではうちの村にボラミット製の彫刻を用意させてもらいます！あの
ディーレバツツの副隊長を撃退した実力、英雄と称すに相応しい！」

「ちよつと待て!?!あんた詳しすぎないか!？」

そもそもディーレバツツって何!?

ウィリアム達にも状況説明したのさつきなのに、なんでこんなに詳しいのこの人!?

「てへ☆」

「お前かアステイ!!」

「狙撃手は目が命!」

「いや、目視できる距離じゃなかったはずだぞ」

さすがのラスラも呆れてた。ていうかラビルドさんも準備早いよ!

ていうかあんたが造るのかよ、ていうかデカイな! 目測で10メートルくらいはあるぞ、どこから用意したんだよ。

「…… 騒がしくて済まないね、主にうちの者が」

「…… 苦労してるんだな、あんた」

どうやらこの世界も一筋縄ではいきそうもないな。知らない単語も増えてしまったから、覚えることも多そうだ。せめてこの世界の一般常識は頭に叩き込んでおきたい。いつまで滞在するかわからないが、ないよりはある方が圧倒的にいい。

ボロをこぼして非常識人扱いされるよりは、うん、ある意味慣れたけどさ。

※

一度、ルナトープのメンバー全員とプラトリーの熱光線で穴があいてしまった住居へと移動する。

改めて自己紹介と情報の共有、といっても俺から提供できるものは少ないんだけどね。ラスラは今でもうずうずしてるし、めっちゃ落ち着かない。

「ホクヤ・フェルダント、訳あって世界を旅してる。出身は孤児だったから覚えてない、これでいいと思うか？」

「うん、それで通そう」

「……隊長、そんな堂々と身分捏造されても」

適当な自己紹介をしてウイリアムに確認を入れたらオツケー出ました。

うん、今思えばウイリアムにもはぐらかしてるけど、それ以外のメンバーには他の世界から来たってことは言っていないからな。また説明するのも面倒だし、俺は孤児で出身がわからず旅をしてるといふことにしよう、うん、これでいこう。

「——改めて、ウイリアムだ。ルナトープの隊長をしている」

「ラスラ、ルナトープの副隊長をしている」

「……ネルソン、参謀とかと思ってくれたらいい」

「戦場のラッキーボーイこと、ロレンツだ！趣味は——」

「強姦」

「そう！間違つてないがこの場で言うことじゃねえ!!いや、間違つてる！そういう誤解生むことやめろよな！」

「デビットだ。この自称ラッキーボーイ（笑）とは腐れ縁みたいなものだ」

「（笑）をつけるな!!」

ネルソン、さんはどこか寡黙な、それでいて判断力に優れてそうだ。まだ微妙に警戒心持たれてるし。ピリピリしてるのはこの人のせいか。

ロレンツとデビットは仲が良さそうだな。仲睦まじきことはいいいことだ、そういやあのバカ共元気かなあ。ていうかロレンツよ、否定したはいいいけど否定するなら初めからしっかり否定しとけ、女性陣ドン引きだぞ。

「はい！アステイです！銃メインです、銃メインの最年少です！ホクヤ君は何歳？」

「俺？多分26、7とかそのへん」

「ハッキリしてよ!?!私より年上だつてのはわかつたけど!」

だつてしようがないじゃん。途中から数えるの面倒になつたし、行く世界それぞれ時間の流れの概念違うから計算めんどくさいんだもん。全宇宙共通の時計とかあつたら別だけどき。

「私はマイナ、さつきは助けてくれてありがとうね。主に武器やらの道具のメンテなんかをしてるけど、銃も使いまゝす」

「……よ、よろしく」

なんだろう、あの時は咄嗟に体が動いたけどすっごい今は緊張してしまふ。

ホクト姉と雰囲気が似てるからかな、いや、でもマイナさんとホクト姉は別人だ、その辺しつかりしないと失礼だ！

「あれれ、もしかしてホクヤ君マイナ姉の魅力にころっとやられちゃった？ やられちゃった？」

「そ、そんなんじゃないよ」

ヤバイ、顔真つ赤かも。駄目だ、美人さんの前だと緊張しちゃう。

「——そんなことより、ホクヤ！ 早くやるぞ!!」

ある意味ナイスだラスラ！ 煩惱を振り払えた！

「何、ラスラ姉また喧嘩吹っかけたの？」

「やめてやれアステイ、こんな体以外女の魅力の欠片一つも感じられないような戦闘バ

——」

「ふん！」

「——おうふ!?!」

ラスラの肘打ちがロレンツの溝に直撃する！ ナイスブロー！

倒れたロレンツはデビットによってズルズルと引きずられながら回収されていつて

しまった。

「私からも頼みたい、君の実力を見ておきたいのは事実だし、もし良ければあの作戦にも参加してもらいたい」

「おい、本気かウイリアム!？」

「彼はヒュミテだ、我々の同志だぞ。何をそう警戒することないだろ、ネルソン」

ネルソンさんはまだ俺のことを警戒してるみたいだ。疑われる要素あるんだろうか、よくわからん。

「彼はあのプラトールを退けてる。実力的にも問題ないし、今は戦力を増やした方がいい」
「それはそうだが、信用できるのか？」

「それは君自身の目で確かめることだ、少なくとも私はルナトープのメンバーと同じくらい信用しているつもりだ」

「……………」

なんなんだろ、この空気。そんなこと露知らずと言った様子でラスラは俺の服の裾を引っ張ってくるし。

ハイハイ、行くから行くから！

「この機会を、何分待っていたことか」

「めっちゃ短いな、オイ」

ラスラは気剣、いや、あれは違う。

何か別のエネルギーがラスラの手に持つあれを介して放出している。

「ん？お前スレイスは持たないのか？」

——なるほど、あれはスレイスと言うのか。あれがあれば気剣を形にすることができない俺でも気剣術もどきができるだろうか、後でやってみよう。

「ああ、俺の基本スタイルは体術だからな」

「そうか、こちらは遠慮なく使わせてもらおうが後悔するなよ」

「——後悔どころか、負ける気もしないな」

「——ほう」

挑発には挑発を、さて、俺は「テンション」は使わないでおこう。手を抜くのは癪だが、気だけでどこまでやれるのかも知りたい。「テンション」に頼りすぎて本来の自分の力を忘れてしまいざという時力が発揮できなかつたら意味がないからな。

全身に水色の気を纏わせる、やっぱ許容性が低いせいかもしれないもより出力が抑え気味になっちゃってな。

でも、これだけ出れば十分だ。

「行くぞ」

「来い」

——互いに駆け出し、激突する一歩手前で拳と剣が交差した。

俺とラスラは互いの表情を確認する、お互いに笑っていた。

ラスラがスレイスを振り、俺が腕で受け止める。力を一点に集中させるように高速移動をさせることで無駄のない力を出すことができる。

エクリサリテルで気による治療を繰り返してらうちに気の操作に慣れた俺が応用しジャンプリアで実戦レベルに使えるまで訓練を繰り返した。

そのまま蹴りを入れる。ラスラは攻撃の姿勢から咄嗟に防御体制を取る、これを反応するか！

さすが、戦闘狂、ルナトープ副隊長を名乗るだけのことはある！ラスラはやはり、予想通り！といった表情で笑っていた。そうか、お前もこの高揚感を感じれる人種だったか！

「ふ、ふ、はははははは！楽しいな、ホクヤー！」

「そうだな、テンション上がってきたぞ！」

ラスラがスレイスを上段から振り下ろす、迎え撃つ！

俺は中段から上段へ右の拳を伸ばす。もう、周囲への被害も影響も、周りが何か騒いでる気もするが気にすることなく自分の世界に入ってしまった！

こうなってしまうば自分でも止めることは難しい！

「——せやー！」

「はああー！」

この楽しい時間が永遠に続けばいい、俺とラスラはウィリアム達に止められるまで思いのままに力をぶつけ合った。

63. ヒュミテとナトウラ

トラニティと共にデークランの本部へ戻ったプラトーは白髪で小柄な男、ザックレイに迎えられた。

子供、少年、という表現が似合うザックレイだが、一応本人は気にしている。彼も好きで小さな体でいるわけではない。

「副隊長、無事？まさかあんたが直々に行くなんて、どういう風の吹き回し？」

「たまには体を動かすのもいいと思っただけ、急な仕事を頼んで悪かったな」

「それは別にいいけどさ……」

どこか納得のいかない表情を浮かべる。街の中であるならハッキングやデータ改竄といったことに長けているザックレイならば様子の観察は容易いが、今回プラトーが向かったのは街の外である。プラトーの位置を特定することはできても、その様子を事細かく観察することはできない。

「副隊長が一人で行くなんてさ、そんなに重要なことだったの？」

「まあな、リルナもあの状態じゃどうしようもあるまい。ステアゴル達も今日は別行動

だしな」

「…… あんたらしくくないぞ、普段なら一人で行くなんてことしないだろ」

「…… そうかもな」

確かに、あの不意打ちで仕留めることができるのを想定して向かったのだから当然である。普段なら最悪の想定も考えているのだが、そこまで頭が回っていなかった。トラニティに声をかけていたことが救いであった。

それにプラトーは狙撃手、本来ならば前線に一人で立つということ自体がイレギュラーであり、あり得ないことだ。リルナやステアゴル、ジードが前線に立ちプラトー、プリンダが後方から直接支援し、ザックレイとトラニティが戦闘面以外での補助をする。

プラトーだけで任務を行うこと自体が稀である。

「—— あんたを、それだけ熱くさせる相手なの？」

プラトーはザックレイの質問の意図がわからなかった。自分は百機議会の連中に頼まれて面倒ごと、ヒュミテを始末しに向かったに過ぎない。

「いや、副隊長笑ってるよ。しかも結構不気味に」

「俺が、か？」

「…… やっぱ無意識だったんだ、氷の副隊長も笑うときは笑うんだね」

「失礼なやつだな、お前。俺だって普通に笑うぞ」

一体、仲間たちに自分はどんな認識をされているのだろうか。少し気になるが今はこの昂った気持ちの正体を知ることが先である。いつか、感じた感覚だった気もするが何年も前のことなので覚えてはいないが、どこか久しいこの感覚。

ホクヤ・フェルダント、メノ部族、この二つの真実と存在を確認できただけでもプラトーにとつても、口うるさい百機議会にとつても大きな収穫と同時にこの世界を脅かすかもしれない不穏分子の排除が優先されるのは最たることである。

——あの男は俺が仕留める、プラトーは右腕に備え付けてある愛用のスナイパーライフルを撫でながら、ザッククレイが軽く引くレベルの笑みを浮かべた。

「ん、そういえばトラニティはどこに？」

「あいつなら戻ってきた瞬間、隊長さんのところにダッシュしに行つたよ。そういえばまだエネルギー補充中だったような——」

「リルナが危ない！」

先程から静かだと思つたら、いつの間にやら移動していた。彼女の身に搭載されたトライヴ機能、それは座標さえわかれば瞬間的に移動することを可能とする。デイスナトゥラの街中でも使われてる一般的な技術ではあるが、人体に組み込まれてる例は少ない。

故に彼女、トラニティは一瞬にしてリルナの元へと移動することが可能というわけ

ある。

…… 明らかにトライヴ機能の無駄遣いと思えないが、プラトーもプラトーで自身の目に搭載された透視機能を使い、室内のセキュリティを掻い潜りながらトラニティの現在の動向を確認しようとしてるので、他人のことをどやかく言う資格はない。

数分後、トラニティの悲鳴が聞こえたとか充電の終えたりルナがどこか恥ずかしそうな表情を浮かべていた姿が見られたらしいが、それはまた別の話である。

※

「…… あの短時間で顔ができてる、だと!?!」

「へへへ、このクルトリーアが代表ラビルド！ホクヤの旦那のためならば無理も承知で仕事は迅速にさせてもらいやすぜ！」

「いや、俺が頼んだわけでも何でもないんだけど……」

ラスラと試合をした後、軽く休憩を取っていたらラビルドに呼び出され何事かと思っただが、仕事の進捗の報告だった。さつきまでは長方形だったボラミット製の金属は形を変えて俺の頭部分に精密に再現されていた。

ん、でもこのサイズ配分だとちよつと無理があるんじゃないのか？全身が入らないぞ、これじゃあ。

「なあ、ラビルド。頭がこんなにデカくていいのか？」

「ええ、そこは問題なしです！今回作るのは胸像ですから！」

なるほど、納得だ。

ラビルドに体のサイズを測られた後、ウイリアムにこの世界の成り立ちとあらましを聞くことになった。まあ、細かくは時間がかかるので簡単な一般常識と知識程度だけだな。

——世界の名はエルンティア。

ヒュミテと呼ばれる生命体、つまり人間とナトウラと呼ばれる機械人間の二種族が暮らす世界。

そして俺が最初に追われた都市はデイスナトウラというナトウラ達の過ごす最大の都市である。

なるほどな、つまりヒュミテからは生命反応である気を感じることができてナトウラからはそれが無いというわけか。

「ん、でもルナトープもヒュミテなんだよな？それにしても生命反応が感じにくいんだけど」

「ああ、それはセフィックだ。デイスナトウラには生命反応を感知するセンサーがあるから私たちが侵入しても反応することはない」

「なるほどな、そんな代物が」

やはりこの世界の技術は進んでるみたいだ。身につけているだけで気の感知を阻害できるものか。隠密行動なんかには良さそうだな、俺にとっては無縁だけど。

「でもね、このビッチリスーツ高価だから中々手に入りにくいのよね」

ウイリアムの傍にいたアステイが身につけているセフィックを引っ張る、やめろ、エロい。この場にはウイリアムと俺の他にアステイとネルソンがいる。ネルソンはまだ俺への警戒が解けてないようだ。

「ヒュミテとナトウラは相容れない、それは長い歴史が証明している」
「歴史、ねえ」

ナトウラがヒュミテのことを虐げていた歴史、元々ナトウラはヒュミテが作ったが技術が進み自我を覚え始めたナトウラがヒュミテに反旗を翻したというのがザックリとした歴史である。エルンティアの歴史は長く、二千年に近い年月を重ねて文明を築き上げてきたみたいだ。いや、もしかしたらもつとあるのかもしれないな。

でも、俺からしたらヒュミテの自業自得、そんな気もするんだが実際に虐げられてきた者達、虐げていた者達の立場が逆転するというのは屈辱的なんだろうな。あくまでも余所者の俺だからこそできる認識だ。

デイスナトウラのあの壁は外からの侵入、多分ヒュミテの侵入を防ぐための壁なん

だろうな。それで今も確執が残っていて抗争は続いてると。ナトウラにとってヒュミテが差別用語って認識はある意味間違つてはいないみたいだな。

まるで、世界が二つに分かれてるみたいなどころだな。

「君もヒュミテなら、協力してほしい。我らが王、テオの救出に」

「王…。」

「テオルグント・ルナ・トウリオーム、ルオンヒュミテを治めるヒュミテ達の王だ」

ネルソンの補足が入った、まるでこんなことも知らんのかと呆れられてるような感じ
で。

「そう、現在彼はディースナトウラの牢に幽閉されている。そして、処刑が迫っている。我々ルナトープは彼の処刑を阻止するためにディースナトウラへ向かっている途中だ」
なるほどな、たしかにヒュミテとナトウラがそのような状況ならここでヒュミテの心の支えでもある王を失うことは大きな損失、士気の低下もある。

それで俺もこの世界の連中から見てヒュミテ、本来ならば協力すべき案件なんだろうな。本来ならば、ならな。

「ちなみに処刑はいつ行われるんだ？」

「三週間と四日後」

期限も迫っているというわけか。

ウイリアムほどの男がこんな話を切り出すくらいだ、相当参ってるに違いない。

「——ホクヤ君、テオの救出に君の力を貸してくれないか？」

ウイリアムの双眸が俺を見据える。傍に控えるアステイからも真剣な眼差し、ネルソンはどこか諦めたような表情を浮かべている。三者三様、俺の答えを待っているんだよな。

とりあえず、俺の答えは決まっている。

「断る」

——バツサリ断った。

64. ホクヤ、折れる

——俺の返答にウイリアム、アステイはもちろん、ネルソンさんまでをも固まらせるには十分だったようだ。三人とも目を点にしてしまっている。

「……え、つと」

「悪いが、俺には協力する義理はない」

そう、ハツキリ端的に言うならそういうことだ。俺はそこまでお人好しではない。たしかにプラトーの野郎には聞きたいことはある、だがそれは一人で動いてもできることだ。わざわざルナトープと協力してやる必要性はない。

そして、俺はフェバルであり部外者。この世界の根幹にまで関わりそうなことにホイ付き合うわけにはいかない。故郷から旅立ち、俺の「テンション」はアルドニモーにいた頃よりも比べものにならないくらい汎用性が広がり、俺自身も強くなった。

それにこの星に滞在できるのがいつまでかわからない以上、不用意に大きな事件に自ら首を突っ込むべきではない。エクリサリテルでの学会大論争、ジャンプリアでの百花行進はある意味巻き込まれた形ではあったが、俺が関わりなければまた別の解決策があ

り、世界の発展にも繋がったかもしれない。けど、人外的な能力を持つ俺が関わってしまつたことで、特に百花生進に至っては大した苦勞や時間もかけずに終わってしまった。大半の食人植物達は俺が葬る形で終わった。

エーナさんには自由にしてもいいと言われたが、生きがいを見つけ、どうするかは自分で決めろと諭された。先輩として、大きな力を持つ者として。

だから、ウイリアム達には悪いが俺は下手に関わるわけにはいかない。

ある程度情報も歴史も文化も把握することはできた。後はヒュミテの住んでいる場所を巡り巡って生きていく、ナトウラ達の所に行かない限り追われることなく滞在期間の間は生きていけるだろう。

「……君は、話を聞いてたのかい？」

「聞いてたよ、聞いた上での答えだ。俺にも俺の事情がある」

「あらら〜」

「……ッ!!」

アステイが苦笑いを浮かべ、ネルソンさんに至っては額に青筋を浮かべてしまつてる。仕方がない、か。少し挑発してるようなものだし、彼らにとって俺は同じヒュミテなのだから。

この話を持ち出せば、絶対に協力してくれると踏んでいたのだろう。そうでなきゃこ

んな反応はあり得ない。

「君には、力があるんだろッ！ディーレバツツと渡り合うほどの、それが、それがどれほどのことかわかっているのか!？」

ウイリアムが声を荒げる、常に平静でいた彼がここまで感情を露わにするなんてな。

「過去、ヒュミテとナトウラの間で死んでいった彼がここまで戦士達の半数以上はディーレバツツによつて殺された！なす術もなく、手も足も出ずに！だけど、君はプラトーとぶつかつて生き残つた、それどころか撃退までした！その力を、何故我らの王のために、使おうと思わないんだ、君は!？」

「……ウイリアム」

彼の言うことは何も間違っていない。そうだ、俺も同じ立場なら同じように声を荒げて説得しようとする。

「ウイリアム、俺と出会つた時最初にした質問覚えてるか？」

「それは——ッ!？」

覚えていてくれたか。様子を見るにどうやら今までは戯言と思つてたらしい。

「まさか、君は、本当に……!？」

「隊長?」

「そういうことだ。だから、悪いが俺はあんたらに協力する理由がない」

——ヒュミテでもなければナトウラでもない。

俺はこの世界においては本来ならば存在してはならない存在。もう少し小さな喧嘩程度のことなら混じってもいいと思った、だけど話を聞く限りではこの世界の根幹に関わりかねない。

それも大きな作戦になる。俺はこの世界でプラトーの野郎から聞くことを聞き出し、温泉文化の開拓、それだけでできれば十分だ。それ以上もそれ以下も望まない、俺がフェバルとして生きていく以上そうやっていく必要がある。

「落ち着け、ウイリアム。……おい、少し俺からいいか？」
「ネルソン？」

ウイリアムの言葉を引き継いだはネルソンさんだった。

「俺は正直お前を信用していない、いくらヒュミテといえど怪しすぎる。仲間達に危機が及ぶようならすぐにでも俺が殺すつもりだった」

そんな物騒なこと考えてたのかよ、アンタ。だけど、合点がいった。

たしかに、大切な作戦前、そうでなくても自分達のコミュニケーションに突然身分も何も無い俺が来たら警戒するも当然、プラトーの奇襲があったから尚更なのかもしれないな。

「……お前、どうしてそんな辛そうな顔をしているんだ？」

辛そうな、顔？

「まあ、いい。俺が聞きたいのはそれだけだ、正直今回の作戦にお前の戦力は欲しいところだ」

「ネルソン、さん？」

「取引をしよう、もちろんお前にもメリットがある話だ」

取引だと？

さっきの紹介ではネルソンさんはルナトープの参謀役らしい、難しい話は勘弁だぞ。

「俺たちと行動するなら、衣食住は保証しよう」

「……そうきたか」

なるほど、願ってもない話だ。

単純だが俺は身分も行く当てもない。それに、いくらヒュミテの集落を探すにしてもそこで受け入れてくれるかはわからない。こいつらと行動することで最低でも餓死することはなくなるわけだな。

だけど――

「その気になればデイスナトウラで盗みにでも行けば食糧の問題は解決する、寝床も基本どこでも問題ないぞ」

「フツ、ナトウラは飯など食わん」

なん、だど!? 機械人間は飯を食わないのか、よく考えれば、そうだな。

それにあれだけヒュミテを嫌ってるんだからヒュミテ用の施設があるとは思えないな。この世界の荒廃具合じゃその辺で飯を探すのも絶望的だ。

「——風呂は？」

「フロ？なんだそれは？」

「……忘れてくれ」

ダメだ、やっぱり文化がないみたいだ。開拓プランを練って普及させないとな。

ネルソンさんを押して退けてアステイが俺の前にまでやって来る。

「ねえ、ホクヤ君。私からもお願い、今は強い人の助けが必要なの。皆、元々ルナトープはもつとたくさん人がいたんだけど、ナトウラとの戦いで私たちだけになっちゃって、もう、これ以上大切な人達を失いたくないの」

「……ッ！」

泣きそうになってるアステイを前に、クソ、そういう話は反則だろ。

「ねえ、お願い！テオは私たちの希望で支えなの！」

「アステイ……」

「ホクヤ君、今君がここに現れたのは千載一遇のチャンスだと思ってる。この機を逃したくない、先人達のためにも、我々の未来のためにも、君の力を貸して欲しい。頼む！」

………
なんなんだよ、ちくしょう。ここで断ったら俺が間違ってるみたいじゃねえ

か。

「——俺たちは駒だ。王を守り王のために尽くす兵だ。アステイの考えも一理あるが戦争は甘くない」

それは、俺もわかってるさ。表情から察するにアステイもそのことは十分に承知している。ルナトープ最年少だからだろうか、どこか甘さと幼さが感じられる。

「だから、こうしてお前という戦力を迎えるために全力で交渉をしようと思った。まだ信用できんが実力は本物のようだからな」

「ネルソンさん」

「——頼む」

ネルソンさんにまで頭を下げられてしまう、この人は俺のことを警戒して尚、俺のことを勧誘してる。

それほど事態は切迫している、ということか。

……プラトーの野郎が懐かしいこと口走るせいで、昔のこと思い出しちゃったよ。もう、重ねないと、忘れてしまおうと、なるべく思い出さないようにと思ってたのによ。姉貴のことも、あいつらのことも。

「ウイリアム」

「……何だい？」

「俺は、ホクヤ・フェルダントはルナトープと協力体制を取ることを約束しよう」

——本来ならば本意じゃない。けど、知り合っちゃまったからには、死に行く覚悟のこいつらを放っておくわけにはいかない。

「ホクヤ君!……んん、改めてルナトープ隊長ウイリアム・マツケリー、よろしく頼む」
「(ちらり)そ」

俺たちは握手を交わした。

俺はあくまでもプラトールをぶん殴って色々と聞き出す、そしてルナトープはヒュミテ王テオの救出。向かう先の利害は一致している。

俺は単純に怖かったのかもな、知り合った人を、知人を失うかもしれないということが。

「——ハア!?俺をルナトープのメンバーとして扱う!？」

「そつちの方が都合がいいからな、以上だ新入り」

一時間後、ルナトープのメンバーの前でネルソンさんがそんなことを言ったものだから大変である。協力体制といっても一時的だが、身分がない俺にとつてはそつちの方が都合がいいということ。ウイリアムの意見も同じである。けど、そんな話はもちろん聞いてない。

「誓約書読まなかったのか?書いてたぞ」

「もらった覚えがない！」

え、まさかネルソンさんもこういうキャラなのか？ マズイぞ、このチーム一筋縄じゃないか。

「よろしくね、新入り君！」

「仲良くしようぜ、新入り！」

「……なんかむず痒いから普通に名前でも呼んでくれ」

アステイとロレンツが悪ノリするからどうにも落ち着かない。こいつら、絶対に面白がってるし。

「入隊記念だホクヤ！ 勝負しよう！」

「おま、さっきまでロレンツ達と試合してたじゃねえか！」

この副隊長は副隊長で何かと理由をつけて俺と勝負しようとしてくるし、あ、いや、待てよ。

「なあ、ラスラ。スレイスって余りあつたりするか？」

「む、どうした？ 使うのか？」

「いや、ちよつと気になつてな」

せつかくだ。アルドニモーにドラちゃんとスーパ君を置いてきてしまつてからたまに両手が寂しくなる。代わり、というわけではないがどのようなものなのか握っておく

のも悪くないだろう。どうやら在庫はあつたらしく、マイナがいくつか持ってきてくれた。

「お前二刀流か？」

「まあな。姉貴と友人の見様見真似のところもあるけど」

「へえ、ホクヤ君お姉さんいたんだ、なんとなくそんな氣してた」

「え、マジ？」

「デビットとアステイも会話に混じる。」

ホクエ姉もそういや結構バトルジャンキーなところあつたな、何回物理的に殺されたか。ホクト姉には、胃袋的な意味で殺されかけたからな、うん、思い出したくない。

「顔色悪いよ?」

「気のせいだ」

アステイに心配されるけど、うん、大丈夫大丈夫。なるほど、非殺傷モードなるものがあるのか。それで、刀身を出すにはここを、こうか。

「おお」

思ったよりも長いな。ホクエ姉もシャナもナイフ程度の長さだったけど、でもリーチが少し変わったただけだし問題はなさそうだ。

あとは、俺が扱えるかどうかになつてくるんだよなあ。

「じゃあ、ラスラ。頼んでいいか？」

「望むところだ！」

俺とラスラは外に出て向かい合う。今日だけで二度目だ。さて、どこまで体が覚えてるかな。

65. ホクヤとルナトープ

翌日、俺は朝からロレンツに捕まっていた。ここを出発するのは明日、それまでは自由にしてほしいらしい。

「で、何の用だよ」

「へへへ、じゃあホクヤも来たことだし、お披露目といこうか!」

「そうだな」

先客としてデビットがいた。彼も何だかそわそわしている。普段の冷静な様子とは少し違う、ロレンツはいつも通りだ、ドヤ顔をしながら顎髭を撫でてる仕草が妙にうざく感じられるのは何故だろう。

ここはクルトリーアにある空き家の裏、人目のつかないような暗い一角である。わざわざこんな場所にまで来てやることがあるんだろうか、それに何故俺が呼び出されたのかいまいちわからない。ルナトープの中でもフランクな奴だとは思ってたが、ロレンツは持つてきた鞆の中から数冊の本を取り出す。

「——男の聖典よ、ここに顕現せよ!」

エロ本かよ。

「さすがロレンツだ。中々いい品が揃ってる」

「だろ？へへ、この俺をあまり甘く見ないでもらいたい！」

「……ていうか、お前どうやって調達したんだよ、紙の書誌なんてもうほとんど残っていないだろうに」

そう、この世界ではもう本は扱われていない。少なくとも機械人間であるナトウラには必要なく、情報を直接頭にインストールする方法が使われているらしい。ヒュミテはまだ必要らしいけど、エロ本って。

これをもっと貴重な情報源だったら素直に喜べたかもしれないが、エロ本って。あ、この表紙の子可愛いな。

「こいつは、いいな」

「お、わかってるな！さすがデビットだ！このふるんぷるんとしたおっぱいの本は結構高値でな、値切るのが大変だったんだぜ、貸そうか？」

「ぜひ」

この二人は、と思いがながら俺もロレンツの持ってきた本を漁る。全くけしからん、興味がないわけじゃないじゃないか。巨乳モノが多いな。

「お、やっぱりホクヤも興味ある？」

「あるけど、脚はないのか？こう、太腿とかすらつとした脚線美的な」

「んー、今回はないな。また今度探してきてやるよ！」

「そうか、ホクヤは脚派か！とかデケエ声で言ってるじゃねえよ！」

「ま、まあ、胸も悪くはないけどさ、にしてもすっごいぷるんぷるんだな。おお、今にも動きそうだ。多分モデルの人はヒュミテなんだろうな。ナトウラだとこんなシチュエーションの撮影なんてできないはずだ。そもそも紙文化廃れてるみたいだし。ん、ということとはナトウラは直接脳内に……」

「——これ以上考えるのはやめよう。」

「そういうや、デビット！スレイスってさ威力固定なの？」

「ん、まあな。だが、ナトウラの体を形成してるボラミット製の金属を斬れる威力はあるぞ」

「へえ」

「それにしてもホクヤも二刀流を扱うなんて思ってたなかった、徒手空拳専門じゃないのか？」

「まあ、ちよつとかじつた程度だけだな。基本は素手だよ」

「主に見様見真似なだけだな、ホクエ姉の。ドラちゃんとスーパ君の二つを使ってたときもホクエ姉の動きを参考にしたし。」

「今度オレとも手合わせしてくれないか？オレも二刀流なんだ」

「そうなの？わかった、やろう！」

「お互いに学ぶべき点があるといいな」

おっと、意外な共通点。だけど見様見真似の俺の二刀流よりもデビットの方がいい動きをしそうだ。

昨日ラスラと斬りあつたときもわかつたけど、どうも体術メインで戦ってきたからリーチの感覚がまだ掴めない。

スレイスの刀身の長さはドラちゃんやスーパ君を越えてる、早く慣れないと実戦で足を引つ張つちまう。

「———おいおいおい！お前ら、俺の成果を差し置いて試合の約束とかいい度胸じゃねえか！貸してやらんぞ！」

「すみません、それは勘弁してください」

今のロレンツには逆らうことができなかった、エロは偉大なり。

その後、尻派のラビルドが乱入してきて楽しく猥談をした後にロレンツが資材調達という名目でエロ本を探しに行ったため、その場はお開きとなった。

現在俺はルナトープのメンバーと親睦を深めるべく、携帯食料を食べながら適当な雑談をする。現在この場にいるのアステイとマイナとラスラとデビットだ。

ウイリアムとネルソンさんはラビルドのところへ、ロレンツは戻ってくる様子なし。

「そういえばマイナ姉、ホクヤ君のセフィックどうするの?」

「どうしましょ? 高価なものだしねえ、急には無理ね」

「え? もしかしてないと困る感じ?」

「少しね、デイスナトウラには私たちヒュミテの生命力を感知するセンサーがあるところにはあるから」

マジか、だけどなるほどな。道理であの時警備隊、デークランだっけ? 連中がいち早く俺の所に来たわけだ。

ということとは、ナトウラ達自体に気を感じすることはできないってことか。あくまでも街にあるセンサーに頼ってるってことなのだから。もぐもぐ。

「誰かの使い回しでも問題ないぞ」

「え、私の使った後のをそのまま使うの? ホクヤ君のエツチ」

「自分のサイズ自覚してから言え、それじゃあ厳しいのかマイナ?」

「え、ええ、そうね。基本的にサイズはしっかりしたものを着ないと機能しないこともあるの。それに余りもなくて..」

マイナが申し訳なさそうにする。なるほど、ちゃんと機能しないのは困る。気でも隠せる力があればいいんだけど、俺の場合は気を無駄に感知しやすくするだけだから

なあ。もぐもぐ。

「急に押しかける形になっちゃったからな、すまない」

「そういうのはやめよう、もう私たちは仲間だろ？」

「ラスラ…」

「そうだよ、ホクヤ君！マイナ姉も助けてくれたし、プラトー撃退しちゃうし、ラスラ姉とは互角だし！すごいよ！」

近い近い、どうでもいいけど顔が近いアステイ。めっちゃ目輝かせてるし、ぐいぐい来る奴だな、本当に。

「——はいはいはい、アステイそこまでね。ホクヤさん困ってるでしょ？」

「ちよ、マイナ姉、引つ張らないで！服が伸びる！」

「ふう」

ナイス、マイナ。あれ以上迫られてたら後ろに携帯食料落としちゃうとこだったよ、なんでラスラは赤面してんの？デビットもデビットで複雑そうな表情しちゃって。もぐもぐ。

ていうかこの携帯食料って素材何なんだろう？結構おいしい、うん、ホクト姉の料理よりも何倍も美味い。

「早くて六日、遅くても作戦決行までにセフィックは調達できるから心配しないでいい

わよ」

「そ、そうか」

まあ、あつたことには越したことはないか。もしかしたら他でも役に立つことがあるかもしれないな。

「ホクヤ、食後の運動にでも一戦やらないか？今ならお前を容赦なくやれそうなんだ」

「い、いいけど俺何かした？」

「別に」

何だろう、デビットから今まで感じたことのない殺意を感じる。スレイス、もといスレ吉とスレ助を両手に握る。頼むぜ、相棒達よ。

※

「世話になった、ありがとうラビルドさん」

「気にするな、こちらもルナトープの力になれてよかった。武運を祈る」

翌日、俺たちはクルトリアを出発することになった。移動手段はもちろん徒歩である、一人だけ飛んで先に行くわけにもいかない。

「デイスナトウラには六時間後に到着予定だ」

……六時間の距離を俺は二時間半で移動していたのか。やっぱりフェバルの能力つ

ておかしいんだな、うん。

ていうか、またあそこに戻ると少し憂鬱な気分だな。街一つに追いかけて回されたようなものだし、あまりいい思い出があるわけじゃない。思い入れもないけど。

「隊長、ホクヤのセフィックはどうするんだ？このままではディースナトウラに入れないだろ」

「え、街の中入るの？」

「そりゃ入るよ、そうしないとギースナトウラに行くことができない」

「——いや、今回は外の抜け道を使う」

外の抜け道？

「クデインには私から連絡を入れておいた、話は通ってる」

「……問題はなしか」

ネルソンさんも納得しちやっただけど、俺は全然納得できない。

「えつとね、ホクヤさん。ディースナトウラの地下にギースナトウラっていう場所があるの、そこに今回の作戦に協力してくれる人たちがいて彼らに合流する。そのためにディースナトウラに入る必要があつただけど——」

「さっき言つてた抜け道が関係してるのか？」

「そう、そのギースナトウラのアウサールチオンの集いの人たちが外部から資材を取り

入れたり、いざという時のための逃げ道がいくつかあってその一つを使う。常に開いたら危険があるから、開くには内側から誰かに開いてもらう必要があるの」

隣にいたマイナが説明してくれた。ありがとう。

ギースナトウラ、か。ある一種のスラム街っていうのは聞いている。そこで暮らしているアウサールチオンの集いのこともウィリアムから話は聞いたけど彼らはナトウラながらも現在の状況に不満を持つレジスタンス、らしいな。

なんでもナトウラには大人と子供が存在しており、機体更新と呼ばれる儀式みたいなもので大人になれなかった子供、子供の形態をチルオンというらしく、そのチルオンや社会不適合者が集まったのがギースナトウラで今回協力するグループがアウサールチオンの集いになるようだ。デイスナトウラ以外にも色んな所に支部があるらしい。

「ま、元々物資は上から補給してるらしいけどね」

「形としてはうまく機能してるみたいだな」

話を聞いた限りだな。見た目が子供でも頭脳は大人なんだろうな、挨拶するときには気をつけよう。

「クデインが言うには、あちらにもかなり強い助っ人がいるそうだ」

「へえ」

「フン、うちのホクヤよりかは劣るんだろうがな」

「お前は何様だよ」

副隊長、とりあえずスレイスを構えるのはやめてもらいたい。不意打ちだと結構心臓に悪い。

「——だが、今は少しでも戦力が欲しいところだ。申し分ない」
ウイリアムの言葉にネルソンさんとデビットが頷く。

——これが、俺にとって運命と呼べる出会いになるなんて、この時は知る術もなかった。

66. アウサールチオンの集い

クルトーリアを出発して大体六時間半後、俺はまたこの壁の前にやって来ることに
なった。

デイスナトウラ。

俺がこの星にやってきて初めて降りて追いかけて回された場所。当初は名前なんて知
りもしなかった、知ったところで何か変わるってわけでもないけどな。それに、今は一
人じゃない。

「こつちだ。デークランの連中が警戒してるかもしれない、気をつけて行くぞ」
「了解」

街の外とは言え、もう目と鼻の先までの場所に来ている。見つければ攻撃されるとし
て、増援でも呼ばれてデイレバツツまでやって来ては厄介だ。

それに、抜け道の存在も知られてしまえばそれこそまだ会ったことはないがアウサー
ルチオンの人達にも迷惑がかかってしまう。

先を歩くウィリアムについていくと、そこには大きな一本の枯れ木があった。よく見

ると、周りに似たような枯れ木がたくさんある。

「街に近いと自然は少しだけだが残ってる。その中で一つだけ抜け道の入り口にしたってわけだ、知ってる奴じゃないと見分けることはまず無理だ」

「なるほどなあ」

「急ごう、クデイン達も待っている」

「どうやら、この枯れ木だけが作り物らしい。もしもの時はこいつを片して抜け道ごと埋めて証拠も消してしまうそうさ。狭いが、わずかな明かりとウイリアムの行く道を頼りに前に進む。」

しばらく狭い道を進むと身長大くらの扉が目の前に現れた。

ウイリアムが施錠し、中に入ると小部屋にまた扉があった。

「……念を入れてるなあ」

「万が一、という可能性があるからね。こここの扉は内側からしか、それとパワードを入力しないと開けないことになっている」

「へへ、さすががこのシステムを考えて作ったネルソンとレミだ。姑息な性格がわかりやすく出てるぜ」

「……そりやどうも」

ロレンツが俺の隣で皮肉気に言うけどやめてほしい、ネルソンさんの苛立ちがこつち

にもビンビンに伝わってきてるからとりあえず離れてほしい、ていうか離れろチャラ男。

ウイリアムが扉を開くと中は小さな市場、明かりの差さない商店街のような場所に出た。

「ここがギースナトウラ、か。」

地下に作られた都市、まさにそんな感じだな。それでいて小さな子供が多い。あれがチルオン、大人になることのできなかつた子供達か。僅かに気も感じられるからヒュミテもいるのか。

「ここがギースナトウラだ、ホクヤ。ここなら上のセンサーは反応しないからディークランが来ることはない」

「結構広いんだな」

「ディースナトウラの地下にそのまま空洞を空けたようなものだからね」

なるほどなあ、しかし何だろうな。上に住む者が後から作ったって言うよりは、最初から用意されてるような、そんな場所にも思える。

上はあの無駄に文明の発展したディースナトウラ、その地下街がこんな風になってるなんてな。文明はそこそこ進んでいるようにも見えるが、上のお零れに預かってるような感じだな。

デイハルド王国のローグ街を思い出すな、光照らされる場所にてできる影は大きい。ここがまさにデイスナトゥラの影の部分になるんだな。

どうも、こういう場所は好きにはなれないけど嫌いにもなれない。

ウィリアムの案内で目的の場所へと向かう。

「あなたの機体に潤いを！オイル屋ノボッツ」と書かれた看板の扉を潜り、店主のノボッツなる人物と挨拶を済ませて奥の部屋に移動した。

「ここがアウサールチオンの集いなる場所、か。」

「それじゃあ、私とネルソンで先にクデインの所に行つてるわ」

「私は剣を振るいに行こう、少し体を動かしたい」

「いや、ラスラ姉もここまでずつと歩いてたよね？」

と、三者三様それぞれ自由に行動し始めて俺は道案内をしてもらうのも兼ねてデビツトと一緒に行動することにした。

「悪いなデビツト」

「気にすんな、どうせ俺も行く当てがなかったんだ」

ウィリアムとラスラは修練場へ、ネルソンさんとマイナはクデインなる人物のところへ、ロレンツとアステイもそれぞれがどこかへ向かつてしまった。

「良かったのか、ロレンツと一緒に行かなくて」

「別に、いつも一緒に動いてるわけじゃない」

「それもそうか」

まあ、でも俺から見たらお前ら二人でセットみたいなもんだし。とは怒られそうなので口には出さないでおこう。

今思えばデビットと二人でいるときは基本的に試合をしてる時くらいだから、こういう何もない時に二人でいるのは割と珍しいかもな。

「な、なあホクヤ」

「どうした？」

「……いや、あのとき、マイナを助けてくれたときは本当に感謝してる」

「何だよ、今更水臭い。気にするなってそういうのはよ」

「だが、まあ、そうだな……」

なんだ、なんか様子がおかしい。

こいつそんな前のことを言うような奴だったか？

あの時もしつかりとお礼はしてくれたけど。マイナもしてくれたいし、ていうか何でわざわざ今言ったんだ、しかも歯ぎれまでどこか悪い。ん、まさか、デビット……

「——お前、もしかしてマイナのこと好きなのか？」

「……」

あ、これは凶星か。

「な、何いつてるんだ。別にそんなんじゃない！」

「ないとか言うなよ、隠せてないし」

「うぐ…」

しかし、意外だな。ロレンツといつもエロトークしてたりするけど、まさか意中の人物がいたなんて。

デビットは口元を抑えながら恥ずかしそうにしてる、ガチじゃん。

「……だ、誰にも言うんじゃないぞ。ロレンツにも話してないんだ。特に、マイナにはだな、その」

「言わねえよ、信用ないか？」

「いや、あの馬鹿よりかは信用できる」

こいつの中でロレンツの評価低すぎだろ、この前会った俺よりも信用してないって……

「それでだ、その、最近マイナがお前のことを楽しそうに話すんだよ、俺に」

「……え？」

——デビットと世間話をしながら施設巡回をしている内に修練場に辿り着いた。そこではラスラがガチで誰かと斬り合っていた。側にはウィリアムとアステイとロレ

ンツと見知らぬ少年が一人いる。

「おいおい、これどういう状況だ？」

「お、ホクヤいい時に来たな！デビットも！ラスラと張り合える奴がいてき、結構いい勝負してて乳がふるんふるん揺れてんだよ！」

「ほう」

ほう、じゃねえよデビットてめー。

ロレンツが鼻の先を伸ばしてるとつていうことは女か。黒髪の女、うん、ラスラとモロ被りしてる。どこか幼いし、見たことあるような顔立ちだけど。

しかも二人共いい感じに笑つちやつてるし、あつちもバトルジャンキーの類か。

「——ハ、ハハ！楽しいなあ、ユウ！」

「君、こそ!!」

スレイスは多分非殺生モードに設定してるんだらうけど、あれはガチモードだな、うん。ラスラが生き生きしててウイリアムが苦笑いを浮かべてるのが何よりの証拠だ。

速度もどんどん速くなってきてるし、お互いにパワーは互角つてところか。ありや中々終わらないぞ。

「やれやれ、これ以上クデインを待たせるのもマズイ。おーい！二人共！そろそろ行くよー！」

ウイリアムが声をかけるが、気がつかない。ダメだな、もう自分達の世界に入っちゃまってる。

「強引に止めるしかないか」

「おいおい、俺は嫌だぞ。女の胸には飛び込みたいけどあんな打ち合いに飛び込む気はねえ」

「俺もだ」

ロレンツとデビットは拒否しやがった、つたく。なら俺が行くか。狙撃手のアステイに行かせるわけにもいかないし。

——ちよつとだけ両脚に「テンション」！

そのまま攻防の隙に入り込む、ラスラの相手の黒髪の女が一瞬だけ動きを止めた、その時を逃さずに入り込みスレイスの刃を避けながら二人の華奢な腕を掴む、もちろんスレイスを持っている方のだ。

「——そこまでだ、二人共」

「だ、誰!?!」

「ホクヤ!?!何故止める、勝負中だぞ!」

「隊長命令だよ。ていうか熱中しすぎ、一旦落ち着け。あんたもだ、熱中すんのは悪くないけどな」

「ぐ、ぐぬぬぬぬー！」

「は、はい」

ふう、この二人に力加減は難しいな。華奢でちよつと力を入れたら折れてしまいそうな腕してるくせに力はそこそこある。全く、強い女つてのは扱いに困るぜ。

「ユウ！次こそは勝つからな！負けられないからな！」

「うん、私も負けるつもりはないよ」

つたく、やれやれだぜ。

「もー、二人共一旦落ち着いて！そろそろ会議始まつちやうよ！」

アステイが二人分のタオルを持ってきてラスラ達に渡す。こいつ、さつきまでタオルなんか持つてなかつたよな？

……ここでツツコんだら負けか？

「ホクヤ君も、もう隊長達行っちゃったよ。道わかる？」

マジか、あいつら行くの早すぎだろ。デビットの案内で何とか道は覚えたけど、会議がどこでやるかわからんから困ったもんだ。ここは素直にアステイを頼ることにしよう。

——あと、もう一つ気になることを解決しておこう。

「そーいや、ラスラの相手してたあんだ、名前は？」

「わ、私？私は、ユウです」

「ユウ、か。俺はホクヤ、よろしく」

やはり、どこかで会ったような気がする。気のせいかな？

※

会議室に到着した瞬間、ネルソンさんから叱責をくらった。そして、レミと呼ばれる少女から何か見てはいけないモノを見てしまった表情をされてまった。解せぬ。

どうやら俺たちが最後だったらしく、待たせてしまったようだった。マイナの隣に座り、その隣にロレンツが座った。層々たる面々が揃つてる、そんな雰囲気だ。チルオンのクデインとレミも見た目からは想像できない異様な雰囲気というか、只者ではないということがよくわかる。

そして、ルナトープの面々も実力者揃い。あのユウという少女も只者じゃない、ていうか気を一切感じないところからあの少女はナトウラなのだろうか？そうだとしたらよくできてる。

改めてデイスナトウラの技術力は凄まじいと思わされた。

ウイリアムが立ち上がり、皆の顔が見える位置へと移動した。

「——では、これからヒュミテ王奪還のための作戦会議を始める。会議の前に、簡単な

自己紹介をしておこうと思う。顔も名前も知らぬ者も多いだろうからな」

なるほど、ルナトープとアウサールチオンの集いの繋がりはあると思っただけど全員が全員面識があるわけじゃないのか。まあ、俺はルナトープ以外ほぼ面識がないのと変わりない。

たしかにこれから共同戦線をしていく上では大切なことだ。

「まずは、ユウ・ホシミ君、頼んでもいいかな?」

「はい」

変わった名前、だな。なんというか、語呂がちよつと無理矢理に感じられる。気にしちゃダメなことかもしれないが……

「アマレウム出身の旅人、ユウ・ホシミです。今回の作戦では助っ人として参加させてもらいます。話には聞いてると思いますが、私は男と女と性別を変える特殊な能力を備えています」

……ん?

「——今は女ですが、こんな風に」

俺は目の前で起こった現象に、目を疑った。それと同時にとてつもない気の嵐が感知できた、なんだ、この量!!

「男になることも、可能です」

———というか、これ絶対フェバルの能力だろ！ユウ、いや、ユウさんもフェバルだったのか!?

なるほど、会ったことはないけどどこか親近感を感じると思ったら、外部の気配を感じたからか、納得。

「———この二つの身体は性質が違い、状況によつて使い分けてます。女の時は生命反応を一切持たない、つまりナトウラとほぼ同じ状態なので潜入等で、この男の時は気剣術という特殊な剣術で戦闘が可能です。これからしばらくの間よろしくお願ひします！」

ぺこり、と頭を下げた女に戻つてから席に着く。

それにしても、気剣術か。また久々に聞いた名前だな。間違いない、ユウさんはフェバルだ。後で色々聞きたいこともあるし、個人的に話に行つた方が良さそうだな。

「こちらこそよろしく頼む、ユウはラスラに打ち勝つほどの実力者だ。大きな戦力として役に立つてくれるはずだ」

———多分、ラスラから喧嘩吹っかけたな、間違いなく。ここに来る前に実力を試すだ、どうのこうの言つてた気がするし。

「じゃあ、次はホクヤ君。頼めるか?」

「ういっす」

まあ、順当だな。ルナトープ新入りで周りの奴らはほとんど俺のことを知らないだろうし。とりあえずロレンツとアスティよ、うざいから茶々を入れるのはやめてくれ。

「最近ルナトープに加入させてもらった、ホクヤ・フェルダントです。力になれるかわかりませんが、尽力は尽くすつもりなのでよろしく」

「謙虚は止せよ、あのプラトールを撃退しておいて何言ってるんだか」

ロレンツの発言にどよめきが起こった。どれだけディーレバツツが驚異的な存在なのか、今の一瞬だけで大体把握することができた。

一つお辞儀をして座る、後はウイリアムに任せるとしよう。

「では、次は私から時計回りでいこう」

67. ヒュミテ王救出作戦会議

「オイラの番か、オイラはリユート！足の速さにはここの誰にも負けない自信あるぜー」
「レミと申します。上司のクデインと共に後方支援を担当させてもらいます。よろしく
お願いします」

「アウサールチオンの集いの代表、クデインだ。皆さん遠路はるばるこのギースナトウ
ラまで足を運んでくれたことに感謝します。こうして我々が無事に合流できたことに
も感謝を」

「そういうのは止そう、クデイン。我々にも今回のことは感謝しているんだ」

「そう、だな」

ウイリアムから時計回りで始まった自己紹介はクデインまで回り、ひとまず終わっ
た。

アウサールチオンの集いの連中もかなり癖が強いみたいだ。さつきからレミって女
にガン付けられてるし。

途中、俺とマイナでロレンツに茶々を入れたり、デビットがロレンツに肘鉄を食らわ

したり、アステイがはっちゃけたり、とルナトープメンバーが好き勝手やったが支障をきたすことなく進めることができた。これもウイリアムの手腕だとすると、あいつは相당한苦勞人なんだと改めて思わされる。

——さて、これでこれから共に戦う仲間の顔と名前はぼんやりだけど頭に入れることができた。

次にウイリアムが紙資料を取り出して全員に配る。ここに作戦内容が簡潔にまとめられているようだ。

目的は第八街区四番地にあるデイスナトウラ第一刑務所、そこに囚われているヒュミテ王テオの救出。

割と細かい内部構造まで記載されているが、これを覚える気はしない。要点だけ目を通しておこう。

結構時間は人気のない深夜、ナトウラには活動エネルギーを補充するために必要な充電時間がある。それはヒュミテにとって、俺たち人間にとっての睡眠行為だ。だからこそ、深夜を狙う。

「可能性があるとすれば、地下の収容施設。もしくは警備が厳重なところと考えられる」
「でもよ、そう見せかけて別の場所だってことも考えられるぜ。第一刑務所以外にも刑務所はあるんだ」

ロレンツが早速配られた資料とウィリアムの言葉に対して指摘をする。ネルソンさんも思うところがあるのか、頷いている。

指摘に対しての言葉を投げたのはクディンであった。

「その点に関しては僕とレミが保証させてもらう。彼女に備わってるヒュミテ感知センサーがテオの反応らしきものを確認している。ほぼほぼナトウラしかいないこの街でヒュミテの反応があったのは第一刑務所だけだ」

「それにね、ロレンツ。あそこは絶対に破れない、という自負と実績の塊でもあるの。これまで特別収容区画まで辿り着けた者も脱獄できた者も誰一人としていない」

「連中が絶対の自信を持つてるなら可能性は高いか、クディン殿も嘘を吐くメリットはない、か」

「デビット、あまりそう言うこと言わないの」

「…… はいはい」

次にマイナ、デビットが言葉を紡ぐ。

知らない用語が多いな。下手に口を挟まない方が良さそうだ、あのロレンツでも議論に参加できてる。

そのロレンツの言葉の意味や専門用語を知らないようでは、俺の言葉は雑音でしかない。あんまり難しいこと考えるのも得意じゃない。

「向こうの体制は万全。戦力はディーレバツツがいる、こちらが圧倒的に不利というわけか」

「だな、せめて奴らの機能がわかりさえすれば対策くらい立てれるだろうに」

「まあ、俺たちに有利な点があるとすれば俺たちがここに来たことを知られてないのとホクヤが加わったことくらいか」

「あと、ユウ君もね」

「デビットがこつちに目を向けてくる、おいおいやめてくれよ。そんなに期待されても何もできやしないぞ。」

「期待してくれてるところ申し訳ないが、できることは少ないぞ?」

「謙遜は止せって、俺の見立てじゃこの場でホクヤより強い奴なんていないと思うし!」
痛ーよロレンツ、背中をバシバシ叩くな! ラスラもあまり睨むな、あとで試合に付き合っつてやるから!

——それに、もう一人注目されてるユウさんは俺よりも強い。

実際に戦ったわけじゃないけど、そんな気がする。本能、第六感でそう感じる。

アステイに絡まれて若干迷惑そうなユウさんが立ち上がり、全体を見渡しながら一言宣言する。

「——話の腰を折るようなことで申し訳ないけど、私は戦闘ではなるべく誰も殺さな

いようにする」

「は？」

その呆れるような一文字を出したのは誰かはわからない。

俺はユウさんの言葉を重く深く受け止めた。フェバルである以上、強すぎる力を振るえば世界の概念をも変えることができてしまう。

だからこそ、ユウさんは殺生を極力しない。そういうことなのだろう。

「——正直、私はこのヒュミテとナトウラがぶつかり合ってる現状でさえ納得がいてない。いずれは手を取り合って欲しいと思ってる。だけど、これは私個人の意見、誰かに強要するとかそういうのは一切しない」

「……本気、なのか？」

「本気」

デビットが恐る恐る尋ねる。ユウさんは強い意志を持って肯定した。

さつきまでの重苦しかった雰囲気が一気に沈下してその場にいる全員が呆気に取られていた。

沈黙が場を支配する。

「甘い、な」

「……まったく、どういう育ち方したらそうなるんだか」

「そうかな？ 私はそういう考え方もありだと思っけど」

「オイラもオイラも！ ユウの考え方素敵だと思っよ！」

理解者はいた、か。正直俺もフェバルとして色んな世界を巡ってなかつたら、故郷で過ごしていたままの俺ならばユウさんの考えを一蹴していただろう。

「俺もいいと思いますよ、それは実力が伴ってないと言えないようなことだ」

「ホクヤ!!」

「——だからこそ、あんたには期待してますよ。ユウさん」

——けど、ちょっとテンション上がってきた。

俺は戦闘狂ではないと自負してる、だけどここまで言う人物がどれほどの実力者なのか。ユウ・ホシミというフェバルがどこまで理想を現実にしてしまうのか。

ただ単なる興味、雰囲気と物腰からは図り知れない実力に俺は心躍っていた。

「二人とも、その辺に。そろそろ会議を進めたいんだけど、いいかな？」

おっと、そうだった。

「すみません、話の腰を折ってしまって」

「悪い、進めてくれ」

ウイリアムに促されてユウさんは席に座る。席に座る際、こちらに向かって何か言いたげな表情を浮かべていた気がするのはいかだろうか？

こほん、とウイリアムが咳払いを一つして会議を再開させる。

「——先ほどの続きから始めよう。たしかにディーレバツツは脅威だ、こちらにも二枚のジョーカーはあるがそれでも未知数なことになり変りない。だからこそ、スピードが重要になってくる」

「その通り。だからこそ、ディーレバツツ、特にリルナがやって来るまでにテオを救い出さねばならない」

「——そこで、奇襲及び先行はラスラにデビット、ホクヤ。それからユウ君に任せたい。頼めるか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「わかった」

ラスラとデビットが返事をし、俺が縦に頷く。ユウさんも肯定の意を表したようである。ウイリアムが話を進める。

「それから第一刑務所内部での援護、陽動は私とネルソン、ロレンツでやろう。外部への脱出ルート確保、都市部における陽動に関してはアステイとマイナ。地の利に詳しいリユート、キブル、アムダに頼みたい」

クデインの傍に待機してたキブルとアムダと思わしきチルオン二人が静かに頷く。

アステイも敬礼のような仕草と共に返事を返した。

「敵の動き、特にディーレバツツの動きの捕捉はクティンとレミに頼みたい。支給する無線で何かあれば即座に伝えてくれ」

「わかりました」

「すまない、僕はあまり役に立てなくて」

「気にすることはないさ、それぞれできることに全力を尽くせばいい。下手に大勢で動き回ると危険だ、それにクティン達の役割は犠牲を減らすために最も重要な役割だ」

「……そう、だな。わかった、僕たちは全力で後方支援に務めることにしよう！」

ウイリアムが頷く。

「さて、無事にテオを救出した後はギースナトウラからルオンヒュミテに向かう。それまでもディーレバツツは攻めてくることも考えられる、エルン大陸を抜けるまでは気が抜けないとおいてくれ」

部屋を見渡す、全員が覚悟を決めた表情を浮かべている。

「——以上だ。他に何か言うことのある者は？」

ウイリアムが部屋を見渡す、誰も何も無いようだ。話すべき点は終わった、あとは当日を待つのみ、ということか。

「——では、作戦会議は以上とする。これより一週間は休養、及び合同演習に充てることにする。旅の疲れと連携の確認を取る必要性がある、時間はないが焦らず確実に作戦

を成功させるため、万全な状態で挑むぞ！テオは我々で必ず助け出す！」

——ウィリアムの号令に決意を固め、会議は終了した。

※

皆がバラバラに会議室を後にする中、俺は会議室の出口付近でユウさんを待った。

あの人とは話したいこと、聞きたいことが山ほどある。今はロレンツが絡みに行ってる、あ、殴られてる。

デビットが回収してこっちに来た。

「お疲れ」

「まったくだ、この馬鹿のお守りは疲れる」

「……うぐ、やつぱ女ってサイコー」

「まったく」

サムズアップしたロレンツを引きずってデビットは部屋を出て行った。

やれやれ。もう見慣れた光景だがどうしても溜息が出てしまう。

しばらくして、ユウさんがこちらに向かってきた。

「えっと、ホクヤ、だっけ？」

「ええ、まあ、そうツスね」

「…… ちよつと聞きたいことがあるんだけど、時間大丈夫、です、か？」

「—— 大丈夫、こつちも聞きたいことあるので。あとで部屋に迎えばいいですか？」

「あ、ううん！アステイのところに行ったらそっちに行くので！」

なるほど、俺が行けば気まづくなるのは確実って感じだな。女二人いる空間に土足で行くほど俺も無粋じゃない。大人しく待つことにしようか。

「わかりました、では後で」

「う、うん」

そそくさとユウさんは部屋を後にした。さて、先約があるのなら仕方ないな。

待つてる間クデインのところへ挨拶に行こう。まだ話してないし、共闘するにあたって情報は共有しておきたい。この世界のことでも多少でも多く、チルオンの視点から知りたいってのもある。

「あれ、マイナ？」

「ホクヤさん、どしたの〜？」

「いや、クデインに一声挨拶しとこうと思って、まだ面と向かつて話したことないから」

「なるほど、私は今回持ってきた物資の補充結果を伝えに——」

途中で合流したマイナと他愛ない話をしながらクデインの部屋へと向かった。

そういえばルナトープがここに来た目的の一つとしてアウサールチオンの集いに必要物資の運搬つてのがあったな。クルトリアに立ち寄っていた理由の一つでもある。

クデインの部屋の前に辿り着くと、マイナがコン、コン、コンと三回ノックをして、扉を開いて入室する。

「失礼します」

「マイナ、とホクヤ君か」

「ども」

クデインの部屋にはレミとキブルにアムダがいた。レミにはもちろんのこと睨まれているし、見た目の平均年齢が低いことにまだ慣れない。

「二人揃って、何か用かい？」

「俺はあんたに挨拶を、まだきちんと話してなかったし。ホクヤ・フェルダントです、よろしく」

「これはご丁寧に、アウサールチオンの集い代表のクデインだ。プラトーを退けたという功績の持ち主だ、実力と活躍を期待してる」

「…… ちょうど良かった、あなたに私からも聞きたいことが一つ、いや、いくつかあつて」

明らかに警戒心を剥き出しにしてるレミ。聞きたいこと、か。

そうやってレミはディスプレイを取り出し、ある画面をこちらに向けてくる。

「——この写真と貴方は同一人物よね？懸賞金百万ガル、しかもONRY DEADなんて、一体何をしたの？」

うわ、見当もつかない上に賞金首になってることも今初めて知った。

しかも、死のみって。生け捕りは許されないううだ、連中というより十中八九プラトーの仕業だな。

「それに、あなたが突然上に現れたことも気になるわ。ヒュミテが堂々と何の前触れもなくディースナトウラの街中に現れるなんて、馬鹿なの？」

「んだと、コラ？」

「ていうか、どうやって現れたのよ？ユウはわかったけど、あんただけはどうしてもわからないの」

うー、怒涛の質問攻めだ。

さて、どう説明したものかな。どうやらプラトーのように俺のことを知っているという雰囲気ではない。

となると、やはりプラトーには色々と問い質すべき必要があるな。

このレミって幼女、見たところ賢そうで動きもそこそこだ。じりじりと周りが不審に思わないレベルで距離を詰めてきてる。

「どうしたの？だんまり？」

「おい、レミ……！」

「クデインは下がってて」

「ホクヤさん……」

「大丈夫、このガキに気圧されるなんてマヌケな事はしない」

不穏な雰囲気を感じ取ったクデインとマイナが動く、でも制止させる。

実際こんな幼女に動揺させられるほど、俺だってガキじゃない。

「質問が多いから手短かに応えるぞ」

「助かるわ」

「一つ、この写真と俺は同一人物。二つ、心当たりは一つだけあるが、理解されないだろうから話す気はない。三つ、俺だっていきなりあんな扱い受けてビビった。四つ、空から降ってきた」

「……一つ目の応え以外納得できない」

「それ以上の詮索は不要だ」

そう、俺は事実しか言っていない。

何一つ間違いは言っていないのだから何の問題もない。

「……わかった、仕方ないから納得する。最後に一つだけ教えて」

「……何？」

「——プラトリーの、機能」

あ、そういえばプラトリーに関する情報を会議で言うの忘れてた。

「……機能は知らない。けど、奴は狙撃手だ」

「それくらい知ってる、私が聞いているのは機能よ機能、どうーゆーあんだすたん？」

——よし、喧嘩だコノヤロー！

数秒後、スレ吉とスレ助を携えた俺とガンを飛ばしてくるレミはマイナとクデインによって激突寸前のところで止められた。

68. ホクヤとユウ

レミの奴、本気で首狙つてきやがったよ。俺じゃなかつたら死んでたぞ！

アムダとキブルからもそれぞれ畏怖の目を向けられるわ、あとで稽古つけてくださいとか言われるわ、マイナには怒られるわ、疲れた。ていうか俺悪くない？

一旦用意された部屋に戻って寝転がる。ここに來てからあまりゆつくりできてないから少しでも休める時間があるとありがたい。エクリサリテルにいた頃は闇医者同業者に狙われる時や緊急の患者が来る時以外は基本的にゆつくり落ち着ける時間が多かつたなあ、懐かしいな。

——ここならお前と一緒に時間を過ごしても問題なさそうだな、オカつち。

メガたんも含めて故郷からの付き合いだ。お前らがいてくれたおかげで俺は孤独に怯えることなく今も生きてれてる。あの時、死んだ時の感覚は今でも覚えてる。

何もかもわからなくなつて、体がただひたすら冷たくなっていくあの感覚。これからも経験することになると思うと憂鬱だな、慣れれば問題はなさそうだけど。慣れちゃいけないな、うん。

オカつちと一曲演奏し終わった頃だろうか、扉が丁寧にノックされたのは、気は感じられない。ルナトープのメンバーじゃない、となると、クティン達チルオンの誰かか？

「へーい」

「あ、ホクヤ、さん？ユウです」

「おお、ユウさん！どうぞどうぞ！」

そうだ！ユウさんだ、話す約束してたんだ。失礼します、と丁寧に仕草で扉を開いておらずとやって来られた。

肩にまでかかる長い黒髪、健康そうな肌、そして、結構デカイ胸。うむ、中々のサイズだ。そして、全くといっていいほど感じられない気力。代わりに感じられる熱量と魔力。そう、よくよく探してみるとユウさんは魔力も凄まじいんだ。表面的なものではなく、こう、内包してる器が凄まじい。

俺よりも多くの修羅場を経験したか、見た目は俺よりも年下に見えるが、フェバルであればそういうところは関係なくなってくる。

「すみません、こちらから出向くどころかわざわざ来てもらって申し訳ないです」

「そんなことないよ、ていうか敬語じゃなくていいよ！なんか、慣れないし」

「わかった、ユウさん！俺のこともホクヤでいいぜ」

「……ユウさん呼びは固定なのね」

苦笑いを浮かべながらもじもじするユウさんはどこか見た目の年相応、という雰囲気
がした。

とりあえず来てもらったので備え付けの飲み物を二人分出すことにした。

「それで、話つて？」

「ユウさんつて、フェバルでしょ？」

「ぶぶっ!？」

——ユウさんが盛大に吹き出した、お見事！

「な、なananで!? え、ちよ、まつ、なんでホクヤがフェバルつて単語を!？」

「あー、そっか言つてなかったな。俺もフェバル」

「はい!？」

「いやあ、まさかこんなところで会うなんて思いもしなかったけど」

うんうん、思ったよりもこの宇宙つてのも狭いのかもかもしれないな。エーナさんが言う
にはフェバルの絶対数そのものは星の数に比べれば相当少ないらしいけど。

「え、え、ていうか、え、なんでホクヤは私がフェバルつてわかったの? 顔に出てた?？」

「いや、会議の時に能力使つてたじゃん」

「あの時かあああああああああああああああああああああああああああああああ

「!!?」

「うん」

「やっべ、この人面白い。」

「なんというか中々独特な人つてのがわかる。あと、面白い。」

「性別を入れ替える能力なんだな」

「ま、ま、まあね!」

「あたふたしてるユウさんが落ち着くのを飲み物を啜りながら待つ。今の状態じゃ話をすることも難しそうだし。」

「…… ああ、びつくりした」

「湯呑みの中を一気に飲み干した後、ユウさんは改めてこちらに視線を向けてくる。」

「まあ、俺もエーナさん含めてユウさんで二人目なんですよね。他のフェバルと出会うの」

「そうなんだ、私はもう少し多いや。やっぱりエーナさんとは会ってるんだ」

「あれ、ていうことはやっぱりユウさんも?」

「ユウさんは静かに頷いた。なるほど、あの人本当にフェバルになる前の人達に対する未然防止作業、所謂殺生はやってるんだな。」

「ユウさんもここにいてるってことは、俺の時と同じように失敗したのか。成功したこ

とつてあるのかな？今度聞いてみよう。

「それで、改めて色々聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「私も、ホクヤがフェバルなら聞くべきこともたくさんあるし」

「他の連中に聞かれる訳にもいかないしな」

「そうね」

一応気と熱量の感知感覚を全開にして周囲を警戒しておく。

この部屋の防音設備がどこまでかは知らないが、万一外にまで聞こえてしまつては面倒なことになってしまう、主に説明が。

「ユウさんはメノ部族つて言葉に聞き覚えある？」

「いや、ない」

「…… そうか」

ホツとした。やはりプラトーの野郎に直接殴つて聞くしかない。

「……」

「ホクヤ？」

「あ、ああ、悪い」

「大丈夫？」

「大丈夫大丈夫、ちよつと考え事してただけだから」

苦し紛れの言い訳だったけど、何とか誤魔化せたようだ。

湯呑みを口に近づけ、中を静かに啜る。一旦このことは忘れよう、今はそれよりも優先させることがある。

「そういえば、さっきここから何か音楽が流れてたけど」

「ああ、ちよつと演奏してた」

「え？ホクヤが？」

「…… 何その反応？」

「いや、何か、意外で。プレーヤーとかで流してるものかと」

「きちんとした生演奏だよ、ホラ」

証拠としてオカつちをポケットから取り出す。

「…… これって、オカリナ？」

「知ってたの？」

「うん、私の故郷にもあった」

「マジか、ユウさんの出身ってどこ？俺はグリアフィートって星」

「私は地球、だけど……」

「……」

…… 聞いたことない。ユウさんも同様みたいで首を傾げて困った表情を浮かべて

いる。

「まあ、似たような文化があつたつてことだ！」

「お、おう」

「それで、さっきの曲はホクヤが演奏してたんだよね？」

「まあな！故郷に伝わる孤独を紛らわすために周囲に靈的なものを引き寄せるために唄われたらしい！」

「え、何それ怖い」

実際にユウさんは俺とオカっちの演奏に導かれてやつてきた、どうやらきちんと効力はあるみたいだ。

「ていうか、ユウさん男にはならないの？」

「え、なんで？」

「いや、何というか、問題はないんだけど女よりも男の方が話しやすいというか、なんというか」

まあ、主に下品な話とかだけだ。気持ち的にも同性の方が話しやすいっていうのもある。

やっぱり俺も男だし、異性をどこか意識してしまうのは嘘ではない。そういうことに無頓着というわけではないのだ、俺だって聖人や仙人の類じゃないから性欲はある。

「……もしかして、照れてたりする？」

「まあ、少しね」

ちよつと目を逸らして返事をする。今度はユウさんが何故か恥ずかしそうにしていた。なんでやねん。

「そ、そういうえばホクヤの能力って何なの？」

「んー」

このまま教えてしまってもいいけど、それではどこか面白みがない。ユウさんは弄つたりすると面白いつていうのがわかった。ここは面白そうな方に話は進めさせてもらおう。

「秘密」

「えー!？」

※

ディーレバツツの一人、トラニティの機能は凄まじいものである。

体内に内蔵されたトライヴシステムから街中にあるトライヴ先に飛ぶことができた。マーキング機能の役割を果たす簡易トライヴシステムを内蔵したもので一瞬で飛ぶことができる。

移動にとっても優れた機能である。多少の誤差は生まれることはあるが、微々たるものでディーレバツツ内でも重宝されている。

決められたトライヴゲートへの移動が従来の機能、そこに彼女のリルナへの想いとプラトーの協力により技術的進化を遂げることに成功したのだ。距離が遠すぎたり、近すぎたり、連続使用はトラニティの身体を傷つける結果になってしまいが本人は特に気にしていない。

時折、トラニティはそんな自分の機能に疑問を抱くこともあるが些細なもので大したことではない。明日には忘れる程度の疑問である。

「——トラニティがいると、移動が楽で助かる」

「いやいや、リルナっちのパストライヴっていうショートワープの方がおかしいですから！長距離用のトライヴを短距離用に用いるなんて、それがなかったら私の機能もただのトライヴゲート經由止まりでしたよ」

リルナを筆頭とするトラニティ、ステアゴル、ザックレイの四人はアマレウムにまでやって来ていた。

ヒュミテが暴動を起こした、現地のナトウラでは手に負えないという申請をザックレイが受信し、ヒュミテにとっては絶望、ナトウラにとっては希望を象徴するディーレバツツがアマレウムの地に降り立った。

「——ザックレイ」

「数は多いね、少なくともナトウラよりも圧倒的に。近隣からも集まつてるんじゃないかな」

「そうか。さて、行くとするか。私が先行する、暴れるぞステアゴル！」

「——ガハハハハハハ！いいね、隊長オ！俺達の力見せつけてやろう！」

「ゴル、程々にしとけよ？」

「おう、わかつてるよザックレイ！」

他のナトウラと比べても群を抜いて巨大な身体を持つステアゴルはゴチンと腕を鳴らす。右腕には丸太のように太い大きな機械形態が目立つ身長大程のパワーアームが取り付けられている。

耳を抑えるザックレイはしっ、しっ、と若干嫌そうに手を振る。

リルナが駆け出し、ステアゴルが追行する。美しい水色の髪を揺らしながら剣を構え戦場を駆ける姿は早乙女、しかしやがて返り血を全身に浴び、動くことない冷酷な瞳は魔女を彷彿とさせる。リルナの背後につくステアゴルは右腕を振るうだけでヒュミテを蹴散らす。蚊でも払うように多くのヒュミテに致命傷を与えていく。

後に、二人のことをユウは故郷の偉人「牛若丸と弁慶のよう」と喩えるがそれはまた別の話である。

「トライヴゲート付近に取り残されたトラニティとザックレイは暇そうにしながら二人が無双してる様を傍観する。直接的な戦闘手段がない二人はいつもこんな感じである。」

「あー、相変わらずだね。隊長は表情変えないし、ゴルなんて楽しんでやってるよ」

「まあ、あの二人に任せとけば十割荒事解決しちゃいますからね。私らが行っても邪魔なだけですな」

「だね」

豪快な笑い声を上げながらパワーアームでヒュミテ達を叩き潰し、吹き飛ばしたりするステアゴル。あの場にいるのがリルナだけならまだしも、あれに巻き込まれないようにサポートに向かうのは無理だろう。

「そういえばさ、トラニティ。最近副隊長なんだかおかしくない?」

「プラトールが?」

「ちようど、あの、ホクヤ・フェルダントって奴を取り逃がしてから熱が入ってるのかなんというか」

普段は冷静沈着で周囲の状況を読むプラトールらしからぬ行動が目立っている。

例えば廊下の僅かな段差に躓いたり、着替え中のプリンダの部屋に間違えて入ったり、苦手、というか必要最低限行くことを避けてる百機議会に顔を出す機会が増えたり

等が挙げられる。

「…… あの人も男ってことなんじゃない？ 私にやわかんないけど」

「…… 僕も一括りにしないでくれ」

ザックレイが迷惑そうに小さく呟いた頃にはアマレウムでのヒュミテによる暴動は終わっていた。

そこに立っていたのは背中を合わせたリルナとステアゴルだった。

69. ガンウーマンズ

「ラビルドさん！大変だあ、アマレウムのヒュミテ達がディーレバツツの奴らにボコボコにされた!!」

「なんだとー!?!」

現在三つ目の英雄ホクヤ像、製作中のラビルドの耳に入った情報だ。

クルトリーアとアマレウムは距離は離れているが、物資の交換等交易、及び情報のやり取りをした仲だ。

今回暴動を引き起こしたカマンズなるヒュミテも話がわからない者ではなかった。

何日か前に暴動参加のお誘いをラビルド達も受けはしたが、その時は酒の席だったし真に受けなかった。だが、実際に暴動は起きて友を失った。

「……なあに、こんな生活ももう少して終わるさ」

「ラビルド、さん？」

「お前も見ただろ？あのプラトリーの弾丸を弾き、勇猛果敢に一人で立ち向かって無事に帰ってきた我らが英雄の姿を！そのホクヤの旦那とルナトープ達がディースナトウラ

へ向かったんだ、負ける気がしねえよ！」

「ラビルドさん……」

笑顔を浮かべながらボラミット金属を削るラビルド。しかし、そんな笑顔さえもうまく浮かべることができたのか本人にはわからなかった。

英雄、ホクヤなら大丈夫。この目で確認したことだ、ラビルドにはホクヤやルナトープ達のように戦う力はない。

託すしかない、この世界の未来を、ヒュミテとナトウラの勝敗が決まることを。

歴史上ナトウラに虐げられてきた歴史に終止符を、これ以上多くの友や同胞が犠牲になる前に。

(頼みまずぜホクヤの旦那！あつしは英雄ホクヤ像を可能な限り作らせてもらいます、この身が保つ限り!!)

※

「へっきしー！」

「——隙あり」

「どわっ!!？」

危なッ、模擬戦とはいえ、この幼女ホントに容赦しないな！

間一髪で避けたけど、実戦だったら死んでたかもしれない。

「おおー！」

「りやあああ!!」

おっと、ギブルにアムダ、正面突破は俺にとつても訓練になりにくいからなるべく背後から狙って欲しかった。

嫌いじゃないけどな、小細工なしの正面突破も！

作戦決行まで残り三日、もう数えるくらい時間しかない。ここ二日近く俺はアウサルチオンの集いの面々と訓練を続けている。

ギブルとアムダの要望に応じて俺に出来る限りの師事をしている。そのついでとってはなんだがしつこく付き纏ってくるレミの相手も面倒なので一緒にしてる。

数は多いほうが俺もありがたい、熱反応の精度を上げることが出来るのだから、ギブアンドテイクでお互いに良き訓練となっている。

これから相手にするナトウラ、機械人間達は気が存在しない。なので熱反応による探知が基本となるだろう、その練習にもってこいなのがチルオン達だ。デーレバツツほどの実力者は存在しないにしても、ギースナトウラで暮らす一般的なチルオンよりも戦闘能力は高い。特にレミは割と本気で向かってきてくれるから、あんな奴でも感謝しなくちゃいけないな。

ギブル、アムダペアの左右からくる攻撃を防いで、足払いをかける。これで転んでくれるとありがたいんだけど、チルオンの体って結構身軽みたいなんだよなあ、それに動きも機敏ときたものだ。この前リユートと走った時なんか「テンション」使いかけたし。リユートだけじゃない、チルオンってのは力は弱いけど、スピードが大きな武器になる。だから今回攪乱させる班になったことに納得させられるくらいに。

——正直、俺が熱感知できなかつたらこの不意打ちも対処できなかつただろうな、レミ。

「きちゃん!？」

「せめてスレイスは訓練用の非殺生設定にしといてくれないかなあ」

やっぱ、スレイス振るったり腕動かすより脚の方が向いてる気がする。

じっくりくるというか、馴染んでるような感じだ。スレ吉とスレ助も使いやすいように改良したいけど、俺はそこまで手先が器用じゃないからなあ。

優れた技師さんとか見かけたら相談してみよ、と。

ギブルの攻撃をスレ助で防ぎ、左腕でアムダを殴り飛ばす。そのままギブルも吹っ飛ばす。

「だあーくそー!また負けたあー!」

「悔しいー!」

「今日はここまでにするか。今日もありがとな、三人共」

「明日こそはあんたを絶対にギャフンと言わせてやるうううう!!」

なんだ、その小物臭のする捨て台詞は。そういえばアルドニモーにいた頃もシヤナに毎日のように命狙われてたっけ、家の中にまで来た時はどうしようかと思っただけ。

「先生、俺らもつと強くなれますかね?」

「先生はやめないか。俺はそんな人に教えられるほどの実力者じゃねえぞ」

ここ数日こんな感じだ。ギブルとアムダから先生と呼ばれ、模擬戦をひたすらに繰り返している。アムダとギブルは一旦休憩を入れると演習室を出る。まあ、五時間近く動きっぱなしだったからなあ。お陰でスレ吉とスレ助とも息があつてきたし、熱感知の精度も上がってきた。

だけど、もつと遠くにまで範囲を広げられるようにならないとプラトーみたいな狙撃手に対応できるかわからない。

アステイに頼んでもいいんだけど、忙しそうだから頼むに頼めないんだよなあ。

「——ホクヤくーん、いるー? あ、いた! やっほー、ねえねえちよつと聞いて聞いて! ユウちゃんつたら射撃の腕がすごいよ、本当にもう百発百中でメインにしてないのがおかしいレベルで、私も頑張ってるんだけど中々勝てなくてさあ、でさでさ、これから一緒に訓練するんだけどホクヤ君も一緒にどう?」

「俺射撃は全然ダメだよ」

「ホ、ホクヤあ……」

あー、これはあちこち連れ回された感じだな。アステイめ、忙しそうだと思つてたら結構暇そうじゃないか。

ユウさんもお疲れ様、目えぐるぐる回しちやつてるよ。

「あ、そうだ！ホクヤ君のセフィックができたから持つてきたんだつた」

「そういえば採寸されてたな」

「もしかして忘れてた？」

「うん」

まあ、ここ最近合同演習とか作戦の細かな概要とかでてんやわんやしてたからなあ。アステイからセフィックの入った紙袋（これ、どつかのシヨツピングモールのものじゃん）を受け取り、とりあえず着てみようとして上着を脱ぐ。

「うっひよ、ホクヤ君いい筋肉してるねえ！」

「つつくなつつくな、地味に痛いから」

つつく、ユウさんはユウさんで顔そつぽ向かせてるし！あんた男でもあるんだから問題ないでしょうに！だから移動も面倒だからここで着替えてるのにさあ。

アステイ？最初から気にしない奴だつてこと知ってるから問題ない。だつてアス

ティだし。

なるほど、たしかにぴっちりしてる。それでいて妙な締め付け感はありません、寒くも暑くもないから本当に肌同然といったものに近いんだな。

「一体どんな素材で出来てるんだ？これ、伸び縮みもある程度可能とか、すごいな」

「ふっふっふっ、これこそがヒュミテクオリティってやつよ！我が星の技術力は宇宙一ってね！」

「やれやれ」

これで気の漏れがなくなるのか、自分じゃあまり実感湧かないなあ。

あ、そうだ、ユウさんがいたんだ。

「ユウさん、俺から気は感じる？」

「あ、着替え終わった？終わったよ、ね？」

「終わったよ、終わったから俺の質問に応えて！」

「う、うん、感じないよ、大丈夫」

「そ、そうですか」

どうやらフェバルにも効果はあるみたいだな。これはいい、今後も使う機会があるなら是非とも使っていきたい。

「うん、これでホクヤ君も作戦参加に問題はなくなったね！いやー、ギリギリだったから

焦ってたんだよね」

「あまりそんな風には見えないけどな。あ、そうだアス——」

ちよつと待て、そういえばユウさんも女の時は魔力メインで気がないんだつたよな。実際今でも感じられないし、それでさつきアステイが言うには射撃の腕に優れている…

「?どしたの、ホクヤ君?」

「アステイ、それとユウさん頼みがある」

「え、私も?」

こいつは中々ハードになりそうだが、いい訓練になりそうだ。

でも、ここまですりなきや意味がない。やるんなら徹底的に自分を追い込んでやる
!

「——ちよつと、俺を的にして撃つてくれない?」

テンション、上がってきた!

※

そういうわけでギースナトラ内で一番広い演習室に移動した。

俺とアステイにユウさん、マイナの変則性の一对三の訓練。

………ん？マイナ？

「えつと、一応私も銃にはそこそこ自信あるから、ホクヤさんって撃たれる趣味でもあるの？」

「ちよつと待て、どうしてそうなった」

原因はわかっている、多分アステイだ、いや、絶対アステイだ。

まあ、数が多いには越したことはないか。実際プラトー以外の狙撃手がいる可能性だって考えられるし。

「それで、ホクヤはどうしてこんな形で私達と？」

「話したかどうか忘れたけど、ディーレバツツのプラトーは狙撃手。ナトウラの狙撃手ってことで気による感知ができない。その対策で今からでも慣れておきたくて」

「な、なるほど」

納得してくれたのはいいけど、ユウさん引いてない？若干引いてるよね。

この演習場は屋外を模した構造だから物陰もあるし、足場も不安定、実戦に限りなく近い形での訓練ができる。

「で、ルールはどうするのホクヤ君」

「三人はとりあえずどつか適当なところに散って、二十秒経ったら開始ってことで、俺はそれまで動かずここにいます。それで、三人を見つけたら俺の勝ち、それまでに俺が一回

でも被弾すればアステイ達の勝ちだ」

「…… おやおや、舐められたものですね。私に対してそれは狙ってくださいって言ってるようなものだよ」

「その通りだよ」

むしろそれくらいの方がちょうどいい。どこから来るかわからない状況下で熱感知の精度を試すにはもってこいだ。

「…… やっぱリマゾ」

「じゃかましい！」

——そして、アステイ、マイナ、ユウさんはそれぞれ別方向に駆け出す。

うん、わかってたけど見事に気を感じることができない。

じゃあ、まずは熱感知の範囲を広げて三人の動きと位置を確認するか。

(一番近いところに一人、動きは止まらずに俺の様子を伺いながら動き続けている。後ろの物陰に一人、こっちは動かずか。そして、一番遠い感知がギリギリ届くところに一人。というか、この演習場マジで広いな)

あの時、プラトールと交えたときは普通に探知範囲内、飛んできた方向に絞ったのもあったためかもしれないけど普通に感じることできたし。

やっぱ無造作にすると範囲がかなり狭まるみたいだ。そろそろ二十秒か、三方向から

同時に飛んでくる可能性もあるから気をつけないとな。

——ここから一番近いところから射撃、これは多分ユウさん！早い、一発だけじゃない、銃口と銃弾の擦れる僅かな摩擦熱は感じられた。ていうか、あの人訓練用とはいえ結構ガチで狙ってきてやがる！

三発か、それぞれ右腕と心臓と左足。行動不能を狙った正確な射撃だ、ガンマニアのアステイが興奮するのわからない。

右足に重心をかけ、一番最初に飛んできた心臓部分の弾を次に飛んでくる右腕部分の標準をずらすために右腕で弾き落とし回避、最後の左足に飛んできたのは蹴り上げる。

一旦宙返りをする必要がある、か。まあ、この隙をわざわざ逃すなんてアステイはそんなことしない。だからこそ両腕に「テンション」を纏わせ、気爆の要領で爆発的に放させた気で後方にわざと吹っ飛ぶ。

このまま物陰に隠れて動きのないマイナを探してリタイアしてもらおう。

「——残念、私たちの勝ち」
「え？」

バン、と耳元で響いた銃声と腹に突き刺さる痛みは俺の負けを告げた。ユウさんが俺を撃つたことよって。

——ユウ、さん？まさか、あの距離を移動して追いついたのか!?

それとも、あらかじめ俺の行く先を予測して……

「ふふふ、私達の勝ちみたいだね〜」

「マイナ……まさか!？」

そっか、そういうことか!!

「最初にホクヤさんのこと撃つたの、私だよ」

「……なるほどね、ハンドガンを持つてて動き続けてたし、性格的にユウさんだと思いついでたよ」

「そういえばホクヤさんって私の雄姿あまり知らないんだったね」

アステイに銃技術をマイナが教えたとは聞いてたけど、いい腕だな。色んな意味で頷ける。

ユウさんのことだから短期決戦に持ち込むものだと思ってた。ここ数日の演習でこの人はそうしてる、自分が誰よりも先に前に出て必要最低限の力で敵を無力化する。心臓を狙ってた時点で気がつくべきだったかもしれないな。

アステイはやっぱ一番遠いところに行ってたか、息を切らしながら戻ってきやがった。

「私達の勝ちね!」

「そうだな」

今回の訓練で課題が見えた、熱感知はたしかに便利だけど特定の人物まで絞ることができないことだ。

ユウさんだと思つてた位置にマイナがいて、マイナだと思つてた位置にユウさんがいた。これが最初からわかつてれば俺は負けてなかった。

「三人共、あと何回か頼んでいいか？」

「もちろん！」

「私も動くので練習できるし！」

「私も、リハビリにはちょうどいいわ〜」

——この後熱中して十時間くらい変則ルールを設けながらただひたすら銃撃戦を繰り返した、眠い。

70. ホクヤ、リルナと対峙する

作戦決行まで残り二日。

俺はこの日簡単に変装し、セフィックを身につけた状態でディースナトウラを散歩することにした。

ユウさんは先日リルナと遭遇したらしいから誰かに話すと止められると思って押しに弱そうなユウさんを押しして押し出てきた。うん、後の作戦に支障が出るようなことはないだろう。

いつ撮られたかわからない手配書の写真とガラツと雰囲気を変えてみた、髪色だけは変えれなかったけどパツと見でバレることはないだろう、メガたんを装着するだけでも大分印象は変わると自負してる。実際ギースナトウラから出る時も誰も気がつかなかったし。まさか、夜逃げするために伝授してもらったドクタークレイジーの変装技術がこんな所で役に立つなんて思いもいなかった。

散歩と称した出歩きの目標は主に三つ。

一つはセフィックの性能を試す、ヒュミテ警報が鳴ってないからこれは成功したと

いつてもいい。

もう一つは敵情視察、実際に収容所に行ってみてどんな感じかだけでも把握しておいて損はないだろう。

あの時はゆつくり歩いて回ることはできなかつたからこそだけど、この街は本当に目まぐるしい発展を遂げている。科学技術や文明はもちろん、ここを歩いてる人たち皆がナトウラと呼ばれる機械人間なのだから。

かつてヒュミテが造つたとされるナトウラが今ではこの星の支配者、創造主を追いやって悠々と生活をしているのか。何とも滑稽な様だ、行き過ぎた科学技術が首を絞める結果になるとはまさにこのことだな。

「お兄さん、すまねえが第八街区つてどこにはどうやって行けばいいんだっけ？」

「ああ、それなら——」

よし、会話をしても怪しまれない。これで三人目だけど！

テオが囚われてる特別収容所のある第八街区、ここに初めて来て走り回つたときには近くまで行つたはずなんだけど、どうも思い出せない。

「——位置データを送つてやるよ」

「あー、すまねえ。今ちよつと調子が悪くて」

まさかの個人間のデータ交換かよ、さすが機械人間！

ナトウラの兄ちゃんは気前よく笑いながら「お前、まずはあんなところ行くより修理工場行けよ！」と背中をバシバシ叩かれる。

「つーな、あんなところに行つてどうするんだ？自首でもしに行くつもりか？」

「まさか、縁もない場所だからこそ見に行こうと思っただけだ。大した理由はない」「ふ、ハツハツハツハツハツ！あんな面白いな！そうだ、俺らはヒュミテでも不良品でもねえからたしかにあんなトコに縁はないわな！」

ん、不良品？

そんな機体もあるのか。てつきりこの高度文明の世界じゃ失敗なんてないように思えたけど。

もう少し情報が欲しいな。

「なあ、兄ちゃんが思う不良品ってどんなのだと思う？」

「お、そいつあなんだ？心理テストか」

「そうそう」

意外だ、心理テストなんて言葉がナトウラから出てくるのが。でもまあ、ここまで人間に近いんじゃないかと心も人間に近いんだらうなあ、すげえ再現率。

「そうだな、俺が思うに心を失った奴のことを言うんじゃないか？」

「心を？」

「そう、俺たちナトウラは心を持って互いに助け合って生きている。心がなけりやガラクタ同然、ブリキと同じってわけ、俺の持論だがな」

「……なるほどね、そこに当たり前だがヒユミテは入らないんだな」

「当然だ、奴らは害虫同然だからな。歴史がそれを証明している」

…… ナトウラの兄ちゃんは愉快に豪話する、歴史か。

どうにも引つかかるけど、これ以上詮索してもいいものか。あまり身勝手に動いてギースナトウラの方に何らかしらの悪影響が及んではダメだ。

だけど、ちょっと気になることではある。ユウさんと話して違和感は解消されるどころか余計に霧が掛かってしまってる。

「歴史、か」

「どうかしたのか？」

「いや、あんたは歴史に疑問を持ったことはないか？二千年よりも前の歴史に空白になってる部分があることについて」

「それは、まあ、そうだな」

何せ旧世代の遺産であるノートパソコンにすらその歴史は記されていない。

考古学者といった過去の出来事を調査する職も存在しない。これはあまりにも不自然だ、これだけの文明のある世界にとっては余計に。

「…… あんま考えたことなかったな、それが当たり前だと思ってたからよ」

「そんなものなんだな」

「おうよ、ちよつと中央図書館にでも行ってみるか。ついでに第八街区まで案内してやるよ、おつと、その前に修理工場だったか？」

「ハハ、行きつけがあるからまた後で行くよ」

「そうか、それじゃ——」

「…… おい、兄ちゃん？」

なんだ、この不自然な言葉の止まり方は。それだけじゃない、どこか目が虚ろになつてゐる。

「…… 悪い、用事思い出しちゃった。失礼させてもらうわ」

「お、おう」

頭を抑えながら兄ちゃんは足早に去つていく。さつきと違ってどこか無機質で冷たい声だった、人つてあそこまで声変わるものなんだな。

振り出しに戻ったけど、あれから適当な二人のナトウラに声をかけて会話をしてみた。歴史関連の話題は極力避けながら、もしかしたら二千年前の空白の時代に触れてはいけないのかもしれない。そんな気がしたから。

そんな感じで仲良くなったカルハツタという機体名を持つナトウラに第八街区まで

案内してもらって、さつき別れた。

ここが特別収容所、結構デカイな。当たり前だが周囲は壁で囲まれてる。あの程度なら飛び越えられそうだ。

この中のどこかにテオがいるのか、気は微弱なせいか、それとも中から何か阻害されてるのかわからないが感じられない。

それにしてもわからないな、何故テオは捕らえられてるんだ？

クルトーリア、厳密には俺を狙ってきたプラトーは容赦なくヒュミテ達を狙撃して殺そうとしていた。先日アマレウムで起こったテロでもヒュミテ達は容赦なくその場で惨殺されたと聞く。ならば、テオもその場で殺されてもいてもおかしくない。ヒュミテの王ならば尚更、わざわざ捕らえて処刑まで大々的に行うなんて、まるで俺たちを――

いや、まさかな。あり得ない話じゃない。なら、どうする？俺が先陣を切るか？武器は、一応あるにはある。

……… うし、悩むのは俺の性に合わねえや。

時間帯は、もうすぐ夕方か。悪いじかんじゃない。

とりあえず、無線で、と。

『もしもし、ホクヤ？今どこにいるの？』

「あ、ユウさん。ウイリアム達に悪いって言っといてくれ」

『え、何？ちよ、どうい——』

——さて、いつちよ暴れるか！

【テンション】!!

※

「ホクヤ!?ホクヤー!?!」

無線に反応はない、恐らく一方的に用件だけ伝えるだけ伝えられて切られた。

「ユウちゃん?どしたの?」

「アステイ!いや、なんかホクヤが皆に悪いって言っといといてくれて、なんか、ええ!?!」

「落ち着いて、いいから落ち着いてゆっくり話して!」

※

デイクラン本部。

リルナとプラトーの二人がそれぞれの武器を磨いてると、警報が鳴り響く。

この鳴り方はヒュミテが出現した時に鳴るものだ。

「ヒュミテか」

「最近多いな、お前の取り逃がした奴といひメノ部族の男といひ……」

「そうだな、命知らずの馬鹿が増えたんだろ」

現在、他のディーレバツツの面々はエネルギーを充填させるために眠っている。動けるのはリルナとプラトーのみだが、この二人だけでも十分な戦力だ。並大抵の相手に負けることはないだろう。

「プラトーはエネルギーを充填しといてくれ、ここは私一人で行く」

リルナは戦闘準備を整え、愛車である水色のオープンカーの置いてある倉庫へ向かう。途中、ディークラン職員が何人か敬礼をしていた。

「場所と数は？」

「第八街区特別収容所付近、数は一人です！」

「二人だと？」

まさか、とは思った。あのヒュミテ、ユウが再び現れた。そう考えたリルナの殺気は凄まじいものへと変化した。

——今度こそ、その首刎ねてやるッ！

「り、リルナ隊長……!?!」

「リルナで構わん、私一人で行く。警報は止めておけ、耳障りだ」

「は、はひいー！」

※

思つたよりも簡単に侵入できたな。いや、これは正面突破つて言うのが正解かな。派手に暴れることで注意がこつちに移る、単独犯による行動つてのも含めてルナトープの奴らの作業とは思わない。もし、テオを餌にレジスタンスを一網打尽にするつていう策ならここで俺がテオを救出して終わりだ。

「侵入者だー！」

「捕らえろー！」

「いや、あいつはヒュミテだ！殺せ！！」

「狙いはおそらくテオだ、先へ行か——」

峰打だ、勘弁しろよ。

とは言つてもスレイスに峰も何も無いんだけどな、両刃だし。

ユウさんの甘つちよろい考えに賛同するわけじゃないけど、俺も極力殺しはしたくないからな。この程度の連中は動けなくするだけでいいだろ。足と手を切ればそれで行動不能だ。

ウィリアムからもらった資料と大きく差異はないけど、カメラの位置までは把握でき

てないみたいだな。あとはギミック、時折ある壁やら何やら迷路のようなこの收容所においては何介だ。壁の操作も自由みたいだけど、俺にはあまり関係ない。殴って終わりだ。

……ご丁寧に階段を探すのも面倒になってきたな、ここは一気にテオだと思われる気が感じる下層まで一気に移動するか。

——気震！

すまんないークランの皆さん、一緒に落下してくれ。

フロアブチ抜きはなるべくしたくなかったけど、面倒になってしまつては仕方ない。

それにしても、いくらなんでも警備が手薄な気がする、いや、むしろ警備員がこれだけ湧いてくる方が異常なのか？

事前に予想してないといけないことだ、テオの処刑前だからといってここまで兵を配備する意味はない。

念には念を込めてるのか、それとも何か別の理由があるのか。

微かに感じる気を頼りに移動しているとナトウラ達の熱気がどんどん引いている。

これは、撤退しているのか？

代わりにやつて来た一つの熱気と凄まじいまでの殺気が目の前に現れた。

「——ほう、ユウではなかったか」

ガシヤン、ガシヤン、と金属音が鳴る。水色の髪を揺らしながら悪魔のような形相で歩み寄ってくる。

「——だが、ここまで派手に暴れておいて、生きて帰れると思うなよ」

直感が告げてる、この女強い。

多分こいつがディーレバツツ隊長のリルナって女だ。さつきまで周りにいた連中はここから退避してたつてわけか、巻き添えをくらわないように。

なるほど、ユウさんやルナトープの連中が手を焼くわけだ。

「奇襲をかけたつもりだったんだが、思ったより早く来やがったな」

「フン、貴様らヒュミテとはスペックが違う」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

次に返ってきたのは言葉じゃなくて剣、か。これ以上言葉をかかわす意味は無いということか、上等だ。

コイツをここで抑えて行動不能にしてしまえば俺も動きやすい。テオを連れ出して、撒きながら逃げるのはさすがに苦勞するな。多分師匠クラスの実力者だ、力を抑えたまままで勝てる見込みは薄い。あまりフェバルの能力は使うまいと思っていたが、仕方ないな。

「貴様の首、もらおう」

「やってみろよ」

リルナの二刀がそれぞれ急所に迫る。かなり正確だ、しかも素早い！けど、対処できないスピードじゃない。

【テンション】で身体能力を底上げし、リルナの乱舞を受け流し蹴りを入れる。

ん、なんか感触が妙だな。水色のドーム状の膜がリルナの周囲にうつすらと見える。バリアみたいなものか。ならば——ツ！

「なッ……！」

「お、おお、りや!!」

——そのまま、蹴り飛ばす!!

71. ONE MINUTE AND A HALF BATTLE

リルナは焦っていた。

絶対的信頼を寄せていたバリア防壁による防御機能ティートレスを展開した状態で蹴り飛ばされたのはもちろん、一瞬でも敵わないかもしれないと思ってしまった。

収容所にやって来てリルナが一番最初に見たものは、まるで大爆発でも起こったかのような酷い有様だった。地面は抉れ、建物の方は目に見える範囲でほぼ全壊。中に入れば派手にあちこちが破壊された跡、テールボムをいくつも所持してるものだと思っていた。

これだけ派手な破壊活動を行なっていれば追跡は楽だ、ましてやフロア一つに大きな穴が空いてるなど普通はありえない。

そこでリルナが見た男の姿、いやあまりにも丸腰だったので驚いた。眼鏡をし、全身を纏う腰まであるロングコートを纏った白髪の男が目で見える武器は二つのスレイスのみ。

意中のターゲットであるユウでないこと、先ほどインクリアの応酬を丁寧に捌かれたこと、そして、止めに展開したデイトレスごとリルナの体を吹き飛ばした異常なまでの脚力。

「――衝撃までを殺すことはできなかつたか、まさかこの男それを今のやり取りだけで見抜いたというのか!？」

物理攻撃、気といった生命エネルギーをも掻き消すバリアだが、そういった性質をも「テンション」で一時的に無効化されたことを二人は知る由もない。それでも、リルナの中でホクヤに対する危険度、最優先抹殺対象へと切り替えられた。

――この男は危険すぎる！

「――戦闘レベル上昇、バスタートライヴモードに移行」

そう判断したリルナの対応は素早かつた。彼女が最も得意としてるショートワープであるパストライヴを使ったヒットアンドアウェイによる戦法、一時的に身体機能を底上げる、いわゆるドーピングのような機能を発動し、ホクヤの急所を狙いに行く。

さっきの剣撃とは一味違う。筋力も増強されたことでインクリアを振るう力も上昇している。

――リルナの一撃はホクヤの頬を掠め、一つの傷を入れた。

(馬鹿、な……!?!避けられ、た、だど!?!)

一瞬の動揺、それでもリルナはコンマ一秒という世界の中で思考を働かせ冷静になり、次の動きに繋げる。

もう一撃、もう片方のインクリアを振るうが、警戒されたホクヤにあっさり回避される。避けられる可能性が高いと悟っていたリルナの次は早かったが、それはホクヤも同様であった。異常なまでの速度の上昇に反応が遅れただけであり、その領域に到達できないわけではない。

リルナはパストライヴをもう一度発動し、次は左横からホクヤの脚を狙う。

一撃で仕留められない、ならば、まずは動きを止めてしまおうと判断した。

対するホクヤは「テンション」の出力を上げ、身体の絶対能力を上昇させる。そして、リルナから発せられる熱気を追いかけて、両腕を構え、撃つ手前に移行する。

一瞬、ホクヤはパストライヴによる瞬間移動の移動先への対応が遅れる。そう、移動する瞬間は目で捉えられている。空間から空間への移動は第六感で感じる僅かな違和感を頼りに遅れながらも反応した。

リルナのインクリアが迫る、狙うは首ではなく左脚。ホクヤはそのことに気がついてなかったが、ここで無意識に行ってきたモーションがホクヤを助けた。

右脚を軸に左脚を下げることでリルナの一撃を紙一重で回避したのだ、そして両腕をリルナの体に近づける。

まだ十秒も経ってない超速度の領域でもリルナのデイトレスは正常に作動した。ホクヤの両の掌から放たれた掌底は弾かれることなく、形としてデイトレスに触れることになった。

——気震掌底!!

「——ッ、が!？」

「ぬお!？」

ホクヤとリルナの身体が衝撃で吹き飛ぶ。リルナがバスタートライヴモードを発動してから六秒ちよつと。

この僅かな攻防の間にリルナはまたもダメージを負うことになった。

「く、そー」

僅かな時間とはいえ、バスタートライヴモードを使用したエネルギーの消費は激しい。撤退することも考えたが、ここでテオが解放されてしまえばこちらとしても都合が悪い。百機議会の堅物達に何を言われるかわかったものじゃない。

ならば、せめてあの男の首を取る。パーツのダメージが軽いことが幸いしている。まだ十分に戦える!

「チッ」

気がつけばホクヤも立ち上がっていた。ロングコートを脱ぎ腰に巻き、眼鏡を外し、

結んでいた髪も解いて。

その顔を見た瞬間、リルナは彼がプラトールが執拗に拘っている男、ホクヤだということで初めて気がついたのだった。

「貴様、ホクヤ・フェルダントだったのか」

「あん？俺の名前知ってる、ってことはやつぱあんたはリルナか」

どうやら向こうもこちらを知っていた、それもそうかとリルナは納得する。逆に知られてないこと自体が不自然だ、ユウのような存在でなければあり得ないことである。

「それにしても、あんた思ったより強いな。テンション上がってきたわ」

「フン、貴様こそ雑魚かと思つたがプラトールが気に入ってるだけあるようだな」

「…… なに、俺プラトールに気に入られてんの？」

「必ずこの手で殺してやると銃を磨いていたよ」

「勘弁してくれ」

全くだ、あのしつこいプラトールに気に入られるなんてこの男も災難である。

「——で、まだやんの？」

「当たり前だ。ユウを殺す準備運動にさせてもらおう」

「…… ユウさんは殺させねえよ」

おっと、私としたことが。リルナは思いの外会話を楽しんでしまったことに悪態を吐

き、パストライブでホクヤに急接近する。

そのままインクリアを振るうが、ホクヤに致命傷を与えられる様子はない。

対するホクヤは脚技で器用に攻撃をしていくが、大半の攻撃はディートレスによつて無効化されていく。

お互いに罅が明かないまま攻防戦が続いていく。時折パストライブを使つた不意打ちを狙いもするが、頬に与えた傷以外増やすことができない。

セルファンオンを使うことも考えたが、この男のスピードならばチャージ中に避けられてしまう。

——ならば、とパストライブでホクヤの背後に移動し瞬時に代用の効く自慢の機能の一つを躊躇うことなく発動する。

「——フレイザー」
「!?!」

広範囲銃撃攻撃フレイザー。

全身から光弾を放出するリルナに備え付けられた機能の一つ。普段ならば味方のことも考えて使用は控えてるが、今は単独行動だ。何の遠慮もなく放てる。

(この数の攻撃を、避けれるものなら避けてみせろ！)

パストライブで急接近してからのフレイザーだ、並の達人でも避けることは困難だ。

リルナも同じ手をやられてしまえば、必ず回避できる保証はない。

——故にホクヤのいた箇所の床に穴が空いていることに気がつくことが遅れてしまった。

「しまった！」

我ながら熱くなりすぎたかもしれない。フレイザーは全角度に攻撃を放つ超広範囲攻撃だ。しかし、同時にリルナ自身の視界を遮ることに繋がる。

これを読んでいたのか、いや、だがそれではまるでホクヤがリルナの機能を知っていたかのようなだ。それはない。

「……油断ならんな、あの男」

ホクヤの目標はあくまでもテオの救出。リルナと戦うことが目的でない。

もし、リルナが逆の立場であっても同じようなことはした。

ホクヤが特別なのではない、こんな当たり前のことを忘れてしまっていたリルナの失態だ。

今から追えばまだ間に合う、セフィックを身につけているのか生命エネルギーは感じられなかった。

——構うものか、テオが目的ならばそこで待ち伏せしておけばいい。

リルナは残ったエネルギーのことを考えながら、テオの収容されているフロアへと向

かった。

仮にホクヤが収容所内の地理を知っていたとしても隠し通路の類等は知られていないはず。

リルナが先に到達できる可能性は十分にあり得る。もし、万が一ホクヤが到達しなかったにしても、テオの処刑は近い。今更この手で殺してしまっても何の問題もない。

——この時、リルナは僅かに頬を緩めていたが本人が気がつくことはなかった。

7 2. 深読み

…… あ、危なかった。なんか、色々危なかった。

ユウさんが手を焼いた理由が本当の意味でわかった、あれはバケモノだ。思わずアレを使つて街を壊してしまう勢いで戦つて、圧勝できるレベル。

フェバルとしての恩恵がなかったら七回くらい死んでたな。あのフレイザーつてのを避けるのにもフェバルじゃなかったら死んでたし。

脇腹に一発直撃はちよつと痛いなあ、そいつを弾いて上の階に一旦回避できた。こつから奇襲をかけるつもりだったけど、どうやらあの跳んだときの衝撃で空いた穴から俺が下に行つたと思ひ込んでそこに行つてくれたからそんなことする必要はなくなった。

ダメージは少ない、左頬の傷と脇腹に光弾一発。どうとでもなる、逃げる必要はないけど、対策は練りたいな。

可能ならユウさんに一回無線飛ば………こ、粉々になつとる!?

そうか! あのととき壁に思いつきりぶつかったときに!

…… よし、とりあえずテオを救出した後、どうやってリルナを撒いてギースナトウ

なんか、デジヤブを感じるから！

で、こいつらはここの囚人って解釈でいいんだよな。さつき脱獄とかどうとかほざいてたし。

ヒュミテとナトウラに老若男女と統一感はずゼロ、歪み合ってる様子はない。

「ていうか、俺はこんなところでじつとしてる場合じゃねえんだよ。早いとこテオをここから連れ出さないと」

「何!?!テオだと!?!」

「声がデカイっての!!」

本当にリルナが戻ってきたらどうすんだよ、めんどくさい！

「ああ、すまん、ていうかあんた名前は？」

「……ホクヤだ」

「ホクヤの兄貴か、うし、覚えた！俺はパルナド！クリムゾンファミリーの副団長だ！」
覚えなくていいよ、なんかめっちゃ暑苦しいなこの人。ていうかなんなの、なんで俺アルドニモーの時といい囚人さんやら賊とかいったそういう輩に好かれる傾向にあるの、人相が悪いせいなのか？

「まあ、なんだ、脱獄なら勝手にやってくれよ。テオの処刑まで日も少ないしリルナのこともある、先を急いでるんだ」

「だったら協力させてくれ！俺たちだってテオルグント様には世話になった身なんだ！」

「それにここは地下一階、もう二つ下に行けばテオのいるフロアに辿り着くわ」

なるほど、ということとはさつきリルナとドンパチやつてたフロアの一つ下に行きさえすれば辿り着くつてことか。

「その情報さえありや助かるぜ、じゃあな！脱獄頑張れよ！」

「お供しますわ！」

「いらん!!」

※

一方、地下三階へと辿り着いたリルナは件の人物、テオルグント・ルナ・トゥリオールムと向かい合っていた。

特に意味はない、あの男、ホクヤが単身で乗り込んできて助けようとしている人物を改めて一目見ておこうと思っただけ、ほんの気まぐれである。

「……まさか、ディーレバツツの隊長さんがここに来るなんてね。ああ、僕の目はいよいよおかしくなったのかな」

「ほう、まだ言葉を出すだけの体力が残っていたか」

「暗がりでは顔はよく見えないが、テオの表情は決して絶望に押しつぶされたものではない。声にもまだ気力が残っているようにも聞こえる。」

「なにか、用かい？」

「口には気をつける、その気になればいつでもその首を刎ねれる」

「…… なら、聞かせてくれ。僕が死ぬ前に君の意見も聞きたい」

リルナは不機嫌そうに眉をひそめるがテオにはそのわずかな表情の変化を捉えることができなかったのか、言葉が続ける。

それでもリルナが剣を構えなかったのは、ほんの気まぐれである、戯言として流してもいいと大した興味を持つこともなかったためである。

話など聞くつもりはなかった。

「歴史は、ヒュミテとナトゥラの歪み合いは長いこと続いてきているが、本当に正しいのか」

「……」

「互いに違う歴史を教わり、互いに恨み合うかのように仕向けられたこんな世界、こんな状況は本当に、僕たちはこの世界で生きてるって言えるんだろうか」

「…… 違う歴史、だと？」

戯言を、と一瞥するつもりだったがそうしなかったのはリルナにも心当たりがあった

からである。

今まで殺してきたヒュミテの言葉は一々覚えていない。しかし、彼らが繰り返している。今までの言葉は嫌でも反復的に記憶に残っている。

自分の知っている歴史と、ナトウラがヒュミテに蔑まれてきた歴史と若干だが差異があった。どうせヒュミテが捏造してきた悲劇のストーリーだと思っていたが、いくつか辻褄が合わない点に疑問を感じたことはあった。

「君も、ナトウラを正しい方向に導く立場のある者なら、き——ッ!?」

「——黙れ」

テオの言葉は続かなかつた。リルナがインクリアを握りテオの首筋に当てたからである。

あと数ミリ、リルナがインクリアを動かせばテオの首に傷が入り、また力も入るとそれこそテオの首が宙を舞うだろう。

「——忘れるな、私には貴様の首を斬り飛ばすことができることをな」

「……ッ！」

「その崇高な考えは貴様を助けようと奮闘してるあの男に聞かせてやるといい」

リルナはテオに背を向けてその場に座り込む。今顔を見れば本気でその首を刎ねてしまいたい。それでも構いはしないが、どうせなら奴の目の前でやったほうがいいだ

ろう。

一瞬感じた頭痛に苛立ちながら、インクリアを仕舞う。

彼女の中でさっきまでの会話はもう遠い存在となっていた。今あるのはヒュミテに對する殺意、自らがヒュミテを殺すのだという使命感だけであった。

※

無線でホクヤから連絡（？）があつてから三十分。慌てふためいたユウを落ち着けたアステイは今回のホクヤの奇行は何か意味があると信じていた。

ついさつき、特別収容所でヒュミテの侵入者が現れたという情報が入ってきた。一度鳴った警報がすぐに止んだ時はすぐに片がついたから、そう思っていたがどうやら違うらしい。

現在、ユウの部屋で緊急会議が開かれており、今後のことを話し始めてから既に十分が経っていた。

部屋にいるのはユウ、アステイ、ウイリアム、クティン、レミの五人だ。

「——やっぱり何回試しても反応がないってことはセフィックを着てるんでしょうね、あの馬鹿。それか収容所内に何らかの作用があるのかしら？」

「でも、テオの反応はあつたんだろ？それだつたらおかしい」

「そうなのよねえ」

レミが爪を噛みながら苛立ったような調子の声を出す。感知機能の故障、ということはないはずだ。

「それでウイリアム、彼に本当に何か考えがある、と？」

「ああ、意図は一切読めないが何かあるはずだ。そうでなければホクヤ君があんな大胆な、我々に相談なしでやるなんてあり得ないからね」

「私もそう、思いたい」

ユウは知っている。

ホクヤもあの未知数で馬鹿みたいな力を振りかざすフェバルの一人であることを。

能力は結局教えてくれなかったが、雰囲気は自分とは明らかに違った。どこか達観した、それこそ幾度も修羅場を潜り抜けてきたかのような戦士の庄。

「だけど、その意図というのは一体なんなのか。メッセージでもあればいいんだが、無線は？」

「繋がらない」

「……やはり電波は遮断されてるか」

ウイリアムが一通り悩み、埒があかないと判断したのか。

ゆつくりと立ち上がり、研ぎ澄まされた刃物のような雰囲気を身に纏う。

「——私も行こう、テオの元へ」

「隊長ストーツプ！なんでそうなるのさ!?!」

「止めるなアステイ、大丈夫、必ず帰る！」

「それ帰ってこれないやつだから！それなら私もついて行くから！」

「だが、まだ日は暮れたばかりだし人数は少ないほうがいい」

ホクヤは強い。

もしかしたらテオを救出して何食わぬ顔で戻ってくるかもしれない。

だが、相手にはあのリルナが、他にもディーレバツツと呼ばれる特殊部隊が存在する。いくらフェバルといえど、彼らを相手にしながらの逃亡は容易ではない。

なら、自分はどうするべきか。仮にホクヤが戻ってきたと考えると、それから——

(…… あっ)

—— そうだ、もし、ホクヤが一人でテオ救出へ先走った理由がこちらへの注意を逸らすことだとしたら？

そうだとしたら……

「ウイリアムさん、私も、連れて行ってください！特別収容所へ！」

「ユウちゃん!?!」

「ユウ君……」

そう、ここにいる人達に新たな逃亡先へ、つまり次なる目的地メーヴアを目指してもらう。

それから自分たちはホクヤを連れて合流する、もちろん敵に気づかれないように。だからこそ、このことをウイリアムに伝える必要がある。

「ウイリアムさん、私もしかしたらホクヤの意図がわかったかもしれません」

——これで、少しでもいい方向に進むといいけど。

73. 左目

「——彼らが動き始めました、ええ、テオのところに移動しています」

『そうか、数は？』

「四人」

『そうか、ご苦労、また何かあればこちらから連絡する。それまでそこで待機してろ』

「了解しました」

『報告も怠らないようにな、頼んだぞ』

「仰せのままに」

※

——リルナの目がゆっくりと開かれる。体の調子を確認するために、節々をゆっくりと動かす。

本来ならばそんなことをせずにパストライヴで目の前に現れた男、ホクヤに奇襲を仕掛けたところだが、無闇に近づいたところで必ず勝てるとも限らない。

「随分と遅かったな、退屈したぞ」

「そつちこそ、まさか律儀に待つてるなんざ思いもしなかったぜ」

「貴様の目の前でこいつを殺すことに意義がありそうだったからな、お前が助けようとしてゐる者の首を刎ねるならばギャラリーは必要だろう？」

「……その人がテオ、か。中々趣味の悪い女だ、モテないぞ」

「ぬかせ」

——違和感、リルナはこの一連の会話の中で一つ大きな違和感を感じていた。ここまで会話が続いたことでも互いに仕掛け始めないことでもない。

(この男、テオの顔を知らなかった……?)

テオはヒュミテの王だ。

詳しくは知らないがヒュミテ内において友好的な王であり、まさか顔を知らない者がいるなんて思いもしなかったのだ。

そうだ、ヒュミテでこれほどの実力者であるなら今までどこかで巡り会い殺し合いを一度や二度していてもおかしくない。ユウもそうだ、あんな男がいるなんて今の今まで知らなかった。

同胞の危機に駆けつけずに身を隠していたのか、敵ながら軽蔑の念を抱く。

今、ここで首を斬ってしまえばそんなことはどうでもいい、か。

両手にインクリアを展開する。奴の戦法はさつきの一戦で大体わかった。

蹴りを主体とした格闘スタイル、接近戦をメインとしており、遠距離での攻撃手法はほぼ皆無。

正方法で近づけたとしても、勝てる見込みは五分と五分。いや、負ける可能性の方が高いかもしれない。

——ならば、先にテオの首から刎ねさせてもらおう。

「ッー！」

「——もらったー！」

パストライヴでテオの背後に移動し首元に向けてインクリアを振るう。

「くそー！」

距離はある、接近してくる前に斬り飛ば——

「ぐあー!？」

——今のは、私の、声？

「——感謝するぜ、師匠」

遅れて痛みがやってくる。ホクヤは、動いていない。

まさか、あの距離から攻撃を？まるで殴られたような、ホクヤも何かを殴ったような姿勢になっている。

何を殴ったのだ？

それはリルナ自身もわかっている、リルナが殴られたのだ。

——パストライヴ。

だが、いつまでも驚いてられない。テオは後だ。やはり、まずはこの男を先に葬る！
フレイザーは放つのにエネルギーが足りない、セルフアノンもチャージ中に攻撃されれば終わりだ。

やはり、接近戦で斬り刻むしかなさそうだ。

ホクヤの脚とリルナのインクリアが何度も何度もぶつかり合い、火花が散る。普段は静寂が支配しているフロアに音が響き渡る。

レーザーブレードであるインクリアは物理的な破壊は不可能である。だからこそリルナは絶対的な信頼を持ってどんな硬いターゲットにも斬り込み、例えば攻撃が来たとしてもディートレスでの自動防御がある。

これ以上前線に向いている装備があるだろうか、ヒュミテを倒しナトウラを勝利へと導く戦士としての機能。

リルナは名も知らぬ製作者に感謝しながら、パストライヴでホクヤの死角に潜り込みながら斬りつけていく。

(やはり、この男勘がいい。戦闘慣れしている)

死角からの攻撃にも対処が早いのだ。反応速度はもちろん、それに見合った実力がある。

リルナは柄にもなく楽しくなってきた、相手はヒュミテ。倒すべき存在、害虫のような嫌悪感を抱くべき相手であるはずなのに。

今までリルナが誰かところこまで互角に渡り合うということをしてなかった経験の少なさから湧き上がってきた感情なのかもしれない。

——しかし、唐突に憎悪は訪れる。やはりヒュミテ、楽しいには楽しいが、それ以上の恨みがある。

「——殺す」

「物騒な奴だ」

バチィィィ、と本来スレイス同士で激突したときの音が鳴り響く。

しかし、この場においてら片や熱の籠った左脚、片やスレイスのようなレーザーブレードをも斬ることを可能とするインクリア。

その激突の合間を縫うかのように一筋の光線が飛来する。

「ッ!?!」

「なんだ!?!」

咄嗟に反応したホクヤが後方へ回避する。そう、正確には間ではなくホクヤに対して

放たれた一撃。

これほどまでに正確な射撃を行える光線使いをリルナは一人しか知らない。

「プラトール!?!」

「よう、遅くなつた」

右腕にスナイパーライフルを取り付けた中年様相の銀髪の男がデートに遅れたかのように軽い調子で現れた。

「プラトール、だど?」

「な、何故お前がここに!?!」

「加勢に来たんだ、その前にそいつは俺のターゲットだしな。また会ったな、メノ部族の男」

プラトールはリルナの元までゆつくりと歩を進める。薄気味悪い笑みを浮かべながら、テオのいた檻へ目を向ける。

「——他のディーレバツツのエネルギー補充完了まであと、30分だ。それまでに奴を止めておけばいいだろうが、お前が目の敵にしているユウも動き出している」

「何!?!」

「お前が奴に気を取られてるうちにテオが消えてるのも証拠だ。だから、奴は囷だ。単身突入してきたと見せかけてたのさ」

「星の旅人、メノ部族、まさかこの二つを兼ね備えた男がここにやって来るとはな」
「おま、なんで、そのことも!?!」

片目を貫かれた痛みは全身を駆け巡り、ホクヤから冷静さを奪っていた。

やはりプラトー、この男は全てを知っていると悟った。同時にプラトーとは何者なのか、この世界は何なのかホクヤが聞くべき質問がどつと増えることになった。

「——もう一つ、教えてやろう。貴様らルナトープの中に俺と通じてる内通者がいる、貴様らの行動は筒抜けだ」

74. その返り血は誰が為に

「……ここは？」

「テオさん！目え覚ましたか、よかったです！」

「バルナド！王様の意識が戻った！」

朦朧とした意識でゆっくり目を開けたテオの周りには見知った顔もいれば、初めて見る顔もいた。

見知った顔はもう既に死んだと思つてた者たちばかり、ここはもう死の世界、つまりテオは死んだのかと悟つた。

「テオ！良かった、意識が戻つて！」

「バル、ナド？久しぶりだね、僕は、死んだのか？」

「馬鹿なこと言つてんじゃねえツスよ！ホクヤの兄貴が体張つて助けてくれたんだから！」

ホクヤ、そういえばリルナと対峙していた男の名前だ。辛うじてあつた意識下で一番最近聞いた男の名前。

まさか、自分の知らぬヒュミテであればどの強者がいるなんて思いもしなかった。

「へへ、俺たちが脱獄できたのもホクヤの兄貴のお陰だ！このまま外を目指すぞ！ピスケス、次はどっちだ!?!」

「このまま真つ直ぐよ、地上に繋がってるエレベーターがあるわ」

「あなたは、まさか、ナトウラ!?!」

「そうよ、不満?」

バルナドと同じ囚人服を着た女性が明らかになふくれつ面をする。

「いや、そういうわけじゃなくて」

「まあ、驚くのも無理ないッス。この人元々この警備員で中の構造には滅法詳しい人なんですよ!」

「……そう、じゃなくて」

まさか、ヒュミテとナトウラがこんな風に会話してるなんて。

殺伐とした様子もなく、お互いに仲間であると信頼し合っている。

テオはそのことに戸惑いと感動を覚えた。

(近い未来、こんな景色が一般的になればどれだけいいことか)

「……よ、この荷物運搬用の大型リフトに乗って全員で外へ一気に行く」

ピスケスが手慣れたようにボタンを操作する。ヒュミテ感知センサーにも反応しな

い彼女はとても心強い、バルナドが信頼を置いてるのもよくわかる。

「そういえば、僕たちにセンサーが反応してないけど」

「ああ、それはこの囚人服のお陰ツス！何でかわかんないですけど、こいつはセフィックと同じ素材で作られてるんですよ！」

「まあ、この特別収容所は何故か脱獄犯よりも外部からの侵入対策の方が強いからね。監獄内で間違つて囚人でセンサーに反応しないための仕様よ」

テオは何故自分がここに収容されたのか納得がいった。同時に彼の収容されていたフロアにはセンサーがない、つまりあそこまで侵入者が辿り着くことを想定していない、否、辿り着かせないと言つた方が正しいのかもしれない。

ポーン！とリフトが到着し扉がゆっくりと開く。

——そのリフトの中央にはリルナが静かに佇んでいた。

※

「内通者、だど？」

——左目を潰された。

そのことを確認するまで時間はいらなかった。眼球弾け飛んだし。

プラトローはまだ何か話すつもりなのか、急いでリルナを追いたいところだが、今は左

目だったところの止血が先だ。どこを刺激すれば血が止まり、治りが早いかは大体わかる。頭蓋骨を貫通しなくてよかった。

「そうだ、貴様が今所属してるレジスタンスグループ、ルナトープだったか？そのメンバーの一人から定期的に報告を受けているのさ」

「……いいの、か？俺にそんなこと言つてよ」

「——ああ、貴様を帰すつもりはないからな」

——だと思つたよ、コンチクシヨウ！

左目の止血はまだ時間がかかりそうだ、視神経は完全に死んでるから左側が全く見えない。

それを知つてか、プラトーは俺の左側へわざわざ移動してそこから攻撃を飛ばしてきやがる。

クソ！痛みのでいで「テンション」が上がらねえ、中途半端に熱ばつか出てきやがる！入り口で思いつきり出したつもりだったんだが、やっぱり使いすぎたか！

幸い、熱感知はまだ生きている。プラトーが撃った弾に熱は籠つてる。

——三発。

それぞれ頭、首、足を狙つてきてる。ああ、こんな時にリルナのパストライヴ使えたら便利なんだろうけどな。

気震気声！

周音波による振動破壊！俺が使える攻撃の中で一番範囲の広いやつ！

「ぐ、あ?！」

うし、ちゃんと効いてるな！

プラトーのさっきの言い分から、テオは既にあいつらが連れ出した。それなら俺がやるべきことはリルナを止めること、そして俺自身の安全確保だ。

多分だが、あいつらにリルナを止めることはできない。せめて足と手を破壊できればいいんだが…

(左目が潰されて視界がハッキリしない今、あいつと戦えるのか?)

けど、戦わなければならぬ！

脚に気を纏わせ、上階へと移動する。目の止血に気を使っているせいか、それともこの世界の許容性の低さのせいかわからない。いざつて時に気が思ったよりも外に出すことができない。

プラトーの体に何か異常が起こったのか、動く様子はない。

と、最後のダメ押しだ！まだ力は少しだけなら残ってる！

体の何百倍もの瓦礫を上からプラトーに向けて投げつけた。

(ダメだ、血を、流しすぎた。気も「テンション」も、使いすぎた、か。これ、以上は……)

※

ホクヤからの連絡があつてから四十二分。

ユウとアステイ、ウィリアム、デビットは第八街区の特別収容所に辿り着いていた。

ユウは男になり、内部の情報を探ろうと気を探知しようとするが、ほとんどの気が感じることができない。

「……ここからじゃ中の様子がわからない。やつぱり中に行くしか」

「待て、あの水色の車はリルナの乗っているモノだ。つまり、あいつもここに来ている！」

一階部分が焼け爛れ、それでいてとんでもない重量の弾が撃ち込まれたようになっていた。大地は削れており、とてもではないが何をどうしたらあんなことになるかわからない状態だった。

ユウは即座にホクヤがやったと確信を持つことができた。

「それでも、行かなきゃ！」

「待てユウ。一人で行つても危険なだけだ、もしホクヤが本当に中で暴れてるなら尚更な」

「でも……」

「時間がないことはわかっている、だが、遅かれ早かれ俺たちは乗り込むつもりだったんだ。ちよつと事が早くなつただけさ」

「デビットの言う通りだ。ホクヤ君が作戦外行動に出た時は焦つたけど、それは向こうも同じはずだ」

「そうだな、仮に情報が向こうにいつていた場合だと向こうにとつても番狂わせなわけになる」

「だつたらー!」

「お前も落ち着けアステイ、それにお前が前線にいつても仕方ないだろ」

デビットがアステイの頭をわしやわしやと搔き分ける。

「で、どうする? 隊長」

「……行こう、ここでじつとしていても何もできやしない」

ウイリアムの言葉に三人は静かに頷く。

デビットを先頭に左右にユウとウイリアム、三人のちようど中間に位置するところにアステイが張り付いた。

一階の警備は手薄、というよりもほとんど皆無に近い。手足を切断された者、強打して意識を失つた者が主に倒れてる。

少し進んだところで悲鳴が聞こえた。

それと同時にユウは背筋に冷たいものを感じた、この殺気を、知っている！
「……リルナ！」

道の角から人が走ってきた。全員が同じ服装をしている。何かに追われている。必死の形相で逃げている様子からそのことが窺える。

「テオ!?!」

「まさか、ウイリアムか!?!」

ウイリアムの声を聞いてハツとなった。今し方、走ってきた赤い髪の青年に背負われた男こそが今回の救出対象であるヒュミテオ王テオだった。

——その後ろからは返り血を浴びたリルナが両手にインクリアを握りしめてこちらに迫ってきていた。

「逃がさん」

「マズイ！リルナだ！」

「ぐっ……ッ！」

——この場において、誰よりも早くユウは駆け出していた。

リルナに向かって、自慢の気剣を左手に携えながら。

「ッ！お前は!?!」

「リルナ、できるなら、こんな形で会いたくなかったよ！」

——ユウとリルナが、
激突した。

75. 左腕

「テオ！無事で良かった、それにバルナドも、どうして!？」

「説明は後ツス、ウイリアムさん！あの女から逃げれる足はあります!？」

「一応大型の車で来てる、案内する!！」

「助かるツス！皆、ホクヤの兄貴や殺された同胞達のためにも絶対に帰るツスよ、ルオンヒュミテに!！」

「ま、僕は行くの初めてなんやけどな」

「俺も」

脱獄時、27人いたバルナド率いる小隊は既にその数を大半失い地上に辿り着いた時点では9人になってしまった。

リフトの中にいたリルナに真つ先に殺されたのはビスケスだった。それから足が竦んだ者から先に殺された。

それでもバルナドは涙一つ流すことなく、テオを無事地上へ送り届けるといふ任務を遂行した。それこそが皆の悲願であるからだ。

「アステイ！デビット！それに、ユウ君！君たちも急ぐぞ！」

「馬鹿言っちゃいけないよ、隊長！ホクヤはどうするんだ！あいつまだ来てないんだぞ！」

「ホクヤ君、無事、だよね？」

「それに——」

デビットの目を向ける先には気剣とインクリアをぶつけ合うユウとリルナの姿があった。バルナド達が無事に先へ進めたのもユウがリルナを足止めしてくれてるお陰だ。

「ユウがいなきや、今頃俺たちは死んでた！」

「……ッ！」

「隊長！あんたはテオを連れて先に戻ってくれ！俺は、責任を持ってユウ、ホクヤ、アステイを連れて帰ることを約束する！」

「デビット兄、それちゃんと自分入ってる！皆生きて帰らなきや意味がないんだよ！」

「——当たり前だ！」

自分は無力、デビットはそのことを痛感していた。この場においてもユウの邪魔でしかない。ホクヤと訓練した時もそうだった、亡き友のスレイスを使い続けてそこそこの期間はあ

る。そろそろ自信もついてきた頃だったのに、ホクヤはものの数日で高度な技術を手にした。昔からの想い人も彼の話をするときはとても楽しそうにしている。

——正直、悔しかった。

何故自分がそこにいないのか、何故そこで自分の話にならないのか、嫉妬にも近い感情が芽生えた。

それと同じくらい、仲間として戦士として恋敵として尊敬もしてるし信頼もしてる。

こんなところで死ぬなんて、それこそデビットは絶対に許さない！

「——ッ！奴ら！」

「っはあー！」

「チツ、貴様アー！」

「君はここで、絶対に止める！リルナ！」

——気断掌！

リルナのインクリアを強引に掴み、衝撃を発生させる。

一時的に形を保つことができなくなったレーザーブレードがどろりと溶けるようにして消失するが、そんなことで止まるリルナではない。

「——はあー！」

「ぐっ!?!」

リルナに対する直接的な攻撃しかディートレスは発動しない。気剣とインクリアの打ち合いにおいては身体能力、体力の差が大きく出る。

体力のあるユウに対して、エネルギーを大きく消耗したリルナとでは差が出ることは必然である。

それでも、パストライヴを駆使しながらユウを圧倒するような様を魅せる姿はナトウラ最強の戦士の名に相応しいものだ。

ユウも激しく動けば動くほど体力を消耗する。気も使っていれば尚更だ、この点において疲れを感じにくいリルナに分があつた。

仰向けになつて倒れたユウの上にリルナがインクリアをユウの首元に添える。

「ぐっ!?!」

「フン、所詮その程度か」

「ぐ、な、なんで…」

「?」

息を切らしながら、それでも懸命にユウは言葉紡ぐ。

「なん、で、そんなに、強いのに！ヒュミテと、ナトウラが歪み合う理由なんてないのに！なんで、こんな、無意味なことを繰り返すんだ!?!」

「貴様こと、何を言っている?」

「こんな茶番の殺し合いに何の意味があるっていうんだ!? 命を無駄にしてるだけじゃないか!」

「……何を言い出すかと思えば、ヒュミテが我々ナトウラを虐げてきたことを知らぬわけではあるまい。そう、あれは——」

そう、言いかけてリルナの目が変わったのがユウから見てもわかった。

——さつきとは比べ物にならないほどの、殺意!

「——死ぬ」

「死ぬか!」

瞬時に女に変身して、辛うじて動く右脚を上へ蹴り上げる。男よりも柔らかい女の体になり、リルナの背中を蹴るが、ディートレスによって弾かれる。

一瞬、ほんの一瞬だけリルナが動揺したのと変身して腹部に隙間が出来たのを利用して、できる限りの速さでリルナを振り払う。

男の時よりも力は弱い、しっかりと立つところまで自由にはなった。

「!お前は!」

「言つたよね、こんな形で会いたくなかつたって」

「……そういうことだったか、やはりヒュミテは小賢しく、それでいて、憎い!」

数日前、リルナと仲良く話をしたことを思い出す。香水をあげたことを思い出す、彼

女だつて心があるとわかつた、だから説得に出てみたが、やはり無駄だつた。

パストライヴでの接近は瞬間的なもの、ユウが男になる前にリルナは剣を振るう。

二刀流のインクリアの応酬がユウを襲う。咄嗟にスレイスを構えるが、やはり女の体では近接戦闘は難しかった、変身する暇も与えてくれずに攻撃の手が止まることもない。

「——死ね」

——スレイスを斬ると同時にユウの左腕が綺麗に斬り飛ばされた。

※

ディーレクラン本部にて、エネルギー補充を終えたディーレバツツの面々がいつも集まる一室で出撃準備をしていた。

左半身が潰れてしまったプラトーがザックレイに連絡を入れていたのだ。

その際にザックレイはあるコードを発動させる権限をプラトーより受け取っていた。

——緊急セキュリティシステム。

発動までは時間がかかるため、連絡を受け取ったその場で発令コードを入力した。

「隊長と副隊長がガチで出っ張る相手なんだ、気を引き締めないと」

やれやれと言った様子でザックレイがため息をこぼす。

「ガハハハハハ！腕が鳴るぜエ！」

体格の大きいステアゴルが丸太のような大きさの腕をガチンと鳴らし、調子確かめながら、笑う。

「そうじゃな、今回ばかりはお主に同意させてもらおうか」

古風な話し方をする赤色が目立つ青年、ジードが笑いながら立ち上がる。

「やだやだ暑苦しいわ、ムサイわ〜」

プリンダがザックレイ以上に面倒そうに肩を落とす。

「まあ、とりあえず急いだ方が良さそうですね、飛ばしますね、皆さん掴まって！」
「マージンがまだ生きてるのでそっちに飛びますね、皆さん掴まって！」

トラニティが転移の準備を済ませて、全員で転移できる姿勢を作る。

ザックレイは「え、ちよ、僕も行くの!？」と戸惑いながらもステアゴルに掴まってプラトリーの元へと転移した。

※

ギースナトウラにあるアウサールチオンの集い。

「やつぱ俺らは行くぜ！この戦場のラッキーボーイを置いてくつたあ、どういうことだっただってんだ！」

「いや、それはだな、ここも手薄にするわけにいかんだろ」

「だが、何故ウィリアム達が前線に出てるのに我々がじつとしてねばならんだ！私は行くぞ！」

「お、おい！ロレンツ！ラスラ！」

ネルソンの制止の言葉も届かずに二人は飛び出してしまった。

現在、ここにいるメンバーはテオを連れて帰ってきた誰かが来た場合、即刻メーヴアへと出発できるように準備をしていた。

これこそホクヤが独断で行動した意図、そう判断したユウとウィリアムによる作戦だ。

「まったく、あいつらは」

「まあまあ」

ネルソンがため息を漏らし、マイナがそれを諫める。

実際、状況は伝わってこない。テオは無事救出できたのか、ホクヤは無事なのか、ネルソンの胃に痛みが増えるばかりだ。

「まったく、ホクヤの奴もそうだが、どうしてウチにはこんなにも問題児が集まったものかな、なあマイナ」

——返事がない。

さつきまでマイナはそこにいたはず。いや、今もいるはず。

「——マイナ？」

——ネルソンが振り返ると同時に、一発の銃声がギースナトウラに響き渡った。

76. 激戦の特別収容所

『おい、ホクヤ！ポーツとしすぎだ、お、俺の話がそんなにつまらないのか？』

——ホク、エ姉？なんでこんなところに、つてか、死んだはずじゃ!?

『…… まだ夢見てんのか、お前は？我が弟ながら呆れる。そんなんだから弱いままなんだ』

『まあまあ、久しぶりに皆揃ったんだからそうかつかつしないの！めっ！』

『か、母ちゃん、けどよ』

母ちゃんまで!?!あんたもたしか病気で死んだはず、じゃ、しかも俺の目の前で……

『?そうだっけ?でも、私元気だよ、ほらほら!』

『全く、この愚弟はさつきから何言ってるんだか、父ちゃんからも何か言ってるよ
!』

げ、親父もいるのか!?

『ホクヤアアア!そんな寂しい事言うんじゃない!パパ泣いちゃうぞー!』

『それは普通にキモい』

『今すぐ離婚したいわあ〜』

『そこまで!?!』

「まったく、あんたも相変わらずだな。ていうか髭!髭が当たってるし、なんかゴリゴリいつてる!!」

『ガハハハハ、まあ、せつかく家族が揃ったんだ!これからホクトのやつが飯を用意してくれるらしいぞ!あいつも女らしくなったものだ!』

『え?』

『え?』

え?!

『みんなくお待たせく、あ、ホクヤ久しぶりく!お姉ちゃんの料理も久々だよねく』

『お、相変わらさずいい色してるな!これは何だ?』

『ふふふのふ、親父殿、こいつはシチューと呼ばれるものでございます!昔ユナさんに教わったものでチキユウってとこの郷土料理らしいです!』

『おお、そうかそうか!それは期待だ!いい空色だ!』

—— 忘れかけてたけど、そうだ、俺たちの世界の空色は綺麗な紫だ。

けど、このシチューの色はどうも濁ってるというか、空の色ほど綺麗じゃない気がするぜ、ホクト姉。

あと、ホクト姉気のせいかな？なんか泡立ってない？

『これは気泡って言うてね、酸素が含まれてるんだよ、ホクヤ君！』

……

ち、ちなみにお肉は何を使ったの？ていうかちゃんと生物を使ったんだよね！？

バチバチ火花散ってる気がするのは気のせいだよね！？

『これはね、ギフトの中に入ってたやつ！』

もはや無機物じゃねえか、せめて有機物を使ってくれ！！

アカン、体がもう既に動かない！なんでや！？

『さ、ホクヤいただくとしよう！セレオンとホクエは飲み物を取ってくると言うてたから、後で戻ってくるだろう！』

——逃げやがったああああああああああああああああ、多分、いや、絶対あの

二人戻ってこねえ！

断言できる！！

『ふふふ、可愛い弟のために超絶きゅーていくる美少女なお姉ちゃんがあーんをしてやろう、感謝しなさいな！』

——え、ちよ、待って！？

ていうか親父はもうおかわりに突入してるだど！？

いや、ちよ、なんかスプーンが溶け——

「——ヤ！ホクヤ！」

「ホクヤ君！ホクヤ君！」

「……俺、生きてるのか？」

目を開け、視界に映ったのは家族ではなく、デビットとアステイの二人だった。まさか、夢とはいえホクト姉の兵器で目を覚ますことになるなんてな。

お陰で汗びっしょりだ。

「よかった、声は聞こえるみたいだな！大丈夫か!？」

「まあ、なんとか、な」

左目の止血も気がつけば終わって、いや、包帯が巻かれてる。

二人が介抱してくれたのか、ていうかここはまだ特別収容所の中なのか？

俺は一体どのくらい気を失ってたんだ？テオは、リルナは、プラトーは？

「ほんとに、よがつ、たよ、もう、ホクヤ君目、覚まさないかと思っで、左目も……」

「アステイ……」

「リルナは今ユウが止めてくれてる。テオも無事隊長のところに行って今メーヴアに向けて移動中だ」

「そうか、ってメーヴア？」

「ああ、お前が勝手に突入したから作戦が少し変わったんだ。俺たちがここでテオを救出し、それからリルナやディーレバツツの連中を撒きながらギースナトウラを経由してメーヴアに行く。俺たちがここにいる間先にギースナトウラにいる連中はメーヴアに移動することになってる、俺たちもこれから追いかける予定だ」

なるほどね、とりあえず作戦通りにはなってるのか。多分、ネルソンさんが思いついたんだろうな。全く、恐れ入るよ。

「なら急ごう、つてて」

「おいおい、無理すんな！それに今出てもしリルナが……」

「違う、ディーレバツツだ。プラトーの野郎の話が本当なら——」

瞬間、下階の瓦礫が粉々に砕けた。いや、あれは砕けたってより塵になったって方が正しいかもな。

マズイな、もう来やがったか。

「なっ!?!」

「……遅かったか、ディーレバツツの連中だ」

「なんだって!?!」

熱は引いてるな。左目は、膿が溜まってそうだ。もうこの際気にしてられねえ。体力もギリギリだが「テンション」で誤魔化すしかない。目の痛みがさつきよりも引いてる

から使える。

「あ、あいつらッ！」

ここから下階はよく見える。チッ、プラトリーの野郎は完全に潰れてなかったか。意識があるとか、これだから機械人間って奴は！

「大事ないか、副隊長」

「すまない。痛覚は一時切断したが、もう体が動きそうにない」

「じゃあ、私が連れて帰ります。ここにいるのも私一番役に立たないので」

「ねえ、それなら僕もじゃない？」

こっちに気がついてない？

いや、罨かもしれない。相手はプラトリー含めて六人。こっちは三人、数じゃこっちが分が悪いな。

「それにしても、あれを発動させちゃったんなら急がないとトラニティが飛べないんじゃないかしら？」

「あ、その点は大丈夫。僕が万が一のためにトラニティがトライヴするときに発生する空間の歪みで起こるパターンなら発動後でも機能するようにしておいたから、ゲート限定で指紋が必要だけどね」

「よくわからんが、さすがだな！ザックレイ！」

「うるせー、ゴル！」

トランティイ、あのピンク髪の女か。あの時見たやつ、たしかワープを使える奴だった気がする。

なるほど、あいつがここまで連れてきてプラトーを回収するつもりか。

「アステイ」

「えぐ、な、何？」

「ここから、あのピンク髪を狙えるか？」

プラトーが復活するのは面倒だ。

リルナの方も気になるが、ユウさんが足止めしてくれてるならとりあえずは任せよう。

今俺が行ったところでリルナに勝てる見込みは薄い。

「で、できるけど」

「——ぼん」

「……ッ、了解！」

目に溜まる涙を拭い、意図を理解してくれたアステイが得物であるスナイパーライフルの準備をする。

さすがだ、こんな状況で、しかもさつきまで冷静じゃなかったのに素早いこと切り替

えてる。

「——あの女だけでいいの?」

「ああ、ひとまずはな」

少しでもディーレバツツの数は減らしておきたい。プラトー、それにトラニティを行動不能にしておけば少なくとも狙撃とワープに関しては心配することはなくなる。

——アステイの纏つてる空気が変わる。能ある鷹は爪を隠す、今まで隠してた殺意と集中力が引き金に添える指に込められる。

「——皆、気をつけて。上階に三人いる」

「ほう」

「まだいたのか、メノ部族の男」

「副隊長、動こうとせんでくれ」

「気付かれた!?!」

「チツ、アステイ! いけそうか!?!」

「——もうこの指は止められないよ」

その言葉と共に引き金が引かれた。

その引き金がスナイパーライフルの引き金なのか、俺たちとディーレバツツとの戦闘の引き金なのかは定かじらない。

——ガキイイン、とアステイの撃った銃弾は何か硬いものに当たった。

あの音は頭に当たった音じゃねえ、対ナトウラ用の銃弾なんだ、あんな音は出ないはずだ。

「ありがとジード。助かった」

「ふむ、方角的にこつちの方におるのか、のう?」

よく見たら、あの赤髪の男の腕が黒く変色して銃弾がめり込んでる。

マジかよ、ディーレバツツってあんなのばつかなのか!?

その赤髪の男がパカッ、と口を開ける。あの熱量は、ヤバイ! プラトーの光線以上の熱量だ!

「二人共! 下がれ!」

——間に合うか!?

両腕に熱を込めて、デビットとアステイの前に出る。

そのまま熱戦が飛んできた、よし!

両腕を前にして、受け止める。そ、れをその、ままあ! 上に受け流あ、あああああああす!!

痛っ、てえ! 予想以上の威力だ。

「なんじゃと!?!」

「ジードの熱線が逸れた!」

へ、どうやら予想外の事態らしいな、この隙に撤退した方がよさそうだ。

思った以上に体にガタがきてる。血を流しすぎ、気を使いすぎ、「テンション」の酷使の上、左目を失ったつてのはデカイな。

——けど、やっぱ休ませてくれないか。さつき弾いた時と同時くらいにここまでジャンプしてきた奴が上から狙ってる、し!

…… ツ! ヤバイ、気だけじゃ押し負ける!

「!へえ、まさか受け止めるとはな!」

「なんつー、重いパンチだよ、おい」

こいつのパンチ、デカくて重いだけじゃない。さつきからオーラがギシギシって嫌な音立ててる、「テンション」を使つてなかったら俺の体残つてたかわからないな。

「ス、ステアゴル!」

「ガハハハハ、あんたが副隊長さんが執着してる奴だろ! 名前は何?」

「…… ホクヤだ」

「そうか、俺はステアゴルだ! 存分に殴り合おう!」

なるほど、こいつ脳筋か!

「ホクヤ!」

「ホクヤ君！」

「——おっと、お前さんらの相手はワシじゃ。うちのステアゴルは一騎打ちを望んでおるからの」

デビット、アステイの方にもさっきの赤髪の男!? あいつの熱光線はシヤレにならねえぞ!

「ガハハハ、余所見するなよ、ホクヤ! お前の相手はこの俺だ!」

「……チツ!」

クソ、そつちは頼んだぜ二人共!

ルナトープの意地を見せつけてやれ、死んだりしたら許さねえからな!

「まったたく、この男共は」

「だあー、もう! じゃあプリンダと僕はヒュミテの王を追いかける! それでトラニティは副隊長連れて帰って! システムはもうすぐ作動するはずだから!」

「りょーかいっす!」

ちくしよう、二人逃したか!

仕方ねえ、この脳筋を速攻でぶっ飛ばして追いかけるしかねえ!

街一つ、壊れるかもしれないし、後の反動半端ないし、敵味方の区別つかなくなるかもしれないからなるべく使いたくなかったけど、四の五の言つてられねえ!

「——悪いが、本気で行く」

人間レベル、じゃなくてフェバルのレベルでな。

「——望むところだ！」

——【ハイ・テンション】！

77. 誘爆

「くどい」

「ハア、ハア、ハア… ツー！」

左腕を斬り飛ばされ、男に変身するタイミングをも失い、頼みの綱のスレイスも根元から切断された。

血も絶えず流れてる、止血をする暇もなくリルナの攻撃を避け続けているのだ、意識を保てることが奇跡に近い。

体力の限界も訪れ、片膝をついてしまう。

だが、あのリルナがこちらの体力がある程度回復する時間なんて与えてくれるはずもない。

「——最期に言い残すことはあるか？」

「……せめて、この姿の、時くらいは、君とはい、い関係でありたかった」

「……！」

右腕に力が込められる、込められた力がインクリアの刀身からわずかに火花が散る。

——リルナの瞳から光が消え、刀身がユウの首に迫る。

（——まだ、右手は動く！）

せめて、テオが安全な場所へ移動してホクヤが戻つて来るまでの時間は稼ぐ！

一時的にでも動きを止めることができるのなら、とかつて旅した世界の友人が作つてくれた電磁ボール。利き腕がないため、不慣れな右腕でポーチから目的のアイテムを取り出す。

二度目が効くかはわからないけど、何もせずに首を斬られるよりかはマシなはずだ。

「が、また、か……!?!」

——隙が出来た、今のうちに男へ変身し応急手当をする。

残った気でその場を一旦離れ、女に変身して身を潜める。

荒い呼吸を整えながら、意識だけは手放さないようにと気だけをしっかりと持たせる。

男になれば止血は続けられる、しかし場所を特定されてしまう可能性がある。

——無限ポーチに念のために入れておいた医療道具箱の中を取り出して、利き手ではない右手で苦戦しながら左腕に包帯を巻いてる時だった。

デイスナトウラ全体に変化が表れ、要塞のように変化し始めたのは。

そして、空を見上げるとテオの乗った車に向けて気を感じられない二人、おそらくナ

トウラが向かっていることを。

「ユウー！無事かー!?」

「ろ、ロレンツ！」

——しかし、悪いことばかりではない。

ユウの元に戦場のラッキーボーイが現れた。

※

ジードは油断していた。目の前の男、デビットの実力に。

ルナトープという今や少数のレジスタンスに所属しているスレイス使い。それがジードがデビットに抱いていた印象だった。

しかし、実際に戦ってみればどうだ。たしかに体に傷は付けられてはない、肉質の硬度を変えることのできるジードは防御に関しては絶対の自信を持っている。

もう一つの自信、ボラミットも溶かす熱光線。まさか、一度ならず二度も躲されるだなんて思いもしなかった。

かつてのデビットならば既に決着はついていたであろう。ホクヤとの出会いが、彼の訓練、ライバル意識がデビットを強くした。

「——お前さん、名は？」

「デビットだ」

「そうか、覚えておこう」

ジードの腕が伸び、蛇のような動きでデビットに迫る。

デビットはそれを二本のスレイスで受け止め、滑らかに受け流す。怯むことなく、ジードは五指を伸ばして先端を硬化させる。

「がっ……!?!」

「む?」

三本、残りの二本はアステイの撃った弾が弾いた。

「——忘れるなよ、俺には、俺たちには背中を預けてる仲間がいるってことをな!」

体に刺さった指を抜き、再度スレイスを構える。自分からは攻めには行かない。

もし、至近距離で熱光線を撃たれば避けることは難しいからだ。しかし、ジードと戦うには距離を置くのは危険だということもわかった。

——互角にも見えるが、この戦闘においてデビットは押されている。

(くそ、どうする!?)

実力的にも技術的にも足りてない。

エネルギー切れを狙うにしても、そううまくいくものじゃない。

——デビットが考え、ジードがアクションを起こそうとした次の瞬間、一つ決着が

着いた。

「が、ぐアアアアアああああアアアアああああアア!?」

「ステアゴル!」

——ステアゴルの右腕を粉碎したホクヤが、だらんと右腕を垂らしながら息を切らしていた。

「ホクヤ!」

「ハア、ハア、チクシヨ、ウ。やっぱ持っていられるなあ……」

「ステアゴル、大丈夫か!」

「ぐ、ガハ、ハハハ! 見ろよ、ジード、俺の自慢の腕が、粉々だぜ」

「——ッ!!」

ステアゴルのアイデンティティであり力の象徴、全てを粉碎するパワーアームに彼には絶対的な自信があったはずだ。

それを打ち砕かれた、それなのに笑うステアゴルの表情はどこか悲しげで悔しげにジードの目に映った。

「——おのれ、ヒュミテがあああああああ!!」

友のために敵を討つ、ジードが今まで起こしたことのない方法で戦闘の火蓋を切らした。

得意の熱線を固まつてる三人に向けて放つ、全力の最大出力で。

「——チツ！」

——バチイ、と同じ性質のものでしかぶつかることがあり得ない熱線が何かとぶつかった音がした。

「ホクヤ君！」

「俺のことはいい！早くユウさん達と合流するぞ！」

「お、お前腕が!?!」

「気 に し て、 ら れ る

かああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

——ジードの熱線は、ホクヤの気合いと拳で跳ね返された。

「ツ！」

射出し終えた熱線は既にジードの口内からは分離している。

だが、弾かれはしたもののそっくりそのまま跳ね返されるなんて思いもしなかった。

ホクヤも咄嗟に取った行動だった。ここで弾いて分散させれば周囲に被害が及ぶ、特に近くにいるデビットとアステイに当たる可能性だけである。

片腕しかまともに動かせない、視界も半分遮られた状態である。正確に弾き飛ばせない、ならばそのままそっくり返せばいいと気と「テンション」で熱線の方角を無理矢理

めた。

「ついに始まったか、まさかこちらにとつても障害になりかねん事態になるとはな」

「そう言うな！あとは隊長たちが何とかしてくれるさ、俺たちは一旦退こう、このままじゃ分が悪いからな！」

「……俺はまだやれる、お主をここの兵舎にまで連れて行つた後に必ずヒュミテ共を仕留めると約束しようぞ！」

※

『緊急セキュリティシステム作動中。全ドライヴ、及びギースナトウラとの連絡路は一
時使用不能となります。ギースナトウラ在任の皆様には大変ご迷惑をおかけ致します。
繰り返し申し上げます——』

「ホクヤ君！デビット兄、急がないと！嫌な予感がする！」

「俺、もだ」

ホクヤはもう立っているだけで精一杯、デビットに肩を借りてる。

警報が鳴り響き特別収容所全体が揺れている。振動の影響で上の階から瓦礫が落ちてくる。

「あいつら！」

デビットは背を向けるジードとステアゴルに目を向けるが、ホクヤが止める。

「やめろ、俺たちの目的はあいつらを倒すことじゃない。テオの救出、今ウイリアム達が動いてくれるんだろ？ 上に行つて合流すんのが先だ。それに、あいつらも」

「けど、あいつらに、何人の仲間達を、あいつが殺された！ 油断してる今が好機——」
「う、ぐっ!!」

「ホクヤ君！ デビット兄、無理だよ！ ホクヤ君もう限界だよ！」

「ホクヤ……」

アステイが涙ぐみながら訴えてくる、しかしここは戦場。目の前の二人は完全に油断している。

だが、テオを救出するという目的は達成している。

デビットは静かに拳を握りしめて、意識がもう朦朧としているホクヤをアステイに預ける。

「…… デビット兄？」

「—— お前はホクヤを連れて上に行け、どちらにせよ殿は必要だ」

—— 俺は兵隊。目的を達成するために死を厭わない。

アステイの制止の声を無視して、友のスレイスを力強く握りしめて、ステアゴルを背負うジードに急接近する。

(——悪いなロレンツ、マイナ、ホクヤ!先に行く!)

この瞬間をどれほど待ち望んでいたことか。友の仇をこの手で取ることができるとは、ホクヤには感謝しなければならぬ。

——デビットのスレイスはジードの身体を勢いよく貫いた。

「が、ぼっ!?!」

あくまでジードの軟硬化は彼の意識下で行われるもの。不意をついた一撃に対応できずもなかった。

ましてやステアゴルを背負ってる状態、反応できたとしても動くことができないかわからない。

「貴、様：： ツー!」

「やつと、やつと一矢報いることができたぜツ」

そのままスレイスでジードの身体を斬り裂こうと振り上げたが、肉体を硬化したためスレイスが動くことはなかった。

ジードが振り返り、カパツと口を大きく開く。

「ツ!?!」

デビットがスレイスを手放して勢いよく後方へ回避するが、ジードの伸縮自在の両腕で全身の動きを封じられてしまう。そして、手繰り寄せられるようにして、ジードに近

づく。

(———ここまで、か)

デビットはもう片方の手に持ったテールボムと呼ばれる超合金のボラミット製金属をも粉々に吹つとばせる爆弾を可能な限りジードに近づける。

「ッ!?!」

——ジードの熱線が放たれると同時にテールボムも大爆発を引き起こした。

爆風によってステアゴルは吹き飛ばされ、直撃したコアがスレイスによって貫かれて、エネルギーの半分を失ったジードと熱線で頭を貫かれたデビットは相討ちとなることで決着がついた。

※

「……!」

「ロレンツ? どうしたの?」

その頃、ロレンツが来たことによつて応急手当を受けて移動が可能になったユウはロレンツの肩を借りてギースナトウラを目指していた。

「いや、なんでもねえ」

いつになく真面目な表情で突然特別收容所の方へ視線を向けたが、すぐに移動を再開

する。

「ごめんね、ちよつと無茶しちゃつて」

「つたく、本当だぜ。ホクヤもそうだが、お前らは本当に無茶ばかりだ！いくらリルナとタメ張れるからつてよ、限度はあるだろ！」

「…… うん、そうだね」

ユウの胸がロレンツの背中に当たつてる状態なのに、軽口を叩くことはなかった。それだけ彼もこの作戦に真剣になっている。

「そういうえば、どうしてここに？ギースナトウラで待つてたんじゃ」

「今更かよ、お前らが頑張つてんのおとなしく待つてれるわけねえだろ！つたく、この戦場のラツキーボーイ様を置いて作戦決行とか、どうかしてるぜ！」

ユウはそんなロレンツに安心しながら、ロレンツと歩調を合わせる。

「——それに、来たのは俺一人じゃねえ！ラスラはもう隊長達と合流してる頃だろ！」

※

「ウイリアム！ウイリアム、しつかりしろ！」

その頃、テオを乗せた車はザックレイによつてハッキングされ、ウイリアムも瀕死の状態だった。

「——このまま全員、お休みしちやう？」

現在ラスラの前に立ちふさがっているのは、ディーレバツツの一人、プリンダだ。

78. Next Round!

警報が鳴り響き始めた頃、リルナの体に支障をきたしていた電磁ボールの効果が切れ自由が戻ってきた。

簡単なストレッチをして調子を確かめながら二度のみならず、もはや三度も仕留め損ねた忌々しきヒュミテに対して殺意を再発させる。

「——おのれ、ヒュミテめ」

リルナ自身、この言葉を今日だけで何度言ったかわからない。

テオ達の向かった方向には先程プリンダとザックレイが向かった。そして、収容所内にはステアゴルとジードが残っているとのことだ。

一旦本部に戻ってエネルギーを充填するのもありだが、特別収容所の中にはあの男がいる。

——ホクヤ。

ステアゴルとジードの実力は信頼している。だが、それ以上にホクヤという男がどれほどの力を持っているか、未だに計り知れない。

負傷しているとはいえ、すんなり倒せる相手ではないことはたしかである。

それに、リルナ自身の興味もある。

ヒュミテがデイスナトウラ内に侵入し、指名手配として扱うことにしたユウとホクヤ。同時期に侵入し、未知数という存在は同じであるのに、何故かユウは生け捕りも可能に、そしてホクヤは死のみという扱いだ。

相変わらず、百機議会の考えていることは理解できない。

エネルギーもまだわずかに残ってる。デイトレスも展開できることを確認し、リルナは収容所へと戻る。

激しく暴れた跡が目立つ。囚人達も半分以上が外へ逃げた、リルナが斬り刻んだ囚人達の死体が転がっている。

それは肉塊だったたり、機械片であつたり様々だ。

リルナに生命エネルギーを感知する機能は搭載されていない。しかし、それでも、違和感を感じることはできる。

——あまりにも、静かすぎる？

もしや既に戦闘が終了したのかもしれない。だとすれば取り越し苦労だ。

それでも確認は必要だ、先程戦闘を行っていたテオ収容フロアを目指し、下へ下へと下っていく。

——そこでリルナが見たのは仲間の倒れる姿だった。

「ステアゴル、ジード!？」

ステアゴルは自慢のパワーアームを粉々に粉碎されているがまだ息はある。しかし、ジードはどうしようもない、助かる見込みがとて薄い状態だった。何かが爆破したと思われる中心地の周囲にジードのものとと思われる残骸が転がっている状態だ。

共に倒れてる頭と両腕のないヒュミテと思われる男がジードをここまで追い詰めた。リルナはキツと睨みつけたが、もう死んだ男を斬り刻むという趣味はない。獲物は生きていなければ意味がない。

様子を見て来てよかった、ステアゴルを背負い今度は来た道をさっきの倍以上の速度で戻っていく。ジードのことは諦めるしかない、ああなつてしまえば助かる見込みはない。

ステアゴルをオープンカーに乗せて本部へ戻る。ギリギリ入った。

ホクヤの行方はわからなかったが、今は仲間の安否が優先だ。

「ぐ、た、隊長……」

「ステアゴル!よかった、目が覚めたか!」

「ガハハ、ハハ、すまねえ!負けちまった!」

「もういい。あまり無理をするな」

ステアゴルが無理して笑ってるのは目に見えていた。戦士として負けが、自慢のパワーアームが壊されてしまい悔しいのは目に見えている。

「隊長、もしかしてこれから戻るのか？」

「ああ、お前達はゆつくり休め。私もエネルギーを補給したらプリンダとザックレイの応援に行く」

「ジード……」

「……お前達の相手は、ホクヤか？」

俯かせていた顔を上げ、ステアゴルに静かに尋ねる。

「ああ、中々の実力者だった。まだヒュミテにあんな奴がいるとは思ひもなかったから、油断した」

キツと表情を締め直し、僅かに残った右腕を握りしめて静かに目を細めて笑う。

「——けど、次は負けねエー！」

「ああ、そうだな」

リルナもステアゴルの言葉に呼応する。あんな、どこからやってきたかもわからない余所者に負けるわけにはいかない。

ディーレバツツのプライドもある。

「まあ、私たちが回復を終えるまではプリンダとザックレイに任せるとしよう」

「ガハハハ、なら俺たちの出番はもうないかもな！」

※

「この野郎！」

「チビが、図に乗りやがって！」

「……何とでも言えよ、低俗な出来損ない共」

クイ、とザックレイが軽く指を動かすとハッキングされた車が旋回する。

あらゆる機械に対してワイヤレスでハッキングをし、その機能を奪うことのできるザックレイにとって武器はそこら中にあるといっても過言ではなかった。

ズガガガガガガガガ、と車体が路上を擦れる。振動に耐え切れず、バルナド達は振り落とされる。

さらに、立ち向かってくるのはザックレイだけではなかった。

「……お前ら！」

「す、すまねえ、バルナド！」

「体が、言うことを……ッ！」

そう、かつて同じ牢に投獄されたナトウラだ。ザックレイにとってはナトウラも機械同然、ハッキングの対象となる。

「まさか、身内から反逆者が出るなんて思いもしなかったよ。だからこそ遠慮なく使える」

「う、うわあああ!!?」

バルナドはかつての同胞の攻撃を避け、背負い投げの要領で腕を掴み投げとばす。

「悪く思うなよ、リットナー」

「ああ、それでいい」

「———おいおい、この場の支配人の僕を置いて勝手に盛り上がらないでくれるかな?」

ザックレイが車を走らせこちらに向けて突進してきた。

(クソ、兄貴のためにもディーレバッツは一人でも減らしておきたかったが、ウィリアム達とも分断されちゃったし、こいつ思いの外強い!)

戦闘において目立った戦果の少なかったザックレイ。それは他の前線メンバーがあまりにも戦闘に長けすぎたためである。

特にヒュミテの集落はディースナトウラと比べて機械量が圧倒的に少ない。

いわば、ザックレイにとってディースナトウラは武器庫。彼にとってこれ以上戦いやすい場所はない。

周囲の監視カメラをハッキングすることで死角からの一撃も容易だし、近場の重火器や重車両をハッキングすることもできる。

——となれば、ザックレイに勝つ方法はただ一つ。

(こいつを、街の外へ誘導する！)

——そして、こいつをザックレイの頭、もしくはコアに向けて撃つ！今思いつく勝利法は、それしかない。

しかし、外へ行くにはあの壁を越えなければならない。それにデイスナトウラ封鎖体制とやらが外への道をも遮断してしまっていた場合は無駄足になってしまう。

なら、せめて機械の少ない場所へ。この工業地帯で戦闘をするのはあまりにも危険すぎる。

「どこへ行くんだ？」

——ザックレイ！それだけじゃない。

バルナドの向かう先からデイクランの集団が隊をなして現れたのだ。

※

一方、ラスラの向かった移動手段を失ったテオを護送していたチームはブリンダの襲撃でウィリアムが虫の息、ラスラが苦戦を強いられていた。

テオも気絶している。元々衰弱していた状態だったので危険な状態に変わりはない。

「……ッ！」

「さて、いつまで保つかしら?」

ラスラが呼吸を止めてから既に一分近く経過している。ブリンダの操るガスの侵入口は鼻と口が主だ。

そのことに気がついたラスラは鼻と口を可能な限り抑え、現在も呼吸を止めている状態だ。そう長くは続かないが、空気を求めてしまえばもれなくブリンダの攻撃を受けることになる。

運動能力が鈍り、スレイスを振る様子からもいつものキレが感じられない。

既に何種類かのガスも吸ってしまっており、その影響もあるだろう。

大振りの一撃は簡単に回避されてしまう。そう、肉弾戦を得意としないブリンダにさえ避けられてしまうほどラスラの動きは鈍っている。

——ブリンダがお返し、とばかりに拙い回し蹴りをラスラの腹部目掛けて放った。

「——ッ!?!」

「ふふふ」

端から見ても素人技だとわかるくらい形を成さない一撃であったが、呼吸を止めてるラスラには決定打とも言える一撃となった。

必死で口元を覆いながら、少して酸素を逃さないようにするが、ブリンダの追撃が入る。

今度はスレイスを勢いよく振ったおかげでプリンダが後退したので、攻撃を受けることは避けられたがラスラに限界が近づいていた。

——ダツ！と一か八か駆け出した。

肺が爆発しそうだ、全身がガクガクと震える。しかし、ここで決着を付けねばテオとウイリアムが危険な状態、今動ける自分よりも危険な状態なのだ。

それにテオは自分よりももっと苦しんできた、痛みを耐えてきた。

ならば、この程度の苦痛なんてどうってことない！

「——ッー！」

「なっ!?!」

正面から突進し、サイドステップを駆使して勢いよくプリンダの背後に回り込む。もし、相手がリルナやホクヤ、ユウだったらここで反撃されていただろう。

だが、今戦ってる相手はそこまでの化け物ではない！

ラスラの勢いよく振るった下段からの斬り上げはプリンダの背に一文字の傷を負わせることに成功した。

「はっ、(ハッ)……ギイー！」

しかし、プリンダに致命傷を与えたからといって周囲に散らばったガスの効力が切れるなんて都合のいいことが起こるはずはない。

プリンダの動きが鈍ってる間にテオとウィリアムを連れてガスの範囲外に素早く移動する必要がある。

しかし、無理に無理を重ねてきたラスラにそんな余力が残ってるはずなかった。

(クソ、ここまでか：： ツ！)

意識まで朦朧としてきた。感覚が麻痺してしまい、息を吸うということが追いつかない。

「——おのれ、ヒュミテ」

背後からプリンダが迫る。

目は細く、豹変してヒステリックでも起こしそうな雰囲気を出している。

その両手に握られているのは戦闘で生じた鋭利な瓦礫片。

ガスでトドメを刺そうとしないところを見ると直接的殺傷性のある機能ではないら

しい。せめて、その情報だけでも持ち帰りたいものだ。

「死ね」

プリンダの無慈悲な声がラスラの耳にはとても大きく聞こえた。

「——ツア!!」

もう一つ、ラスラがよく聞く愛すべき馬鹿の声が聞こえた。

「ぎゃん!？」

その声でラスラの意識は完全に覚醒し、勢いよく起き上がろうとするが体が言うことを効かないことに気がつく。それと自分の体が誰かに引っ張られてることも。

「——大丈夫、ラスラ!？」

「ユ、ユウ」

どうやらガスの効果はないらしい。

ブリンダの後頭部を勢いよく蹴ったロレンツは素早く気絶したテオとウイリアムを背負う。

「ユウ!少しは移動できそうか!？」

「少しなら、大丈夫!」

「よし、なら一旦ここから撤退するぞ!」

しかし、そんなことを易々と許すディーレバツツのブリンダではない。後頭部を抑えながらヨロヨロと立ち上がる。

「行かせるか!」

再度ガスを出そうと手をかざす。ロレンツはそんな彼女に対して冷や汗を流しながら不敵な笑みを浮かべる。

「——させつかよ」

懐からハンドガンを取り出し、かざした手に向けて一発撃つ。

プリンダに一瞬の隙ができたところを確認し、ユウは予め手にしていた「けむりくん」をプリンダに向けて投げる。

「ちよ、むわ!!?」

その隙にロレンツと合流し、一気に駆け出す。

「ナイスユウ!」

「ロレンツも!」

二人は予め強奪しておいた車に乗り込む。運転席にロレンツが乗り込む、一旦これでギースナトウラを目指す。

「うし、とりあえずは逃げれたな」

「そうだね、でも急がないと!」

「——ああ」

デイスナトウラ封鎖体制が行われていて、まして住民の誰も彼もが外に出てない状態で車なんて走らせてたら狙ってくださいと言っているようなものである。

だからこそ止まらずに進む、それがユウとロレンツの判断だった。

「二、人共、す、まない。荷、物になってしま、つたようだ、それと、ユウ、お前腕、が」

「いいよ、助け合いは当たり前だから」

「そうだぜラストラ。誰だつて負けることも失敗することもあるんだからよ、そう気負うな。振り返るよりも前を向いてこれからをどう生きるか考えようぜ。礼なんて今更水クセエ」

「……そう、だな、すまない」

ガク、とラストラが今度こそ意識を失った。ウィリアムとテオは未だに目を覚ます様子はないが息はあるようだ。

「さて、一旦ギースナトウラと繋ぐぜ」

無線をギースナトウラに繋ぐ、繋がりはしたが、誰も応答はしない。

電波を拾われては厄介なのでなるべく長時間の連絡は控えたいが、これはおかしい。

「どういうこと、なの?」

「わからねえ。遮断されてるわけじゃねえ、となると、何かあったのか?あまり良い予感はないな」

※

アミクシオン、と呼ばれる機能がリルナには備わっている。

エネルギーの高速吸収に特化した機能であり、これによって他のナトウラでは十分、

二十分かかる活動エネルギーの充填をわずが数十秒で終わらせることができる。

エネルギーの充填を終えたリルナが愛用している水色のオープンカーに乗り込む。

「——待ってる、ヒュミテ共。そして、ユウ」

リルナが再び動き始める。

79. 亀裂

アステイがホクヤを連れて特別収容所の外へ出た時は夜になっていた。

中で一時間ちよつと、ホクヤの特に一番酷い左目の流血を止めてから、最短ルートかつ敵に見つからないように移動してたのだ。ホクヤが目を覚ます様子は今の所ない。

「……デビット兄」

置いてきた仲間のことも心配だが、彼は後から追いつくと言った。ならば信じてやるのが仲間としての筋だ。

今はホクヤを連れてギースナトゥラへ戻ることを考えたほうがいい。

ここで敵に見つかってしまえば、接近戦が苦手なアステイが一人で相手にするのは難しい。

物陰に隠れながら慎重に素早く移動をする。車さえ手に入れることができたら移動は楽になる。同時にそれは敵に見つかってしまう可能性を高めるということにも繋がる。

ホクヤが目を覚ましてくれたら、少なくとも状況は変わるかもしれない。だが、泣き

言を言つてる暇はない。

ホクヤは勝利の鍵、彼の存在がこの戦いを勝利に近づけることができる。

何としてでも目を覚ましてもらいたい。身長差と体重差のせいでアステイにとつては辛いものだが、それでもまだまだホクヤは軽い方である。

アステイが特別収容所の出口の門に差し掛かった頃、彼女の頭上に水色のオープンカーが現れ、そこから一人の戦士が降り立つ。

「——ッ、リルナー！」

「——また会つたなヒュミテ」

かなり高い位置から着地したにも関わらず、足を止める様子はない。

両手にインクリアを握りしめてゆっくりと歩き始めた。

※

「…… 思いつきり油断した」

「それはお互い様みたいだね。こつちも行方を辿れなくなつた。少なくとも、ワイヤレスで繋がる範囲内の監視カメラには映らない」

「悔しいわね、してやられたって感じ！」

プリンダとザックレイは合流しており、少しの間搜索を続けたが、見つからず断念し

て再度合流するという形となった。

「ねえ、なんか心当たりとかないの?」

「そんなこと言われてもなあ、地下は封鎖してるから行こうにも無謀。外に出るなら何かしら連絡がある。中央管理塔に行くのであれば監視カメラに映るはず……」

ぶつぶつぶつ、と眩きながらザックレイは思索を張り巡らせる。

もし、自分が彼らと同じ立場ならどうしているだろうか。

もし、自分が彼らならばどういう行動をとって反撃に出るだろうか。

もし、自分が彼らとしたら次にどんなアクションに移るだろうか。

もし、と自分ならば、を中心にザックレイの脳内は様々な思惑が駆け巡る。

これがザックレイの良いところでもあり、悪い癖でもあった。

「……レイ?」

「ん、どうしたんだプリンダ?」

「——私がさ、この街全体にガスを出すって言ったら反対する?」

プリンダの提案にザックレイは一瞬キョトンとした。

「……いや、たしかにそれなら確実だけど、対ヒュミテ用のにしてよ。ナトウラに影響のあるやつだったら後々の処理が面倒だから」

「つまり、レイは止めはしない、と。やっぱレイは私に優しいね」

「そんなんじゃない、地下も封鎖してるんだし、ヒュミテ共は地上に出るしかないんだ。地下に最初からいるならまだしも、地上のヒュミテ共は片付けることはできる。プリンダ、そのガスが街全体に浸透するまでの時間は？」

「大体二十分」

「わかった。僕は止めはしない、この際派手にやってやろう」

「ふふふ、そうね」

—— A H — B 40 ガス。

プリンダの持つガスの中でも一、二を争う強力な毒ガスである。

潜伏性、発熱性、さらには感染性をもある毒性のガスだ。発症し、高熱に陥りやがては死に至るといふ拷問や捕虜に使うことが多い。

現在エルンティアにおいて複数の種類のウィルスが混合しあつてる毒を解毒させる方法はない。

プリンダの両腕に強力な毒性反応が集中し、それを勢いよく外へ放つ。

ガスは空气中に漂い、二十分後には、デイスナトウラ全体に蔓延することになる。

「——さて、念のためにヒュミテ共を探すとするか」

ザックレイは近場の監視カメラに指を向けてワイヤレスによるハッキングを行う。

ザックレイの両手の指から放たれる特別な電子線が機器をハッキングするため、最高

で一度に十の機器をハッキングすることができると操作するのはザックレイのため、ハッキングする数が多ければ多いほど操作性が落ちるといふ弱点はあるが、監視カメラのような簡単な操作物なら問題ない。

「お前達もデイスナトウラ内を搜索、見つけたら僕に報告すること」

「ハッ！ハッ！」

総勢39名のデイクラン隊員もザックレイの指示のもと動き始める。

デイスナトウラでの戦いは佳境に突入する。

※

一方、ユウ達はギースナトウラの入り口にまで来て出入り口が封鎖されていることに気がついた。

「これは……!？」

「地上と地下を分離するつてのはこういうことだったのかッ！」

「クデイン達は、まさか中に!？」

目を覚ましたウイリアムは車内から顔を覗かせる。

「大丈夫、これくらい『俺』なら壊せる」

「お前はあまり無理するんじゃないやねえ！ テールボムがある！」

ロレンツがシャッターのような扉で封鎖された場所にテールボムを置いて準備を進める。

「ウイリアムさん、アステイ、他に入入り口は？」

「あるにはあるけど、距離がある。ここはロレンツの案で行くのが一番いいだろう」

「そうだな、迂回してディーレバツツと鉢合わせになつてしまつたら、テオを守りきれぬ自信がない。全員が手負いなんだ」

「少し離れとけよー」と言つたロレンツは全員を庇うようにして立つ。

今いるメンバーの中で最も負傷が少ないのはロレンツだ。

そのことを氣遣つてか、彼は嫌々言うことなく作業を進んで行つてくれた。

勢いよくテールボムが爆破し、ディースナトウラとギースナトウラを繋ぐ出入り口を開通させることに成功する。

「うし、途中までは車で移動しよう。中に入つちまえばこっちのモンだ！」

ロレンツが運転席に乗り込む。

しかし、ユウとラスラはギースナトウラの方をじつと見つめている。

「おい!? どうしたんだよ、二人共！ 早く乗れよ！」

「…………… 氣づいたか、ユウ」

「うん、これは——」

——違和感。

そう、僅かに感じられる死臭と籠りすぎた熱。

ムワツと風に流れてくる嫌な雰囲気は二人の肌べったりと貼りつく。

ロレンツも遅れて気がついたようで、表情を真剣なものに変える。

「……………どうなってやがる？」

「わからない。けど、さっき通信が繋がらなかったことに関係しているのかもしれない」
テールボムで破れるシャツターで塞いだだけでは、通信が遮断されるなんてことは考えにくい。

あまり考えたくないことだが、目の前の現実から目を背くわけにいかない。

後ろからも敵がいつやってくるのかもわからないのだから。

「どうする、隊長？」

「……………私の案でいいのかい？」

「多分、こん中で一番冷静だし頭が冴えてるだろう？」

「……………行けるところまで車で行こう。違和感を感じたら、車を捨てて撤退かそのまま進む。」

「……………この二択で行こう」

「——なら、決まったな」

ルナトープの隊長が具体的な案を提案し、副隊長が実際に動かす。

慎重なウイリアムと大胆なアステイだからこそ為せることだ。

「この先、何があっても先へ進む！ 倒れていった同胞達の為にも、助けたテオを無事にルオンヒュミテへと送り届けるために！」

ラスラの言葉に全員が頷いた。

ユウとラスラが改めて車に乗り、ロレンツが出す。

しばらく進んだところに一人のチルオンが倒れていた。

そのことに気がついたロレンツが車を停める。

「……ミレーナ」

そのチルオンはコアを正確に撃ち抜かれていた。

もしかしたら、何かを伝えようと外へ向かおうとしていた途中だったのかもしれない。

「……この中も、安全じゃねえのかよ」

ラスラとロレンツはネルソンの制止の声を無視して飛び出したことを悔いた。

どちらかが残っていればこの事態は防げたかもしれない。

「ネルソンとマイナ、クディン達もまだいるはずだ。先へ進もう、私は彼らを信じる」

「隊長、ここから先車は危険だ。仮に敵がいたとして、狙われたら出口がなくて対処が

遅れちまうからな」

「わかった、では車はここで捨てよう」

「じゃあ、私も『俺』に！」

ロレンツはテオを背負い、ユウは男に変身を済ませる。

地下のギースナトウラにはセンサーがないため、敵に見つかる心配はない。ラスラ、ウィリアムはそれぞれ互いに支え合う。

ユウを先頭にわずかに感じられる気配を頼りに先に進む。

全体的にまばらで弱々しく、個人を特定することは難しい。

しばらく進んだところで、ユウの無線に一つの通信が入る。

『ユウ!? ユウなの!?!』

「その声は、もしかしてレミか!?!」

『ええ、よかつたわ無事で!』

おそらく、ユウが男になったことでレミが気を拾ってくれたのだろう。

「レミ、ここで一体何が起こったんだ?」

『その声はウィリアムね! 他にも無事な人はいるの?』

「今ここにいるのは、ラスラとロレンツとテオ、それに私とユウだ」

『そう、なら気をつけて!』

「やはり、敵か?」

『違うわ、あいつが裏切——』

「うわっ!？」

瞬間、ユウの持っている無線が音を立てて弾け飛んだ。

破壊痕からして弾が飛んできた、つまり狙撃されたということ。

弾の飛んできた方向にユウが目を向けると、そこには見知った金髪が目映った気がした。

「…… マイナ？」

瞬間、ユウの頭と右肩、左胸に銃弾が飛来した。

「ユウ!？」

「大丈夫か!？」

「なん、とか…… ツ」

咄嗟に気を展開して防ぐことに成功する、もし男の状態じゃなかったら死んでたかもしれない。

スリーポイントスナイプ。

弾丸を一度に三度撃ち、狙いは頭と心臓、それに加えてどこか一撃を正確に狙い撃つマイナの得意とする技だ。

ホクヤ、アステイと訓練していた時に何度も視て受けていたから、対処することがで

きた。

「あれは、マイナなのか？」

「わからねえ。金髪ってことくらいいしかな！」

「そんな、信じられん……！」

ウイリアム、ロレンツ、ラスラが大きく動揺する。

ユウは慣れない右手に気剣を作り出し、腰を低く構える。

順にラスラ、ウイリアムもそれぞれスレイスを展開する。ロレンツとテオを中心に囲むような陣形を取り、どこから襲撃が来てもいいように備える。

——ファノンによるレーザー攻撃が飛んできた。

咄嗟に反応したのはユウでセンクレイズで僅かに軌道をそらす。何とか直撃は免れた。

次の攻撃が来るまでの僅かな隙を狙いユウは女へと変身し、ファノンの飛んできた方向とは反対の方向に銃弾を放つ。

当たって欲しくはなかった、たしかな手応えがそこにはあった。

「……マイナ」

瞬発的な攻撃だったが、急所は外したはずだ。

これまでの訓練でインプットしたマイナの癖。ユウとしては当たって欲しくない事

実であり、それは他のルナトープのメンバーも同様だった。

「…… ユウ」

「ラスラ、行こう」

それでも、現実を確認しなければ前には進まない。

たとえ、残酷な結果が待っていようとも。

80. 表裏一体

マイナ・スペンサー。

ルオンヒュミテの片隅にある小さな街区で暮らしていた少女はヒュミテ王テオに憧れを抱いていた。

この人の元で働けたら、何かこの人の力になれたらいいと。

飢饉が起こった際、不謹慎ながらもテオと一度言葉を交わしたその時から憧れを行動に移すことにした。

ナトウラと戦うレジスタンスグループルナトープ、今や姉ポジションにあるが、当時のマイナは最年少でウイリアムも若輩者だった頃だ。

やがて、多くの血を流しある戦場でプラトーと遭遇することになった。

狙撃手としての腕は圧倒的に上に立つプラトーに為す術もなかった。

それでも、これまで倒れた同胞達のためにもマイナは何度も立ち上がり、走り回り、プラトーの頭を狙い続けた。

やがて、動けなくなったマイナの元にプラトーが歩み寄ってきた。

テオが希望ならば、プラトーは絶望。同じ歩み寄り方でもマイナの感じる感覚は違うものだった。

——そして、この時のプラトーの気まぐれがマイナの命を救うことになり、人生で二度目の岐路を迎えることになったのだった。

※

「う、あ、が……ッ」

「……マイナ」

ドクドクと血が流れる右脚を抑えながら呻き声を上げるマイナの姿を悲しそうな瞳でユウは見下ろす。

右手をギュッと握りしめ、ゆっくりと口を開く。

「マイナ、どうして……？」

「ふ、ふふ、まさか、このタイミングでしくじるなんて、ね」

「——どうしてッ、こんな、ことをッ!!!」

ユウの後ろからラスラが涙目でマイナのことを睨みつける。

今にも斬りかかりそうな勢いだったが、ユウが右手で制止させる。

ラスラは今までにないくらい興奮している、彼女が側には話が一向に進みそうも

ない。

ウイリアムとロレンツはテオのことを考えて、少し離れた場所でこちらの様子を窺っているだろう。

本人に直接言ってもどうにかかなりそうにもない、仕方なくユウはこのまま話を続けることにした。

「…… トドメを刺さないなん、て、相変わらずの、甘ちゃんね」

「それが私だからね、この戦争はヒュミテもナトウラも悪くない。命を奪う必要なんてないでしょ？」

「…… そう、私も、思いたかったわよ」

ドスの利いた声、今までのマイナからは想像することもできないほど低い声だった。

「あの人は言ったわ、この戦争はヒュミテもナトウラも共に消え去る結末にあるってね」

「……」
「そして終わらそうと思えば一瞬で終わるってね、ナトウラの勝利という出来レースで！」

「…… どういうことだ？」

マイナの言葉に反応したのはラスラだった。

「おかしいと思わなかったの？ 何故、ナトウラ側にディーレバツツ、そしてリルナとい

う規格外の存在がいるのか。 私たちが束になっても勝つビジョンが思い浮かばない
圧倒的な存在がいるということに！」

右脚の傷なんて気にしないとばかりにマイナは話を続ける。

「——あのリルナは、この星とは違う星から送り込まれた、奴らの私利私欲のための存在なのよ！ 勝てるわけがないわ、それを聞いて私は馬鹿馬鹿しくなった！ それである人に協力した、上の存在に一泡吹かすために！ 私たちがパペットにならないためにねッ!!」

敵に命を救われ、体にチップを埋め込まれ、ヒュミテを人質に取られてマイナはもう
どうしていいのかわからなかった。

「少しでも、少しでも長く生き残るためにナトウラ側の襲撃は減った。 もし私があの
人と出会えてなかったら、こんな戦争、とつくに終わってるわよッツ!!」

——ナトウラの圧勝という形でね!!」

マイナは知ってしまった、この戦争が茶番であることを。

圧倒的な勢力を前に為す術もないということ、そして、ナトウラのバックについて
いる大きな力の存在も。

「なに、を……?」

「私は、私は……ッ!」

「それで？ そいつの言葉を鵜呑みにしたのか、マイナ」

——マイナに声をかけ、マイナの前に立ったのはラスラだった。

いつの間にか目に見える興奮は収まっており、怒りと悲しみを混ぜたような、ぐちゃぐちゃとした表情を浮かべている。

「長年の付き合いの私らのことを信じず、そんな、ちよつと会っただけのどこの馬の骨とも知れない奴の言葉をあつさり」と

「ッ!!」

「——なんで、なんで私らに一言相談してくれなかったんだ！　なんで、なんでこんな」
にボロボロになるまで一人で背負いこんでるんだよッッッ!」

「ら、ラスラあ……ッ」

——ラスラは悔しかった。

ルナトープの副隊長という立場上、隊員達の状態は日頃から見ておかないといけない立場であるのに。

ウイリアムと違い、雑務や細かいことが苦手だとしても皆を鼓舞することは大切な仕事だ。

それなのに、仲間の抱えている闇に気づくことにもできないだなんて。

マイナの両肩に手を当てるラスラは涙を流し、しやがみこむ。

ギユツと両手に力を込める。

「まだ、間に合う！ 知ってることを話してくれ、私は、マイナを、信じたい！」

「…… もう、間に合わない。 ネルソンと、デビットは、もう。 それに、アステイに

ホクヤも、もう助からない…… ツ」

「つたく、この期に及んで、お前は どうして私達を信用しない?」

「…… ギールⅡフェンダスⅡバラギオン、あれがある限り私達は、絶対に助からない
！」

記憶がフラッシュバックする。

どこで出会い、どんな目に遭ったか具体的には覚えていない、否、思い出せない。

マイナは小刻みに体を震わせたと思えば、口の中から溜まった何かを吐き出した。

それは決して、良いものではない。 辺りに吐瀉物が撒き散らされ、マイナの体が

ゆっくりと海老反りになって倒れる。

「マイナ!？」

呆然として反応できないラスラに代わり、ユウが駆け寄り、彼女の体を右腕で支える。

「ツ、すごい熱だ！」

「…… ま、マイナ?」

マイナの裏切り、膨大な情報量の放出、突然のマイナの異常にラスラはついていけな

かった。

数々の戦場で多くの経験をしてきた彼女だが、経験してない出来事の一つ二つと存在する。

「ラスラ！ マイナをウィリアムさん達のところに入れて行こう！ 彼女は私達の知らない何かを知っている！」

「あ、ああ」

立ち直ったラスラはユウに代わり、マイナを背負う。

恐らく敵はいない、封鎖されたギースナトウラの中でマイナが起こした混乱である。

とにかく無事にいる仲間達と合流して、一刻も早くテオを連れてディースナトウラを出発しなければならない。

——ぴちゃん、とギースナトウラのシャッターの入り口から足音と共にもう二度と感じたくない殺気の嵐がユウを襲う。

「……リルナツ!!」

顔を合わせたわけではない。

気を察知したわけでもない。

直感、ユウのここ数年の経験と生存本能が直感として最凶の存在を察知してしまった。

一瞬、とてつもない吐き気に負けそうになるがグツと堪えて、男に変身する。

「ユウ!？」

「ラスラ、先へ行つてて！ リルナが来た！」

——戦うしかない！

ここで自分が戦わねば、皆殺されてしまう！

「——う、うああああああああああああああああ!!!」

喉が裂けんばかりの咆哮と共に、右手に生成された『センクレイズ』は一時的に世界という許容性を無視して、大きく横薙ぎに振りかざされた。

81. 黒い憎悪

『フン、つまらんな』

『ホ、ホクヤ君、は、皆は、私が!!あ、ああ、あああああああああああああああ!!!』

『……もういい』

『——ユウの居場所を教えろ。心当たりでも構わん、そうすれば見逃してやろう』

『……は?』

『興が冷めたと言ったのだ、貴様程度いつでも殺せる』

『な、仲間を売るなんてこと!私は——』

『これ以上、私を苛立たせてくれるなよ?』

※

『……ここ、は?』

『ホク、ヤ、君……』

アステイ、よかった、無事だったのか。

目は、やつぱり潰れてやがるな。視界が悪すぎる、血は止まったみたいだが傷は塞がるにはまだ早すぎるか。

体も動く、熱も引いてる。一先ず右目が見た目グロテスクになつてるし、こいつを巻いておこう。

傷口から細菌が入りでもしたら、再生が遅れてしまう。

「……アステイ？」

「ひぐ、うっ、うう」

「俺はどれくらい気を失っていたんだ？ 今状況はどうなつてるんだ？」

右目にバンダナを巻きながらアステイに問いかけるが、嗚咽しか返つてこない。

……リルナと思われる熱気が凄まじい速度で移動している、ていうかあれ確実にリルナだな。

あんな殺気を出して動き回る奴、この星に来て他にあったことがない。

「ほ、ホクヤ君、私、わ、私……！」

「無理すんな、守ってくれてありがとうがどうな」

アステイは俺を守ってくれた。

現に俺がこうして話をしていれるのが事実だ。どうやら少し寝すぎたみたいだ、身体が気怠くて仕方ない。

「アステイ、俺に掴まれ」

「え？」

「——プラトリーのクソ野郎はもちろんぶつ飛ばすが、まずはあの殺気立ててるリルナを止めに行く」

テンションは上がってきてる。

——さあ、反撃開始だ！

※

リルナを相手にユウは五分と保たなかった。

万全な状態であればリルナの剣閃を受け止め、弾き飛ばすことくらいは容易くできたであろう。しかし、片腕を失い治療もままならず体力も回復してない最悪のコンディションのユウは立つてられるのもやっとであった。

「——ハア、ハア、ハア！」

「しぶといで、ヒュミナー！」

対するリルナは冷静ではあったが、苛立ちを覚えていた。

いや、冷静だからこそ物事を正常に判断できるからこそ苛立っていたというほうが正しいのかもしれない。

ち苛立ち苛立ち苛立ち——!!

何度も何度もリルナはユウのことを一方的に蹴りつける。この場で首を刎ねてしまえばそれで終いだが、それでこの苛立ちが収まる気もしない。

この奥にいるかもしれない潜んでいるヒュミテを殺すことも忘れ、リルナは狂気に顔を歪め、胸の内に秘めたドス黒い何かを外へ出そうとユウを痛めつける。

「——クソ、が!!」

齒軋りを立て勢いよくユウを蹴り飛ばすが、それでも苛立ちは収まらない。

勢いよく壁に激突し、下水道の通路にユウが大の字になって倒れる。

ピクリとも動かなくなつたユウを一瞥し、踵を返して奥へ向かうことにした。

こんな八つ当たりをするなんて、本当にらしくないと舌打ちをしながらリルナは一度目を閉じて冷静になるように努める。

思えばここまで苛立つたことなんて今の今まで一度もなかった。ユウと対峙しても、ヒュミテと対峙してもここまでの憎悪を覚えることなんて一度も——

「——気は、済んだ?」

もう聞くことはない声が響き、リルナの足が止まる。

静かに振り返るとそこには大の字で横たわるユウの姿があつた。そう、それはさつきまでと何も変わらない。

しかし、リルナは明らかにユウを見る目が変わっていた。それは本人でさえも気がつかないくらい微妙な変化。

「貴様、まだ……ッ！」

「もう気は済んだ？ 蹴りつけるだけ俺を蹴りつけて、それで君の気は晴れた？ それで君の迷いは消えた？ それで君の鬱憤は晴れた？ それで——」

「だ、まれエ!!」

——セルファノン。

本来であれば自分と同等の素早さのユウを相手に悪手ではあるが、今のユウはその場から動くことすらも困難な状態にある。

リルナの突き出した両腕がガシヤン、ガシヤンという駆動音とともに砲撃に適した形態へと形が変わる。

「——ターゲットロックオン、エネルギー充填開始。10、30——」

キユイイイイイイイ、と青白い光が砲口部分に集中していく。

本来であれば10%充填できれば十分であるが、相手はあのユウだ。可能な限りエネルギーを集中させて放ちたい、万が一にも備えて。

しかし、あまり威力が高すぎるとギースナトウラが崩壊しリルナ自身も巻き込まれてしまう可能性が高い。

セルフアノンのエネルギーを充填、発射してから数秒の間はリルナは無防備になってしまう。

絶対防御のデイトレスも一時的に機能しなくなってしまう。

「——50%、セルフアノン発射」

青白い閃光が辺り一面を埋め尽くし、超高濃度のエネルギー波が放たれた。

ギースナトウラ全体が震え地盤が緩み天井が崩落してくる。

たとえこの状態で生きてたとしても生き埋め、生き残る術はないと今までのリルナであればそう判断していた。

今までのリルナで、相手にしているのがこれまでのヒュミテであるなら尚更である。

しかし、リルナはユウの死をこの目で確認するまでは動くつもりはなかった。

セルフアノンのインターバルが終わり、デイトレスを展開しながら粉塵の中を進む。崩落してくる岩盤を物ともせずに関前へと進む。

視界は悪いが、人の形を見つけないこと自体はそこまで難しいことではない。

「——そう、こちらからではなくあちらから接触してくる可能性だつてあるのだから。」

「——ツツ?」

「——あ」

淡く白い光をまとったユウの右手がムチのようにリルナの顔面を弾く。

(デイトレスが、ホクヤの時と同じように機能しない、だど!?)

正確に言えば、ホクヤの時にはデイトレスは機能していた。機能してる上でダメージを与えていたのだ。

しかし、今回は明らかにデイトレスが機能しなかった。デイトレスの反応速度を超えてきたのだ。

リルナが目にしたのはさつきまで自分の立っていた場所に、静かに佇む白いオーラを全身から放つユウの姿だった。

「奴め、まだあんな力を！」

パストライヴで一気に距離を詰め、インクリアで首を刎ねに行く。

長期戦は危険であると判断したリルナはユウの首目掛けてインクリアを振るう。

「——おかえり、今日は、早かったんだね」

場違いな発言。

しかし、ユウはリルナの攻撃を避け裏拳でリルナを吹き飛ばしていた。

「が、はっ!?!」

その反撃を最後にユウは糸が切れた人形のようにパタリとその場に倒れこんでしまった、白いオーラも空気に散るようになって消散する。

立ち上がったリルナは倒れたユウを見下ろすように睨みつけ、今度こそ忌々しきヒュミテの一匹を殺すとばかりに。

しかし、リルナの第六感がこの場に留まることを危険だと告げていた。

崩落も進んでいる、これ以上ここで時間を割いてしまえば脱出が困難となってしまう。残りのエネルギー残量も考えてここが引き時なのかもしれない。

——だが、やはりこいつはここで殺す。

思考を殺しインクリアを展開し、ユウの首と心臓を一直線上で結ぶ位置に向けて斬撃を放つ。

しかし、リルナはこの時点で既に間違っていた。

働いた第六感は崩落の危険性を察知したものでなかった、新手、つまりリルナにとっての脅威がこの場にもうすぐ現れるという前兆にすぎなかったのだ。

「——ユウさんから離れる!!リルナ!!」

「——ホクヤア!!」

文字通り飛んできたホクヤの蹴りをリルナは両刃を交差した状態で受け止めた。

やはり、あの時殺しておくべきだったと激しい後悔と共にそれ以上の憎悪が溢れ上がってきた。

8 2. ホクヤ、地下を破壊する

リルナの絶対防御のようなものの上から攻撃は通らない。しかし、リルナの位置を動かすことはできる。

そう思った俺は地下の入り口から助走をつけて全力の蹴りをリルナに向けて放った。結果、リルナをユウさんから引き離すことに無事成功した。ユウさんは左腕が斬られていた。まさか、あのユウさんがここまで追い詰められてるなんて、俺がもつと上手く立ち回れていれば！

「頼むアステイ！ ユウさんを連れて安全な場所、もつと奥の方へ！ 殿は俺がやる！」
「う、うん！ ユウ君、こんなポロポロに、わ、私のせ」

「——懺悔は後で聞いてやる、その前に俺たちが生きなきや皆に会わせる顔がねえ！」
片や生き残るために、片やそれが最善と思ひ身勝手をしたことで起こった事態だ。

リルナはここで俺が再起不能にする！

「行け！ できるだけ遠くに！！」

「ホクヤ君！ ルオンヒユミテで待つてるから！」

アステイの涙が横切る、俺は振り返らない、否振り返るわけにはいかない。右の親指を上げるサインだけを送る。

さて、片目のない状態でどこまでやれるかが問題だ。

「——やれやれ、まさか私がこうも簡単に吹き飛ばされるとはな」

「簡単さ、あんたの身体はまだ軽いからな。ダイエットでもしてんの？」

「フツ、皮肉を言う余裕があるとは驚いたぞ。もう立ってるのもやっとなんじやないのか？」

「——強がって何が悪いってんだ？ そいつを原動力として力に変えるのが俺の能力なんだ。仲間達は追わせやしねえぞ!!」

——体力的にも持久戦は不可能!

アステイが逃げる時間を稼ぎたいところだが、そうもさせてくれなさそうな相手だ。

余力を残しての勝利の望みは薄い。最初から今出来得る限りの「テンション」を全開にして、ユウさん達を拾ってデイスナトウラからは一旦おさらばだ!

「——ッ!」

「おお、おおおおお!!」

今の蹴りで沈んでくれたら楽だったのにな!

蹴りの余波に「テンション」のオーラを少し流し込み、俺たちを中心に衝撃波を引き起こす。リルナの姿が消えた、パストライヴによるワープだな。

熱源探知からリルナの出現方向を特定、お返しとばかりに回し蹴りを打ってきやがった。

「——なるほど、見様見真似だった。がこれは使えるな」

「まだまだ型はヒヨッコだなッ！」

危ねえ、脚からインクリアなんて出されたりしなくて良かった。

けど、撃ち合いが長引くとやっぱ不利になるってことには変わりなさそうだ。

少しずつだが、リルナの蹴りが鋭さが増してやがる。

体術はともかく、機動力はリルナの方が上手なのは確かだ。これじゃますます勝ち目がなくなってくる。

それにこっちは疲労もするし、何より片目が見えない状態だ。

左側からの攻撃はほぼ死角からの一撃に等しい。熱源探知があるっていつても僅かなタイムラグがあるのもたしかだ。

せめて完全な状態だったなら完封できたのに、それにこんな強い奴と正面からぶつかるなんてことはそうそうないんだ！

状況が状況だからあまり宜しくないかもしれないが、リルナとの戦闘がたまらなく楽

しい！

「——テンション、上がってきたぞ！」

バチイ！という音が響く。

リルナの腹部にダメージを与えることに成功した。　どうやら【テンション】がある一定まで上昇するとリルナの絶対防御の守りをぶち壊すことができるみたいだ。

本来なら少し熱を持たせたかったが、病み上がりの状態でやってしまえばかなり危ない。

体調が万全じゃないと、逆に俺自身の身体が保たなくなる。

「——ッ、クソ！　何故ディートレスが機能しないんだ!？」

「へえ、あの絶対防御、ディートレスってのか!？」

見様見真似のラストライヴ擬きとラストライヴが連続して空間を歪めている。

俺のは歪んでるのはわからないけどな、誤魔化し程度の高速移動をしてるだけだ。リルナが俺の蹴りを盗んだってなら、俺だってお前の能力少しでもぬすんでやるよ！

これでおあいこだ、リルナが苦い顔をしているのがよくわかる。

「案外脆いんだな、その守り」

「だ、まれえエエエエエ!!」

——ハイパーアタックモードへ移行。

リルナの小さな眩きを俺は聞き逃さなかった。そこからリルナは防御を捨てた超高速の攻撃に戦闘スタイルを変えてきやがった。

まさか、ナトウラつてのはこうも簡単に戦闘スタイルを変えることができるのか!?

「ぐ、ぎゃー!」

脇腹に切り傷を負ったが、深くはない。出血もそのうち止まる。

ここであれが使えたら良かったが、生憎あいつらの為にも今ここで身体をぶち壊すわけにはいかねえ。

ならば、どうするホクヤ・フェルダント。

最善を尽くせ、最良の手段を取れ!

超高速で動くリルナの左脚を捉え、そのまま地面に叩きつける。

どうやらディートレスは一時的に機能してないようだ、なるほど、まさに防御を捨てた攻撃だったな。

「——ここまでだ、リルナア!」

■■■■■■——ツ!!」

獣にもノイズにも似た、もはや声になってない叫び声をリルナが上げる。

彼女の身体の一部から凄まじい熱反応を感じる、これが原因か!

——メス!

不恰好な気状の針でリルナの胸の少し上を突き、熱源反応を破壊する。

人体に直接的な影響を与えることなく、細菌や異物を破壊する医療技術がこんなところで役に立つとはな。

食人植物とのサバイバルのときは一時的に動きを止めれることもわかった、これでリルナの動きを一時的に止めて隙を作れる。

あの人の闇医者稼業に付き合ってたのは無駄じゃなかったか。

リルナの動きが一時的に止まったその一瞬を狙い両腕に気と「テンション」を集中させギースナトウラの地面に向けて溜め込んだ気を放つ！

「——気震砲!!」

ドゴオオオオオオオン!!と俺の両腕から放たれた気の塊は衝撃波となり、バキバキバキバキ!とギースナトウラ全体に亀裂が走り、床から天井へと一周しデイズナトウラの方面から崩落していく。

「なっ、——くっ?!?!」

リルナはパストライヴでこちらに向けて飛んできたので、リアットで崩落の中へ押し戻しておく。

瓦礫の中でリルナはこちらに飛んでくる様子はなく、反対側へと向かっていった。

どうやらこちらへ来るのは無理だと判断したらしい、俺がいるからか、あまりの勢いに

対処が間に合わなかったかは俺にはわからない。

——先を急ごう。

亀裂がこちらにも迫ってきた、崩落に巻き込まれる前にアステイとユウさんを回収してデイスナトウラから脱出する。

俺はアステイが走った方向へ残った力を使って飛ぶ。

自分でやつといてなんだが、崩落が思ったよりも早い、急がないと！

ユウさんを背負った状態ならそこまで遠くへは行けてないはず、見逃さない程度の速度で飛ばないと通り過ぎてしまう。

「アステイイイイ!!」

そんなに時間をかけることなくアステイを発見できた。

あつちはよくわからない顔でこつちを見ているが、ツベコベ言ってる状態じゃない！

「ほ、ホクヤ君!」

「説明は後、俺に掴まれ!」

我ながら無茶を言ってるのは承知だ、それでもアステイは俺のことを掴んでくれた!

「——地下が崩れる、飛ばすぞ!! 舌噛むなよ!!」

全速力！

崩落の速度よりも疾く、風になるように飛ぶ！

この調子でいけば崩落に巻き込まれることはない、だが、リルナが追ってこないわけではない。あの女のことだ、崩落した瓦礫を排除してでも追いかけてくるはずだ。

リルナに斬られた脇腹の傷が開こうが関係ない、どうせ痛みは誤魔化せてる。痛覚で意識がぶっ飛ぶことはまずない。

前方を走行する熱源反応を頼りに前へ前へと進む。おそらく、ルオンヒュミテへと向かう集団だ。

つまりギースナトウラの住人達、それとルナトープのメンバーだろう。

数が少ないのが気になるが、それでも今は頼るべき指針として進むしかない！

——目の前の熱源反応が止まった？

「クソ！ まさかここまで閉鎖されてるなんて！ テールボムは!?」

「俺のはもう使っちゃった!」

「く、いつ追っ手が来るかもわからないというのに!」

なるほど、シャッターがあつたのか。

——なら、あれをぶち破れば問題ないんだよな？

「アステイ、一回降りるぞ」

「え、あ、うん」

アステイとユウさんを一度降ろし、助走の態勢を取る。

拳に今までの熱を集中させるんだ！

「——お前らアアアアアアアア!! そのシャッターから離れるオオオオオオオオオ
!!!」

「こ、この声!?!」

「ホクヤ!?!」

——ここからなら、直接触れなくても穴くらい空けれる!

——紅蓮気爆拳!!

拳を振るうと大気が震えて地下全体が震えた。

目の前の障害だったシャッターの中心部は熱で溶けたような大穴が開いていた。

開けたんだけどな。

「このまま止まらずに行くぞ! ルオンヒュミテ!!」

崩落は徐々に迫ってきている!

※

その頃、脱出に成功したリルナは地下の入り口でセルフアノンを撃ち続けていた。

セルフアノンのチャージ時間やエネルギー消費量を考えて多用はできないが、ここで逃してしまえば次捕らえるのは困難だということはリルナ自身がわかっていた。

「クソ、舐めた真似を……!!」

「リルナっち!」

「その声、トラニティか!」

三度目のセルフアノンを撃ち終わった時、リルナの側には部下であり仲間でもあるトラニティが立っていた。

様子から察するに今リルナのマーキングデータを頼りにトライヴしてきたものと見られる。

「いいところに来た、奴らを追跡する!　トラニティ、力を貸してくれ!」

「……　リルナ隊長、百機議会が呼んでる。　奴らの追跡よりもまずは顔を出せとのこと」

「なっ……!!?」

何故このタイミングで?

リルナ達は押されているわけではない、むしろ押しているくらいだ。

向こう側の主力となっていてユウとホクヤを抑えているのだから。片や左腕を失

い負傷、片や左目を失い満身創痕の状態。

ここから追い打ちをかければ確実に仕留めることができる相手なのは誰が見てもわかる。

「どういうことだ!？」

「私にもわからないっすよ、ただ伝えろと言われただけ……」

「…… チツ」

トラニティは本当に伝令を命じられただけなのだろう。そのことはわかるが、狩れる獲物を前にして背を向けるということがリルナにはとても許せなかった。

しかし、あの呼び出し相手が百機議会なのだからどちらを優先させるかなど決まっている。

「仕方あるまい。呼び出しには応じるか」

「リルナっち……」

「心配するなトラニティ、私が不在の時にでも動けるのがディーレバツツだろ?」

リルナの微笑みに応じるように街の中から二人の人物が手を振る。

プリンダとザックレイだ。どちらも特殊部隊ディーレバツツのエリートである。

「やれやれ、隊長さんが不在になるなら僕らが動くしかないみたいだね」

「心配しなくても大丈夫よ。そろそろ私の蒔いた毒が奴らに効き始める頃よ、何もしなくても死んでくれる可能性もあるわ」

「だとしても毒を吸い込んでない可能性もある、特に地下にいた奴らとかな」

「……ふふ、それもそうね」

互いに足は止めなかった。

リルナとトラニティは百機議会の待つ中央施設へ、ザックレイとプリンダはギースナトゥラの中へと向かうのであった。

言葉を交わす必要はない。ディーレバツツにはそれだけの信頼が寄せられているのだから。

83. How to World

ユウさんの左腕の止血を濟ませ、ウイリアムとマイナの治療を進める。

『エクリサリテル』で培った治療技術は宇宙随一である。様々な人種の身体構築パターンからどのようにして治療を施せばいいのかは身体が覚えてる。

(……いっは)

治療を進めていく中で改めてヒュミテの特異性がわかってくる。いくら機械技術の進んだこの惑星でもウイルスの一つや二つは存在するはずだ。

それなのにウイルスに対抗する抗体と呼べるものがほとんどと言ってもいいくらい構築する力がない。

それはウイリアムもマイナも共に言えることであつた、フェバルであるユウさんの身体は至つて普通だつた。

ウイリアムの治療は気で自己再生を促進させる治療で済んだが、マイナの身体はウイリスが身体を蝕んでいた。

中々にタチの悪い潜伏型のウイルスだつた。ユウさんから採取した血清の中に抗体がなければ彼女の治療はウイリアム以上に荒いものとなつていたかもしれない。

ユウさんの血清から抗体だけを抽出してマイナの身体に移す作業が一番難航した。細かい作業は苦手なんだ。

「ホクヤ、三人の様子は？」

「一通り診た。意識は失ってるけど、命に別状はない」

「……まさか、お前が医者だったとはな。未だに信じられんぞ」

なんか失礼なこと言ってるぞ、この脳筋副隊長。

「そこはいい、俺はマイナがどうしてこんなことになってるのか気になる。それと、俺の独断でこうなってしまったことは本当に申し訳ねえと思ってる」

「……お前にも考えがあったのだろうか？ そのことについてロレンツ達と話し合うからお前も来い」

「ああ、わかった」

俺たちを乗せた列車は地下の道を辿りながらメーヴアへと向かっている。

そこで物資の補給しながら身を潜める予定だ。デイスナトウラとの道は俺が地下を崩落させといたので時間稼ぎにはなるはずだ。そうそう簡単に追手は来ない。

揺れる列車の中、一番広い場所にルナトープメンバー及びギースナトウラの中心メンバーが集まることになった。

ロレンツ。

ラストラ。

アステイ。

レミ。

テオ。

そして、俺。

「テオさん、あんた本来なら寝とけと言うところなんだけどな」

「ハハハッ、そういうわけにもいかないよ。なにせ、僕が寝てしまえばこの会議を仕切る人物がいなくなる。これだけは許可してほしい、ドクター」

「…… 体に負担かけないように、特に叫ぶとか厳禁な」

まあ、戦闘ではないのだからそこまで大きな負荷にはならないと思いたい。

他に生き残ったギースナトウラのチルオン達数名、見た限り数は半分ほど減ってしまっている。

「さて、まずは僕を助けるために全力を尽くしてくれたことに感謝する。ドクターホクヤも、旅人の身分であるにも関わらず危険を冒してまで力になってくれたことに礼を尽くしたい」

「…… いえ」

今は眠ってるユウという者にもね、とテオは付け足す。

「じゃあ、いいか？　まずは俺が聞きたいことは一つ。ホクヤ、どうして勝手に一人で動いた？」

「……相談せずに俺の判断で動いたことは悪いと思ってる。だからこそテオさん、あんたに確認したいことがある」

「なんだい？」

「——あんたはなんであそこに捕らえられていたんだ？　それと二日後にあんたが処刑されるって公表されてた情報は事実なんすか？」

俺が疑問にずっと疑問に思ってたことだ。

仮にも対立してる相手の主導者を捕らえる必要があったのか、わざわざ情報を揭示してまでも処刑する必要があったのか。

そもそも公表された処刑日というのは本当に正しいのか。

「なるほど、それが君が動いた理由かい？」

「……察しがいんですね、エスパーカーなんかですかい？」

「えす？　その言葉の意味はわからないが、君の質問に答えよう」

「——まず、捕らえられていた理由としてはヒュミテのレジスタンスの生き残りを誘き寄せるため。これは見張りの看守が雑談をしていたからたしかだね。

次に処刑日、これに関しては誤報だ。僕は明日処刑されると聞いていた」

「なっ……!!」

大きく息を呑んだのはラスラだ。

今の今まで信じてた情報が虚偽だと知ったのだから当然のことだと言える。

「この情報はどこから?」

「…… デイースナトウラで報道されていた。 クデイン達もマイナやネルソンだつて

裏を取っていた」

「…… なんだよ!?! つまり俺たちは作戦決行どころか、誤報に踊らされて、大前提から

間違つてたつてことかよ!?!」

しかも彼らは見事に誘き寄せられた。

今回テオさんを救い出せはしたが、被害状況から見ると彼らは負けたも同然つてわけだ。

「ホクヤ君、このことに気付いて」

「正直俺も不確定要素は多かったから確信を持つてたわけじゃない。 もし、俺がナ

トウラなら同じことをするつて考えたんだ」

「…… あんた、脳筋じゃなかったのね」

「うっせえ」

だが、俺の独断で皆を巻き込んでしまったのは事実だ。

「ホクヤ……」

「急いだが方がいいって思ったけど、一言連絡すればよかったと思ってる。悪かった」

「……その話を聞かなきや俺はもう片方の目も抉り取ってた」

「せめて脚か腕にしてくれ」

「デビットが、あいつが逝つちまったのがお前の勝手な行動があいつを殺したって考えたら仲間なのにお前を恨んでしまった。 けど——」

「——ここでホクヤを恨んでもあいつもあいつらも帰ってこない。俺たちは前に進むしかないんだ」

「ロレンツ」

「だーかーら！ そんな顔すんな！ 俺たちルナトープは全滅したわけじゃない！ まだ俺たちが生きてる、あいつらの為にも俺たちがこの戦いを終わらせるんだ！」

…… ロレンツ。

俺は知ってる、ロレンツとデビットの仲の良さはルナトープの中でも折り紙付きだ。

割り切れてるはずなのに、それなのに俺のことを仲間と呼んでくれるお前が俺には眩しすぎる。

「戦場のラツキーボーイの俺を連れてけばよオ、結果は変わってたかもしれないよ、あいつ、デビット、う、ぐ、先に、逝きやがって……！」

「……辛いと思うが、被害状況の確認といこうか」

「そう、だな」

デビットは戦死。

ネルソン、クデイン、リュート、はマイナによって射殺。

ギブルとアムダ、パルナドは生死不明。

「……まさか、ネルソンさんが」

「マイナ姉、に？」

——マイナの裏切り。

プラトーの野郎の言ってたことが繋がった、内通者はマイナだったのだ。

俺が奇襲を仕掛けたにも関わらず、対応が迅速だったり警備が強くなったりと何者かが情報を流しているということとはあり得ることだ。

おそらく作戦決行日と処刑日がズレていたのも彼女が情報を操作していたからと思われる。

「洗脳か？」

「……私も最初はそう考えたんだけどね、マイナさんの身体を診たホクヤが真偽はわかるんじゃないの？」

「……あつたといえれば彼女の身体を蝕んでいたウイルスだ、けど直接洗脳に関わって

いたとは考えにくい」

あれは病原体の類だ。

あんなもので他人のことを操るなんてことはできない。

不自然なくらいの感染具合だったため人為的なウィルスの可能性も捨てきれない、洗脳でなくてもあれで動きを制限されてたことは考えれる。

「そん、な……」

「落ち着けアステイ」

「……ひとまずこの話は置いておこう。マイナが目を覚まさないと聞くことも聞き出せない」

「そうだね。僕も少しドクターに聞きたいことがある」

「……なんすか？」

「まず、左目は本当に平気なのかい？」

「ええ、止血も済んでます」

あとは適当な眼帯を見繕えばいいだろう。

いつまでもバンダナを巻いとくわけにはいかない。

「で、本題は？」

「——君の目から見て、僕たちの世界はどんな風に映る？」

84. Worried

ヒュミテ第二の都市メーヴア。

ルナトープ+ α 一行は一度立ち寄り、ルオンヒュミテへと向かう前に休息と物資の補給に専念する。しかし、デイスナトウラの追手もやってこないとは限らないため、あまり長居することはできない。

ユウが目覚めたのはメーヴアに到着し、ホクヤとロレンツが買い出しから戻ってきたときだった。

「ユウー!!」

「ユウさーん!!」

「え、ちよ、二人共!?! ど、どうしたの!?!」

大の男が二人涙を流しながら戸惑うユウに抱きつくのだから当人が困惑するのも当然である。

わんわんと泣く二人の抱擁を片手で受けながらユウも戦いが一段落ついたものと判断した。

飲み物を運んできたラスラに奇異な目を向けられるのも当然のことだと言わざるを

得ない。ホクヤはラスラが来てから行く場所があるとそのままどこかへと行ってしまった。

「……そっか、みんな」

「けど俺たちが生き残った、そのことは素直に喜ぶべきだと思うぜ！」

「ああ、だが安心ばかりはしてられん。奴らのことだ、足止めしたとはいえ追いかけてくるのは時間の問題だろう」

「ったくよ、相変わらず固いなラスラ。こんなときだつてのに素直に喜ぶべきだろ、そんなんだからいつまで経つても独り身なんだよ」

「なっ、余計なお世話だ！」

「は、ははは」

あの戦いの犠牲は大きかった。

それでも、生きてるものたちがいる。それだけでもあの戦いは無駄ではなかった、一歩前進することができたのかもしれない。

ヒュミテもナトウラも本来であれば殺しあう必要はない。ユウはその直感を確信に変えるためにこの先に進み続けなければならない。

「そういえばアステイは？」

「アステイならずとあそこだ、多分ホクヤもそこに行つたんだろ」

あそこ、と言うときつき二人が説明してくれた場所のことだろう。

「マイナ、のところだよね」

※

ユウさんも目が覚めた。

ウイリアムはここでリタイア。

テオは非戦闘員。

皆で相談してメーヴアに滞在するのはあと二日。

本来ならもっと早くに出発してもよかったのだが、思ったより傷は深いようだった。

このまま先に進んでも安全にルオンヒュミテに到着するかと言われれば微妙なところだ。

なら少しでも万全にする必要がある、テオとウイリアムがそう判断した。

——それに。

「アステイ」

「あ、ホクヤ君。また行くの?」

「ああ、あいつには聞きたいことがある」

一番心理的なダメージを負ったアステイ。

今ではある程度回復したように見えるが、メーヴアまでの道中は酷いものであった。話しかけても上の空、酷く沈んだ様子だったものの、皆のお陰で立ち直れはしたみたいだ。

「…… マイナ姉」

「俺も信じたくねえよ、デビットに合わせる顔がねえ。　けど、あいつは情報を持っている」

こういったことは本来馬鹿な俺がやるべきことじゃないが、マイナの身体を蝕んでるウイルスをどうにかしないとイケない。『エクリサリテル』で学んだことを活かせば抗体を作るなんてどうってことないが、どのようなものなのかを調べる必要がある。

あのときはユウさんの身体に偶然抗体があつたから応急処置はできたが、あくまでも応急処置に過ぎない。

完全に治療するためには血清から薬を作らないとイケない。

「真意を確かめたいなら一緒に来るか？」

「…… まだ、顔を合わせれる気がしないからいい」

「そうか」

アステイとマイナの仲は新参者の俺でもわかるくらいに良かった。だからこそシヨックが大きい、いや、どちらかという信じられない、信じたくないところか

な。

重い扉の鍵を解き、ギイイイと音と共に扉は開かれる。簡易独房の扉自体は文明をわざと遡った造りにしているらしい、電子による情報上書きによつて誤作動を防ぐためとか他にも色々理由はあるらしい。

独房の中にいるマイナは静かだった。

天井から吊るされた鎖で両手を拘束され天に向け、こちらを睨みつけている。

「……マイナ」

「裏切り者の私に何か用かしら？」

「とりあえず服着ろよ、一応持つてきたからよ」

「この状態で着ろつてホクヤさんもいじわるね、鎖を解いてくれるの？」

「羽織るだけでもいいだろ、鎖は解けねえ。お前には聞きたいことがある」

もし、マイナがプラトリーの言う内通者であれば俺のことも知らされてるはず。

「メノ部族」

「……？　それが聞きたいこと？」

「いや、なんでもねえ」

どうやらプラトリーを直接殴るしか答えは出なさそうだ。この世界でメノ部族がどのような位置付けになっているかはわからないが、大々的に知られているわけではな

い。

「身体の調子はどうか？ 見た感じ熱も引いてるみたいだが」

「…… まさか、敵を心配するなんてね」

「違うだろ、マイナは敵じゃない。 同じルナトープのメンバーだ」

「違わなく、ないわよ」

彼女の言葉一つ一つに戸惑いが生まれてる、やっぱし裏切ったのは不本意だったか、そうするしかない状態だったってことか。

「少なくとも俺はお前を仲間だと思ってる」

「…… ツー！」

この世界に来て理由もわからずに追い回された後で俺のことを受け入れてくれたんだ。

けど、これは俺が言ったところでマイナを動かすキツカケにはできない。俺以上に付き合いが長くて、俺以上に仲の良いあいつら、その中でも妹分の言葉でもないとな。

「一応診察はさせてもらうぜ」

「…… ホクヤさん、医者だったの」

「一応な、これでも患者のことを中途半端に放り出すような半端者じゃねえのかたしかだよ」

信じられない、とても言いたげな目を向けられているのが大変心外である。

マイナの身体を蝕んでるウイルスは一時的に活動を抑えはしたものの、またいつ再発症を起こすかわからない。

ユウさんの体内にあった抗体とウイルスを殺すために調合した特製細菌を指先の気で生成した針で注入する。

「……んっ」

「我慢しろ、すぐに済む」

これで恐らく一週間は保つ。ヒュミテの体内はどうも俺のよく知る人体とは異なっており、外部からの細菌に真っ先に対応するはずの好中球が存在していなかった。

広い宇宙から様々な人種の患者が集まる『エクリサリテル』でも見たことのないケースである。生物が生存している場所に病原菌はどの世界でも存在し、関わりのあるものだからだ。

あまり詳しいことはわからないが、この世界は少し特殊に思える。しかし、だからこそ後天的免疫も侵食する速度は早いはずだ。

「さて、今日はこんなところかな。マイナも簡単に口を割ってくれそうにないし」

「……ねえ、デビットは、どうなったの？」

「……死んだよ」

彼女の目を見ることなく応えた。

※

——デビットが死んだ。

その言葉の意味を受け止めぬのに時間は大して必要なかった。

直接手を下したネルソンとは違い、デビットはディーレバツツに殺された、そう考えるのが自然である。

あのととき、ホクヤさんの増援に向かうと飛び出したデビットは誰よりも早く動いたのだ。 出発間際、私のところに来て言いくそうに口下手な彼が言った言葉が印象に残ってる。

「…… ルオンヒュミテに到着したら、買い物にでも行かないか？ ふ、二人で」

その約束は果たされることはなくなった。 今まで何人も仲間も死んだ、多くの戦士達が戦争で犠牲になったし私自身もプラトリーの指示で戦闘の流れ弾で戦争を操作もしていた。

——それなのに、こんなにココロが痛むのはどうして？

ホクヤさんの言葉が胸を刺すのは一体どうして？

ワカラナイ。

私はルナトープの皆を裏切った、その報いが今こんな形で償わなきゃいけないの？
鎖の音だけが反響するこの何もない部屋の中で懺悔する相手もないこの窮屈な箱
の中で？

——ガチャリ。

「…… マイナ姉」

「アス、テイ？」

世界に光が差し込んだ。

「マイナ姉、お腹空いてない？」

「平気よ」

「鎖、痛くない？」

「…… そうね、痛いわ」

「…… 私も、胸が痛い」

「……」

「ねえ、なんで、なんでネルソンさんを……」

「……」

「私も、さ。ホクヤ君を助けようとしてリルナに地下の場所教えちゃったんだ、だってあのときはそうすることしかできなかつたから」

「……ッ」

「マ、イナ姉が何の理由もなく、私達を裏切るなんて、私思えないん、だ。だって、マイナ姉誰よりも、ううん、優しいことは私が知ってるもん」

「……がう」

「銃の扱い方教えてくれたり、ネルソンさんと一緒に最小限の被害で済むように遅くまで考えてたり、装備の点検だって念入りしてるって、私知ってる」

「……ち、がう」

「違わなくない。マイナ姉はマイナ姉だよ。他の皆が否定したとしても私は絶対にマイナ姉のこと否定しない」

「……なん、で」

「……マイナ姉がどんなことしたとしても私の中のマイナ姉の思い出は変わることはない、だって、それもマイナ姉の一面なんだもん、優しい私の知ってるマイナ姉」

「……アス、テイ、ひぐつ」

「マイナ姉」

「……私、皆が大好き、ルナトープで、ルナトープの皆で、この世界を、変えたい」

「…… 私もだよ」

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ネルソンさん、デビットお、みんなあ、アステイ、ひぐ」

※

その頃、崩落したギースナトウラの中腹部ではザックレイとプリンダの二人が悪態を吐いていた。

「まったく、いくらなんでも分厚すぎないか？ 穴を開けるのに時間をかけすぎたよ」

「ごめんねレイ、ほとんど任せちゃって」

「いいよ、ゴルかジードがいれば一瞬だったんだけど二人ともそれどころじゃないからね」

それに、とザックレイは頭を抱える。

「あのホクヤつてやつ、本当に無茶苦茶だよ。プラトーの注意がなきゃ今頃僕らもスクラップだ」

「毒の効きもイマイチみたいだしね。これは素直にステアゴルが直るのを待ったほうがいいかもしれないわね」

ステアゴルの修理はあと半日ほど掛かるとのこと。大きな損傷が武器であるパ

ワーアームだけであったことが幸いした。

ザックレイとブリンダの二人でこのまま攻め込んでおいてもではないが勝機は薄い。ならば、ステアゴルの修理が終わるまでにすることは一つ。

「たしか、あいつらルオンヒュミテを指してたわよね？」

「いや、ヒュミテ共は今メーヴァにいる。物資の補給とここでの戦いの休息を挟んでるんだろう」

「ふうん、レイの機能はやつぱり便利ね」

「それでもないさ」

直接戦闘にはとても向かない機能、可能であるならば低身長機体と一緒に強力な武装を付け加えてほしいものだ。

マイナに埋め込まれたチップからの波の受信は今も行われている。

「——さあ、僕らの本領発揮といこうか」

「——攪乱作戦ね、望むところよ」

ディーレバツの二人がメーヴァへと足を踏み入れた。

惨劇が始まるうとしていた。

85. 激戦区メーヴア

「……んー」

「どうしたホクヤ？ 浮かない顔しやがって」

「中々慣れないなと思ってさ、片目」

「つたく、俺からしたら片目だけで済んで良かったってもんだ。 眼帯が見つかっただ

けでもよかったんじゃねえかよ」

「だな」

こんな状況で贅沢は言つてられない。

ロレンツと買い出しに出たついでに探した。 いつまでも傷口を晒しているわけに

もいかない。

「―それでいいブツは手に入ったのか？」

「―抜かりなく、へへッ、こんな状況なんだ。 贅沢は言つてられねえ」

やはりこの男、そつちの話になると強い。 戦場のラツキーボーイなんて自称してい

るが、エロ本を見つつける才能でもあるんじゃないやねえかってくらいに毎回上物を見つけてく

る。

——もちろん、女性陣には内緒である。　　というか買い出し中にそんなところに行つたと知られてしまえば俺もロレンツも信用を失つてしまうだろう。

けど、それでも男には手に入れなければならない宝がある。

「じゃあ、また今夜だな」

「おう、悟られるなよ」

「問題ない」

コツン、と軽く拳と拳をぶつけ合った。　　漢の誓いである。

※

メーヴアに滞在すること二日目。

俺含むルナトープの面々とユウさんはそれぞれ休息と物資の補給をしながら過ごしてた。

先に市民達をルオンヒュミテに送り届け、護衛として俺たちルナトープが付くということを何度か繰り返し返している。

俺が道を一時的に塞いだとはいえ、ほんの一時凌ぎにしかすぎない。　　いつディーレバツツが攻めてくるかもしれない状況だ。　　ユウさんも何やら一人でどこかへ行くことが多くなった、何をしているんだろうか。

荷物とロレンツを一緒に置き、部屋に戻る。寛ぐことが目的じゃない。

最近出来た同居人に頼まれて買ったものを渡すため、まあ、ちよつと休みたい気持ちもある。

「待たせたな、マイナ」

「別に」

色々あつて牢からうちで預かることになった。本当に色々あつた。

「今更こんなのが必要なのか？」

「一応、ね。あの人のことだから、私に何もしてないなんて思えないし」

「ま、そこまで言うなら調べてみるけどよ。内科は専門じゃねえぞ？」

「大丈夫、ホクヤさんが医者だつてこと、まだ信じてないから」

「そこは信じて身体預けてくれ」

指先に気でメスを横したものを象る。

本当にマイナの体内にあるのかはわからない。けど、本人の頼みならやるしかないな。

何度か探つてるがそれらしいものにはまだ触れていない。果たして本当にあるのだろうか。

「……私、許されたの？」

「さあな」

「……私、生きてていいの?」

「そういうのはもうアステイとやったんじゃないのか?」

「……ホクヤさん早くして」

「何キレてんの」

訳がわからない。

マイナの両手と両足にはなんかよくわからんテクノロジーの枷が付けられている。

一回聞いた気がするけど、よくわからんから忘れた。

「やっぱ見つからねえぞ」

「ん、私の思い過ぎしなのかしら?」

まあ、そうであればいいけどね。

「ユウさんとアステイが服買いに行こうって誘ってたぞ」

「もう、二回くらい行ったんだけど」

「行ったのか」

なんやかんやで関係は修復されつつあるみたいだ。ロレンツがセクハラをしてい

ることも証拠である。

――。

「どうしたの?」

「…… いや、なんか違和感が」

気のせいかな?

探知範囲を一時的に広げてみる、意図的に広げようと思えばメーヴア内を覆うことくらい簡単だ。

「…… マイナ、やっぱりお前の勘正しかったわ」

「…… それって」

「来てる、敵」

※

——人混みに紛れる。

それは影が薄いことに関係なく、ブリンダとザックレイは得意なことだ。元々前線に出るようなタイプではない。

ならばどうするか。

それまでに準備を済ませ、敵に備えればいい。

それまでは静かに息を潜めておけばいい。

「——ようっ」

※

ややこしい作戦は全部ウイリアムに丸投げした。メーヴアの住民の避難は八割方済んでいる。

残り二割もこれから進めていく、その間に俺は敵を潰す。

「ホクヤ・フェルダント」

マイナに合図をする。

簡単な合図だ、左手の親指を上げるだけの。

「お前はディーレバッツでいいのか？」

「僕はザッククレイだ、ディーレバッツであることに間違いはないけど個人で覚えてもらいたいね」

「気が向いたらな」

——周囲に過度な熱源反応。

なるほど、どうやら敵は一人どころか隊を成しているようだ。指揮官である目の前のチビを潰す！

【「テンション」】の力で強化した右腕から拳が跳ぶが、チビは潰れてない。

「チィ…ッ！」

「…… ちょっとこの威力、馬鹿じゃないの？ ゴルじゃあるまいし」

「なんだあれは？ でも、どこかで見たことがある。 なんて、こんなに懐かしいんだ？」

「やっぱ僕一人じゃ分が悪そうだ、撤退！」

「待て!!」

感傷に浸ってる場合か！

とんでもない速度の乗り物に乗って退散していくが、あの程度の速度なら俺の方が速い。

【「テンション」で速度を上げて一気に追いつく、距離はあってもメーヴアはデイスナトゥラほど大きな街じゃない。

追いつくのは簡単だ。

「いつ!?!」

蹴りで乗り物を粉碎し、ザックレイとかいうチビと離脱させる。 そのまま拳で殴り

飛ばす。

「う、あつ……!?!」

「俺はユウさんみたいに甘くはない」

懐を貫いたザックレイの身体に向けて気爆をする。 バラバラと小さな破片が辺り

に飛び散る。

——チビの表情は最期の最期まで薄らと笑っていた。

まだ策はある、罠に嵌ったのはお前だと言わんばかりの笑い方だ。

熱源探知にはもう一人、ナトウラの反応があつたはずだ。

次はそいつを探しに行こうとした矢先に民家が瓦礫の山に変わった。　　どうやら探

す手間が省けたようだ。

——というか、あの巨体なら探す必要もなかったかもな。

「また会ったな」

「ガハハハハハハ!!　今度は負けないぜ、勝つのは俺だ!」

まあ、さっきのチビよりは楽しめそうだ!

豪ッ!　と空を裂く音が響く。　拳による一撃を拳で迎え撃つ!

前はこれで決着がついたが、今回はどうやらそうはいかないらしい。

新調された腕は白を基調に紫のラインが入っていた。

硬さが半端ない、今ので碎けないとはな。

「——お、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

振り下ろされた丸太のような腕は地面を砕き裂いた。　衝撃は死ぬことなく、そのま

ま真つ直ぐにメーヴアの外まで衝撃が走り抜ける。

「ガハハ、まだまだいくぞオ！」

シュー!! と排出口から熱の籠った煙が吹き出る。　どうやらそういうところは俺の知る機械と変わりないらしい。

—だが、俺の知る煙は拳の形にならないし、一撃一撃がさつきのと同じくらしいの重さだなんてことはない。

「—こいつは殴り甲斐があるア！」

「—いいねえ、テンシヨン上がってきたア！」

百を超える拳の雨が降り注ぐ。　元々が蒸気だなんて誰も思いはしないだろう。

一つ一つ払いのけながら、本体に攻撃を当てに向かう。　しかし、奴が腕を振るえば

振るうほど蒸気の量は増えていき、拳の量も増えていく。

さすがに四方八方から殴られ続けるわけにもいかない。

「テンシヨン」でブーストした脚を鞭のように振り、蒸気を払いのける。

元々が煙であることに変わりはない。

「シャーア！」

「がっ!？」

やつと一撃ぶち込めたぞ、この野郎！

「—ニツ」

—仕返しとばかりに殴り返される。

「上等！」

前殴り合つた時は俺も不調だった、状況も最悪だった。

奴は前よりも強くなつてる、あの白い腕のせいかもしれないが、それでも強くなつてる。前みたいに一撃で仕留めることはできなさそうだ。

「…… お前、名前は？」

「俺はステアゴルだ！」

「いいぜステアゴル、この喧嘩、負けねえ！」

—久々にここまでテンション上がってんだ！

お前もそうなんだろ、ステアゴル！

「——この喧嘩、どつちかが滅びるまでだ!!」

86. 白い軍勢

紅蓮気爆拳とステアゴルの拳がぶつかり、爆ぜる。 さつきからその繰り返しになっている。

気が昂り「テンション」が上がってる俺の拳なら決着は既に着いているはずだった。そう、今までのステアゴルだったなら。

「……チッ」

メーヴアの街の崩壊が進む、いや、進んでいるといったほうが正しいか。

それほどにステアゴルの攻撃範囲が増えた、あの煙から生成された拳による攻撃が二次災害を生んでいる。

手数ではこちらが完全に負けているが、威力は圧倒的に上だ。 質よりも量、溜まった熱を一気に射出させながらステアゴルとの距離を詰める。

バチバチ、と紫電が走り全身に力が流れる。 右脚に熱が籠る。

—紅蓮気烈脚！

「ツハツハア！ いい蹴りだ！」

「頑丈になりすぎだろ、お前！」

ステアゴルの豪快な笑いが激突音を掻き消す。耳障りな金属音がステアゴルの声量に負けたのだ。

熱の籠った俺の右脚から一気に放出され、爆発を起こす。

一瞬、ステアゴルが怯んだ。

ガラ空きになったボディに右ストレートを叩き込む。ナトゥラの身体構造は個体によって異なるため、頑丈な部分が共通してるかなんて俺にはわかりはしない。

けど、師匠によって洗練させられた俺の拳には関係ない。

だが、貰けない。

あの白い武装。これまで相手にしてきたナトゥラとは違う。

いくら俺が未熟といえど、傷がつくかつかないかぐらいの結果に終わってしまう。今までとは明らかに違う。

「—どういう構造、してんだかよ！」

「っはあー！」

ここでこいつを再起不能にしておいて、追撃を避けたかったが難しそうだ。力加減を間違えたらメーヴァアそのものを瓦礫の山に変えちまう。

それでも構わないが、もし避難し遅れた奴らがいたと思うと後味が悪い。

一旦、ステアゴルを足止めするための決定打を打たないと、熱も溜まりだしてきたし、俺もユウさん達と合流できない可能性も出てくる。

—それに、だ。

「—リルナか、悪いが手を出すなよ。これは漢と漢のケジメだ」
「心配するな、私はこの先にいるヒュミテ共、ユウを殺しに行く」

こんな状態でリルナの足止めつてのもハードルが高い！

—気声波！

「ぐっ……!?」

「うが、うっせえ！」

一瞬でもいい、少しでもユウさんやテオ達が先に行けるように！

俺がここでも少しでも時間を稼ぐ！

それに、俺は今一人じゃねえ！

「—ホクヤさん！」

「よっしや！」

事前に打ち合わせてたマイナとの合図！

『メーヴアの奴らが全員街を出て無人になったら俺に教えてくれ、この街沈めるから』

マイナの援護で散弾がリルナとステアゴルに無差別に放たれる。その弾はもちろ

ん奴らにダメージを与えることはできないが、不意をつければ充分だ！

「っせや!!」

弱所はステアゴルが武装で殴った大地近辺。そこから街は蜘蛛の糸を巡らせるように脆くなる。

あとは俺が「テンション」を込めた一撃でキツカケを与えればいいだけのこと！

メーヴアの街は大きく揺れ、ヒュミテ第二の都市は崩壊を辿っていく。地盤が崩れ足場を無くしたステアゴルはかつてアンダーグラウンドの張り巡らされていた空洞へと落下していく。

「ステアゴル!？」

「余所見、してんじゃねえぞ」

リルナとの距離を詰め、一撃を叩き込む。崩落の止まった鉄盤に叩きつけられ、バウンドする。

「お前をユウさんの元へは行かせない！」

「抜かせ！」

ジジジジ、とリルナがユウさんの左腕を斬り飛ばした斬撃を放つ。

気を纏った右脚で弾き、そのまま左腕のアップパーで顎を狙う。

しかし、ここで簡単にやられる相手ではない。むしろ肉弾戦ではリルナの方に分が

ある。ある程度の人体構造とはいえ構造自体は機械。

俺の頭の中に植え付けられた医者としての知識がそこで邪魔をする。可動箇所が常人から多少離れていようと、本来であれば曲がるはずのない向きからの攻撃が飛んでくる。

「なるほどな、貴様らヒュミテではこのような芸当はできないのだな。少し勉強になつたよ」

「つたく、人間ベースにしてもデタラメなことには変わりなしか」

鏑迫り合いが続く。肉弾戦の応酬、ある程度「テンション」によって肉体を強化しているも機械と生身ではそこに違いが生まれてくる。

リルナにとっても俺との戦闘は二度目、油断なんてするはずがない。

——不意に背後から複数の熱反応を感知する。

「……なんだ？」

「あれ、は、ジード……？」

そこには白い集団がいた。

姿形は人間、否、リルナが反応したということはナトウラだ。

ナトウラの集団が口から白い熱光線をこちらに向けて放ってくるのだ。

「チー！」

両腕に熱を溜め込み、乱暴に弾き飛ばす。相手が高熱であれば対処は簡単だ、問題はリルナをどう相手するか、だが――

「あれ？」と間抜けな声が出てしまう、振り返ればリルナはいなかったのだ。

ユウさん達を追いに行つたんなら、急がないとマズいな。

「マイナ！ 聞こえるか!？」

「ホクヤさん、あれどういうこと？ なんでジードがあんな複数!？」

「知らん！ けど、お前がここにいてもどうしようもねえ！ なんとかユウさん達と合流して俺のことは大丈夫だつて伝えてくれ!」

「なんとか、つてどうやって!？」

「なんとかはなんとかだ!! 俺も気合いでこの場を乗り切る!」

わらわらと白いジードの集団はどんどん溢れてくる。

片や腕を伸ばしてき、片や白と紫の熱光線を撃つてくる。熱光線の飛んでくる方向

を調整し白い集団に向けて誘爆させてはいるものの、数は一向に減る様子がない。

「……あのビーム、口から出してんのか」

もしかしたら、真似できるかもしれない。そんな考えが頭を過ぎった。

白いジードが腕を伸ばして俺の動きを止めようとしてきた、その腕を掴みハンマー投げの要領で振り回す。

「クソ、キリがねえ！」

※

ホクヤから戦力外通告を受けたマイナは凹んだ。そして、場を速やかに離れた。　　

あの場においても彼女にできることは何もない。それはマイナ本人も自覚していた。

（あれは一体、ジードはたしかに死んだはず）

バックアップのデータがあつたとしても、ナトウラとて一個体の生命体なのだ。

蘇生なんてもつての他である。

それも複数体、あんなことは初めてである。

だからこそ、マイナにとっては違和感でしかなかったのだ。　　突然現れたジードの集

団、そう、現れ方もどこか不自然だった。

ホクヤがメーヴアの地盤を崩して地下へステアゴルを落としてから突然現れたのだ。　　これまで何度でも現れる機会があつたのにも関わらず。

それにあれだけの数をトライヴしようとしたら相当の時間が必要だ。　　メーヴアそのものがナトウラに情報売っていたということは考え辛い。

ジードは死んだ。正確にはデビットと相打ちになった。

(……デビットの、犠牲を無駄になって、したく、ない！)

止める、今も増え続けているジードはマイナが止めなければならぬ。

それがルナトープへの、デビットに対しての裏切りを償うためのマイナの責任だ。

ステアゴルとの遭遇を避けながら、ジードの出現した地点周辺を観察。

今も増え続けるジードはどこから現れているのか。

半壊したとはいえ、メーヴアの土地勘は残っている。トライヴを仕掛けるにしても

何日も前から仕掛けられていたはずだ。

マイナは今持てる知識を最大限に活用しつつ、時には危険を冒して上空から増え続け

るジードを観察、ホクヤを援護しながら出所を探る。

「マイナ！ 援護はいらねえぞ!!」

「ありがたく受け取つときなさい!」

あれだけの軍勢を相手にしながらマイナに返事できるホクヤが羨ましい。

全力を出すとは言っていたものの、マイナが逃げるまで力を抑えているホクヤなのだ

が、そんなことはマイナが知る由はない。

(……ん)

そこに感じた違和感。

ホクヤがジードの頭を砕いて再起不能にするたびにある場所からジードが溢れ出し
ている。

(ジードの中にある成分がジードを、増やしている、の？ それじゃあジードを倒しても
増え続けるんじゃない)

まさかと思つた。

しかし、結論付けるのはまだ早い。　マイナは高所から移動して戦場を同じ目線から
目を凝らす。

「あ」

そこで気がついた。

ホクヤが気づけないにも無理がないくらい簡単な結論。

倒れたジードがジードを増やしてるんじゃない。　倒れたジードが地下へ吸い込ま
れて新しいジードが地上へと這い出てるんだ。

あの場所の近くにホクヤが穴を開けた場所があつたのが幸運だった。

地下を覗き込むと白い筒状のものがジードを生み出していた。

(あれは、何?)

考えてる暇はなかった、否、必要なかった。

マイナは躊躇いなく筒状の物体に引き金を引いたのだった。

結果的にジードが増えることはなくなった。
ホクヤが最後のジードの頭を拳で貫いたことで勝負はついたのだった。

87. オリナスキバン

「ユウさん達のところに行つとけつて言つたじゃねえか、俺じゃ行く先を辿れねえんだぞー！」

「だつたら残つて正解でしょ？」

「お前を追いかけるつもりだつたんだよ。そうすりやそのうち追いついてたからな」

瓦解した、かつてのヒュミテ第二の都市と呼ばれていた場所の中心から方向を見定める。もう随分と遠くに行つてしまったのか、それともセフィツクのせいで上手く気を掴むことができていないのか。

今の俺の探索範囲内にユウさん達は引つかからない。

「―それにしても、こいつらなんだつたんだ？」

俺たちの周りには白い残骸、ディーレバツツの一員であるジードだったものの腕を拾う。

見事なまでの白い腕だ。身体の各所に紫のラインが引かれていること以外には。

「ジード、じゃないんですか？」

「けど、そのジードつてやつは既に死んでる。俺はこの目で見たわけじゃないけど仲

間が言うならそうだと信じてる」

明らかに人造のもの。

身体を組織する内部器官がデタラメである、まるで無理矢理くつつけて動いてるような感じだ。

リルナなら何か知ってー

「そういや、リルナとステアゴルの姿がないな」

「言われてみれば……」

「……ユウさん達のところに行ったか、それとも」

どちらにしても、これ以上モタモタしてる場合ではなさそうだ。

ユウさん達と合流しなければ、足止めが成功したか否かわからない状況なら合流を選ぶ。

「ルオンヒュミテを直指そう、どっちに行けばいい?」

「こつちよ」

マイナが残っててくれてよかったかもしれない。一人だと合流どころか、辿り着ける自信もない。

マイナの案内でメーヴアを出る、辺りには再び何も無い道が広がっている。

ユウさんやテオ達は地下を通ってルオンヒュミテへ向かっている、それもそうか。

こんな何も無い場所で狙い撃ちにでもされたらひとたまりもない。気のせいかもしれないが、大きな気を一瞬だけ感じたような。

「どうしたの？」

「いや、なんでもねえ」

マイナを担いで移動しようとしたが、俺が飛ばすと途中で道を間違えてもわからないかもしれないということでもメーヴアを出るときに見つけた車に乗って移動になった。

運転はもちろんマイナ、この世界では少し旧型の四輪車。スピードは申し分ない。

「……懐かしい」

「ホクヤさんって、別の世界から来たんだって？」

「ああ、ユウさんもだな」

つい感傷に浸ってしまった、どうもこの世界は故郷に似ている。

ユウさんは一体どんな世界でどんな生活を送っていたのだろうか、フェバルになって色んな世界の文化を見てきたからこそ、興味もある。

—だから、プラトーの野郎にはどうしても聞き出さなきゃいけない。

奴が、あのことを知っている可能性もある、俺の世界の問題は俺が決着を着けないといけないんだ。

※

デイスナトウラ。

リルナとステアゴルは急遽、メーヴァから戻される形になってしまった。

(―あと少しであの男の首を取れたかもしれないというところで！)

苛立つリルナ、だがデイスナトウラでは一人のヒュミテによる暴動が発生したようだ。ヒュミテ王の方はプリンダに任せるしかないようだ。

(頼んだぞ、プリンダ。私もすぐに向かう！)

デイクラン達では相手にならない、プラトーが応戦しているようだが、救援を呼ぶほどだ。

優先事項としては後回しにしてもよかったのだが、あのプラトーが救援をするヒュミテで百機議会にも確認を取らないといけないこともある。

(……ジード)

「リルナ！ どうやらあそこみたいだぜ！ 連絡によると市民達に危害を加えている様子はなさそうだ！」

「！ そうか、ならさっさと仕留めるぞ！」

「応ッ！」

ステアゴルが自分の身長の二倍ほどの跳躍で障害物を乗り越え、白いパワーアームを

構える。

「どうやらディークランが直接向かい、プラトーはどこからか指示を飛ばしているフォーメーションらしい。」

「中心に立つ、金髪の男は戸惑いながらもステアゴルの拳を受け流した。」

「一つたく、一体なんなんだよ！　ここは？！」

※

ディールバツツは最強である。

しかし、それはあくまでも個々の實力にあらざる集団、もとい隊長であるリルナ一強にある部分にもある。

そのくらいリルナという存在はこの世界において群を抜いている実力者なのだ。

ステアゴルやジードのように前線で實力を發揮する者、ザックレイやプリンダ、トラニテイのようにタイムン勝負に向かない個体だつて存在する。

「そう、だからユウやテオ、ルナトープの全戦力が集結してこの車両においてブリンダがどのくらい無力なのかは言うまでもあるまい。」

「できることは毒を撒きつつ、潜伏してジワジワと一網打尽にするための準備をネチネチと行うことくらいである。」

（……） リルナあ、早く来てよ！ ステアゴルでもいいから、この際プラトーでもいい！
お願いだから私を一人にしないで！

車両倉庫に潜伏するプリンダの戦いは始まったばかりである。

—ユウ達はルオンヒュミテへと少しずつだが、順調に前進している。

※

—異変に気がついたのは、マイナの治療のために車を停めた時だった。

こいつは無理するから、どこかでストップを掛けないと病状が悪化していく。ま
だ、潜伏してる強力な病体が彼女の身体を蝕んでいる。

それはここまで無理して走らせてきた、この機体にも言えることだった。

だから、気がつけた。

「誰か乗ってる」

その言葉にマイナは目の色を変える。

「敵？」

「多分な、敵意がないってのは気になるけど」

殺意や敵意があれば、もっと体温や血液の流れに異常があるはずだ。

熱感知の応用で対象を絞れば、そのへんまでは把握できる。

「出てこい、さもないと機体丸ごとぶっ壊すぞ」

「ちよーつと!？」

声を上げたのはマイナだった。

この先の移動はどうするんだとばかりの叫び声である。

まあ、その時は抱えてでも行けばいい。ここで俺が停まるのを決めたのはユウさんの気を感じられたからである。さいあく、車はここでサヨナラしてもいい、名残惜しいけど。

仕方ない、少しだけ気を上げてみるか。

「あの一、ホクヤさん?　じよ、冗談、です、よね?」

「一本気だ」

「さよなら、ここまで頑張ってくれた名もなき車両さん」

俺はこの手で恩人、カーさんに恩を仇で返すことはなくなった。

なぜなら、拳を振るう意味がなくなつたからである。

「俺になんのようにだ、ディーレバツツのトラニティ」